第三章　大正元年九月～十五年
（一九一二～一九二六）

クローンとベートーヴェンの交響曲

明治四十五年（一九一二）、ユンケルが契約満期となり翌年（大正二年）彼に代ってドイツからグスターフ・クローン（Gustav Kron 1874～?）を管弦楽およびヴァイオリンの教師に雇い入れた。彼はドレスデン音楽学校を卒業、ハンブルク・フィルハーモニー協会およびベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のヴァイオリン奏者を経て、指揮者ニキシュの推薦により来日、先に東京音楽学校で教鞭をとっていたチェロのヴェルクマイスターと共に大正時代の東京音楽学校管弦楽団を研きあげた。当時の東京音楽学校はすでに啓蒙期を脱し、創立以来最も活気ある時代を形成していた。幸田延、幸の姉妹につづいて留学体験をもつ新進気鋭の音楽家が創作に演奏に教育に旺盛な活動を行っていた（瀧廉太郎＝ドイツ、島崎赤太郎＝ドイツ、神戸絢＝フランス、小倉末＝ドイツ、アメリカ）。

クローンは大正二年十二月七日、第二十九回の定期演奏会でベートーヴェンの〈ヴァイオリン協奏曲〉（ニ長調、作品六十一）をH・ヴェルクマイスターの指揮のもとで演奏し、彼の就任披露演奏をかざった。このプログラムではベートーヴェンの曲が三曲もとりあげられ、クローンが計画したベートーヴェン紹介の皮切りともいえる演奏会であった。クローンが東京音楽学校管弦楽団の指揮を担当して四年目の大正六年頃になると、それまで同校管弦楽団の弦を援助していた宮内省の伶人が退き、弦は同校職員生徒が主となり、管部門に海軍軍楽隊員の応援を得て成り立つようになっていた。翌七年からはきびしい練習の成果としてベートーヴェンのシンフォニーが順次定期演奏会に登場した。〈第五〉（初演）大正七年五月二十六日、〈第六〉（初演）大正八年六月一日、〈第一〉大正九年六月十二、十三日、〈第三〉大正九年十二月四、五日、この時は、ベートーヴェン生誕百五十年記念演奏会というタイトルのもとにオールベートーヴェンでプログラムが組まれ、小倉末のピアノによる〈協奏曲第三番〉の全曲演奏も含まれていた。さらに〈第八〉大正十一年十二月二、三日、そして〈第九〉が大正十三年十一月二十九、三十日の両日、全曲本邦初演である。この演奏はクローンの東京音楽学校における最後の指揮であった。〈第九〉で有終の美をかざった大正十三年（一九二四）は、ウィーンの世界初演からかぞえてちょうど百年目である。クローンは東京音楽学校と契約した時点で、ベートーヴェンの主要作品を日本に紹介することを計画した。そして偶然にも彼の契約満期となる大正十三年に〈第九〉でベートーヴェン演奏を終ることを意図していたものと思われる。またクローンは在任中に次のような大曲を初演して東京音楽学校のレパートリーに加えた。チャイコフスキーの〈バレー組曲「クルミ割人形」〉（大正五年五月）、同じく〈交響曲第六番「悲愴」〉（大正十年五月）、リストの〈交響詩「レ・プレリュード」〉（大正五年五月）、バッハの〈ブランデンブルク協奏曲第三番〉（大正九年六月）、ロッシーニの〈スターバト・マーテル〉（大正十一年十二月）、シベリウスの〈交響詩「フィンランディア」〉（大正十二年五月）など。

大正もやがて終りを告げるこの時代になると「管弦楽をたのしんで聴く」聴衆が多くなり、東京音楽学校の定期演奏会には手応えのあるファンが定着するようになった。

なお、「本邦初演」という定義については放送関係機関等で定義づけている「作品のオリジナルの形を公開の演奏会で全曲演奏すること」に準拠した。

大正一年九月二十一日　学友会第二回土曜演奏会

■九月の學友會の第二回土曜演奏會は蓄音機會として、現時世界

第一流の稱あるアーチストに唱はせたり彈かせたりして聽かうと云ふことになりました。フーン蓄音機かとバカにしてはなりません。實に得難いレコードばかり、曲も一つとして金玉の響のないものはありません。天下第一流のピアニスト、ヴァイオリニスト、ヴォーカリストが一時に我音樂學校へ集つてそれぞれ自分の藝術の光りを極めて演奏するのですからどの位藝術的に意義あり充實した會であるかは敢て吾々の贅言を要しないだらうと思ひます。會員諸氏は是非御來聽して戴きたい。曲目は卷頭に出してあります。詳しい說明や時日は九月號でお知らせします。

（『音樂』學友會、第三卷第八号、大正一年八月、三五頁）

大正一年十月二十六日、二十七日　学友会秋季演奏会

▲去月廿六七日、本校奏樂堂に於て、學友會秋季演奏會を開催せり。曲目左の如し。

曲目

第一部

一、合唱　會員

イ、泣願の歌……（吉丸一昌作歌／バッハ作曲）

ロ、花の涙……（高安月郊作歌／弘田龍太郎作曲）

二、ピアノ獨奏

ソナタ作品十、第一……ベトーヴン　千葉光子

三、女聲合唱　會員

ローベル……マイアーベーア　磯江清

四、風琴獨奏

パルティータ……バッハ作　安藤文子

五、高音獨唱

イ、プル　ディチェスティ……ロッテイ作

ロ、スプリングタイム……パウルヴォーダル　田中清治

六、ヴァイオリン獨奏　（澤康雄）

イ、ソナータ（變ホ長調）……モツアルト作

ロ、シチリアーノ……パーゴレージ作

七、次中音獨唱

イ、トレーネンレーゲン……シューバート作　近藤義次

ロ、ゴンデルリード……メンデルスゾーン作

番外、中音獨唱　竹内梅子

晝（春聲四篇中）……（林古溪作歌／弘田龍太郎作曲）

第二部

八、男聲合唱　會員

水兵の歌……ワーグナー作

番外、中音獨唱　中島かね

イ、濱邊の盂蘭盆……（高安月郊作歌／弘田龍太郎作曲）

ロ、新なる思……（高安月郊作歌／澤田柳吉作曲）

九、洋琴獨奏　山口節子

ソナータ、作品十三……フムメル作

十、高音獨唱　　薗部房子
歌劇『ダスグレツヘンデスエレミテン』中の
ローゼの咏嘆調……マイヤール作
十一、四部合唱
高音　長坂よし子
中音　竹内うめ子
次中音　淺香鏘三郎
低音　金健二
歌劇『フィデリオ』中の四部……ベトーヴン作
十二、ヴァイオリン　田中久子
司伴樂第七番……ロード作
十三、合唱　會員
『メシアス』中の『ハレルヤ』……ヘンデル作
（『音樂』學友會、第三巻第十一号、大正一年十一月、四九頁）

大正一年十一月三十日、十二月一日　第二十七回定期演奏会

大正元年十二月一日
音樂演奏曲目
東京音樂學校

一、管絃樂
フエードルの序曲……マスネー作曲
（故人追懐の爲に）
二、管絃樂付きピアノ……教師ペッツオルド夫人
短イ調コンチエルト……グリーグ作曲
三、管絃樂
第四長變ロ調シンフオニー……ガーデ作曲
一、アンダンティノ、アレグロ、ヴィヴアチエ、エ、グラツィオーソ
二、アンダンテ、コン、モート
三、スケールツオ
四、フィナーレ、アレグロ、モルト、ヴィヴアチエ
四、ヴァイオリン……教授安藤幸
第九短ニ調コンチエルト……シポーア作曲
五、獨唱合唱及管絃樂
美しきエレン……ブルッフ作曲
獨唱　薗部ふさ　船橋榮吉
指揮者　プロフェッソール　アウグスト　ユンカー

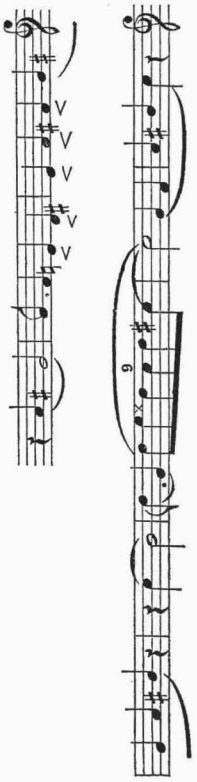
音樂演奏曲目梗概　第十六
一、管絃樂
フエードルの序曲　　マスネー作
今年七十歳の高齢にて逝ける佛蘭西の名家マスネー(J. Massenet)は一八四二年ロアール州サン、エチエンヌの附近に生れ、パリの音樂院に學びて後、專ら作曲家として世に立てる人、晩年バザン(Bazin)の後を承けて同音樂院の作曲學の教授となり、又た文藝院（アカデミー）の一員として佛蘭西樂界の重鎭なりき。其の數多き作品中最も成功したるものは歌劇（『ラオールの王』『エロヂアード』『マノン』等）の方面に存す。されど其の管絃樂の諸作も構想の巧妙と樂器の色彩とを以て樂界に珍重せらる。玆に奏する曲は、ラシーヌ(J. Racine)の劇の前奏曲として作れるものにて、確かに彼が傑作の一たるを失はず。彼の作風は多少獨逸樂（殊にワグネル式）の感化を受けたる點あれども、主として純佛蘭西流のものと言ふべく、其の輪廓は精

緻、圓滑、其の樂器の編成は常に透明にして旋律的要素に富めり。されば本曲の如きも其構想を理解すること極めて易く、殆ど説明の要を見ざるなり。

曲は甚だ緩かなるアンダンテ（Andante molto sostenuto）に始まる。數小節の序節の後、先づクラリネットに現はるゝ次の旋律（短ト調）は此の部分の主なる樂想にして、後の快速なる部分の途中にも再び現出す。

熱烈なる快速部（アレグロ）（Allegro Appassionato）に移るや、初めセロとファゴットとの強奏に現はるゝ次の主想は

暫くの後絃樂の弱奏に表はさるゝ次の激情的の副主想と相交代して



此の部分の主要なる內容を形成せり。結尾は曲頭の序節と同じ樂句を用ひて附節となせり。（O）

二、管絃樂伴奏付洋琴獨奏

司伴樂イ短調（作品第十六）　グリーヒ作曲

エドヴァールト、ハーゲループ、グリーヒ（Edvard Hagerup Grieg）は千八百四十三年に生れて、千九百七年即ち今より五年前に歿したる諾威第一の作曲家なり。其作品には獨逸音樂の感化も亦多少認むる事を得れども、然かも本質に至りては徹頭徹尾北方スカンディナヴィア風を脫せず。ワークナー以後嘵然たる近代樂より遠く距りて、寂寞たる北方の天地に行く雲の悲哀を歌へる者。されば其全曲を通じて例へば月光に浴し、秋風に吹かるゝが如き詩的氣分を認むる事を得可し。其作の主なるものは洋琴とヴァイオリンの曲及び小歌曲等にして、歌劇は一も無し。

此處に演奏せらるゝ樂曲は彼の唯一の洋琴司伴樂にして、又彼が代表的の作品なり。千八百六十八年乃ち彼が二十五歳の時、丁抹住居に際して作曲せられ、近代に現はれたる洋琴司伴樂百數十曲中最も屢々演ぜらるゝ約二十曲中の一に屬す。彼は本曲創作の翌年其原稿の儘之を携へて、當代第一流の洋琴家リッストを羅馬に訪ひ其批評を請ひしに、リッストは一見して此難曲を淀み無く奏過し、其諾威風に感じて之を激賞し、少からずグリーヒを皷舞したりと。

純音樂の見地より觀てグリーヒ樂の最も主要なる特色を擧ぐれば、第一他の歐洲樂に認め難き一種特有の旋律乃ち節（フシ）多き事にして、人に依れば之を以て幾分東洋的色彩を帶ぶるものと爲せども、吾人を以て見れば聊かたりとも東洋的とす可き點を認め難く、是こそ北方スカンディナヴィア固有の風貌たりと思惟す。殊に其旋律に半音階的進行の多き其一特色と見ざる可らず。次にグリーヒ樂の第二の主要なる點は其特意とする極めて遠隔なる音調への轉調にして、殊に原音を半音、全音又は長短三度上部へ移動する事に依りて生ずる轉調多く、之が爲に聽者をして其何調に有るかを惑はしむる事少しとせず。されば人に依りて之を賞讃する者有れども、吾人は之を以て高尙なる趣味なりと思惟する能はず。是れオスカール、ビー博士の「奇怪」（Bizarr）なりと稱したる所以なり（Oskar Bie: Das Klavier und seine Meister. S. 208 f.）。故に本曲も可なり廣く好愛せられたるものなれども、之をルービンシュテインの D moll 又はメンデルスゾーンの G moll に比較する時は聊か遜色を認めざるを得ず。況んやベートーヴェンの Es dur に對しては及びも盡かぬものたる可し。

本司伴樂の構造を揭ぐれば次の如し。

第一樂章　Allegro molto moderato $\frac{4}{4}$ A moll.

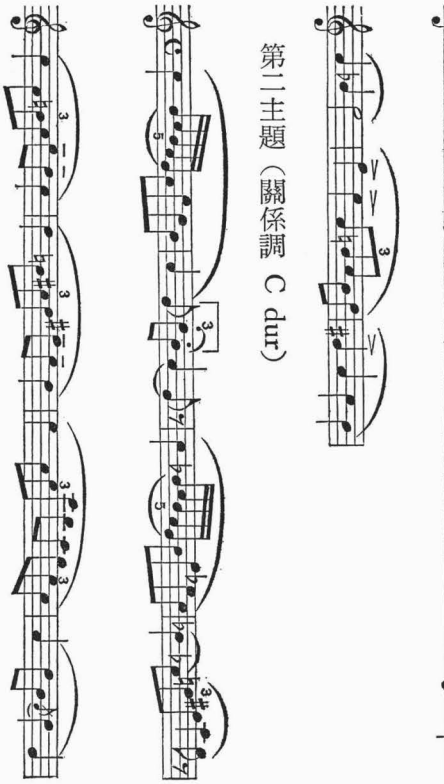
第二樂章　Adagio $\frac{3}{8}$ Des dur.

第三樂章　Allegro marcato. $\frac{2}{4}$ A moll.

(Coda. Quasi presto $\frac{3}{3}$, Andante maestoso $\frac{4}{4}$ A dur.)

右の各章に關する分解的詳說は之を省き、唯其重要なる主題のみを左に擧ぐる事となせり。蓋し司伴樂亦は奏鳴樂等の純器樂曲にありて其興味の大半は、此旣知の主題が音調、拍子、和聲、速度等の上に於て幾多の變化を成して再現する點に在ればなり。されば是等主題が最初現はれたる時、直ちに之を暗記するに努むるは、器樂曲理解の第一要件なり。グリーヒも近代作曲家の一人として、舊來の形式を打破したる點少からず。從つて本司伴樂にも嚴格なる形式にて律し難き個所多く、殊に尾曲(Coda)の大規模なる事、第三樂章の複雜なる事等其例なり。

第一樂章(Sonatenform)第一主題(A moll)



第二主題(關係調　C dur)

兩主題共洋琴の之を奏する以前、一度管絃樂に依りて演ぜらる。是れ蓋し聽者の記臆に便ならしめんが爲なり。

第二樂章(Die einfache Liedform)主題(Des dur)

此主題は最初管絃樂に現はれ、終りには洋琴に依りて反覆せらる。其中間に挿句として次の如き極めて美麗なる數段の旋律、洋琴の獨奏に現はれ來り、荒涼たる北國を想起せしむ。

挿句(Des dur)

第三樂章(Rondoform)第一主題(A moll)

第二主題は變化に乏しく、且つ全樂章中格段に重きを成さゞるを以て之を省略す。

第三主題(F dur)

此樂章の尾曲(Coda)も可なり大規模に構成され、洋琴は拍子、音調及速度等を悉く變化して第一主題を演じ、其最終の樂句に及びて管絃樂が一

齊に第三主題を演奏す。かくて全曲の最高點に達し、頗るドラマティックの光景を呈して本曲を終る。此終結の邊甚だ莊嚴を極む。

此第三樂章の形式は Sonatenform にて說明する者有れども、吾人の研究に依れば Rondoform として解釋する方適當と思惟す。されば此處には是に據て分解する事とせり。附記す、ペッツォールド夫人はグリーヒと其故國を一にする所より、此樂詩人の曲を最も得意に演奏すと謂はる。(T)

三、管絃樂

第四　シンフォニー（長變ロ調）　ガーデ作

丁抹の樂人ガーデ (N. Gade 1817-1890) は北歐樂に於けるロマンチック派の名家にして、シューマン、メンデルソーン等の友なりき。其の初作『オシアンの餘韻』(Nachklänge aus Ossian) によりて樂界に知られ、其後第一シンフォニー（作品第五）に新機軸を出して益々名聲を博せり。彼のシンフォニーは其の數合せて八篇あれども、今日まで生命あるものは前述の第一と玆に奏する第四（作品第二〇、一八五一年作）との二篇に過ぎず。前者は初めて管絃樂の大作に北歐の民樂を移植したる點に於て歷史上の意義を有し、後者は獨逸式の感化によりて多く其の國民的色彩を失ひたれども、廣く樂界に行はれたる點に於て遙に前者を凌げり。

短かき序節の初に現はるゝ三度（テルツ）の進行は快速部の經過中屢々巧みに用ひられたり。

活潑にして優美なる快速曲 (Allegro vivace e grazioso) は次の主想に始り、

間も無く次の諧謔的なる副主想は其の獨創の樂趣を以て注意を惹く。

第二の活動せる緩徐曲 (Andante con moto) はロマンスの曲體に作られたる美しき曲にして旋律の婉美と優雅とを以て人耳を怡ばしむ

唯だ其の構想の妙に至ては次のスケルツォ (Scherzo) に及ばず。此の第三の曲は全篇中最も愛賞せらるゝものにして、今迄幾度か再奏（アンコール）の呼聲を以て迎へられたりといふ。其の簡潔完美なる形式は小さき眞珠にも譬ふべきか。シュポール式の俤を認め得る其の主なる曲部は次の主想を含み

其の二つの中間曲部 (Trio) は最も愛すべき民謠風の旋律を含めり。

第四の曲即ち甚だ活潑快速なる終曲 (Finale, allegro molto vivace) は次の主想に基き

其の進行の快活自由なるは山間を突下する河流にも似たり。

初めヴァイオリンに現はるゝ第二の主想は其の狐疑する如く質問するが如きレシタチーフ風の形に於て一種獨創の趣を含めり。

このシンフォニーは全篇を通じて清新爽快の氣分に充ちたるが故に別に『春のシンフォニー』(Frühlingssymphonie)の名あるも故なきにあらず。(O)

四、洋琴伴奏付ヴァイオリン獨奏

司伴樂ニ短調（作品第五十五）　シュポーア作曲

ルードウィッヒ、シュポーア(Ludwig Spohr)は千七百八十四年に生れ千八百五十九年に逝ける、獨逸ロマンティック樂派に屬する大作曲家にして、又近世に於ける全世界第一流のヴァイオリン演奏家なり。其作曲頗る多く、歌劇十曲、オラトリオ五曲、ジュンフォニー九曲、ヴァイオリン司伴樂十八曲、絃樂四部合奏曲三十四曲及び其他小曲數甚だ夥多に登れども、惜むらくは永遠的生命を保持する者に至りては極めて小數にして、僅かに一歌劇 "Jessonda" とヴァイオリン司伴樂中第七、第八、第九の三曲有るに過ぎず。然かも是等の樂曲殊に此司伴樂に至りては、現今の樂界に於ても尚廣く好愛せられ、當代の樂壇に燿々の名聲を走せたる此樂人の餘光を洩らしつゝあるものにして、此處に演ぜらるゝニ短調とは、即ち此第九司伴樂に外ならず。

由來ロマンティックの樂人は嚴格なる形式若しくは論理的內容によりは、自由なる作曲及び感覺的興味に重きを置く。シュポーアも又此樂派の一人として、其れに屬する是等幾多の共通的特色を具備したりしが、然かも彼の本性は單純なる歌劇作家たるに止まらずして、寧ろ驚嘆す可きヴァイオリン演奏家たりしが故に、其作物に現はれたる特質も彼固有の點を有する事勿論なり。今はシュポーア論を成す可きの時に非ずと雖も、彼が此第九司伴樂を理解する上に於て、見逃す可らざる純音樂上の若干の特色を通覽するは、强ちに無益にもあらざる可しと信ず。

彼が純音樂上に於ける最も主要なる特色は、吾人の研究に依れば、次の五點に歸着するものゝ如し。

1、彼が多感にして纖弱なる性格は其樂曲をして夫れと同樣に、一面傷感的にして又センチメンタルの風を帶ばしめ、他面夢の如き徜恍の氣に充しめたり(Wasielewski: Die Violine und ihre Meister. S. 455.)。是等の風貌と氣分とは明かに此司伴樂を通じて認むる事を得。

2、此悲哀と憧憬の情は、彼が好んで其樂曲に應用したる半音階的進行に依て、最も明瞭に表出せらる。由來半音階（Chromatik）は人工的音階を或る程度迄脫して、自然音に類似したる連續的高低變化に近づくの結果、輪廓の明瞭なる白晝と異なり、朦朧として夢の如き月夜の夫れにも似て、詩的情操の表出に適するものなり(Riemann: Elemente der musikalischen Ästhetik. S. 40 ff.)。是れ彼が樂曲の特に此氣分を有する所以なり。勿論彼が時代に在りては、此半音階と極めて其表出力を一にする Portamento の、一般に絃樂演奏家の間に流行したりしは否み難き事實なれども(Hanslick: Geschichte des Konzertwesens in Wien. S. 233)、明かに此半音階的進行を作曲中に應用したるはシュポーアを以て嚆矢と成す可く、後代ショパン、リツスト及びワークナー殊に其トリスターン等に少からず影響を與へたりと見る可きなり(Riemann: Geschichte der Musik seit Beethoven. S. 192 f.)。本司伴樂に於てもヴァイオリンの劈頭に現はるゝもの、即ち此シュポーア稀有の半音階的進行なり。

3、他の要素に比して旋律即ち節（フシ）其者が樂曲の最も重要なる中心を成せり。シュポーアは其自叙傳中に反覆記述したるが如く、モツァルトを以て自己の理想的模範としたり。之が爲リーマン博士の云へるが如く、モツァルトの意識的模倣が偏頗なる旋律の過重主義に傾かしむるに至れり(Geschichte der Musik s. B. S. 199)。此和聲、拍子又はリズム等の變化よりも、旋律的興味が樂曲の中心を成す事も、此司伴樂の明かに示す所なり。

4、然しながら彼の旋律はリールの評したるが如く、通俗的のものに非ずして、甚だ素人好きのせざる種類に屬す(Riehl: Musikalische Cha-

rakterköpfe. II S. 184.)。是れ蓋し彼自身も公言したる所にして、努めて俗離れの成したる、澁味ある、高尚なるものならしめんが爲に外ならず(Spohr : Selbstbiographie II. S. 66.)。されど之が爲に何れの司伴樂の主題にも無意味なる過度の旋律的技巧を認む。

5、彼の樂曲中殊にヴァイオリン樂曲の裝飾音符として、十六分音符等の上に於ける小振音(Triller)頗る多く、爲に「シュポーア式」の名稱さへも生ずるに至れり。本曲にも又振音少からず。

此處に演奏せらるゝは第九司伴樂中の第一樂章のみにして、其大略の構造を擧ぐれば左の如し。

Allegro $\frac{4}{4}$ G moll (Sonatenform)

1. Darstellungsteil G moll.
2. { Durchführungsteil Adur, E dur, G moll. / Wiederholungsteil D dur.

第一　主題(G moll)の前半部

第二　主題(關係調 F dur)の前半部

前記4に論述したるが如く、シュポーアの旋律は頗る非通俗的にして、間々過度に高尚を衒ふの風有れば、之が爲に句節の構造甚だ不規則と成り、時には亂暴極まる者有り。されば右の二主題も其姿を變へて再現するや、直ちに之を認知し難き事少からず。從てシュポーアの樂曲を理解せんとするには、聽者に於て普通以上の注意を要する事云ふ迄も無し。(T)

五、獨唱、合唱及管絃樂

『美しきエレン』　　ブルツフ作

〔明治四十一年十一月二十八日の「音樂演奏曲目梗概」を參照。〕

〔批評および關連記事〕

入場券

壹等　二圓、二等　一圓、三等　五十錢

■なほ當日入り口でも賣捌きますが混雜を避けるために市內の主なる樂器店及び、豫め本會でお求めになるとよからうと思ひます。

■此プログラムでも分りませうがこんな曲目は今後もさう度々はきかれまいと思ひます。何と云つてもユンケル氏が最後の思ひ出に熱心籠めて指揮する上に、安藤教授、ペツォールド教師も畢生の妙技を振はれると云ふのですから、是非こんな無上の好機會を逃さないやうにされたいものです。

ユンケル氏送別演奏會について

明治三十二年早春東臺の櫻花未だ芳蕾を破らざる頃瑞西、伊太利、印度の諸國を經て飄然日東帝國の首府に其魁偉なる雄姿を現はしてより、極東樂壇の開發の爲に孜々として盡された我アウグスト、ユンケル氏が十有四年の功績は永く吾等の腦裏を去らない最大の記憶であります。我邦の音樂が現今の標準に達したのは諸家の和衷協同の力に依るのは勿論のことではあるが、又氏の非凡な樂才と、熱心な指導とを俟つてこゝに至つたのであることは誰も否むものはあるまいと思ひます、殊に我邦管絃樂の歷史は氏によつて第一頁を記されたものと云ふべく豐麗なる未來永遠の春を飾るべき音の花園

は氏によつて種を下され、氏によつて培はれ、氏によつて花を付けたと云つても過言ではないと信じます。なほ氏が熱心な數年の誘導によつてやがて實を結ばうとしてゐる秋に當つて我々は氏を永久に日本より送らねばならぬに際し、默止するに忍びず、來る十一月三十日土曜日午後二時より氏が送別演奏會を開催し、全收入を擧げて氏に贈り、以て我國民が氏の功勞に對する感謝の萬一を表はしたいと思ひます。此會は普通學友會の演奏會とは違つて臨時に氏のためにするのだから會友諸君からも皆入場券を買つて戴きたうございます。我々は我等の親愛なる會員及び會友諸君の悉くが吾人の微衷を讀し、我樂界に功勞ある此藝術家の名譽のためにも、我等の此企てを成功させて下さる好意に於て美しい同情を表はして下さることを信じます。

大正元年十月十五日　　東京音樂學校學友會

（『音樂』學友會、第三卷第十一号、大正一年十一月、広告頁）

○ユンケル氏最後の指揮　去十二月一日上野音樂學校にて秋季演奏會ありしが曲目の大部分はオーケストラにて近々歸國のユンケル氏最後のバトーンを打ち振りたるタクトは吾人に尠からぬ感動を與へたり、曲目最終の「シエーン、エレン」にて薗部孃の高音エレンが勝利の歌はさながらユンケル氏の過去十五年の努力の功を讀ふが如く一雫の熱涙頬に傳ふるを覺えざりし。

（『月刊樂譜』第二卷第一号、大正二年一月、二四頁）

二

校正室より

■ユンカー氏送別演奏會は當時の新聞や雜誌などにも見えた通り非常な盛會だつた。定刻前から滿員で身動きも出來ない様な大景氣、會場係りの長いK君なんか只さへ大きい東北眼を洗面器大にして氣を揉んで居た。遂には二等でもよいから入れて下さいと云はれてその挨拶が終らないうちにもう二等も席がなくなつて了ふ、一等もなくなるといふ有様で態々横濱あたりから來會された方々を餘儀なく事情を明らかにして歸つて戴くといふやうな景況。

■演奏は Splendid, brilliant, overwhoelming どんな形容詞を並べてもなほこれを正當に云ひ表はすことは出來ない。また素敵、素晴らしい、豪儀、それでも足りない、たゞ感激の涙のたぎつ中にアゝーと云ふよりほかはなかつた。かう云つて私は默るよりほか仕方がない。沈默が最も完全に近い讃辭であると信じてゐる。

■ユンカー氏も心から滿足して居られた。又音樂家としてあれだけの送別演奏會をされたのは何よりの名譽である。此演奏會を空前の大演奏會にし、氏に出來るだけ大きい滿足を捧げたいといふばかりに、現在の學友會の會員が骨折りと苦心とは又此演奏會を飾る美しい花であると思ふ。其清い光りと高い薫とは永く氏の胸に優しい心根を有つた東海の仙島に、神のやうな生活を渴仰してゐる音樂の子の面影を映し出し、氣高い袖の殘り香をも偲び出だす貴いよすがとなる事を信じて疑はない。

（『音樂』學友會、第四卷第一号、大正二年一月、四九頁）

大正一年十二月十四日　学友会第三回土曜演奏会

■去月十四日本校奏樂堂に於いて學友會第三回土曜演奏會擧行せり曲目左の如し

第一部

一、合唱　　會　　員

甲、禮拜の歌……（吉丸一昌作歌／バッハ作曲）

乙、春のしらせ……吉丸一昌作歌（メンデルスゾーン作曲）
二、ピアノ獨奏　菅原菅子
アムプロムティユ……シューバート作
三、次中音獨唱　佐藤豊吾
パウルス……メンデルスゾーン作
四、ヴァイオリン獨奏　内田豊子
ソナタ（作曲二番變ロ長調）……モツアルト作
五、高音部獨唱　永井いく子
歌劇『イル・バルビェーレ・ディ・シヴィーリエ』中ノ
叙情調……ロツシーニ作
六、ヴァイオリン獨奏　末吉雄二
甲、エーア……バッハ作
乙、ペル・ペトゥーム……ボーム作
番外　高音獨唱　安藤文子
早春賦（新曲）……船橋榮吉作

第二部

七、次中音獨唱　淺香鱗三郎
甲、アン　ジルヴイア……シューバート作
乙、リンデンバウム……シューバート作
八、ピアノ獨奏　弘田龍太郎
甲、プレリユード（作品二十八の第一）……ショパン作
乙、トロイカ（十一月）（作品三十七の第十一）……チヤイコフスキー作
丙、妖精の舞踏（作品十二の第五）……グリーヒ作
九、中音獨唱　竹内うめ子
歌劇『ブロフェート』中の一節……マイヤーベーア作
番外、風琴獨奏　中田章
ソナタ（イ短調）……ラインベルゲル作
十、合唱　會員
シエツフング……ハイドン作
（以上演奏）

（『音樂』學友會、第四巻第一号、大正二年一月、五二頁）

大正二年二月八日　学友会第四回土曜演奏会

■去月八日本校奏樂堂に於て第四回土曜演奏會開催されたり。當日は今回新任されたるクローン、シヨルツ兩教師出演され各々得意の妙技を以て滿堂の聽衆に多大の感動を與へたり。曲目左の如し。

第一部

一、合唱……會員
甲、母の思ひ……吉丸一昌作歌（プロシャ民謠）
乙、故郷を離るゝ歌……吉丸一昌作歌（メンデルスゾーン作）
二、風琴獨奏……櫻井みつ
オーサンクティシマ……シルドクネヒト作

三、高音獨唱……長坂好子
歌劇『サムソンとダリラ』中の『春の抒情調』
……サン、サンス作
四、ピアノ獨奏……谷村なつ
バラッド（作品第七）……ラインベルゲル作
五、低音獨唱……金健二
歌劇『靈笛』中のザラストロの抒情調……モツァルト作

第二部

六、高音獨唱……肥田野さくら
歌劇『フライシュッツ』中エンヒェンの抒情調
……ヴェーバー作
七、ヴァイオリン獨奏……蜂谷龍
バラッドとポロネーズ……ヴィユータン作
八、聲樂二部……中音（竹内うめ／船橋榮吉）
歌劇『フィデリオ』中の二部……ベートーヴェン作
番外、ピアノ、ヴァイオリン二部（ピアノ ショルツ教師／ヴァイオリン クローン教師）
ソナータ（ハ短調）……ベートーヴェン作
イ、アルレグロ
ロ、アダーヂョ
ハ、スケルツォー
ニ、アルレグロ
九、絃樂合奏……會員
一、『ザラバンデ』中のラルゴ……バツハ作
二、結婚式進行曲……メンデルスゾーン作

（『音樂』學友會、第四巻第三号、大正二年三月、七四～七五頁）

□二月の土曜演奏會來聽者無慮八百、眞に立錐の地なし、盛況近來稀有、演者の成功亦近來稀有。
■我學友會々友頓に增加して都下の會友悉く集り來るの日あらば我樂堂には到底不可收。
□然らば勢ひ兩日に分たざる可からず。土日兩曜演奏會と改めざる可らざるか。可祝、可賀。

（『音樂』學友會、第四巻第三号、大正二年三月、一頁）

大正二年三月二十五日　卒業式

第二十四回生徒卒業式順序（大正二年三月二十五日）

第一部

一、報告
一、卒業證書授與
一、校長告辭
一、文部大臣祝辭
一、卒業生總代謝辭

第二部

一ピアノ獨奏……器樂部卒業生　綠川政野
長ヘ調ノヴエレッテ第一番……シューマン作曲

一低　音　獨　唱……聲樂部卒業生　樋　口　信　平
　歌劇シーモン、ボツカネーグラ中のロマンツア……
　　ヴエルデイ作曲
一ヴァイオリン獨奏……器樂部卒業生　内　田　豐
　長ト調コンチエルト第二十三番（第一樂曲）……
　　ヴイオッティ作曲
一オルガン獨奏……甲種師範科卒業生　木　岡　信
　短イ調フアンタジーア及フーガ……バ　ハ作曲
一中　音　獨　唱……聲樂部卒業生　竹　内　うめ
　歌劇アルセスト中のアリー……グルツク作曲
一ヴァイオリン獨奏……甲種師範科卒業生　草　川　友　忠
　短ホ調コンチエルト第八番（第一樂曲）……
　　ロ　ー　デ作曲
一ピアノ獨奏　器樂部卒業生　藤　田　愛
　短ト調ゾナーテ（第一樂曲）……シユーマン作曲
一高音獨唱……聲樂部卒業生　薗　部　ふ　さ
　歌劇リゴレツト中のアーリア……ヴエルデイ作曲
一オルガン獨奏……甲種師範科卒業生　草　川　友　忠
　短變ホ調パツサカーリア……カルクーエレーアー作曲
一ヴァイオリン獨奏……器樂部卒業生　杉　山　長　谷　夫
　レジアンド……ヴイーニアフスキ作曲
一ピアノ獨奏……研究科修了生　松　島　彝
　長ハ調コンツエルト（第一樂曲）……ベートーヴエン作曲
一合　唱
　甲、繪畫ト彫刻……（フツクス作曲／高野辰之作歌）
　乙、初春ノ歌……（パレストリーナ作曲／乙骨三郎作歌）
　丙、郊宴の歌……（ゼーダーマン作曲／吉丸一昌作歌）

（『東京音樂學校一覽』自大正十五年至大正十六年、三六頁）

〔前略〕
薗部孃の高音獨唱（歌劇リゴレツト中のアリア）は新進の聲樂家として名高くなつて來ただけあつて滿堂靜まつて感じた孃の目の大きい髮の少しあらい頤の少し細い容貌が緩急の巧さは將來の望みが多く感ぜられた四時半散會（一記者）

（『東京日日新聞』大正二年三月二十六日）

○東京音樂學校卒業式は去廿五日同校講堂にて擧行。本年度優等卒業生は聲樂部にては薗部房子（ソプラノ）を筆頭とし竹内梅子（アルト）樋口信平（バス）器樂部には杉山長谷夫（ヴワイオリン）藤田愛子（ピアノ）等にて全體に於て聲樂部の發達著しく各新聞紙は評して曰く、此傾向は伊太利聲樂家サルコリー氏の來朝が聲樂界を促進せしめたるものなりと云ふ。

（『月刊樂譜』第二卷第四号、大正二年四月、二一頁）

大正二年五月二十二日　ワグナー百年祭紀念演奏会

■去月二十二日東京音樂學校奏樂堂にてワグナー百年祭紀念演奏ありたり曲目左の如し

第一部

一、開會の辭　湯原校長
二、講演　姉崎博士

第二部

一、女聲合唱　會員
歌劇「フリーゲンデホルレンダー」中の絲繰り娘の合唱……ヴグナー作
二、聲樂二部　〔高音 薗部房子 / 中音 竹内うめ子〕
歌劇「ローエングリン」中のアリア……ヴグナー作
三、中音獨唱　竹内うめ子
タンホイザー中のアリア……ヴグナー作
四、高音獨唱　薗部房子
ルラツビー……ヴグナー作
五、高音獨唱　小笠原保子
歌劇「リエンツイ」中の抒情調……ヴグナー作
六、男聲合唱　會員
歌劇「フリーゲンデホルレンダー」中のアリア
……ヴグナー作
七、低音獨唱　樋口信平
歌劇「デイヴルキユーレ」中の
ヴォータンの別れ……ヴグナー作
八、中音獨唱　中島かね
甲、夢……ヴグナー作
乙、天使……ヴグナー作
九、洋琴（ママ）獨唱　ペツォルド
一、歌劇「ヴルキューレ」中のリーベスリード
……ヴグナー作
二、歌劇「フリゲンデホルレンダー」中のスピン
……ヴグナー作

（『音樂』學友會、第四巻第六号、大正二年六月、五五頁）

大正二年五月三十一日　学友会春季演奏会

■同じく三十一日同校奏樂堂に於て學友會春季大演奏會開催せられたり。曲目左の如し。

第一部

一、合唱　會員
甲、天使の歌……シューバート作
乙、聖歌……露國旋律
二、次中音獨唱　佐久間孝夫
甲、シュテンドヘン……シューバート作
乙、アゥフ、フリーゲルンデスゲザンゲス
……メンデルゾーン作
三、洋琴獨奏　松岡登志
ゾナータ作品第二、第一番中のプレスティシモ
……ベートーベン作

四、男聲二重唱　次中音　佐藤豐吾
　　低音　金　健二
　甲、歌劇「靈笛」中の二重唱……モツァルト作
　乙、エントヒュールングの二重唱……モツァルト作
五、洋琴　高折宮次
　ニ短調司伴樂……モツァルト作
六、高音獨唱……安藤文
　甲、アディウ、ドウ、マーン……マッスネー作
　乙、ル、フィール、ドゥ、カデイ……ダリベー作
七、ヴァイオリン二重奏　田中久
　蜂谷龍
　二重司伴樂第三番……バツハ作
八、洋琴　石原かず
　ロ長調司伴樂第一樂章……ベートーベン作
九、女聲二重唱　永井いく
　長坂よし
　歌劇「フライシュッツ」中の二重唱……ウェーバー作
十、ギォロンチェロ獨奏　林顯藏
　コールニートライ……ブルッフ作
十一、合唱　會員
　安息曲……ケルビーニ作

（『音樂』學友會、第四卷第六号、大正二年六月、五五頁）

學友會演奏雜感

高折周一

あいつが洋行歸りの半可通を振舞はすのだと思ふ人があるかも知れない。けれども、最も畏敬する湯原校長からの御招待を蒙り、九年ぶりに我が懷しき母校を訪ひ、親愛なる校友諸君の演奏を拜聽し、私はたゞ今昔の感に堪へないのである。どうしてそんな輕薄な心がきざす餘地が私の心の中にあらふ。私の心持は十數年前の學生時代に歸つて謹聽した。そんな虛僞な心は藥にしたくもない。西洋風を吹かせる、そんな疑を受けては私は情けない。私の癖（ひが）みかも知らぬがそんな誤解を避けるため特に斷つて置く。

學友會の發起になる五月二十二日のワグネル百年祭、同じく三十一日の學友會例會についての雜感、つまり感じたまゝのことを少しもつくろはないで書く、いやそれでは少し範圍が廣すぎる。正確に云ふと、目に感じたことだけを書く、耳に感じたことは態ざと書かない。なぜ書かないか、それはどうぞ聞かないで戴きたい。とにかく私は目に感じた事だけを僞りなく、而して遠慮なく書いて見たい。

音樂の功能を述べる。それは釋迦に何とか、諸君に對しては却て禮を缺く、たゞ『神聖』の二字を以て其の說明として置く。『神聖』なる語は此節では隨分安つぽく使はれてをる。神聖といふ眞の感じはなくて、口先ばかりでいつてをる。併ながら『音樂は即ち神聖なり』といふことを骨髓に徹して感銘して居るものは、この廣い日本には餘り多くなかろうと思ふ。

母校の樂堂の老朽して、何等の裝飾だになきには今更ながら驚いた。けれどもよく〳〵氣をつけて見れば、昔と變つた所はない。自分の眼が肥えたのであつた。老朽でも構はない、それが爲に決して神聖が保たれないといふ事はない。莊嚴華麗なる裝飾、それも必ずしも必要でない。秩序、清潔、謹嚴、そんな氣分が漂ふて居れば、一見人をして襟を正さしむることが出來る。それ程までに往かずとも、少くとも聽衆に不快の感を與へないだけの用意は缺いてはならぬ。

入場と同時に私が少なからず驚いたのは、奏樂壇上の圓凹ホールの中程にあり壁裝飾線上、約一寸の塵埃（ほこり）の堆積せることであつた。歐米に於ては、劇場の掃除の如何は直に其盛衰に關するといはれてをる位、清潔といふことは第一の條件となつてをる。演奏者の技能とか、劇場の設備とかいふことは二の次である。

次にあれだけは絕對に禁じて戴きたい、と痛切に思つたのは壇上の使用人、洋服に草履かスリツパをはいた和洋折衷の使用人である。あれは聽衆に對して餘り無禮な服裝である。もし演奏者の禮儀を辨まへた人とか、外國人とかゞ見たら何んと思ふだらう。

壇上は最少しキチンとして戴きたい。無用の雜物椅子だとか、その時使はない樂器だとかは、そこらにゴロ〳〵さして置かないで、悉皆取片づけ、而してそこで使用する樂器の配置は、尙少しく美術的に列べてもらひたい。

來聽者の中には袴も何もはかず、着流して來てゐる人も大分見受けた。あんな人の入場を謝絕する位の權威は是非演奏會に持たせたい。

演奏者の服裝は、男學生は正服は結構、和洋折衷の履物はチト御注意を願ひたい。女生徒諸君の紋付袴の正服も至極結構と思つたが、それに對して履物の靴、あれはどうも不調和ではあるまいかと感じた。從來私が多數の歐米人の意見を綜合した結果を申せば、皆な不調和だ不格好だといふ事に一致してをる。敢て不都合とは申さぬ。たゞ何んとなく不調和に感ずる。白足袋に麻裏草履といふ方が優美ではあるまいか、固よりステージの上での話である。通學の時は靴が便利であらう。若し幸に麻裏草履が實行されるならば、足の餘り露出せぬ樣の御注意をも序に願つて置きたい。

演奏態度（ステージ、メソード）、私が特に申して見たい主要條件は是である。ステージ、メソード、これは兵士の調練と同じ物で、音樂家の技術と併行して最大主要の條件である。私ももとは『ナーニ技術さへ旨（うま）ければ、ステージ、メソードも何もあつたものではない。とかく西洋音樂を少し嚙ると直に鼻持のならぬことを言たがる、枝葉の事をとやかくいふのはまだ技術の至らぬ爲だ』といふ考であつた。今にして、それを思ふと冷汗背を潤ふすを覺えない。先輩諸大家の敎訓と、自分の永い間の經驗とで、音樂家は矢張り訓練された兵士と同樣でなからねばならぬといふことが明白に泌々と解つた。如何に體格强健にして剛力あるも、訓練なき兵士は一文の價値はない。信仰を本位とする無形なる音樂、それを代表する音樂者の態度にして備はらなかつたら、音樂者としての第一の資格を失ふ。それを氣障な事の樣に思つて、鼻持のならぬなどゝ言つたのは、全く研究の足らない至つて輕卒な考であつたといふことを自白する。

ステージ、メソードの一番困難なのは獨唱家である。歐米に於ける現時第一流といはれる唱歌者でも、寸時もこの研究を忘るゝものはない。ステージ、メソードは歐米に於ては、音樂の技術と併行して獨立の必須科目となつてをる。學友諸君がステージ、メソードに一向無頓着なのは、敎へざるの罪であつて決して諸君の罪ではない。けれども私は諸君が今後大に此の事に關して注意を拂はれんことを希望して止まないのである。

最後に申したきは、演奏曲の曲意を最少し了解する必要がある事である。中には丸で正反對のエキスプレツシヨンを以てやつてをる人も少なくない樣に思つた。諸君は、日本音樂界の俊秀である。今後の日本音樂の運命は諸君の双肩に懸つてをる。どうか遠大の抱負と、熱心なる研究的態度を取つて頂きたい。帝劇の『マジツク、フリユート』を見て私は國辱だと感じた。あれは音樂の奬勵でなくて破壞である。音樂の過渡時代にはこんな事は得て免れないとしても、『マジツク、フリユート』を上場するだけの膽力があるなら、何故最少し其の意味位は了解して置くといふ研究心がないであらうか、私は切に諸君に前車の覆轍をやらしたくないと祈る。

私は辭令に習はざる野人、どうか文章の蕪雜にして禮を失する所あらば、私の率直な心に免じて御寬恕を請ひたい。若し惡口や皮肉を言つたと思はれては、私は實に心外である。特にこれだけは辨解して置く。

（『音樂』學友會、第四卷第七号、大正二年七月、一一～一三頁）

大正二年六月七日、八日　第二十八回定期演奏会

大正二年六月七日（土曜日）午後二時半開會

音樂演奏曲目

東京音樂學校

一、管絃樂

ロザムンデの序曲 ……シューベルト作曲

一、獨唱 ……船橋榮吉

甲　黄昏の夢 ……シトラウス作曲

乙　秘密
丙　彼こそは } ……ウォルフ作曲

一、管絃樂附きピアノ ……教師ショルツ

短く調コンツェルト ……ケンセルト作曲

甲　アレグロ、パテーティコ

乙　ラルゲット

一、合唱

甲　心の花 ……ブラームス作曲／吉丸一昌作歌

乙　空しく老いぬ ……瑞典民曲／ユングクスト編／高野辰之作歌

一、絃樂

絃樂四部合奏曲中のアンダンテ、カンタービレ ……ベートーヴェン作曲

一、二重合唱

鬼火 ……シューマン作曲／吉丸一昌譯歌

一、管絃樂

スート、アルジェリエンネ ……サンサーンス作曲

甲　ラプソディイ、モーレスク、

乙　レーヴリー、デュ、ソアール、

丙　マルシ、ミリテール、フランセーズ、

Program
OF
Orchestral and Choral Concert
Saturday, June 7th 1913.
At 2. 30. P. M.
Tokyo Academy of Music
UYENO.

PROGRAM.

1. Orchestra :
   Ouverture to Rosamunde. .....Schubert.
2. Barytone Solo :
   a. *Traum durch die Dämmerung*.....Strauss.
   b. *Verborgenheit.*
   c. *Er ist's.* } .....Wolf.
   Mr. Funabashi.
3. Piano :
   Konzert in F minor, op. 16. .....Henselt.
   a. *Allegro patetico.*

b. *Larghetto.*

Mr. Scholz.

4. Choruses:
   a. *Dein Herzlein mild*.....Brahms.
   b. *Spinn! Spinn!*.....Schwedsiche Volksweise arranged by Jüngst.
5. String Orchestra:
   Andante cantabile with variations from the String quartet, op. 18.....Beethoven.
6. Chorus: (*double chorus*)
   Ungewisses Licht. .....Schumann.
7. Orchestra:
   Suite algèrienne. .....Saint-Saëns.
   a. *Rhapsodie mauresque.*
   b. *Rêverie du soir.* (*à Blidah*)
   c. *Marche militaire francaise.* [ママ]

Conductor: Mr. Kron.

音樂演奏曲目梗概　第十七

一　管絃樂

『ロザムンデ』の序曲　　シューベルト作

シューベルト (Franz Schubert 1797—1828) は一八二〇年（廿三歳の時）までにシンフォニ六、祈禱曲六、序曲約七、ピアノ、ソナタ十二、絃樂四部少くも十一及び其他リード數多を作曲したりしが、未だ之を公にするの機を得ざりき。然るに此の年に至りて彼の名は一二の劇樂によりて一般公衆の知る所となれり。其の中の一はホフマンの『靈しき琴』と題する神仙劇にメロドラマとコーラスとを附せるものにして、これが序曲は後に『ロザムンデ』の序曲てふ名を以て世に行はるゝに至れり。今日演奏するもの即ち是なり。曲は緩徐部と快速部とに分る。曲頭に管絃に現はるゝ一樂句は導旋律的に此の劇樂の全部に反覆して現はるゝものにして、これを序曲の初に用ゐたるは近式の作法として注目に値す。又た快速部の主想はウェーベルの式に倣ひ、劇中の一齣より取れるものなりといふ。當時輝き初めたる劇樂界の名星ウェーベルの感化は多少其の他の點にも現はれたり。

二　獨　唱

(イ) たそがれの夢　　シュトラウス作

(ロ) 秘　密　　ウォルフ作

(ハ) 彼こそは（春の歌）　　同　作

ワグネル以後の獨逸樂壇に其名最も高きものを擧げよといはゞ何人もリヒャルト、シュトラウス(Richard Strauss 1864—)を指すに躊躇せざるべし。彼が今日の名聲を博したるは重に其の樂詩(Symphonische Dichtung)に於てベルリオース、リストに一歩を進めたると樂器編成法にて於てワグネルを凌げるとに在り。然れども歌劇及び其他の聲樂に於ても彼は既に多くの秀什を出せり。彼の短歌 (Lied) に就て特筆すべき一事は同時代の詩人の傑作に節附けする風を起したること是なり。この一事は十八世紀に於ては一般に行はれ居たることなるが、其後漸々に廢れ行きて、既にシューマンの如きも好んで古きロマンチックの詩に作曲したりき。ブラームスは文學の趣味ある作家なりしも、これまたリリエンクローン或はゴットフリート、ケルレルの一二の詩を採れるに過ぎず。此の時に當りて近頃の詩に作曲して其の新味を解釋したるものは實にシュトラウスとす。玆に奏するはビールバウム (O. J. Bierbaum) の詩三篇に作曲せるもの（作品二九）の一にして、黄昏に廣き野を越えて靜かに親愛なる人を音信るゝ心を詠めり。其の獨逸樂界に知られたる程度は猶ほシューベルトの短歌の如しといふ。彼の短歌は概してむづかしきもの多けれども、此の作の如きは比較的やさしくして、而も美妙なる逸品なり。伴奏のピアノは彼が音色の才の一端を窺ふに足らん。

Traum durch die Dämmerung.

Weite Wiesen im Dämmergrau;

Die Sonne verglomm, die Sterne ziehn—
Nun geh' ich hin zu der schönsten Frau,
Weit über Wiesen im Dämmergrau,
Tief in den Busch von Jasmin.

Durch Dämmergrau in der Liebe Land;
Ich gehe nicht schnell, ich eile nicht;
Mich zieht ein weiches, samtenes Band
Durch Dämmergrau in der Liebe Land,
In ein blaues, mildes Licht.

Ich gehe nicht schnell, ich eile nicht;
Durch Dämmergrau in der Liebe Land
In ein mildes blaues Licht.

—Otto Julius Bierbaum.

ウォルフ (Hugo Wolf 1860—1903) は十年程前に歿したる墺國の樂人なり。彼はシュトラウスの如き多方面の人にあらず。器樂又は歌劇の部門に試作なきにあらざれども、特に言ふべきものなし。唯だ短歌（リード）の領域に於てはシューベルト、シューマンの後彼を推して第一と稱す。作る所アイヒェンドルフ、メーリケ及びゲーテ等の諸集あり。茲に奏するはメーリケ集 (Mörike-Lieder) に蒐めたる五十三篇中の二にして、何れも一八八八年中の作に係れり。ウォルフの傳記者デクサイの曰く『此の集の詩には悲劇あり、喜劇あり、苦難あり、道化あり、風景畫あり、ポンチ畫あり、神事あり、愛情あり』と。實にメーリケの集は他の作に比して其の詩味も樂趣も多方面なりといふを得べし。

ウォルフの唱歌の特質は深く詩人の意を探りて、それより自然に湧き出づともいふべき音樂を附したる點に在り。然れども單に音樂の點より見るも趣味甚だ深し。ピアノの伴奏は各曲とも表情と特性とを具へて、彼の曲の重要なる一部をなせり。此の一點は以前のシューベルト、シューマンの唱歌曲にも當て箝まることなれども、殊にウォルフに於てはピアノの音部が一層の進歩をなして聲音の部と對等の資格を持つに至れり。これ劇樂に於て嚮にワグネルの爲したる所に似たり。されバウォルフはワグネルの精神によりてシューベルトを復活したる人といはるゝも故なきにあらず。

二つの歌の中にて前の方は人知れず獨り嘆き獨りよろこぶ心をうたへるもの、中頃の稍や迫りて速き一節は其の喜びを示せるなり。後の方は春に告ぐる歌にて木々の綠、花の色香をめづる心なり。『聞けや、はるかに琵琶の音』の一句には伴奏に琵琶（アルペッジョ）音を聞かせたり。

Verborgenheit.

Lass, o Welt, o lass mich sein!
Locket nicht mit Liebesgaben,
Lasst dies Herz alleine haben,
Seine Wonne, seine Pein!
Was ich traure, weiss ich nicht,
Es ist unbekannte Wehe;
Immerdar durch Tränen sehe
Ich der Sonne liebes Licht.

Oft bin ich mir kaum bewusst
Und die helle Freude zücket
Durch die Schwere, so mich drücket,
Wonniglich in meiner Brust.
Lass, o Welt, o lass mich sein!
Locket nicht mit Liebesgaben,
Lasst dies Herz alleine haben
Seine Wonne, Seine Pein!

Er ist's.

Frühling lässt sein blaues Band

Wieder flattern durch die Lüfte;
Süsse, wohlbekannte Düfte
Streifen ahnungsvoll das Land.
Veilchen träumen schon,
Wollen balde kommen.
Horch, von fern ein leiser Harfenton!
Frühling, ja du bist's!
Frühling, ja du bist's!
Dich hab' ich vernommen!
Ja, du bist's!

—Eduard Mörike.

三　ピアノ、コンツェルト

短く調コンツェルト　　ヘンゼルト作

バイエルンに生れたる洋琴の名手ヘンゼルト（Adolph Henselt 1814—1889）はワイマールに於てフンメルに學びたれども、其の演奏の手法に於ては一種の獨創を立てたりき。彼の奏法はフンメルとリストとの中間に在りともいふべく、稍やリストに似て而も嚴重なる滑奏（レガート）に基けり。其の最も得意とする所は手指を幅廣く用ふる一事にして例へば八度以上（オクターブ）に亘る琶音（アルペッジョ）の演奏の如し。玆に奏するコンツェルトは其の傑作の一にして、暫くの間ピアノ曲中至難のものと稱せられたり。今日と雖技術上甚だ困難なる曲の一たるに洩れず。

四　合　唱

(イ) 心の花　　ブラームス作

(ロ) 空しく老いぬ　　瑞典民謠

(イ) ブラームス(Johannes Brahms 1833—1897)の短歌集（作品六二）中の一、原歌はハイゼの詩集よりとれるもの。

(ロ) 瑞典の民謠より取りてユングスト(Hugo Jüngst)の改編せるもの、ユングストは一八五三年ドレスデンに生れて同地の音樂院に學び、七六年にドレスデン男聲唱歌會を設立したる人なり。唱歌曲の作頗る多し。邦語の歌詞は兩曲とも原歌の意を酌めり。

心の花　　吉丸一昌作歌

小草の蕾は一夜の露に綻ぶ。
なさけの花は何にか咲く。いつの日にか咲く。なさけはなさけの
露に咲けども　いつとは知らじな神に問へかし。神こそ知らめ。

空しく老いぬ　　高野辰之作歌

日毎磯に　沖見る女
波の彼方に　何をか戀ふる。

待てど待てど　歸らぬ我が夫（せ）
舟か破（や）れにし　梶をか絕えし。

あ、あ、哀れや　夫（せ）を待つ女
磯に歲經て　空しく老いぬ。

五　絃　樂

流暢なる緩徐曲　　ベートーヴェン作

本曲はベートーヴェン（L. Beethoven 1770—1827）の絃樂四部の傑作六篇(作品一八)中の第五なる長イ調の曲の第三部分なり。こは初めに主想を表はして後、幾度か之を變化せしむる所謂ヴァリエーションの曲體に作られたり。ベートーヴェンの此の作は彼が初めて絃樂四部に指を染めたる作品として音樂史上重要の意味を有するものにして、六篇共にモツァルトの感化の尙ほ著しきを見る。殊に玆に奏する長イ調のものはモツァルトの同調の絃樂四部を摸型となせるものなりとは評家の疑なしとする所なり。但しそは勿論曲の骨子たるモチーフに就いふにあらず、唯だ曲部の配列構造に關して類似を認むるのみ。且つ終節（コーダ）に於て變ロ調の現はるゝ如きは純然たるベートーヴェン式なり。

六　二重合唱

鬼火

シューマン（Robert Schumann 1810—1856）が多人數の合唱團の爲めに作れる二重合唱四篇（作品一四一）中の第二なり。四組の合唱團を二つ重ねて八組にて奏す。原歌はツェドリッツ（J. C. Zedlitz）の作、邦語の歌詞は其の意を譯せり

ツエドリッツ原歌
吉丸一昌譯歌

鬼火

道もなき山邊を
旅人分けゆく。
百谷百瀬も　その足を阻まず。
鳴神も嵐も　その足を留めず。
見よ遠方
火の影　親しげに
ひかり　やさしげに　ほのめく。
旅人は急ぎゆく。燈火は誘へり。
こは何ぞ。あかしか。星影か。
さて　また黄泉の火か。死の火か。

七管絃樂

スキト『アルジェリエンヌ』　サン、サーンス作

佛蘭西樂界の老大家サン、サーンス（Camille Saint-Saëns 1835—）の佳作（一八八〇年作、作品六〇）。地中海の對岸アルゼリアに旅行せる時の印象なりといふ。全部四曲に分れ居りて初めの前奏（Prélude）はアルゼリアを遙かに望みたる時の心地を表はしたるものなるが、今回は之を省きて第二のムール風のラプソヂー（長ニ調、八分六、四分二、四分三）を以て始む。ラプソヂーは原、希臘に於ては長き叙詩中の一節に節を附けて歌ひたるものゝ名にして近頃の音樂に於ても稀には此の如き語原的の義に用ふることあり。（例へばブラームスがゲーテのハルツ旅行記より抜萃したる詞に節付けしたる聲樂曲の如し）。然れども普通には幾つかの民謠を集めて作れる器樂のファンタジアをいふ。玆に奏するラプソヂーも此の種の曲にして作家が旅行中に得たる種々の感想を其の珍らしき民謠旋律に托して表はせるものと見るべし。曲は單純にして而も一種特別の趣（主として調子の曖昧不定なるに基く）を具ふる節に始まりて漸々に豊麗と變化とを加へ、終に二倍の速さを以て多くの音部に細工せらるゝの後トロンボーンに現はるゝ初めの主想に歸る。次で一種の嘲笑する如き可笑しき舞踏風の進行（四分二）に進み、暫時にして流暢なる歌調に移る。此の歌調風の部分に於ける短七度（長ニ調に於ける「ハ」音）は歐洲に珍しき趣なり。又た三分の二の進行に矛盾しつゝ進む所の銅皷、鈴皷及び三角器の變拍子的二拍子も同じく異樣なり。對位法、模倣法、及び裝飾音の應用の外尚ほ注意すべきことは其の珍らしき樂器の組み合せ方なり（例へばトランペットとホルンとヴァイオリンの銀笛音とを八度にて重ねたる如し）

三、『ブリダーに於ける夕べの夢想』（長イ調八分六）。作家が海濱より進んで内地に入り、生溫く、香ある大氣の中に自然の靜けさを味ひ居る時ムールと西班牙とを混ぜたる樣の節遠くより響き來る。かゝる折に心に浮べる想はやがて此の曲となりしならん。初めにヴイオラは低く靜かなる聲にて快き小謠をうたふ。ヴアイオリンは同音にて之れに應へ、フリュートとクラリネットとは之を承く。さるうちに第一と第二のヴァイオリンの對話起る。やさしく美し。

四、フランスの軍隊進行曲。こは異境にありて祖國の軍隊を見たる感想なるべし。音樂上より見れば意味深しといふよりも唯だ面白しと評すべき曲なり。稍や輕く優しき趣あるはアルゼリアを支配するフランスの手加減の寛和なるを思はしむとオット、ナイツェルは言葉巧みに評せり。（お、さ稿）

〔批評および関連記事〕

●ク氏の指揮振

音樂學校の大演奏會

東京音樂學校の定期大音樂會は昨日午後二時から同校奏樂堂で開かれ

た、ユンケル教授の後繼者コンダクターとして墺國より招聘されたクローン氏が我樂壇に於るオーケストラ最初の指揮は當日の聽者が一齊に眼を睜るべきものである、氏はフロツクコートに威儀を正し細身のタクトを執つて指揮臺に現はれ輕く會釋すれば滿場は拍手を以て迎へた、頓て指揮杖は上つた、曲はシューベルト作ロサムンデ其他である、ユ氏の指揮振は輕快洒脫であつたがクローン氏のは熱烈にして管絃及び合唱隊三百餘名の樂手を意の如く動かし恰も名將劍を揮つて三軍の陣容一糸亂れざるの觀ありで拍手急霰の如くであつた、次でショルツ氏の管絃樂器ピアノ獨奏、ヘンゼルト作短へ調コンチエルト其他獨唱合奏管絃樂六番の後夕刻散會した、來會者は英獨露大使以下各國大公使を始め紳士淑女一千餘名頗る盛會であつた

（『東京日日新聞』大正二年六月九日）

■去月七日八日の兩日本校奏樂堂にて東京音樂學校春季大演奏會が開催せられたか、新任のクローン氏の我國に於ける最初の指揮振りには滿場は盛んな拍手を以て迎へた。曲は皆輕快洒脫の風致に富むでゐる豪放な點は無いが如何にもデリケートでクローン氏の性格を裏書きするに充分のもの計りであつた。曲目は左の通り。〔曲目省略〕

（『音樂』學友會、第四巻第七号、大正二年七月、七一頁）

大正二年七月五日　学友会第五回土曜演奏会

■去月五日本校奏樂堂に於て第五回土曜演奏會開かれたり。曲目左の如し。

第一部

一、合唱……會　員
　埴生の宿……ビショップ作
二、高音獨唱……山　下　禎
　甲、プル・デイチエステイ……ロッテイ作
　乙、モントナハト……シューマン作
三、洋琴獨奏……山　口　節
　ハ長調ソナタ（作品第二十）（第四樂章）……ゼーバー作
四、高音獨唱……永　井　いく
　甲、ペルラ・グローリア・ダドラルビ……ボノンチーニ作
　乙、デイ・シユトウメ・フオン・ポルテイチイ
　……オーパー作
五、次中音獨唱……近　藤　義　次
　甲、デイ・ロートスブルーメ……シューマン作
　乙、フリューリングストウラウム……シューバート作

第二部

六、洋琴獨奏……弘　田　龍　太　郎
　ロンド・ブリルランテ……ゼーバー作
七、中音獨唱……竹　内　うめ
　歌劇『プロフェット』中のアリア……マイアーベーア作
八、ヴイオリン……佐　藤　謙　三
　第九番司伴樂（作品第百四、第二、第三樂章）
　……ベリオ作
九、次中音獨唱……澤　崎　定　之
　歌劇『フライシュッツ』中のマックスの大アリア
　……ゼーバー作
十、合唱……會　員
　甲、空しく老ひぬ……ユングスト作曲
　高野辰之作歌

乙、故郷を離るゝ歌……獨乙民曲
吉丸一昌作歌

（『音樂』學友會、第四巻第八号、大正二年八月、六五～六六頁）

○東京音樂學校演奏會　去る七月五日（土曜日）午後二時より同樂堂に於て演奏會を開催せしがプログラム中竹内梅子孃の中音獨唱、永井いく子孃の高音獨唱は妙技萬堂の聽衆をして熱狂せしめ最も喝采を博せり、竹内孃の益々圓熟せる肉聲と永井孃の未來ある藝術に多大の希望を托して將來をたのしむ

（『音樂界』第六巻第八号、大正二年八月、六五頁）

大正二年九月二十七日　学友会第六回土曜演奏会

■去月廿七日第六回土曜演奏會ありたり。故竹内梅子孃及び其他最近數年中に物故されし同窓諸兄姉の追憶哀悼のために專ら悲歌哀曲を選みて最もよく此意を致すを得たり曲目は左の如し。

一、合唱　會員
歸り來ぬ鶯……ベネケン作曲
會員作歌

二、アルト獨唱　花島秀
イ、アヱマリーア……ケルビーニ作
ロ、ラルゴー……ヘンデル作

三、ソプラノ獨唱　永井いく
イ、歌劇『フライシュッツ』中の抒情調……ヱーバー作
ロ、神曲『パウルス』中の抒情調……メンデルスゾーン作

四、洋琴獨奏　高安百合
イ、夜の曲（ト短調）……ショパン作
ロ、夜の曲（嬰ヘ短調）……ショパン作

五、ソプラーノ獨唱　薗部ふさ
イ、神曲『エリアス』中の抒情調……メンデルスゾーン作
ロ、アヱ　マリーア……グーノー作

六、洋琴獨奏　教師　ペツォールド夫人
イ、夜の曲（嬰ハ短調）……ショパン作
ロ、送葬行進曲……ショパン作

七、ヴイオリン獨奏　田中ひさ
悲傷曲（作品第十）……エルンスト作

八、ソプラーノ獨唱　教師　ペツォールド夫人
『タンホイザー』中のエリザベートの祈り……ヴーグナー作

九、三重奏　（教授　安藤幸子夫人／教師　シヨルツ氏／教師　エルクマイスター氏）
三重曲（作品第五十　イ短調）……チャイコフスキー作
一大藝術家の追悼のために（第一樂章）

十、合唱　會員
アヱ　マリーア……アルカデルト作
君が代……林廣守作

（『音樂』學友會、第四巻第十号、大正二年十月、七二頁）

■第六回土曜演奏會は昨廿七日、未曾有の好成績を以て終り、第一回通俗演奏會亦本廿八日絶大の好果を收めて結了する事が出來たのは本會の最も愉快に思ふところであります。會員が少しも勞を惜しまないのと指導の任に當る教官諸氏の熱心な誘導とこれに加ふるに、天下好樂の士女諸氏の後援とによつて回を重ねて發展進歩してゆくのは歡喜の極みです。

（『音樂』學友會、第四巻第十号、大正二年十月、七四頁）

大正二年九月二十八日　第一回通俗演奏会

■去月廿八日東京音樂學校學友會は第一回通俗音樂會を東京音樂學校にて開催せり、曲目は左の如し。

一、女聲合唱　會員
甲、波風、おぼろ、雲、（小學唱歌集）
乙、虹の歌。おきやがり小法師、茸狩、（尋常小學唱歌集）
丙、達摩さん。お玉杓子。近眼のしくじり（新作唱歌）
二、ピアノ獨奏　山口節子
水車……エンセン作
三、女聲二重唱　會員
織りなす錦（中等唱歌集）
四、ヴイオリン獨奏　澤康雄
ニーナ……ペルゴレーゼ作
五、ソプラノ獨唱　永井いく
埴生の宿……ビショップ作
六、風琴獨奏　中田章
ファンファール……レムメンス作
七、箏曲　教授今井慶松
松竹梅……外二名
八、管絃樂　海軍々樂隊
幻想曲『ホフマンの物語』……オッフェンバッハ作
九、獨唱　金健治
太平の曲（小學唱歌集）
十、ピアノ獨奏　谷村ナツ
第五番ソナタ、（第一樂章）……ベートーヱン作
十一、テノル獨唱　近藤義次
甲、母のおもひ、（小學唱歌集）
乙、雲雀……本居長世作
十二、ピアノ獨奏　松平信博
數へ歌ヴリエーシュン……本居長世作
十三、管絃樂　海軍々樂隊
甲、クセロフオーンの獨奏ポルカ『雀』……ヂャンヴレー作
乙、行進曲『鑛夫長』……ツェルラー作

（『音樂』學友會、第四巻第十号、大正二年十月、七二頁）

樂壇時評

■六七月の頃、通俗教育の重要事業として通俗音樂演奏會を我校に於いて擧行するの企實現すべし
□第一回は先づ市中或は廣く府内の各小學校女教員諸氏を招待、次は各病院の看護婦諸氏をと聞く
■此擧我校獨力の計畫にて、何等の入場料を徵せざる也やがては我校友會の事業たるべし樂界多望
□曲目は簡易清雅、解しく易く聽き易きを選ぶは勿論、日本趣味日本精神の發揮にあるも亦勿論なり
■社會教養を目的とすると共に帝國主義の涵養を輔導する此計畫年を積むに從て効果の顯著蓋可驚

（『音樂』學友會、第四巻第六号、大正二年六月、一頁）

通俗演奏會に關し敬愛する音樂學校生徒諸氏に望む

黒田誠

〔前略〕

如上の意味に於て私は此の間開かれた通俗演奏會に對して滿腔の賛意を表白する。勿論初演の事であつたから曲の選擇や演奏上の不足も隨分なかつたわけでもない、けれども私は今玆で其れ等の批評をしやうとは思はぬ。唯來會した教員看護婦諸氏の顔色に現れた滿足と喜悦との情を見て「私は之れ有る哉」と思つた事だけ云つて置く。藝術家が其藝術的同情を以て實利的に（又は藝術以外の方面で精神的に）人類の爲めに盡して居る人々を慰める、之れがラインメンシュリツヒでなくて何であらう。私は廣く勞働者（通俗に云ふ）諸君の爲めに此の門戸が開放され彼等が人生の疲れを此藝術の泉に慰むるの日の一日も早からん事を望んで止まない。私は敢て云ふ通俗音樂演奏會（如上の目的を持つた）に出演されるのは實に諸君が音樂家として天から與へられた使命を果たすもので光榮此の上もない事であると。王侯貴人の前で歌はうとも彈かうともそれが貴とからぬ目的の爲めであつたならば何の光榮な事があらう、襤褸を纏つた人の前で歌はうとも彈かうともそれが高尚な目的ならば何の恥づる必要があらう。詩人ローウエルの言の如く實に「貧しき人と共にする食こそげに聖餐なれ」である。それで前月號の樂壇時評に云ふ如く此通俗演奏會を輕視し又は之れに出る事を恥とするやうな人が一人でもあつたならその人は音樂者たる資格がないものと云はなければならない。どうか外の會には出ずとも此の會にだけは出て心の底から歌ひ且つ彈いて頂きたい。この様な事は賢明なる諸君に今更言はなくてもおわかりの事であるが唯自分の考へを玆に述べさせて頂いたまでである。釋迦に說法の譏は却つて悦んでお受けをする。

音樂家たる諸君は實に理想と現實とを打つて一團とする力強き鍛冶屋である。斯くてこそ其の打ち下ろす鎚より出づる火花は永遠に光を放つて我等の後裔に至るまで無限の感化を及ぼす事が出來るであらう。諸君が日々耳にして居られる上野の鐘がEとFとの中間である事もかやうに考へれば又一段の興味なき能はざるものではあるまいか。妄言多謝。

（大正二、一〇、二）

（『音樂』學友會、第四巻第十一号、大正二年十一月、四五～四七頁）

大正二年九月二十八日～十月六日　学友会演奏旅行（男子部）

吾が學友會男子部三十八名は吉丸教授大塚助教授指揮の下に、去る九月廿八日より東北諸縣に學友會秋季演奏旅行を行へり。旅中各地の諸學校々友會、教育會、音樂會等の望みに應じて演奏會を開く事前後七回に及べり。歌詞、歌曲の平易にして且つ通俗的なる、よく淳朴なる東北人の心狀に適して大に音樂趣味を開發せしことと信ず、殊に毎日最後に行ひし、會員一同の、オーケストラ付きの君が代大合唱には、會員は弓も折れ絃も切れよとばかり、聽衆は喉も裂け堂も懐れよの歌ひ振り、眞に至誠通天の慨ありき。吾人は、この點に於て今回の旅行が單なる音樂趣味の普及に止らずして、又大に吾が國民性發揮の上に於て、多大の効果ありし事を疑はざるものなり。更に尚本會の慶とする處は、此等各地の人々が心の底より喜びを捧げられし事なり。即ち或時は一同食卓を共にして互に相談じ相笑ひ、或は吾等一行を乘せたる列車が霞に消えゆく迄あなたに小さく、白きハンカチーフのひらめきを認めしが如き、一行をして眞に涙に咽ばしめたり。

由來剛健を以て鳴る東臺の健兒、今又征戰幾日の勞苦を經、旅窓の風雨に身を鍛へて、精悍の氣眉宇の間に滿ち、其意氣や軒昂、其威風や堂々、十月六日午後五時半目出度歸京せり。

日程及各地の演奏曲目は次の如し

九月廿八日（日曜）午後六時上野發
九月廿九日（月曜）午前五時四分山形着、午前中見學、午後一時より山形師範講堂に於て演奏、午後六時廿四分山形發、午後十二時秋田着、一泊、
九月三十日（火曜）午前八時より秋田師範講堂に於て演奏、同十一時二分秋田發、午後四時三十分青森着、一泊、
十月一日（水曜）午前中見學、午後一時より、浦町高等小學校講堂に於て演奏、午後三十六分（ママ）青森發、同六時二分淺蟲溫泉着、一泊、
十月二日（木曜）午前七時五十七分淺蟲溫泉發、同十一時尻內着、同三十八分同所發、同四十四分八戸着、午後一時より八戸實科高等女學校に於て演奏、同五時十分八戸發、同四十四分尻內着、同五十一分同所發、同九時廿二分盛岡着、一泊、
十月三日（金曜）午前中見學、午後二時より盛岡新築劇場に於て同市教育會主催の下に演奏、同九時廿七分盛岡發、
十月四日（土曜）午前一時三十一分松島停車場着、同所一泊、午前中松島遊覽、正午十二時松島發、零時五十三分仙臺着、見學一泊、
十月五日（日曜）午前中見學、午後一時より第二高等學校講堂に於て第一回演奏、午後六時より同所に於て第二回演奏、一泊、
十月六日（月曜）午前六時十分仙臺發、午後五時三十分上野着、
以上日程、

曲目一部

一、合唱　會員
甲、秋のあはれ　乙、漁父　丙（イ）、荷車
（ロ）、お玉じやくし（ハ）、達摩さん（ニ）
なんだつけ
二、ヴイオリン三重奏　多忠亮
甘き夢　荒木得三
館山甲午
三、獨唱　甲、亡妹　乙、落椿　佐藤豐吾
四、ピアノ獨奏（メヌエツト）　榊原直
五、男聲二重唱　水野康孝
紅葉狩　柴田知常
六、ヴイオリン獨奏　大場勇之助
カヴルレリーア、ルスチカーナ
七、合唱（水夫の歌）　會員

二部

八、男聲四重唱　近藤義次
甲、雨後の月　乙、花と朝　佐藤豐吾
柴田知常
金健二
九、ピアノ獨奏　弘田龍太郎
數へ歌ヴリエーション
一〇、獨唱（ゑニスの舟歌）　近藤義次
一一、ヴイオリン獨奏　佐藤謙三
司伴樂作品第七番
一二、絃樂合奏　會員

メリーウヰドー中の抜萃曲

一三、君が代合唱（絃樂伴奏）　　聽衆一同合唱

右の外水野康孝の獨唱、館山甲午のヴイオリン獨奏、湯前純親のピアノ獨奏、高折宮次のピアノ獨奏、多忠亮のヴイオリン獨奏、多基永のチェルロ獨奏等所によりて一二の變更ありしも曲目は大差なし。

（『音樂』學友會、第四巻第十一号、大正二年十一月、八七～八八頁）

●音樂演奏會

今回東京音樂學校生徒約四十名修學旅行にて來靑に付來る十月一日午後一時より靑森尋常高等小學校に於て音樂演奏會を開らくこととなり一昨日午後三時より附屬小學校に於て市内名縣立學校長及小學校長發起となりて相談會を開らき掛員分擔及演奏會擧行方法を決議して午後六時散會したり曲目は左の如し

〔曲目省略〕

▲演奏曲につき　器樂にて第九ピアノ數へ歌は本邦固有の原曲「一つとや」に對し斯界有名なる本居長世氏が數回の變手伴奏譜を作られたるもの又聲樂にて合唱及獨唱の中過半は本邦人の作曲なると且つ通俗的にして小學校程度の兒童にも適する位の曲趣のもの多々あることなどは從來の純西洋曲の多數にて成れるものとは其樂趣の大いに異なる点あるべく實に此等適當なる多樣の選曲に注意を拂はれたるは全く專門家一行の周到なる企畫に成りて寧ろ當地方等の再び得難き好機會に遭遇せるものといふべきか

▲會費　は入場券引換にて小學校兒童五錢、中學生及學校教員十錢其他二十錢にて例により各官署及學校等に宛て勸誘方依頼したるも一般希望者は當日會場にても宜敷く又豫め高等山内氏又は師範校釜蒭氏に宛て申込むも可なるべし其他會場は當日設備の都合により婦人席の外敷物等の準備も附けかぬるかの懸念等もあれば之等は豫め承知せられたしと

（『東奥日報』大正二年九月二十九日）

●盛岡支部演奏會

岩手縣教育會盛岡支部會にては昨日午後二時より東京音樂學校生徒を招聘し新馬町盛岡劇場に於て音樂會を催ほせり來盛せる音樂學校生徒は同校吉丸、大塚兩教師統導にて研究科師範科豫備科の生徒四十名にして同五時閉會せり來賓の重なる者は各學校長教授市内重なる紳士紳商婦人連も多く高農生師範中學高女東北高女其他中等學校學生大多數にて約一千三百名定刻前既に滿員立錐の地もなきまでとの大盛況なりし

（『岩手日報』大正二年十月四日）

○盛岡だより　（大木生報）東京音樂學校學友會一行五十名は吉丸、大塚二氏統導の下に十月二日來盛翌三日午後二時より當市教育會は一行を聘し新築の盛岡劇場に於て大演奏會を開催したり、

入場者千五百名當地初めてのことゝて其人氣は非常のものにて午後四時半聽衆及會員の君が代にて無事閉會したり、

一行の卓拔せる初技はまるで素養なき者をして靈界に活動せしめ多大の興味を起さしめしこと疑なし大塚氏のタクト見上げたものなり、東北人のため度々此擧あらんことをのぞむ。

（『音樂界』第六巻第十一号、大正二年十一月、六七頁）

○仙臺に於ける東京音樂學校學友會演奏會

當市二高講堂に於て十月五日午後及び夜分の二回演奏會が音樂學校學友會講士に依りて開かれた當地に於て同校の演奏は三四年目でもあり特には御諒闇あけての初演奏會故近來稀れなる盛況であつた曲目は左の通りである。（靑葉生報）〔曲目省略〕

（『音樂界』第六巻第十一号、大正二年十一月、六六頁）

大正二年十月四日～五日　学友会演奏旅行（女子部）

學友會の女子部樂旅は十月四日を以て岡野助教授の引率の下に宇都宮に行はれた、成立しかけては壞され、成立しかけてはくぢけた旅程の、斯う定まる迄の混亂さ、その衝に當つたものゝ慘憺たる苦心は、一行が「藝術傳道のために」といふ潔い決心と相俟つて遂に此快い擧となつたのであつた。我等が名は女子部演奏旅行團であつた、しかし、各人の一つ一つの心は、此時既に一個の女性ではなかつた、大天地の間に存在し活動する人間、その人間としての覺悟決心を有つて居た。人心の美化――藝術の使命――さうした自覺は、唯一回の演奏のために遠く野を行き山を越す事を辭さなかつたのである。

紅葉の山、みどりの水、其處には藝術を迎へる幾多の溫い心が待つて居た、宇宙の悠久に對してはわづかの瞬間たる樂旅、然し、紅葉の山とみどりの流れにはぐくまれた純なる人心に、西歐の樂聖が殘した妙音を傳へ得た事を思へば、世界の奇勝に幾十幾週の歡をつくしたそれにもまして、眞に會心のゑみをなす事が出來る、今にして切に祈つてやまないのは、彼の地の潔い人心に美しい藝術の花の早く芽ぐまむの一事である。

なほ當時の旅程と曲目は次の如くであつた。

旅行日程

十月四日　午前六時　上野發
同　午前九時三分　宇都宮着
同　午後一時より宇都宮女子師範に於て演奏及見學此地に一泊
十月五日　午前七時より大谷方面の見學
同　午後二時二十八分　宇都宮發
同　午後五時四十五分　上野着

曲目

一、合唱（二重唱）
歸雁……メンデルスゾーン作
二、ピアノ獨奏　井上春
ソナタ……クレメンティ作
三、中音獨唱　花島秀
甲　埴生の宿……ビショップ作
乙　アヅマリーア……ケルビーニ作
四、ピアノ獨奏　谷村ナツ
バラーデ……ラインベルガー作
五、ヴイオリン獨奏　田中久子
コンツェルト……ベリオ作
六、高音獨唱　渡邊銑
甲　四つ葉のクローバ……ロイテル教師作
乙　フィガロ中のアリア……モツァールト作
七、ピアノ獨奏　喰田八重
グリルレン……シューマン作
八、高音獨唱　長坂好子
甲　白菊……スコットランド民謠
乙　ソルフェーヂの歌……グリーヒ作
九、ヴイオリン獨奏　蜂谷龍
バラーデ・エ・ポロネイズ……ビユータン作

十、合唱
白菊（三重唱）……クルッシュマン作

（『音樂』學友會、第四巻第十一号、大正二年十一月、八七～八八頁）

大正二年十月二十五日、二十六日　学友会秋季演奏会

■十月廿五六日兩日ゞールディの百年祭をかねて學友會の秋季大演奏會を開きます。會員及び會友諸君には廿六日の日曜日に來て戴きます。時間は午後一時半からです。どうぞ定刻前に皆御來會下さる樣に願ひます。間際になつても入場者が多いとどうしても絶對の靜肅を要する合唱などは出來ませんから特にお願します。

（『音樂』學友會、第四巻第十号、大正二年十月、七四頁）

■〔前略〕秋の演奏會はゞールディの百年祭を兼ねて曲目も隨分變った面白いものを出す事が出來たのは近頃にない喜びであつた。教官諸氏の懇篤なる指導後援と、會員一同の熱心な奮勵努力の結果に外ならないのである。

（『音樂』學友會、第四巻第十一号、大正二年十一月、九二頁）

大正二年十一月一日、二日　学友会演奏旅行（男子部）

足利美音會の招聘に應じて男子部二十七有志の士は吉丸大塚兩先生に率ゐられて出張演奏旅行をした。學友會未曾有の大發展其の上研究科生の應援を得たので一行の意氣は頗る盛なるものであつた、今回は學友會第一回の應聘演奏なので一同大に案ずる所がないではなかつた、が思ひがけなき優遇に預かつたので一同大に喜悦滿面であつた、斡旋の勞を取られた關根國藏氏服部大介氏須永勇藏氏小佐野晋一郎氏の諸氏には感謝して止まざる次第である、日程、曲目は左の通り

曲目第一部

一、合唱　會員
甲、秋のあはれ……鳥居忱作歌／マラン作曲
乙、漁父……武島又次郎作歌／ノールエー民謠
二、オルガン演奏　岡本新一
インヂーケーション……レムメンス作
三、ヴイオリン三重奏　多忠亮／荒木得三／館山甲午
甘き夢……ブルンネル作
四、獨唱　佐藤豐吾
甲、故き妹……モツァルト作
乙、フイガロ……モツァルト作
五、ヴイオリン獨奏　大場勇之助
カヴルレリーア、ルスチカーナ……マスカーニ作
六、男聲二重唱　佐藤豐吾／金健二
甲、歌劇「魔笛」中の二人僧の歌……モツァルト作
乙、エントフユールング……モツァルト作

七、絃樂合奏　會　員
セレナーデ……モツァルト作
番外　會　員
甲、お玉じやくし……吉丸一昌作歌／梁田貞作曲
乙、荷車……吉丸一昌作歌／大和田愛羅作曲
丙、達摩さん……吉丸一昌作歌／本居長世作曲

第二部

八、合唱　會　員
浦の明け暮れ……吉丸一昌作歌／キンケル作曲
九、ピアノ獨奏　高折宮次
タンホイザーマーチ……ワークナー作
一〇、ヴイオリン　佐藤謙三
司伴樂第九番……ベリオ作
一一、獨唱　外山國彥
甲、晝……林武次郎作歌／弘田龍太郎作曲
乙、歌劇「リゴレット」中のバレット……エールデイ作
一二、チェルロ獨奏　林顯藏
コール　ニードライ……マークスブルツク作
一三、絃樂合奏　會　員
メリーウヰドー中の拔萃曲……フランツレハール作

君が代

旅行日程

十一月一日土曜日、晴、午後一時半上野發同三時五十六分小山着（乘換）同四時五分同地發同五時五分足利着、關根金藏氏、服部大介氏出迎へらる旅館初谷に入り夕食の上六時半より劇場足利座にて開かる。

十一月二日晴、日曜日、午前八時十八分足利發（東武線）による、同十時三十七分淺草驛着直に解散、

（『音樂』學友會、第四巻第十二号、大正二年十二月、六八～六九頁）

大正二年十二月六日、七日　第二十九回定期演奏会

大正二年十二月七日（日曜日）午後二時開會

音樂演奏曲目

東京音樂學校

指揮者 グスターフ、クローン

一、管絃樂
ゲーテ作悲劇「エグモント」の序曲（作品八十四）……ベートーフエン作曲
二、管絃樂附きヴァイオリン
ニ長調コンツエルト（作品六十一）……ベートーフエン作曲
第壹樂曲
ヴァイオリン 教師 グスターフ、クローン
指揮者 教師 ハインリヒ、ウエルクマイステル

三、管絃樂及合唱

「アテンの廢址」中の進行曲及
合唱（作品百十四）……ベートーフェン作曲

四、ピアノ、オルガン及絃樂

メディテーション……バッハ、グーノー作曲
オピルア　野田ひさ
ガンノ助教授　中久喜章

五、い、合唱（管絃樂伴奏）

歌劇「アウリスに於けるイフィゲーニー」中の合唱……グルック作曲

ろ、高音獨唱……教師　ハンカ、ペッツオールド

歌劇「フイガロの結婚式」中の
レシタテイブ及アーリア……モーツアルト作曲

は、合唱（管絃樂伴奏）

アーヴェ、ヴェールム、コルプス……モーツアルト作曲

六、管絃樂

歌劇「セライルよりの誘拐」の序曲……モーツアルト作曲

Orchestral and Choral
Concert
SUNDAY, December 7th 1913.
At 2 P.M.
Tokyo Academy of Music
UYENO.

PROGRAM.

Conductor : Mr. GUSTAV KRON.

1. Overture to the Goethe's Tragedy
"Egmont" op. 84 .....*Beethoven.*
2. Concerto(in D major op. 61)for Violin with Orchestra.
The first Movement (with the Cadence
by J. Joachim).....*Beethoven.*
Violin : Mr. GUSTAV KRON.
Conductor : Mr. HEINRICH WERKMEISTER.
3. March and Chorus from
"Die Ruinen von Athen" op. 114 .....*Beethoven.*
4. Meditation on a prelude for Piano, Organ and
String Orchestra.....*Bach-Gounod.*
Piano : Miss KUNO HISA.
Organ : Mr. NAKADA AKIRA.
5. *a.* Chorus with Orchestra from the Opera "Iphigenie
in Aulis" .....*Gluck.*
b. Recitative and Aria for Soprano from the Opera
"Figaro's Hochzeit" .....*Mozart.*
Mrs. Hanka Petzold.
c. Ave verum corpus for Chorus and
Orchestra. .....*Mozart.*
6. Overture to the Opera "Die Entführung aus dem
Serail" .....*Mozart.*

音樂演奏曲目梗概　第十八

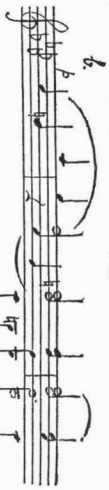
一　管絃樂

ゲーテ作悲劇「エグモント」の序曲

ゲーテの悲劇に附したる「エグモント」の曲（作品八四）は一九〇八年十月より翌年五月に至る期間に作られ、同年五月二十四日に初めて演奏せられたり。此に奏する序曲と幕間樂との外にクレールヒェン（Klärchen）の歌ふ短かき歌二つを含むのみにして、オペラの曲にあらず、誰だ正劇（ドラマ）の添へ物として作れるなり。序曲は劇の内容を巧みに暗示したるものとして其の名高し。

本曲は「コリオラーン」の序曲と同じく、強き刷毛にて明確に描き、樂器編成上の精微なる細工を避けたり。曲頭の序節に濶歩する如きサラバンドのリズムを以て表はしたる西班牙の暴君と

其の宥恕を哀願するニーデルランドの民衆



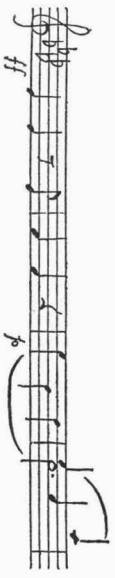
との對立は全序曲を通じて現はる。快速部（アレグロ）に於ける二つのモチーフは唯だ前掲のａ及びｂより生じたる變形に過ぎず。即ちａより先づ低音のリズム

を生じ、ｂより次のモチーフを生ぜり。

勝利の聲の如く其の間に交はる所の

も一の變形なり。

第二の主想（アマ）に於ては再びａとｂとが原形の儘に對立せり。



ヘ長調四分四拍子になる前に暴政（ａの最強奏）は今一度優勢を占め遂に

に至りてエグモントの首は地に落ちたり。されど國民は愈々奮起せり。物凄く迫る管絃の最弱奏 ppp は之が復讐を果し遂に暴政を脱して自由の勝利を齎らす。かくて凱旋の歡呼の裏に曲を終る。

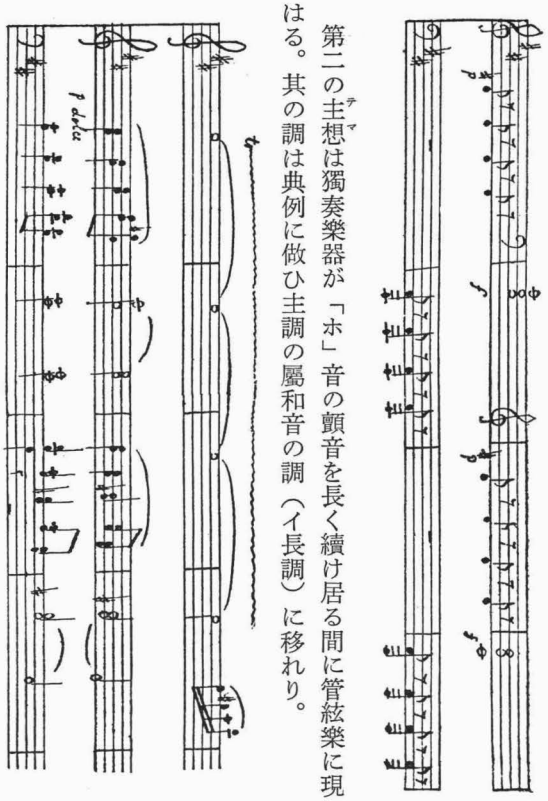
二　管絃樂附きヴァイオリン

ニ長調コンツェルト

本曲（作品六一）はベートーヴェン作のヴァイオリン曲中最も有名なるものなり。一八〇六年の創作に係り、其の年十二月二十三日ギーン市のヴァイオリン家クレメント（Franz Clement）初めて之を演奏せり。（作者は特に此の奏者の爲めに作曲せるなり）

全曲三章に分れ、第一章はニ長調、四分四拍子の過度ならざる快速調（アレグロ）、第二章はト長調四分四拍子の緩徐調（ラルゲット）、第三章は八分六拍子のロンドなり。本演奏は第一章に限る。

本章は獨奏の起る前に八十八小節の管絃部あり。之を終るの後獨奏ヴァイオリンは斷音的八音を以て始まり、次で滑走する續句に進む。管絃部の最初なる八小節の樂句に應答する次の一節は純乎たるベートーヴェン式にして、百年以前の聽衆には斬新の感を與へたるに相違なし。



第二の主想（テマ）は獨奏樂器が「ホ」音の顫音を長く續け居る間に管絃樂に現はる。其の調は典例に倣ひ主調の屬和音の調（イ長調）に移れり。

本曲はベートーヴェンがヴァイオリン曲の作家としても最大なることを證するものなり。但し技術的方面よりいふにあらずして、其の高雅なる精神的内容に就ていふなり。

コンセルトの第一章又は最終章には其の終の少し前に通例「カデンツァ」（延聲終止）と呼ぶ部分あり。（本曲には三章の何れにもあり）こは終止法の途中にて暫く或る一音に停留し、それより華々しき通過句を演奏する一節をいふ。往時の演奏者は此の部分にて其の曲の主想（テマ）に基きたる自由の即興演奏をなすを常とせしが、十九世紀に入りてより、作曲者が自ら適宜の「カデンツァ」を撰びて演奏者に供する風も始まれり。然れども往時の風は今尚ほ依然として樂界に行はれ居れり。本曲の「カデンツァ」も種種の奏者によりて種々に奏せられ、又は書かれたれども、本演奏に採用せる名家ヨアヒム（Joachim）のもの最も有名なり。（蓋しヨアヒムは好んで本曲を公衆の前に演奏したればなり）

三　管絃樂及び合唱

「アテンの廢址」中の進行曲及合唱

ベートーヴェンの本曲（作品一一四）は一八一一年の作に係り、詩人コッツェブーエ（Kotzebue）の劇詩に附曲せるものなり。此の劇は一八一二年二月匈牙利ペスト市に獨乙劇場の開設せられし時、其の祝賀興行の最終幕として演奏せられたるものなりといふ。其の筋は劇場よりの註文に從ひて詩人が工夫せるものにして、其の概略次の如し。アテン市の守護神ミネルヴァはソクラテースの裁判せられし時、其の才智を嫉み、辨護の勞を取らざりし廉にて大神ツォイスの激怒に觸れ、オリュンプス山上の洞窟に繫がるゝ事二千年に及びしが、刑期滿ちて長き眠より醒まされ、メルクールに伴はれて先づアテン市を音信れたるに、美術と自由との黄金時代は見る影もなく、昔親みし國民も異國の奴隷となり果てたる淺ましさ。彼方より回々教の僧侶、土耳古の衞兵など群り來るに胸つぶれて今は羅馬へこそと言へば、メルクール押しとどめて、羅馬も蠻人の手に落ちたり、ミューズも他國に逃れて今は匈牙利の首府に住へりと言ふ。かくて二神は相携へてペストに赴き見るに、折りから一團の群集ターリア、メルポメーネなどの像を凱旋車に載せて牽き來り祭壇の後にそを安置す。かゝる間に神官の祈願により、ツォイスの雷鳴轟く中に皇帝フランツの胸像現はれ、衆皆な皇帝奉頌の歌を歌ふ。かくて此の歡聲の裏に幕下る。

此に奏する進行曲とターリア神官の合唱とはマルクスの評言を借りていへば、あらゆる祝祭行列の曲中、最も愛賞に堪えたるものにして、徹頭徹尾、諧調と穩かなる壯麗と快き崇高とを示せり。

四　ピアノ、オルガン及絃樂

メディタシオン（冥想）

本曲はグーノーがバッハ作のフーゲの前奏曲（平均率ピアノ曲集第一篇第一番）に基きて、敬虔なる旋律を添へたるものなり。此に奏する三部合奏曲に於ては、バッハはピアノに、グーノーは絃樂に現はれ、オルガンは其の和聲を豐麗にせり。

五　(い)合唱（絃樂伴奏）

歌劇「アウリス島のイフィゲニー」中の合唱

グルックの四大歌劇の一なる此の劇（初興行一七七四年巴里市）は名高き希臘の古話に基きて、多少其の筋を變化せり。玆に奏する合唱曲は全篇中の樂しき部分に屬し、イフィゲニーと英雄アキレースとの華燭の典を祝賀する人々の歌なり。（本演奏には獨語の歌詞を其の儘採用せり）

Zum Hochzeitfeste aus “Iphigenie in Aulis”

Tag der Freude, Tag der Wonne, sei gegrüsst mit hellem Klang!
Tag, an dem des Glückes Sonne euch mit holdem Strahl umschlang!
Welche Wonne, welche Lust zu ruhn an heissgeliebter Brust!
Wie beglückt ist das Paar, das sich in Liebe gefunden!
Segen und Heil bleibt ihr Teil, in allen lebensstunden bis an ihr sel'ges End'!

(ろ)高音獨唱（ピアノ及絃樂伴奏）
歌劇『フイガロの婚禮』中のレシタテイーブ及アリア

本歌劇（初興行一七八六年維也納市）滑稽歌劇の模範といはるゝモツアルトの傑作の一なり。脚本はボーマルシェの喜劇に基きてダ、ポンテの選ぶ所にして、ロシニの名作『シヴイリアの理髪師』の續篇をなせり。（但し歌劇としてはロシニの作がモツアルトの以後に出でたること勿論なり）其の筋は伯爵アルマヴイーヴアといふもの理髪師フイガロの才略によりて令孃ロジーナを夫人として迎へたるが（以上「セヴイリアの理髪師」）其の後夫人の侍女にてフイガロと婚約あるスザンナを寵愛する樣子の見ゆるより、夫人、フイガロ、スザンナの三人そを防がんとて一策を案じ、或る夕夫人はスザンナに變裝して伯爵に意中を明言せしめ、やがて其の扮裝を脫し伯爵をして前非を後悔せしむといふなり。此の間種々の細かき事件に伴ひて滑稽百出す。モツアルトの音樂は此の間の感情を巧みに又た美しく表はせり。玆に演ずる歌は夫人が賤しき召使の姿に裝はねばならぬ身の口惜しさを述べ、又た伯爵の情愛の薄にかはれるを怨む意なり。

Arie der Gräfin aus “Figaros Hochzeit.”

(Rezitativ) Un' Susanne kommt nicht? Ach! was heisst das?
Wüsst' ich nur, wie mein Gatte den Antrag aufgenommen!
Kühn scheint es immer, was ich heute wagen will.
Der Graf ist heftig, voll von Misstraun, er wird toben!
Doch immerhin! Ich wechsle meine Kleider, ich nehm' die von Susannen, sie nimmt die meinen...und die Nacht ist uns günstig...O Himmel! zu welch' einer niedrigen Rolle bin ich gezwungen durch des Gatten Schuld! Er macht mir unerhörter Pein, hintergeht mein ihm treues Herz, und darf noch eifern? Einst war ich angebetet, dann verlassen, und nun betrogen, jetzt muss ich gar zu unwürd'gen Künsten schreiten!

(Arie) Nur zu flüchtig bist du verschwunden,
Freudenvolle, sel'ge Zeit!
Hin sind jene Rosenstunden
Treuer Liebe nur geweiht!
O dass noch für den Verbrecher
Dieses Herz so zärtlich spricht!
Schone seiner, grosser Rächer!
Strafe seinen Mitleid nicht!
Ach! zu flüchtig bist du verschwunden,
Freudenvolle sel'ge Zeit!
Hin sind jene Rosenstunden,
Treuer Liebe nur geweiht!

Liebe, führ, ach! aus Erbarmen
Ihn an meine Brust zurück,
Stehst du mir nicht bei, mir Armen,

O dann stirbt mein ganzes Glück!

(は)合唱（絃伴樂奏）

アーヴェ、ヴェールム、コルプス

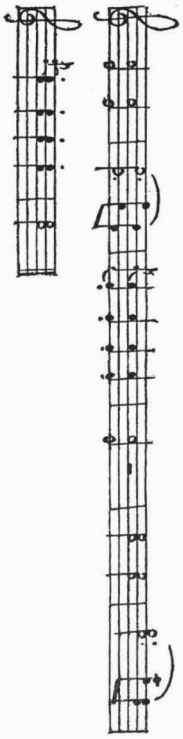
モツァルトの音樂は其の晩年の作に於て漸く表情を深ふし、且つ憂愁の調を帶び來れり。此の有名なる合唱曲も其の例に洩れず。本曲は多分一七九一年の夏、聖餐會に演奏せんとて作りたるものなるべく、從て簡易なる作風に據れり。されど此の短小なる框の以內に作家は大曲の作風を含めたり。後半（Esto nobis 以下）に於て即ち然り。本演奏には原語の歌詞を採用せり。其の意人間の爲めに十字架に流血したる眞の死骸に向ひて死期の救濟を祈るなり。

Ave, ave, verum corpus natum de Maria virgine,
Vere passum immolatum in cruce pro homine.
Cujus latus perforatum un da fluxit et sanguine.
Esto nobis praegustatum in mortis examine, (in mortis examine).

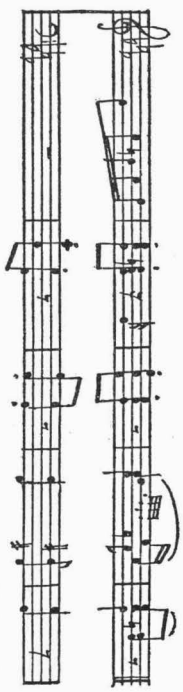
六管絃樂

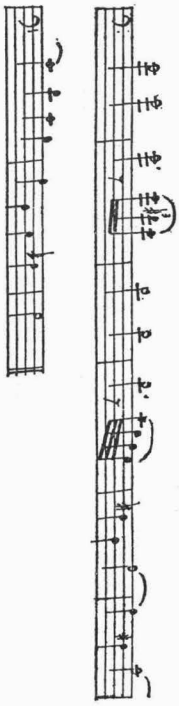
歌劇「セライルよりの誘拐」の序曲

「セライル（土耳古宮廷）よりの誘拐」は三幕の歌劇（初興行一七八二年維也納市）にして、其の筋はベルモンテといふもの、其の妻の海賊に捕はれて奴隷に賣られたるを尋ぬる中、土耳古の總督（パーシア）の宮廷に奉仕せるを聞知し、これを誘ひ去らんと企つる物語なり。序曲は劇の筋と深き關係なし。左に其の二つの主想を掲ぐ



及び





第二の主想の後に現はるゝ次の旋律は開幕第一にベルモンテの歌ふアリアの調なり。

（お、さ稿）

〔關連記事〕

學校記事

■十二月六日七日の兩日東京音樂學校秋季大演奏會があつた。クローン氏のベートーヱンの管絃樂附ヴイオリン司伴樂の演奏、絃樂伴奏のペツォルド夫人の獨唱の如きは實に立派なものであつた。

曲目は次の通り。〔曲目省略〕

（『音樂』學友會、第五卷第一號、大正三年一月、七六頁）

大正二年十二月二十日　学友会第七回土曜演奏会

■十二月廿日第七回土曜演奏會を開く、曲目は

第一部

一、合唱　　會員

甲、踊りの歌……（シュルツ作 吉丸一昌歌詞）

乙、夢の幸……（バッハ作／高野辰之歌）
　指揮者　船橋榮吉
二、ピアーノ獨奏　足立ふさ
　ソナータ、作品第十四、第一……ベートーヱン作
三、テノール獨唱　水野康孝
　甲、ヱニスの歓乃……メンデルスゾーン作
　乙、蓮の花……シューマン作
四、ヴイオリン齊奏……（井川富子／柴崎ヤス／田中靜）
　ルール……バッハ作
五、バリトーン獨唱……柴田知常
　甲、アスラ……ルービンシテイン作
　乙、リナルドの宣叙調と抒情調……ヘンデル作
六、ヴイオリン獨奏　齊藤リヒャルド
　コンセルティーノ……ジット作
七、ピアーノ獨奏　菅原菅
　ソナータ、ハ長調（第四樂章）……ヱーバー作
八、アルト獨唱　森川達子
　歌劇『ゼミラミス』中の抒情調……ロッシーニ作
九、ヴイオリン　佐藤謙三
　司伴樂第七番……ベリオ作
番外、二重唱……（長坂好子／永井いく）
　歌劇『フイガロの結婚』中の二重唱……モツァールト作
十、ピアーノ　藤田愛子
　光耀狂想曲……メンデルスゾーン作
十一、甲、管絃樂　會員
　藝術家の生活……ヨハン シュトラウス作
　乙、管絃樂附合唱　會員
　君が代……林廣守作
　指揮者　大塚淳

（『音樂』學友會、第五巻第一号、大正三年一月、七七～七八頁）

大正三年一月十七日　能楽会第一回試演会

■去る一月十七日午後一時より本校より能樂會に其養成を依託しておいた能樂囃子方生徒の技術披露のため九段能樂堂に於て能樂演奏會を開催した。當日の番組は次の通りである。

番組

梅若萬三郎　大倉繁次郎
鉢木　寶生新　寺井三四郎
　三須平司
三輪　觀世元滋　龜井俊雄、山下博睦
　小早川靖二、大島元三郎
忠度　喜多六平太　大倉宣利、加藤賢吉
　越智茂幸
安宅　金剛右京　龜井俊雄、加藤賢吉
　佐竹征一郎

春日　櫻間金太郎　大倉宣利　佐藤順造
龍神　　小早川靖二　大島元三郎
融　野口政吉　川崎利吉　觀世元規
　野島信　幸五郎　一噌又六郎
半能。笏の舞
　不見不聞　山脇和泉
傍點を附けたのが本校養成の囃方生徒である。

（『音樂』學友會、第五巻第二号、大正三年二月、一〇二～一〇三頁）

樂壇寸評

■本校に附屬する能樂會に於いて、一昨年十月より囃子方生徒を養成したるが、客月十七日その第一回試演會を靖國神社境内能樂堂にて開會し、頗る好成績の評あり。莊重典雅なる日本藝術の保護に著〔着〕手して而してかくの如き有望の結果を收め得たる事、實に吾人の慶賀に堪へざる處なり。

（『音樂』學友會、第五巻第二号、大正三年二月、一頁）

大正三年二月十四日　学友会第八回土曜演奏会

去る二月十四日に第八回土曜演奏會を開いた。その曲目は左の通である。

一、合唱　會員
　亡き母を思ふ……原田潤
二、ピアーノ獨奏　鈴木采子
　アムプロムプティュ作品九十、第二……シューバート
三、女聲二重唱　山下テイ　森川達子
　（イ）レ　マニユナレル……グノー
　（ロ）マイリード……シューマン
四、ヴイオリン獨奏　井川富子
　（イ）ベルセーズ……アラール
　（ロ）ガヴット……バッハ
五、ソプラーノ獨唱　渡邊銈
　シエッフング中のガブリエールの抒情調……ハイドゥン
六、ヴイオリン獨奏　喰田八重
　コンセルティーノ第一樂章……シット
七、合唱　會員
　秋の夜……ライヒャルト
八、オーガン獨奏　白坂ミイ
　（イ）フーガ……ゲオルゲ　ベルグ
　（ロ）フィナーレ……ゼルネー
九、ヴイオリン二重奏　澤康雄　田中清治
　ソナータ作品二、第八番……ヘンデル
十、テノール獨唱　佐藤豊吾
　歌劇「フィガロの結婚」中のカヴティーナ……モツァールト
十一、ピアーノ獨奏　高折宮次
　司伴樂作品八十五……フムメル

十二、男聲四重唱　佐藤豊吾　近藤義次　佐久間孝夫　金健二

(イ)デァエントフエルンテン……シューバート

(ロ)フライエ　クンスト……シュトゥンツ

十三、ヴイオリン　蜂谷龍

司伴樂、第二番……シュポーア

十四、合唱　會員

ハレルヤ……ヘンデル

指揮者　船橋榮吉

(『音樂』學友會、第五巻第三号、大正三年三月、九二～九三頁)

大正三年三月二十五日　卒業式

大正三年三月廿五日(水曜日)午後二時

卒業證書授與式順序　東京音樂學校

卒業證書授與式

一報　告

一卒業證書授與

一校長告辭

一文部大臣祝辭

一卒業生總代謝辭

演奏曲目

第一部

一、箏(生田流)……{箏 選科修了生 蜂須賀ハツネ / 同 同 工藤琴 / 同 同 今井ハナ / 三味線 講師 山口菊次郎}

老松……{三味線 箏 菊岡檢校 藤浦匂當 作曲}

二、箏(山田流)……{箏 選科修了生 神谷美衞 / 同 教授 今井新太郎}

菊水……山登萬和作曲

三、ピアノ獨奏……甲種師範科卒業生　工藤チヨ

スケールツオ(第二番、作品十六)……メンデルソーン作曲

四、中音獨唱……聲樂部卒業生　近藤義次

手琴に……シューベルト作曲

五、ピアノ獨奏……甲種師範科卒業生　喰田ヤエコ

は長調ソナータ(第三番、作品二、第壹樂曲)　ベートーヴエン作曲

六、ヴアイオリン獨奏……器樂部卒業生　佐藤謙三

レジアンド(作品十七)……ヴィーニアフスキ作曲

七、最高音獨唱……聲樂部卒業生　長坂好子

歌劇「フーゲノッテン」中の侍童のカヴアティネ……マイヤベーア作曲

八、ピアノ獨奏……器樂部卒業生　高安ゆり子

森の景色(作品八十二)……シューマン作曲

第二部

九、合唱{い、夜の歌……イエンセン作曲 / ろ、墳墓と月影(男聲合唱)……高野辰之作歌 シューベルト作曲}

十、ヴアイオリン獨奏……器樂部卒業生　田中ひさ
　フアンタジーア、アッパショナータ中のラールゴ及フイナーレ(作品三十五)　ヴユータン作曲
十一、ピアノ獨奏……器樂部卒業生　弘田龍太郎
　は短調コンチエルト(第三番、作品三十七)　ベートーヴエン作曲
十二、最高音獨唱……聲樂部卒業生　永井いく
　歌劇「フライシユッツ」中のアガーテのアリー……　ヴエバー作曲
十三、ヴイオロンチエロ獨奏…研究科修了生　多基永
　コンチエルト中のアンダンテ(作品四十五)　モーリック作曲
十四、ピアノ獨奏……研究科修了生　石原かず子
　と長調フアンタジーア(作品七十八)……　シユーベルト作曲
十五、ヴアイオリン獨奏……研究科修了生　末吉雄二
　に短調第二コンチエルト中のロマンス(作品二十二)……　ヴイーニアフスキ作曲
十六、合唱{いろ、潮は岩に碎けて鳴る、小鳥は空に轉る}……　リユックアウフ作曲

Graduation Exercises
of the
TOKYO ACADEMY OF MUSIC
UYENO PARK
Wednesday, March 25th, Taisho 3 (1914)
2 P.M.

PROGRAM

I. Report.
II. Presentation of Diplomas.
III. Address to the Graduating Class by the Director.
IV. Address by His Excellency Ōoka, Minister of State for Education.
V. Response by the Representative of the Graduating Class.

PART I.

1. Oimatsu (Ikuta school)...Kikuwoka Kengyo-Fujiura Kōto.
   Koto: Miss Hachisuka, Miss Kudo and Miss Imai.
   Shamisen: Mr. Yamaguchi.
2. Kikusui (Yamada school).....Yamato.
   Koto: Mrs. Kamiya and Mr. Imai.
3. Scherzo for Piano (No. 2, Op. 16.) .....Mendelssohn.
   Miss Kudo.
4. An die Leyer (No. 2, Op. 56.) .....Schubert.
   Mr. Kondo.
5. Sonata for Piano (No. 3, C major, Op. 2, I. movement) .....Beethoven.
   Miss Shokuta.
6. Légende for Violin (Op. 17.) .....Wieniawski.
   Mr. Sato.
7. Kavatine des Pagen from „Hugenotten“ .....Meyerbeer.
   Miss Nagasaka.
8. 1. Eintritt, 3. Einsame Blumen, 6. Herberge, 7. Vogel als Prophet, 8. Jagdlied for Piano from „Waldscenen“(Op. 82.).....Schumann.
   Miss Takayasu.

PART II.

9. Choruses:
   a) Nachtlied .....Jensen.
   b) Grab und Mond (Male chorus) .....Schubert.
10. Largo.—Allegro vivace (Finale. Saltarello.)

for Violin from „Fantasia-Appassionata“
(Op. 35.) .....Vieuxtemps.
Miss Tanaka.
11. Concerto for piano (No. 3, C minor,
Op. 37.) .....Beethoven.
Mr. Hirota.
12. Arie der Agathe from „Freischütz“ .....Weber.
Miss Nagai.
13. Andante for Violincello (from the Concerto,
Op. 45.) .....Molique.
Mr. Ohno.
14. Fantasia for Piano (G major, Op. 78.).....Schubert.
Miss Ishiwara.
15. Romance for Violin (from the second Concerto,
D minor, Op. 22.) ...Wieniawski.
Mr. Suyeyoshi.
16. Choruses:
Russian folkspoesy
(a) Am Gesteine rauscht die Fluth. } .....Rückauf.
(b) Vögelein durch rauscht die Luft.}

東京音樂學校卒業式演奏

［前略］

（一）箏曲「老松」はなだらかなる生田の情調を味ふべく、（二）「菊水」は堅（ママ）は今井慶松氏、例の派手な彈き方惡からふ筈なく神谷美衞子、絃歌ともに先づ無難なれども本科卒業生の箏曲研究者として西歐樂發聲法を應用したらんには更に美しき聲が出はせぬかと思ひしは獨り余の望蜀にもあらざるべし（三）工藤チヨ子のピアノ獨奏は師範科生としては可なりの出來なり、（四）聲樂部の近藤義次氏の中音唱歌は或程度までは歌の意味は解れども樂器（咽喉）が惡き爲どんなにうまく歌つても五割方損なるは氣毒なり。喰田ヤエ子のピアノ獨奏は師範科として上出來なるべし。（六）佐藤謙三氏のヴァイオリン獨奏は音色も中々よく、意氣込もよけれども惜しいかな所々に調子の面白からぬ所ありき。今一層勉強せられたらんには大に見るべきものあるべし、（七）長坂好子の最高音歌唱は近藤氏以上の大袈裟な身振にて折角の歌の全體を打毀はしたり、併し之は生徒を罪すべきいはれ毫もなく、唯だ教師の不親切無責任に驚くの外なし。舞臺上の表情及び態度は唱歌に美を添ゆべきものなるに却て滑稽に陷りしは惜しむべし。（八）ピアノ獨奏は高安ゆり子病氣のため出演なし

第二部（九）の（い）は殆んど百四五十名の男女生の合唱、日本ではこゝより外には聞かれない結構のものなり。唯基礎の音たるべきベースが、ややもすれば動搖せんとするは惜むべし。（十）器樂部優等卒業生田中ひさ子のヴァイオリン獨奏はさすがに囑望されし人だけに恐らくは第一の出來榮なりしなるべし。たゞ晴の初舞臺であつた爲め多少堅くなり過ぎた樣に思はれたり。もし慾を云へば最少し力强き弓を勉强させたならば前途多望ならん。（十一）弘田龍太郎氏のピアノ獨奏はあれだけの大物を樂々と彈きこなされたのは感心なり。これにつき記者が全演奏につき特に希望したきは演奏者には暗譜の必要益々痛切なること是なり。譜を見て居る人は、譜なしの人に比すれば慥に譜に囚はれてるところあるが如し。特に弘田氏はどういふ譯か、伴奏者が出て居るのに、譜を色々といぢくられた態度は甚だ醜くかりしのみならず、先づ聽衆をして不安の念を增さしめ、彈かぬ先から杞憂を懷かしめたるは大に損なるべし。かゝる晴の場所に於ては將來は譜を用ゐざるやう練熟し置かれんことを切望に堪へざる所なり。（十二）永井いく子の最高音唱歌は非常に囑望され人だけあつて、聲も可なり美しく、歌い方にも難はなけれど、もし今後聲音に自己の特徵を發揮する樣にせられたら大に見るべきもあるべし。惜らくは音聲に發溌たる力を認むる能はざりしは白璧の徵瑕といふべきか。（十三）多基永氏のチエロ獨奏はあの困難なる樂器より豊富なる音を出し、レガートの所にもうま味あり、時時現はれるアレグロのテンポーになると往々にして音がベチャ〳〵にクッ着く嫌ありしは荷が少しく重過ぎたる爲なるか、はた練習の不足より生じたるかは知らざれども、あれだけの音を出し得る腕があつて彈けぬ譯はな

い様に思はれたり。殘る三番は殘念ながら他に約束ありしため割愛して樂堂を辭しぬ。終に臨で演奏會に向つて一二の注意を乞ひ度は、來賓に對して禮服着用との周到なる注意ありしに關らず、外國教師の一人たるペツオード夫人が不斷着のまゝにて屢々ステーヂの上に立たれしは一種異樣の感なき能はざりき。とかく日本に於ける西洋人は日本人を馬鹿にするの風あるが如し、まさか禮服のお持合がないとも思はれざれば……次に不思議に思ひしはステーヂに三臺のグランドピアノがありて演奏の度毎に一々差替へられたるは何の爲なりしか不可解なりき。一體に演奏の間に長い時間が挾まりてのたり〳〵と日本時間的に進行したるは少なからず聽衆をだれしめて演奏の効果を損ぜしめたるは惜むべし。（千田生）

（『音樂界』第一五一号、大正三年五月、五五～五七頁）

大正三年六月六日、十四日　学友会春季演奏会

■學友會は六月六日十四日の兩日春季音樂大演奏會を開いた。十四日にエルクマイスター氏、ショルツ氏、久野助教授の出演があつたのを除けば兩日とも同曲目であつた。

一、合唱　會員
　祈願の歌……〔シューバート作曲／吉丸一昌作歌〕
二、ヴイオリン　多忠亮
　司伴樂作品二百十三……エル、メンデルスゾーン
三、オーガン獨奏　和田央
　パルティータ……セバセティアン　バッハ
四、ヴイオリン　館山甲午
　司伴樂イ短調……アッコレー
五、ピアーノ獨奏　山口節
一、プレルディウム
二、サラバンデ
三、リゴードン（「ホルベルヒ」のスイーテ中より）
六、ヴイオリン　齋藤リヒャールト
　小司伴樂（第二樂章）……ジット
七、合唱　會員
　子守謠……〔キュッケン作曲／吉丸一昌作歌〕
八、ヴイオリン　大場勇之助
　司伴樂ト長調……ザイツ
九、ソプラーノ獨唱　山下禎
　歌劇「フライシュッツ」中のエーンヒェンの華想調・エーバー
十、ヴイオリン　田中ひさ
　司伴樂……セバセティアン　バッハ
　番外ギオロンチェルロ獨奏……エルクマイステル教師
　い、歌劇「聯隊の娘」による幻想曲……セルゼー
　ろ、西班牙の舞踏作品五十四、第一
　「手琴に寄せて」……ポッパー
十一、絃樂合奏　會員
　第十七番大司伴樂作品第六……ヘンデル
　番外ピアーノ二重奏……第一ピアーノ　ショルツ教師／第二ピアーノ　久野助教授
　シムフォニックポエム「匈牙利」……リスト
十二、合唱
　イ、神曲「天地創造」中の「み空は語る偉き御神」ハイドゥン

ロ、君が代……林廣守

（『音樂』學友會、第五巻第七号、大正三年七月、一〇〇頁）

■六月の演奏會は永い間なかつたあとのことではあり、出演者一同が熱心な練習を積んだ上に非常な意氣込みであつたので四時間に亘る長い演奏が少しもだれなく、絶えず緊張した氣分を破らなかつたのは誠に珍らしい經驗であつた。エルクマイスター氏のチェルロ獨奏もよかつた上に、ショルツ、久野兩氏のリストの如き全人格的の威嚴ある大藝術に依つて幾段の光彩を添え得たのは實に幸福の極みであつた。

（『音樂』學友會、第五巻第七号、大正三年七月、一〇三頁）

大正三年六月七日　学友会演奏会

六月七日東京府教育會主催の演奏會があつた。當日は全國教育者大會で上京した人々で文字通りの滿員で非常の盛會であつた曲目は次の通り、

一、合唱　東京音樂學校學友會員

祈願の歌……シューバート曲
吉丸一昌歌

二、ピアーノ獨奏　山口節

スイテ……グリーヒ

一、前奏曲
二、サラバンデ
三、リゴードン

三、ヴイオリン獨奏　田中ひさ

コンチェルトー……バツハ

四、最高音獨唱　永井いく

カヴティナー……ロッシーニ

五、絃樂

大コンチェルト……ヘンデル

番外

單音唱歌

一、かたつむり（第一學年）二、時計の歌（第二學年）三、茶摘（第三學年）四、藤の花（第四學年）五、納涼（第五學年）六、兒島高德、蓮池、四季の雨（第六學年）

六、合唱　東京音樂學校學友會員

子守謠……（キュッケン作曲）吉丸一昌作歌

七、チェルロ獨奏　エルクマイステル氏

い、歌劇「聯隊の娘」に基づく幻想曲…セルゼー

ろ、流浪民族の舞踏……ジェラール

八、ピアーノ獨奏　ショルツ氏

い、スケルツオーバルセ……モシュコッフスキー

ろ、匈牙利のラプソーディ……リスト

九、ヴイオリン獨奏　クローン氏

い、ロマンツエ……ベートーゼン

ろ、ヘーア　カーティ……フーバイ

十、管絃樂

婚禮進行曲……メンデルスゾーン

（『音樂』學友會、第五巻第七号、大正三年七月、一〇一頁）

■それから六月七日に大會をすることに廣告致して置きましたが七日には是非教育會のためにして呉れと當事者から切なる依頼がありましたので會員及び會友諸氏の來場されるのは一週間延して十四日、即ち第二日曜日の午後二時からとする事に致しました。教育會の方では六日迄で會議が終るので滿韓、九州、臺灣、北海道等の遠方から來會して居る會員が一日も早く退京されるだらうから折角の好機會を逸しないでよい音樂を聽いてお土産にする様にしてやりたい、それについては既に決定してある學友會の方の日取りを變更させて申譯けないが何卒都合して呉れる様にとのたっての御依頼であったので學友會の大會中、會員及び會友諸氏の來會される方を一週間繰り延ばした次第であります。何卒惡からず御諒承を願ふ次第です。

■學友會でやる音樂會が六日（土曜）、七日（日曜）十四日（日曜）の三日になります。其中六日は本校學生、及び職員に入場券を交附しますから、それを得る父兄や保證人等を聽衆として開催するのですから會員證や會友證を持つて來會される方々は十四日（第二日曜日）にお出でを願ひたいのです。七日の入場は教育會の方から入場券をお貰ひ下さる様に願ひます。即ち六日の入場券や、會友證や會員證では七日は御入場が出來ない譯です。そして會友の方々の中で十四日に都合が惡いから六日の土曜日に來たいと云ふ希望の方は特別の計らいを致すことにしますけれども、兩日お出でにならうとしたり、六日の入場券で次の日曜日に入れて呉れなどと云ふ様なことはお斷り致します。

■演奏會の度毎に隨分苦々しい事をして入場する人を見ますのは歎かはしい事です。すべて何事に限らずさうですけれども殊に音樂の様な精神的な樂しみを味はうとしてする集りにさもしい心を曝露して厭はしい思ひを人にさせたりする様な人のあるのは悲しい事であります。入り口で會友證や會員證などを調べないでも入場券などゝ八釜敷いことを云はないでも皆自分自身の人格を尊重してごまかしなどすることのない様になる日が待たれてなりません。

■御大喪になつたことですから御遠慮申し上げて長い間演奏會を開くことが出來なかつたのは會友諸氏に對して實にお氣の毒な次第でした。併しこれはそんなことを云つて居られる場合ではなかつたのですから諸氏からも何とも云はれなかつたのは、もとより賢明なる諸氏のみを網羅して居るからではありますが、我美しい國民性の發現と喜ばしく思ひます。

（『音樂』學友會、第五巻第六号、大正三年六月、八八頁）

大正三年七月四日　学友会第九回土曜演奏会（グルック二百年祭記念音楽会）

グルツク二百年祭紀念音樂會は去る七月四日グルツク誕生日に於て東京音樂學校學友會によりて開催せられ左の曲目を演奏さる

一、合唱　會員
祈禱の曲、グルツク曲　高野辰之歌
二、ヴイオリン齊奏　磯貝壽母
成田みね　小友三枝　内藤谷　荒木幹枝
甲　第五番タランテルレ、作品五十二　アンリー、ヘンケル
乙　ガヴツト　バッハ
三、テノール獨唱　水野康孝
小曲「オー　デル　ミーヨ　ドルチエ　アルドール」　グルツク
四、アルト獨唱（合唱附）　森川達子
歌劇「オルフエウス」第三幕中のオルフエウスの獨唱（獨唱　あはれとおぼせ、あはれと思せ）（合唱　いなーいなーいな）　グルツク
五、ヴイオリン獨奏　荒木得三
司伴樂　作品三十五　第一樂章　オーリーデインク
六、アルト獨唱（管絃樂附）　花島秀

歌劇「オルフエウス」第三幕中のオルフエウスの抒情調（吁我は
　彼女を失ひぬ）　グルツク
七、ギオロンチエルロ獨奏　荻原正彦
コール　ニートライ
　休憩　ブルツフ
八、合唱
甲、歌劇「オルフエウス」第二幕中の惠まれたる精靈の合唱（幸
　ある靈の國に入り來ぬ）　グルツク
乙、歌劇「アルセスト」第二幕中の合唱（さらば喜びよ）
　グルツク
九、ソプラーノ獨唱　山下テイ
歌劇「アルセスト」中のアルセストの抒情調とはに闇なる國の神
　達（第一幕終）　グルツク
十、ピアノ獨奏　高折宮次
パセテイツク　ソナータ　ベートーエン
十一、バス獨唱　柴田知常
歌劇「アウリスのイフイヂエニア」中のアガメムノンの抒情調
　（あはれ　いまし　いとしの吾娘よ）　グルツク
番外、管絃樂　會員
歌劇「オルフエウス」第二幕中のバレツト　グルツク
十二、ソプラーノ獨唱　渡邊銈
歌劇「アウリスのイフイヂエニア」の抒情調（かつては助け給ひ
　し御神）　グルツク
十三、二重唱　ユーリデイーチエ　山下テイ
　オルフエウス　花島秀
歌劇「オルフエウス」第二幕中の二重唱（いざ　いざ心安らかに我
　に跟き來ぬ）　グルツク
十四、獨唱及合唱（管絃樂附）　愛の神　渡邊銈
　ユーリデイーチエ　山下テイ
　オルフエウス　森川達子
歌劇「オルフエウス」第二幕中の獨唱附合唱（頌めまつらまし愛
　の御神）　グルツク
「君が代」
　指揮者　大塚淳　樋口信平　林廣守

（『音樂界』第一五四号、大正三年八月、六七頁）

■次の演奏會は六月に致します、六月はグルックの二百年祭に當りますから『オルフェウス』や『アルチェステ』などを出し、よい音樂祭を致したいと考へて居ります。

（『音樂』學友會、第五巻第五号、大正三年五月、九六頁）

■五月號で六月にグルックの二百年祭をやると書いて置きましたがあれは考へ違ひで、グルックの生れたのは七月二日ですから七月四日の土曜演奏會をグルックの二百年祭にすることにしました。

■七月の土曜演奏會は四日にやります。そしてグルックの二百年を紀念するために其作にかゝる『オルフェウス』『アルチェステ』、『イフイゲニエ』等の中の獨唱や合唱を出來るだけ紹介する心算です『オルフェウス』の合唱は是非管絃樂附きにして立派にしたいと考へて居ります。

■歌劇を除いては殆んどグルックには他の器樂曲はありませんから、ヴイオリンやピアーノにグルック物を望むことは出來ませんゆゑ、器樂の方面はそれぞれ受け持ちの方々にお願ひしてよい曲目を造りたいと思つて居

ります。樂しみにして待つて居て戴きます。

（『音樂』學友會、第五巻第六号、大正三年六月、八八～九〇頁）

■七月四日の土曜演奏會は午後二時からする事にした。曲目は巻頭に出した通り、六月の器樂の多かつたのに對し、聲樂を主とする今度のも又一段の趣があらうと思ふ。紀念繪葉書も發行する。

■グルックの二百年祭は兎に角面白いものになるだらうと思つて居る。到底歐米の様なことは望めないが、少さいだけに〔ママ〕又こじんまりとした快さもあるだらうと思ふ。今度のがうまくゆけば秋のシュトラウスの五十年祭にも唱ひ手達に今から心がけて居て貰つてそれぞれの特色を發揮する有意味の演奏會をしたいと思ふ。

■此前はヴイオリンが多かつた、今度は聲樂が多い、其中にピアーノの人達に澤山出て貰はうと考へてゐる。

（『音樂』學友會、第五巻第七号、大正三年七月、一〇三～一〇四頁）

大正三年九月二十六日　学友会第十回土曜演奏会

■九月二十六日學友會第十回土曜演奏會を開いた。曲目は左の通りである。

第一部

一、合　　唱……會　員
　聖　夜　　グルーベル曲
　　高野辰之歌
二、中音獨唱……花島秀
　ティットゥス　モツァールト
三、高音獨唱……山下禎
　歌劇『ミニョン』中の抒情調　トーマ
四、ピアーノ獨奏……菅原菅
　タランテレ　ヘラー

第二部

五、合　　唱……會　員
　浪の弊　本居長世曲
　　吉丸一昌歌
六、高音獨唱……花島秀
　歌劇『豫言者』中のフィーデスの抒情調　マイアーベーア
七、次中音獨唱……淺香鏻三郎
　二人の兵士　シューマン
八、ピアーノ獨奏……石原和子
　ロンド　カプリッチーヨ　ベートーヱン

（『音樂』學友會、第五巻第十一号、大正三年十一月、六九頁）

大正三年十月十七日、十八日　学友会恤兵演奏会

■十月十七八日の兩日學友會で恤兵音樂大演奏會を開催した。兩日とも非常の盛況で定刻前既に入場謝絶の止むなきに至つた。會場は意氣潑溂たる愛國の士を以て滿たされ、曲目は何れも熱烈なる喝采のうちに演ぜられた。その演奏曲目は左の如くである。

十七日

第一部

一、合　　唱……會　員
　甲、雁の叫び　露西亞民謠
　乙、獨逸膺懲の歌　シュルツ曲
　　吉丸一昌歌
二、オーガン獨奏……眞篠俊雄

ソナティーネ　い短調作品第三十八　ラインハルト
三、ギオロンチェルロ獨奏……彭城昌平
甲、に短調司伴樂中のアンダンテ　ゴルターマン
乙、歌劇『セザルバ』中の間奏曲　エミーリョ　ピィツイ
四、アルト獨唱……森川達子
歌劇『プロフェット』中の抒情調　マイヤーベーア
「あはれ吾子よ！」
五、ピアーノ獨奏……高折宮次
ファッシング　シュヴング　シューマン
六、ソプラーノ獨唱……長坂好子
歌劇『カルメン』中のミカエラの宣叙調と抒情調
七、管絃樂……會員
三　舞曲　ジャーマン
第二部
八、絃樂附き合唱……會員
「君逝きぬ」　ベートーヱン
九、バス獨唱……樋口信平
甲、歌劇『マクベス』中のバンクヲーの抒情調　ヱールディ
乙、歌劇『フアウストの劫罰』中のメフイストのセレナーデ
ベルリオース
十、ピアーノ……弘田龍太郎
は短調司伴樂中のラルゴ作品三十七　ベートーヱン
十一、ソプラーノ獨唱……永井いく
歌劇『ミニョン』中のフィリーナの抒情調　トーマ
十二、ヴイオリン齊奏……助教授　喜多　裏
佐野その
鳥居つな
蜂谷　龍
田中ひさ
第六ソナータ中のプレリュードとガヴットと
ロンド　バッハ
十三、ピアーノ獨奏……貫名美名彦
ソナータ　と短調作品二十二　シューマン
十四、ソプラーノ獨唱……薗部房
歌劇『ハムレット』中のオフィーリア狂亂の抒情調
トーマ
十五、合唱及び管絃樂……會員
甲、歌劇『プロフェット』中の戴冠式行進曲　マイヤーベーア
乙、君が代　林廣守
十八日
第一部
一、合唱……會員
甲、雁の叫び　露西亞民謠
乙、獨逸膺懲の歌　シュルツ曲　吉丸一昌歌
二、オーガン獨奏……眞篠俊雄
ソナティーネい短調作品三十八第三番　ラインハルト
三、ギオロンチェルロ獨奏……犬井英夫

第三司伴樂中のアンダンテ　ゴルダーマン
四、ソプラーノ獨唱……渡部銈
歌劇『フライシュッツ』中のアガータの小歌調　エーバー
五、ピアーノ獨奏……山口節
ポロネーズ作品四十第一番　ショパン
六、バス獨唱……柴田知常
歌劇『ユーディン』中のポローニの小歌調　アレギー
七、管絃樂……會員
三　舞曲　ジヤーマン
第二部
八、絃樂附き合唱……會員
君逝きぬ　ベートーゼン
九、テノーア獨唱……澤崎定之
樂劇『ローエングリン』中のローエングリンの名宣り
ヴーグナー
十、ピアーノ獨奏……小泉ちか
ソナータ作品四十二　シューバート
十一、ソプラーノ獨唱……薗部房
歌劇『ハムレット』中のオフィーリアの狂亂の抒情調
トーマ
十二、ヴイオリン齊奏……助教授　喜多襄
佐野その
鳥居つな
蜂谷龍
田中ひさ
第六ソナータ中のプレリュードとガヴットと
ロンド　バッハ
十三、ピアーノ獨奏……川久保美須々
スケルツォー作品五十四　ショパン
十四、テノーア獨唱……船橋榮吉
甲、シュテンドヘン　シューバート
乙、魔王　シューバート
十五、合唱及び管絃樂……會員
甲、歌劇『豫言者』中戴冠式進行曲　マイヤーベーア
乙、君ケ代　林廣守

（『音樂』學友會、第五巻第十一号、大正三年十一月、九七～九八頁）

編輯室より

■十月十七（神嘗祭）十八（日曜日）の兩日學友會主催の恤兵大音樂演奏會を開く。出征以來茲に數旬、風浪と戰ひ、豪雨と戰ひ、名狀す可らざる戰陣の勞苦をつぶさに嘗めて、皇國のために强敵と戰つて居る我忠勇なる陸海軍の將士の今日此頃を思ふと中々一時たりともぢつとしては居られません。そこで大方の皆樣方の御援助を仰いで盛んな音樂會を開き、其收入を陸海軍へ獻上したいと思ひ立ちました。

■幸ひ會員一同非常な熱心を以つて事に當つて呉れますので其上世の中の皆樣方の御賛成を得ましたならば大正三年第一の盛大な演奏會とならうかと思ひます。出演者は今のところ我邦の西洋音樂界の中堅を成して居る青壯樂家、新進の唱ひ手の殆んど全部で、何れも熱心に出演を承諾して下すつたのですから其成績も隨つて美事なものであらうと思つて居ります。

（『音樂』學友會、第五巻第十号、大正三年十月、八八頁）

東京音樂學校恤兵音樂會評

高折　生

一合唱甲「雁の叫び」の原曲は歐米人は勿論一度向ふに遊んだ人なら誰知らぬ者なき最も名高き露國民謠、驚いた事にはテンポーもアクセントも全く日本製で原曲形なし(乙)ペツオルド夫人を前に於て獨逸征伐の歌は隨分手嚴かつた(二)巧拙は前問題としていくら東京でも最早リードオーガン獨奏でもあるまい。(三)彭城氏のチエルロは初舞臺だけに非常に眞面目であつたのは嬉しい、けれども危くて〳〵外れ通し、夫で始めから調子が合つていないなどは今後大に注意を要する。(四)森川孃のアルト獨唱はテンポも何も出鱈目(五)高折氏のピアノ獨奏音調總てについては申分なし、最少表情に注意したら非常に有望(六)長坂孃のソプラノ獨唱誠に結構(七)(八)(玖)はいづれも上出來なれど統一を缺いてをる(九)樋口氏に注意すべきことはバスのソロには音量は絶對的必要であるといふ事(十)弘田氏のピアノ、コンセルトは餘り上出來でない(十一)永井孃のソプラノは當日一等の出來、但しあの伴奏ではいかにもお氣毒樣(十二)あの諸大家が揃つてヴアイオリン齊奏とは餘り趣好がなさ過ぎる(十三)貫名氏のピアノ獨奏可もなく不可もなし(十四)薗部孃のソプラノの態度、表情圓熟の境に達して申分なし、たゞ熱情に缺乏せるは病後の爲か、否らざれば咽喉の過勞であらふ。最少咽喉を大切にして戴きたい。これで私も日本の音樂會も暫らく聞かれないサヨナラー

（『音樂界』第一五七号、大正三年十一月、六四頁）

恤兵音樂會評

去月十七日午後二時より上野音樂學校に於て恤兵音樂會が開催された、正午頃から早くも數多の紳士淑女が犇々と押しよせ定刻には立錐の餘地もない位であつた、書目は全部十五、一、雁の叫びも獨逸膺懲も無難。

二、

●眞篠氏のオルガン獨奏　は上出來であつた一年生の同氏が斯くも公開の席上でやつてのけたのは將來大に囑望すべきものがある。三、彭城氏のセロ獨奏　山田耕作氏の作曲に沒頭されし以來久しく耳にしなかつたセロの獨奏を聞いて轉た快感を禁ずることを得なかつた其演奏振りも大に冴えて居つた。四、

●森川孃のアルト獨唱　本曲はマイヤベーヤのプロフエツト中のフイデス抒情調で孃が婉轉玉をころばすが如き抑揚と豐富なる聲量とは歌の眞味を發揮するに毫も遺憾はなかつた。五、

●高折氏のピアノ獨奏　氏が從來各所の演奏會で現はした手腕を知つて居るものは今日の功を豫期して居つたあのシユーマンの難曲を餘り大きくもない手でよくも彈きこなしたものだ要するに數知れぬ豫習の苦心が氏をして倍々圓熟せしめたものである。六、

●長坂孃のソプラノの獨唱　日本人のソプラノは歐洲人とは違つて人知れぬ天然の苦心がある。にも係らず孃があの落ついた而して誠實な態度で華かに餘裕を殘して聽衆の耳をそれへ引付けた唱振りは感嘆の外はない。

九、

●樋口氏のバス獨唱　いつ聽いても感じのよいのは氏の獨唱である音量の豐富なそして音色の美しいのは確かに第一位の歌手であるあの小さな身からどうしてあんな聲が出たかと思はれる位である。十、

●弘田氏のピアノ獨奏　氏は既に定評ある名手である今日は特に晴の場處でもないと思つて聞いたせいか實に落ついたものだ而してあのむらのない美しい彈方は何んとなく自然と聽衆の目をつぶらして興奮させた。

十一、

●永井孃のソプラノ獨唱　甘い氣持のよい聲で何の苦もなく唱はれた處は敬服の外はない大に將來のある歌手である。十三、

●貫名氏のピアノ獨奏　ピアノは實に氏の性格に合つて居るとでも云ふのか氏が小身に肖ずピアノを思ふ存分に働らかせる如何なる大曲でも氏の前には消化されるのである今日の演奏振も寔に美事であつたシユーマンの大曲をかくまでに奏されたのは上野の先輩にも一寸あるまい。十四、

●薗部孃のソプラノ獨唱　孃はどことなく舞臺の人らしい程手腕が進んで居るやうな氣分がする特に今日の題目の選び方が丁度適當して居つたオフイリヤ狂亂の抒情調何んとも云へぬ出來榮であつた矢張白眉である。（終）

（『月刊樂譜』第三巻第十一号、大正三年十一月、二六～二七頁）

滑稽なる『獨逸膺懲の歌』

十月十七八日の兩日、音樂學校に於て、恤兵音樂演奏會が開催された。そのなかに、『獨逸膺懲の歌』といふ合唱があつた。假令恤兵音樂會といふ名義はどうあれ、獨逸音樂萬能の該音樂學校にして、かゝる『獨逸膺懲』を公然合唱するに到つては、其間、多少の矛盾を感じない譯には行かなかつた。然も、自分をして、豫期以上の噴飯を敢てせしめて了つたのは、この『獨逸膺懲の歌』の原曲は、人もあらうに、膺懲すべき對手國の作曲者ヨハン・シユルツであるといふ事實である。自分は、尚、過度の自制を以て、かゝる事實が惹起する皮肉感を抑へつけるにしても、更に、自分を笑はしめた一事が殘る。それは、原曲が、如何なる點に於て、『膺懲』を意味する憤懣、激情、進擊、打破の意味を有するやである。原曲は、『歳の終り』を歌へるものとして、その旋律は、かゝる標題に適はしき感情を表示してゐる、自分は、此點に於て、作歌者とその周圍との藝術的無識を感じること切である。而して、他方の點に於て、獨逸音樂萬能の該校が、徒らに時事政策上、附燒刃たる『獨逸膺懲の歌』を合唱せしむるその浮薄なる愛嬌をば、唾棄せざるを得ない。

思へ。獨人の作曲にして、『歳の終り』を歌へるものをば移し來り、これに附するに『獨逸膺懲の歌』を以てす。世に、しかく、滑稽なる、無識なる、附燒刃あらんや

自分は。獨逸敗戰の影響が、この古き官立音樂學校に如何に及ぶべきかを、人一倍の興味を以て見るつもりである。

（『帝國文學』第二十巻第十一号、大正三年十一月、一一九～一二〇頁）

大正三年十一月二十八日、二九日　学友会秋季演奏会

秋季大演奏會

滿堂妙樂に醉ふ

紅葉もゆる上野公園東京音樂學校に於て二十八日秋季大演奏會が開催されました。例の如く數多の紳士淑女ひし〳〵とつめかけ定刻午後一時半には會場滿員立錐の隙もない有樣、やがてうちつゞく

妙樂に蕩然　と醉はされるのでした。一、合唱「冬の野の黃昏」と「夕の禱」は樋口信平氏の指揮の下に無難にうたはれました。二、ピアノ獨奏、モザートのソナタ作品は室岡清枝孃によつて非常に精練されたテヒニツクをもつて見事に演奏されました、

孃の藝術は　たしかに將來があります。三、二重唱、普通の出來であるが、高音部が少しく調子が下り氣味と思はれる處が時々ありました。四、ビオロンチエロ、萩原正彦氏によつて感じ好く奏せられました。六、三重唱、オペラ「カルメン」中の三重唱で、渡邊、山下、森川の三孃が無難にやり通され。七、谷村なつ子孃のピアノ獨奏は淑やかに

感じのよい　出來榮でした。十一、ノクターン、搖落は弘田龍太郎氏病氣のため止めとなり聽衆を落膽させました。十三、十四無難に過ぎ、五時閉會（和子）

（『讀賣新聞』大正三年十一月二九日）

樂壇雜感

十一月廿九日に、音樂學校學友會主催の演奏會があつた。當日の曲目のなかで、シユーマンのピアノ曲で『幻想曲（フワンタジイスチユッケ）集作品十二』が、谷村ナツといふ人に演奏された。自分は、演奏については云爲すべき必要を見ないが、その原曲は、深く自分の心をば魅した。一口に、自分達は、シユウマンはロマンチシストだと言ふ。併しそうはいふものゝ、シユウマンは、實に近代的な憂愁があつてこれが彼の樂風をば極めて自分等に懷かしいものたらしめることを感じる。自分は、比較的有名であるにかゝはらず、初めて耳にすることができたこの幻想曲を、今、顚へる心で思ひ出すことができる。この曲のなかには、夜のなかに纏り騷ぐ烟霧のやうな悲哀がある。靜かな夜のなかに顚動してゐる葦の葉のやうなわななきがある。靜かにして、しかも奥深く啜り泣ける聲が、この幻想曲である。自分は、いつか讀

んだマシユウ・ド・ノアイユ夫人の『夜曲（ノクチュルヌ）』と題した詩のことを思ひだす。その詩は、シユウマンの悲しい夜の心をうたつたものであつた。その詩に歌つてあるやうな感じが、あの幻想の曲奏によつて自分にも湧いてきた。自分はあの日の演奏曲目のうちで、これを特に思ひ出すのは、演奏の巧拙以外の理由からであるが、なほ且演奏者の靜かに謹しやかな演奏振にも、自分の感謝を捧げて置きたく思ふ。

當日、川久保美須々女史は、佐野その女史と、グリーヒの『ソナータ、ヘ長調作品八』を演奏した。自分は、期待を稍々大きく持つてゐただけに、失望した。この演奏の印象は、かなり薄く且つ弛んだものであつたやうに思ふ。グリーヒが、かうした風に演奏せらるべきものとは、自分は信じない。グリーヒの音樂的精神（ムジークガイスト）は、かのウイリアム・ブレークの所謂『鋼鐵の針金の如く鋭く堅く』して、その生國のノールウエーを思はせる明晰にして然も苦澁、澄徹にして然も寒冷なところがあると思ふ。凍れる情熱の焔か、若しくは、雪の上に燦ける太陽の明輝を思はせる藝術である。

二女史の演奏振りは、全く、この豫期を裏切つてゐたやうに思ふ。兎も角、グリーヒに限らず、如何なる作曲者の製作についても、手法を忠實に學ぶ以上にその作者の精神（ガイスト）を摑まなければ、何にもならない。

（『帝國文學』第二十一巻第一号、大正四年一月、一三五頁）

大正四年二月十三日　学友会第十二回土曜演奏会

■二月十三日午後二時より學友會第十二回土曜演奏會を開催せり。曲目及び出演者は左の如し。

一、男聲合唱……會　員
歌劇『ファウスト』中の兵士の合唱
一、女聲二重唱……〔内田琴／廣田ちづる〕
甲、ユーバー アイン シュティユンドライン　イー、ラッセン
乙、さすらひ人の夜の歌　ルービンシュタイン
三、ピアーノ獨奏……鈴木采
甲、夜の曲、變イ長調　フィールド
乙、夜の曲、變ホ長調　フィールド
四、ギオロンチエルロ……犬井英夫
小司伴樂、イ短調、作品四十六　ヂエー、クレンゲル
五、ピアーノ獨奏……井上はる
光耀旋轉曲、作品六十二　エーバー
六、ヴイオリン……田中靜
小司伴樂、作品三十一、（第二樂章）　ジット
七、ソプラーノ獨唱……渡邊銈
ヴイオリン助奏　田中久
アーヱ　マリーア　バッハーグーノー
八、女聲合唱……會　員
樂劇『タンホイザー』中の若き巡禮の合唱　ワークナー
九、ヴイオリン獨奏……荒木得三
甲、サラバンド　ヘンデルーブルメスター
乙、ガヴット　メユールーブルメスター
十、ピアーノ獨奏……足立ふさ
ソナータ、作品二　クレメンティ
十一、バス獨唱……柴田知常
甲、歌劇『フィーガロの結婚』中のフィガロの抒情調　モツァールト

乙、歌劇『ファウスト』中のメフィストフェレスのセレネード　グーノー
十二、ヴイオリン……井川富子
司伴樂、第八番、（第一樂章）　ロード
十三、ソプラーノ獨唱……長坂好子
歌劇『捷利者』[1]中のシメーヌの宣叙調と抒情調　マッスネー
十四、合唱……會員
『郷愁』（ゾー　ワイト）　イー、エス、エンゲルスベルヒ
『君ケ代』　林廣守

（『音樂』學友會、第六巻第三号、大正四年三月、六二～六三頁）
（1）『捷利者』は『ル＝シッド』。

大正四年三月二十五日　卒業式

大正四年三月廿五日（木曜日）午後二時
卒業證書授與式順序

東京音樂學校

卒業證書授與式
一、報告
一、卒業證書授與
一、校長告辭
一、文部大臣祝辭
一、卒業生總代謝辭

演奏曲目

第一部

一、ヴアイオリン獨奏……器樂部卒業生　齋藤リヒアルド
と長調コンチエルト（第二十三番）……ヴイオッティ作曲
二、三部聯唱……聲樂部卒業生　山下テイ子　渡邊達鉦
歌劇「カルメン」中の三部聯唱曲……ビゼー作曲
三、オルガン獨奏……甲種師範科卒業生　白坂ミイ
ろ短調ソナタ（第一番作品三十六）……カルクーエレーアト作曲
四、ヴオロンチエッロ獨奏…器樂部卒業生　萩原正彦
ほ短調コンチエルト中のセレナタ（作品三十四）……リンドナー作曲
五、ヴアイオリン及ピアノ……甲種師範科卒業生　關根益三　器樂部卒業生　高折宮次
へ長調ソナタ（第五番作品二十四）……ベートーヴエン作曲
六、ピアノ獨奏……器樂部卒業生　菅原菅
アンプロンプテュ（第一番作品九十）……シユーベアト作曲

第二部

七、合唱……
イ、相聞の曲（ヴアイオリン獨奏附き）……ブルッフ作曲　吉田一昌作歌
ヴアイオリン……研究生　田中ひさ
ロ、子守歌……クリーゼ撰修
八、ヴアイオリン獨奏……器樂部卒業生　井川富子

い 短調コンチェルト（第七番作品九）…… ロ ー デ 作曲

九、低音獨唱 ……研究科卒業生 樋 口 信 平

ペルトの愛らしき娘…… ビ ゼ ー 作曲

十、ピアノ獨奏 ……器樂部卒業生 山 口 節

ファンタジー（作品二十八）…… メンデルソーン 作曲

十一、最高音獨唱 ……研究科卒業生 薗 部 ふ さ

夜鶯の歌…… マ ッ セ 作曲

十二、ピアノ獨奏 ……器樂部卒業生 高 折 宮 次

カプリッチョ、ブリルアント（作品二十二）…… メンデルソーン 作曲

十三、合 唱……

イ、歌劇「ローエングリン」婚儀行列の歌 ……: ワ ー グ ナ ー 作曲

Graduation Exercises
of the
TOKYO ACADEMY OF MUSIC
UYENO PARK
Thursday, March 25th, Taisho 4.
2 P.M.

PROGRAM

I. Report.
II. Presentation of Diplomas.
III. Address to the Graduating Class by the Director.
IV. Address by His Excellency Hogakuhakushi Ichiki, Minister of State for Education.
V. Response by the Representative of the Graduating Class.

PART I.

1. Concerto for Violin (No. 23, G Major.) .....Viotti.
   Mr. Saito.
2. Terzetto from the Opera „Carmen." .....Bizet.
   Miss Yamashita, Miss Morikawa and
   Miss Watanabe.
3. Sonata for Harmonium (No. 1, B Minor,
   Op. 36.) .....Karg-Elert.
   Miss Shirasaka.
4. Serenata from the Concerto (E Minor,
   Op. 34.) .....Lindner.
   Mr. Hagiwara.
5. Sonata for Violin and Piano (No. 5,
   F Major, Op. 24.) .....Beethoven.
   Mr. Sekine and Mr. Takaori.
6. Impromptu for Piano (No. 1, Op. 90.) .....Schubert.
   Miss Sugawara.

PART II.

7. Choruses:
   a) Siechentrost (with Violin obligate.) ...Bruch.
   Violin: Miss Tanaka.
   b) Schlaflied (Folksong.) .....arranged by Kriese.
8. Concerto for Violin (No. 7, A Minor,
   Op. 9.).....Rode.
   Miss Ikawa.
9. La Jolie de Perth .....Bizet.
   Mr. Higuchi.

10. Fantasia for Piano (Op. 28.) .....Mendelssohn.
Miss Yamaguchi.

11. Air du Rossignol .....Massé.
Miss Sonobe.

12. Capriccio brillant for Piano (Op. 22.) .....Mendelssohn.
Mr. Takaori.

13. Choruses:
a) Brautlied.
b) Feierlicher Zug zum Münster.
from the Opern„Lohengrin.“.....Wagner.

大正四年五月二十六日　邦楽会第一回演奏会

大正四年五月二十六日　午後六時開會　於有樂座

邦樂會第一回演奏會曲目

邦樂會

(一) 河東節
助六所縁江戸櫻　三味線 上調子　山彦　山彦　山彦　閑室　山彦　秀八　千重　やま子　代重　翁子

(二) 富本節
徒髪戀曲者（松風）　三味線 上調子　富本　名見　名見　名見　崎得　崎得　崎得　多壽　壽々　豊賀

(三) 長唄
姿の鏡關寺小町（關寺）　長唄　三味線　小鼓　大鼓　芳村　今藤　六合　望月　孝次　長十　新三　太佐　郎郎　郎吉

(四) 常磐津
乘合船惠方萬歳　三味線 上調子 三味線　常磐津　常磐津　常磐津　常磐津　常磐津　文字太夫　志妻太夫　鳴渡太夫　文字兵衛　菊三郎　百八

（二十分間休憩）

(五) 新内節
彌次郎兵衛　喜太八　膝栗毛（市子の段）　三味線　富士　吾妻　松路　加宮　賀古　太太　夫夫

(六) 一中節
高砂（松の段）　シテ　ワキ　三味線 上調子　菅野　菅野　都一　野　序利　吟　遊三　中三

(七) 清元
花雲助合肩（雲助）　三味線 上調子　清元　清元　清元　清元　延壽　桂壽　久太　喜太　夫夫　郎夫　吉郎

(八) 長唄
隈取安宅松　長唄　三味線 上調子　吉住　吉住　杵屋　杵屋　小三　小三　小四　六四　和三　長三　郎郎　郎藏　郎郎

（御一名）特等金一圓五十錢・一等金一圓二十錢・二等金八十錢・三等金三十錢

●邦樂會の演奏會

東京音樂學校の後援で、今度新たに設けられた邦樂會の第一回演奏會は、廿六日午後六時から、有樂座に於て開催されたが、何がさて現代邦樂の大家しかも家元揃ひの會合であるから、勿論何れ一つでもソツのあるのは無い筈だが、夫でも其日の出來不出來といふ事はある。山彦やま子、同千代、同八重。三味線閑室秀翁、山彦八重子の河東節「助六所縁江戸櫻」は、出來は申分無く「堤八町風誘ふめあての柳花の雪」の邊芝居を見てる

様な氣がしたけれど秀翁が醉つてでも居るが如き三味線の彈方は醜かつた。富本豊、名見崎得壽々々、三味線同得壽齋、同多賀の富本節「徒髪戀曲者」は、豊の聲が震へる癖があるのと、得壽々の聲が風邪でもひいてゐたか一向立たなかつたので、上成績とは云へなかつた。それに上調子の絲が切れたのを、代三味線の用意もなく、舞臺で絲を直す抔は不覺の至りである。富士松加賀太夫、三味線吾妻路宮古太夫の新內節「彌次喜太膝栗毛(市子の段)」の掛合はお得意物の事だから、兩人呼吸がピツタリと合つて面白い事限りなかつた。常磐津文字太夫、同志妻太夫、同鳴戸太夫。三味線同菊三郎、同八百八の常磐津「乘合船惠方萬歲」は病中の事とて文字太夫の聲衰へたりと雖も、流石にウマイ處はあつた。但し全体から云へば、油に乘つて居なかつた。芳村孝次郎、三味線今藤長十郎。小鼓六合新三郎。大鼓望月太佐吉の長唄「姿の鏡關寺小町」は餘り節を作り過ぎる傾きはあるけれど、元來が孝次郎の畑の物だから申し分無い出來だつた。菅野序遊、同利三。三味線都一中、菅野吟三の一中節「高砂(松の段)」も結構。清元延壽太夫、同桂壽郎、同喜久太夫。三味線同梅吉、同吉太郎の清元「花雲助合肩」は延壽の「まゝよなアエ、長持や輕い、ヤツトコ道心佛の性かへ何のこつたへ」の邊から、まぜこぜ節の處々の美音輕妙には、滿場狂する程の喝采であつた。吉住小三郎、同小三藏、同小四郎。三味線杵屋六四郎、同和三郎、同長三郎の長唄「限取安宅松」は小三郎の聲いつもながら尊いと思つた。(寶水)

(『讀賣新聞』大正四年五月二十九日)

□邦樂會　東京音樂學校の後援の下に長唄清元河東一中富本常磐津新內各家元が發企となり新に組織された邦樂會第一回演奏會は五月廿六日の晩古珍書複刻家川上邦世氏主催の下に有樂座に開かれ第一河東節、第二富本節、第三長唄、第四常磐津、第五新內節、第六一中節、第七清元、第八長唄にて出演者は當代各派の代表者を網羅し非常なる盛況を呈したり。

(『音樂界』第一六五号、大正四年七月、五九～六〇頁)

大正四年五月二十九日、三十日　第三十回定期演奏会

大正四年五月三十日(日曜日)午後二時開會

音樂演奏曲目

東京音樂學校

一、合唱、聯唱及管絃樂

歌劇「ローエングリン」の第三幕　ワグナー作曲

イ、前奏

ロ、第一場　婚儀曲の合唱

ハ、第二場　エルザとローエングリンの聯唱

〔ハンカ、ペッツオルド之〕〔澤崎定〕

二、ピアノ及管絃樂　ピアノ　高折宮次

ろ短調カプリッチオ、ブリルアンテ(作品二十二)

メンデルソーン作曲

三、獨唱(管絃樂伴奏)　薗部ふさ

歌劇「フイガロの結婚式」中のアリア　モツアルト作曲

四、ヴアイオリン演奏　多久寅

と短調コンサート(作品二十六)　ブルッフ作曲

アレグロ、モデラート(前奏)

アダーヂオ

五、ピアノ獨奏　パウル、シヨルツ

ろ短調ソナタ(新作)　ウエルクマイスター作曲

アレグロ

アンダンテ、ソステヌート

プレスト(スケールツオ)

アレグロ、モデラート（フイナーレ）

六、二重合唱及管絃樂

歌劇「ローエングリン」中の婚儀行列の歌　ワグナー作曲

七、管絃樂

歌劇「リエンツイ」の序曲　ワグナー作曲

指揮者　グスターフ、クローン

ORCHESTRAL
&
CHORAL
CONCERT
Sunday, May 30th, 1915.
at 2 p.m.
Tokyo Academy of Music,
UYENO PARK

Program

Conductor: Mr. Kron.

1. Third Act from "Lohengrin" ..... *Wagner.*
   - *a.* Prelude.
   - *b.* First Scene—Bridal Chorus.
   - *c.* Second Scene—Duet: Elsa and Lohengrin.

   Mrs. Petzold and Mr. Sawasaki.
2. Capriccio brillante (Op. 22, B minor) for Pianoforte and Orchestra .....Mendelssohn.

   Mr. Takaori.
3. Aria with Orchestra from "Figaros Hochzeit" ..... *Mozart.*

   Miss Sonobe.
4. Concerto (Op. 26, G minor) for Violin .....*Bruch.*

   Prelude—Allegro moderato.
   Adagio.

   Mr. Ohno.
5. Sonata (B minor) for Pianoforte .....*Werkmeister.*

   (for the 1st Time)
   Allegro.
   Andante sostenuto.
   Scherzo—Presto.
   Finale—Allegro moderato.

   Mr. Scholz.
6. Festive Procession to the Monastery from "Lohengrin" for Double Chorus and Orchestra .....*Wagner.*
7. Overture to "Rienzi" .....*Wagner.*

音樂演奏曲目梗概　第十九

一　管絃樂、合唱及び聯唱

ワグネル作

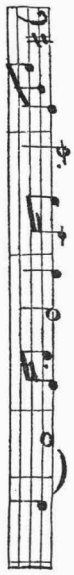
『ローエングリン』第三幕

ワグネル (Richard Wagner 1813—1883) の歌劇に於ける新樣式は一時に完成せられたるにあらず。初作『リエンツイ』は尙ほ當時流行せるフランス大歌劇の作風を脫するに至らず。次の『飛行和蘭人』より『タンホイゼル』を經て『ローエングリン』に至る第二創作期に於て漸く新機軸を示し、最後に『トリスタンとイゾルデ』以下の諸作に於て其の理想を完成せり。されば此處に奏する歌劇『ローエングリン』は過渡期中の最も圓熟せ

る作品といふべく、彼が獨得なる導旋律の使用の如きも此の作に於て初めて著しくなれり。導旋律(Leitmotiv)とは劇の全篇を通じて一定の人物動作等に附隨する樂句の謂にして、例へば後に示す如くエルザとローエングリンとの聯唱に於ても屢々伴奏に此の種の旋律を應用せり。

本歌劇は一八四七年に成り、五〇年にリストによりて初めてワイマールに演ぜられたり。其の筋は十三世紀に於ける獨逸の一詩人が作れる叙事詩に基くものにして、古より獨逸に存する『鵠の騎士』(der Schwanenritter)の傳說とケルト民族の『聖盃』(der Heilige Gral)の傳說との結合より成れり。『聖盃』守護の騎士なるパルシーファルの子ローエングリンはアーサー王の命により、鵠に曳かせたる小舟に乘りて、ブラバント侯の息女エルザの難を救はんが爲めに來り、獨逸國王ハインリッヒの面前にて、其の敵テルラムンドを壓伏し、エルザと結婚せしが、其の後エルザは堅き禁制を破りてローエングリンの素性を問糺したるより、終に彼は名乘をなしたる後、再び鵠に乘りて聖山に歸れりといふ。ワグネルはこの物語に自己の創意を加へ、其の中に純潔無垢なる愛情の俗界に容れられざる意を寓せりといふ。

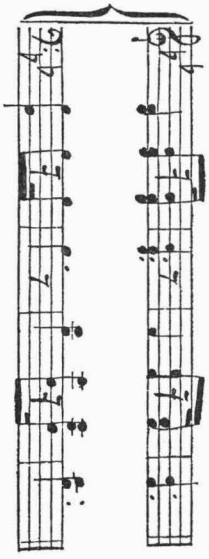
第三幕はエルザ、ローエングリンの結婚式の濟みたる直ぐ後の事件を表はすものにして、其の有名なる前奏曲(Vorspiel)は祝祭の歡聲を描けり。活氣ある次の樂想と



可憐なる次の樂句と

相次で人耳を惹く。

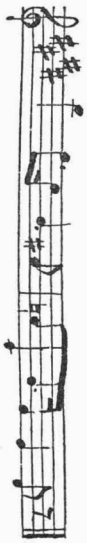
これに續きて起る優美なる合唱は兩人を其の新居に送り來る群衆の聲にして、最も廣く世人に知らる。



Treulich geführt ziehet dahin,
Wo euch der Segen der Liebe bewahr'!
Siegreicher Muth, Minnegewinn

Eint euch in Treue zum seligsten Paar. (u. s. w.)

此の歌聲のかすかに消え去るや、殘る二人は美しき對話に移り、互に其の幸福なる思を語る。先づローエングリンの語る時伴奏(本演奏にはピアノを用ふ)に聞ゆる次の旋律は



愛情の旋律にして其の次のエルザの答も此の旋律を稍や變形したるものに過ぎず。

相語る間にエルザは親愛なる夫を呼ぶべき名のなきをかこちて、私かに名をきかせよといふ。次の美しき一節はローエングリンの答にして

Athmest du nicht mit mir die süssen Düfte?
O, wie so hold berauschen sie den Sinn!
Geheimnissvol sie nahen durch die Lüfte,
Fraglos geb' ihrem Zauber ich mich hin.— (u. s. w.)

窓より通ふ芳香に譬へて、名を糺す用なきを敎ふ。されどエルザは尙ほ願

ひを棄てず。而も伴奏に禁止の導旋律（Verbotsmotiv）の高く響くは心の奥に良心の尚ほ醒めたるを示せり

ローエングリンは次の旋律にて今一度エルザの心を獲んと努むれども

其の詞は却て疑心を養ふ基となるのみ。これに次ぐエルザの詞（„Hilf Gott, was muss ich hören?“）に於て伴奏に響く旋律は『誘惑の導旋律』（Versuchungsmotiv）にして既に第二幕に出でたるものなり。今この旋律の聞ゆるは前に奸婦オルトルードの與へたる疑惑が此の時エルザの心にむらゝと起り來れるを示すものにして、ワグネルは此の如き手段によりて人物の言語に表はれざる心情を描くことを得意とせり。

かくてエルザは騎士の再三止むるをも顧みず、終に其の素性と由來とを問ふ。此の瞬間テルラムンド拔劍して闖入し騎士を殺さんとして却て其の刃に倒る。曲の最後はローエングリンが其の幸福の空しく終れるを嘆く詞にて結ぶ。

二　ピアノ及び管絃樂

メンデルソーン作

『カプリッチョ、ブリラント』

本曲（作品一一）はメンデルソーン（F. Mendelssohn 1809—1847）が一八三二年ロンドン滯在中の作。全體としてウェーベルの感化の著しきことは評家の一般に認むる所なり。序開きの緩徐調（アンダンテ）（ロ短調四分四拍子）は情調も技巧も共にウェーベルのヘ短調コンツェルトに酷似せるのみならず、快速調（allegro con fuoco）の主想もウェーベルの俤を存す。されど勿論其の間にメンデルソーンの個性を見ざるにあらず。殊に曲の中頃に現るゝ進行曲風の第二主想に於て然りとす。こは長ニ調の快活優美なる進行にして善く前の短調の主想と對照をなせり。

三　高音獨唱（管絃樂伴奏）

モツアルト作

歌劇『フィガーロの婚禮』中の レシタティーブ及びアリア

此の歌劇（初興行一七八六年ヴィーン市）は滑稽歌劇の模範と呼ばるゝモツァルト（Mozart 1756—1791）傑作中の一なり。脚本はボーマルシェの喜劇に基き、ダポンテの撰ぶ所にして、ロシニの名作『シヴィリアの理髪師』の續篇に當れり。其の筋は伯爵アルマヴィーヴァといふもの理髪師フィガーロの知惠を借りて令孃ロジーナを夫人として迎へたるが（以上ロシニ）其の後夫人の侍女にてフィガーロと婚約あるスザンナを寵愛する様子の見ゆるより、夫人は其の心を飜へしめんと苦心の末終に一策を按じ、スザンナをして一夕庭園に伯爵と會合の約をなさしめ、實は自らスザンナと服裝を交換して相共に庭園に赴き、伯爵をして前非を後悔せしむといふなり。此の間種々の細かき事件に伴ひて滑稽百出す。モツァルトの音樂は其の種々なる感情を巧みに又た美しく描出せり。玆に演ずるは最後の庭園の場にて夫人と侍女とが夕暮に伯爵を待ち受くる時スザンナの歌ふ歌調にして全篇中の秀逸に數へらる。（伴奏管樂器の音色もその美趣を添ふるに與て力あり）

Susannens Recitativ und Arie.

Recitativ (Allegro vivace assai)

Endlich naht sich die Stunde, wo ich dich, o Geliebter! bald ganz besitzen werde! Ängstliche Sorgen! entfliehet, weicht auf immer, störet nicht mehr die Freude meines Herzens! Ha! um mich her scheint alles mir so heiter: Hesperus blickt so freundlich so freundlich auf meine Liebe! Komm doch, mein Trauter! Stille der Nacht beschützt uns!

Arie (Andante)

O säume länger nicht, geliebte Seele! Sehnsuchtvoll harret deiner hier die Freundin! Noch leuchtet nicht des Mondes Silberfackel, Ruh und Friede herrschen auf den Fluren. Des Westwinds Säuseln

und des Baches Rieseln stimme jede Nerve zur Entzückung, die Blumen duften auf den bunten Wiesen, alles lockt uns zu Liebe, Freud' und Wonne. Komm doch, mein Trauter! lass länger mich nicht harren. Komm, o Trauter! dass ich mit Rosen kränze dein Haupt, mit Rosen kränze dein Haupt, dass ich dich kränze mit Rosen.

四　ヴァイオリン及び管絃楽

ブルッフ作

短ト調ヴァイオリン、コンサート

ブルッフ(Max Bruch 1838—)は獨逸ケルンの人、幼より作曲を好み、十四歳にして已にシンフォニーを公表せりといふ。一八九一年より伯林王立音樂院の作曲部長となりしが最近は職を退きて伯林附近フリーデナウに餘生を送れり。彼の作中、最も樂界に珍重せらるゝは管絃樂を附したる合唱曲なること疑なきも、其の他、器樂の方面にも傑作と見るべきもの少からず。殊に玆に奏するヴァイオリンコンサート作品二六は有ゆるヴァイオリン家に賞美せらる。

五　ピアノ獨奏

ウェルクマイステル作

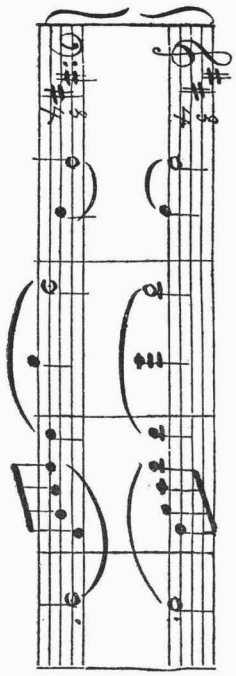
ロ短調ソナータ

本校教師ウェルクマイステル(H. Werkmeister)の新作なり。全篇は四章に分れ、第一と第四とを最も重要とす。

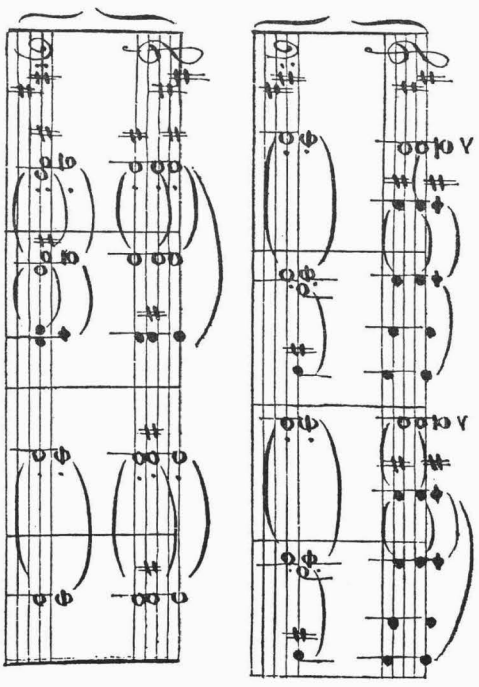
第一章の快速調(アレグロ)は次の兩面的主想を以て始る

Das doppelseitige Thema des I. Satzes (Allegro)

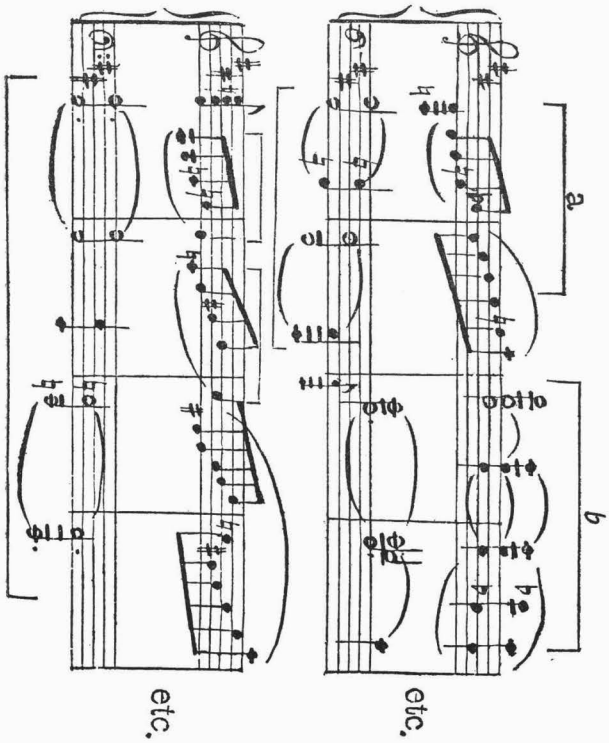
a.



b.

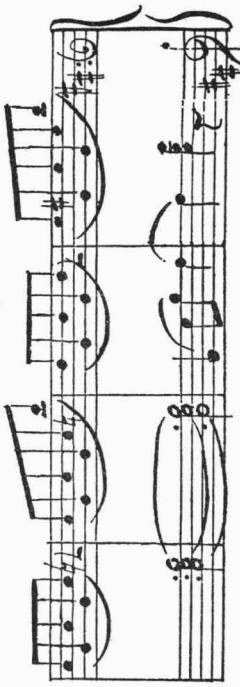


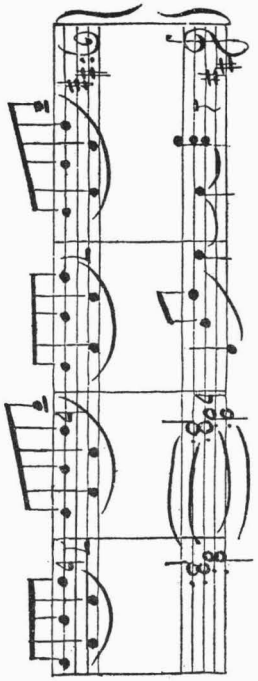
この主想は第一章全部を通じて緯となり、或は短縮延長半切せられ、或は重複して對位法的に取扱はる。(殊に『開展』部に於て然りとす)



これより暫く短かき短ロ調の副樂想に移り、其の再び第一主想に導かれたる後、對照として流暢なるニ長調第二主想起る

Das 2. Thema



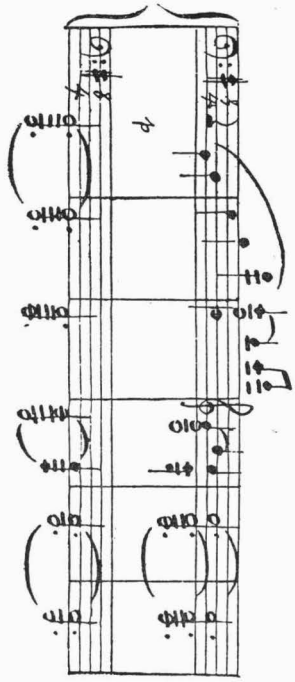


etc.

開展部は第一主想及び副樂想を凡ての樂句に於て細工し、四十小節に亘る嬰ヘ音上のオルガン、ポイントを以て結ぶ。これより『反覆』となり、長ロ調の第二主想及び最後に短かき附節（コーダ）現る。

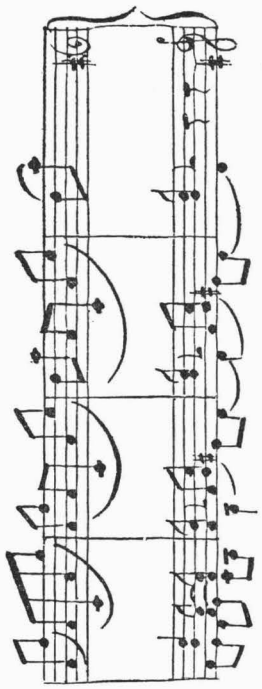
第二章は第一章の對照として全く緩徐單純なる特性を有す。主想はト長調なり

Das Hauptthema des 2. Satzes (Andante sostenuto)



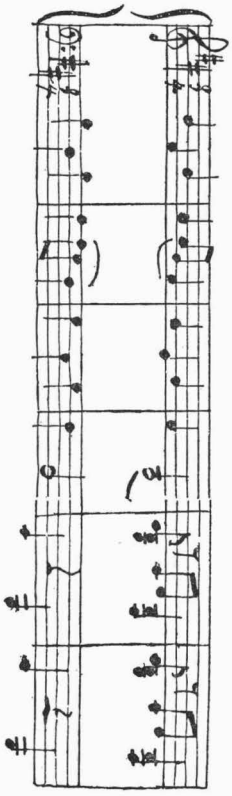
これに續きてニ調の副樂想現はるゝ後、ホ短調の稍長き第二の主想起る

Das 2. Thema



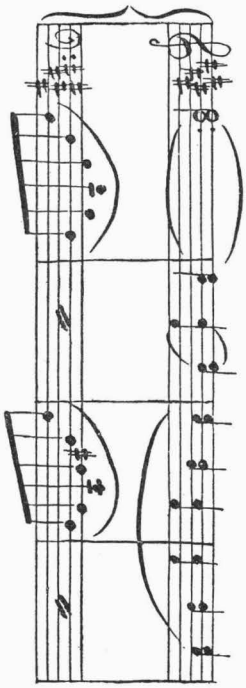
第三章は極めて急速なるロ短調のスケルツォにして旋律拍子共に極めて活潑愉快に疾過す。第一の主想は次の如し。

Das 1. Thema des Scherzos (Presto)



トリオ（中部進行）は少しく緩かにして民謠風に作られたり。

Das Thema des Trios

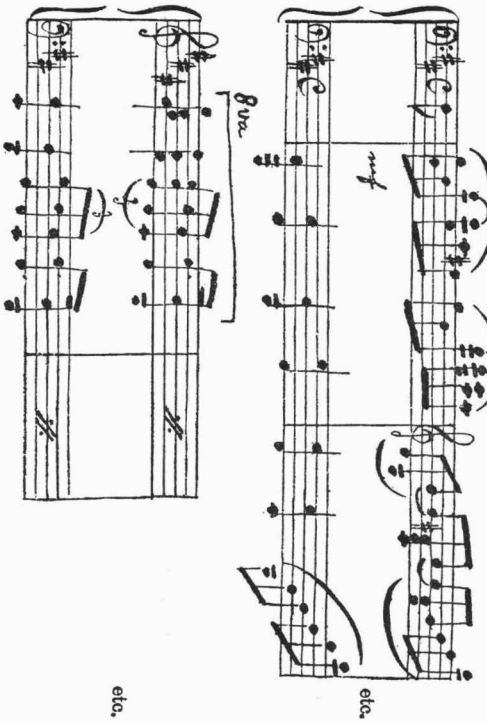


トリオの後反覆ありて短かき附節に終る。

第四章の中庸なる快速調は激烈躁暴なる性質を有し奏者に多大の技術及び力量を要求す。

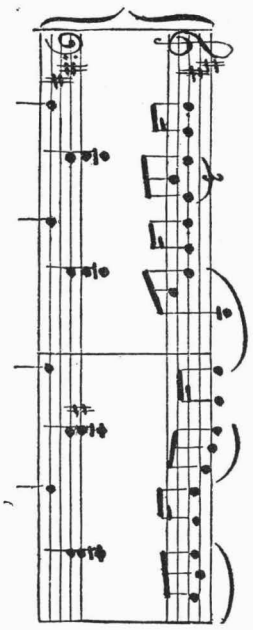
第一の主想は更に二部に分れ一部は上行し、一部は下行す。

Das 1. Thema des 4. Satzes (Allegro Moderato)



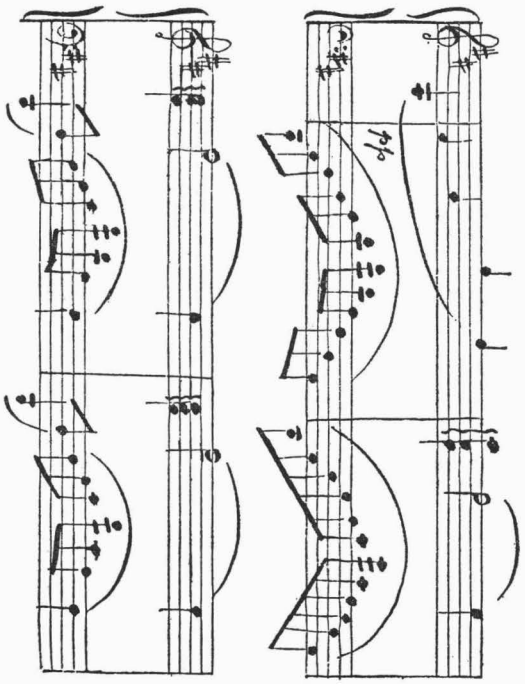
此の終りの小節より次の副樂想生ず

Das Seitenthema

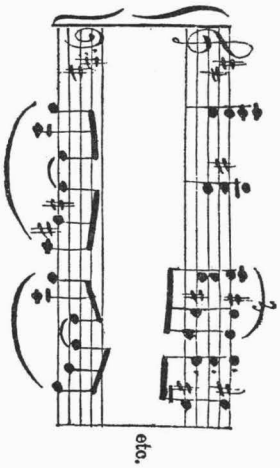


第一主想が幾度か轉調して反覆せらるゝ後長ニ調の歌調的主想起る

Das Gesangthema



此の第二主想が漸次に昂揚する後直ちに開展部に入る。此の部は重に第一主想を引延し若くは對位法的に用ひたり。例へば次の如し



反覆の後直ちにロ長調の第二主想に進み、短かき激烈なる最終附節を以て全曲を結ぶ。（作者自身の説明による）

六　二重合唱及び管絃樂

ワグネル作

『ローエングリン』中の婚儀行列の歌

この合唱は『ローエングリン』第二幕中の一部にして、エルザを寺院婚儀の式場に送り行く行列の歌なり。（行列は四部の合唱隊二組よりなる）

Doppelchor aus „Lohengrin“ (Akt II.)

Gesegnet soll sie schreiten,
Die lang in Demuth litt;
Gott möge sie geleiten,
Gott hüte ihren Schritt!
Sie naht, die Engelgleiche,
Von keuscher Glut entbrannt!
Heil dir, Elsa von Brabant!
Heil dir, o Tugendreiche!
Heil, Elsa von Brabant! (wiederholt)

七　管絃樂

『リエンツィ』の序曲

ワグネル作

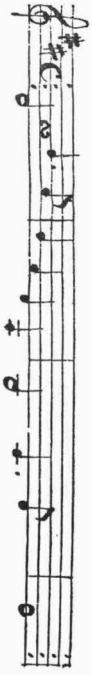
歌劇『リエンツィ』はワグネルが一八四〇年パリ滞在中に完成せしものにて、四二年ドレスデンに演ぜらるゝや直ちに非常の喝采を博し、彼の名聲頓に高くなれり。是れ本歌劇は彼の其後の作と異りて當時流行の作法に從ひたればなり。後年ワグネルは此作を『若年の罪過』と稱して寧ろ輕視し居たるが、創作當時の立場より見れば彼の努力は十分に成功せるものといふべし。且つ此の歌劇（殊に第一及び第五幕）が、今日尚ほ其の聲價を失はざるより觀れば決して尋常の作にあらざるを知るに足るべし。

羅馬の奇傑リエンツィ（Rienzi 1313—1354）が横暴なる貴族を倒して、自ら保民官（トリビューン）となり、暫く權勢を擅にしたる後、一般の人望を失ひて悲慘なる最後を遂ぐるに至る歴史は、文豪リットン卿（Lord Lytton）の筆にもつゞられて世人の善く知る所なり。ワグネルは一八三七年の夏、ドレスデンに於て此の小説を讀み、これを歌劇の題材に撰ばんと決せるなり。

此に奏する序曲は當時普通の作法に倣ひ、先づ緩徐なる序開きを以て起り、次で快速なる部分に進めり。其の骨子として歌劇中の樂想を撰べる一事も亦た先例に乏しからず。唯だ快速部に出づべき主想を一先づ緩徐部に表して、兩者の統一を密ならしむる作法に至ては寧ろ異數としてこれを新趣向といふも不可なからん。

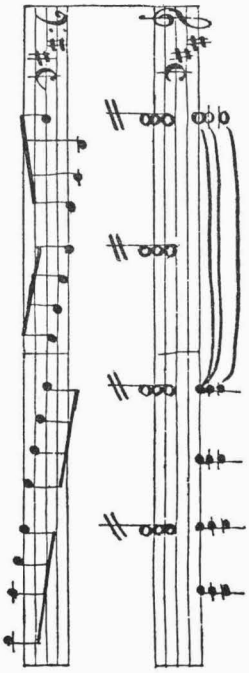
緩徐部に二度聞ゆる次の樂想は第五幕の初めに歌はるゝリエンツィの祈禱の調にして甚だ有名なるものなり。（此の調は後の快活部に於ては第二の主想として二倍以上の速度にて現はる）

Das Thema von Rienzis Gebet



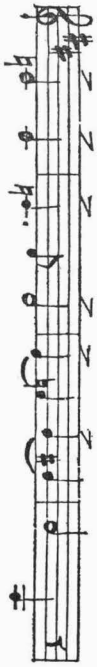
これに次ぐ經過の部分に於ては次の樂句が重要の働をなせり。

快速部の主想は第一幕の終なる國民の合唱に基くものにして、



此の聲はやがてリエンツィが羅馬の群衆を戰闘に導く讃美歌の調（第三幕）に高まる。

Das Thema der Schlachthymne



續いて前のリエンツィの祈禱の調第二の主想として現はるゝ後次の樂想に移る

Das Thema des Jubelchors des Volkes aus dem 2. Akt.

これは第二幕の終に羅馬人がリエンツィを救濟者として稱揚する合唱の調なり。

以下は所謂『開展』の部分と『反覆』とにして別に新しき樂想を示さず。最後に急迫せる獨立の附節を以て全曲は凱歌の如くに局を結ぶ

〔批評および関連記事〕

上野の東京音樂學校の演奏曲目は何んなものだか御紹介して見やう。

〔中略〕

尙、その時の指揮者グスターフ・クローンの提琴の彈き振りは前任のアウグスト・ユンケルの派手な奏法に較べて少し地味だつたが其の技は何ちらが上とも甲乙はつけ兼た。（『音樂新聞』第二五四号、昭和十四年十月上旬）

大正四年六月四日～九日　学友会春季演奏旅行

■六月四日より九日に亘り、若松、新潟、高田、上田、甲府に於て演奏したる曲目は處によりて大同小異なれども大體左の如し。

學友會春季演奏旅行演奏曲目

第一部

一、絃樂合奏　モーツァルト
　小夜樂
二、ピアーノ獨奏　湯前純親
　アンプロムティユ（作品九十、第四番）　シューバート
三、次中音部獨唱　水野康孝
　晝の夢　高安月郊歌　梁田貞曲
四、ヴイオリン獨奏　ヴイオリン助奏　多忠亮
　若き日の思ひ出　荒木得三
五、合唱　杉山長谷夫
　甲、忠臣　ビーデルマン編
　乙、雁の叫び　ロシア民謠　旗野十一郎歌
六、絃樂合奏　ヘンデル
　大司伴樂中より
番外、齊唱、尋常小學唱歌三曲

第二部

七、ギオロンチェルロ獨奏　犬井英夫
　歌劇『ロザルバ』の間奏曲　ピッチ
八、合唱　シューバート曲
　甲、若松懷古　吉丸一昌歌
　乙、鐵道開通の歌　マルシュネル曲　吉丸一昌歌
九、ヴイオリン獨奏　末吉雄二
　コール　ニドライ　マックス ブルッフ
十、低音獨唱　金健二
　甲、夏野　ゼーバー曲　吉丸一昌歌

乙、新作唱歌二曲　　吉丸一昌編

十一、絃樂合奏
　戴冠式行進曲　　マイヤーベーア

十二、合　唱（絃樂伴奏）
　君が代　　林　廣守

場所により左の諸氏の演奏ありたり。

ヴイオリン、清水勝藏、北原季男、獨唱、佐藤豐吾、柴田知常、其他番外として、上田町に於ては、近藤義次氏の獨唱、高田市に於ては小林禮氏のピアーノ獨奏ありたり。

（『音樂』學友會、第六巻第七号、大正四年七月、七一～七二頁）

信越の旅

K．F．生

第一日（六月四日）

辨慶の七つ道具よろしくの體で夥しく仰々しい身構へをした者、手籠一つで散歩にでも行くやうな氣でやつて來てゐる者、扮裝（いでたち）はまち〳〵だ。壯快な樂旅の幸先を祝福しながら充滿した元氣を顏に溢れさして集つて來る總勢三十一人。朝の七時といふ頃上野ステーションを發つ。

朝の空氣に芳烈な新綠の香を漂はして涯もなく續いてゐる武藏平野を北へ〳〵と押進んでゆくうちに、白河や那須野もすぎた。山藤、躑躅、蓮華など春夏二季の花が若葉の間を點綴してゐるのは暖い潮のめぐる南國に育つた私には誠に物珍しく思はれた。

郡山から西に折れて漸く山深く分け入つて行く。やゝあつて眼前に展開するのは磐梯山、往年の大破裂の狂噴した威力は想像もつかない程久遠の沈默を守つて穩やかに立つてゐる。頂にはまばらに雪が殘つてゐるのが美しい。猪苗湖の水面は午後の日光に銀色を輝かしながら萬古の靜寂を湛へてゐる。私達は湖畔に沿ふて磐梯山の裾野を迂回しつゝ走りつづけて居るのだ。

このあたりの驛でドヤ〳〵乘り込んで來た小學校の子供、草鞋脚袢、中には例の北國特有のモンペを穿いたのもゐる。

『若松は人口いくら』誰やらが穿をかけると『ずんこうすまん』と手もなく陷（はま）り込んだので大笑ひ。引率の先生はニコ〳〵してござつた。

若松についたのが午後の五時過ぎ。會津高等女學校の教頭の先生と阿部操氏の出迎へを受けて下車する。さびれた北國の町の沈滯したムードは夏ながらうら哀しく胸をそそつた。街路を東にぬけて半里許りゆくと飯盛山の古跡がある。案內者のズー〳〵辨で白虎隊討死の說明を聞き、やがて野道を辿つて東山溫泉への本道へ出て淙々たる溪流に沿ふて登ると幽邃な溫泉地、これが東北の仙境東山である。流れに臨んだ二八屋といふ大きな旅館へ着いてまづ溫泉へ浸つて旅の疲れを洗ひ流した後、階上の欄干にもたれて、凉しい夕暮の風に吹かれる氣持のよさ。谿へ蔽ひかゝつた樣な峰の青葉は綠鮮やかに重なり合つて露が滴りさう。

『まことによくこそ我は來つれ、胡ぞ來ることの甚だ遲かりし』紅葉の金色夜叉を思ひ出す樣だ。

しかし豫て聞いてゐた通り稍や淫靡な土地柄で、粹な避暑客が田舍大盡をきめ込むにふさはしいが、生徒團體などが來るにはあまり粹に過ぎた場所だと思つた。そして斯んな山間の小邑にあでやかに粧（つく）つた女がざわついてゐるのが一種の奇蹟のやうに感じられるのであつた。しかし私は彼等が唄ふ柔かな肉聲と絲の音締めを聞いて暗い哀愁を味はずには居られなかつた。ゼニスの水鄕の柳隱れにささ啼く小さいナイチンゲールの聲に涙うかべてさまよひ行く旅人のそれの如く、北の女の野趣な歌と歡樂のざわめきを洩れ聞いて幹彥の所謂『生活を知らぬ無智の美點と、それに對する憐愍の念をしみ〴〵覺え』ずには居られなかつた。一間からお客らしい男の「壺坂」が女の絲と縺れ合つてひゞいて來た。谷川の水は咽んで夜もすがら河鹿の聲が遣瀨ない物悲しさを旅人の枕に傳へる。

＊　＊　＊　＊　＊

東山での珍談一席。

一行のためにわざ〳〵こゝまで來て何かと肝煎りをして呉れて居られた阿部孃と廊下で出くわした一行の或者（今日停車場で一寸見たのが初めてなのでよく顏は知らなかつたのださうな）

女中と間違へて『オイ姐さん、君は此部屋の係りかい』『ハ……？』オヤと氣付いてスタコラ逃げて行つた。とんだ失體と粗忽を重ねたものだが、よつぽどうろたへたと見える。お詫びもせずに逃げたなんかはあはて方も思ひやられる。これ此旅行隨一の珍談、ひどい棚卸しをして相濟まぬが同孃に間接にお詫び旁一寸失敬した。

第二日（五日）

午前中各自隨意に若松市の會津高等女學校へ集合する、遲くまで宿で太平樂を述べてソソクサ俥を飛ばす奴も居れば朝飯を掻き込むが早いかテクつてゆく氣早な連中もある。正午近く講堂で旅行演奏の皮切りが初まる。聽衆は此學校と小學校の生徒、時間の都合上合唱合奏物だけやつた。後作法室で辨當の饗應に與つた。

若松を發つて新潟へゆく。この間約四時間半。

活動寫眞などで見る端西あたりの山中を通つてゐる様な美しい山河のたたずまゐに見惚れる。遠近の高山には雪が殘つてゐる。この幽谷の移りゆく景を送り迎へると目路も遙かな越後平へ出る。田圃の中や丘の上に無數に立てられた石油穿井櫓の奇觀を眺めつゝ新潟へ着いたのが七時前。車を聯ねて師範學校へ向ふ。

夜の演奏會は何となく音樂的氣分にしつくり合つて心持がよい。演奏が終つて篠田旅館へ泊る。

雪と嵐にすさんだ北國の街にもさすがに初夏の歡樂が充ち溢れてゐる。活動寫眞館にはイルミネーションが眩しく輝いて白いエプロンを掛けた洋服姿のお茶子は愛くるしい北越美を繪看板の下に晒し出してゐる。明日は散歩する暇がないといふので夜更けまで怪しげな風體でぶらついて歸る連中もあつた。

第三日（六日）

午前八時師範學校で再び開演する。昨夜は一般市民の爲めに公開したのだが今朝は學校團體のために演奏するのである。正午近い頃新潟を發車する。昨日わざ〳〵新潟まで來られた柏崎高女の中川氏は一行と同車して歸られた。

柏崎あたりから日本海沿岸を汽車は走る。明るい東海の波に引きかえてグルーミーな物凄い日本海も夏の色を湛へて洋々と漲つてゐる。

Du schönes Fischermädchen,
Treibe den Kahn aus Land;
Komm zu mir und setze dich nieder,
Wir kosen, Hand in Hand.
Leg' an mein Herz dein Köpchen,
Und fürchte dich nicht so sehr;
Vertrauft du dich doch sorglos
Täglich dem wilden Meer!

夢みるやうな Heine の詩が波のかなたに漾ふてゐる——夕五時過ぎ高田着。小林禮氏が出迎へられた。高田館といふ和洋折衷建ての宿屋へついて入浴して夕食を認めた後師範學校へゆく。曲目も豫定通り進んで一番おしまひの絃樂合奏の演奏中突然電燈が消えて眞の闇、頗る面喰つたが何でひるまうコンダクター大塚先生は早速の氣轉で拍手で指揮された。斯くして曲は一拍の澁滯もなく暗譜によつて見事演了せられた。引續いて君が代の合唱になると合唱隊は盲の探り足でステーヂに上つて來る。會衆は起立して之に和す、壯重、嚴肅譬ふるに物もない。暗黑裡の演奏は新しいレコードだ。（以下次號）

（『音樂』學友會、第六卷第十号、大正四年十月、四四～四六頁）

第四日（七日）

午前六時過出發上田町へ。

汽車へ乘ると雨が降り出した。長野停車場で近藤義次氏が上田まで同車せられた。今日の上田の音樂會へ臨む考へで。

上田で依田辨之助氏の出迎を受け、雨を犯して上田高等女學校へ着い

た。樂器を携帯した者や不精な連中は俥を飛ばしたが、我黨の健兒をきめ込んでる豪傑連は異様な風體でテク〳〵やつてゆく。

學校では何でももう休課して其準備に掛つて居るらしい。控室へ一人一人樂器を持つて行つて呉れる。コントラバスを五六人して抱へて運んでゐた。

直線と鋭角鈍角とで充たされた幾何學圖を睹る様な dry 形式と、凜乎たる朴訥な氣風とを以て成立つてゐるノーマルスクールの模様とは、おのづから異つた色彩と柔かいムードが流れてゐるやうに思はれる——女學校情調とでも謂つて見ようか。控室にあてられた食堂のテーブルには幾つと數の知れぬ投挿の花が優雅な處女の情緒をしつとりと漂はせてゐる。作法室で教はつた事の實地應用をやつてる様な鹽梅式で接待係の子供が甲斐甲斐しく茶を入れたり菓子を運んだりする。都びとは存外不作法でござる、大きな口あけてムシヤ〳〵、茶などは一口にガブリとやらかす。

こゝで午餐の饗應を受けて午すぎ講堂で開演。曲目の番外として近藤君の獨唱（新作唱歌「早春之賦」）があった。「野の藝術」を叫んで杳然として故山に去つた君の聲調には云ひ知れぬ力強さとフレッシュな鄉土の匂ひがある。

あまり音樂といふ物に接する機會を有たない土地だけに聽衆は悉く狂喜と感激に緊張した氣分を見せてゐた。

閉會後直ちに停車場へ駈け付ける。さらば懐しい山間の街よ、海見ぬ國の乙女たちよ。

上田から篠の井まで逆戻りをしてそこで乘換へて今夜は上諏訪泊り。列車は山腹を辿つてだん〳〵に登つてゆく。雨の霽れた後の山野は透き透る許り、六月の光は銀色に漲つて、太古の韻きを偲ばせるやうな靜寂の裡に龍塔、四阿、白根の群巒は青く夢みてゐる。Wordsworth の "The Solitary Reapeer" を偲ぶには餘りに雄大な景色だ。姥捨の驛から遙かに後への平野を瞰下すと、銀蛇のうねりを示してゐるは筑摩川か犀川か、川中島はそこかと見えてなんどと、何か名文をひねくり出したかつたが、出そうで出ぬのが石原筍、さすが音に聞く古戰場の朝霧を思ふと、

「あつと云ふまに信玄は——あ——あ、ヂヤラン〳〵」

とここでひとつ唸つて見たい様な氣もした。

ト、けふの短い數時間の記憶がしほらしいイリュージョンとなつてまざまざと浮んで來る。私はあの郊外の校舍と、つつましやかに見送つてゐた小鳥の様なヴーヂンたちの瞳を想ひ出した。

「おねえさま、泣きませうね……」

青白いフィルムの瞬きを見るやうな幻想の時代を燃えさかる情熱と憧れは、ひそかに可憐な相愛の涙に享樂の國を覓めて、そこに小米櫻の様なささやかなロマンス作るといふ。ポプラの葉擦れの呟きに、遣瀬ない鄉愁を包んで雨降る夜さを寄宿舍の窓に忍び泣く若い瞳よ、生ぬるい初夏の、蛙聞く宵の里ごころは如何にせつないものだろう。

姨捨の驛を南に、長いトンネルを抜けると、所謂日本アルプスの雄大壯嚴なパノラマが展開される。大蓮華、白馬嶽、蓮華山、有明山、鎗ケ嶽、乘鞍ケ嶽、雪を戴いた峻嶺は紫の色にどんよりと眠れるが如く魁偉な姿を横たへてゐるのは、宛がら大聖の臨終にも喩へようか。

松本の街は藍青の色烟にこめられて美しい灯影が夕闇に瞬いてゐた。車中はいつもはしやぎ切つて他愛もない馬鹿騒ぎに赤ゲット式のお客さんたちは釣り込まれて腹をかかえてゐる。旅の疲れも何のその、キャラメルをしやぶりながら利かぬ氣の茶目助、凸坊、口に稅金は掛らぬと云ふやつで騒ぐわ〳〵。

上諏訪町に着いたのが夜の九時二十分頃。牡丹屋ホテルへ泊る。海拔二千五百尺、温泉地として可成りの賑ひを呈してゐる。

雪殘る高加索の高原にさまよふヂプシイの群の如く、漂々として來り漂漂として去る羈人の夢の淡さよ。重い憶れに壓しつけられ乍らも尙ほ眼を開いて、自然の追慕者としてのセンシブルな漂浪的氣分を味ひつゝ、行く所々の移り變る感興を、アセチリンの灯に曝された夜店の盆栽の花を見る様に一つ〳〵並べて玩味して見たい。けれども私等の旅はゆつたりと風土の探求に詩情を遣るの餘裕を持たないのを悲しむ。

が今夜ばかはり（ママ）は演奏といふ勤務から解放された悦びにわけもなくそゝ

られて、食後街をぶら〳〵歩いて見る。物寂しい信州の街の夜も、洩れひびく爪びきの糸のねじめに嬌艶な夏の情調を味はしめる。温泉の烟か、夢に様な水氣が音もなく闇に吸はれてゆくあたり、遠く諏訪湖の對岸の灯がゆら〳〵と水にゆれて來た。私は端なくも「十種香」の狐火を想ふた。そしてまた、あの美しい幻想的な舞臺の光景を描いた。

回香せうとてお姿を、繪には書かせはせぬものを、魂こもる反魂香、名畫の力があるならば、可愛とたつた一ことのお聲が聞きたい聞きたいと……

錦繪から拔け出た様な八重垣姫がしめやかに泣き崩れた艶麗な情味から、緊張した時代劇のシーンに移つて「兜をそつと手に捧げ、覗けば又も白狐の姿、水にあり〳〵有明月、ふしぎに胸も濁り江の」から「小亂れ」「大亂れ」の合の手まで私の聯想は辿り辿つて行つたが、ハツと幻影から甦へると、凄婉な湖水の夜色は黑く擴がつて底知れぬ陰鬱に閉されたTotenstilleは、今にも關兵衛が打ち放す火繩筒に荒れ立つ修羅の叫びを豫感せしめる。私は近松半二の筆によつて此の神秘的な夜景を更に詩化する機會に觸れたことの興味を思つた。

第五日（八日）

午前中は隨意行動で半日はゆつくりと遊べる。これでお名殘りといふので思ふ存分鑛泉に浸つて茹章魚みたいな色をして上つて來て、飯を食つたら早速出掛ける。湖上にボートを浮べる者もあつた。冬季は例のスケートで賑はふ所だ。八百八狐の守護するといふ法性の兜と諏方明神とは最も深い由緣があるので、思ひ出のために參詣したいと思つたが、遂に其機を逃がしたから、繪ハガキで拜んでおいた。

午後零時二十五分發車。駒ケ岳、八ケ岳などの高山を左顧右眄して深嚴な山嶽的ムードに圍まれつつ、ビョルンソンの書いた「アルネ」が、山越えてかなたなる南方の明るい町を戀ひし如く、吾等の思は南へ〳〵と飛んでゆく。そして吾等の體軀も同じく銀白の光輝く南の野へ南の町へ近づきつゝあるのだ。

甲府で權藤圓立君の出迎に接して旅舍へ導かれた。上諏訪のあまりにクラシカルに黴んだ宿屋から此小ざつぱりとした所へやつて來たのは嬉しかつた。「馬鹿に感じがいゝなあ、ハーン」と鼻糞をほじくつてゐる。

夕食後琢美小學校で演奏。廣いガランとした雨天體操場の構造は音樂會場としてはあまり適當なものではなかつた。聽衆は一ぱい詰めかけて中々の盛況であつたが、場外に彌次馬が集つて大騷ぎをしたのは少からず不快を感じさせた。しかしこれが最終の演奏だ、終りを全うするといふ奮發心で、みんな氣ばつてやつた。

さすが東都に近い市街とて、今まで遍歷して來た北の町よりは大分東京風の色彩を帶びてゐる様に思はれる。唯一つの除外例として、今頃滅多矢鱈に見られぬ鐵道馬車といふ十九世紀の怪物がゴロ〳〵走り廻つてゐるのは珍しかつた。

「お歸んなさいまし！」番頭君の威勢のいゝ聲に迎へられてノコ〳〵歸り着くと、階上の部屋をぶつ通して、例の如く無禮講の慰勞會と云ふ段取り、人の領分まで侵略して來て盛んに左を利かしてゐる手合もあれば、金時の孫は此子でございと云つた血色で其實フウ〳〵呻つてゐる木ッ葉武者もある。こんな先生たちは皆豪傑黨に目ぼしい物は「徵發」されてしまつた。

夜は更けてゆく。

「あしたはうちへ歸つてかあちやんのお乳のむのよ、まあうれしい！」

「あたし土產物たんと買つて持ちきれないワ……」

こんな他愛もないことを宣ふ姫御前の旅とは違つて野郎共の殺風景さ、エハガキの二三十錢もポケットへ捻ぢ込んで歸つて、親類緣者知己親友へ一枚づゝ進上すれば上出來なり。

第六日（九日）

雨天。連日の疲れが一時に出たと見えて午近くまで大の字なりの白河夜船。（夜船でもあるまい）とう〳〵朝は拔きにして晝めしを掻きこむや否やステーションへ馳せ向ふ。やつと十二時十五分の上りに間に合ふた。

有名な笹子トンネルを通りぬけると猿橋と云ふ奇景があるそうな。我こそ見のがすまじと誰も彼も車室の北側へ寄つて來て手ぐすね引いて待ち構へてゐる。

「こりやく寄つちやいかん、汽車がひつくり返るぞ」
「我慢しろ」
「オイ、猿橋だよ、そら今通るぞ、猿橋々々！ハツ猿橋々々」
掛聲交りで目を皿にしてゐると、
「よせく、もう疾つくの昔に過ぎちやつたよ」
何の事はない、狐につまされた様なものだ。
「あんたお見やしたかいな」
「わし見てしまへん——けつたいな事や！」
「あんた？」
「あてえどつか、眠つてたのん」
「さよか」
永い前から騒ぎ立てた名所もこんな鹽梅で何が何やら有耶無耶の中に飛んで逃げてしまつた。
甲府から飯田町まで約六時間、急行列車の倍は掛かる。（この線に急行は通らぬが）宇治の畠で茶ばかり乍ら馬關通ひの最大急行へ乗つてゐる身共には、こんなのでゴトンく搖られ通しぢや聊か尻へこたへる。〔中略〕
「起きたく！新宿だよ！」
叩き起されて支度もそこくに、降りる者は降りた。雨に烟つた街なかを青い瓦斯の火と赤い電燈が輝いて、長途の旅の目出たい終局を祝福してくれる様。〔後略〕

（『音樂』學友會、第六巻第十一号、大正四年十一月、七〇～七三頁）

●音樂大演奏會

東京音樂學校職員生徒約四十名は修學旅行として五日（土曜日）來港するため新潟婦人教育會、新潟婦人衛生慈善會、帝國婦人協會新潟支部會員發起となり一行を招し同日午後七時より新潟師範學校講堂にて演奏會を開く、入場券は三會々員より一般に配布するよしなれば希望の方は會員より求めらるべし、一行は市内學生の爲めに六日午前八時より同會場にて演奏する由

（『東北日報』大正四年六月三日）

大正四年六月十九日、二十日　学友会春季演奏会

■學友會は六月十九、二十日左の曲目に依り春季演奏會を開けり。二十日は管絃樂全部中止のため代りにペツォールド、ショルツ兩教師のピアーノ聯奏ありたり。

一、管　絃　樂　　會　　員
歌劇「アウリスのイフィゲーニエ」の序曲　グルック
二、ソプラーノ獨唱　　武岡鶴代
ラ　ツィンガーラ……ドニツェッティ
三、アルト獨唱　　廣田ちづゑ
歌劇「オルフォイス」中のオルフォイスの抒情調
（アッハ　イヒ　ハーベ　ジー　フェアローレン）グルック
四、ヴイオリン　　多　忠亮
小司伴樂　ト長調……リーディング
五、アルト獨唱　　花島秀
甲、歌劇「ミニョン」中のミニョンの抒情調
乙、同上　スティリエンヌ……トーマ
六、管　絃　樂　　會　　員
森の水車……アイレンベルヒ
七、合　唱　　會　　員
甲、歌劇「マイスタージンガー」中の合唱　ワークナー
乙、宵の春雨……吉丸一昌歌　梁田貞曲
八、ソプラーノ獨唱　　內田琴
甲、ハイデン　レースライン……シューバート

乙、モントナハト……シューマン
番外、オーガン獨奏　助教授　中田章
　ファンタジー、作品二十一……ブロージッヒ
九、テノーア獨唱　水野康孝
　甲、アム　メーア、乙、彷徨ひ人の夜の歌　シューバート
十、ヴイオリン獨奏　蜂谷龍
　ファンテージー　カプリース……ギユータン
十一、ピアーノ聯奏　第一ピアーノ　弘田龍太郎
　第二ピアーノ　貫名美名彦
　シムフオニー詩「タッソー」（悲哀と勝利）　リスト
十二、管絃樂　會員
　管絃樂組曲「カルメン」……ビゼー
番外、ピアーノ聯奏　第一ピアーノ　ペツォールド夫人
　第二ピアーノ　ショルツ
　レ　プレリュード（シムフォニー詩）……リスト
十三、合唱（管絃樂附）　會員
　君が代……林廣守

（『音樂』學友會、第六巻第七号、大正四年七月、七二頁）

■音樂學校演奏會　六月十九日午後二時同校で學友會の春季大會を開く　聲樂　武岡鶴代孃のソプラノ「獨唱ラ、ツインガーラ」はジプシーの娘の生活及び戀を歌つたもので頗る輕快な氣持の好い曲で出來も無難であつた。廣田ちづる子のアルト獨唱は可なりの出來。花島秀子のアルト歌劇「ミニヨン」は前半は全然なつてゐず、後半を較々よしとする、元より後半の曲は親知らずの小娘が旅役者の群に入り人の居ない時自分境遇を他事の樣に歌に歌ながら不圖我に返つて可笑しくなつて笑ひ出すといふ筋で、其處に一種の悲哀を見出さなければならぬ、然るにあれでは到底そんな深刻な氣分にはなれない「、」内田琴子のソツプラノ獨唱は今一段の修業を要す「、」水野氏の男聲獨唱は徒らに蛇足を添へたのみで合唱も特筆すべきものはない　器樂　ヴアイオリン獨奏の中では多忠亮氏のも惡くはなかつたが何と云つても蜂谷龍子の「フアンタジーカプリース」が第一で當日の壓卷である、曲は急劇な變化に富んだ幻想的狂想で隨分難曲であるのに頗る手際よくやつて退いたのは天晴である、弘田貫名兩氏のピアノ聯奏は手に入つたもので蜂谷氏に次いで當日の白眉であつた　管絃樂「森の水車」は通俗的な肩の張らない面白い曲で河水の流れ、水車の音、鳥の聲などを巧みに聽かせ、綠濃い上野の森の中に淡い夢を見てゐるやうだつた。

（『音樂界』第一六六号、大正四年八月、六一頁）

大正四年九月二十五日　学友会第十四回土曜演奏会

■九月廿五日第十四回土曜演奏會を擧行す曲目は左の如し

一、合唱　會員
　甲、眞心の泪　〔ノイマーク曲／吉丸一昌歌〕
　乙、海員の歌　〔獨逸民謠／會員歌〕
二、ソプラーノ獨唱　武岡鶴代
　歌劇『ウイリアム　テル』中のマティルダの華想調　ロッシーニ
　（いまし靜けき森よ）（第二幕の初め）
三、バッソー獨唱　柴田知常
　甲、歌劇『エロィデアード』中のエロード王の叙調抒情調　マッスネー
　乙、歌劇『地獄に墮ちたるフォースト』中のメフストフレスのセレナータ　ベルリオース
四、ヴイオリン獨奏　館山甲午

司伴樂
（第一第二樂章）　ザイツ

五、ソプラーノ獨唱　武岡鶴代
歌劇『シキーリアの床屋』中のロジイナの小樂調
（ウナヴーチェポーコファ）　ロッシーニ

六、テノーレ獨唱　水野孝康
甲、リターナイ　シューバート
乙、シュテンドヒェン　シューバート

七、コントラルト獨唱　廣田チヅェ
歌劇『豫言者』中のフィーデズの抒情調　マイアーベーア

八、合唱　會員
甲、忌垣の前に　｛ハイドン曲 吉丸一昌歌
乙、秋に　｛獨逸古民曲 會員歌
君ケ代　林廣守
指揮者　榊原直

（『音樂』學友會、第六巻第十一号、大正四年十一月、八九〜九〇頁）

大正四年十月二日　邦楽会第二回演奏会

大正四年十月二日　午後一時半
於東京音樂學校奏樂堂
邦樂會第二回演奏會曲目
邦樂會

一　富本
春夜障子の梅（夕霧）

富本豐
名見崎得壽々
三味線　名見崎得壽齋
上調子　名見崎多賀

二　一中
橋辨慶

シテ　菅野序遊
ワキ　菅野利三
三味線　菅野吟平

三　江戸長唄
相生獅子

長唄　芳村孝次郎
芳村孝三郎
芳村孝一郎
三味線　今藤長十郎
三味線　杵屋勝四郎
同　杵屋勝藏
笛　望月長之助
小鼓　六合新三郎
大鼓　梅屋勝次郎
太鼓　六郷新右衛門

四　常磐津
恩愛瞶關守（宗清）

常磐津文字太夫
常磐津志妻太夫
常磐津彌生太夫
三味線　常磐津八百八
上調子　常磐津菊三郎

〔休憩十分間〕

五　河東一中かけ合
源氏十二段

シテ　山彦やま子
ワキ　山彦しん子
三味線　山彦秀翁
上調子　山彦八重子
シテ　都一はる
ワキ　都一あや
三味線　都一中
一　濱旼
上調子　都一はな

六　新内
明烏夢泡雪

富士松加賀太夫
三味線　吾妻路宮古太夫

七　清元
四季三葉艸

清元延壽太夫
清元家内太夫
清元政太夫
三味線　清元梅吉
上調子　清元吉太郎

長唄

八　浦島（うらしま）

振	中村兒太郎
長唄	芳村孝次郎
	芳村孝三郎
	芳村孝一郎
三味線	杵屋勝四郎
同	杵屋勝藏
三味線	今藤長十郎
笛	望月長之助
小鼓	六合新三郎
大鼓	梅屋勝次郎
太鼓	六郷新右衛門

■邦樂會の公演

東京音樂學校邦樂調査會に關係ある各流各派の家元等は一致協同して互に補助し且發展を圖り三絃樂の保存改善及び向上に努力し大いに其特色を發揮し又後繼者の養成に盡力し而して何時迄も篤志家の引立にのみ依頼するは時勢に適せざるを自覺し家元等自ら事業經營の衝に當りて邦樂會を組織し先般第一回公開演奏會を開きたるが今回更に規則を改正し演奏會を毎年四回開會し賛助員を置き會費を年額五圓とし會毎に一名を同伴し得ることとし十月二日午後一時半より左の番組通音樂學校講堂に第二回演奏會を開く〔曲目省略〕

（『音樂界』第一六九号、大正四年十一月、九一頁）

大正四年十月二十九日、三十日　学友会秋季演奏会

■去る十月廿九、三十の兩日秋季大演奏會を擧行す。曲目は左の如し。

一、男聲合唱　會員
船路……メンデルスゾーン
二、ヴイオリン　北原季男
小司伴樂作品三十一、（第二樂章）……ジット
三、風琴獨奏　眞篠俊雄
パッサカーリア　ハ短調……バッハ
四、アルト獨唱　花島秀
歌劇『サムソンとダリラ』中のダリラの抒情調……サンーサーンズ
五、洋琴獨奏　足立ふさ
タランテル作品八十五、二番……ヘルラー
六、バス獨唱　柴田知常
歌劇『道化師』中のトーニオの口上……レオンカヴルロ
七、女聲合唱　會員
信仰……ロッシーニ
八、洋琴獨奏　古谷幸一
ソナータ作品七……ベートーヹン
九、ヴイオリン　多忠亮
司伴樂　イ長調……アッコレー
一〇、ソプラーノ獨唱　山下禎
歌劇『ブラジルの眞珠』中ツォーラの抒情調……フェリシアン ダギッド
一一、洋琴獨奏　井上はる
唱謠的緩徐調と昂奮的急速調……メンデルスゾーン
番外バリトーン獨唱　船橋榮吉
甲、イッヒ グローレ ニヒト……シューバート
乙、歌劇『ヴルキューレ』中のヂーダンの愛の歌……ヴークナー
一二、混聲合唱　會員

歌劇『タンホイザー』中騎士と貴女の合唱……ヴーク ナー

（『音樂』學友會、第六巻第十二号、大正四年十二月、八四頁）

大正四年十一月二十一日　学友会第一回特別演奏会

■十一月二十一日午後二時より第一回特別演奏會を開く。前日の曇天に比し理想的の小春日和にて來會者多く、豫想外の盛會なりき。聽衆中には今回來朝せし市伽古出身の米國女流チェリスト エリザベス ハモント孃が母堂及び令姪を携へて來るあり、滿都の最も選擇された好樂の士女を網羅せることとて他の演奏會に於て見出す能はざる活潑なる興味と驚く可き熱心との發動を見たり出演者は何れも熱心なる拍手を以て迎えられ、盛なる喝采を以て送られたるが就中ショルツ、ゼルクマイスター兩氏の非凡なる藝術は最大なるオゼーシュンを以つて酬いられたり。曲目は左の如し。

一、合唱　會　員
流浪の民作品二十九の三番……シューマン
二、洋琴獨奏　室岡清枝
ロンドカプリッチオーゾ作品十四……メンデルスゾーン
三、高音獨唱　武岡鶴代
歌劇『フィーガロ』中のスザンナの宣叙調と抒情調……モーツァルト
四、ヴイオリン　大場勇之介
小司伴樂　イ短調　作品七十……ハンス ジット
五、高音獨唱　内田琴
歌劇『フィーガロの婚禮』中のケルビーノの抒情調（そも何ならん、わがこの心地？）……モーツァルト
六、男聲三重唱　澤崎定之（ファウスト）　水野康孝（ヴレンティーン）　柴田知常（メフィストフェレーズ）
歌劇『ファウスト』中の決闘三重唱（足下のこところは？）……グーノー
七、次中音獨唱　佐藤豊吾
歌劇『自由射手』中のマツクスの抒情調（森を牧場をわれとともに）……ゼーバー
八、大風琴獨奏　助教授 中田章
幻想曲と追復樂……バッハ
九、ヴイオリン　蜂谷龍
司伴樂　第五番　作品二十一（第一樂章）……モリーク
番外、洋琴、チェルロ二重奏（洋琴 教師 ショルツ　チェルロ 教師 ゼルクマイスター）
洋琴チェルロ ソナータ、ト長調、作品二十五……ギャン ルイ ニコデ
一、アルレグロ アマビーレ
二、スケルツォ（ア ラ サヴヤード）
三、ラルゲット
四、アルレグロ アニマート
十、次中音獨唱　外山國彦
甲、一音……コルネリウス
乙、來ませ君よ、ともに月下を逍遙せん……コルネリウス
十一、洋琴獨奏　教師 ショルツ

甲、三諧謔曲……ゼルクマイスター
一、ニ短調
二、ニ長調
三、嬰ヘ短調
乙、祝祭ポロネーズ……ゼルクマイスター
十二、合唱　會員
ハレルーヤ……ヘンデル
君ケ代……林廣守
合唱指揮者　榊原直
（『音樂』學友會、第六巻第十二号、大正四年十二月、八五頁）

大正四年十一月二十七日　学友会第十五回土曜演奏会

■十一月廿七日午後二時より第十五回土曜演奏會を開催せり、曲目は左の如し。
一、合唱　會員
甲、御大禮奉祝の歌……湯川貫一歌／松本徳藏曲
乙、神垣の歌……ボヘミア民曲／牛山充歌
二、ピアーノ獨奏　宇佐美ため
アムプロムテュ作品九十の二番……シューバート
三、ソプラーノ獨唱　内田琴
歌劇『フィガロ』中の小姓の抒情調……モーツァルト
四、チェルロ獨奏　犬井英夫
匈牙利幻想曲作品七……グリッツマッヒェル
五、アルト獨唱……廣田チヅエ
歌劇『豫言者』中のフィーデズの抒情調……マイアーベーア
六、男聲三重唱　ファウスト　澤崎定之／ヴレンティーン　水野康孝／メフィストフェレーズ　柴田知常
歌劇『ファウスト』中の決闘三重唱……グーノー
七、ピアーノ獨奏　鈴木采
ソナータ作品四十二の一番……シューバート
八、ソプラーノ獨唱　長坂好子
絲を績ぐグレートヒェン作品二……シューバート
九、ヴイオリン　井川富子
九番司伴樂作品百四……ベリオ
番外、テノーア獨唱　外山國彦
甲、一音作品三の三番……コルネリウス
乙、來ませ、いざともに月下を逍遙せん……コルネリウス
十、合唱　會員
秋……作曲者不詳／作歌者不詳
君ケ代……林廣守
指揮者　榊原直
（『音樂』學友會、第六巻第十二号、大正四年十二月、八六頁）

大正四年十二月二十三日　御大礼奉祝演奏会（邦楽）

大正四年十二月二十三日（木曜日）午後一時開會
御大禮奉祝音樂演奏會曲目

一、生田流
御代萬歳

二、河東
御代の秋（三人翁）

三、富本
御代の秋（三人翁）

四、長唄
御代の秋（三人翁）

五、山田流
御代萬歳

六、常磐津
御代の秋（三人翁）

東京音樂學校

講師 山口菊次郎
蜂須賀ハツネ
加藤柔子
今井花子
工藤古登
若狭玉子

邦樂調査囑託 山彦秀翁事 伊東秀次郎
江本舜平
三味線 落合康恵
同 山彦かん子
上調子 山彦錦子

富本豊
名見崎得壽々
三味線 名見崎得壽齋事
邦樂調査囑託 吉野萬太郎
上調子 名見崎多加

邦樂調査囑託 吉住小三郎
吉住小三藏
吉住小四郎
三味線 杵屋六四郎事
邦樂調査囑託 杉本金太郎
杵屋長三郎
杵屋六次
笛 住田又兵衞
小鼓 望月太左吉
大鼓 望月長十郎
太鼓 望月仙右衞門

教授 今井新太郎
飯田松漣
中限不二子
講師 村田ミイ
講師 高橋勢以
氣賀慶重
三味線 高橋榮清

常盤津文字太夫事
邦樂調査囑託 常岡丑五郎
常磐津志妻太夫
常磐津彌生太夫
三味線 常磐津文字兵衞
上調子 常磐津菊三郎

七、一中
御代の秋（三人翁）

都太夫一中事
邦樂調査囑託 伊藤楳太郎
菅野序遊事
邦樂調査囑託 菅野藤次郎
菅野利三
菅野吟平事
邦樂調査囑託 西山龜助
都一秀
上調子 都一花
笛 望月長之助
小鼓 六合新三郎事
邦樂調査囑託 細谷佶太郎
太鼓 梅屋勝次郎
太鼓 六郷新右衞門

八、合唱
雲井仰けは

生徒

■東京音樂學校大管絃樂

毎年春秋二回の大演奏會を催す東京音樂學校にては、今秋も例の如く大演奏會を開催する以前に、折柄の即位の御大典に逢着する事とて、此芽出度き御大典を祝さんため御即位奉祝の大音樂會を開催する筈にて、その草案は休暇中に既に定まり、目下各教授等熱心に作歌及び作曲中であるとの事たり。それに就き同校事務員赤川氏は語られるやう「今度の御大典奉祝大音樂會は單に當音樂學校だけにて表する祝意に過ぎませんが當日御招待申す人々には學校に關係ある人々は勿論、在留外國大使初め其他の方面にても多くある見込です。而して演奏の音樂は洋樂部にて管絃の中に唱歌を時々混交して歌ふものでまた日本音樂部の方に於ては琴曲と三絃とに別れてゐて、琴曲の方は吉丸教授の作歌になる「御代萬歳」と題する歌を作曲したものを演奏し三絃の方は、高野教授の作歌「御代の秋」を長唄、河東、清元、常磐津、一中等に節づけしたるものを演奏する事になつてゐます。さうして管絃樂の中の唱歌は、やはり高野教授が作つてゐられます。「御代の秋」も一度は出來上りましたが、何分畏き御大典の奉祝歌の事として愼重なる上にも愼重なる態度を持つて尚ほ意に充たぬ箇所を訂正し只管

完成を急いで居られます。また「御代萬歳」の方は既に歌は完成して、管絃樂の方と共に目下作曲に各教授は苦心を重ねてゐられます。從つて今秋はかゝる催しのために、秋の例會は多少その開會が遲延されるか、或は中止されるかも知れません。只今の所では奉祝の音樂會の方に意を奪はれてゐますから、例會の方はまだ何等の計畫も運ばれてゐません。」云々。

（『音樂界』第一六九号、大正四年十一月、九〇～九一頁）

■大典奉祝の新曲

東京音樂學校にては今秋の御大禮を奉祝する爲め一方又同校邦樂調査掛にても箏、長唄、一中、富本、常磐津、河東、新内、清元等の模範的新曲を作製する事に決せり歌詞は專ら吉丸、高野兩教授擔任、作曲は今井教授以下六合新三郎、常磐津文字太夫、吉住小三郎、名見崎得壽齋、山彦秀次郎、富士松加賀太夫、今藤長十郎、吾妻路宮古太夫、清元延壽太夫、杵屋六四郎、都太夫一中、菅野序遊、同吟平諸氏にて目下何れも競うて傑作を出す意氣組みにて成績品は來る十二月中旬奏樂堂に於て一大和洋音樂會を擧行し發表する筈なり尙ほ同掛の附屬とも見るべき邦樂會は今回規則の改正を行ひ毎年四回演奏會を開く事となれり。

（『音樂界』第一六九号、大正四年十一月、九一頁）

大正四年十二月二十三日～二十九日　御大礼奉祝演奏会（洋楽）

學友會記事

■學友會は吉丸教授、大塚助教授、中田助教、赤川書記、鈴木舍監の指揮監督の下に十二月廿三日より名古屋、京都、大阪に演奏旅行を決行し、熱田神宮、平安神宮、桃山御陵、其他の神社佛閣に參拜し、名所舊蹟を訪ね、京都御所、大嘗宮、二條離宮を拜觀し、更らに大阪より奈良に廻つて廿九日無事に歸京した。此行に上るもの凡て百有三名、一人の病者なく、一週間に亘る長途の旅行に於て比類なき成績を得たるは聊か以て誇りとするに足らう。曲目は名古屋、京都、大阪で多少の相違はあつたが略左の如きものであつた。

一、混聲四重唱、會員、御大典奉祝歌、松本德藏。二、絃樂合奏、會員、歌劇『豫言者』、中の戴冠式行進曲、マイアーベーア。三、高音獨唱、武岡鶴代、歌劇『セギラの床屋』中のロジーナの小歌調、ロツシーニ。四、男聲合唱、會員、甲、若松懷古、シユーバート、乙、歌劇『漂浪蘭人』中の水夫の合唱、ヴグナアーゲオルク　シユーマン。五、洋琴獨奏、山口節、幻想的卽興樂、ショパン。六、ギオロンチェルロ獨奏、萩原正彦、コールニートライ、マックス、ブルッフ。七、洋琴獨奏、高折宮次、甲、ノクターン、ショパン、乙、スケルツォ、シューマン。八、混聲四重唱、會員、神曲『メシア』中のハレルヤ、ヘンデル。九、同上、會員、歌劇『タンホイザー』中の騎士と貴女の合唱、ヴークナー。十、風琴獨奏、眞篠俊雄、ハ短調パッサカーリア、バッハ。十一、同上、中田章、甲、フーガ、ゲオルゲ　ベルグ、乙、フーガ、ジョン　ベネット。十二、女聲三重唱、會員、信仰、ロッシーニ。十三、洋琴三重奏風琴附、弘田龍太郎、末吉雄二、萩原正彦、中田章、めでたき卯年、本居長世、弘田龍太郎。十四、次中音獨唱、船橋正次郎（ママ）、歌劇『道化師』の序詞、レオンカヴルロ。十五、同上、澤崎定之、歌劇『カルメン』中の花のアリア、ビゼー。十六、ヴイオリン獨奏、田中ひさ、幻想的舞曲、ベリオ。十七、同上、末吉雄二、ロマンス、ベートーヱン。十八、絃樂合奏、會員、大司伴樂、ヘンデル。十九、混聲合唱、會員、雲井仰げば、吉丸一昌歌、島崎赤太郎作曲、君ケ代。

（『音樂』學友會、第七巻第二号、大正五年二月、六一頁）

●大音樂會演奏曲目

＝京都は二十六日夜、大阪は二十七日晝夜二回＝

御大典式場拜觀のため二十五日朝入洛すべき東京音樂學校職員及び研究生十四名生徒八十二名の一行は二十六日夜京都三條柳馬場基督(クリスト)教青年會館に於て京都は樂聲會主催し、二十七日晝夜二回大阪樂友會主催の下に天王寺公會堂に於て一大音樂會を開くこと既報の如くなるが京都及び大阪の番組左の如し〔曲目省略〕

（『大阪朝日新聞』大正四年十二月二十二日）

●昨夜京都へ着いた大音樂團＝女生徒達と語る

二十六日京都青年會館で、二十七日は大阪天王寺公園で演奏される東京音樂學校の樂團一行は二十四日夜十時五十六分京都に着くのを大津まで出迎へた

◆女生徒と男生徒とは別の箱で

女生徒は一番後の三等室に載て狹い腰掛に二人宛(づゝ)ギツシリ腰を掛け尙掛け切れないで立つて居るのもある、夜汽車の事とて何れも裝(なり)も振も構はずコートを着込んで毛絲のショールを卷いて髪も亂れ白紛氣(おしろい)とてもないがそれでも流石音樂學校だけに髪の結ひ工合が袴の着工合がハイカラでコートの下から僅に見える着物も紫の矢絣や大きい龜甲縞など派出な色彩である、誰れも彼れも隣り同志束髪と束髪とを磨り合せて眠つて居るけれども何と言つても若い娘の寄合ひ、さゞめきの聲が絶え間なく聞え中には窓を開け朧ろに霞む月を眺めつゝ

◆小聲で淋しい調子の歌を唄ふ

ものもある友達の肩に片手を凭(もた)せて獨唱の身振をして居るのもある花形の研究科生田中久子孃は頰の豐かな子供らしい人、薄茶色のコートの袖を前に重ねながら温なしい口振で語る

大阪では武岡鶴代さんの獨唱の伴奏の外にベリオのファンタージーバレーを彈きます、ベリオは佛蘭西(フランス)のバイオリンの大家で此の曲は幻想曲の氣分で現した踊の歌でございます、ですから輕快な聞いて居ても踊出したくなるやうなのでございます、私では上手に彈きこなされないで困ります、別して公演は兎に角今度のやうに遠方まで出掛けて知らない方の前で致しますのは初めなのですから何だか心配で胸がわくわくいたします、黒紋附に此袴を着けます

淺黄のカシミヤの袴の紐を弄(もてあそ)んで居た次に獨唱の武岡鶴代孃は

◆色の白い顔の丸い若い〳〵人

で手製の白い毛絲の肩掛を頸に卷いて赤い鼻緒の利休の下駄が可愛らしい

「私のはグーノーのセレナードで七頁(ページ)程の可なり長いものでございます、夏の靜かな宵に密に思を寄せる人の窓の下で立つて歌ふ歌だとペツオルド先生が教へて下さいました知らない大勢の人の前で一人立つのだと思ふとそれはそれは心配なものでございます、併し私はあんまり構はない方で聲を出す人は甘いものばかり喰べて辛い物は喰べてはいけないと言ひますけれどもお蜜柑でも平氣で頂いて居ます、まだ本科の二年生ですから是からが本當の勉强時期、まだ〳〵人樣の前へ立つ資格はございませぬ」こんな話をして居る間に一方では列車の中央に十人許り重なり合つて奇麗な聲で三部合唱が始まつた(やが)

◆京都に近着くと寢て居た人々

を起し髪を撫で衣紋を繕ひ何よりも先に大事な〳〵バイオリンやマンドリンを網から卸して手に〳〵抱へて「先生先生京都はまだですか早く下して下さい」など〻監督の大塚先生に子供らしい駄々をこねて居る大塚淳氏の話に

今度のやうに女生徒が六十人男生徒が四十人一緒にコーラスをすると云ふ事は關西には殆ど見られないので京都大阪の演奏會では蒼蠅(うるさ)い程に全體の合唱を入れるさうで昨夜も名古屋で之が大變な評判であつたと、斯くて京都に着くと同窓生の出迎へを受けて女生徒一同は三條小橋の龜屋に投じた（婦人記者）

（『大阪朝日新聞』大正四年十二月二十五日）

●大音樂會＝昨夜京都で

◇東京音樂學校樂團の入洛を機として京都聲樂會主催の下に二十六日夜六

時半より三條青年會館で開かれた音樂會は豫期以上の成功を收めて定刻前、既に滿場立錐の地なき迄に聽衆を吸收し七時には早くも入場謝絶の札を出す盛況であつた

◇階上には高等女學校、女子師範五線會、櫻樂會、グリー倶樂部員等の席を設けたるが未曾有の大音樂聽き漏らすまじと憧憬の眼を睜はる人々は肩と肩膝と膝とを交へて後上りの席に人の屛風を造り温氣に堪へ兼ねて涼を冀ふ人々の手許には青色のプログラムが胡蝶の如くに絕え間なく動かされた、聲樂會會員一木氏の開會の辭了りて

◇待ちに待ちたる大合唱、歌手はステーヂに昇つた、大塚助教授指揮棒を執り女子約六十名男子約卅名より成る四部合唱（御大典奉祝歌）は最と嚴かに且なだらかなるメロデーを漂はせつゝ歌ひ出されたので遖は本邦隨一の音樂學府より來れる人々よと聽衆は先づ大なる滿足を以て此の劈頭の大合唱を迎へた

◇次で絃樂合奏（戴冠式行進曲歌）が前の奉祝歌といみじき對照を爲しつつ二十餘名の男女學生に依つて奏せられて後當夜唯一の花形武岡鶴代孃が聽衆の前に起つた孃は數多き音樂學校生徒中殊に優れたる高音獨唱の天才である、同夜の歌は歌劇「セビラの理髪師」中の一節で聽衆は唯陶然として孃の美音に魅せられ歌の終ると共に初めて夢より覺めたる如く慌しく急霰の如き拍手を以て天才の勞に酬いたのであつた、其の他山口節子のピアノ獨奏「フワンターヂーア」、混聲四部合奏「ハレルヤ」など何れも滿堂破れるが如き喝采を博しつゝ第一部を終る

◇第二部にては現代の第一人者を以て目せらるゝ中田教授のオルガン「フーガ」は謂ふ迄もなく、次の中音大家船橋榮吉氏の獨唱「バヤツツオ〔パリアッチ〕」は大喝采を以て迎へられ最後の合唱「君が代」を以て會を閉づる迄聽衆は一人として席を立つ者なく押詰つた暮の氣分から全く解放せられ一千五百の人々は尚も會の續けよかしと祈るばかりであつた、斯くて京都の音樂會は大成功の裡に終りを告げた

◇二十七日は大阪天王寺公會堂に此の一團を迎へるのであるが定めて京都以上の盛會を見ることであらう　（『大阪朝日新聞』大正四年十二月二十七日）

●盛會の大音樂會

◇今演奏後の印象をたどると、大典奉祝歌に次で絃樂合奏「戴冠式行進曲」は音樂學校生徒男女二十名によつてバイオリン、セロの合奏に賑しく終ると次で武岡鶴代孃の高音獨唱歌劇「セビラの理髪師」中のロヂーナのカヴテイーナ〔ママ〕が始まつた、抑揚自由なる聲は聽衆を感動するに充分であるが聲量の少きは日本人として止むを得ない所か兎に角中での花形として聽くべき力はある生徒中男聲には特に未だ練習中の香ひがあつて絕對的にはエクスタシーに引入れる力がない、獨奏中では中田章氏のオルガンの獨奏末吉雄二氏のヴアイオリン獨奏など全く熟練の後の輕妙が特にこゝろよく感得された、ピアノ三部合奏「めでたき卯年」は調子が面白く船橋榮吉氏の次中音獨唱は最も難に思はれながら努力の後を買ひ得られた、一體に研究中の人々だけに頭から聽衆を蠱惑し得ない、それだけに聽手には興味があるかもしれない、たゞ此の中で合唱が多く獨唱の少ないのは大部隊とは云ひながら寂しい氣がした

（『京都日出新聞』大正四年十二月二十八日〔二十七日發行夕刊〕）

●東京音樂學校の演奏會は大阪でも非常の盛況

◆私立大阪音樂學校樂友會の主催で東京音樂學校の職員生徒百餘名を迎へての大音樂會は二十七日から天王寺公會堂で催された

◆各學校は休暇中の事でもあり折柄の好天氣で正午過ぎの公會堂内は束髪やマガレツトや紫袴の美しい聽衆で埋められた

◆今日の演奏を聞かんため遙々來た奈良女子高等師範學校の團體が五十人、神戸の女學校が八十人それが何れも先生に率ゐられ、長蛇の陣を造つて公會堂の門外に開場を待ち市内では女子師範の八十名を始め夕陽丘、清水谷、市岡、梅田の各高等女學校の生徒が或は團體で或は、三々伍伍親しい仲間を造つて打群がり、大阪醫科大学、高商其の他諸學校の制帽も交つてゐれば奥さん風のあでやかなのも多く、規定の時間に開かぬといつて待ちあぐみ中には係員に開場の談判をするものも出來るといふ盛況

◆軈て一時過ぎに開いて會場へ潮の如く流込みて階上階下を滿たして了ふ、其の數無慮二千、演奏者からいつても聽衆からいつても嘗て無い大會である

◆午後二時半開會、主催側を代表して大阪音樂學校の永井幸次氏登壇開會の辭に合はせて大阪音樂學校設立に關し大方の同情を請ひ直に演奏に移つた

◆その中での呼物は二十六日の夜京都でも聽衆を醉はしめた第一部本科生武岡鶴代孃の高音獨唱でロツシニー作歌劇（セビラの理髪師）で美しいアルマビー伯（ママ）を戀する娘ロジーナの清い愛情を豊婉な聲で歌つて聽衆を夢のやうに醉はしめた

◆夜の部は引續いて本日午後六時開場六時半開會の豫定で入場料は大阪音樂學校設立費に宛てるさうである

（『大阪朝日新聞』大正四年十二月二十八日〔二十七日発行夕刊〕）

●東京音樂學校大演奏會
―昨夜も盛況を極めた―

□二十七日夜六時天王寺公會堂で開催された大音樂會は午後のにも倍して華やかなものであつた、開場遲しと詰め掛けた聽衆は階上階下に鮨詰めとなり極月の心配は何處へやら唯もう一途にミユーズの神の榮光を祝福する許り

□御大典奉祝の「四部合唱」には一同敬意を表し、ワグネルの「タンホイザー」には悲調に充ちたメロデーがひしゝと迫つて來る、又ショーパンの「ノクターン」は音樂界に於ける一大奇才の作曲とていかにも靜的の調味が場中を限なくうるほした、此外セロ獨奏、オルガン獨奏、女聲三部合唱、絃樂合奏があつて

□戸外は節季の金策にキリ〳〵舞ひをしてゐるにもかゝはらず此の堂のみは尊く美しい藝術の匂ひに薫らされて若き男女は唯もう恍惚として了つた

（『大阪朝日新聞』大正四年十二月二十八日）

●「北歐の舟唄」の響
坐に南大阪の空気を撼がせる
東京音樂學校團大演奏會

既報の如く當地天王寺公會堂に於ける東京音樂學校團の大演奏會は二十七日午後二時過開會、階上階下溢るゝ許りの聽衆にて東京音樂學校助教授大塚淳氏指揮の下に百名に近き男女の四部大合唱御大典奉祝歌に始まり次にマイエルベーアの伊太利風の名歌劇「豫言者」中の一節華麗なる戴冠式マーチの合奏につぎ一行中のソプラノ武岡鶴代孃は

●■ロツシニー曲の婉柔撓み
●■多き伊太利風の歌調に

比較的豊富なる聲量を示せり男聲四部合唱の中リヒヤード、ワグネル初期の作フリーゲンデ、ホルレンデル中の第三幕初頭の有名なる舟唄は蓋し當日第一の聽物にてかの諾威の水夫が酒を煽りながら唄ふ輕い舟出の唄 Ho! He! Je! Ho!……Jollohohe! 調子は我國のメロデーにも似通ふた所ありてなつかしき感じあり、萩原正彦氏のセロ獨奏はブルツフ獨特の

●●■莊嚴な寺院樂の床しさが
■■■此音幅のある樂器の響に

シツクリ適合つて引き入られるやうな一種の神祕の氣に打たる、更に二部に入りて聽物は弘田氏のピヤノ、末吉氏のヴアイオリン、中田氏のオルガン殊に萩原氏のセロ三部合唱本居長世氏の創作「めでたき卯の年」興趣ある近代的の響を聽かし其他とりぐ聽者の興趣を湧かし六時過ぎ一先づ晝の會を閉づ、かくて第二回は午後七時より始まり高安道成夫人、增田信一夫人など

●●■瀟洒な裝ひの婦人達家族
■■■的の聽衆階上階下に滿つ

曲目は晝と略同じく異れるは武岡鶴代孃の獨唱がセレナーデ（グノー作曲）其他二三ありしが中にも高折宮次氏のピアノ「ノクターン」と四部合唱の「ハレルヤ」とは最も豊かな拍手を博せり

（『大阪毎日新聞』大正四年十二月二十八日）

■東京音樂學校の大管絃樂團　我國音樂界の中樞たる東京音樂學校に於て春秋二期に催さるる職員生徒全部の大管絃合唱演奏は斯界名物の一として地方より來聽する者も頗る多き有樣なるが過般京都御所拜觀の爲樂手一同上洛せるを機とし、大阪音樂學校學友會主催となりて同市に招待し、去る二十六日午後一時、同六時の二回天王寺公園公會堂にて大阪開市以來未曾有の大管絃樂會を擧行せしが、演奏曲目は湯原音樂學校長が殊に意を用ひて撰擇したものゝみにて、就中今般同校にて作歌及び作曲し宮中へ奉獻したる『御大禮奉祝』の管絃合唱曲は多大の感動を聽衆に與へたる由なり因に同團の樂手は二百餘名に餘る由なれば歐米の天地に於ても稀に見る盛觀を呈せしと云ふが以後も度々かゝる催しを試みて斯界の爲めに盡されたきものなり　（『月刊樂譜』第五卷第一号、大正五年一月、二七頁）

■さうぢや、光陰は矢の如しぢや、早や數年の昔になるがの、十二月の大晦も一週間程の內に押寄せて來やうと云ふ時分に東京の音樂學校の學生が御大典の式場拜觀旁々、修學旅行に來阪して一夕天王寺の公會堂で演奏會を開いた事があるじや、よいかな。

■奈良や廣島から聞きに來たと云ふ熱心な者もあつて會場は滿員だつた。其中に或る文學士と大阪のチヤキ〳〵の若い樂器店の旦那とが居たと思ひなさい、其時に高折宮次君がショーパンの何かを彈いたぢや、處が其文學士が曰くぢや、今のショーパンは或る化學者が研究室で種々の音を色々の玉にして之れを毛髮の樣な糸に通して、一つ宛眺め込んで、今の音は……と考へ込んで居る樣な感じがしたと云ふたげな、よいかな。

■すると、樂器店の旦那が曰くぢや、いや其通り、今のショーパンは食麵麭を一ケ月も置いてあつた樣にサバ〳〵としたもので其處に何等、我々の頭に感應を呼び起させるものも無ければ、心に觸れるものもない、之れが今夜の聽き物とは人を莫迦にして居ると、大氣焰を上げて、其の晩は別れて歸へつたげな。

■翌る日になると昨夜の音樂會に出演した學生連が二三人ドヤ〳〵と其の若い樂器店の旦那を襲うたぢや、そして學生共は大阪の樣な田舍へ來たなら僕等の音樂は極樂の天籟じやと思つて居たらしく、昨夜の音樂會の御感想は什うでした。隨分盛會であつたでせう、と小鼻をピク付かせて、暗に賞賛の御世辭の强請に來たものぢや。

■癪にさわつた樂器店の旦那は早速と學生に昨夜の、『或る化學者が……』の一伍一什の話をして高折君の鹽麵麭を罵倒したぢや。そして音樂學校の學生風情の音樂に大阪の人間は滿足して居ないと云ひ居つた、此男は一寸話せる男ぢやての、よいかな。

■すると學生達はぷん〳〵と怒りをつた、そして高折君は僕達の仲間で立派な腕のある男じや、昨夜は旅の疲れで少しは惡かつたかも知れぬが、立派な腕のある男だと常から評判されて居るんだ、君等は解りもしないのに、惡口は人一倍に云ふが、それが音樂の理解者だと思ふのか僕等はどんな事があつても高折君のピアノを鹽麵麭だとは思へないと云ふたじや。

■樂器店の旦那も腹を立てゝ、いくら立派な腕を持つて居ても味もそつけもない音樂を聽かせて、高い入場料を取るのは詐欺じやと云つて遂々學生を追拂つてしまつたぢや、

■扨、玆じやて、の、皆さん、此學生共は玄人になる玉子じやが、其の邊が事がちつとも解つて居なさらない、若し吾輩が其の學生であつて、樂器店の旦那に、さう罵倒されたら、斯う云つてやるぢや。

■そりや御尤もで御座いやす、さう云ふ深刻なる批評をして下すつてこそ、我々は益々刺戟され、向上をするのです、誠に結構な御觀察で、いや早や恐れ入りやした。併し私共は飽く迄も高折君をそんなに下手だとは思ひたくありません、若し私共が仲間の誰れ彼れの技量を批評したり、罵倒したりする事が出來得る樣になれば、私共の腕は休止してしまひます、私共は唯、誰れは自分より上手だから何んでも、あの人よりは上手にならねばならぬ、否、先生よりも上手にならねばならぬ、と云ふ一心がある計りです、貴郎は素人の立場として私共によい刺戟を與へて下さいました、私共は玄人としての立場から高折君を通して好い教訓を得ました、畢竟は立場が違ふから考へ樣も違ふのです、と云ふぢや。

■何事も立場ぢやぞな、自分の立脚點を明にして置く事は處生の根本義ぢ

やでなツ。皆の衆も解つたかの、ウムよし〳〵。

（『新音樂』第一巻第三号、大正七年七月、二八〜二九頁）

大正四年十二月二十五日　第三回箏演奏会

第三回箏演奏番組　大正四年十二月二十五日(土曜日)午後一時 神田一橋通町東京音樂學校分教場にて開會

第一部

一、八段　阿久津イノ　栗田駒野　百名津る　高宮あい

二、秋の七草　村田講師　楊照　田島一子　福田初子　三絃 阿部キイ

三、高砂　山本美代子　三絃 山口講師

四、鶴龜　溝口俊子　三絃 山口講師

五、早春興　高橋講師　正親町輝　井上逸子　三絃 渥美繁野

六、椿づくし　小野ハナ　保坂ミキ　本間キク　清水シヅ

七、御大禮奉祝 御代萬歳　教授吉丸一昌作歌　講師山口菊次郎作曲　松島糸壽　清澤務　堀井榮彦　爲廣ふき子　上田梅代　鳥居若榮　同尺八 津田雨篁

第二部

八、六段　同替手 高橋講師　加賀すゑ　增田やゑ　毛利富士　若杉美幸　坂川群子

九、かざしの雪　井上よし子　吉田ふで子　齊藤かつ　三絃 村田講師

十、八段　鈴木志舞　三絃 山口講師

十一、都の春　村田講師　谷口こま　植野コサノ　椋原なを子

十二、御大禮奉祝 御代萬歳　教授吉丸一昌作歌　教授今井新太郎作曲　今井教授　服部きく　阿部キイ　渥美繁野　渥美富貴　佐川國　高橋秀　三絃 中江なを

十三、左計　蜂須賀ハツネ　今井花子　加藤柔子　山口講師　同三絃 松島糸壽

十四、晒　中江なを　高橋秀　佐川國　渥美繁野　渥美富貴　柴田ムメ　阿部キク　服部きく　三絃 今井教授

東京音樂學校分教場

大正五年二月十九日　学友会第十六回土曜演奏会

■去る二月十九日第十六回土曜演奏會を開く。曲目左の如し。

一、混聲合唱　會員
　母よさらば……吉丸一昌歌／成田爲三曲
二、洋琴獨奏　土方貞
　狂想曲、嬰ヘ短調作品五……メンデルスゾーン
三、高音獨唱　武岡鶴代
　歌劇『ユーゲノット教徒』中の小姓の抒情調　マイアーベーア
四、次中音獨唱　水野康孝
　歌劇『ローエングリーン』中のローエン
　グリーンの告別の歌……ヴークナー
五、男聲四重合唱　會員
　進取の歌……露國民謠／吉丸一昌曲
六、洋琴獨奏　鹽島美喜
　ソナータ、ヘ短調、作品二……ベートーヱン
七、中音獨唱　花島秀
　甲、歌劇『サムソンとダリラ』中の一節……サン-サーンズ
　乙、歌劇『セミラミーデ』中の一節……ロッシーニ
八、ヴイオリン獨奏　荒木得三
　司伴樂、ニ長調、作品二百十二……メンデルスゾーン
　（第一、第二樂章）
九、低音獨唱　樋口信平
　甲、
　乙、
十、混聲合唱　會員
　歌劇『アイーダ』中の凱旋軍歡迎合唱……ヱールデイ
　君ケ代……林廣守
　（『音樂』學友會、第七巻第四号、大正五年四月、九一頁）

大正五年十一月十九日　邦楽会第七回演奏会

曲目

富本
一、四十八手戀所譯（てこひのしよわけ）をし鳥の段　三味線　上調子　富本　名見崎　名見崎　名見崎　得壽　得壽　多賀　豐々齋

河東
二、熊野（ゆや）　山彦秀翁　連中

長唄
三、吾妻（あづま）八景（けい）　長唄　吉住　吉住　吉住　杵屋　杵屋　杵屋　小三郎　小三郎　小四郎　六三郎　六四郎　長三郎　同三味線　同上調子

（休憩十分間）

一中
四、鉢（はち）の木（き）　シテ　ワキ　三味線　菅野　菅野　菅野　吟平　序遊　利三

新内
五、千日寺名殘鐘（せんにちでらなごりのかね）　三味線　富士松　吾妻路　加賀太夫　宮古太夫

常磐津　文字太夫
六、壽靭猿　常磐津　志妻太夫
　　常磐津　鳴渡太夫
三味線　常磐津　小花太夫
上調子　常磐津　八百八
　　常磐津　和歌吉
　　常磐津　菊三郎

大正五年三月二十五日　卒業式

第二十七回生徒卒業式順序（大正五年三月二十五日）

一、卒業證書授與
一、校長告辭
一、文部大臣祝辭
一、卒業生總代謝辭

演奏曲目

第一部

一、ピアノ獨奏　器樂部卒業生　足立ふさ
　ハ短調ロンド（作品一）……ショッパン作曲
二、獨唱（次低音）　聲樂部卒業生　水野康孝
　祕密……ヴォルフ作曲
三、オールガン獨奏　甲種師範科卒業生　厨二郎
　ハ短調パツサカーリア（ツエルナー編）……
　……バ作曲
四、ヴァイオリン　甲種師範科卒業生　清水勝藏
　ニ短調コンチエルト中のロマンス（第二番、作品二十二）
　……ヴィーニアフスキー作曲
五、獨唱（高音）　聲樂部卒業生　花島秀
　歌劇「豫言者」中のカヴテイーナとアーリア……
　……マイヤーベーア作曲
六、ピアノ獨奏　器樂部卒業生　鈴木采
　ニ長調ソナタ（作品二十八第一樂章）…ベートーヴェン作曲
七、獨唱（次低音）　聲樂部卒業生　柴田知常
　歌劇「道化師」の序歌……レオンカヴッロ作曲
八、ピアノ獨奏　器樂部卒業生　井上はる
　ト長調狂想的ロンド（作品百二十九）…ベートーヴェン作曲
九、ヴァイオリン　器樂部卒業生　大場勇之助
　ト長調コンチエルト中のアレグロ及アダーヂヨ……
　……モーツアルト作曲

第二部

十、箏　選科修了生　箏　阿部キイ
　同　同服部きく
　同　高橋秀
　三絃教授　今井新太郎
　松風……眞砂一
　中能島檢校
　三世山本檢校　合作
十一、獨唱（低音）　研究科聲樂部修了生　金健二
　歌劇「タンホイザー」の中の歌合戰…ヴァーグナー作曲
十二、ピアノ　器樂部卒業生　榊原直
　ト短調コンチエルト（第一樂章）……デゥセーク作曲
十三、ヴァイオリン獨奏　器樂部卒業生　多忠亮

主題と其替へ手……………ロード作曲

十四、ヴィオロンチェロ　器樂部卒業生　犬井英夫

ホ短調コンチエルト（作品三十四、第二樂章）………リンドナー作曲

十五、獨唱（最高音）　研究科聲樂部修了生　長坂好子

歌劇「ディノーラ」中の對影アーリア………マイヤーベーア作曲

十六、ヴァイオリン　研究科器樂部修了生　田中ひさ

イ短調コンチエルト（第五番作品二十一）………モーリック作曲

十七、合唱

い、祈禱の歌………ヴエーバー作曲

ろ、太平頌………ロンベルグ作曲

は、ヴエルメランドの歌………瑞典民謠

（『東京音樂學校一覽』自大正十五年至大正十六年）

大正五年五月二十一日　邦楽会第五回演奏会

一、河東　邯鄲（かんたん）

三味線　山彦山子
　　　　山彦千代
　　　　山彦秀翁
上調子　山彦八重

二、富本　夫婦酒替ぬ中仲（めをとざけかはらぬなかく）（鞍馬獅子）

三味線　富本豊
　　　　名見崎得壽々
同　　　富本いろは
　　　　名見崎得壽齋
上調子　名見崎千代太郎
　　　　名見崎多賀

三、常磐津　忠臣藏二段目桃井館の段（もものゐやかただん）

三味線　常磐津文字太夫
　　　　常磐津和歌太夫
　　　　常磐津三津太夫
　　　　常磐津小文字太夫
　　　　常磐津文字兵衛
上調子　常磐津菊三郎

―（休憩十五分間）―

四、新内　明烏夢泡雪（あけがらすゆめのあはゆき）

　　　　富士松加賀太夫
三味線　吾妻路宮古太夫

五、一中　道成寺（だうじやうじ）

　　　　都太夫一中
三味線　都一秀
上調子　都一花

六、長唄　石橋（しやくけう）

長唄　富士田音藏
長唄　芳村伊四郎
同　　芳村孝三
三味線　今藤長十郎
同　　杵屋勝藏
上調子　杵屋政次郎
笛　　菊川芳次郎
小鼓　六合新三郎
大鼓　六郷新十郎
太鼓　望月太左吉

大正五年五月二十七日、二十八日　第三十一回定期演奏会

大正五年五月二十八日（日曜日）午後二時

音樂演奏會曲目

東京音樂學校

一、管絃樂

「羅馬の謝肉祭」の序曲………ベルリヨー〔ママ〕作曲

二、管絃樂附きピアノ演奏　助教授　久野ひさ

ほ短調コンサート（作品十一）………ショパーン作曲

三、管絃樂

大組曲「胡桃割り」（作品七十一のイ）……チャイコフスキー作曲

一、小序曲

イ、進行曲

ロ、フェー、ドラジェーの舞踏曲

ハ、亞剌伯の舞踏曲

ニ、支那の舞踏曲

ホ、露西亞の舞踏曲

四、最高音獨唱……教師　ペッツォールド夫人

イ、手琴に（作品五十六、第二番）

ロ、「涙を以て其麵包を食はざる者は」作品十二、第二番）……シューベルト作曲

五、ピアノ獨奏……講師　小倉すゑ

い短調前奏曲及フューグ……バッハ作曲 リスト編

六、合唱（無伴奏）

イ、春の知らせ（作品四十八、第一番）

ロ、鶯の歌（作品五十九、第四番）……メンデルソーン作曲

ハ、歸省（作品六十二）……ブラームス作曲 吉丸一昌作歌

七、管絃樂附きピアノ演奏

は長調コンサート……バッハ作曲

アレグロ

アダージョ

アレグロ

教師　ショルツ

研究生　高折宮次

同　弘田龍太郎

八、三重唱及合唱（管絃樂及オールガン伴奏）

オラトリオ「創造」中の

「天は神の光榮を語る」……ハイドン作曲

オールガン助教授　中田章

九、管絃樂

スイムフォニイ樂詩「前奏」……リスト作曲

指揮者　教師　クローン

Orchestral and Choral Concert

SUNDAY, MAY 28 TH, 1916

AT 2 P.M.

TOKYO ACADEMY OF MUSIC

UYENO PARK

PROGRAM.

1. Overture to "Le Carneval Romain" Op. 9.....*Berlioz.*
2. Concert[o] for Piano with Orchestra in E Minor, Op. 11. .....*Chopin.*

Miss H. Kuno

3. Grand Suit for Orchestra "Casse-noisette" Op. 71a.....*Tschaikowsky.*

1. Ouverture miniature.

a. Marche.

b. Danse de la Fée-Dragée.

c. Danse arabe.

d. Danse chinoise.

e. Danse russe, trépak.

4. Songs for Soprano

a. An die Leyer Op. 56, No. 2.
b. Wer nie sein Brot mit Tränen ass } ...*Schubert.*
Op. 12, No. 2.
Mrs. H. Petzold.

5. Prelude and Fugue for Piano in A Minor....*Bach-Liszt.*
Miss S. Ogura.

6. Choruses a capella
a. Frühlingsahnung Op. 48, No. 1.}
b. Nachtigall Op. 59, No. 4. } ...*Mendelssohn.*
c. Lied aus "des Knaben Wunderhorn"
Op. 62.....*Brahms.*

7. Concert[o] for three Pianos with Orchestra
in C Major .....*Bach.*
Allegro-Adagio-Allegro.
Mr. P. Scholz, Mr. M. Takaori and Mr. R. Hirota.

8. Terzetto and Chorus with Orchestra and Organ
Die Himmel erzählen die Ehre Gottes from the
Oratorio "Die Schöpfung".....*Haydn.*
Organ: *Mr. A. Nakada.*

9. Symphonic Poem for Grand Orchestra
"Les Préludes" .....*Liszt.*

Conductor: G. Kron.

音樂演奏曲目梗概　第二十

一　管絃樂

ベルリオース作

『羅馬の謝肉祭』の序曲（作品九）

本序曲は所謂「標題樂」(program-music)の創始者にして且つ近代管絃編成法（orchestration）の革新者なる佛の天才エクトール、ベルリオース(Hector Berlioz 1803-1869)の作に係り、歌劇『ベンヴェヌート、チェリニ』の序曲と共に此の歌劇の創作時代（卽ち一八三五乃至三七年）に成れるものならんといふ。何となれば本序曲は其初演奏の時日稍後れ居れども、其の主想は全く該歌劇中の樂想に基き居ればなり。ベルリオースの諸序曲中、最も形式に於て完備し、且つ近世管絃樂に特有なる色彩を發揮せるものとして本曲は隨所に歡迎せられたり。曲の構造は最初の短かき快速調（十八小節）に次で緩徐なる挿句を置き之に次で本當の快速調に遷る。快速調の第一主想は歌劇『ベンヴェヌート、チェリニ』の謝肉祭の場の人民の合唱『來よ、來よ、羅馬の民』より取れるもの、又た第二の主想『響け喇叭響け笛響け樂しき鈴太鼓』も同じ合唱より出でたり。此の第二主想は全曲の序節として現はれ

此の序節が歡呼に似たる顫音に終るや美しき緩徐調となり歌劇の第一幕なるテレザ、チェリニ相愛の歌調現はる

此の歌調の終節に於て高音樂器が低音樂器の旋律を一拍後れに追ひかけ、金屬管と打樂器とが複雜なるリズムにて伴奏する箇處は技術の巧妙驚くに堪えたり。頓て快速調に入り、主想は先づ弱音器を附けたるヴァイオリンに現はれ、

暫くして前掲第二主想の最強奏に進む、謝肉祭の狂歡は始まれり。此の歡樂の最中に在りてファゴット、トロンボーン、木管及びホルンが交々前の相愛の佳調を聞かしむるあたりは何等の華美ぞ。かくて歡呼は益々高まり、序曲は全管絃の和聲中に著しく聞ゆる長三度（「イ」―「嬰ハ」）の絶叫に終る。

二　管絃樂附ピアノ演奏

ほ短調コンセルト（作品十一）

ショパン作

短ほ調コンセルトは波蘭の天才ショパン（Frédéric Chopin 1810–1849）が遺せるコンセルト二曲中の一にして、一八三〇年の作に係り、初めてワルソウに演奏せられたり。此演奏は其の第一章快速調（アレグロ）のみに止む。

リストはショパンのコンセルト及びソナタの作に『神彩よりも寧ろ多くの意志』を認むるに難からずと爲せり。而も彼はいふ『ショパンの古典的企圖は稀に見る精美の作風によりて異彩を放ち、非常に興味ある通過句、意外に壯大なる部分を含めり』と

ショパン研究者ニークスはショパンのコンセルトの全體の構造に就て批評し且つ管絃部（殊にピアノと聯合せる場合）の獨奏部に比して聽き劣りすること等を說きたる後、語を改めて曰く、『しかも細部の嬌艶可憐纖麗優雅絢爛なるは能く人をして其の全體上の缺點を忘れしむ』と

本日演奏する快速部（アレグロ）の構造は短ほ調の第一主想に次で長ほ調の第二主想の現はるゝ後長は調の展開部に入り、更に種々の轉調をなすの後短ほ調の第一主想及び長と調の第二主想に歸り、次で短ほ調に終局を結ぶ。作者は創作當時の書簡に於て自ら此の快速部を『活潑』なるものと評せり。

三　管絃樂

大組曲「胡桃割」（作品七一のイ）

チャイコフスキ作

本曲は露國のベートーヴェンといはるゝチャイコフスキ（Peter Tschaikowsky 1840–1893）の晩年（一八九二年）の作。「胡桃割と題する二幕のお伽所作（バレー）（其の筋はホフマンのお伽話に基きアレサンドル（ママ）、ジューマの脚色せるもの）に附せる舞曲の拔萃にして、彼の天才と獨創とは此處にも窺知するを得べし。本演奏には全部八曲中の六を選べり。（ロ）のフェー、ドラジェーは第二幕に現はるゝ神仙（糖菓山の女王）の名なり。

四　最高音獨唱

（イ）手琴に（作品五六の二）

（ロ）泣きつゝ麵麭を食はざりし者は（作品一二の二）

共に近代の小謠の創始者シューベルト（Franz Schubert 1797–1828）の佳作なり。左に歌詞を掲ぐ

An die Leier (nach Anacreon von Bruchmann)

Ich will von Atreus Söhnen, von Kadmus will ich singen!
Doch meine Saiten tönen nur Liebe im Erklingen,
Ich tauschte um die Saiten, die Leier möcht' ich tauschen!
Alcidens Siegesschreiten sollt' ihrer Macht entrauschen!
Doch auch die Saiten tönen nur Liebe im Erklingen.
So lebt denn wohl, Heroen! denn meine Saiten tönen,
Statt Heldensang zu drohen, nur Liebe im Erklingen.

Gesänge des Harfners, No. 2.

(Aus "Wilhelm Meister" v. Goethe)

Wer nie sein Brot mit Tränen ass,
Wer nie die kummervollen Nächte
Auf seinem Bette weinend sass,
Der kennt euch nicht, ihr himmlischen Mächte! (wiederholt)
Ihr führt ins Leben uns hinein,
Ihr lasst den Armen schuldig werden,
Dann überlasst ihr ihn der Pein,
Denn alle Schuld rächt sich auf Erden. (wiederholt)

五　ピアノ獨奏

バッハ――リスト作

い短調前奏曲及びフューグ

本曲はピアノの大家リスト（Franz Liszt 1811-1886）が古きバッハのオルガン曲をピアノ樂に移したる六曲中の一なり。有名なるい短調フューグはバッハの晩年の作にして、彼の圓熟せる技巧を示すものなるが、之をピアノに移したるリストの手腕も等しくバッハ研究者の嘆賞に値す。原作のオブリガート脚鍵盤（ペダル）の音部を左手に配當して、然も他の音部の要點を傷くることなく、バッハの大曲を完全に一箇のピアノに移す如きはリスト以前の技術家の想像し得ざりし所なり。されば本曲の創作はピアノ演奏の歴史上特筆の價値ある一項なりとす。

六　合唱（無伴奏）

（イ）春の知らせ（作品四八ノ一）
（ロ）鶯の歌（作品五九ノ四）　メンデルソーン
（ハ）歸省（作品六二）　ブラームス

前の二曲はロマンチック派の樂家メンデルソーン（F. Mendelssohn 1809–1847）の最も流行せる小歌曲なり。後者はブラームス（J. Brahms 1833–1897）が獨逸の古歌に節付したる佳作、本演奏には邦語の歌詞を用ふ。

(a) Frühlingsahnung (L. Uhland)

O sanfter, süsser Hauch;
Schon weckest du wieder
Mir Frühlingslieder
Bald blühen die Veilchen auch.

(b) Die Nachtigall (v. Goethe)

Die Nachtigall, sie war entfernt,
Der Frühling lockt sie wieder.
Was neues hat sie nicht gelernt,
Singt alte liebe Lieder.

歸　省（吉丸一昌作）

一、歸省の旅にいまぞ出づる
　樂しき思ひ胸にあふれ、つぶやきぬ
　遲々たる車のもどかしさ。疾く疾く行かずや
　　疾く行け小車

二、村里近く見えし時に
　再び低くひとりごちぬ
　あゝ祖國（はゝくに）わがふるさと。疾く行かずや。せきたつ思ひぞ。
　　疾く行け小車

三、うしろの森を前の川を
　行く手に見つゝ高く呼びぬ。
　柿の木見ゆ、松の木見ゆ、我家近し。

四、門邊に立ちて待つは誰ぞや
　おもはず高く聲を立てぬ
　こはや父よ。こはや母よ。おゝなつかし。
　　疾く疾く行かずや
　　疾く行け小車。

七　絃樂附ピアノ、コンセルト　　バッハ作

は長調コンセルト

バッハ（J. S. Bach）は一七二九年より三六年までライプチッヒなるテレマン（Telemann）創立の音樂協會の樂長として聲樂曲のみならず、器樂曲をも發表し、且つ家庭にありては好んで彼の子息及び弟子等と合奏をなせり。此の外部の事情に促されて生れたる曲體は卽ちピアノ、コンセルトにして、絃に奏する三個のピアノのコンセルトも其の一なり。こは彼が以前に創作せるヴァイオリンの三重コンセルトをピアノに移したるものにしてピアノを主となし、之れに絃樂四部（クォルテット）を附隨せしめたる新曲なり（但し本演奏には絃樂のクォルテットをオーケストラに擴大せり）。全部三章に

分れ快速より緩徐を經て快速に終る。各章の構造に就ては其の說明の無味に陷るべきを恐れて徒らに省略し、唯だ此の頸健莊重なる、は長調コンセルトが『バッハの全器樂中最も宏大なるものゝ一なり』（スピッタ）と評せられたることを記すに止む。

八　合唱及び三重唱

ハイドン作

『天は神の光榮を語る』

ハイドン（Joseph Haydn 1732–1809）の名作『創造』は十八世紀の神事樂（オラトリオ）の諸作中、最も傑出せるものにして、歌詞はミルトンの『失樂園』に基きてリドレー(Lidley)の作れるを獨人ヴァン、スウィーテン(van Swieten)が飜譯添削せるものなり。全篇は三部に分れ六日間の創造の光景より極樂園に於けるアダム、エバの幸福までを描寫せり。玆に演奏する一曲は創世の第四日に星辰の燦然として蒼穹に懸れる光景を讃美する天群及び天使の聲にして全篇中最も人口に膾炙せるものなり。本曲は和聲が破格に長は調を固守し且つ合唱部に反覆甚だ多きに拘はらず、二箇處に挿みたる三重唱の極めてロマンチックなる變化によりて、能く聽者の感興を持續す。三重唱『來る日に云々』（"dem kommenden Tag"）に於ける短は調の個處及び『其の語は全世界に傳はり』（"In alle Welt ergeht das Wort"）の消ゆる如く休止に入る終節などは本曲中の最も美しき調といふべし。（本演奏には伴奏管樂器の代りにオルガンを用ふ）

Chor und Terzett aus Haydns "Die Schöpfung."

(Chor)　Die Himmel erzählen die Ehre Gottes
Und seiner Hände Werk zeigt an das Firmament.

(Terzett)　Dem kommenden Tag sagt es der Tag;
Die Nacht, die verschwand, der folgende Nacht.

(Chor)　Die Himmel erzählen etc.

(Terzett)　In alle Welt ergeht das Wort,
Jedem Ohre klingend, keiner Zunge fremd.

(Chor)　Die Himmel erzählen etc.

九　管絃樂

リスト作

管絃樂詩『前奏曲』

リストはベルリオースの感化を受けて標題樂に獨創の傑作を遺せる人なり。彼の考によれば、音樂は何事かを表現し、描寫すべきものなりといふ。此の主義の下に作られたる管絃樂詩の一例は玆に奏する『前奏曲』なり。玆に前奏曲といふ名稱が特別の意味に用ひられ居ることは作者が此の曲の冒頭に掲げたる文句によりて明なり。こは佛の文豪ラマルチーヌの『詩的默想』の一より採れるものにして左の如し。

Les Préludes.

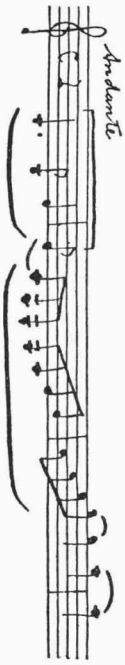
D'après Lamartine.

Notre vie est-elle autre chose qu'une série de Préludes à ce chant inconnu dont la mort entonne la première et solonnelle note?—L'amour forme l'aurore enchantée de toute existence; mais quelle est la destinée où les premières voluptée du bonheur ne sont point interrompues par quelque orage, dont le souffle mortel dissipe ses belles illusions, dont la foudre fatale consume son autel, et quelle est l'âme eruellement blessée qui, au sortir d'une de ces tempêtes, ne cherche à reposer ses souvenirs dans le calme si doux de la vie des champs? Cependant l'homme ne se résigne guère à goûter longtemps bienfaisante tiédeur qui l'a d'abord charmé au sien de la nature, et lorsque "la trompette a jeté le signal des alarmes," il court au post périlleux quelle que soit la guerre que l'appelle à ses rangs, afin de retrouver dans le combat la pleine conscience de lui-même et l'entière possession des ses forces.—F. Liszt.

これによりて見れば、前奏曲とは死後に始まる歌曲の前奏の義にして卽

ち人間一生の運命を指すなり。リストは頗る精密にこの詩意を辿りて之を管絃に寫せり。全曲は五部に分れ、先づ（一）死すべく生れたる人間の相を描き、次で（二）人生の曙光なる戀愛の幸福を寫し、更に轉じて（三）歡樂の夢を破る浮世の嵐、（四）嵐に傷きて求むる田園生活を叙し、最後に（五）此の安逸に滿足せずして再び奮闘生活に猛進する人間を表はせり。

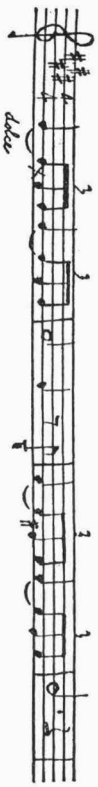
曲の初、絃樂の指奏（ピチカート）に次で其の同音（ユニソン）に現はるゝ主想は死すべく生れたる人間を示すものにして、其の最初の三音は全篇の骨子となりて種々の形に反復せらる。



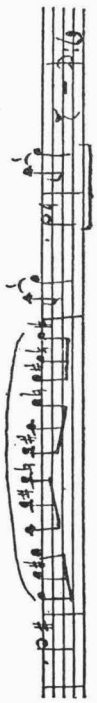
此の序開きの樂句は速かに強さを增し、終にトランペットは次の如き主想の變形によりて萬人を壓服する死の相を描く。

此の一句は曲の終局に再現して首尾生死を連結す。これより更に同一主想の柔和なる方面ともいふべき次の美しき歌調に移り

來るべき戀愛の幸福を豫想せしむ。頓て夢みる如き愛の旋律初めホルンとヴィオラに起り、木管に移るの後ヴァイオリンに至りて更に婉美を加ふ。



されど愛の旋律は間もなく長き吐息に消えて幸福は突如として終りを告ぐ。長き一音に續く長き休止。次で低音より物凄き嵐の音起り狂暴を極む。



此間に次の興奮せる旋律は運命の手より逃れんと努むる人間を示すが如く聞かる。

〔批評および関連記事〕

■オイテルペクヮルテットも近く演奏會を開くと云ふ様な話もある。東京音樂學校の春季大演奏會が未曾有の大成功をして兩日滿員の盛況を見たのは近年稀有の現象である。これ等も我中央の樂界が漸く根强い地盤を得來つた一證左と見る可きであらう。

（『音樂』學友會、第七卷第六号、大正五年六月、六八頁）

□東京音樂學校春季音樂演奏會　五月二十八日午後二時から校内の樂堂で催さる、こゝで無くては見られぬ修養ある聽衆が堂に滿ちてゐた、奇禍に遇つて再び樂壇に立つべしと信じられざりし久野ひさ子教授のピヤノの全快後初公演と新歸朝の小倉末子講師の初演奏あり

（『音樂界』第一七七号、大正五年七月、六八～六九頁）

大正五年六月三日、四日　学友会春季演奏会

學友會春季大演奏會開會廣告

▲時日　大正五年六月四日（日曜日）午後二時開會

▲會場　東京音樂學校講堂

樂聖グルツク不朽の名作

歌劇『オルフェオ』全部演奏

獨唱者	オルフェオ	花島秀子孃
	百合姫	長坂好子孃
	愛の女神	武岡鶴代孃

合唱隊及管絃樂隊二百餘名
指揮者　東京音樂學校助教授　大塚淳氏
本會々員及會友に限り參聽の便宜を得らるべきにつき證票御携帯の上定刻十分前に御入場有之たし
五月七日
東京音樂學校學友會
（『月刊樂譜』第五巻第六号、大正五年六月、広告頁）

大正五年六月十日　第一回選科生徒演奏会

■同日同刻〔午後二時〕神田一ツ橋東京音樂學校分教場で第一回の選科生徒演奏會が次の曲目に依つて開かれ、瀬戸口樂長の指揮の下に海軍々樂隊の出演もあつた。

第一部、一、三重合唱、凱旋、帝國海軍々樂歌、クリューゲル曲、吉丸一昌歌。二、洋琴獨奏、丹羽あや子、ロンド　ブリランテ、ヹーバー。三、ヴイオリン齊奏、吉武しゆん、浦邊幸子、宮川俊子、甲、小話、乙、進行曲、ヨーセフ　ブロック。四、風琴獨奏、山口心子、露西亞國歌進行曲、クラーク。五、洋琴獨奏、齋藤敦子、ニ長調、ソナータ、ハイドゥン。六、ヴイオリン獨奏、内田定、小歌調、ラッフ。七、洋琴獨奏、桑木素子、ソナータ、作品四十二、第二番、ベートーヱン。八、二重合唱、丹羽あや、小平やゑ、吉田周子、小林ちよ。墓前の母、ロッスィーニ。九、風琴獨奏、川崎隆子、歌劇『フーゲノット〔ママ〕教徒』中の一節、『貴婦人』マイアーベーア。十、洋琴獨奏、松本廣、ヴルス　ブリラン、作品三十四、ショパン。十一、ヴイオリン二重奏、猿渡貞子、穂積壽賀子、ソナータ、作品二、第八番、ヘンデル。十二、洋琴獨奏、高嶺敬子、トゥロイカ、チャイコフスキー。十三、二重合唱、選科女生徒、船路、アプト。第二部、十四、ロ短調、スィンフォニー、シューバート。十五、グラン　ヴルス　ブリラン、ショパン。十六、歌劇『ディノーラ』中の抜萃、マイアーベーア。十七、特性曲『森のささやき』、チブルカ。十八、歌劇『トスカ』の幻想曲、プッチーニ。右五曲皇國海軍々樂隊演奏。
（『音樂』學友會、第七巻第七号、大正五年七月、八八頁）

大正五年七月八日　学友会第十七回土曜演奏会

學友會記事

■七月八日午後二時より左の曲目に從ひ第十七回土曜演奏會を擧行し、信時潔氏指揮の下にメンデルスゾーンのアタリア（樂頌てふ譯歌にて）の演奏ありたり。

一、合　唱　會　員
戦死者の靈に……〔チャイコフスキー曲 / 大須賀績歌〕
二、ピアーノ獨奏　阿保寛
バラーデ、作品七……ラインベルガー
三、ソプラーノ獨唱　金子豊
主題と替歌……ロード
四、ヴイオリン獨奏　草川信
主題と六つの替手、作品八十九……ダンクラ
五、アルト獨唱　下山英
歌劇『みんな斯うする』の一節……モーツァルト

六、ヴイオリン
小司伴樂、作品二十一、第一樂章……ジ　ッ　ト　田中英太郎
七、ピアーノ獨奏　宇佐美ため
華麗なるロンド、作品六十二……ヱ　ー　バ　ー
休　憩
八、ピアーノ獨奏　チェームス　ダン
ソナータ、作品二、一番……ベ　ー　ト　ー　ヹ　ン
九、バス獨唱　山崎善太郎
歌劇『ユーヂン』中のボローニの小歌調…ア　レ　ギ　ー
十、ヴイオリン　田中靜
ホ短調司伴樂、第八番……ロ　ー　ド
十一、ピアーノ獨奏　室岡清枝
ソナータ……ヱ　ー　バ　ー
十二、合唱　會員
アターリア……メンデルスゾーン

（『音樂』學友會、第七巻第八号、大正五年八月、八三頁）

大正五年九月二十四日　邦楽会第六回演奏会

一、河東
七重八重花の栞（なゝへやへはなのしをり）（花の栞）
山彦千代　山彦鶴子　山彦秀翁
三味線　山彦〆子
上調子　山彦八重

二、富本
奈須野（なすの）
富本豐　名見崎得壽々　富本かつ　名見崎得壽齋
三味線　名見崎多賀
上調子　名見崎千代

三、清元
六歌仙の内文屋の康秀（ぶんやのやすひで）
清元延壽太夫　清元家内太夫　清元政太夫
三味線　清元梅吉
上調子　清元吉太郎

――（十五分間休憩）――

四、一中
末廣（すゑひろ）
シテ　菅野序遊
ワキ　菅野利三
三味線　菅野吟平
上調子　菅野美知

五、常磐津
忍夜孝事寄（しのぶよるかうのことよせ）（將門）
常磐津文字太夫　常磐津志妻太夫　常磐津彌生太夫　常磐津小文字太夫
八百八改　常磐津文字兵衛
三味線　常磐津和歌吉
上調子　常磐津菊三郎

六、長唄
四季の山姥（しきのやまうば）
吉住小三郎　吉住小一郎　吉住小桃次
三味線　杵屋六四郎　杵屋和三郎　杵屋四郎治

大正五年十月二十八日、二十九日　学友会秋季演奏会

■十月廿八日、廿九日の兩日學友會秋季大演奏會を開いた。廿八日は降らなかつたので滿員であつたが、廿九日は雨天であつたにも不拘八分通りの來會者のあつたのは心強い事であつた。尤も廿九日は會員と會友とが主となつて居るので音樂に對する熱心が強いからと思はれる。振舞切符を貰はなければ聽かうとしない第三四流の徒輩に比すと、流石に我學友會はよい音樂の鑑賞家を網羅し得て居る事を知るのである。入退會の跡を名簿に依つて調べて見ると興味ある多くの問題の説明が其統計の文字の上に現はれて居る。遊戯的態

度の人、ひやかし半分に入會した人、眞劍にこれに生きる人、これを愛してゐる人、それぞれの態度が鮮明に表はれて居る。因に指揮者は大塚助教授であつた。

一、管絃樂
　甲、泉　作品三十一……………………リスベルヒ
　乙、草刈女、作品四十五………………ラビツキー
二、風琴獨奏　　　　　　　　　　　井上武士
　おゝ、いとも聖きものよ（變奏曲）…………シルドクネヒト
三、管絃樂
　ロ短調スィムフォニー（第八番）…………シューバート
四、ソプラーノ獨唱　　　　　　　　内田琴
　歌劇『ウイリアム　テル』中のマティルダの華想調……………………ロッシーニ
五、管絃樂
　甲、愛の挨拶、作品十二…………………エルガー
　乙、とかげとかへる（特性描寫曲）…………モース
六、洋琴獨奏　　　　　　　　　　　渡邊とり
　幻想的即興樂、作品六十六…………ショパン
七、バリトーン獨唱　　　　　　　　柴田知常
　甲、歌劇『惡魔』中のアリオーゾ………ルービンシュタイン
　乙、理想……………………………トスティ
八、ヴイオリン　　　　　　　　　　荒木得三
　イ短調司伴樂……………………アッコレー
九、ソプラーノ二重唱　　　長坂好子　武岡鶴代
　歌劇『フィーガロの婚禮』中の二重唱……モーツァルト

（『音樂』學友會、第七巻第十一号、大正五年十一月、八二頁）

大正五年三月十九日　邦楽会第四回演奏会

一中節
一、泰平船盡（たいへいふなづくし）
　シテ　都太夫一中
　ワキ　菅野序遊
　ツレ　菅野利三
　三味線　都一秀
　上調子　都一花

薗八
二、桂川戀の柵（かつらがはこひのしがらみ）
　シテ　宮薗千香
　ワキ　宮薗千眞
　三味線　宮薗千春
　同　宮薗千代

常磐津
三、蜘蛛絲梓弦（くものいとあづさのゆみはり）
　常磐津文字太夫
　常磐津和歌太夫
　常磐津歌男太夫
　三味線　常磐津式松
　常磐津和歌吉
　上調子　常磐津喜代松

――（十五分間休憩）――

新内
四、雙紋刀銘月（ふたつもんかたなのめいげつ）
　（お花半七井筒屋の段）
　富士松加賀太夫
　三味線　吾妻路宮古太夫

富本
五、母育雪間鶯（はゝそだちゆきまのうぐひす）
　（山姥）
　富本豐
　名見崎得壽々
　富本かつ
　三味線　名見崎得壽齋
　名見崎多賀
　上調子　名見崎千代

長唄
六、紅葉狩（もみぢがり）
　長唄　芳村孝次郎
　長唄　芳村伊四郎
　同　芳村孝三郎
　三味線　今藤長十郎
　三味線　杵屋勝四郎
　同　杵屋勝藏
　笛　菊川芳次郎

大正五年十一月十六日　皇后行啓演奏会

御大禮奉祝合唱歌……（歌　吉丸一昌／曲　教授　島崎赤太郎）謹作
御大禮奉祝進行曲……助教授　大塚淳　謹作
立太子禮奉祝合唱歌……文部省
立太子禮奉祝合唱歌……（歌　教授　大須賀績／曲　教授　島崎赤太郎）謹作

第一部

一、オールガン獨奏……助教授　中田章
　祝典前奏曲……レンマンス作曲
一、最高音獨唱……聽講生　長坂好子
　旅人の歌……（グーノー作曲／大須賀績作歌）
　　ヴアイオリン助奏　聽講生　蜂谷龍子
　　ピアノ伴奏　研究生　山口節子
一、ピアノ獨奏……助教授　久野ひさ子
　イ、春の曲……グリーク作曲
　ロ、練習曲……ショッパーン作曲
一、チエッロ及ピアノ合奏……（チエッロ　助教授　信時潔／ピアノ　研究生　高折宮次）
　ソナタ……ルービンスタイン作曲
一、合唱……生徒一同
　イ、幼兒……（露西亞民謠／旗野十一郎作歌）
　ロ、秋……（和蘭民謠／吉丸一昌作歌）

第二部

一、ピアノ獨奏……講師　小倉すゑ子
　狂想曲……サン、サーンス作曲
一、ヴアイオリン獨奏……聽講生　田中ひさ子
　幻想曲……ヴユータン作曲
　　ピアノ伴奏　聽講生　石原和子
一、次低音獨唱……講師　船橋榮吉
　イ、春を惜む……（マッスネ作曲／大須賀績作歌）
　ロ、印度の調……（ベンベール作曲／大須賀績作歌）
　　ピアノ伴奏　助教授　貫名美名彦
一、ヴアイオリン及ピアノ合奏……（ヴアイオリン教授　多久寅／ピアノ教授　萩原英一）
　ソナタ……フランク作曲
一、管絃樂……職員及生徒
　戲曲「ラルレジエンヌ」中のメヌエット及
　　フアーランドール……ビゼー作曲

皇后陛下にはかねて仰せ出されたる如く、十一月十六日正午十二時御出門、千種典侍御陪乘、大森皇后太夫、蜂須賀主事以下を從へさせられ、東京音樂學校に　行啓遊ばされたり。湯原校長以下職員生徒一同門内に整列して鹵簿を迎え奉る。零時四十餘分着御、校長の御先導にて便殿に入らせ

られ、勅任官以上に謁を賜ひ、御少憩の後、島崎助教授の指揮する『君ケ代』の合唱聲裡に奏樂堂中の玉座に着御、左の曲目中第一部を聞し召され、第二部の演奏に移る間湯原校長の御先導にて新館に玉歩を運ばせ給ひ、同館階上に陳列中の雅樂、能樂、聲明其他邦樂の古文書、古書畫、樂器面等を御覽あり、黒木講師、多講師及び東儀講師御説明申し上ぐ。終つて再び便殿に入御、御少憩の後再び湯原校長の御先導にて奏樂堂内の玉座に着御、第二部の演奏を聞し召され、四時五十分島崎教授の指揮する管絃樂の『君ケ代』奉奏裡に御けしきうるはしく御退場遊ばされ、便殿に入御後直ちに、御還啓仰せ出さる。陪聽の來賓及び湯原校長以下職員生徒一同再び門内に整列し、恭しく鹵簿を送り奉る。

當日御前演奏の榮を擔ひし光榮ある諸氏、及び演奏曲目は次の如し。

（『音樂』學友會、第七巻第十二号、大正五年十二月、一二二～一二三頁）

演奏曲目梗概

御大禮奉祝合唱歌　　曲　教授　島崎赤太郎　謹作

大正四年十一月十日本校に於て　御大禮奉祝式を擧行せし際職員生徒の合唱せしものにして又た同年十二月二十三日　御大禮奉祝音樂演奏會を擧行せし時　伏見若宮妃殿下　同姫宮殿下の台臨を仰ぎて　御前に演奏せり。

歌詞　　吉丸一昌　謹作

九重の雲居仰げば
現つ神我大君は
天つ日嗣知ろしめすと
天つ御祖に告げたまひ
高御座にぞ今即かすなる。
あなたふと。あなたふと。」

天地の八十神達は
皇御孫をいはひまつりて
海の内外天の下に
君の御稜威をあふがしめ
嚴し御代とぞ幸ははすらん。
あなかしこ。あなかしこ。」

皇御神の御依しを
成し幸はふる大君の
御代のはじめの今日の日に
逢へる民草うれしさに
うたひ出づるかいにしへの歌
御民われ
生けるしるしあり
天地の榮ゆる時に
逢へらくおもへば

本曲の第一第二兩節は變ホ長調にして壯嚴なる體に作れり。第三節よりは變イ長調に轉じ曲趣快活となりて萬民欣喜の狀を寫せり。終りの古歌に附したる曲はハ長調にして、低音より高音に至る四音部が相前後して同一のふしを奏する如き作法を用ひ、萬民口々に古歌をうたふといふ詞の意に適へたり。此の節を了るや調は再び最初の變ホ長調に返り、諸音一齊に『あなうれし』の歡呼にて曲を結ぶ。

御大禮奉祝進行曲　　助教授　大塚　淳　謹作

本曲は祝祭進行曲の體に作り、奉祝の意を表せり。全曲三部に分れ、第一部と第三部とは同一曲にしてヘ長調なり。其の中ごろに進行稍ゝ緩徐となりて木管樂器オーボエの聯奏をなす一節は殊に莊重に作れり。第二部即ち中間進行は變ロ長調にして、此處は二つの相異るふしが同時に現はるゝ如き作法を用ひたり。

立太子禮奉祝合唱歌　　文部省

本月三日　立太子禮奉祝式擧行の際全國諸學校に於て合唱したる曲にして文部省の撰定に係る。

歌　詞

めでたき代代のためしとて
　壺切のたちつたへます
今日は生日の足日なり
　いざや祝はん諸共に

光さしそふ大御代の
　日嗣の御子の御さかえは
千秋五百秋かぎりなし
　いざや祝はん諸共に

立太子禮奉祝合唱歌　曲　教授　島崎赤太郎　謹作

本月三日本校に於て　立太子禮奉祝式擧行の際職員生徒の合唱せる曲なり。

歌　詞　教授　大須賀績　謹作

明治の帝産れましゝ
　菊花の佳節しのびまつり
今日の御典にありたゝす
　皇太子を祝ぎまつる。

み國の力外にふるふ
御稜威の光仰ぎまつり
御代を常磐に繼ぎまさむ
皇太子を祝ぎまつる。

第一部

一、オールガン獨奏　レンマンス　作曲

祝典前奏曲

レンマンス（N. J. Lemmens　1823—1881）は白耳義の著名なるオールガン奏者にして其の作曲も亦少からず。本日演奏する曲は活潑なる短曲にして全部所謂スタッカートの奏法を用ひ、各音の間を切斷して奏す。曲は三部に分れ、第一部及び第三部はニ長調、中間の第二部はト長調なり。本曲は手鍵盤二列と脚鍵盤一列を用ひて演奏す。

一、高音獨唱　グーノー　作曲

旅人の歌

グーノー（Ch. Fr. Gounod　1818—1893）は佛蘭西近代の最も優れたる作曲者の一人なり。本日演奏する曲は彼が作れる小歌曲中の秀逸に屬し、ト長調八分六拍子の婉美なる調なり。ピアノ伴奏の外に別にヴァイオリンの助奏あり。其の奏するふしは歌者の聲と相競ひて一段の光彩を添ふ。

歌　詞　大須賀績　作

一

あはれ情なき旅の夕
夕日かすかに峯を染めて
風の芒に光ゆらぐ
　ああ　うたへや旅人　永久に　うたへ
　いざ　懐かし　み親に
　祈れ　祈れ　ああ　永久に

二

はるか聞ゆる谿流のひゞき
喉の渇きに音をたづね
木闇たどれば雉子どよむ
　ああ　うたへや旅人　永久に　うたへ
　いざ　嵐來ぬ　稍に
　鳥も　息へ　ああ　息へ

三

行手晴れゆく霧の帳
淡き灯火ゆらぐ見れば
里も近けむ砧響く

ああ　うたへや　旅人　永久に　うたへ
いざ　安らけき　眠に
汝も　休め　ああ　休め

一、ピアノ獨奏

（イ）春の曲　　グリーク作曲

グリーク（Edvard Grieg 1843—1907）は諾威第一の作曲家にして其作る所の曲は何れも北歐特有の風調を具へ且つ詩趣に富めり。こゝに奏するは精美なるピアノ小曲の一にして『春に與ふ』と題せり。

（ロ）練習曲　　ショッパン作曲

ショッパン（Fr. Chopin 1810—1849）はポーランドに生れたる樂人にして專らピアノの奏者及び作者として其の比類なき天才を發揮せり。其の作に係るピアノ曲は現時樂界に最も賞美せらるゝものにして、殊に本曲の如きは其の秀逸中に數へらる。こは一八三一年作者の故郷なるワルソー市が露國に占領せられたる時、作者異境に在りて其の報に接し憤激の餘に作れるものなりと傳ふ。ショッパンの諸作中最も雄大の趣あるものなり。

一、チェッロ及ピアノ合奏

ソナタ　　ルービンスタイン作曲

ルービンスタイン（Anton Rubinstein 1829—1894）は露國有數の作曲家にして、ピアノ演奏の名人なり。彼の作曲は概ね壯大にして熱情に富めるを特徴とす。本日演奏するは其の佳作なるチェロ及ピアノのソナタ（全部三曲より成る）の第一曲にしてニ長調の快速なる進行なり。

一、合唱

（イ）幼兒　　旗野十一郎作

本曲は露西亞の民謠調にしてヘ調四分ノ二拍子の極めて單純なる曲なり。

歌詞

あゝあはれ幼兒ほど
うつしみの世の中に
樂しきはまたとなし
をとつひの片言も
今日ははやものがたる。

あゝ此處まで來よ
なにやらむ風車
めぐる日の重なれば
竹馬の乘りぶりも
今ははやものなれつ

や　いつか敎へぬ間に
君が代のほぎうたも
ふしつけて歌ふなり
もの學ぶよはひに
はやもなれ幼兒よ

（ロ）秋　　吉丸一昌作

本曲は和蘭の古き民謠にして曲趣頗る輕快なり。

歌詞

一見よや雲居を飛ぶや白雲
噫　空は高し　噫　風は寒し
外山の紅葉は　はら〳〵こぼれて
噫　空は高し　噫　風は寒し
二聞けや蟲の音啼くや夜すがら
噫　月は清し　噫　露は白し
空には雁が音友呼ぶ聲々
噫　月は清し　噫　露は白し

第二部

一、ピアノ獨奏

狂想曲　　サン、サーンス 作曲

サン、サーンス（Camille Saint=Saëns 1835—）は現時佛國樂界の重鎭にして其の作曲は各方面に亘りて甚だ多し。こゝに奏する曲は十八世紀の名歌劇『アルセスト』の中なる舞踏の調を採りて之れを改作したるものにして、狂想曲とは曲趣の變化極まりなきをいふなり。

一、ヴァイオリン獨奏

幻想曲　　ヴュータン 作曲

ヴュータン（Henri Vieuxtemps 1820—1881）は名高きヴァイオリン樂の奏者及び作者にして其の作品は普くヴァイオリン演奏者の間に珍重せらる。幻想曲とは一定の形式によらざる曲の義なり。

一、次低音獨唱

（イ）春を惜む　　マッスネ 作曲

マッスネ（Jules Massenet 1842—1912）は近時佛國樂界に於ける最も著明なる作曲家の一人なり。こゝに奏する小曲はヘ短調四分四拍子の極めて緩徐なる悲調なり。

歌詞　　教授 大須賀 績 作

おゝ綠もゆる若草其香も失せぬ
鳥もすさめず音を絶え嵐に怖ぢぬ
歡び去りて胸内の花凋む
歌神　ゆくへ知らず
燕くぐる　青柳　恨は長き　雨脚　春を送る
名殘ぞ　あはれ

（ロ）印度の調　　ベンベール 作曲

ベンベール（Henri Bemberg 1859—）は猶太の人にして巴里に音樂を學修し、現今作曲者として聲名あり。本曲はロ短調四分三拍子にして（イ）の曲と同樣に緩徐なる悲調なり。

印度の調　　教授 大須賀 績 作

ブラァマ！　われらの　もていつく神　聞し召せ祈を。
この河波　咽ぶが如く　音をば泣く　われは、
吾がいとし兒の　行方いづら、はしき吾が兒よ！　眼な
かひに
もとなかかりて　安いしなさぬ。
噫　吾が兒いづら　吾が兒いづら。
岸打つ浪も　音なく夜くだつ　闇に立ちて　耳を調へば
ああ
稚兒の泣く聲　聲はいづら　水底の底の　闇路ゆく
心。
いまぞ祈らむ　神のみ手に　汝をば捧げぬ、
吾が佛　さきく　いませ。

一、ヴァイオリン及びピアノ合奏

ソナタ　　フランク 作曲

フランク（César Franck 1822—1890）は優れたるオルガン奏者にして又天才ある作曲家なり。リエジ市の生れなれども巴里に在りて此地の音樂院に教鞭を採り、多くの新進佛蘭西作家に影響を及ぼせり。こゝに奏する曲は作者が自耳義のヴァイオリンの名手イザイの爲に作り、イザイが之を樂界に紹介せる曲なり。本演奏には全部四曲の中、最初の一曲を省きて第二曲より始む。此の第二曲は快速なる進行にしてソナタ形式に作られ、次の第三曲は緩かなる進行にして自由なる幻想曲なり。第四の稍〻快速なる曲は所謂カノンの作法を用ひて、一音部が他の音部を模倣して追ひかくる樣に作れり。

一、管絃樂

戲曲「ラルレジェンヌ」中のメヌエット及
ファーランドール　　ビゼー 作曲

ビゼー（Georges Bizet 1838—1875）は佛國の著名なる作曲者にして劇樂の方面に名作を遺せり。こゝに奏する二曲は佛國文豪ドーデの書きたる『ラルレジェンヌ』といふ劇の中に挿む爲めに作りたる數曲中のものにし

て、メヌエットは四分ノ三拍子の優美なる舞踏曲、ファーランドールは八分ノ六拍子の快活なる舞踏曲なり。

〔批評および関連記事〕

光榮ある東京音樂學校

初冬の冷氣漫ろに迫る十一月十六日正午皇后陛下には上野公園東京音樂學校へ行啓遊ばされ。音樂堂に臨御、奏樂をいと御興深く聽召された。殊に中田助教授のオルガン獨奏祝典前奏曲（レーマンス作）の活潑なスタッカート演奏法を初め久野ひさ子女史のピアノ獨奏の如きは　陛下が豫てより幸田延子女史に就て御修練ありし事とて殊更に御感斜ならずグリーク作の『春の曲』北歐特有の風調詩趣に富める小曲を聽召され尚ほチエロとピアノの合奏（信時潔高折宮次兩氏）にては壯大にして熱情に富める情趣を偲ばせた右異つて新館へ臨御雅樂能樂長唄等の圖書及び古今に亘る珍らしき樂器類を覽はされ種々御下問あり約卅分にて再び奏樂堂に成らせられ第二部演奏に移つた時に二時四十分小倉すゑ子女史のピアノ獨奏は佛國樂界の重鎭サンサーンスの作で曲趣の變化極りなき狂想曲、田中ヒサ子のヴアイオリン獨奏はビユータンの幻想曲、船橋榮吉氏の次低音獨唱『春を惜む』『印度の調』等悲調極まりなく、次でヴアイオリンピアノ合奏職員生徒の管絃樂妙なる調べをいと御熱心に御傾聽遊ばされ畢つて諸官奉送中に御機嫌麗しく還啓相成りしは午後四時であつた（信）

（『月刊樂譜』第五巻第十二号、大正五年十二月、一二頁）

大正五年十二月三日　久野久子女史恢復祝賀演奏会

□豫報の如く學友會は女子大學櫻楓會と共に久野久子女史の快復祝賀演奏會を去る十二月三日午後二時より本校奏樂堂に於て開催した。幸にも江湖諸賢の熱心なる御同情によつて豫期以上の盛會たることを得たのは一同の喜びに堪えないところである。當日第二ピアーノを以つて女史を助けられる筈であつたショルツ氏が差支へあつて來られなかつたためにショパンの司伴樂は女史自ら第二洋琴の部迄彈奏されたが、最後のリストの交響樂詩匈牙利はピアーノ二臺のための曲故これはやめて其代りにメンデルスゾーンのホ長調のリード一曲を加へ、左の如き順序を以つて首尾よく演奏を終つた。

一、ソナータ　アッパショナータ……ベートーヱン

　甲、アルレグロ　アッサイ

　乙、アンダンテ　コン　モート

　丙、アルレグロ、マ　ノン　トゥロッポ

二、甲、春に寄す、作品四十三、六番……グリーヒ

　乙、那威の嫁入行列、作品十九、二番……グリーヒ

三、第一大司伴樂……ショパン

　第一樂章

四、ラプソディー、ト短調、作品七十九、二番……ブラームス

五、甲、リード、ホ長調……メンデルスゾーン

　乙、エチュード、ハ短調、作品十、十二番……ショパン

六、歌劇『リゴレット』の書き替へ曲……リスト

女史は情熱の藝術家である、そして又力のピアニストである、或る意味に於て女史のセックスよりもより多く男性的であると云へる、勿論よい意味の男性的である。女性は纖細巧緻の點に於て自己の立つ可きメリットを作り、男性的な剛放粗大なところに立つて成功する、襖を隔てゝ女史の演奏を聽く時何人もそれが女性の纖手によつて成されるとは思はないであらう。實に雄大な、剛壯なもので

ある、何人をも威壓し去り、何物をも燒き盡さうとする、玆に女史の藝術の偉大があり、同時に多少のドゥローバックもある兎に角、我樂壇に女史を有することは吾人の大なる幸福である。

卽ち女史が今度の大成功を贏ち得た所以は玆にある。

（『音樂』學友會、第八巻第一号、大正六年一月、一〇〇頁）

大正五年十二月九日　学友会第十八回土曜演奏会

□學友會は十二月九日に第十八回の土曜演奏會を開き、左の曲目に依つて專ら新進の人々を紹介した。

一、合唱　會員

甲、讃歌……（モーツァルト曲　大須賀績歌）

乙、春祭り……（メンデルスゾーン曲　大須賀績歌）

二、低音獨唱　矢田部勁吉

歌劇『靈笛』中のサラストゥロのアリア……モーツァルト

三、洋琴獨奏　島秀代

ロンド……デュセック

四、高音（アルト）獨唱　藤巻滿江

秋に、作品十七、六番……フランツ

五、ヴイオリン二重奏……（草川信　成田爲三）

サムフォニー　コンセルタント、作品百九、三番　ダンクラ

六、合唱　會員

黄昏に、作品六十四、二番……（ブラームス曲　大須賀績歌）

七、洋琴獨奏　濤川貞江

ソナータ、作品十、一番……ベートーヱン

八、上高音（ソプラーノ）獨唱　小櫻幸

プール　ディチェスティ……ロッティ

九、風琴獨奏　眞篠俊雄

英國國歌の主題とその變奏曲……リンク

十、洋琴獨奏　淺野愛

タランテル、作品八十五、二番……ヘルラー

（『音樂』學友會、第八巻第一号、大正六年一月、一〇一頁）

大正六年二月二十四日　学友会第十九回土曜演奏会

■第十九回土曜演奏會は去月二十四日左の曲目にて盛會裡に擧行致し候。

一、合唱、甲、春の夜、乙、三崎傳説の歌、露國民謠、大須賀績歌。

二、洋琴獨奏　金子眞佐

變ホ長調ソナータ作品十三の最終樂章……フムメル

三、アルト獨唱　廣田チヅエ

歌劇『アルチェステ』中の抒情調……グルック

四、洋琴獨奏　川上きよ

第三前奏曲と追復曲（平均率洋琴曲）……バッハ

五、テノーア獨唱　近藤義次

甲、手琴に寄す……シューバート

乙、夜の歌……シューバート

六、絃樂四重奏

第五重奏曲……………………………ハイドゥン

{第一ヴイオリン 田中英太郎
第二ヴイオリン 草川信
ギオーラ 北原季男
ギオロンチエルロ 平井保三}

七、ソプラーノ獨唱

歌劇『椿姫』中のギオレッタ抒情調…………ヹールディ 長坂好子

八、洋琴獨奏

ハ短調ソナータ、作品第十の一番第一樂章……ベートーヹン 西ともゑ

番外、テノーア獨唱

歌劇『マノン』中のグリューの夢…………マッスネー 澤崎定之

九、合唱、『ローザムンデ』中の牧人の合唱 ……シューバート

■合唱は信時助教授の熱心なる指揮の下に美しく演奏され申し候殊に船橋、樋口、廣田等の諸氏がこれに加はりて獨唱部を助けられたる美しき謙譲は忘るべからざる事に有之候。

■久し振りにて學友會の曲目に絃樂四重奏が現はれ候事喜ばしく候。皆天眞爛漫たる態度にて熱心に演奏致し候。益々勉められて今後益々此種のアンサムブルを聽かせて戴き度希望致し候。

■洋琴は全部久野助教授につきて學び居らるゝ人々にて何れも初舞臺なりしにも拘らず皆落着きてよく演奏致し候。

■聲樂は豫報の如く全部研究家の諸氏なりしだけ一層緊張して拜聽出來候。或は澁く或は華かに、何れ劣らぬ出來榮えに有之候ひしかば遠くより聽きに參られし人々は涙を流して喜ばれたる程に有之候。

■廣田孃は近頃滅切り上達せられ候。又久しく長野に隠れ居られ久方振りにて出演されたる近藤氏の進歩も驚ろく可きものに有之リード歌手として侮る可らざるインタープレテーションを示され候。氏の前途は刮目して待つべきものならんと存じ候 長坂、澤崎兩氏の出來榮えは申す迄もなく滿場恍惚境に運び去られ申し候

■ペツォルド夫人と久野助教授が何れもお差支へありしを繰り合せて來場せられ、出演者を助け下されし御好情も亦記憶せざるべからざるものと存じ候。

(『音樂』學友會、第八巻第三号、大正六年三月、八五頁)

大正六年三月十一日 邦楽会第八回演奏会

一、河東節
玉菊水(みづ)調(てう)子(し)
追善

三味線 山彦山子 山彦千代子 山彦秀翁 山彦かん子

二、富本
拙筆(にじりがき)力七以呂(ななついろ)波(は)
(乙姫)

富本豊
三味線 名見崎得壽々 名見崎豊かつ 名見崎得壽齋
上調子 名見崎多賀 名見崎豊千代

三、長唄
機(しづ)賎(はた)帯(おび)

吉住小三郎 吉住小三藏 吉住小十郎
三味線 杵屋六四郎 杵屋六郎
上調子 杵屋彦之助

——休憩十五分間——

四、清元
新曲 助(すけ)六曲輪菊(くるわのもゝよぐさ)

清元延壽太夫 清元喜久太夫 清元正太夫
三味線 清元梅吉
上調子 清元梅之助

新内
五、八重霞浪花濱荻（やへがすみなにはのはまをぎ）かしく新屋敷の段
常磐津　富士松　加賀太夫
三味線　吾妻路　宮古太夫
六、釣女（つりをんな）
常磐津　文字太夫
常磐津小文字太夫
常磐津歌男太夫
三味線　常磐津武松
上調子　常磐津和歌吉
常磐津喜代松

■三月十一日午後一時より同校に於て邦樂會第八回演奏會があつて非常な盛會であつた。曲目は本誌三月號卷頭の廣告中に於て豫告した通りであるから省く。此會が回を重ねるに從つて眞面目に邦樂を聽かうとする會員を加へて行くことは誠に喜ばしいことである。なほ入會希望の向は東京音樂學校邦樂調査掛内邦樂會事務所宛申込まれるとよい。
（『音樂』學友會、第八卷第四号、大正六年四月、六二頁）

大正六年三月二十四日　卒業式

大正六年三月二十四日（土曜日）午後一時三十分

卒業證書授與式順序

東京音樂學校

卒業證書授與式

一　卒業證書授與
一　校長告辭
一　文部大臣祝辭
一　卒業生總代謝辭
一　演奏曲目

第一部

一、ピアノ獨奏……器樂部卒業生　古谷幸一
ハ短調ロンド（作品一）……　ショパーン作曲
二、ヴアイオリン……甲種師範科卒業生　草川信
イ短調コンチェルト（第七番、作品九、第一樂章）……　ロード作曲
三、ピアノ……器樂部卒業生　宇佐美ため
ト短調コンチェルト（第一樂章）……　デウセーク作曲
四、最高音獨唱……聲樂部卒業生　武岡鶴代
歌劇「ディノーラ」中の對影アーリア……　マイヤーベーア作曲
五、オルガン獨奏……　眞篠俊雄
ハ短調二重フーガ（レダレンツイの主題）……　バッハ作曲

第二部

六、箏
組合せ
奥組　雲井曲（本雲井調子）……　八橋檢校作曲
選科修了生　佐川國
中組　末松（平調子）……　北島檢校作曲
選科修了生　渥美繁野
同　渥美富貴
七、ピアノ……器樂部卒業生　室岡清枝
イ短調コンチェルト（作品八五、第一樂章）……　フンメル作曲
八、ピアノ及ヴアイオリン合奏
ヴアイオリン　研究科器樂部修了生　柴崎ヤス
ピアノ……　石原かず子

（長調ソナタ（第五番、作品二四、第一楽章）…… ベートーベン作曲

九、ピアノ……研究科器楽部修了生　高折宮次

ト短調コンチェルト（作品五八、第一楽章）…… モッシェレス作曲

十、合唱

い、祭祀の歌 …… シューベルト作曲

ろ、夕暮の歌 …… フックス作曲

は、繪畫と彫刻 …… フックス作曲／高野辰之作歌

Graduation Exercises
OF THE
TOKYO ACADEMY OF MUSIC
UYENO PARK
Saturday, March 24th, Taisho 6 (1917).
At 1. 30 P.M.

PROGRAM.

I. Presentation of Diplomas.
II. Address to the Graduating Class by the Director.
III. Address by His Excellency Okada, Minister of State for Education.
IV. Response by the Representative of the Graduating Class.

PART I.

1. Rondo for Pianoforte in C Minor Op. 1 .....Chopin.
Mr. K. Furutani.
2. Concerto for Violin in A Minor No. 7, Op. 9
(I movement) .....Rode.
Mr. S. Kusakawa.
3. Concerto for Pianoforte in G Minor
(I movement) .....Dussek.
Miss T. Usami.
4. Schattenarie for Soprano from the Opera
„Dinorah“ .....Meyerbeer.
Miss T. Takeoka.
5. Double Fugue for Organ in C Minor
(Theme by Legrenzi) .....Bach.
Mr. T. Mashino.

PART II.

6. Kumiawase for Koto.....Yatsuhashi and Kitajima.
Miss K. Sakawa, Miss S. Atsumi and Miss F. Atsumi.
7. Concerto for Pianoforte in A Minor Op. 85
(I movement) .....Hummel.
Miss K. Murooka.
8. Sonata for Pianoforte and Violin in F Major
No. 5, Op. 24 (I movement) .....Beethoven.
Violin: Miss Y. Shibasaki, Piano: Miss K. Ishiwara.
9. Concerto for Pianoforte in G Minor Op. 58
(I movement) .....Moscheles.
Mr. M. Takaori.
10. Choruses:
a. Des Tages Weihe .....Schubert.
b. Ständchen
c. Ich liebe, was fein ist. } .....Fucks.

音樂學校卒業演奏

上野の樂堂から出た五十有餘名の樂人の卒業式は去廿四日を以て擧行され、次で演奏會があつた。

▲數番の演奏中際立つて心耳を新にせしめたのは、室岡清枝氏のピアノでした、曲はフンメル作のイ調コンチエルト（作品八五第一樂章）であつたが、あの暢々した彈奏振と其鮮かさは、實に得も云はれぬ心地せしめられた、女史の將來や極めて有望である、樂界の爲に自重を望む

▲宇佐美ため子氏のそれも、力籠れる彈き方であるが、其感傷的な處に特徴を見ると同時に缺點も現はれる、此邊に留意し徒に焦らず着々步を進めらるる樣に希望する。

▲武岡鶴代氏は最高音で歌劇デイノーラ中の對影アーリアを獨唱したが、遉によき體格の人とて苦しげな處がなく、アクセントも亦明かなので、氣持よく聽かされた、但し今後どれ程發達するかは疑問である。

▲箏曲界の大家今井慶松氏に指導された佐川國子、渥美繁野、同富貴子三氏の箏曲は當日の一異彩であつた、曲は「雲井曲」と「末松」の組合せで、斯界で稀に聽く彈じ方であつた同じメロデーであるとは云へ兩者の力合す意氣が合はぬと兎角一方に引込まれ易いものであるのに、そんな危かしい氣が更になく、すつくりと調和し、其上高い調子（佐川氏）低い調子（渥美姉妹）の唱は、違つた歌詞を聽く心地せしめぬ程洗練されて居たので、荒ぶ窓外の風雨の音も耳に入らず聽き惚れた、余は思ふ此三女史は數多の洋樂中にあつて、邦樂の爲めに萬丈の氣を吐いた。

▲室岡清枝氏のピアノは本科卒業生中の白眉であらう此人には達者なテクニツクの美くしさに和らか味が備はつて非常に好い心持を與へた、研究科卒業の柴崎やす子のヴアイオリンと同高折宮次のピアノとは言ふ迄もなく結構なもので最後にシユーベルトの祭祀の歌、夕暮の歌と繪畫と彫刻といふ三曲の合唱があつて午後五時芽出度卒業式は終つた

（『月刊樂譜』第六卷第四號、大正六年四月、一七頁）

大正六年五月十三日　邦楽会第九回演奏会

荻江
一、深川八景
　唄　萩江ひさ
　同　かく
　三味線　萩江八重
　同　うめ

菅野一中
二、自然居士過去物語
　シテ　菅野序遊
　ワキ　菅野利三
　三味線　菅野吟平

富本
三、幾菊蝶初音道行（忠信）
　富本豐
　名見崎得壽々
　名見崎豊かつ
　三味線　名見崎得壽齋
　上調子　名見崎多賀

箏曲
四、奈須野
　箏　今井慶松
　箏　今井門人　氣鴐慶重
　三味線　今井門人　塚田正井
　胡弓　山室千代

——休憩十五分間——

常磐津
五、積戀雪關扉
　常磐津松尾太夫
　常磐津志妻太夫
　常磐津兼字太夫
　常磐津文字兵衞
　三味線　常磐津菊三郎

新内
六、浦里時次郎明烏後の眞夢
　富士松加賀太夫
　富士松喜昇

長唄
七、外記猿
　長唄　芳村孝次郎
　長唄　芳村伊四郎
　同　芳村孝三郎
　三絃　今藤長十郎
　同　杵屋勝藏
　上調子　杵屋勝四郎
　笛　菊川芳次郎
　小鼓　六合新三郎
　大鼓　六郷新右衞門
　太鼓　六郷新十郎

大正六年五月二十五日、二十六日　第三十二回定期演奏会

大正六年五月二十六日（土曜日）午後二時開會

音樂演奏會曲目

東京音樂學校

一、管絃樂

變ホ長調シンホニー（第一番）……ハイドン作曲

二、合唱

イ、慶たしマリアよ（女聲）……ブラームス作曲

ロ、慰安の歌（混聲）……レーガー作曲

三、ヴァイオリン……教授　安藤幸

コンチェルト（作品六十四）第二章及第三章…メンデルソーン作曲

四、管絃樂

舞踏の勸誘……ベヴェリーオベール作編曲

五、高音獨唱……研究生　花島秀

歌劇「アルセスト」中のアーリア……グルック作曲

六、管絃樂付きピアノ……教師　シヨルツ

變ニ長調コンチェルト……ヴェルクマイステル作曲

七、管絃樂及オールガン付き合唱

希伯來の旋律……ブルッフ編

八、管絃樂

歌劇「ニュルンベルクの平民歌手」の前奏……ワーグネル作曲

指揮者　教師　ダスターブ、クローン

PROGRAM
OF
CONCERT
SATURDAY, MAY 26TH, 1917
AT 2 P.M.
TOKYO ACADEMY OF MUSIC
UYENO

PROGRAM.

1. Symphony with the drum-roll (No. 1, E flat major) ……*Haydn.*
   Adagio–Allegro con spirito,
   Andante,
   Minuetto,
   Allegro con spirito.
2. *a*) "Ave Maria" for female voices with piano ……*Brahms.*
   b) "Consolation" for mixed voices with piano ……*Reger.*
3. Concerto for violin (Op. 64) 2nd and 3rd movement ……*Mendelssohn.*
   Mrs. K. Ando.
4. "Invitation to the dance" for orchestra (Op. 65). ……*Weber-Berlioz.*
5. Aria for alto from "Alceste" ……*Gluck.*
   Miss H. Hanashima.
6. Concerto for piano with orchestra (D flat major) ……*Werkmeister.*

7. Three Hebrew melodies for mixed voices with organ and orchestra.....*Bruch.*
Organ: *Mr. A. Nakada.*
8. Prelude to "Die Meistersinger von Nürnberg".....*Wagner.*
Conductor: G. Kron.

音樂演奏曲目梗概　第二十一

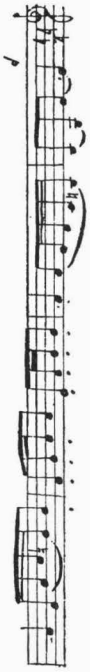
一　管絃樂

變ホ長調シンフォニー（第一番）　ハイドン作

本曲は『シンフォニーの祖』と呼ばるゝハイドン（J. Haydn 1732—1809）の圓熟期の作にして英國に於て作れる『ロンドン、シンフォニー』十二篇（一七九一—九四年作）中の一なり。全篇四曲より成り。其の初めに別に序節を加ふ。序節は銅皷（チンパニ）の連打の後、管絃の同音（ユニソン）を以て表はさるゝ神祕なる緩徐進行（四分三拍子）にして

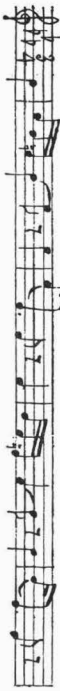
後、第一快速曲に至りて再び『開展部』に現はれ、更に最後の尾節に於て最も巧妙に用ひらる。

（一）快速部（八分六拍子）の形式は型通りのソナータ形式にして、其の主樂想



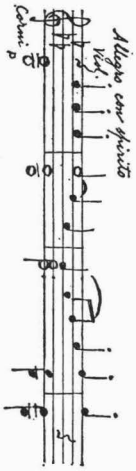
（二）緩徐曲（ハ短調四分二拍子）はヴァリエーション（變手）形式に作らる。二十四小節に亘るハ短調の主樂想に續きて進行曲風なる等長のハ長調樂想を現はし、それより僅かに二つの變手を添へて終る。第二樂想の第一變手はヴァイオリン獨奏を以て人耳を惹き、第二の變手は力強きを以て優る。延聲（フェルマータ）の後に始まる尾節は天才の妙技を示すものとして後人の嘆賞措かざる所なり。或は言ふ『ベートーヴェンは英雄シンフォニーの葬送進行曲創作の際、必ずや此の緩徐曲、殊に此の尾節を心裡に浮べたるならん』と

（三）メヌエット曲、本曲はメヌエットと題すれども、既に其の最初の主樂想



の旋律及び節奏より見るも單に快活なる舞踏曲にあらざるを豫知し得べし。其の漸く進むに從ひ異常なる轉調を用ひて曲は益々沈欝悲壯の趣ある特性曲たることを示す。構想の自由は主部よりも中部殊にトリオヴァイオリンがホルンの樂句を引延ばし行く箇所に認むるを得べし。

（四）終曲は最初に表はるゝ唯一の主樂想に基けり。僅々數音を材として斯くまで變化と美とに富める一曲を編成するは實に對位法（コントラプンクト）技術の最大功績［ママ］にして眞に驚嘆に値す



二　合　唱

（イ）アヴェ、マリア（女聲）　ブラームス作

（ロ）慰安の歌（混聲）　レーゲル作

（イ）はブラームス(Joh. Brahms 1833—1897)の作品十二（一八六一年）にして彼の合唱曲の初作なり、最初二つに分れたる聲音が互に他を模しつつ三度の音程にて上下するあたりは『聖母の尊像に花を手向けんとて禮拜堂に詣づる二群の善女を想はしむ。』『聖マリアよ』の句より以下は四聲合して豐麗なる和聲を成す。

（ロ）は近く夭折したる天才、マクス、レーゲル（Max Reger 1873—1916)の『三合唱曲』（作品六）の一なり。歌詞は憂き世の悲嘆に慰安の必ず伴ふ意を述べあり

三　ヴァイオリン

ほ短調コンツェルト第二及第三章　メンデルソーン作

メンデルソーン（F. Mendelssohn 1809—1847）は一八四四年ロンドンに繁忙なる二月を過したる後暫く妻子を伴ひてフランクフルト附近のゾーデンに幸福なる夏期を送れり。此の間に成れる名作は卽ち本曲にして、今日ベートーヴェンのコンツェルトと並んでヴァイオリン樂の極致と評せらる。否な、彼の傳記者ウォルフの說に從へば『獨奏樂器をして一層十分に樂想の負擔者たらしめ、且つ全篇の構造を一層簡潔ならしめたる點に於ては、かの曲よりも更にコンツェルトの理想に適へりと言ふべく、又たベートーヴェンのもの程に困難にはあらずとも、其の技巧は一層華美にして、然も單なる技巧に流るゝ事なく如何にも自然に樂曲の內容を發揮するの觀あり』『ヴァイオリン演奏のあらゆる妙趣は此の一篇に含まれたり』といふ。こゝに奏するは第二の曲部（ハ長調八分六拍子緩徐曲）及び短かき經過部（四分四拍子の過度ならざる稍快速曲）を通じてこれと連絡せる終曲（フィナーレ）（ホ長調四分四拍子の甚だ活潑なる快速曲）なり

四　管絃樂

舞踏の勸誘　　ウェーベル作

一八一九年に作られたる本曲はヴェーベル（C. M. v. Weber 1786—1826）のピアノ曲中最も獨創に富み且つ新紀元を劃する創作なり。主要部はワルツ圓舞曲にして其の前の部分は舞踏開始前の劇的光景を次の如くに描けり。紳士先づ近きて勸誘するに（小節一—五）婦人應ぜず（五—九）重ねて誘へば（九—一三）此度は其意に從ひ（一三—一六）それより暫く會話をなしたる後（一七—二五）さらば始めんと紳士の言ふに（二五—二七）婦人之に應じて（二七—二九）共に歩みより（二九—三一）進み出でゝ開始を待つ（三一—三五）これに次ぐ快速部は卽ち舞踏曲にして或は輕く舞ひ或は狂ひて踏る樣宛ら目前に迫るが如し。此の舞踏の中頃にも暫く二人の會話あり。舞踏終局を告げて後は紳士謝辭を述べ婦人これに答へて共に退出し、こゝに全曲は眞の終局を結ぶ

本曲は理想化したる舞踏曲の嚆矢として後世ショパンの舞曲の模範となれるのみならず、ワルツに活潑なる速度を採り入れたる點に於てヨハン、シトラウス等の作風の基を開けり

本演奏の管絃曲は管絃編成法の名家なるベルリオースが本來のピアノ曲を管絃樂に改作せるものなり

五　高音獨唱

歌劇「アルセスト」中のアーリア　　グルック作

十八世紀の歌劇改革者グルック(Gluck 1714—1787)の本歌劇は彼の四大傑作の一にして、其の筋はユーリピデースの悲劇に基きたり。北部希臘フェレーの王アドメートス病篤くして死に瀕す。アポロの神託によれば、其の身代りとして犧牲となるものなくば本復覺束なしといふ。皇后アルセスト私かに此の犧牲たらんと決心し、玆に奏する歌調によりて之を幽界の神に告ぐ。アドメートス此の事を知り、妃によりて己の救はるゝを肯ぜず。相携へて幽界の門に下る。偶々英雄ヘラクレースの來るありて二人は無事に救助せらる。本曲は歌詞と音樂との密接なる關係を保てる點に於てグルックの劇樂に對する主義を見事に示す實例といふを得べし

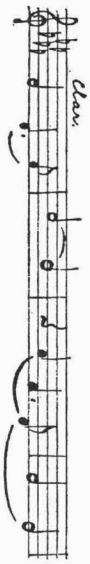
六　管絃樂付きピアノ

變ニ長調小コンツェルト　　ヴェルクマイステル作

本校セロ、ピアノ及び作曲法の教師ウェルクマイステルの作なり。作者自身の說明によれば、本曲は全部一連に作られ、四部に區分せらる。卽ち

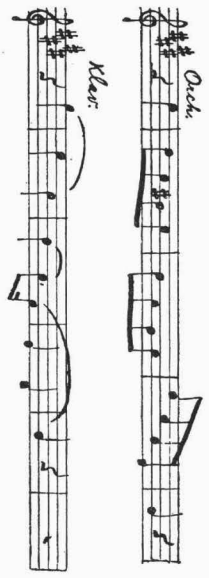
緩徐部（Andante sostenuto）活潑なる快速部（Allegro con brio）極緩部（Lento）活潑なる快速部（Allegro）是なり。

曲頭八小節の後ピアノは次のクラリネット獨奏に伴奏しつゝ琶音を以て現はる



ピアノとクラリネットとは此の歌調的樂想を交互に受授し、頓てピアノは短かき尾節（コーダ）を經て活潑なる快速部に移る。此處に全管絃は次の短かき主樂想（嬰ハ短調）を以て加はる

此の樂想は此の部分に主要なる位置を占むるものにして曲節に快活の趣致を添ふ。之に次で短小なる副樂想起り、恰も管絃とピアノとの對話の如くに聞ゆ



最強奏に高まるの後、快速部の第一主樂想再び現はれ、クラリネットの段落ありて極緩部の主想に移る

ピアノと管絃とが此の主樂想を交々承けて現はすの後次の樂想を有する尾節（コーダ）（活潑なる快速部）に達す

次で短かき管絃總奏ありて再び曲頭の嬰ハ短調主樂想に歸り、此度は變ニ調になれる極緩部を經て最終尾節（コーダ）に終局を結ぶ。

七　管絃樂オールガン付き合唱

希伯來の調　　ブルッフ編

管絃樂付合唱歌の作者として最も秀でたるブルッフ（Max Bruch 1838―）が英國文豪バイロンの『希伯來調』に編曲せるものなり、凡て三曲あり。『バベルの河邊に泣きしものを悼め』は沈欝、『彼女の行く樣は雲なき星の夜の如く美し』は優雅、『ジョルダンの岸にアラビアびとの駱駝さまよふ』は悲憤の調に充てり。

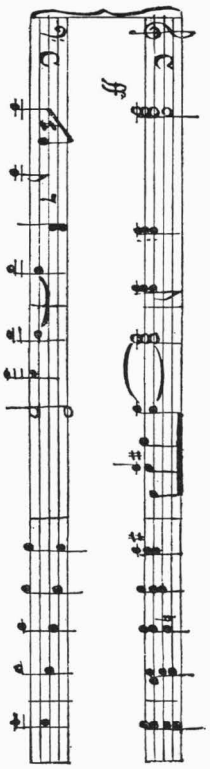
八　管絃樂

歌劇『ニュルンベルク平民歌人』の前奏曲　　ワグネル作

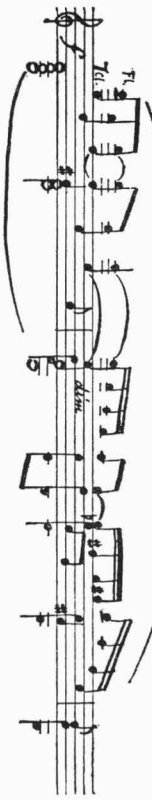
本歌劇（一八六八年初演）はワグネル（R. Wagner 1813―1883）作の歌劇中、唯一の喜劇にして、材料を歴史に採れり。平民歌人（Meistersinger）とは十四乃至十六世紀の頃に現はれたる平民階級の歌人にして、獨逸の諸市に其の組合を設け、煩瑣なる規則を立てゝ技藝を審査し、上達の程度に應じて五段の階段を區別し、其の最上位のマイステル卽ち名人と呼べり、かゝる名人の中にて最も著明なるはニュルンベルク市のハンス、ザックス（Hans Sachs 1494―1576）なり。ワグネルは此の史的事實を十分に研究したる後、次の如き筋を構成せり。組合の一人なる銀工ポグネルは『歌人』の道を奬勵せんとの熱心より、聖ヨハネの祭日を撰びて競技を催ふし、勝者には娘エヴァに巨額の持參金を添へて贈らんとす。騎士ワルテルといふものエヴァを愛する一念より平民の組合に加入して、其日の競技に列せんと決す。されど彼は入門の試驗に合格すべき規則を知らず、又た試驗の採點者なりしベックメッセルは彼と同じくエヴァを貰ひ受けんと望み居る者

なりければ、熱心を籠めたる彼の歌曲も空しく失敗を招くに過ぎざりき。然るにハンス、ザックスは流石に一道の達人なれば、ワルテルの歌曲に自然の情熱の表はれたるを認め、私かに彼の作物に添削を施して競技に加はらしむ。其の結果ワルテルは民衆喝采の裡にベックメッセルを打負して首尾能く懸賞を獲るといふに終る。——ワグネルは此の歌劇に於て自然の情熱が煩瑣なる規則よりも優れることを諷せりといふ。

前奏曲は歌劇の諸齣に現はるゝ樂句を用ひて、豫め歌劇の內容を略叙せり。先づ曲頭に次の威嚴ある樂想を以て

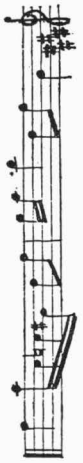


平民歌人を示し、次でこれと對照をなす激情的樂句によりて



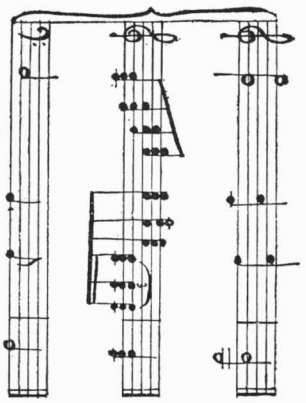
エヴァを獲んとするワルテルを描寫す。暫くして眞鍮管に奏せらるゝ『平民歌人』の進行曲風は競技當日の壯觀を想はしむ

ハ長調よりホ長調に轉ずるの後、樂はワルテルの懸賞歌曲の一節を表して、此の騎士を暗示し



次で最初に出でたる『平民歌人の樂句』を短縮せる一種特性ある樂句によりて高慢なるベックメッセルの容態を想像せしむ。

此處にワルテルの樂句は頻に反抗を試むれども、ベックメッセルは容易に屈せず、終に民衆の喧擾の加はるに及びて漸く排斥せらる。此の混雜の最中に歌人の樂句現出して衆人に靜肅を命ずるに似たり。かくて萬事は圓滿なる解決を得て、『歌人』と『進行曲風』と『ワルテル』との三樂想は美しき調和をなして響く



〔関連記事〕

■五月二十五（金曜日）二十六（土曜日）の兩日午後二時より、東京音樂學校春季音樂演奏會ありたり。曲目は左の如し。指揮者、教師　グスタフ　クローン〔曲目省略〕因に、ショルツ教師の演奏せられし洋琴司伴樂は本校作曲及びギオロンチェルロ教官ハインリッヒ　ゼルクマイスター教師が大正五年中に作曲せるものにして、氏が近業中最も苦心せる大作の一つなりとす。

（『音樂』學友會、第八巻第六号、大正六年六月、六四頁）

大正六年六月九日、十日　学友会春季演奏会

■六月九、十の兩日午後二時より本校奏樂堂に於て學友會春季演奏會を開催せり。兩日とも雨天、斯かることは過去八年間類のなきことなりとす。

一、合　唱　　會　　員

甲、歌劇『蝶子夫人』中の船唄（ハミング）…ゞールディ

乙、歌劇『道化師』中の鐘の合唱……レオンカヴルロ

二、洋琴獨奏　　島　秀代

夜の曲、ホ長調、作品十七……フィールド

三、高音獨唱　　下山　英

歌劇『サムソンとダリラ』中のダリラの愛の歌……

……サンーサーンス

四、ヴイオリン　　田中英太郎

小司伴樂　第二、第三樂章……ジット

五、洋琴獨奏　　淺野あい

奏鳴樂　イ短調、作品四十二……シューバート

六、上高音獨唱　　武岡鶴代

歌劇『リゴレット』中のヂルダの歌（いとしの名）……

……ゞールディ

七、絃樂合奏　　會　員

黄昏曲（第二、及第四）……フックス

八、絃樂合奏　　會　員

洪　水……サンーサーンス

九、洋琴獨奏　　濤川貞江

光耀旋轉曲……ゞーバー

十、ギオロンチェルロ獨奏　　平井保三

祈禱の歌……マックス　ブルッフ

十一、深音獨唱　　柴田知常

甲、歌劇『シモン　ボッカネグラ』中のフイエスコの

宣叙調と物語調……ゞールディ

（くだけしこゝろ）

乙、歌劇『マクベス』中のバンクォーの宣叙調と

抒情調……ゞールディ

（恰もみ空よりさかしまに）

番外、ヴイオリン　　末吉雄二

第二司伴樂……ブルッフ

番外、洋琴獨奏　　助教授　久野ひさ

一、嬰ハ短調奏鳴樂、作品二十八……ベートーゞン

（ムーンライト　ソナータ）

二、甲、練習曲、ハ長調作品十……ショパン

乙、諧謔曲、嬰ハ短調作品三十七……ショパン

十二、合唱附獨唱　　會　員

ギオレッタ　内田琴

アルフレッド　澤崎定之

歌劇『身を誤る女（トウラヴィアータ）』中の酒宴の歌……ゞールディ

指揮者　合唱、教授　萩原英一

絃樂、助教授　大塚淳

（『音樂』學友會、第八巻第七号、大正六年七月、六二～六三頁）

六月の樂壇

まつの

六月の樂壇は中々賑やかなものでした。〔中略〕九日十日の二日間開かれた東京音樂學校學友會主催の大音樂會は折りからの大降りの雨續きにも拘らず、久野女史のピアノ獨奏が非常な人氣をあつめたせいか兩日共滿員のと云ふ盛況。だが久野女史はあまり期待した程のものではなかつた。かえつて此頃めつきりと上達したのが學校の合唱團を少しあしらつて「トラビヤタ」のアリアを唱ふつた內田琴子氏の獨唱が快よいものであつた。〔後略〕

（『月刊樂譜』第六卷第七号、大正六年七月、三四頁）

大正六年七月七日　学友会第二十回土曜演奏会

■去る七月七日午後二時半より第二十回土曜演奏會を開く。懸念せし程暑からず、曇りたれば豫期せしよりも涼し。

一、合唱　會員
　夜の窓の前に立ちて……マスカーニ
　歌劇『田舍の騎士』中の合唱……マスカーニ
二、洋琴獨奏　高木タケ
　ハ長調旋轉曲　作品二十四……ゼーバー
三、低音獨唱　矢田部勁吉
　甲、プローヴンスの歌……マッスネー
　乙、歌劇『靈笛』中のサラストゥロの抒情調……モーツァルト
四、洋琴獨奏　水野濟
　嬰ヘ長調奏鳴樂　作品七……ベートーゼン
五、高音獨唱　藤卷滿惠
　夜のごと靜けし、作品三百二十六、二十七番……ボーム
六、深音獨唱　山崎善次郎
　歌劇『アウリスのイフィゲニー』の一節…グルック
七、ヴイオリン獨奏　草川信
　祈りの歌……ブルッフ
八、上高音獨唱　金子豐
　神事劇『天地創造』中のガブリエルの抒情調……ハイドゥン
九、洋琴獨奏　渡邊トリ
　ポロネーズ……ショパン
十、合唱　會員
　歌劇『ファウスト』中の舞踏の歌……グーノー

（『音樂』學友會、第八卷第八号、大正六年八月、五八頁）

土曜演奏を聽く

關重廣

七月七日久し振りで上野の樂堂に入つた、暑いのにもかゝはらず聽衆は可成り多い、最初の合唱が終ると、高木竹子氏が現れて、ウエーバーのクロマチツクな難かしいロンドを暗譜で一氣に彈いた。實に見事、蓋し當日の白眉である。熱烈なる練習の効もさることながら背後にある久野久子女史の偉大なる力を今更の如く想はせた。矢田部賢吉氏のマスネーのプローワンスの歌もよかつた。音量もあり聲もよい。頭腦も充分ある、凋落せる現今の聲樂部のために萬丈の氣を吐きしもの、氏の未來は輝いて居る。我國唯一の低音獨唱家となる日も遠くはあるまいと思はれる。

以上の二つで小田原から聽きに出かけた勞力は充分つぐのはれた。他にはあまり大したものもなかつた。唯ダン氏の代りに出た渡邊とり子氏が、シ

ヨパンのポロネーズを相不變エチユード式に彈いたのが物足りなかつた。
ダン氏は最後のフワウスト〔ママ〕のワルツ、コーラスの伴奏を容易すい曲ながら綺麗に彈いた、指の長い人にはかなはないと思つた。惜しいことにはコーラスの方が強すぎた、あゝいふ伴奏が主となる曲に對してはピアノを增すか或はオーケストラの伴奏を附したらよかつたらふと思ふ。
二時半に初まつて終つたのが四時、高木、矢田部兩氏の演奏の美しい印象が、上野の森を後にして行く自分の頭にいつまでも殘つて居た。

（『月刊樂譜』第六巻第八号、大正六年八月、三八頁）

大正六年九月二十三日　邦楽会第十回演奏会

河東節
一、四季の探題
山彦榮子　山彦鶴子　山彦豆子　山彦秀翁　山彦八重
三味線　上調子

菅野一中
二、夕霞淺間嶽
シテ　菅野序遊
ワキ　菅野利三
三味線　菅野吟平

常磐津
三、新松の羽衣曲
常磐津文字太夫　常磐津小文字太夫　常磐津歌男太夫
三味線　常磐津式松
上調子　常磐津喜代松

——休憩十五分間——

富本
四、草枕露玉川
富本豐　名見崎得壽々　富本かつ
三味線　名見崎多賀
同　名見崎千代

新内
五、八重霞浪花濱荻かしく新屋敷の段
富士松加賀太夫
三味線　吾妻路宮古太夫

長唄
六、連獅子
長唄　芳村孝次郎
同　芳村吉藏
同　芳村孝三
三味線　今藤長十郎
同　杵屋勝四郎
同　杵屋勝藏
笛　菊川芳次郎
小鼓　六合新三郎
大鼓　梅屋勝次郎
太鼓　望月長十郎

大正六年十月二十七日、二十八日　学友会秋季演奏会

秋季音樂演奏大會開催廣告

來る廿七、廿八日の兩日午後二時より東京音樂學校奏樂堂に於て學友會秋季音樂演奏大會を開催致候。會員及び會友諸氏は廿八日（日曜日）午後定刻十分前迄に證票携帶の上入場有之度候。

大正六年十月　　東京音樂學校學友會

曲目

曲目は未だ全部確定の運びには參らず候へ共、本日迄のところにては左記のものだけは略確定致し候。順序は不定に候。

一、合唱
甲、風の音…………{ヨハン セバスチアン バッハ／大須賀績作歌}
乙、海と言葉…………同　上
一、洋琴獨奏
ロンド作品一……………………ショパン
鹽島美喜
一、洋琴
第一洋琴　渡邊とり

第二洋琴　川上きよ

司伴樂……ベートーヱン

一、上高音獨唱　金子豊

未定

一、深音獨唱　山崎善次郎

未定

一、高音獨唱　下山英

歌劇『カルメン』中のハバネラ……ビゼー

一、合唱　會員

『美しきエレン』……マックス　ブルッフ

（『音樂』學友會、第八巻第十号、大正六年十月、広告頁）

大正六年十一月十八日　邦楽会第十一回演奏会

蘭八節

一、鳥邊山（とりべやま）

富本節

二、虫賣連理の橘（まゐらせそろれんり たちばな）

長唄

三、秋色種（あきのいろくさ）

——休憩十五分間——

シテ　宮蘭千香
ワキ　宮蘭千眞
三味線　宮蘭千春
同　宮蘭千代

淨瑠璃　富本豊
同　名見崎得壽々
同　富本加津
三味線　名見崎多加
同　富本春江

長唄　芳村孝次郎
同　芳村伊四郎
同　芳村吉藏
三味線　今藤長十郎
同　杵屋勝藏
上調子　杵屋五三郎

箏曲

四、秋言葉（あきのことのは）

新内節

五、關取千兩幟（せきとりせんりやうのぼり）

常磐津節

六、薪荷雪間の市川（たきゞおふゆきまいちかは）

（新山姥）

替手　加藤柔子
本手　河内とし代
　　天笠才子
　　豊島清子

三味線　富士松加賀太夫
　　吾妻路宮古太夫

三味線　常磐津文字太夫
　　常磐津和歌太夫
　　常磐津歌男太夫
　　常磐津小文字太夫
　　式松改
上調子　常磐津　三藏
　　常磐津　喜代松

大正六年十一月二十四日　学友会第二十一回土曜演奏会

■豫報の如く學友會は去る十一月廿四日午後一時より第二十一回土曜演奏會を開いた。本年度に於ける本會最終の演奏會であつたからデビュタントの多かつたのにも拘らず、中々緊張したよい會であつた。是等のデビュタントは何れも其前途の有望なることを彼等のしつかりとした侮る可らざる演奏によつて明かに立證したのは心強いことであつた。此會の名物たる合唱は差し支へあつて聽くことを得なかつたが、其代り大塚助教授の指揮するストゥリングオルケストゥラが演奏したチャイコフスキーの『悲歌』、グリーヒのオーゼの死とアニトラの舞踏及び船橋助教授の獨唱の如きによつて幾段の光彩を加へ得たことは喜びに堪へなかつた。

一、絃樂合奏　會員

作品四十八『セレナーデ』中の悲歌……チャイコフスキー

二、洋琴獨奏　土谷とみ

奏鳴樂作品二、第一樂章……ベートーヱン　荻野あや
三、上高音獨唱
歌劇『自由射手』中のエーンヒェンのロマンス　ヱーバー　林龍作
四、ヴイオリン
小司伴樂作品二十四、第一、第二樂章……リーディング　矢田部勁吉
五、低音獨唱
「さすらひ人」……シューバート　高階哲應
六、ヴイオリン
ニ短調司伴樂、第一、二樂章、作品三十二……ザイツ　藤巻滿江
五、高音獨唱
歌劇『豫言者』中のフィーデズの歌……マイヤーベーア　犬井英夫
六、ギオロンチェルロ獨奏
奏鳴樂……ボッケリーニ　和田國男
ラルゴ、軍隊風のアルレグロ
九、洋琴獨奏
美しきドリーナよ來よ……ゼーバー　助教授船橋榮吉
番外、次中音獨唱
歌劇『カルメン』中のトレアドルの歌……ビゼー　會員
十、絃樂合奏
オーゼの死とアニトラの舞踏作品四十六……グリーヒ

（『音樂』學友會、第九巻第一号、大正七年一月、八〇～八一頁）

大正六年十二月一日、二日　第三十三回定期演奏会

大正六年十二月二日（日曜日）午後二時
音樂演奏曲目
東京音樂學校

一、管絃樂
歌劇「ルッスランとルッドミラ」の序曲……グリンカ作曲
二、獨唱（ソプラーノ）……ペッツォールド
(イ)、君は早月の微風の如く溫和に……リスト作曲
(ロ)、小夜中に靜かに惱は來る……ヴォルフ作曲
三、ヴァイオリン……賴母木こま
ニ短調コンチェルト（作品二二、第一章及第二章）……ヴィーニアッフスキ作曲
四、合唱
い、空しく老いぬ（瑞典民謠）……ユングスト編　高野辰之作歌
ろ、心の花（作品六二）……ブラームス作曲　吉丸一昌作歌
五、管絃樂
ファウストの地獄落（作品二四）……ベルリオース作曲
い、風精の舞踏
ろ、鬼火の舞踏
は、匈牙利進行曲
六、ヴイオロンセロ獨奏……ヴェルクマイステル
イ長調ソナータ……ボッケリーニ作曲
七、ピアノー聯奏……ショルツ　ペッツォールド

悲壮なるコンチェルト……リスト作曲

八、獨唱、合唱及管絃樂

ゲーテ作譚歌最初のヴァルプルギスの夜（作品六〇）……メンデルソーン作曲

アルト　廣田ちず子
テノール　澤崎定之
バリトン　船橋榮吉
ベース　樋口信平
指揮者　クロール　ン

1. Overture to "Russlan and Ludmilla".....*Glinka.*
2. Songs for Soprano:
   a) Bist du! "Mild wie ein Lufthauch" (Elim Metschersky).....*Liszt.*
   b) "Über Nacht" (Julius Sturm).....*Wolf.*
   Mrs. H. Petzold.
3. Concerto for Violin in D minor, Op. 22. ...*Wieniawski.*
   Allegro moderato.
   Andante non troppo (Romance).
   Mrs. K. Tanomogi.
4. Choruses:
   a) Spinn! Spinn! (Swedish folksong) arranged by Jüngst.
   b) "Dein Herzlein Mild" Op. 62. .....*Brahms.*
5. The Damnation of Faust Op. 24. .....*Berlioz.*
   a) Dance of the Sylphs.
   b) Dance of Sprites.
   c) Hungarian March.
6. Sonata for Violoncello in A major.....*Boccherini.*
   Mr. H. Werkmeister.
7. Concerto Pathétique for two Pianos .....*Liszt.*
   Mr. P. Scholz and Mrs. H. Petzold.
8. The First Walpurgis Night (Music to Goethe's Ballad) for Solos, Chorus and Orchestra .....*Mendelssohn.*
   Alto: *Miss C. Hirota.*
   Tenor: *Mr. S. Sawasaki.*
   Baritone: *Mr. Y. Funabashi.*
   Bass: *Mr. S. Higuchi.*
   Conductor: G. Kron.

音樂演奏曲目梗概　第二十二

一　管絃樂

歌劇『ルッスランとルッドミラ』の序曲　グリンカ作

ペトログラードの名門に生れたるグリンカ（M. T. Glinka 1804–57）は重に其の二大歌劇『皇帝に献げし命』及び『ルッスランとルッドミラ』によりて露西亞國民樂の基を開けり。『ルッスラン』（一八四二年初演奏）の歌詞は文豪プッシュキンの空想詩に基きたるものにして、キエフ公の姫ルッドミラが騎士ルッスランと結婚の祝宴中に一妖術者の爲めに浚はれて姿を隠したるをルッスランが苦心の果に尋ね出すといふ筋なり。序曲は歌劇の内容と深き關係を有せず。重に最終幕に現はるゝ二つの歌調を巧に配合して作られたり。

二　高音獨唱

(イ)　君は早月の微風の如く温和に　リスト作
(ロ)　小夜中に靜かに惱は來る　ウォルフ作

(イ)　匈牙利の名家リスト（Fr. Liszt 1811–86）の主要なる創作は管絃、ピアノ等の器樂に存すれども短い歌の方面にも傑作として擧ぐべきもの少からず

ず。彼の短歌の特性は一般に歌詞の抑揚、節奏及び意味と曲調のそれ等との一致契合をば片言隻句の末までも精密に實現せんとする傾向にあり。茲に奏するはメッチェルスキ公の作に附曲せる佳作なり。

(ロ) 十數年前死去したる墺國のウォルフ (Hugo Wolf 1860–1903) はリストの如く多方面の樂人にあらず。されど唯だ短歌の領域に於ては古今を通じて最も獨創に富める天才の一人にして、其の作る所夥多にして而も變化極まりなし。ウォルフの特質は何よりも先づ詩に含まるゝ情趣を深く味ひて、それより自然に湧き出づともいふべき氣分の描寫を作すにあり。此の點に於て頗るシューマンに似たり。ピアノの伴奏は表情と特性とを有し、其の曲の重要なる一部をなせり。

Bist Du!

Mild wie ein Lufthauch, ein Lufthauch im Mai,
Rein wie die Perle, die Perle im Meer,
Klar wie der Himmel, der Himmel in Rom,
So still wie die Mondnacht bist Du!

Kalt wie der Gletcher, der Gletcher der Alp,
Fest wie der Felsen, der Fels von Granit,
Ruhig wie's Wasser, das Wasser im See.
Wie Gott unergründlich bist Du!

Denn aus den Sphären, den Sphären des Lichts,
Denn aus den Welten der Schönheit und Liebe,
Denn aus den Höhen, den Höhen des Alls
Denn aus den Tiefen, den Tiefen des Seins kommst Du!
Denn aus den Sphären, den Sphären des Lichts der Schönheit
und Liebe kommst Du!

—Fürst Metchersky.

Über Nacht

Über Nacht, über Nacht
Kommt still das Leid,
Und bist du erwacht,
O traurige Zeit,
Du grüssest den dämmernden Morgen
Mit Weinen und Sorgen.

Über Nacht, Über Nacht
Kommt still das Glück,
Und bist du erwacht,
O selig Geschick,
Der düstre Traum ist zerronnen,
Und Freude ist gewonnen.

Über Nacht, über Nacht
Kommt Freud und Leid,
Und eh' du's gedacht,
Verlassen dich beid'
Und gehen dem Herrn zu sagen,
Wie du sie getragen.

—Julius Sturm.

三　ヴァイオリン

ウィーニアウスキ (Henri Wieniawski 1835–80) は波蘭のヴァイオリンの名人にして又た才能ある作曲者なり、幼にして巴里の音樂院に學び十一歳にして已にヴァイオリン科の第一賞を獲、十八歳の時歐洲諸國に演奏旅行をなして名聲を博せり。後ロシア宮室の樂部に□り、又た暫くヴュータンの後を繼ぎてブリュツセルの音樂院に教鞭を取れり、茲に演ずるは彼の作れるコンセルト二篇中の一にして最も樂界に愛賞せらるゝものなり。全曲三部より成り、第一の中庸なる快速部より第二の緩徐なるロマンスを經て第三のジプシー風に作れる快速部に終る。本演奏は第一第二の兩部に止む。

四　合　唱

(イ)　空しく老いぬ　　瑞典民謡

(ロ)　心の花　　ブラームス作

〔大正二年六月七日、八日の「音樂演奏曲目梗概」を參照。〕

五　管絃樂　　ベルリオース作

『ファウストの地獄落』

(イ)　風精の舞踏

(ロ)　鬼火の舞踏

(ハ)　匈牙利進行曲

『ファウストの地獄落』は佛國管絃樂の大家ベルリオース(H. Berlioz 1803-69)が一八四六年に作れる曲にして、作者は之を『劇的傳說』と呼べり。こはカンタータの一種に數ふべき長曲(獨唱、合唱及び管絃樂を含む)にして全篇四部に分れ、大體はゲーテの名作と同樣の筋を表せり。唯だ一つ著しく異れるは最初の部分に於て匈牙利の平野を旅行するファウストを出したる點にして、獨逸の批評家はいたく之を批難したり。本日演奏する匈牙利進行曲は此の部分の最終齣に於て匈牙利の軍隊が平野を通過する時の曲にして、匈牙利の最も有名なる軍歌調に基けり。第二部にはゲーテ(或はグーノー)に於けると同樣に『書齋の場』『アウエルバッハの穴藏』の場ありて次にエルベ河邊の花さく野に徘徊するファウストを描けり。此處にファウストは暫く休息して睡眠に陷り、夢に風精の合唱を聽き、次で其の舞踏を見る。本日奏するワルツ進行の『風精の舞踏』は卽ち是なり。第三部に於てファウストはマルゲリットの居を訪ひ、此處に惡魔は鬼火を呼びて少女を迷はさんとす。『鬼火の舞踏』は此場に用ひられたる優雅なる小舞曲(ミニュエット)にしてベルリオースの管絃樂に於ける寫實の妙技を示す一例なり。

六　セロ獨奏

イ長調ソナータ　　ボッケリーニ作

ボッケリーニ(Luigi Boccherini 1743-1805)は十八世紀後半に榮えたるセロの名手にして且つ才能ある作曲者なり。以太利ルッカに生れ、後マドリットに定住して西班牙宮廷の樂長たりき。玆に奏するは近頃ピアッチ(A. Piatti)が出版せるセロソナータ數篇中の一にして、全く舊式の作風によれるソナータなり。ピアノ部は本來數字付低音に書かれたるものにして單に伴奏的和聲を附するに過ぎず、之に對して獨奏セロの部は獨り華々しく活躍を示せり。形式は全篇二部に分れ、最初緩徐なる准序節を經て快速部に入る。凡て纖麗なるロココ趣味を發揮せるものにして、顫音、走句、段落等の裝飾的要素に富めり。

七　ピアノ聯奏

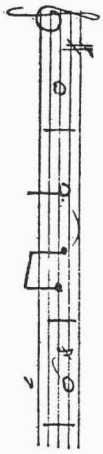
コンセルト、パテティク　　リスト作

本曲はリストが本來ピアノ二部に作れる唯一の作品にして、彼の弟子なりしブロンサール夫人(Frau v. Bronsart)に獻本し且つ夫人と共に初めて一八七七年に演奏せるものなり。此のコンセルトが今日稀にのみ演奏せらるゝは其の困難なる技術に堪ふる二人の奏者を求むること難きが故なり。

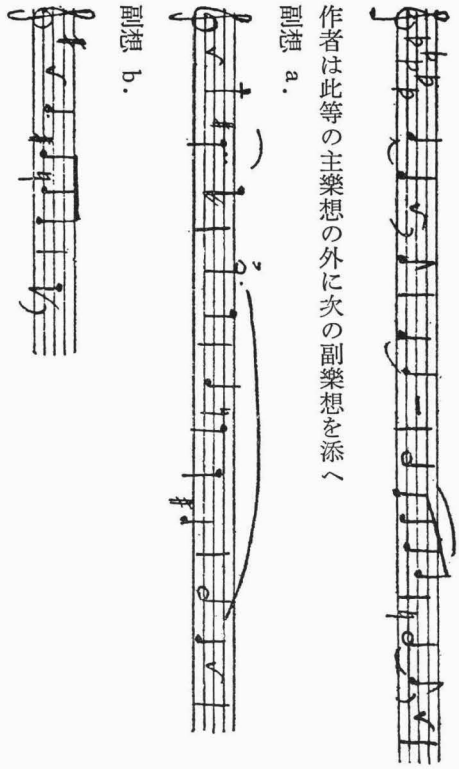
本曲は其の標題の示す如く悲壯の樂趣を有するものにして、次に擧ぐる主要なる三樂想の中、最初のものは活氣に富めども第二及び第三は共に悲壯の調なり。(第二のものは樂曲の進行中に屢〻現出して就中重きをなせり)

出強 1.

出強 2.



出強 3.



作者は此等の主樂想の外に次の副樂想を添へ

副想 a.

副想 b.

終局に近き箇所にて巧みに主想3と副想aとを組合せたり。

八　獨唱合唱及び管絃樂

『最初のワルプルギスの夜』　メンデルソーン作

本曲は一八三一年作者が以太利漫遊中の作に係り、四三年ライプチツヒに演奏せられて大喝采を博せり。歌詞の主題は北歐神話の魔女が五月朔日の前夜ブロッケンの山頂に狂歡を縱にすといふ迷信に基けり。こは『ファウスト』劇を讀みたる人の善く知る所なるが、ゲーテは別に此の譚歌（バラッド）に於て最初のワルプルギスの夜に遡り、其の起源を想像せり。元來聖ワルプルギスはドルイド教を奉ぜしサクソン人種を基督教に改宗せしめたる偉人にして、この人を祭る五月朔日の前夜は惡靈悉く去て他に奔ると傳へらる。ゲーテはこれ等の傳說に基きて想を構へ、此夜ドルイド教徒が基督教徒を避けて遠き山頂に赴き、看守の番人を置きつゝ心のまゝに舊來の祭典を行ひたる樣に描けり。

序曲は二部分より成りて、嶮惡なる冬空より溫和なる春の日に移り行く光景を寫せり。序曲終るや一ドルイド教徒（テノル）の獨唱先づ起り、人民の合唱之に和して、森に野に樂しき春の來れるを告げ、且つ『雪まだ白きかの山に登りて、昔ながらの祭典を營み、我等の大神を稱へん』といふ。人民の中より一老婆出でて（アルト獨唱）此の擧の危險なるべきを戒め、婦女等之に和するや、ドルイドの僧侶（バリトン）は番人を置きても我等の務を果さんと述ぶ。これに次ぐ最弱奏の一節は番人等の合唱にして、靜かに物蔭に潛みて看守せんと語り合ふうちに、其の中の一人は、基督教徒來らば彼等の所謂鬼を裝ひて威しくれんと發議す（ベース獨唱）皆皆之に同じて（合唱）手に手に獲物を取りて騷ぎ立てよと罵る。此の一節は唱歌も伴奏も共に奇怪なる特性を示せり。さる間に一方には僧侶（バリトン）及び人民の莊重なる讃美の歌調起りて前の物凄き音樂と好對照をなす。此の時一人の基督教徒（テノル獨唱）ドルイド等の罵り騷ぐを認めて地獄の魔群來れりと叫ぶや、同輩皆な恐をなし、先を爭つて逃れ去る。その後にドルイドは再び讃美の聲を揚げて其の祭典を終る。

DIE ERSTE WALPURGISNACHT (Ballad v. Goethe)

Ein Druide (Tenor Solo)

Es lacht der Mai! der Wald ist frei von Eis und Reifgehänge.

Chor des Volks

Es lacht der Mai! &c. Der Schnee ist fort, am grünen Ort erschallen Lustgesänge

(Tenor Solo)

Ein reiner Schnee liegt auf der Höh'; doch eilen wir nach oben, begeh'n alten heil'gen Brauch, Allvater dort zu loben. Die Flamme lodre durch den Rauch!

Hinauf! Hinauf! So wird das Herz erhoben.

Eine alte Frau (Alto Solo)

Könnt ihr so verwegen handeln? Wollt ihr denn zum Tode wandeln? Kennt ihr nicht die Gesetze unsrer

harten Überwinder? Rings gestellt sind ihre Netze auf die Heiden, auf die Sünder. Ach sie schlachten auf dem Walle unsre Väter, unsre Kinder! Und wir alle nahen uns gewissem Falle.

Chor der Weiber

Auf des Lagers hohem Walle schlachten sie uns unsre Kinder. Ach die harten Überwinder! Und wir alle nahen uns gewissem Falle.

Der Priester (Baritono)

Wer Opfer heut' zu bringen scheut, verdient erst seine Bande. Der Wald ist frei! Das Holz herbei, und schichtet es zum Brande!

Chor der Priester

Der Wald ist frei! &c.

(Baritono) Doch bleiben wir im Buschrevier am Tage noch im: Stillen, und Männer stellen wir zur Hut, um eurer Sorge willen. Dann aber lasst mit frischem Mut uns unsre Pflicht erfüllen!—Vertheilt euch, wackre Männer, hier!

Chor d. Wächter d. Druiden

Vertheilt euch hier, wackre Männer, durch dieses ganze Waldrevier, und wachet hier im Stillen, wenn sie die Pflicht erfüllen.

Ein Wächter d. Druiden (Basso)

Diese dumpfen Pfaffenchristen, lasst uns keck sie überlisten!

Mit dem Teufel, den sie fabeln, wollen wir sie selbst erschrecken.

Kommt mit Zacken und mit Gabeln, und mit Glut und Klapperstöcken lärmen wir bei nächt'ger Weile durch die leeren Felsenstrecken.

(Chor) Kommt mit Zacken &c. Kauz und Eule, heul' in unser Rundgeheule!

Ein Priester (Baritono)

So weit gebracht, dass wir bei Nacht Allvater heimlich singen! Doch ist es Tag, sobald man mag ein reines Herz dir bringen. Du kannst zwar heut', und manche Zeit, dem Feinde viel erlauben. Die Flamme reinigt sich vom Rauch: So reinig' unsern Glauben! Und raubt man uns den alten Brauch, dein Licht, wer will es rauben!

Ein christlicher Wächter (Tenor)

Hilf, ach hilf mir, Kriegsgeselle! Ach, es kommt die ganze Hölle! Sieh' wie die verhexten Leiber durch und durch von Flammen glühen! Menschenwölf' und Drachenweiber, die im Flug vorüberziehen! Welch entsetzliche Getöse! Lasst uns alle fliehen! Oben flammt und saust der Böse, aus dem Boden dampfet rings ein Höllenbroden. Lasst uns flieh'n! &c.

Allgemeiner Chor d. Druiden & des Haidenvolkes.

Die Flamme reinigt sich vom Rauch, so reinig' unsern Glauben! Und raubt man uns den alten Brauch; dein Licht. wer kann es rauben!

〔批評および関連記事〕

上野の秋季大音樂會

秀　子

東京音樂學校の秋季大音樂會が十二月の一日と二日との二日間午後二時から同校奏樂堂で開催されました。何しろ本年掉尾の樂壇を飾るべき音樂會の事とて兩日共に定刻前にはや、樂壇は熱心な聽衆で滿たされてゐました。私の聽いた日は最初の一日でした。

演奏は管絃樂でグリンカの歌劇「ルスランとルドウミラ」の序曲で初まり、劈頭から聽衆に多大の快感を與へてゐました。けれど此の序曲の演奏は忌憚なく申しますと、此ればかりで無く當日演奏された外の管絃樂も矢張りさうですが、まだ練習が不足でまとまりのついたものとは決して言はれませんでした。唯洗練されてゐた第一ヴアイオリンと巧みなヴイオラとでもつてゐる樣に思はれました。それに曲が大變よかつたのとであとの管絃樂よりは引立つては居ました。第二にはウオルフの「夜を徹して」とリストの「君は微風の如く柔和に」との二つをベツオード夫人が獨唱しま

した。夫人は近頃めつきり上乘した樣に思はれました。二つ共によく曲の氣分を表示してゐたのが何より快く聽きました。けれど前者の曲は作者の代表的作物ではなかつたせいで後者のリストの曲が極めて優れてゐると思ひました。第三は賴母木駒子夫人のヴアイオリン獨奏で、ウイニアフスキイのニ短調コンチエルト（作品二十二第一第二樂章）を少こしのよどみもなく美事に彈きこなしたお手並はさすが女流ヴアイオリニストの重鎭であることを遺憾なく示してゐました。第二樂章のローマンスに入つては殊に美しく達者なものだと思ひました。けれど女史のは美しいのみで少しも力がありません。技巧のみで表情が足りませんでした。

第四の合唱はユングストの「空しく老いぬ」とブラームスの「心の花」との二つでよく唱ひました、特に「心の花」を面白く聽きました。第五の管絃樂「フアウストの地獄落」では終りの匈牙利進行曲（はんがりーまーち）に至り稍纏りもついて彼の作者ベルリオーゾの優れた樂才をうかゞふことが出來ました。第六はウエルクマイステル氏のセロ獨奏でした。達者には彈いてゐましたけれど殊更禮奏まで立せる程喝采する價値のある者ではないと私は思ひました。第七のシヨルツ氏とペツオード夫人のピアノコンチエルトは當日演奏の白眉であつたでせう。曲はリストの「悲壯なるコンチエルト」でありました。まだ完成した彈奏とは言へませんが何しろ此れ丈けのものは兩氏に依らなければいまのところ日本では到底聽く事の出來ない者でした。終りのメンデルゾーンの「最初のワグルギス（ママ）の夜」では管絃樂や獨唱よりも合唱中のある美しい高音の聲に私は耳を傾けさせられました。

（『月刊樂譜』第七巻第一号、大正七年一月、四九～五十頁）

大正七年二月二十三日　学友会第二十二回土曜演奏会

■去る二月二十三日午後二時より學友會第二十二回土曜演奏會を開催す。夜來の密雲結んで解けず、寒雨まさに至らんとするけはひなりしも定刻間際になりて暗雲破れ、日影うらゝにさして後苑の寒梅一段の光りを加ふるを覺ゆ。此日內田大使露都引き上げの報至る。北亞の風雲如何に動かんとはするぞ。當日の曲目は左の如し。

一、女聲合唱　會員
歌劇『カルメン』第二幕中の合奏　ビゼー
二、洋琴獨奏　岩村俊
卽興曲、作品百四十二　シューバート
三、上高音獨唱　岩田さと
歌劇『イポリットとアリシ』の一節　ラモー
四、洋琴獨奏　ヂェームス ダン
『美しきドリーナよ來よ』の七變奏曲　エーバー
五、深音獨唱　山崎善次郎
歌劇『フォースト』中のメフィストフェレスの小夜樂　グノー
六、絃樂四重奏　第一ヴイオリン　田中英太郎
第二ヴイオリン　草川信
ギオーラ　北原季男
ギオロンチエルロ　平井保三
小夜樂　ト長調、作品百五十二　モーツァルト
甲、アルレグロ
乙、ロマンツエ
丙、メヌエット
丁、ロンド
七、ギオロンチエルロ獨奏　平井保三
甲、アンダンテ　レリヂオーゾ　トーメ
乙、諧謔曲作品十二、第二番　ゲンス

番外、風琴獨奏　眞篠俊雄
奏鳴樂　イ短調、作品九十八、　ラインベルガー
い、モデラート
ろ、アンダンティーノ
は、フーガ　クロマティーカ
八、上高音獨唱　金子豐
歌劇『シギーリアの床屋』中ロジーナの小歌劇　ロッシーニ
九、洋琴　西知惠
司伴樂　ト短調　川上きよ
十、混聲合唱　ドゥセック會員
歌劇『カルメン』第四幕中の合唱　ビゼー
（『音樂』學友會、第九巻第三号、大正七年三月、四九～五〇頁）

大正七年三月二十五日　卒業式

大正七年三月二十五日（月曜日）午後一時三十分
卒業證書授與式順序

東京音樂學校

卒業證書授與式

一　卒業證書授與
一　校長告辭
一　文部大臣祝辭
一　卒業生總代謝辭

演奏曲目

第一部

一、ピアノ二部奏……（同）甲種師範科卒業生
に長調ソナタ（第一樂章）……　龜井はな
高江洲妙子　モーツァルト作曲
二、二部唱……（本）研究科聲樂部修了生
（本）科聲樂部卒業生
「フライシュッツ」中のエーンヒェンとアガーテの二部唱　内田琴
金子豐　ヴェーバー作曲
三、オールガン獨奏……甲種師範科卒業生
に短調パッサカーリア……　井上武士
バッハ作曲　ツェルナー編
四、ヴィオロンチェロ獨奏……本科器樂部卒業生
に短調コンチェルト（作品三〇）……　平井保三
ゴルターマン作曲
五、高音獨唱……本科聲樂部卒業生
「サーフォ」中の叙情調……　下山英
グーノー作曲
六、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生
に長調コンチェルト（第一樂章）……　和田國男
モーツァルト作曲

第二部

七、箏……（同）（同）選科修了生　中江なを
同　小野ハナ
同　山本たけ
晒……　清水シヅ
深草檢校調
八、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　鹽島美喜
ろ長調花やかなる變奏曲（作品一二）……　ショパーン作曲

九、二部唱……研究科聲樂部修了生 本科聲樂部卒業生 柴田知常 山崎善次郎

「フィデーリオ」中のピツァロとロッコの二部唱……ベートーヴェン作曲

十、ヴァイオリン獨奏……本科器樂部卒業生 田中英太郎

い短調コンチェルト（第二十二番、第一樂章）…ヴィオッティ作曲

十一、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生 渡邊トリ

ろ短調花やかなる狂想曲（作品二二）……メンデルソーン作曲

十二、合唱

い、夜の歌 藤村作作歌
ろ、小さき嘆き・大須賀續作歌……グラーベルト作曲

Graduation Exercises
of the
TOKYO ACADEMY OF MUSIC
UYENO PARK
Monday, 25th March, 1918.
At 1.30 P.M.

Programme.

I. Presentation of Diplomas.
II. Address to the Graduating Class by the Director.
III. Address by His Excellency Okada, Minister of State for Education.
IV. Response by the Representative of the Graduating Class.

PART I.

1. Sonata for two Pianos in D Major. (First Movement) ……Mozart.
Miss H. Kamei and Miss T. Takayesu.
2. Duet of Aennchen and Agathe from "Freischütz" ……Weber.
Miss K. Uchida and Miss T. Kaneko.
3. Passacaglia for Organ in C Minor ……Bach-Zellner.
Mr. T. Inouye.
4. Concerto for Violoncello in D Minor Op. 30 …… Goltermann.
Mr. Y. Hirai
5. Aria for Alto from "Sapho" ……Gounod.
Miss H. Shimoyama.
6. Concerto for Piano in D Major (First Movement) ……Mozart.
Mr. K. Wada.

PART II.

7. "Sarashi" for Koto ……Fukakusa Kengio.
Mrs. N. Nakaye, Mrs. H. Ono, Mrs. T. Yamamoto and Miss S. Shimizu.
8. Variations brillantes for Piano in B Major Op. 12 ……Chopin.
Miss K. Shiojima.
9. Duet of Pizzaro and Rocco from "Fidelio" …… Beethoven.
Mr. T. Shibata and Mr. Z. Yamazaki.
10. Coecerto for Violin (Cadence by Joachim) in A Minor No. 22 (First Movement) ……Viotti.
Mr. Y. Tanaka.
11. Capriccio brillant in B Minor Op. 22 ……Mendelssohn.
Miss. T. Watanabe.

12. Chorusee:
a. Abendlied
b. "Ich hör' ein Vöglein" ……Grabert.

東京音樂學校 卒業演奏を聽く

都新聞記者　白井嶺南

東京音樂學校は去る三月廿六日、本科聲樂部より四名、器樂部から十二名、甲種師範科から廿八名、乙種から十一名、研究科から七名、選科其他から十一名の卒業、修業生を出した▲毎年の卒業生は器樂部に逸才を出す事が多い、本年も亦た其例に洩れなかつた。それから本年は出演者の數が多過ぎた感がある、聽き手としての余はもつと精選した方がよくはなかつたかと思ふ▲卒業式といふ緊張した氣分と、ステージ慣れせぬ爲で堅くなるのは毎度であるが、今回は殊に著しきを認めたのは遺憾であつた。平生教られて居ることではあらうが、もつとステージに慣れしむる樣、また態度や姿勢と云ふことを教へ込んで置く必要があるとつく〴〵感じられた▲曲目十二番、其中此日の白眉で其將來に多大の望みを囑せしめたのは渡邊とり子氏のピアノである。曲はメンデルソーンの短ろ調「華やかなる狂想曲」作品廿三であつて、此人の體格と割合によく開く指は、先づ洋琴家としてふさはしいことを認めしめた。いよいよ鍵盤にふれた處を見ると、果して豫想に違はなかつた、曲の撰び方もよいが、其餘裕ある態度で大きく奏し來り奏し去る態、ローマンチツクで、詩的な作曲家其人の心持をよく現はしてくれた▲豫期して耳を聳てた田中英太郎氏のヴアイオリンは、どうしたものか、再三再四しても調子が巧く合はなかつた、其爲めに氏の演奏の上に少からぬ影響を與へて了つた。氏は此樂器に就て造詣が深いと聞いて居るので誠に同情に堪へなかつた。併しながら氏は之に依て一の經驗を得た事と思ふ▲研究科修了の柴田知常氏と「フイデリオ」中のピツアロとロッコの二部唱をした「バリトン」の山崎善次郎氏は未來のある聲樂家だと思ふた。柴田氏は自信があるらしく見ゆる、併し研究科に入る以前に比してそれ程の進境を認め得るか、門外漢の余にはよく判らない、山崎氏の聲や態度はまた幼々しい、締りが充分だとは云へないが、今後の修養に依ては斯界一方の立物となるであらう、努力を望む▲山下英子氏の獨唱は「サツフオー」のアリヤであつたが、どうも荷が少し勝ち過ぎはしなかつたかと思はれた。氏の今後はどう發展するかは想像がつきにくい。併しあの體質では、あれだけの聲量では、將來一と通りの努力では追つくまいと想はれた。余は未知數といふ三字を呈して置きたい▲平井保三氏のヴイオロンチエロは、山下氏と兄たり難く弟たり難く樣に思ふ。氏は此日あまりに責任を感じ過ぎたのか堅くなつた。堅くなつた結果あがり氣味に見られた。微音になるあたりの響き、又たちよいちよい變な音の出て來るなど其證となし得るであらう。立つ腹の力、是れ今後氣をつくべき處ではあるまいか▲內田琴子、金子豊子兩氏の「フライシユツツ」中のエーンヒエンとアガーテの二部唱、是も余の豫期した一つであつた、併しながら全く失望して了ふた。金子氏の態度は矢張練習室に居る樣な樣子が見えて落ちつきはなかつた。內田氏は失禮ながら依然たりと申したい、但し其の聲の色が以前に比して深みのあるを覺えた。其將來は興味を以て見るに値すと思ふ▲和田國男氏のピアノ、井上武士氏のオーガン共に先づ無難、龜井はな、高江洲妙子兩氏のピアノ二部は問題にせぬ方がよいと思ひます。

來年はもつと聲樂の方面に成績をあげられん事を祈ります。

（『新音樂』第一巻第一号、大正七年五月、二九～三〇頁）

大正七年四月七日　邦楽会第十二回演奏会

河東節

一、助六由縁江戸櫻　三味線　十寸見東觚
　　十寸見東榮
　　十寸見東宇
　　山彦秀翁
　　山彦千代
　　山彦姫子

上調子

富本節
二、十二段君が色音（十二段）
菅野一中節
三、賤機帯
荻江節
四、金屋丹前
……休憩十五分間……
常磐津節
五、新古演劇十種之内戻橋
清元節
六、道行思案餘（おはん長右衛門）
長唄
元祿風
七、花見踊

大正七年四月二十七日　学友会第二十三回土曜演奏会

■去る四月廿七日午後二時より本會第二十三回土曜演奏會を開く、曲目は左の如し。

一、洋琴獨奏　出島せい
六變奏曲　作品三十四……ベートーヱン
二、保音獨唱　伊藤祐司
ヱネーツィアのゴンドラの唄作品三十四……メンデルスゾーン
三、ギオロンチェルロ　酒井悌
競奏樂　變ロ短調　作品五十一……ゴルターマン
（第二樂章）
四、低音獨唱　矢田部勁吉
甲、古歌……グリーク
乙、朝露……グリーク　奈良春枝
五、上高音獨唱
歌劇「フィガロの婚禮」中のスザンナの抒情調……モーツァルト　矢田部勁吉
六、低音獨唱
ギルツハウス……シューバート　田中規矩士
七、洋琴獨奏
奏鳴樂　變ホ長調　作品百二十二……シューバート
アルレグロ　モデラート（第一樂章）
八、高音獨唱　下山英
歌劇「サムソンとダリラ」中のダリラの抒情調……サン・サエンス
（我胸は君の御聲にひらく）
九、二重唱　萩野あや　岩田さと

歌劇「フイガロの婚禮」中のスザンナと伯爵
夫人の二重唱……………………………モーツァルト

（『音樂』學友會、第九巻第五号、大正七年五月、四九〜五〇頁）

大正七年五月二十五日、二十六日　第三十四回定期演奏会

大正七年五月二十六日（日曜日）午後二時開會

音樂演奏曲目

東京音樂學校

一、管絃樂

ハ短調スインフォニー（第五番 作品六七）……ベートーヴェン作曲
アレグロ　コン　ブリーオ
アンダンテ　コン　モート
アレグロ（スケルツォ）
アレグロ

二、女聲合唱（ピアノ伴奏附き）

い、夕べの歌
ろ、春の思ひ（作品一二七）……………ヤダソーン作曲

ピアノ伴奏　高折宮次

三、ピアノ獨奏……………………………神戸絢

ロ短調スケルツォ（作品二〇）………ショパン作曲

四、上高音獨唱……………………………長坂好子

歌劇「フライシュッツ」中のアガーテの抒情調…ヴェベル作曲

五、合唱（無伴奏）

い、靜けき夕べ（作品一）………………グラーベルト作曲／大須賀績作歌

ろ、春のめざめ（作品一二〇）…………スポール作曲／青木存義作歌

六、管絃樂

歌劇「リエンツィ」の序樂………………ヴァグネル作曲

指揮者　グスターブ、クローン

PROGRAMME
OF
CONCERT
SUNDAY, 26TH MAY, 1918
At 2 P.M.
TOKYO ACADEMY OF MUSIC
UYENO

1. Symphony in C Minor, No. 5, Op. 67. ....*Beethoven.*
   Allegro con brio
   Andante con moto
   Allegro (Scherzo)
   Allegro.
2. Choruses for Female Voices with Piano Accompaniment:
   a. Ein geistlich Lied.
   b. Frühlingsglaube. } Op. 127. ....*Jadassohn.*
   Piano: *Mr. M. Takaori.*
3. Scherzo for Piano in B Minor, Op. 20. ....*Chopin.*
   Mrs. A. Kambe.
4. Agathe's Aria from the Opera "Freischütz" ......*Weber.*
   Miss Y. Nagasaka.
5. Choruses for Mixed Voices a cappella:
   a. Abendruhe, Op. 1. ....*Grabert.*

b. Sonnenshein, Op. 120.....*Spohr.*

6. Overture to the Opera "Rienzi" .....*Wagner.*

Conductor: G. Kron.

音樂演奏曲目梗概　第二十三

一、管絃樂

ハ短調スィンフォニー（第五番作品六七）

ベートヴェン作曲

第五スィンフォニーはベートーヴェン（Beethoven 1770—1827）作のスィンフォニー九篇中にて最も廣く世に知らるゝものなり。一八〇八年初めて維也納市に演奏せられてより、間もなく獨、英、佛の諸國にも行はれて、ベートーヴェンの名これより塊國外に喧しくなれり。本曲は實に長年月の推敲を經たる作品にして、恐らく作者の志向を遺憾なく發現せるものと謂ふべし。多くの評家は此のスィンフォニーをベートーヴェン樂の極致否な全器樂の極致とまで稱揚せり。又た深く音樂の趣味を解せざる者も本曲を聽きては畏敬の念を禁ずる能はずといふ。『第五はいつも大入り』といふ諺のあるによりても略ゝ此の曲の價値を推知するを得べし。

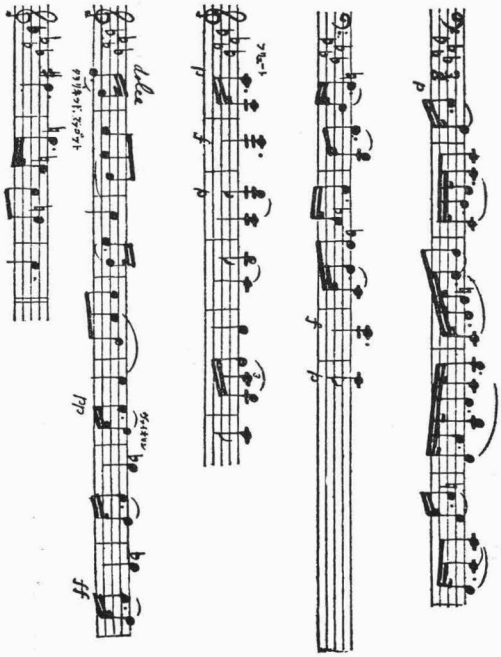
傳へによれば、作者は本曲の最初に現はるゝ四音に就きて『運命の戸におとづるゝはかくこそ』(So pocht das Schicksal an die Pforte) と語れりといふ。これに基きて多くの評家は本曲をば運命に抗する人間の奮闘、彼の希望、彼の終局の勝利を描くものとなせり。

第一章（活氣ある快速調—「ハ」短調、四分二拍子）は作法の上より見れば最も大膽なる作品と謂ふべく、數百小節に亘る長篇が殆ど全く曲頭に轟く四音に基きて成れり、」

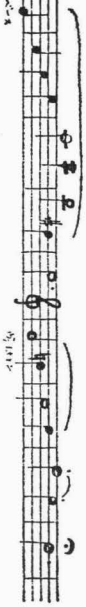
五十餘小節を經て後、調は變「ホ」（關係長調）に轉じ、ホルンの最強奏を序として第二樂想、ヴァイオリンに現はれ、クラリネットに移る。

『壓制者の暴威に對する婦人の可憐なる抗議の如し』とグローヴは評せり。『運命』の第一樂想は此處にも其の相を現じ、踵を追うて人間に迫る。但だ調は第一部分の終に至るまで大體變ホに止り、最強奏の箇處と雖以前の如くに猛惡の性を帶ぶることなし。されど『開展』の部分に入るや第一樂想は再び暴威を逞くし、溫和なる第二樂想は全く姿を沒す。此の部分は極めて短かけれども最も劇的にして悲壯なる葛藤を示せり。第三部分は最初の部分の反復なれども、間々樂器の用法に變化を施せり。最後に「ハ」長調に轉じ、勢よき尾句を以て全章を結ぶ。

第二章（活躍せる並歩調—變イ長調、八分三拍子）は所謂『變奏曲（ヴァリエーションズ）』の體に作られたり。其の主想（テーマ）に含まるゝ重なる樂句は慰藉と希望とを示すが如く聞ゆ。



第三章（快速調ハ短調四分三拍子）は作者の他のスィンフォニーに於けると同じく、『スケルツォ』の曲體に作られたり。されど本曲は例と異りて諧謔嬉戯の趣に乏しく、低音樂器の最弱奏に現はるゝ次の不可思議なる樂句を以て始まる。



之に次ぐホルンの節奏（リズム）に富む樂句はかの『運命』の樂句の思ひ出の如くに聞ゆ。

此の二樂句の引延ばさるゝ後、中部（トリオ）の進行に移るや、調は短より長に轉じて、曲趣頗る快活となる。

此の部分はフーガ式の作法に從ひ、低音樂器最も活躍す。やがて木管の美しき一節とセロ、ベースの指彈（ピチカート）とを經て再びハ短調の主部に返り、こゝに不可思議なる樂想再び現はる。これより以下は主部の反復なれ共種々の點に於て變化の妙を示せり。本章の終りごろに銅皷（チンバーニー）が絃の最弱奏に伴はれつゝたゆたふ如き節奏（リズム）にて「ハ」音を刻みゆく一節は眞に靈妙の感を與ふ。されど曲はやがて漸強奏（クレシエンド）に進み、此處に全管絃はこれまで沈默を守りし三箇のトロンボーンを加へて迅雷の如くに「ハ」長調の凱旋進行曲（第四章）に突進す。

此の樂想の後管に現はるゝ次の樂句に進み。

更に次の一節を經て。

次の如く始まるト長調の第二主樂想を現はす。

これより以下イ短調に起る開展部に入りて、先に出でたる樂句を種々に引延したる後、曲は烈しき最強奏に達して、俄かに變化し、前章のスケルツォは此處に挿句として最弱奏に現れ、前後の華美なる曲節と絶好の對照をなす。此のスィンフォニーを好まざりしスポールすら此處にスケルツォを挿みたる趣向には感服したりといふ。此の挿句の後は曲頭に返りて反復し、最後に長大なる尾句に達して歩調漸次プレストに移り、全曲は長ハ和音の限りなき歡呼を以て終る。

二、女聲合唱（ピアノ伴奏附）

｛い、夕の歌
ろ、春の歌｝（作品一二七）　ヤダソーン作曲

ライプチツヒ音樂院の理論及作曲法の教師として廣く感化を及ぼしたるヤダソーン（Salomon Jadassohn 1831—1902）は諸方面の品合して百二十餘篇に上れり。本曲は其の百二十七番なり。

Ein geistlich Abendlied

Es ist so still geworden,
Verrauscht des Abends Weh'n,
Nun hört man allerorten

Der Engel Füsse geh'n
Rings in die Thale senket
Sich Finsternis mit Macht
Wirf ab, Herz, was dich kränket
Und was dir bange macht.

Es ruht die Welt in Schweigen,
Ihr Tosen ist vorbei,
Stumm ihrer Freude Reigen,
Ihr Schmerzensschrei.
Hat Rosen sie geschenket,
Hat Dornen sie gebracht,
Wirf ab, Herz, was dich kränket
Und was dir bange macht.
Nun steh'n im Himmelskreise
Die Stern' in Majestät,
In gleichem, festen Gleise
Der Wagen geht.
Und gleich den Sternen lenket
Er deinen Weg durch Nacht.
Wirf ab, Herz, was dich kränket
Und was dir bange macht. ——J. G. Kinkel

Frühlingsglaube

Die linden Lüfte sind erwacht,
Sie säuseln und wehen Tag und Nacht,
Sie schaffen an allen Enden,
O frischer Duft, o neuer Klang,
Nun, armes Herze, sei nicht bang,
Nun muss sich alles wenden.

Die Welt wird schöner mit jedem Tag,
Man weiss nicht was noch werden mag,
Das Blühen will nicht enden.
Es blüht das fernste, tiefste Thal,
Nun, armes Herz, vergiss der Qual,
Nun muss sich alles wenden. ——L. Uhland

三、ピアノ獨奏

ロ短調スケルツォ（作品二〇）　ショパン作曲

ソナーター、スインフォニー中のメヌエットに代ふるに一層快速なるスケルツォを用ひたるはベートーヴェンなるが、これを獨立の一曲として作り出せるはショパン（Fr. Chopin 1810—1849）なり。されどショパンのスケルツォには通例此の曲に具はる快活滑稽の感を含むこと少く、本曲の如きも陰鬱にして且つ激情に富めり。

曲は激しき絕叫を以て始まる。ニークス曰く、『これ絕望の悲鳴に似たらずや。次で來る所は逆境の壁に鎖ざされたる人の之を脫せんとして空しく狂ひ、終に疲れて美しき田園の夢に遊び、再び力づきて奮鬪を始むるにも似たらずやと。「ロ」長調なる中部進行は實に美しき夢にも譬ふべき一節にして前後の樂趣と絕好の對照をなせり。この中に作者は波蘭のクリスマスの歌を採り入れたりともいふ。

四、上高音獨唱

歌劇『フライシュッツ』中のアガーテの抒情調

ヴェーベル作曲

獨逸ロマンチック派歌劇の始祖ヴェーベル（C. M. v. Weber 1786—1826）の本歌劇は一八二〇年に完成せられ翌年伯林に演奏して非常の好評を博せり。

〔中略。『フライシュッツ』に關する解說は明治四十五年六月八日、九日の「音樂演奏曲目梗概」を參照。〕

本日演奏の獨唱は試射の前夜アガーテが射撃の試合せんとて出で行きしマックスの歸宅を待ちわびつゝ歌ふ歌也。短かき宣敍調の後に歌ふ緩徐調(Leise, leise...)はわれ等が身に恙なかれ祈るなり。二度目の祈禱(Zu dir wende ich...)の後少女は森の方より近づく足音を聽きつけて打喜び(Doch wie! täuscht sich nicht mein Ohr?...)手巾を振りて迎へつつ、月明りに透し見ればマックスは帽子に花環を飾りたる樣なり(Gott, täuscht das Licht des Monds mich nicht,...)さては試合に勝ちしと見

えたり、あすの日もかくぞあらんと俄かに元氣づきて打よろこぶ。(All meine Pulse schlagen...)

ARIE DER AGATHE

Wie nahte mir der Schlummer, bevor ich ihn gesehn?
Ja, Liebe pflegt mit Kummer stets Hand in Hand zu gehn.
Ob Mond auf seinem Pfad wohl lacht? Wie schön die Nacht!

(Adagio) Leise, leise, fromme Weise, schwing dich auf zum Sternenkreise!
Lied erschalle, feiernd walle mein Gebet zur Himmelshalle!
O, wie hell die gold'nen Sternen, mit wie reinem Glanz sie glühn! nur dort in der Berge Ferne scheint ein Wetter aufzuziehn, dort am Wald auch schwebt ein Heer dunkler Wolken dumpf und schwer.

(Adagio) Zu dir wende ich die Hände, Herr ohn' Anfang und ohn' Ende.
Vor Gefahren uns zu wahren, sende deine Engelschaaren!
Alles pflegt schon längst der Ruh! trauter Freund, wo weilest du? Ob mein Ohr auch eifrig lauscht, nur der Tannen Wipfel rauscht, nur das Birkenlaub im Hain flüstert durch die hehre Stille, nur die Nachtigall und Grille scheint der Nachtluft sich zu freun.
Doch wie! täuscht sich nicht mein Ohr? Dort klingt's wie Schritte Dort aus der Tannen Mitte kommt das hervor! Er ist's! er ist's! die Flagge der Liebe mag weh'n! Dein Mädchen wacht noch in der Nacht!
Er scheint mich noch nicht zu seh'n. Gott, tänscht das Licht des Mond's mich nicht, so schmückt ein Blumenstrauss den Hut! Gewiss, er hat den besten Schuss getan; das kündet Glück für morgen an! O süsse Hoffnung! neubelebter Mut! All' meine Pulse schlagen, und das Herz wallt ungestüm, süss entzückt entgegen ihm, süss entzückt entgegen ihm! Konnt ich das zu hoffen wagen? konnt' ich das zu hoffen wagen? Ja, es wandte sich das Glück zu dem teuren Freund zurück, will sich morgen treu bewähren, will sich morgen treu bewähren! Ist's nicht Täuschung, ist's nicht Wahn? Himmel, nimm des Dankes Zahren für dies Pfand der Hoffnung an! Himmel, nimm des Dankes Zähren für dies Pfand der Hoffnung an! All meine Pulse schlagen, und das Herz wallt ungestüm, all meine Pulse schlagen, und das Herz wallt ungestüm, süss entzückt entgegen ihm, entgegen ihm! süss entzückt entgegen ihm, süss entzückt entgegen ihm, entzückt entgegen ihm!

五、合唱(無伴奏)

い、靜けき夕(作品一)　グラーベルト作曲
ろ、春のめざめ(作品一二〇)　スポール作曲

(い)はベルリンのオルガン家並に宗教的聲樂の作家として名を知らるゝグラーベルト(Martin Grabert 1868—　)の作、(ろ)は近頃の最大ヴァイオリン奏者として、又た著明なる作者及び樂長として知られたるスポール(Ludwig Spohr 1784—1859)の小品。

靜けき夕べ

大須賀績作歌

(一)

かのみ空を行く雲居は日を啣み火とかぎろひ晒すか錦地、漂ひ流れゆく靜けさよ。
心しづかにあはれ心安らけく、天つ神を仰ぎ祈ひけだかき希望あり吾は。

(二)

聞け丘べに鳴く小鳥は香を蹴散らし翅を羽ばたき鳴らすや鈴音、飛び連れ歌ひゆくおもしろさ。
心しづかにあはれ心安らけく、天つ神を仰ぎ祈ひしづけき平和得つ吾は。

(三)

見よみ空に散るみ星は目にほゝゑみ地にさゝやき零すか白露、繁貫き

浮びゆく鮮けさよ。
心しづかにあはれ心安らけく天つ神を仰ぎ祈ひ清しき思ひあり吾は。

春のめざめ

青木存義作歌

かすけき生命の
絶えせず通ひて、
をのゝく夢より
今はたさめしか、
小庭の草。
雲雀の歌さへ
幼き其の音に
みそらを戀ふらし。
人こそ知らざれ、
大空
こほれる大地
今こそ息づき、
樂しき春日は我が世にかへりぬ。
もの皆めざめて、
漲る生命よ
溢るゝ力よ
遙けき希望よ。
和める日影に
野末し霞まば、
彩雲かゞよふ
春こそにほはめ
春こそ。

六、管絃樂

『リエンツィ』の序樂　ヴァグネル作曲

〔大正四年五月二十九日、三十日の「音樂演奏曲目梗概」を參照。〕

〔批評および関連記事〕

上野の演奏會

綠葉したゝる上野の廿六日、例年の通り音樂學校で春期演奏會が催された▲管絃樂はベートーベンの出世作として知られて居る、は短調スインフオニーとワグナーの歌劇「リエンツイ」の序樂である、一は情熱より心靈の叫びを聽く如き思ひせられ、一は嚴かなる靈の境より困める狂熱を思はしめられた、此日二大樂聖の各特徴を樂曲の上に聽き得た事を幸福に思つた▲上高音獨唱の長坂好子女史の聲は努力の跡が見えて來た事を思はしめられた▲ピアノの神戸絢子女史には少からぬ期待を持つて居たが、奏し始められると同時に私は多くの裏切られた心地がした、氏の沈着な彈奏振に引換へ、座に響く音の中には、何故か濁りが見えたを遺憾とする（一記者）

（『都新聞』大正七年五月二十八日）

■五月二十五、二十六の兩日午後二時より東京音樂學校春季大演奏會開催さる。兩日とも曇天なりしも降らず、盛會なり。此日初めてベートーヱンの交響樂我邦に於て演奏せらる。成績も先づ立派なものなり。此位に出來るならば樂曲の困難の程度に於て優劣なき『第九ジュムフォニー』が演奏さるゝを聽くも近き將來ならん。此日來聽せるピアニスト、キャスルンキャムブル孃曰く、"You may be proud of your concert. It is so splendid!"と。お世辭を割引きして受け取とも兎に角立派なものと思ひしは確かなり。これ偏へに出演者の伎倆の向上せる結果に外ならず。慶すべき也。

（『音樂』學友會、第九巻第六号、大正七年六月、五二～五三頁）

再び東京の樂界に寄す

妹尾幸陽

■一年に二度と云ふ音樂學校の春季演奏會と云ふのが五月二十六日にある。其の曲目が第一氣に入らぬ。ワグネルのリエンチの序。ベートーベンの五番交響樂。是丈けのものです。それも海軍々樂隊があればこその事。絶對に海軍を出場せしめないとすれば一體何をやる氣なのです。

■餘り心細い次第じやありませぬか。學校が學校がと云ふ口は、イソップのお伽噺に近いぢやありませぬか。私は何も不眞面目に云ふのではない。折角毎年出來た卒業生がサアと云ふ場合に役に立たぬ様じや、天下國家の損害だと云ふのである。もつと、協心一致して、偉大な合同を作らねばだめだと云ふのである。

■歌劇と云うても、大音樂會と云うても、コーラスやオーケストラまで一人殘らず連れて來られるものでない。さうなれば勢ひ日本の人間を使はねばならぬ。其の時にお役に立ちませぬでは、百日の説法屁一つであらねばならぬ。大きな眼を開け、大きな世界を見よ、是が一番必要の問題である。

■日本にも隨分ピアノ彈きは出來た。而し、六ヶ敷い伴奏をオイキタと彈く力のある人は、亦五人位あやしいとの話である。何と悲むべき有様ではないか。西洋では、伴奏をするのに「稽古して來まして」などゝは、とても、味噌汁で顔を洗つても云へた話じやないのである。日本ではそれが當然の樣に平氣なものである。結局意地も張りもないと云ふ事に歸着する事になる。他人事ではない。今は各自が腕をもつと磨かねばならぬ時である。

（『新音樂』第一巻第二号、大正七年六月、四頁）

大正七年六月一日　邦楽会第十三回演奏会

曲　目

一、清元節
青海波

清元延千嘉
清元延新吉
清元延千太郎
三味線　清元延千八
上調子　清元延荷千代

二、常磐津節
戀鼓調懸罠（吉野山女夫狐）

常磐津文字鶴
常磐津文字國
常磐津文字丸
三味線　常磐津和歌松
上調子　常磐津喜久松

三、長唄
吾妻八景

長唄　杵屋六
同　杵屋六彌太
三味線　杵屋六繁
同　杵屋はつ
上調子　杵屋六壽々

……休憩十五分間……

四、清元節
夫婦酒替ぬ中仲（鞍馬獅子）

清元家内太夫
清元清見太夫
清元朝太夫
三味線　清元順三郎
上調子　清元梅次

五、常磐津節
恩愛瞔關守（宗清）

常磐津松尾太夫
常磐津志妻太夫
常磐津彌生太夫
三味線　常磐津文字兵衛
上調子　常磐津文字助

六、長唄
英執着獅子

長唄　芳村孝次郎
同　芳村伊四郎
同　芳村孝三郎
三味線　今藤長十郎
三味線　杵屋五三郎
同　杵屋勝藏
笛　望月鉦二
小鼓　六合新三郎
大鼓　梅屋勝次郎
太鼓　六郷新十郎

大正七年六月十五日、十六日　学友会春季演奏会

■六月十五十六の両日午後二時より東京音樂學校學友會春季音樂演奏會を開催せり。曲目は左の如し。

第一ヴイオリン　田中英太郎
第二ヴイオリン　草川　信

一、絃樂四重奏……ギ　オ　ラ　北原季男
（ギオロンチェルロ　平井保三）
絃樂四重奏曲、作品三十三、第三番……ハイドゥン
アルレグロ　モデラート
アルレグレット（スケルツォ）
アダーヂョ
フィナーレ（ロンド　プレスト）
二、上高音獨唱　荻野あや
歌劇『カルメン』中のミカエラの抒情調……ビ　ゼ　ー
三、ギオロンチェルロ獨奏　平井保三
甲、悲歌　作品九十八、第一……シャルヱンカ
乙、天使の夢……ルービンシュタイン
丙、旋律……ルービンシュタイン
四、洋琴　第一洋琴　川上きよ
第二洋琴　ショルツ教師
競奏樂　變ホ長調、作品三十二……ゼ　ー　バ　ー
アルレグロ　マエストーゾ（メルトゥケのカデンツ）
アダーヂョ
ロンド　プレスト
五、合唱　會　員
思ひ出……蒲原有明歌
信時潔曲
六、ヴイオリン、獨奏、（絃樂伴奏）　末吉雄二
ローマンス　作品五〇……ベートーヱン
第一洋琴助教授　石原かず
第二洋琴　ショルツ教師
競奏樂　ト短調、作品二十五……メンデルスゾーン
モルト　アルレグロ　コン　フオコ
アンダンテ
プレスト――モルト　アルレグロ　エ　ギヴーチェ
七、洋琴　澤崎定之
甲、春……グ　リ　ー　ヒ
乙、五月の夜作品四三、第二……ブラームス
八、保音獨唱　會　員
天の岩戸（神事劇『エリアス』中の合唱）　メンデルスゾーン曲
乙骨三郎歌
九、合唱
（『音樂』學友會、第九巻第七号、大正七年七月、六八～六九頁）

大正七年六月二十四日　スクラレフスキー演奏会

■六月廿四日午後二時より露西亞サラトフ市サラトフ音樂學校長アレグザンダー　スクラレフスキー氏は東京音樂學校生徒諸子のために特に好意を以つて約二時間に亙り、左の如き純露西亞作家の作品のみよりなる洋琴獨奏會を開いた。リヅムも明確で、タッチの美しいことは特筆に値する。テクニックに於ても音樂的インサイトに於ても近時我邦を訪れた數多い洋琴家中の群を抜いてゐる。とりわけ渾然として珠の如き氏の人格は一層氏の藝術に奥〔ママ〕幽しさを添へる。氏の來朝によつて我邦にては窺ふことの出來なかつた露西亞音樂の神秘の幕が揭げられ、其中に秘められたる數々の寶玉の響きに

接することの出來たのは吾人が夢にも期待しなかつた幸福である。氏は既に三百餘の曲を暗記して居られるが、なほ今夏渡米する迄に三百を加へて六百曲よりなる尨然たるレパトリーを暗記し、其中に我邦の作家の作品も加へたいと云つて日夕非常な勉強を續けて居られる。氏の滯在は長くはない、其中に是非とも氏の演奏會の開かれることを希望せざるを得ない。廿四日の曲目は左の如き興味深いものであつた。

一、別離、ヘ短調……グ リ ン カ
二、い、練習曲、變ロ短調……アレンスキー
ろ、船歌、ヘ長調……アレンスキー
は、前奏曲 イ短調……アレンスキー
三、い、黄昏曲 變ニ短調……ボ ロ デ ィ ン
ろ、マヅルカ は長調……ボロディン
四、船歌 ト短調……ルービンシュタイン
五、い、搖籃歌 變と長調……リ ア ド フ
ろ、圓舞曲 嬰ヘ短調……リ ア ド フ
六、い、マヅルカ ニ短調……チャイコフスキー
ろ、やさしき恨みのかづかづ……チャイコフスキー
は、そのショパン 嬰ハ短調……チャイコフスキー
に、秋の歌……チャイコフスキー
七、い、前奏曲 ろ長調……ラハマニノフ
ろ、演奏會用ポルカ 變い長調……ラハマニノフ
八、雲雀、ロ短調、(グリンカに據る)……バ ラ キ レ フ
九、い、卽興曲、作品十二、第二番……スクリアビン
ろ、前奏曲、作品二、十一、十三、十五……スクリアビン
は、練習曲、作品八、四十二……スクリアビン
九、變奏を有する主題 嬰ヘ短調……グラヅーノフ

曲目第一に載せられたグリンカの『別離』より第一部の終りのラハマニノフの『コンサート・ポルカ』に至る迄十五曲の纖巧、優麗な演奏は匂ふばかりの詩的美に充ちたもので、聽衆はたゞ恍惚として現實の境を離れ、羽化登仙の想ひあるを禁ずることが出來なかつた。タッチの優秀なる、リヅムの精確なる、他に多くの比を見ない。其上教授には優れた頭腦と情緒とがある。第二部に入つては一部よりも稍力強い表出を要求するものが多かつたがスクリアビンの前奏曲の如きは從來何人の演奏にも聽くことの出來なかつた美しさが遺憾なく現はれてゐた。教授が作曲の師たるグラヅーノフの『變奏附主題』の演奏は、重い曲に於ても等しく優秀な演奏家であることを立派に證明した。斯かる優れた藝術の美酒に醉つた聽衆はどうしてこれだけで默つてゐよう筈はなく、演奏全く終つて教授の姿が奏樂堂後に退かれた後もなほ急霰の如き拍手を送つて止まないので、更らに教授自身の作にかゝるイ長調の『思ひ出』、とドゥビュッシー、ベートーヱン(土耳古行進曲)の曲を各一曲宛禮奏されたが、なほ喝采が止みさうもないのでヴーグナーの『トゥリスタンとイゾルデ』の『イゾールデの戀死』をリストが洋琴に直したものゝ堂々たる演奏を以つて其熱心な拍手に答へた。聽衆は音樂學校の生徒職員のためと云うので一般人の來聽を許すことが出來なかつたから、さしもに立派な教授の藝術も多くの音樂愛好者に等しく高い喜びを與へる機會を有たなかつたが、長からぬ氏の滯在中何とかして公開演奏

をされる好機會が現はれて欲しいと思ふ。チェルロの大家シコラ氏夫妻、米國女流洋琴家キャスルンキャムブル孃、露國青年洋琴家レオ　ポドルスキー氏等が見えた。就中キャムブル孃の如きは斯かる美しき洋琴演奏は久しく耳にせざりしものであると流涕し乍ら喜んで居られた。洵にショパンが來つて自ら彼れ自身の涙ぐましきまでに美しい作品の數々を演奏したとしてもスクラレフスキー教授の今日の演奏以上に多くは出でまいと思はれる位である。チェルロのシコラ氏と洋琴のスクラレフスキー教授とは我邦が迎えた露國音樂家中最も卓越した人である。謙遜で自己に就いて多くを語らず、口を開けばたゞ他人の美を稱するところ、ゆかしいその人となりは一層此兩大藝術家の藝術の價値を大ならしめるものである。『美の宗教』たる音樂のため吾人は切に斯かる藝術家の幸福を祈りたいと思ふ。

（『音樂』學友會、第九巻第七号、大正七年七月、六六～六八頁）

大正七年九月二十八日　学友会第二十四回土曜演奏会

■學友會第二十二回土曜演奏會は去る九月廿八日午後二時より本校奏樂堂に於て開催せられ候。今回は從來あまり例を見ざりし程多くのデビュタントを數へ候ひしが、孰れも侮り難き才の閃きを示したる事心強く存ぜられ候。來る十二月十四、十五兩日の大會にはまた他の『喜ばしき驚き』の多くを會友諸氏に贈ることを得んかと存じ候。

一、合唱　　會　　員

甲、夢……シューマン

乙、浦島の子……シューマン

二、ギオロンチェルロ獨奏　　瀧井悌介

甲、ロマンツェ作品五……フイッシャー

乙、ギートムンク作品十一、第一……ポッパー

三、洋琴獨奏　　和泉千代

ロンド　カプリッチョ作品十四……メンデルスゾーン

二、女聲二重唱　　ソプラノ　菊地綾

アルト　鋤柄文

甲、リーベスグラーム　作品七十四、第三……シューマン

乙、ゾー　ヴール　ゾンネ　シャイネット作品三十七、

第十二、同上

五、ヴイオリン　　林龍作

競奏樂第二ト長調……ハイドゥン

アルレグロ　モデラート

アダーヂョ（フィリップ　シャルズンカのカデンツァ附）

六、合唱　　會　　員

甲、花の夢　作品十……イェンゼン

乙、秋の野　作品三十六……フックス

七、高音獨唱　　石川潔

歌劇『アンナ　ボレーナ』中のシーンとカヴティナ……ドニゼッツィ（ママ）（アー！　ペレア　ケ　ペル　インカント）

八、洋奏獨奏　　鵜野君

奏鳴樂作品二、第三……ベートーヱン

アルレグロ　コン　ブリオ

九、低音獨唱　　矢田部勁吉

甲、王の祈り…………ブルフ

乙、秋は恨まず作品四十八第七…………シューマン

十、ヴイオリン　高階哲夫

競奏樂第二十二、第一樂章、イ短調…………ギオッティ

（『音樂』學友會、第九巻第十一号、大正七年十一月、六一〜六二頁）

■七月六日土曜演奏會を催す豫定で居つたのが、大會の時日との距離が餘り僅かなため、十分な準備をするのに困難を感ずるので今年に限つて七月の會は休むことに致しました。

■近頃あまりに音樂會があり過ぎ、それもよいものばかりならば結構でありますが、隨分いかゞはしいものも少くなかつた様な觀がありまして、ためによい音樂會を開かうとする障害になるのを遺憾に思ひます。

■現にチェロのシコラー氏、洋琴のスクラレフスキー教授等の古典的曲目（バッハ、ベートーヴェン等）の演奏會を企てようとした熱心な音樂愛好家があつたにも拘らず、是等の俗惡な演奏會に妨げられて實現出來なかつたのは殘念であります。

■白樺の同人諸氏が海外の美術家の作品の展覽會を自由に開いて邦人の美術鑑識眼を高める上に貢献されて居る様に、音樂の方も興行物視しないで、美術品の展覽會と何の相異もないのであるから、眞に音樂趣味の向上に資すために企てられる研究的の演奏會は主催者の人格次第でもつと自由に開催出來る様にしたならば、どんなにか音樂の進歩發達を助けることであらうかと思はれる。

■これが出來ないならば本當に音樂を愛し、またこれを尊敬する人々が相集つて會を組織し、外國からよい藝術家の來朝する度毎に演奏會を開いて、藝術家にも出來るだけ多くの謝禮をすることが出來る様にしたならば、傳へ聞いてよい音樂家がもつと澤山我邦を訪れて彼等の優れた藝術で我同胞の趣味的生活を富ませて呉れるだらうと思ふ。自分は切にさうなることを祈つて止まない。

（『音樂』學友會、第九巻第七号、大正七年七月、六九頁）

大正七年十月十三日　邦楽会第十四回演奏会

曲目

一、熊野（宗盛花見の段）　河東節

山彦千代　豆千代　豆子

三味線　山彦八重　山彦姫子

二、玉川　上方唄

三味線替手　長谷幸輝

同本手　富崎春昇

同地　加藤柔子

三、大森彦七　常磐津節

常磐津文字花　常磐津都　常磐津松華

三味線　常磐津兼豐

上調子　常磐津林多

――休憩十五分間――

四、春夜障子梅（夕霧）　清元節

清元延壽太夫　清元榮壽太夫　清元正太夫

三味線　清元梅吉

上調子　清元梅之助

五、龍の口　菅野一中節

シテ　菅野序遊

ワキ　菅野利三

三味線　菅野吟平

六、戀罠奇掛合（犬神）　長唄

長唄　芳村孝次郎

同　芳村伊四郎

同　芳村孝三

三絃　今藤長十郎

同　杵屋五三郎

同　杵屋勝藏

笛　西川鉦次

小鼓　六合新三郎

大鼓　梅屋勝次郎

太鼓　六郷新十郎

大正七年十一月三十日、十二月一日　第三十五回定期演奏会

大正七年十二月一日　日曜日　午後二時開會

音樂演奏曲目

東京音樂學校

一、管絃樂

「ロドイスカ」の序曲……ケルビーニ作曲

二、管絃樂附きピアノ……萩原英一

イ短調競奏曲（作品五四、第一章）……シューマン作曲

三、合唱

い、森の朝　青木存義作歌
ろ、たのしき春　大須賀績作歌
……メンデルソーン作曲

は、郊宴の歌　吉丸一昌作歌……ゼーダーマン作曲

四、ヴァイオリン獨奏……多久寅一

ニ短調競奏曲（作品三一、第四番
第一章及第二章）……ヴィユータン作曲

五、獨唱（管絃樂伴奏）……ペッツォルド

歌劇「オベロン」中のレーツィアの抒情調……ヴェーバー作曲

六、管絃樂

ハ長調交響曲（第四十一番）……モツアールト作曲
アレーグロ
アンダンテ、カンタービレ
ミヌエット
モルト、アレーグロ

指揮者　グスタープ、クローン

PROGRAMME
OF
CONCERT
SUNDAY, DECEMBER 1ST, 1918
At 2 p. m.
TOKYO ACADEMY OF MUSIC
UYENO

1. Overture to "Lodoiska" .....*Cherubini.*
2. Concerto for Piano with Orchestra in A Minor,
   Op. 54 (First Movement) .....*Schumann.*
   Mr. Y. Hagiwara.
3. Choruses :
   a. Im Walde.
   b. Die Nachtigall. } .....*Mendelssohn.*
   c. Hochzeits-Marsch.....*Södermann.*
4. Grand Concerto for Violin in D Minor, Op. 31,
   No. 4 (First and Second Movement)...*Vieuxtemps.*
   Mr. H. Ohno.
5. Aria "Ozean, du Ungeheuer" with Orchestra .....*Weber.*
   Mrs. H. Petzold.
6. Symphony with Fugue (Jupiter) in C Major,
   No. 41 .....*Mozart.*
   Allegro
   Andante cantabile
   Minuetto
   Molto Allegro
   Conductor : G. Kron.

音樂演奏曲目梗概　第二十四

一　管絃樂

『ロドイスカ』の序曲　　ケルビーニ作曲

所謂佛蘭西『古典派』の大家ケルビーニ(Luigi Cherubini 1760—1842)の歌劇は今日世に忘られたるもの多く、『ロドイスカ』(一七九一年初演)の如きも今は其の序曲の時々演奏せらるゝを聞くのみ。この序曲は作者の高雅なる管絃樂の一例にして、最初に拍子頗る齊然たる緩徐なる序節あり。之に次ぐ快速部は古典時代の序曲に普通なる形式を具へ樂趣は華美快活なり。第二の樂想殊にめでたし。終に近く牧歌(パストラール)を挿みて變化を施し、序曲は歌劇の結尾と同じく歡喜の調に終る。

二　管絃樂附きピアノ

イ短調競奏曲(作品五四、第一章)　シューマン作曲

獨唱小歌(リード)及び獨奏ピアノ曲に多くの詩趣ある名作を出せるシューマン(Robert Schumann 1810—1856)は競奏曲(コンセルト)の方面にも玆に奏する一傑作を遺せり。作者は其の書簡の一に『余は技術家の爲めに競奏曲を作るを得ず』と記せり。本曲は彼の此の主義を遺憾なく示すものにして、徹頭徹尾技術過重の陋習を避けたる點に於て最も注目に値す。第一章は一八四一年の作に係り、其の形式稍自由にして作者の勃興時代に於ける空想曲の名殘を留む。主樂想は多様に變形せられつゝ反復して全曲に統一を附與す。

三　合　唱

(甲)(乙)は獨逸ロマンティツク派の大家メンデルソーン(F. Mendelssohn-Bartholdy 1809—1847)の合唱曲の小品、(丙)はストツクホルム王立劇場の樂長たりし瑞典人ゼーデルマン(E. J. [Johan August] Södermann 1832—1876)の佳作なり。本演奏には邦語の歌詞を用ふ。

森の朝(もりのあした)

青木存義作歌

(一)

つらなる木末(こぬれ)のいつしか白(しら)みて、
ほのめく葉末(はずえ)、
さゆらぐ小枝(こえだ)、
おとなふそよ風(かぜ)、
下草(したくさ)ふるひ、
置(お)く露(つゆ)ゆりて、
今(いま)しも森(もり)は夢(ゆめ)よりさめぬ。

(二)

さしそふ朝日子(あさひこ)くれなゐ染(そ)むれば、
きらめく葉露(はづゆ)、
色(いろ)ます紅葉(もみぢ)、
小鳥(ことり)の歌(うた)さへ、
朝(あした)をたゝへ、
日(ひ)の影(かげ)ほぎて、
今(いま)こそ森(もり)の樂(たの)しきめざめ。

たのしき春

大須賀績作歌

たのしき春べは　木(こ)ぬれの花に、
君の名かけつつ　鶯鳴くも、吾君(わがきみ)來ませ。

花さく春野(はるの)に淺茅(あさぢ)の上(うへ)に
さゞめく夕月(ゆふづき)いつかと待たむ。
吾君來ませ　吾君來ませ。
君はいついつ、鳥は呼ぶしばゝ。

効宴の歌

吉丸一昌作歌

立つや陽炎(かげろふ)の糸は搖(ゆ)れて
花は綻(ほころ)び草は萠(も)えて
春ぞと催す四方(よも)の色を見よ

わが心すゞろく。
いざいざ酒酌め。樂しの此日を
空には過さで、酒酌め。
人の此の世はいくばくぞや。
醉をすゝめて杯取れ。
再び春はわれに有らず。
今日を樂しく醉に耽れ。
立つや陽炎の糸は搖れて
花は綻び草は萠えて
春ぞと催す四方の色を見よ
わが心すゞろく。
いざいざ酒酌め。樂しの此日を
空には過さで、酒酌め。
心を開きて醉を入れよ。
うれひ捨てゝ酒酌め
人の此の世はいくばくぞや。

四　ヴァイオリン獨奏

ニ短調競奏曲（作品三一　第四番、第一及第二章）　ヴィユータン作曲

ベリオの後を追ひて白耳義樂界の覇者たりしヴィユータン（Henri Vieuxtemps 1820—1881）は十九世紀に於ける最大ヴァイオリン家の一人にして、其の作曲も主として此の樂器の爲めになされたり。ヴィユータンの曲は徒らに技術の浮華を以て俗耳を驚かす如き曲とは撰を異にし、概ね確實なる古典的形式に優れ、高尚なる意味に於て華美絢爛と呼ぶべきものなり。交響曲風に作れる大コンセルト數篇は其の最も好き實例にして本曲は實に其の一なり。

五　獨唱（管絃樂伴奏）

抒情調『大洋よ、汝、怪物よ』　ヴェーベル作曲

獨逸ロマンティック歌劇の始祖といはるゝヴェーベル（C. M. v. Weber 1786—1826）の歌劇『オベロン』は元、英國よりの依頼に應じて作れるものにて、作者の歿する數月前初めてロンドン市に（英文歌詞にて）演奏せられたり。

歌詞は佛蘭西の古き物語『ボルドーのユオン』（Huon de Bordeaux）に基きてプランシェの撰べるものにて、其の筋は魔王オベロンが夫人ティタニアと仲たがひの末、如何なる危難に遇ひても操をかへぬ夫婦を世に見出すまで仲直りせじと誓ふことあり。配下のいたづらものパックはかゝる夫婦を求めて諸方をめぐるうち、ユオンといふ若き武士シャールマーギュの子息を殺したる科にてバグダッドに順禮し、其處なる國王の姫レツィアを花嫁として連れ歸るべき旨宣告せられたりと聞き込み、魔王は妻と仲直りの道具に此の二人を使はんと企て、初めに二人を引き合せたる後二人が歸りの航海中にその船を覆へして彼等を引きはなし、一人一人に誘惑して十分にためしたる後、二人の操の變らざるを見て打ち喜び己は夫人と和解してユオンとその妻を故國に歸らしむといふなり。

茲に奏する抒情調は全篇中最も著明なる高音獨唱にして、レツィアが難船の後、夫に救はれて或る島に着き、蘇生の後大海を眺めつゝ歌ふものなり。怒濤漸くしづまりて、雲霧の中より日光の洩れ出づる樣をうたふまでは一般の叙景なるが、稍快速調に入りて、『かしこに美しく白くきらめくは何』より以下は海賊船の近づくを認めて救ひの舟と打ちよろこび、ユオンにもとく見よと呼ぶなり。

伴奏器樂の巧みなる叙景法は全體の効果に多大の關係あり。殊に初の快速部に於ける怒濤の描寫と日の出をうつせる朗吟調及び之に續く並歩調の伴奏に於て然り。

Arie der Rezia.

(Largo assai.) Ozean! du Ungeheuer! Schlangengleich hältst du umschlungen rund die ganze Welt! Dem Auge bist ein Anblick voll Grösse du, wenn friedlich in des Morgens Licht du schläfst! Doch wenn in Wut du dich erhebst, o Meer! und schlingst die Knoten

un dein Opfer her, zermalmend das mächtige Schiff, als wär's ein Rohr: dann, Ozean, stellst du ein Schreckbild dar.

(Allegro con moto) Noch seh ich die Wellen toben, durch die Nacht ihr Schäumen schleudern an der Brandung wild gehoben, jede Lebens hoffnung scheitern. Doch still! Seh ich nicht Licht dort schimmern, ruhend auf der fernen Nacht, wie des Morgens blasses Flimmern, wenn vom Schlaf er erwacht? Heller nun empor es glühet in dem Sturm, des Nebel zug wie zerrissne Wimpel fliehet, wie wilder Ross Mähnenflug.

(Maestoso assai) Und nun die Sonne geht auf! Die Winde lispeln leis; gestillter Zorn wogt nur im Wellenkreis.

(Andante maestoso, ma con moto) Wolkenlos strahlt dann die Sonne auf die purpurwellen nieder, wie ein Held nach Schlachtenwonne siegreich eilt zur Haimat wieder. Ach! vielleicht erblicket nimmer wieder dieses Aug ihr Licht! Lebe wohl, du Glanz, für immer, denn für mich erstehst du nicht, denn für mich erstehst du nicht!

(Allegretto) Doch was glänzt dort schön und weiss, hebt sich mit der Wellen Heben? 's ist Möve, sie schweift im Kreis, wo die Flut raubt ein Leben!

(Allegro moderato) Nein, kein Vogel ist's! Es naht! Heil! Es ist ein Boot, ein Schiff! Und ruhig segelt's seinen Pfad ungestört durch das Riff.

(Presto con fuoco) O Wonne! Mein Hüon, zum Ufer herbei, zum Ufer herbei! O Wonne! Mein Hüon, zum Ufer herbei, zum Ufer herbei! Schnell, schnell diesen Schleier! Er weht! O Gott, sende Rat! Sie sehn mich! Schon Antwort! Sie rudern mit Macht! Hüon! Hüon! Hüon! Hüon! Hüon! Hüon! Hüon! Hüon! Mein Hüon, mein Gatte, die Rettung, sie naht! mein Gatte, mein Hüon, die Rettung, sie naht! sie naht! Rettung! Hüon! Rettung nacht! Rettung, sie nacht! Mein Hüon, mein Gatte, die Rettung, sie naht! Mein Hüon, mein Gatte, die Rettung, sie naht! Rettung naht, Rettung naht. Rettung naht! Rettung naht! Rettung naht!

六管絃樂
ハ長調交響曲　　モツアールト作曲

一七八八年作の本曲はモツアルト(W. A. Mozart 1756—1791)の最後の交響曲にして、又た最も壮大高貴の趣あるものなり。世人が『ジュピター』の名を以て之を稱するも亦た宜なりと謂ふべし。

第一章は序節なくして直ちに快速部に入る。曲頭に現はるゝ第一樂想は時に壯麗、時に優美の特性を帶ぶ。第二の樂想は極めて溫雅にして、之に次ぐ挿句は喜悦の情に充ちたり。

第二章(並歩調)は甚だ哀情に富み、旋律は一として美妙ならざるものなし。殊に弱音器を附したるヴアイオリンに現はるゝ最初の樂想に於て然り。ベースこれを承けて反復するや、新しき旋律ファゴットに現はれ、これよりオーボエに奏せらるゝ極めて平和なる第二樂想に連る。

第三章のメヌエット舞曲は極めて可憐なり。其の進行圓轉自在にしてモツアールトに多く見る快活清新の調に充てり。主部と同調に作れる中部(トリオ)には無邪氣なる嬉戯の情溢れたり。此の部分は八分音符の旋律に於ても、樂器の配合に於てもハイドンの佛を存す。

全篇中最も名高き第四章(終曲)は四つの樂想に基けるフーガにしてモツアールトの對位法に於ける造詣の深きを示す好適例と許せらる。殊に急迫奏(ストレット)及びカノン式模倣に於て其の妙技を見る。されど本曲の更に卓越せるはかゝる技術の巧妙と共に最も壯大高貴なる感情を表出せる點にあり。

〔関連記事〕

■十一月三十日、十二月一日午後二時より東京音樂學校秋季音樂演奏會開催せられ、兩日とも滿員の盛況を見たり。斯かることは數年前に於ては見られざりし事なり。曲目は左の如し。〔曲目省略〕

(『音樂』學友會、第十卷第一号、大正八年一月、六七頁)

大正七年十二月八日　学友会第二回特別演奏会

■十二月八日午後二時より學友會第二回特別演奏會『ベートーヱンの午後』を開催、豫告の如く久野助教授によつて左記の五大奏鳴曲演奏されたり。

一、悲愴奏鳴曲
二、月光奏鳴曲
三、ニ短調奏鳴曲
四、極光奏鳴曲
五、熱情奏鳴曲

（『音樂』學友會、第十巻第一号、大正八年一月、六八頁）

大正七年十二月十四日、十五日　学友会秋季演奏会

■十二月十四、十五兩日午後二時より本會秋季大演奏會を左の曲目に依つて開催せり。

一、女聲三重合唱　會員
甲、沙翁『十二夜』中の歌……ブラームス
乙、園丁……ブラームス
二、洋琴　第一　神戸貞子
第二　ショルツ教師
ニ短調變奏曲……モーツァルト
アルレグロ（ベートーゼンのカデンス）
ロマンス
ロンド（フムメルのカデンス）
三、上高音獨唱　岩田さと
歌劇『セミラミーデ』中の抒情調……ロッスィーニ
（ベル　ラヂオ　ルシンギエール）
四、洋琴　第一　上野マサヲ
第二　ショルツ教師
ハ長調競奏曲、作品十五……ベートーゼン
アルレグロ　コン　ブリオ（ライネッケのカデンス）
五、合唱　會員
甲、オッシアンの『フィンガル』中の歌（女聲三重合唱）……ブラームス
乙、歌劇『タンホイザー』中の巡禮の合唱（男聲四重合唱）……ワークナー
六、絃樂合奏　會員
甲、牧歌……スイモネッティ
乙、『ヂョスラン』の子守唄（チェルロ獨奏平井保三）……ゴダール
七、上高音獨唱　奈良春枝
歌劇『ディノーラー』中の宣叙調と子守唄……マイエルベール
八、ヴイオリン　草川信
第十一競奏曲、作品二十三、第一樂章……ロード
九、深音獨唱　外山國彦
甲、アナクレオンの墓……ブルフ
乙、アルレルゼーレン作品十、第八……シュトラウス
十、洋琴　第一　助教授　高折宮次
第二　ショルツ教師
ヘ短調競奏曲、作品七十九……ゼーバー
十一、合唱　會員
騎士とその娘……パーカー
指揮者助教授船橋榮吉、同大塚淳

（『音樂』學友會、第十巻第一号、大正八年一月、六八～六九頁）

大正七年十二月二十二日　邦楽会第十五回演奏会

【曲　目】

富本節
一、花川戸身替の段（はなかはとみがはりだん）（お　俊）
三味線　富本豊　名見崎登女　名見崎柳子　名見崎多賀
三味線　富本豊喜

清本節
二、道行浮塒鷗（みちゆきうきねのともどり）（おそめ久松）
三味線　清元延千嘉　清元延千太郎　清元延千八
上調子　清元延菊千代

長唄
三、新浦島（うらしま）曲（坪内博士作）
長唄　芳村孝次郎　芳村孝太郎　芳村孝三
三味線　今藤長十郎　杵屋五三郎　杵屋勝藏
笛　西川鉦次
小鼓　六合新三郎
大鼓　梅屋勝次郎
太鼓　六郷新十郎

……（休憩十五分間）……

新内節
四、若木仇名草（わかきのあだなぐさ）（蘭　蝶）
三味線　富士松加賀太夫　吾妻路宮古太夫

踊
五、浪枕月淺妻（なみまくらつきのあさづま）（朝　妻）
西川喜代春　長唄囃子連中

大正八年二月十五日　学友会第二十五回土曜演奏会

土曜演奏會曲目梗概

一、洋琴獨奏　橘川なみ
奏鳴曲、作品三十四、第一……クレメンティ

二、女聲二重唱　奈良春枝　相賀たか
歌劇『自由射手』中のエーンヒェンとアガーテの二重唱……ヱーバー

三、風琴獨奏　下總覺三
カンツォネッタ……ギルマン

四、高音獨唱　秋元トシ
甲、歌劇『サムソンとダリラ』中の春の歌……サン・サエンス
乙、『森の魔女』……ルービンシュタイン

五、保音獨唱　伊藤祐司
甲、悲歌……マッスネー
乙、ヂョスランの子守唄……ゴダール

六、洋琴獨奏　木村しづ
奏鳴曲、イ短調……モーツァルト

七、ギオロンチェルロ　酒井悌
競奏曲、ニ短調……ゴダール
アルレグロ　モデラート
アンダンテ

八、合唱　會員

甲、渡り鳥……信時潔
乙、旅の歌……信時潔

（『音樂』學友會、第十卷第二号、大正八年二月、広告頁）

▲十五日　東京音樂學校の土曜演奏會を四番目の秋元とし子さんの獨唱「森の魔女」より聽いた、この人の獨唱は可なり、柔な丸みのある聽快い聲ではあるが、もちつと慾には聲量と聲に力とがあつてと思はれた。それだけに唱つた「森の魔女」は未だ充分なものとは言へない。この「森の魔女」はルビンシユタインの作で非常に優れた曲であつた。あの滅入る様な靜な歌につれてピアノの伴奏で啼の音をきかして、この靜寂の中に一つの恐怖をそゝるやうな、それが亦曲の進行に伴ふて忽ちに魔女の叫び狂ふ如き様に變じて轉々としてゐるこの曲は可成り感銘のあるものであつた。次ぎに伊藤祐司氏のマスネーの悲歌、ゴダールのジヨスランの子守唄との獨唱があつたが、氏も充分とは言へないが相當に唱ひこなしては居た。けれど、どうも低音の音程が少し亂れ勝ちなのが、氣になつたが尤つと注意して御修業がありたい。然しそれとも此方の聽誤りか。第六にクレメンテーのソナタを獨奏した橘川なみさんのピアノは一生懸命なところが嬉しい。是れこそこの一生懸命で尤つと〳〵御修業が肝心、酒井悌氏のチエロ獨奏はゴダールのコンチエルトニ短調で、流石にこの三月卒業の人とうなづかれた出來榮は見事なもの、けれど無理に貶せば一本立になるには、もう少し早しと言つて仕舞ふは惡からうか……。一層の御奮勵を望む。終りの合唱は信時潔氏のものせられた「渡り鳥」「旅の歌」二曲共中々結構なもので讃すべき出來、殊に後者が最も優れてゐたと思はれたは吾れのみではなかつたらう。指揮は信時氏自からの御熱心ぶり。例の身ぶり面白き指揮には思はず本役御苦勞〳〵。

（『月刊樂譜』第八卷第三号、大正八年三月、三三頁）

大正八年三月二十五日　卒業式

大正八年三月二十五日（火曜日）午後一時三十分

卒業證書授與式順序

一　卒業證書授與
二　校長告辭
三　文部大臣祝辭
四　卒業生總代謝辭

演奏曲目

第一部

一、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　出島セイ
　ロ長調コンチエルト（第二番作品十九、第一樂章）…ベートーヴェン作曲
二、ヴァイオリン獨奏……甲種師範科卒業生　渡邊亮
　ト長調コンチエルト（第二十三番、第一樂章）……ヴィオッティ作曲
三、低音獨唱……本科聲樂部卒業生　矢田部勁吉
　イ、墓地ニ於テ（第四番、作品百五）……ブラームス作曲
　ロ、魔王（作品一）……シューベルト作曲
四、ピアノ獨奏……研究科器樂部修了生　宇佐美ため
　イ長調コンチエルト（五番）……モツアールト作曲
五、上高音獨唱……本科聲樂部卒業生　岩田さと
　歌劇「ノルマ」中の抒情調……ベルリニ作曲
六、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　田中規矩士
　變イ長調コンチエルト（第二番）……フィールド作曲

第二部

七、オルガン獨奏……研究科器樂部修了生　眞篠俊雄

ニ短調トッカータ及フーガ …… バッハ作曲

八、ヴァイオリン獨奏 ……本科聲樂部卒業生 奥村艶

ホ短調コンチェルト（第八番、作品十三、第一樂章） …… ロード作曲

九、女聲三重唱 ……本科聲樂部卒業生 荻野アヤ 奈良春枝 石川きよし

歌劇「魔笛」中の三女の歌 …… モツアールト作曲

十、ピアノ獨奏 ……本科器樂部卒業生 川上きよ

ヘ短調コンチェルト（作品二十一、第一樂章）…… ショパーン作曲

十一、上高音獨唱……研究科聲樂部修了生 武岡鶴代

歌劇「ミーニオン」中のフィリネの歌 …… トーマ作曲

十二、ピアノ獨奏…… 研究科器樂部修了生 室岡清枝

ハ短調コンチェルト（第三番、作品三十七、第一樂章）…… ベートーヴェン作曲

十三、合唱

イ、送別 ロ、月光 大須賀續作歌 ……メンデルソーン作曲

ハ、さらば鄕里（民謠）

GRADUATION EXERCISES
OF THE
TOKYO ACADEMY OF MUSIC
UYENO PARK
Tuesday, 25th March, 1919.
At 1.30 P.M.

Programme.

I. Presentation of Diplomas.

II. Address to the Graduating Class by the Director.

III. Address by His Excellency Nakabashi, Minister of Education.

IV. Response by the Representative of the Graduating Class.

PART I.

1. Concerto for Piano in B Major No. 2 Op. 19. Cadence by Reinecke (1st movement) ……Beethoven.
   Miss S. Dejima.
2. Concerto for Violin in G Major No. 23 (1st movement) ……Viotti.
   Miss R. Watanabe.
3. Bass Solo: *a.* Auf dem Kirchhof No. 4 Op. 105…Brahms.
   b. Erlkönig Op. 1. ……Schubert.
   Mr. K. Yatabe.
4. Concerto for Piano in A Major No. 5……Mozart.
   Miss T. Usami.
5. Soprano Solo: Aria from "Norma" ……Bellini.
   Miss S. Iwata.
6. Concerto for Piano in A Flat Major No. 2. ……Field.
   Mr. K. Tanaka.

PART II.

7. Toccata e Fuga for Organ in D Minor ……Bach.
   Mr. T. Mashino.
8. Concerto for Violin in E Minor No. 8 Op. 13 (1st movement) ……Rode.
   Miss T. Okumura.
9. Female Terzetto:
   "Stirb, Ungeheuer!" from "Zauberflöte."……Mozart.
   Miss A. Ogino, Miss H. Nara and Miss K. Ishikawa.

10. Concerto for Piano in F Minor Op. 21
(1st movement) ……………………………Chopin.
Miss K. Kawakami.
11. Soprano Solo: "Je suis Titania" from "Mignon" …Thomas.
Miss T. Takaoka.
12. Concerto for Piano in C Minor No. 3 Op. 37. Cadence
by Reinecke (1st movement) ………………Beethoven.
Miss K. Murooka.
13. Choruses: a. Jäger Abschied
b. Gottesrat und Scheiden } ………Mendelssohn.
c. Abschied von der Heimat (Folk song)

大正八年四月六日　邦楽会第十六回演奏会

一、夕ぎり
薗八節
シテ　宮薗千香
ワキ　宮薗千眞
三味線　宮薗千春
同　宮薗千代

二、道行念玉蔓（長作）
富本節
富本豐
名見崎登女
三味線　名見崎柳子
上調子　名見崎多賀
名見崎けい子

三、式三番叟
此曲の本式の囃子は近年中絶せしが今回は古式に據れり
常磐津節
常磐津松尾太夫
常磐津志妻太夫
常磐津彌生太夫
常磐津小文字太夫
三味線　常磐津文字兵衛
常磐津文字助
絃　常磐津和歌吉
笛　西川鉦次
小鼓　六合新三郎
小鼓　梅屋勝次郎
大鼓　六郷新十郎

四、隅田川
清元節
清元延壽太夫
清元榮壽太夫
清元正太夫
三味線　清元梅吉
上調子　清元梅之助

五、勧進帳
長唄
長　唄　芳村孝次郎
芳村孝太郎
芳村孝三
三味線　今藤長十郎
同　杵屋勝藏
上調子　杵屋五三郎
笛　西川鉦次
小鼓　六合新三郎
小鼓　梅屋勝次郎
大鼓　六郷新十郎

大正八年五月三十一日、六月一日　第三十六回定期演奏会

大正八年六月一日　日曜日　午後二時開會

音樂演奏曲目　　東京音樂學校

一、管絃樂
ヘブリディーズ序曲（作品二十六）……………メンデルソーン作曲

二、ピアノ及オルガン伴奏附女聲合唱
ヴェニスに於ける夕の祝典……………シャルヴェンカ作曲
ピアノ　川上きよ
オルガン　中田章

三、管絃樂附ピアノ……………………ショルツ
變ホ長調競奏曲（第一番）……………リスト作曲

四、上高音獨唱………………長坂好子
神劇歌「エリヤ」中の抒情調……………メンデルソーン作曲

五、混聲合唱
い、夜の歌………………………………イエンゼン作曲

ろ、心の花……（吉丸一昌作歌　ブラーム作曲）

六、管絃樂

く長調交響曲（第六番、作品六十八）……ベートーヴェン作曲

一、田舎に到りしときの快感
二、小河のほとりの景
三、農民の歡會
四、雷雨
五、牧人の歌（雨後の樂しき感謝の情）

指揮者　グスタフ、クローン

PROGRAMME
OF
CONCERT
SUNDAY, JUNE 1ST, 1919
2 p. m.
TOKYO ACADEMY OF MUSIC
UENO

1. Overture "The Hebrides" Op. 26. .....*Mendelssohn.*
2. Female Chorus with Piano and Harmonium:
   Abendfeier in Venedig .....*Scharwenka.*
   Piano: *Miss K. Kawakami,*
   Harmonium: *Mr. A. Nakada.*
3. First Concerto in E flat Major for Pianoforte and Orchestra .....*Liszt.*
   Mr. P. Scholz.
4. Aria for Soprano from the Oratorio "Elijah"
   ..... *Mendelssohn.*
   Miss Y. Nagasaka.
5. Mixed Choruses:
   a. Nachtlied .....*Jensen.*
   b. Kokoro no Hana (Words by K. Yoshimaru)
   .....*Brahms.*
6. Sixth Symphony in F Major (Pastoral)
   Op. 68 .....*Beethoven.*
   Allegro ma non troppo (The cheerful impressions excited on arriving in the country)
   Andante molto moto (By the Brook)
   Allegro (Peasants' Merrymaking)
   Allegro (Thunder-Storm)
   Allegretto (The Shepherd's Song; glad and thankful feelings after the storm)

Conductor: G. Kron.

音樂演奏曲目梗概　第二十五

一　管絃樂

『ヘブリディーズ』序曲　　メンデルソーン作曲

獨逸ロマンティック樂派の名家メンデルソーン（F. Mendelssohn-Bartholdy 1809–1847）は一八二九年（二十歳の時）英京倫敦に赴き、此處に自作の數曲を公にして頓に名聲を揚げしが、同年蘇格蘭に漫遊してヘブリディーズ諸島にフィンガルの岩屋を訪ねき。本曲（作品二六）は當時の印象を記したるものにして曲頭の一節は景に接して直ちに成れるものなりといふ。翌年以太利に滯在中略々其の稿を了へ、後更に修正を加へて一八三二年之を倫敦に發表したり。

形式の完備と構想の豐富とは神秘なる自然の生命を描寫する詩的直觀力と相俟て本曲を不朽の名作たらしめたり。ワグネルは常にメンデルソーン

を賞揚せし人にあらざるも、此の序曲に就ては讃辭を惜まざりき。曰く『ヘブリディーズ』は作者の傑作なり。驚くべき想像力と微妙なる感情とは完全なる技術を以て此に表はさる』と。

曲の骨子となれる樂想は他の名曲に於けると等しく單純なり。作者は曲頭に現はるゝロ短調の第一樂想に配するに表情に富めるニ長調の旋律を以てせり。

此の兩想は何れも最初低き管絃の響に現はれ、上に和音ありて時には長くひき、時には幽かに波うちつゝ之を包む。凡て神秘の趣を帶べり。外に開展の際に用ひらるゝ一二の樂句あり。これ等の想相集つて詩趣深き音畫を成し、獨得の管絃編成は之に沈みたる色彩を添ふ。空暗き北海の岸に風うめき浪あるゝさまは遺憾なく此處に描かれて凄寥の氣全篇に充ちたり。

二　ピアノ及オルガン伴奏附女聲合唱

『ヴェニスの夕の祭典』　　シャルヴェンカ作曲

フィリップ・シャルヴェンカ (Philipp Scharwenka 1847–1917) は元波蘭の人なるが、永く伯林に在りて一二の樂院に教鞭を執り、樂理の教師及び作曲者として名あり。本曲(作品八九)はガイベルの詩に附曲せる小品にして、靜かなる夕の空に晩鐘の鳴り響くひと時の敬虔なる心を述べたり。

Abendfeier in Venedig.

Ave Maria! Meer und Himmel ruh'n
Von allen Thürmen hallt der Glocken Ton;
Ave Maria! Lasst vom ird'schen Thun,
Zur Jungfrau betet, zu der Jungfrau Sohn.
Des Himmels Schaaren selber knieen nun
Mit Lilienstäben vor des Vaters Thron,
Und durch die Rosenwolken weh'n die Lieder
Der sel'gen Geister feierlich hernieder.

O heil'ge Andacht, welche jedes Herz
Mit leisen Schauern wunderbar durchdringt!
O sel'ger Glaube, der sich himmelwärts
Auf des Gebetes weissem Fittag schwingt!
In milde Thränen löst sich da der Schmerz,
Indess der Freude Jubel sanfter klingt.
Ave Maria! Wenn die Glocke tönet,
So lächeln Erd' und Himmel mild versöhnet.—E. Geibel

三　管絃樂附ピアノ變ホ長調競奏曲（コンセルト）　　リスト作曲

匈牙利に生れたる空前絶後の洋琴家リスト (Franz Liszt 1811–1886) はワイマール在住時代（一八四八年以後）に於て一生の最盛期に達せり。天下の名手は競うて其の門に集り、師として彼を敬はざるものなかりき。彼の大作も亦多く此の時代になれり。有名なる變ホ調の第一競奏曲の如きも其の一なり。

リストの本曲を作るや其の外形に於ては慣例に從ひ、奏者の手腕を誇示するに便なる一切の手法を網羅したるも、單に技術の熟達を示すを以て究竟の目的となさず、之を藝術表現の手段たらしめんとする主義を貫けり。されば徒らにピアノ部のみを華美に作りて管絃部を之が從たらしむるが如きことなく、樂聖ベートーヴェンに倣ひて善く兩者の間に密接なる藝術的統一を附與するに努め、且つ簡潔なる構造と一貫せる樂想とによりて先人よりも更に一層競奏曲各部の融合を密ならしめたり。絶好の諧音、絶美の旋律、走過句の華美、躍動する情熱、これ等は本曲の比類稀なる特徴なり。曲の構造は彼の『交響詩』と等しく所謂『一章もの』なりと雖、細かに見れば在來の四章の別を認むるを得べし。最初の威嚴ある快速部 (Allegro maestoso) に次で緩徐部の美調 (Quasi adagio) に移り、第三に嬉戲曲 (スケルツォ) (Allegretto vivace)を挿めるはベートーヴェンのソナータに見るが如し。作者は絃樂器とトライアングルを以て此のスケルツォの端緒を開けり。本曲が千八百五十六七年に亘る音樂季節に維也納の一樂會に奏せられし時、此のトライアングルは端なくも聽衆の不興を招き、評家ハンスリックは之をトライアングルのコンセルトなりと冷評したるが爲め、十餘年の長き間本曲は此の府の樂堂に禁制せられしと傳ふ。作者は近親に宛てたる書簡中

に語りて曰く『スケルツォは中間の對照として用ひたるものなり。かのトライアンゲルは惡感を起す場合なきにあらざるべし。殊に餘り強く又不正確に打つときには然らん』と。

最後の第四章『勇壯なる快速部』(Allegro marziale)は前の三章に表はしたる諸樂想に變化を加へてこれを再現し巧みに全篇の統一を計れり。

四　上高音獨唱

神劇歌『エリヤ』の一節　　メンデルソーン作曲

作者は四十歳に充たざる短生涯の間に驚くべく多數の傑作を遺したが、就中神劇歌(獨唱合唱管絃樂を以て表はす劇的聲樂にして主に神事を內容とす)の方面に於ける二大作は史家の最も重視する所なり。殊に『エリア』は『聖パウロ』よりも圓熟の技能を示すものとして賞揚せらる。

本曲は一八四六年英國バーミンハムの音樂祭の時初演をなせり。歌詞は聖書(殊に舊約の列王紀略上)より其の儘撰びたるものにして、豫言者エリヤの重なる事蹟を敘せり。上下二篇に分れ、上篇にはエリヤの早魃の豫言、ザレパタに於ける寡婦の兒の救濟、カルメル山頂にてバール教徒を壓服の事、及び降雨終に到る事等を描けり。今日演奏する上高音獨唱『聽けイスラエル』は下篇の最初に在る名高き歌調にして當代一流の歌者ジェンニ、リンド(Jenny Lind)の爲めに作れりいふ。こは背教の國民が近く起れる事實に鑑みて再び正教に歸依すべきことを誡告する叫なり。最初ア、ダージョ緩徐なる進行に起り、中比に『神はかくそのたまふ』のレシタチーフ朗吟調を挿み、それより以下の神言『我は汝を慰撫するものぞ、遁るゝ勿れ云々』は威嚴ある快速調を以て表はさる。本曲は單純なる樂句の力によりて強き感銘を與ふ。

Sopran Arie aus "Elias"

(Adagio) Höre, Israel, höre des Herrn Stimme! Ach, dass du merktest, merktest auf sein Gebot! Höre, Israel, Höre des Herrn Stimme! Ach, dass du merktest, merktest auf sein Gebot, ach, dass du merktest, merktest auf sein Gebot, ach, dass du merktest auf sein Gebot! Aber wer glaubt unsrer Predigt? und wem wird der Arm des Herrn, der Arm des Herrn geoffenbart? Wem wird der Arm des Herrn geoffenbart? Höre, Israel! höre, Israel! höre, Israel, höre des Herrn Stimme! Ach, dass du merktest auf sein Gebot! ach, dass du merktest, merktest auf sein Gebot! Höre, Israel, Israel! höre des Herrn Stimme!

(Recitativ) So spricht der Herr, der Erlöser Israels, sein Heiliger zum Knecht, der unter den Tyrannen ist, so spricht der Herr:

(Allegro maestoso) Ich, ich bin euer Tröster. Weiche nicht, weiche nicht, denn ich bin dein Gott! Ich, ich bin euer Tröster. Weiche nicht, weiche nicht, denn ich bin dein Gott; ich stärke dich. Weiche nicht, ich stärke dich, ich bin dein Gott, ich stärke dich. Wer bist du denn? Wer bist du denn, dass du dich vor Menschen fürchtest, die doch sterben? und vergissest des Herrn, der dich gemacht hat, der den Himmel ausbreitet, und die Erde gründet, die Erde gründet? Wer bist du denn? Ich, ich bin euer Tröster! Weiche nicht, weiche nicht, denn ich, ich bin dein Gott? Weiche nicht, weiche nicht, denn ich bin dein Gott, ich stärke dich!

五　混聲合唱

い、夜の歌　　イェンゼン作曲

ろ、心の花　　ブラームス作曲

一は小歌の作家として知られたる獨のイェンゼン(Adolf Jensen 1837–1879)の作品、二は獨の大家ブラームス(Johannes Brahms 1833–1897)の短歌集(作品六二)中の一、邦語の歌詞は原歌(ハイゼ詩集中の一篇)の意を酌みて作れり。

Nachtlied.

Der Mond kommt still gegangen
Mit seinem goldnen Schein,
Da schläft in holdem Prangen
Die müde Erde ein.
Im Traum die Wipfel weben,
Die Quellen rauschen sacht,
Singende Engel durchschweben
Die blaue Sternennacht.

Und auf den Lüften schwanken
Aus manchem treuen Sinn
Viel tausend Liebesgedanken
Über die Schläfer hin.
Und drunten im Thale, da funkeln
Die Fenster von Liebchens Haus;
Ich aber blicke im Dunkeln
Still in die Welt hinaus.—E. Geibel

心の花

吉丸一昌作歌

小草の蕾は一夜の露に綻ぶ。
なさけの花は何にか咲く。
いつの日にか咲く。
なさけはなさけの露に咲けども
いつとは知らじな神に問へかし。
神こそ知らめ。

六管絃樂

ヘ長調交響曲（作品六十八）　ベートーヴェン作曲

田園交響曲と呼ばるゝ本曲はベートーヴェン（L. v. Beethoven 1770–1827）が一八〇八年維也納の近郊に作れるものなり。自然を熱愛せし作者は此の交響曲に於て遺憾なく田園生活の氣分を表現し、所謂『標題樂』の好模範を遺せり。彼は曲の各章に一々標題を附して其の中に描かれたる事の意味を示すと共に冒頭には『描寫よりも寧ろ表出』（Mehr Ausdruck als Malerei）との一語を掲げて其の主眼とする所を明にせり。

第一章は『田園に到着せし時の快感』を表はすものにして全篇輕快なる氣分に充ちたり。こゝに用ひらるゝ樂句は凡て小形の單純なるものにして、これ等を幾度も反復する間に、聽者は單調に似て而も飽くことなき自然の風景に接するの感を抱くに至る。第二章は小河の邊の景を描けり。章の殆ど全部を通じて絶えず波動する絃樂器の單調なる伴奏の上に、ヴァイオリン先づ主なる旋律を表はし、管樂器之れに第二の樂句を副ふ。短かき音形は絶えず種々の樂器に飛び移り、時には前後して應答し、時には連れだちて三度、六度の諧音を成し、時には又た震音（トリロ）となり指彈（ピチカト）となる。かくして全曲は鳥の聲、虫の羽音ににぎはしき河邊の夕ぐれを想はしむ。終りの數節に於て作者は一種のカデンツを挿み、こゝに三つの鳥の聲を其の儘に聞かせたり。（フリュートは鶯（ナハチガル）をオーボエは鶉（ワハテル）を、クラリネットは郭公（クックーク）を模す）こは評家の間に屢々論議せられたる箇處にして或は兒戯に類すと爲し或は單に嬉戯なりといへり。

第三章は農民の歡會と題す。凡て農民舞踏の狀を描けるものにして、その騒興亂舞は前章の樂趣と著しき對照をなせり。初め三拍子のミニュエット風の進行に起り、中頃急轉して四分二拍子となり、やがてまた最初の曲に歸る。されど舞踏は突如として止み、遠雷の音バスの震音に現はれこれより以下の一節は雷雨の物凄き景を寫せり。されどそれも暫くにして雲散り空晴るれば、やさしきシャルマイの音につれて牧人の感謝の調に移りこれを以て全曲を結ぶ。

大正八年六月七日、八日　学友会春季演奏会

■去る六月七、八の兩日午後二時より本會春季大演奏會を擧行せり。曲目は左の如くなるが其中弘田龍太郎氏作洋琴三重奏曲の初演奏は最も意義あるものにして記憶すべき出來なりと信ず。合唱は孰れも指揮者大塚氏の選擇及び指導兩つながら宜敷を得たるため近來になき効果を收め得たることゝ、川上、室岡、立松、田中諸氏の演奏は夫れ夫れ注目に價するものなりしことを附記せんと欲す。

一、混聲合唱　　會　　員
　奠都祭の日に……チャイコフスキー曲、大須賀績歌
二、ギロオロンチェルロ獨奏　　伊達三郎
　奏鳴曲、作品二の第二……ビアッティ

三、低音獨唱
歌劇『エロディアード』中の一節……マッスネ　矢田部勁吉
四、洋琴
第一、川上きよ、第二、ショルツ
ヘ短調競奏曲作品二十一（全曲）……ショパン
五、女聲三重合唱（ヴイオリン及チェルロ助奏）…會員
若き日のよろこび……ネービン曲、大須賀績歌
六、管絃樂　會員
い、船歌……オッフェンバッハ
ろ、ビッテ　シェーン……ヨハン　シュトラウス
七、七重奏　會員
作品二十中の變奏曲……ベートーヴェン
八、洋琴
第一、室岡清枝、第二、ショルツ
ハ短調競奏曲中の第一樂章ライネッケの終節…ベートーヴェン
九、洋琴三重奏、洋琴、弘田、ヴイオリン
末吉、チェルロ、平井保三
ニ長調三重奏曲……弘田龍太郎
十、上高音獨唱　立松ふさ
歌劇『アルセスト』中のアルセストの抒情調…グルック
十一、ヴイオリン　田中英太郎
イ短調作品二十二、第二、第三樂章ヨアヒム編……
……ギオッティ
十二、男聲合唱附二重唱
レオノーレ、荻野あや、マンリーコ、伊藤祐司
歌劇『トゥロバトーレ』の第四幕中の二重唱…ヴェルディ

大正八年六月十五日　邦楽会第十七回演奏会

曲目

富本節
一、春夜障子梅（はるのよしやうじのうめ）（夕霧）
三味線　富本豐、名見崎登女、名見崎柳子、名見崎多賀
上調子　名見崎けい子

清元節
二、〆能色相圖（しめろやれいろのかけごゑ）（神田祭）
三味線　清元延千嘉、清元延千太郎、清元延千八
上調子　清元延菊千代

三曲
三、小督曲（こがうのきよく）
箏　萩岡松韻
同　高野松峯
三絃　高橋榮清
尺八　水野呂童

――〔休憩十五分間〕――

清元節
四、深山櫻及兼樹振（みやまのはなとゞかぬえだぶり）（保名）
清元喜久太夫、清元清見太夫、清元富美太夫
三絃　清元順三郎
上調子　清元三二

長唄
五、菖蒲浴衣（あやめゆかた）
長唄　芳村孝次郎、芳村孝太郎、芳村孝三郎
三絃　今藤長十郎、杵屋五三郎、杵屋信三郎

大正八年七月五日　学友会第二十六回土曜演奏会

學友會土曜演奏會曲目

一、三重奏
洋琴、木岡英三郎、ヴイオリン、高階哲夫、チェルロ、伊達三郎
第一番、三重奏曲……ハイドゥン

二、二重唱　多川遊龜、酒井梅子
甲、『フィガロの婚禮』中のスザンナと伯爵夫人の
二重唱……モーツァルト
乙、『幸福』……シューマン
三、ギオロンチェルロ　高勇吉
ロ短調競奏曲……ゴルターマン
四、上高音獨唱　横山彰子
歌劇『フィガロの婚禮』中のケルビーノの抒情調
……モーツァルト
五、風琴獨奏　下總覺三
諧謔曲、作品三十一……ギルマン
六、合唱　會員
甲、おゝ麗はしの天つ光よ照らせ……バッハ
乙、幼基督の眠り……ゲバート
七、ヴイオリン　栗原大治
小競奏曲……ジット
八、高音獨唱　相澤滿壽
歌劇『オルフェオ』中のオルフェオの抒情調
……グルック
甲、我を憫み給へ
乙、我は失ひぬ吾妻を
九、洋琴獨奏　中村梅子
旋轉曲作品一……ショパン
番外、上高音獨唱　武岡鶴代
かもめ外二曲……弘田龍太郎
十、洋琴及びチェルロ合奏
チェルロ、酒井悌、洋琴、田中規矩士
奏鳴曲第二、作品五の二番……ベートーヱン
十一、合唱　會員
微明……プロゼーロ
（『音樂』學友會、第十巻第七号、大正八年七月、広告頁）

大正八年十月十九日　邦楽会第十八回演奏会

曲目

一中節
一、尾上（をのへ）の雲賤機帯（くもしづはたおび）
上調子　三味線　都一　都一　都一　うめ　いな　はな　かつ

常磐津節
二、新歌舞伎十八番之内　大森彦七（おほもりひこしち）
三味線　常磐津松尾太夫　常磐津志妻太夫　常磐津彌生太夫　常磐津文字兵衛　常磐津文字助

新内節
三、膝栗毛赤坂の段（ひざくりげあかさかだん）
上調子　三味線　富士松加賀太夫　吾妻路宮古太夫　富士松喜昇　富士松中造

＝〔休憩十五分間〕＝

河東節
四、砧（きぬた）
上調子　三味線　十寸見東觚　山彦八重子　十寸見東榮　山彦姫子　芳村孝次郎　芳村孝太郎　芳村孝三　長唄

長唄

五、連（れん）獅（じ）子（し）（杵屋正治郎作）

三味線　今藤長十郎　杵屋五三郎　杵屋勝藏　西川鉦二　六合新三郎　藤舍伊太郎　梅屋勝次郎

太鼓　大鼓　小鼓　笛

大正八年十一月一日、二日　学友会秋季演奏会

東京音樂學校學友會秋季大演奏會

期　日　大正八年十一月一日（土）二日（日）午后一時三十分開場

場　所　上野公園東京音樂學校奏楽堂

（會友御申込みは東京音樂學校内學友會）

曲　目

一、混聲合唱　會員

イ、秋……フリューゲル

ロ、菊の盃……ベートーヱン

二、ヴイオリン　奥村艷

コンセルト作品九、第七（第一樂章）……ロード

三、男聲合唱　會員

イ、子守歌……ブラームス

ロ、秋晴れ　作品一八七、第五……ライネッケ

四、ソプラノ獨唱　關鑑子

歌劇「椿姫」中のヴィオレッタの齣曲と抒情調…ヱルディ

五、ギォロンチェルロ獨奏（管絃樂伴奏）　平井保三

アベマリア……マックス　ブルッフ

六、管絃樂　會員

ファイヤーフライ……グスターブ　ハインリッヒ編

七、テノール獨唱　伊藤祐司

歌劇「魔笛」中のトミノの抒情調……モーツァルト

八、女聲合唱（獨唱者メゾソプラノ　相澤ます）　會員

小川　作品二二……ファウレ

九、ピアーノ獨奏　渡邊トリ

ロンド　作品一六……ショパーン

一〇、獨唱及合唱（管絃樂及オルガン伴奏）　獨唱　バリトン　外山國彦

セントポーロ……メンデルスゾーン

〔原資料横組〕

大正八年十一月十九日、二十日　第三十七回定期演奏会

一、管絃樂

「コリオラン」の序曲（作品六二）……ベートーヴェン作曲

Ouvertüre zu dem Trauerspiel „Coriolan“ (Op. 62)……Beethoven.

二、ピアノ獨奏　小倉末

自作主想の變奏曲（作品二一第一番）……ブラームス作曲

Variationen über ein eigenes Thema (Op. 21, No. 1) ……Brahms.

三、獨唱合唱及管絃樂

譚歌「魔王の娘」（作品三〇）……ガーデ作曲

Ballade „Erlkönigs Tochter“ (Op. 30) ……Gade.

獨唱者　武岡鶴代　齋藤英　船橋榮吉

四、セロ獨奏　ヴェルクマイステル

ロココ式主想の變奏曲（作品三三）……チァイコフスキ作曲

Variations sur un thème rococo (Op. 33).....Tschaikowsky

五、管絃樂

歌劇「オベロン」の序曲.....ヴェーベル作曲
Ouvertüre zur Opera „Oberon“.....Weber.

指揮者　グスターフ、クローン

音樂演奏曲目梗概　第二十六

一　管絃樂

『コリオラン』の序曲　　ベートーヴェン作曲

羅馬の英雄コリオラヌスが故郷より追放せられたるを憤りてローマの敵と結び、此の市を壓服せんとして其の近郊に迫りし時母と妻との哀願により終に思ひ止まりしといふ傳說はシェークスピアの筆にも傳はりて人の善く知る所なり。ベートーヴェン (L. v. Beethoven 1770-1827) の本序曲は彼と同時代の墺國人コリンの作なる同名悲劇の爲めに作れるものにして一八〇七年春の創作に係れり。本曲は殆ど全く二つの樂想より成れり。第一は序節の後に現はるゝ短ハ調の激烈なる樂想にしてコリオラヌスの憤怒を示すものなること明かなり。之と好對照をなせる第二樂想は溫和なる長變ホ調の旋律にして其哀訴する如き音調は巧みに二婦人の嘆願を表はせり。曲の終に當り、第一樂想が漸次緩かなる音に現はれて最後に全く消え去る時、聽者はかの英雄が終に意に反して其の計畫を放棄するの狀を想像し得べし。

二　ピアノ獨奏

『自作主想の變奏曲』　　ブラームス作曲

作者ブラームス (Johannes Brahms 1833-1897) はベートーヴェンの代表せる純然たる古典派の音樂を傳承せる獨乙の大家なり。彼の長所は最も精選せる形式の中に沈靜深遠なる感情を表現したる點にあり。彼の作曲は一般に知的要素に富み、斬新なる和聲複雜なる節奏を用ふること多きが故に、初めて之を聽けば其の趣味を解しがたきも、之に慣るゝに至れば妙味の愈々加はるを覺ゆといふ。彼のピアノ曲は一般に豐麗なる和聲微妙なる音色、高雅なる音形（フィギュア）の取扱等に於て優れたり。本演奏の變奏曲は一八六一年の作にして自作の主想を基として作れる十一の換へ手曲なり。最初に現はるゝ主想の構造は在來の八小節式によらずして九小節の區分法によれり、第二の段落が二箇と三箇の小節の加はれる如き區分を有するも珍らしく聞こゆ。變奏の中にて最も技巧の妙を示すものは第五にして、此處に二つの旋律はカノン式に組み合され、しかも第二の旋律は第一のものゝ倒影を成し、理論家の所謂倒行カノンを作れり。

三　獨唱合唱及管絃樂

『魔王の娘』　　ガーデ作曲

ガーデ (Niels Wilhelm Gade 1817-1890) は丁抹の著名なる作曲家にして、二十三歳の時既に序曲『オシアンの餘韻』を公にして其の名を世界に知られたりき。其の後二年を經て獨逸ライプチッヒに赴き此處に止まること五年、メンデルソーン、シューマン等と親みて殊に前者の感化を受くること深かりき。されど彼はこれが爲に自己の特色を失ひたるにあらず。彼の諸作は屢々スカンデナヴィアの色彩を帶び又た極めてロマンチックの詩趣に富めり。本演奏の『魔王の娘』(一八五二年作)の如きも其の適例なり

本曲はかのゲーテの名高き譚歌（バラッド）とは異りて、魔王の娘が一騎士を破滅に陷るゝ物語なり。最初の序詞（プロローグ）(合唱) はオールフと呼ぶ騎士が結婚日の前晩、『魔の岡』に駒を止めて暫く息ひたるに、二人の美女現はれて彼を招き一人は彼を愛撫し一人は彼に舞踏を勸めて妙なる歌をうたひしが、折しもきこゆる鷄の聲にかきけす如く失せたることを述ぶ。次の快速曲 (第一番) より以下は凡てオールフが其の夕城に歸りてより翌朝に至るまでの事を叙するものにして前奏の後に先づ起る合唱は夕日海原に沈みて祝宴の日の近きたることを歌ふ。これよりオールフと其の母との問答あり。オールフはあすの宴に招くべき客あれば馬の用意をせよといふ。母は日くれて道くらきに誰を招かんとて行くぞと頻りに止むれどもオールフは心かなたに引かれて家に安んぜず、『胸みだれ心轟して朝の日の光を見ざれば醫せず』

といふ。次の緩徐曲（第二番）はオールフの獨唱にして、朝の間は新婦を慕ひながら、夕となれば妖女の姿を想ひ出でゝ二筋に亂るゝ心のなやましさを嘆く詞なり。かくてオールフは終に母の戒むるをも聽かず、馬を急がせて家を出で（以上第三番獨唱及合唱）やがて魔の岡に近ければ夜は靜かに月さえて、さびしき森かげに衣の見えつ消えつゆらめく不思議さ。ふく風さゝやきて心を引き花の香も眠を誘ふやうなり（以上第四番オールフ獨唱）魔女の群現はれて舞ひつゝ歌ひ（女聲三部合唱）、魔王の娘彼をさし招きて我と共に舞踏せよと勸むるに、オールフは恐れをののきつゝ『あすは我が結婚の日なればその暇なし』とて逃れんとす。娘はオールフが再三の勸に應ぜざるを見るや、終に怒りて彼を傷け、且つ翌朝彼の死すべきことを豫言す（以上第五及第六番獨唱及合唱）かゝる間に『日は東の空に昇りて黄金の雲を彩り』第七番緩徐なる合唱）はや結婚の日となりぬ。夜もすがら門に立ちてオールフを待ちたる母は夜の明くるも我が子の歸らざるを見て深く心をなやます所へ、人々蜜酒、葡萄酒などの贈物を持ち來りてオールフの歸館の時を問ふ。この時オールフはかなたより馬を飛ばして歸り來しが、見れば冑の飾も楯も何處へか失ひて鎧より鮮血滴れり（以上第八番獨唱及合唱）母はオールフの顔色の青ざめたるに驚き其の故を問ひ、人々は何處（いづこ）に客を伴ひたるぞと問ふ。オールフは其の夜魔の岡に赴きしことを自白し、且つ伴ひたるものの唯だ一人あり。我が胸を抱く死の恐怖なりと答へて死す（以上第九番獨唱及合唱）最後に短かき結語（エピローグ）あり、馬に乘りて森を行く若者は魔の岡に赴きて月夜に眠るなかれとの教訓を述ぶ。

Erlkönigs Tochter.

Prolog *Andantino* (Chor) Herr Oluf Abends hielt an sein Ross; die Nebel, die tief sich senkten, die duftende Blume, das grünende Gras den Sinn zur Ruhe lenkten. Er lehnte sein Haupt an die Erlenhöh', sein' Augen begannen zu sinken, da kamen gegangen zwei Jungfrau'n schön, die thäten ihm lieblich winken. Die Eine ihm streichelt' die blasse Wang', die Andre ihm flüsterte leise: Wach auf, du schöner Jüngling, auf! und tanz' mit mir im Kreise! Sie sangen ein Lied, so hold und süss, still horchte der Strom am Raine; Fischlein scherzt' in heller Flut, und Vöglein zwitschert' im Haine. Hätte Gott da nicht zu seinem Glück den Hahn lassen rühren die Schwingen, dort wär' er blieben in Erlenhöh', wo Erlenjungfrauen singen.

I. No. 1. *Allegro moderato, ma vivace* (Chor) In's blaue Meer die Sonne sinkt, in's blaue Meer die Sonne sinkt bei Nachtigallenschlage, bei Nachtigallenschlage. Morgen Herrn Olufs Hochzeit winkt mit Trink- und Festgelage, mit Trink- und Festgelage.—(Herr Oluf) Zäum' auf mein Ross mit gold'ner Kett', mein Ross, das schnellste, beste! Mir fehlt ein Gast, den gern ich hätt' bei meinem Hochzeitsfeste, Zäum' auf mein Ross mit gold'ner Kett', mein Ross, das schnellste, beste!—(Die Mutter) Mein Sohn, mein Sohn, es neigt sich schon der Tag, mein Sohn, mein Sohn, die langen Schatten schreiten! —(Oluf) Mir fehlt ein Gast, den gern ich hätt', mir fehlt ein Gast, den gern ich hätt' bei meinem Hochzeitsfeste,—(Mutter) Mein Sohn! was bittest du für Gäste noch so spät bei Abendzeiten? Was bittest du für Gäste so spät bei Abendzeiten?—(Oluf) Es zieht mich fort, es zieht mich hin, ich kann nicht länger weilen, mein Herz ist krank, und schwer mein Sinn, nur Morgenstrahl wird heilen.—(Mutter) Mein Sohn! es neigt sich schon der Tag, mein Sohn!—(Chor) In's blaue Meer die Sonne sinkt bei Nachtigallenschlage, bei Nachtigallenschlage, Morgen Herrn Olufs Hochzeit winkt mit Trink- und Festgelage, mit Trink- und Festgelage.

No. 2. *Andante sostenuto* (Oluf) So oft mein Auge die Fluren schaut im frischen Morgengewande, sehnt sich mein Herz nach der holden Braut, der schönsten Jungfrau im Lande. So oft ich reit' über Flur und Au, wo Blumen im Korn sich schaaren, denk' ich an ihre Augelein blau wohl unter den goldnen Haaren. So oft ich wander' am Erlenstrauch, bei der Sterne hellem Karfunkel, denke ich an ein schwarzes Aug' und der Lokkenfülle so dunkel. Die tiefste Wunde zusammen heilt, geschlagen von Feindeshänden, es ist mir, als wäre mein Herz getheilt, die Qual wird doch einst wohl enden!

No. 3. *Allegro risoluto.* (Oluf) Zäum' auf mein Ross mit gold'ner Kett', mein Ross, das schnellste, beste!—(Mutter) Oluf! o hüt' dich vor Erlenhöh'! O reite nicht zur Geisterstund', da herrschen nächtliche Schaaren, Oluf, reit' nicht, reit' nicht zur Geisterstund'!— (Oluf) Fürchte nimmer, still ist's im Erlengrund!—(Mutter) Du weisst es, Herr Oluf, im Erlengrund, da droh'n dem Herzen Gefahren, Oluf!

reit' nicht, o reit' nicht zur Geisterstund'!—(Oluf) Fürchte nicht, nur Nebelstreifen dort schwanken.—(Mutter)Oluf! hüt' dich vor Erlenhöh'! —(Oluf) Frisch auf, mein Rappe, flieg um die Wett mit meinen wüsten Gedanken, mein Rappe, frisch auf!—(Chor) Schon stampt der Rappe, schon eilt er hinaus über Feld, über Feld und wilde Haide! schon eilt er hinaus! (Allegro molto) Herr Oluf reitet von Heerd und Haus, zu bitten die Hochzeitleute. Herr Oluf reitet von Heerd und Haus, zu bitten die Hochzeitleute. Frühmorgen ziehen wir beim Glockenklang zum Hochzeitfest mit Spiel und Sang! mit Spiel und Sang! mit Spiel und Sang!

II. No. 4. *Andante con moto* (Oluf) Nacht, o wie stille! der Mond allein blickt auf die einsamen Hagen; im Dickicht flötet ein Vogel gar fein, doch zu horchen ich darf nicht wagen! Dort glänzt ein Gewand! schon verschwand es fort! wie selt am! reden die Lüfte? Mein Herz sie fesseln an diesen Ort, mich hauchen in Schlummer die Düfte, in Schlummer!

No. 5. *Andantino.* (Die Erlenmädchen—Chor) Leicht nun schwebt der Tanz durch die Haine!—(Oluf) Dort höre ich singen, mein Herz wird gefangen, es sind Erlenmädchen! flieh'; o flieh' mit Bangen!—(Erlenmädchen) Leicht nun schwebt der Tanz durch die Haine!—(Oluf) Da tanzen drei, da tanzen vier, Erlenkönigs Tochter sie winket mir!

No. 6. *Andante sostenuto.* (Erlkönigs Tochter) Willkommen, Herr Oluf, was eilst du von hier? tritt her in den Reihen und tanze mit mir! Herr Oluf!— (Oluf) Ich nimmer darf, ich nimmer mag, frühmorgen, frühmorgen ist mein Hochzeittag.—(Tochter) Ein seiden Hemd ich gebe dir fein, das bleichte meine Mutter bei Mondenschein, Herr Oluf!—(Oluf) Versuche mich nicht mit süsser Red', ich darf nicht tanzen, wie gern ich's thät'.(Tochter) Hör' Du, Herr Oluf, tritt tanzen mit mir, einen silbernen Panzer dann gebe ich dir! Herr Oluf, Herr Oluf, tritt tanzen mit mir, tritt tanzen! (Allegro molto) (Oluf) Ich nimmer darf, ich nimmer mag, frühmorgen ist mein Hochzeittag. —(Tochter) Und wenn du nicht willst tanzen mit mir, und wenn du nicht willst tanzen mit mir, Seuch' und Krankheit, Seuch und Krankheit soll folgen dir,—(Oluf) Ha! hilf mir Gott! jetzt fasst sie mich an! Erlkönigs Tochter hat mir Leid's gethan, ein Leid's gethan! (Tochter) Der Wange bleich entströmt das Blut, so meine Hand dich schlagen thut; Herr Oluf, Herr Oluf, frühmorgen bist du todt, —(Erlenmädchen)Bist du todt—(Oluf) Entflieh', entflieh', mein Rappe, das Leben mir rett'! Entflieh', mein Rappe, das Leben mir rett'! sonst wird das Grab mein Hochzeitbett! (Tochter u. Erlenmädchen) Herr Oluf! Herr Oluf, Frühmorgen, Oluf, bist du todt! Reit heim zum Liebchen in Scharlachrot! Herr Oluf Herr Oluf frühmorgen, Herr Oluf, frühmorgen, Herr Oluf, Herr Oluf! frühmorgen bist du todt! Morgen bist du todt! (Oluf) Entflieh,' mein Rappe, etc.

III. No. 7. *Andante con moto*—Morgengesang (Chor) Im Osten geht die Sonne auf, sie färbt die goldne Wolk', zieh über Meer und Bergeshöh, zieht über Land und Volk. Sie kommt vom fernen, schönen Strand, aus Paradieses Schoos, sie bringet Licht und Lust für Alle Klein und Gross, für Klein und Gross. Ja Gottes Sonn' erfüllt die Erd' mit Wonn' un Himmelspracht, sie schenket Lindrung jedem Schmerz, erhellt des Kummers Nacht.

No. 8. *Andantino* (Die Mutter) Ich wartet' an des Hauses Thür, die Sterne all erblichen; es ist, seit Oluf ritt von hier, der Schlaf von mir gewichen. Herr Oluf, Herr Oluf, wo treibt's in der Nacht dich hin? wie füllest mit Angst du der Mutter Sinn. (Chor) Wir schenken Meth, wir schenken Wein! Wann kommt Herr Oluf zum Liebchen sein?—*Allegro non troppo* (Die Mutter) Wer reitet dort durchs hohe Korn? Stösst laut, stösst laut in's goldne Horn? Es ist Herr Oluf selbst, die Sehnsucht, die Sehnsucht schenkt ihm Flügel, er schwingt sich wie ein Edelfalk herab von jenem Hügel!—(Chor) Er reitet schnell, er eilt nach Haus, er reitet schnell, er eilt nach Haus, rings Stein und Funken stieben, rings Stein und Funken stieben! er reitet schnell, er eilt nach Haus, er eilt nach Haus!(Mutter) Herr Oluf halt' an deine Zügel!—(Chor) Wo ist des Helmes weisse Strauss? —(Mutter) Oluf, mein Sohn, mein Sohn!—(Chor) Wo ist sein Schild geblieben?—(Mutter) Herr Oluf halt' an deine Zügel!—(Chor) Es träufelt Blut von dem goldnen Bügel! Herr Oluf, Herr Oluf, halt' an deine Zügel!

No. 9. *Molto moderato.* (Mutter) Hör' du, Herr Oluf, sag' an mir gleich, wie ist die Wange so blass und bleich?—(Oluf) Wie sollt' sie nicht sein blass und bleich, wie sollt' sie nicht sein blass und bleich, ich war die Nacht in Erlenreich!—(Mutter) Und hör' du, Herr Oluf, mein Sohn so traut, was sag' ich nun deiner jungen Braut?—(Oluf) Ihr sagt, ich sei in den Wald gegangen, den Hirsch mit den Rüden einzufangen—(Chor) Wo, wo sind die Gäste? o lass uns sie schauen!

—(Oluf) Nur Einer, Einer mit mir sah den Morgen ergrauen!—(Mutter u. Chor) Und wer ist der Eine, der mit gegangen?—(Mutter) Wer, wer ist der Eine, mein Sohn, mein Sohn? wer? wer? Des Todes Grau'n, des Todes Grau'n, das mein Herze umfangen!—(Mutter u. Chor) Hilf, milder Christ, hilf in Qual und in Not! Er sinket, erblasset Herr Oluf ist todt!

Epilog. *Andante sostenuto.*—Drum rath' ich jedem Jüngling an, der reiten will im Haine, er reite nicht nach der Erlenhöh, zu schlummern im Mondenscheine. Hüt' dich, o hüt' dich vor Erlenhöh', wo Erlenjungfrauen singen!

四　セロ獨奏

『ロココ式主想の變奏曲』　　チァイコフスキ作

チァイコスフキ（P. I. Tschaikowsky 1840–1893）は露國最大の國民的音樂者なり。彼の最も著名なる作品は管絃樂の諸篇にして、其の變化に富む音色と強烈なる情趣とは近代器樂の一異彩なり。彼の作は極めて多様の趣味を表し、時には纖麗、時には粗野、時には陰鬱、時には激烈なり。管絃曲以外にも廣く賞美せらるゝ名作少からず。本演奏のセロ曲（本來はオルケストラを伴ふ）も亦其の一にして、こは露西亞民謠風の優美なる主想に基ける變奏曲なり。

五　管絃樂

『オベロンの序曲』　　ヴェーベル作

獨逸ロマンチック派歌劇の始祖ヴェーベル（C. M. v. Weber 1786–1826）の『オベロン』は元、英國よりの依頼に應じて作れるものにて作者の歿する數月前初めてロンドンに演奏せられたり。本歌劇の筋は佛蘭西の古話『ボルドーのユオン』に基けるものにして其の梗概は魔王オベロンが夫人ティタニアと仲たがひの末、如何なる危難に遇ひても操をかゝぬ夫婦を世に見出すまで仲直りせじと誓ふことあり。陛下のパックはかゝる夫婦を求めて諸方をめぐるうち、ユオンといふ若き武士シャールマーギュの子を殺したる科にてバクダッドに順禮し其處なる國王の姫レチアを花嫁として連れ歸るべき旨宣告せられたりと聞き込み、之を魔王に注進す。魔王は妻と仲直りの道具にこの二人を使はんと企て初めに二人を引き合せたる後二人が歸りの航海中にその船を覆へして彼等を引離し、別々に誘惑して十分に試みたるのち、二人の操のかはらざるを見て打ち喜び、己は夫人と和解して、ユオンとその妻とは故郷に歸らしめたりとなり。——本演奏の序曲は凡て歌劇の進行中に現はるゝ數樂句を組み合せて作れり。序節に聞ゆるホルンの短樂句は第一幕（仙界の場）に響くオベロンの靈笛の音なり。此の響と共に仙界の光景忽ち吾等の眼前に開けて木管の最弱奏に現はるゝ斷音（スタカート）の樂句は巧みに小魔の嬉戲する狀を寫す。されど暫くにして管に起る進行曲風の樂句（最終幕に出づ）の後に進行は活氣ある快速調に轉じ、第一主想はヴァイオリンの急速なる音形（第二幕、航海の樂句）を以て始まる。次で第二樂想クラリネツトに現はれ更に絃に移る、こはユオンの愛の歌なり。更に第三の樂想として有名なるレチアの「大洋のアリア」中の一部をとれり。以下此等の樂想を展開又は反覆して後短かき華々しき尾句を以て全曲を結ぶ。

大正八年十二月六日　学友会第二十七回土曜演奏会

□第二十七回土曜演奏會　十二月六日正一時於東京音樂學校奏樂堂に開會

(1) Pianoforte: Concerto in g minor. (1st movement) (Dussek) 1st Piano, Miss M. Ebina. 2nd Piano, Prof. Scholz. (2) Alto Solo a) "Ombra mai fu" from "Xerxes." (Händel) b) Aria of Mitrane. (F. Rossi) Miss H. Shōji. (3) Organ Solo: Variations on The English Hymn. (H. Rinck) Mr. I. Ogawa (4) Basso Solo: "Cavatine des Broni" from "Die Judin" (Halevy.) Mr. H. Abe. (5) Pianoforte Capriccio Brillante, Op. 22. (Mendelssohn) 1st Piano, Miss C. Idzumi. 2nd Piano, Prof. Scholz. (6) Violoncello Solo. a) Allegro appassionato. (Saint-Saëns.) b) Scherzo. Op. 12, No. 2. (Goets.) Mr. Y. Sakai. (7) Aria with Chorus: (accompanied with Orchestra Organ.) St. Paulus. (Mendelssohn.) Mr.

K. Toyama. (8) Pianoforte: Concerto in d minor. (1st movement) (Mozart) 1st Piano, Miss M. Kaneko. 2nd Piano, Prof. Scholz. (9) Soprano Solo: "Michaela's Aria" from "Carmen." (Bizet.) Miss A. Yokoyama. (10) Violin Solo: a) Chanson Louis XIII. (Couperin Kreisler) b) Berae. (Couperin Kreisler.) c) Berceuse, Op. 16. (Fauré.) d) Danse Hongraise, Op. 30, No. 8. (Drdla.) Mr. T. Ohno. (11) Pianoforte Solo: Two Rhapsodies. Op. 79. (J. Brahms.) Miss K. Kawakami. (12) Orchestra Selection from "The Firefly" Comedy-Opera by Rudolf Friml (arranged by Gustav Hinrichs) (Members.).

(『音樂界』第二一〇号、大正九年二月、二六頁)

大正九年三月二十五日　卒業式

大正九年三月二十五日（木曜日）午後一時三十分

卒業證書授與式順序

東京音樂學校

一　卒業證書授與
二　校長式辭
三　文部大臣祝辭
四　卒業生總代謝辭

演奏曲目

第一部

一、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　和泉千代
　イ短調競奏曲（作品八五、第一樂章）……フンメル作曲
二、ソプラノ獨唱……本科聲樂部卒業生　伊藤その
　歌劇「フィガロの婚姻」中の歌……モツァルト作曲
三、ヴァイオリン獨奏……本科器樂部卒業生　名和きみよ
　ト長調競奏曲（第二三番、第一樂章）……ヴィオッティ作曲
四、テノール獨唱……本科聲樂部卒業生　伊藤祐司
　歌劇「ワルキューレ」中のジークムンドの愛の歌……ワグネル作曲
五、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　金子眞佐
　ヘ短調競奏曲（第三番、作品三七、第一樂章）……ベートーヴェン作曲

第二部

六、セロ獨奏……本科器樂部卒業生　酒井悌
　イ短調競奏曲（第一番、作品三三）……サン、サーンス作曲
七、アルト獨唱……本科聲樂部卒業生　相澤滿壽
　歌劇「豫言者」中の抒情調……マイエルベール作曲
八、ヴァイオリン獨奏……研究科器樂部修了生　青木友忠
　譚及波蘭舞踏曲（作品三八）……ヴィユータン作曲
九、ピアノ獨奏……研究科器樂部修了生　渡邊トリ
　ト短調競奏曲（第一番、作品二五）……メンデルソーン作曲
十、ヴァイオリン獨奏……研究科器樂部修了生　田中英太郎
　悲壯なる幻想曲（作品三五）……ヴィユータン作曲
十一、合唱
　い、おもひで　蒲原有明作歌
　ろ、夜の歌　青木存義譯歌
　は、春の心　植松安作歌
　……信時潔作曲
　……ハウプトマン作曲

Programme.

I. Presentation of Diplomas.
II. Address to the Graduating Classes by the Director.

III. Address by His Excellency Nakabashi, Minister of Education

IV. Response by the Representative of the Graduating Classes.

PART I.

1. Concerto for Piano, A Minor, Op. 85
   (I movement) .....Hummel.
   Miss C. Izumi.
2. Canzone for Soprano from "Le Nozze di Figaro" ...Mozart.
   Miss S. Ito.
3. Concerto for Violin, G Major, No. 23
   (I movement).....Viotti.
   Miss K. Nawa.
4. Siegmunds Liebeslied for Tenor from "Walküre"...Wagner.
   Mr. Y. Ito.
5. Concerto for Piano, C Minor, No. 3, Op. 37
   (I movement).....Beethoven.
   Miss M. Kaneko.

PART II.

6. Concerto for Violoncello, A Minor, No. 1, Op. 33.....Saint-Saëns.
   Allegro non troppo　Allegretto molto
   Allegretto con moto.
   Mr. Sakai.
7. Aria for Alto from "Prophet" .....Meyerbeer.
   Miss M. Aizawa.
8. Ballade et Polonaise for Violin, Op. 38 .....Vieuxtemps.
   Mr. T. Aoki.
9. Concerto for Piano, G Minor, No. 1, Op. 25...Mendelssohn.
   Molto allegro con fuoco　Andante　Presto.
   Miss T. Watanabe.
10. Fantasia appassionata for Violin, Op. 35.....Vieuxtemps.
    Mr. Y. Tanaka.
11. Choruses:
    a. Omoide .....Nobutoki.
    b. Wanderers Nachtlied } .....Hauptmann.
    c. Mailied }

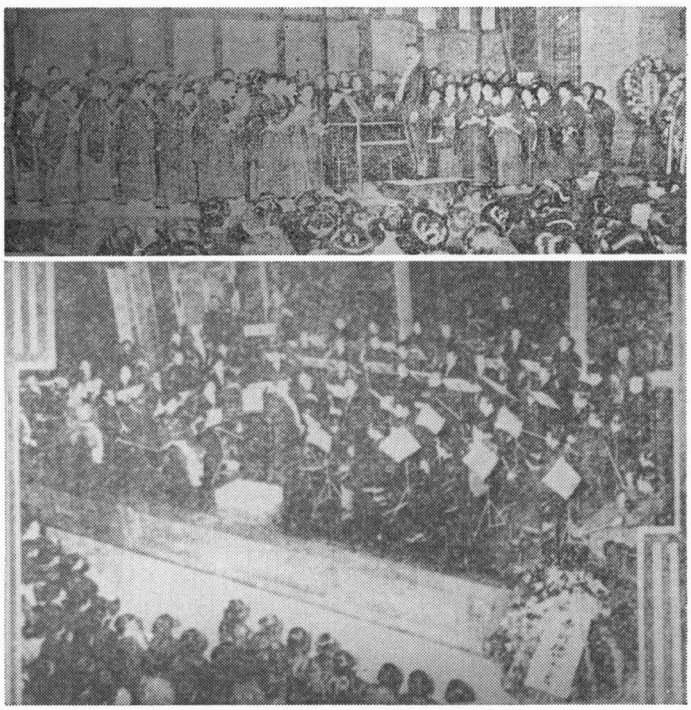
大正九年四月二十五日　演奏旅行

四月二十五日（日曜日）正午、午後五時
時雨回
於大阪市中央公會堂
東京音樂學校管絃合唱團
演奏曲目

四月二十四日（土曜日）午後五時
於京都市公會堂
後援　京都市教育會
後援　大阪毎日新聞社京都支局

主催　大阪市教育會
後援　大阪毎日新聞社

一管絃樂――
歌劇「オベロン」の序曲……ヴェーベル
二ソプラノ獨唱――（絃樂伴奏）――　――長坂好子孃
歌劇「フイガロの婚姻」中の伯爵夫人の抒情調……モツアルト
三管絃樂――
ハ短調シンフオニー（第五番、作品六七）……ベートーヴエン
四合唱――
い夜の歌……ハウプトマン



大正９年４月25日，大阪市中央公会堂にて演奏。指揮はG．クローン（『大阪毎日新聞』大正９年４月25日付）

ろ　春の心……ハウプトマン
は　空しく老いぬ（瑞典民謡）……ユングスト
五ピアノ獨奏――（管絃樂伴奏）――――川上きよ子孃
　ヘ短調競奏曲（第二番、作品二一）……ショパン
六管絃樂及合唱――
　歌劇「タンホイゼル」中の行進曲及祝歌……ワグネル
七管　絃　樂――
　歌劇「リエンツイ」の序曲……ワグネル

（『大阪音楽文化史資料　明治・大正編』三九七頁）

四千の聽衆悉く恍惚たり
　我社後援の下に京都市公會堂に開かれたる
東京音樂學校管絃團の大演奏會
　演奏者は當代の名手二百名

風は柳の小枝を揺つて若芽の匂ひ靜かなる春の光の中に漂はして泰西に咲いた樂壇の名花を嗅ぐべく定刻前から集まつて來た若い婦人や女生徒達は

社旗飜へる　廣場の中の芝生に三々伍々淑やかに集りを作りて今日のプログラムを語合ひ乍ら若草の上に坐つて居た。大管絃樂演奏の日午後五時の開場に先つ一時間京都市岡崎公園市公會堂前の廣場はかうした情景の中に夕暮を待ち受けた、人は次第に增した芝生の人は立ち上つたゆるやかな人の歩みは早くなり速になり

遂に人の波　となつて入口に押寄せた會場に流れ込んだ四千餘の聽衆は忽ち座席を埋めベンチを占領し盡して寸餘の空隙を殘さず聽衆の中には婦人同伴の京大教授や東本願寺の新法主や九條武子夫人等の姿も見える演奏に先つて安藤我社京都支局長および安藤京都市長の挨拶があり轆轤て定刻六時ヴエーベル作オベロンの序曲を奏すべく

管絃團が壇　に上りクーロン氏が指揮杖を以て立つた時場内は明い沈默緊張した靜寂に返つた演奏は始まつた聽衆の五體は耳其のものとなつた緩徐なる序節斷音の樂句醉うやうな感興の中に此管絃樂が終る長坂好子孃がソプラノ獨唱の爲に壇に立つ聽衆は亢奮の網に捕へられたベートーヴエン作シンフオニーの管絃樂は

第三番目に　演奏される廣大な大自然の眞理と神技とを最も的確に表現した此名曲は四千の聽衆を醉はせずには置かぬ恍惚と夜天の星露を仰ぐやうな縹渺とした美は神祕に聽衆は只沈默の中に愈々深く沈んで行つた、第四の曲目夜の歌、春の心、空しく老いぬが合唱され川上きよ子孃のピアノの獨奏がありワグネル作タンホイゼルの管絃樂及び合唱が

第六に演奏　される、初め華々しく次第に強く激しく迸してくる、壯麗を極めた歌曲を聞いてゐると或る大きな力が澎湃として背後から波打つ

て來るやうな威壓をさへ覺ゆる最後の管絃樂はワグネル初期の有名なリエンツイの序曲である雲の峰が押し移るが如く緩慢な序開きから次第に雲の峰の崩るゝやうな快速に轉じて行く

リズムの波―を聽衆は唯澎湃として漲る生命力の横溢を感じて只感銘に浸つた午後八時記念すべき音樂會は幕を閉ぢた四千の聽衆は間斷なき緊張と充實と努力との後の靜かな而も深いどよめきを殘して夜氣に霞んだ新月の高くかゝれる庭に出た

大阪では本日二回　京都市公會堂において大盛況を呈した東京音樂學校大演奏會は豫報の如く今廿五日晝夜二回大阪中之島中央公會堂において開催します右に付

會員諸君にお含み願たい　事柄は

場内の靜肅を保つ爲に出入口を一定し且演奏曲の終るまで一切の出入を禁ずること▲五歲以下のお子達をお連れにならぬこと▲成る可く草履又は靴をお履きくださること▲入場はすべて正面玄關よりすること等でありまず尙遠方よりの來會者の爲に當日晝夜とも會場前に臨時申込所を設備いたします

（『大阪毎日新聞』大正九年四月二十五日）

溫かな集ひ華かに閉づ

斯くて當地最初の大音樂會は聽く者麗しく、彈ずるもの花やかに、奏するところ盡く世界の名曲、公會堂の大建築は渾然として春その者に化する概があつた、選擧騷ぎの殺風景な今の世に到る處殺伐の氣漲ぎる大阪の街に此の柔かく溫かな集ひを見たのは市民の頭腦に一服の緩和剤を投じたものとして時に適はしい催しであらねばならぬ、聽衆中には住友男が十名の家族連れで聞き惚れて居たのを始め阪神の外人數十名の來聽したのも異彩を放つて居た

（『大阪毎日新聞』大正九年四月二十五日）

大正九年四月十一日　邦楽会第十九回演奏会

大正九年四月十一日（日曜日）午後一時半　臨時會員會費　御一名　壹等　壹圓五拾錢　貳等　壹圓

於　上野東京音樂學校奏樂堂

第拾九回演奏曲目　邦樂會

一、薗八節　小治兵衞巨燵の段

シテ　宮薗千香
ワキ　宮薗千廣
三味線　宮薗千春
三味線　宮薗千米

二、常磐津節　神路山色瑧　おこん貢油屋酒宴場

常磐津志妻太夫
常磐津鳴渡太夫
常磐津歌男太夫
三味線　常磐津金蔵
常磐津喜代松

三、清元節　筐花手向橘　吉原雀

清元喜久太夫
清元富美太夫
清元家枝太夫
三味線　清元吉太郎
上調子　清元梅次

―【休憩十五分間】―

四、新内節　若木仇名草　蘭蝶

富士松加賀太夫
吾妻路宮古太夫
三味線　富士松喜昇
上調子　富士松中造

五、長唄　京鹿子娘道成寺

長唄　芳村孝次郎
芳村孝太郎
芳村孝一郎
芳村孝三
三味線　今藤長十郎
杵屋五三郎
杵屋勝藏
笛　西川鉦二
小鼓　六合新三郎

大鼓梅屋勝次郎
太鼓梅屋市十郎

大正九年五月九日　学友会第三回特別演奏会

第三特別音樂會曲目

一、合　唱　　會　員
甲、ヱーニ　クレアトール　スピリトゥス、カッシオリーニ、
乙、搖籃歌、ブラームス

二、上高音獨唱　　立松　房子夫人
フィルモンとボーシ……グノー

三、ギオロンチェルロ獨奏　　平　井　保三氏
甲、黄昏曲(西班牙舞曲第二)　乙、タランテルラ…ポッパー

四、深音獨唱　　船　橋　榮　吉氏
歌劇『道化師』の序詞……レオンカヴルロ

五、洋琴三重奏　　榊　原　三重奏團
ト短調大三重奏曲……マルシュナー

六、絃樂合奏　　會　員
劇曲『ペールギント』中のオーゼの死とアニトラの舞踏、グリーク

七、風琴獨奏　　中　田　章氏
甲、ニ長調進走曲、乙、ハ短調トゥリオ…セバスティアン　バッハ

八、二重唱　　立松夫人、船橋榮吉氏
甲、『フィガロの婚禮』中のスザンナと伯爵夫人の二重唱…モーツアルト　乙、『スイギリアの床屋』中のロジーナとフィガロの二重唱…ロッスィーニ

九、ヴイオリン　　末　吉　雄　二氏
甲、作品七十六第七番競走奏曲の靜穩なる併歩曲…ベリオ
乙、マヅルカ作品十九、第一番……キーニアフスキ

十、洋琴獨奏　　小　倉　末　子孃
甲、ラプソディー、作品七十九、第一番……ブラームス
乙、譚詩曲、ト短調、作品二十三……ショパン

十一、合唱附獨唱　　獨唱者、横山彰、相澤ます、伊藤祐司
歌劇『オルフェオ』の四十五番……グルック

指揮者　大　塚　淳氏

(『音樂』學友會、第十一巻第五号、大正九年五月、広告頁)

大正九年六月十二日、十三日　第三十八回定期演奏会

一、絃　樂
ト長調ブランデンブルク競奏曲(第三番)……バッハ作曲
Brandenburgisches Konzert (G Dur, Nr. 3)……Bach
Allegro moderato
Allegro

二、混聲合唱
唱咏曲……バッハ作曲
獨唱者　アルト　相澤滿壽
　　バス　矢田部勁吉
Kantate "Bleib' bei uns, denn es will Abend werden"……Bach

三、管　絃　樂
小夜樂(作品一六)……ブラームス作曲
Serenade (Op. 16)……Brahms

Allegro moderato
Allegro

四、ピアノ獨奏 ……シ ョ ル ツ
ヘンデル作主想の變奏曲と逃走曲（作品二四）…ブ ラ ー ム ス 作 曲
Variationen und Fuge über ein Thema von Händel (Op. 24)
…… Brahms

五、女聲合唱
聖歌二篇（作品三七）……ブラームス作曲
Zwei geistliche Chöre für Frauenstimmen (Op. 37) ……Brahms
a. O bone Jesu.
b. Adoramus.

六、管 絃 樂
ハ長調交響曲（第一番、作品二一）……ベートーヴェン作曲
Symphonie (C Dur, Nr. 1, Op. 21) ……Beethoven
Adagio molto—Allegro con brio
Andante cantabile con moto
Menuetto
Adagio—Allegro molto e vivace

指揮者 グスターブ、クローン

演奏曲目梗概 第二十七

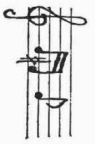
ブラームスと同時代の著明な指揮者ビューロウはバッハ(J. S. Bach 1685–1750) ベートーヴェン(L. v. Beethoven 1770–1827)及びブラームス(Johannes Brahms 1833–1897)の三人を音樂に於ける三大Bと呼んだ。此の語を用ひれば今回の演奏會は三大Bの演奏會である。バッハは十八世紀の上半期に活動して、彼以前の音樂の諸形式を大成した人で、『舊クラシック』の大家である。ベートーヴェンは普通にいふクラシック派の名人で、バッハより約百年後の全く異つた樣式の時代に出たが、彼以前の音樂を完成した點に於てはバッハに酷似して居る。最後のブラームスはベートーヴェンより更に五十年程後れて十九世紀の下半期に出た人で、此の時代は所謂ロマンチック派や新ロマンチック派の榮えた時代で、ベートーヴェンの頃とは異つた形式や作風が行はれ、器樂に於ては所謂標題樂（プログラム・ミュジック）が全盛を極めたのであるが、ブラームスは此の間に立つてベートーヴェンの遺風を慕ひ、古典的作風の美點を發輝した點に於て異彩を放つて居る。

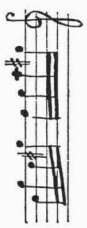
一 絃 樂

バッハ作 ブランデンブルグ競奏曲第三番(ト長調)

バッハの生涯を四期に分ければ、本曲は第三期のケーテン時代（一七一七—一七二三年）即ちケーテン公の宮廷の樂長を勤めて居た頃の作である。此の宮廷では種々の樂器の合奏が流行して居たので、バッハも主として合奏の新曲を作曲したのであるが、本演奏の曲（一七二一年作）は別にブランデンブルグ侯の囑に依つて作つたもので皆で六曲ある。此の六曲の樂器の組合せは區々で、獨奏樂器（當時の所謂『小合奏（コンチエルティーノ）』）の數や種類がそれ〳〵異つてゐる。又中には獨奏樂器と伴奏樂器（所謂『塡充部』）との區別の明でないのもある。今日奏する第三番の如きは即ちこの種のもので、單に九部の絃樂器の合奏に總低音を添へたのみである。即ちヴァイオリン三組、ヴィオラ三組、セロ三組にヴィオローネ（當時のコントラバス）とチェンバロ（本演奏には省く）の二つが總低音を附けるのである。

曲の構造が近頃のコンチェルトと異ることは言ふ迄もない。これに就てスピッタは次のやうに言て居る。『第一章はヴァイオリン、ヴィオラ、セロが三つの群をなして奏し、時には各群の以内で複旋律式（ポリフォニー）に扱はれることもあり、時には然らざることもある。又屢々結合して同音（ユニソン）をなすこともある。





此れ等の樂句から作り出される所のものは驚くべきもので、實に章全體がこれに基いて組立てられて居る。第七十八小節からさきの一節は獨逸器樂の全領域に於ける何ものにも劣らぬ程立派である。主なる樂想が第二ヴ

ァイオリン部に表はされ、それから第一ヴァイオリンが全く新しい樂想を起すと、それが次に第二ヴァイオリンに現はれ、次第に多くの樂器を引き入れて、終に第三ヴァイオリン及び第三ヴィオラが之れを承け、G線で重重しく表はす。これを合圖に音響の洪水が諸方からドツと打ち寄せて、數小節の間は複旋律が全部其の渦中に溺れる。——正式の緩徐調（アダージョ）は無い。二つの長く延ばした和音が暫時想像を和げるのみで、それから直ちに最終章（フィナーレ）が始まる。八分十二拍子の純然たる競奏曲の終章である。云々』

二　混聲合唱
バッハ作　唱（カンタータ）咏曲

カンタータの原義は單に歌ふ曲といふだけの意味でソナータ（原彈く曲即ち器樂曲の義）に對して一般聲樂曲の總名に過ぎなかつたが、段々に特別の意味をもつやうになつた。即ち歌詞の上に連絡ある數個の聲樂曲（獨唱合唱の類）を連ねた管絃伴奏を有する大曲を指すやうになつた。オラトリオと異る點は叙事的要素を能ふ限り除いて叙情的表出を主とする樣式に存するのである。宗教的の種類即ち會カンタータと呼ぶ曲の空前絶後の名家はバッハで、今日ではバッハが此の方面の唯一の代表者である。バッハの曲は四つの聲と管絃樂で奏する樣に作られ、四乃至七章より成る。通例合唱で始まりコラール（獨逸新教の單純な讃美歌）で終り、其の中間に宣叙調（レシタチーフ）、咏嘆調（アリア）等を挿む。本演奏の曲も此の通りである。（但し本演奏には第五番を省いて他の五曲を奏する又ピアノ及オルガンで伴奏する）

カンタータの歌詞は一般に福音書に基いて書かれたもので、バッハの作は其の時々の教會の儀式及び説教に關係ある歌詞に基いて居る。彼は五年間に亙る教會の各日曜日及び祭日の式に奏すべきカンタータを作つたといふ。これは主に彼の生涯の最終期即ちライプチッヒなるトーマス教會のカントールの榮職に就いてから最初の數年間に作つたのである。

本演奏のカンタータも此の時代のもので、一七三六年四月二日復活祭の第二日に歌ふ爲に作られたものである。此日の福音はエルサレムから三里ばかり隔つたエマヲといふ村へ行く途中復活せる救世主に遇ひながらそれと知らずに訓戒を受けた二人の弟子の話であつた。彼等が村へ近いた時基督は行き過ぎやうとするので、彼等は『日昃（かたぶ）きて暮に及びぬ、我儕（われら）と共に止れ』（最初の合唱の歌詞は之に基く）と勸めた。かくて基督は二人と共に止つて食に就いた時二人にパンを與へた。此時二人は初めて救世主を認めたが、又忽ち見えなくなつたといふ（路加傳廿四章）。第二の咏嘆調以下の歌詞は最初の合唱の詞に關係ある祈禱や感想を述べたものに過ぎない。此の如く細かい話の筋を述べずに抒情を主とする所がカンタータの特徴である。

本曲はバッハの藝術の最も美しいものに數へられて居る。歌詞にふさわしい深い、やさしい感じが全曲に行き渡つて居るのみならず、主曲なる最初の合唱には響や進行の上に夕ぐれの氣分も巧みに表はされて居る。第二番のアルトの咏嘆詞は『高尚な愛慕の情に充ち渡つた曲で、處々に音や和聲の反復進行を用ひて奇異な方法で闇の陰翳を描いて居る』とスピッタは言つて居る。彼は最初の二曲を殊にすぐれた曲として嘆賞して居る。ソプラノで歌ふ第三番の美しい夕べの讃美歌（我に止まれ主よ）は夕の禮拜式に好んで用ひられた名曲である。四番に低音の宣叙調があり、最後は型の通りコラールで結ぶ。

Bleib' bei uns, denn es will Abend werden

No. 1. Chor

Bleib' bei uns, denn es will Abend werden und der Tag hat sich geneiget.

No. 2. Arie (Alt)

Hochgelobter Gottessohn, lass es dir nicht sein entgegen, dass wir jetzt vor deinem Thron eine Bitte nieder legen: Bleib', ach bleibe unser Licht, weil die Finsternis einbricht.

No. 3. Choral (Sopran)

Ach bleib' bei uns, Herr Jesu Christ, weil es nun Abend worden ist, dein göttlich Wort, das helle Licht, lass ja bei uns auslöschen nicht. In dieser letzt betrübten Zeit verleih' uns, Herr, Beständigkeit, dass wir dein Wort und Sacrament behalt'n rein

bis an unser End'.

No. 4. Recitative (Bass)

Es hat die Dunkelheit an vielen Orten überhand genommen. Woher ist aber dieses kommen? Blos daher, weil sowohl die Kleinen als die Grossen nicht in Gerechtigkeit vor dir, o Gott, gewandelt und wider ihre Christenpflicht gehandelt. Drum hast du auch den Leuchter umgestossen.

No. 5. Choral

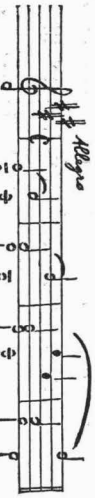
Beweis dein' Macht, Herr Jesu Christ, der du Herr aller Herren bist: beschirm' arme Christenheit, dass sie dich lob' in Ewigkeit.

三　管絃樂

ブラームス作　イ長調小夜樂（セレナーデ）

本曲は（一八六〇年初版）ブラームスの小夜樂二篇中の第二のもので彼の若き時代の傑作である。器樂の小夜樂は夕ぐれに奏する數章より成る曲で、章の數は通常ソナタ又はシンフォニーより多いが、然しシンフォニーなどのやうに込み入つた作法を用ひずに比較的輕く自由に作られる。原は野外に適する樣に管樂器のみを用ひた曲で、比較的古いハイドンやモツァルトの作にも好んで若干の管樂器を入れてあるが、奏樂堂でやる樣になつてからは段々に絃が優勢を占めて來た。ブラームスのイ長調の曲は珍らしくヴァイオリンを全く用ひないので比較的低い絃（ヴィオラ、セロ、ベース）の暗い柔かい音色がしんみりした氣分を起させると共に、管樂器が其の本來の優勢を大に回復した觀がある。本曲は全部五章から成つて居るが、今回の演奏は最初の中庸快速調（イ長調二分二拍子）と最後の快速調ロンド（イ長調四分二拍子）の兩章のみに止める。

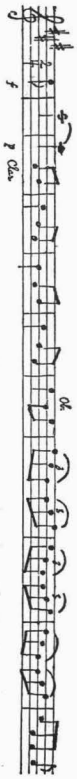
第一章は次の主想——一寸聽くと平凡のやうで、よく味ふと含蓄のあるブラームス式の主想に



此の兩想の中間に現はれる副樂想の中では次の想が

展開の際に重要な役をなして居る。

終章のロンドは二つの主想



及び

によつて快活の趣を呈するが、此の第二の主想の前に出る副樂想には可憐なやさしい所がある。

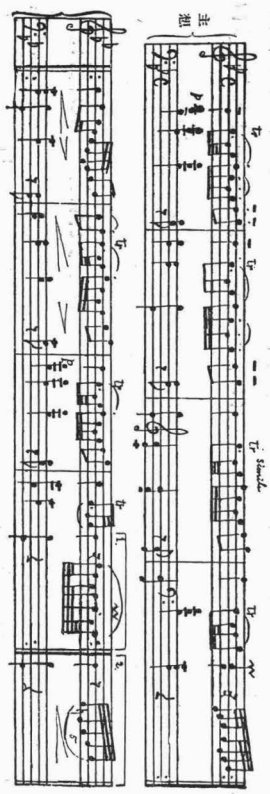
セレナードの全部を通じて夕ぐれの柔かな夢を見るやうな感じが屢々現はれて居る。

四　ピアノ獨奏

ブラームスの『ヘンデル變奏曲（ヴァリアチオーネン）』

作者は一八六二年に故郷のハンブルヒを去つて初めてヴィーン市を訪づれ、此處に出世の道を開かうと試みた。ヘンデル變奏曲は此の時の披露の

演奏會で奏した得意の作の一つであるが、作曲したのは前年の九月中で、同年の十月に友人クララ、シューマンが既にハンブルヒの演奏會で最初に發表したのである。重々しい、大理石で刻んだやうな主想はヘンデルの『ハープシコード教則本』の第二篇の最初にある曲から採つたものといふ。



これに基いた二十五の變奏曲（即ち換へ手）は主想の段落や小節の數などを少しも動かさずに置きながら、一曲一曲と新しい思ひがけない美點を表はして行く。これ等の諸曲は同一の主想を種々に變形する妙味を示すのみでなく、それ〳〵異つた特性、獨有の相貌を具へて居る。生き生きした一番、激烈な二番、基音に喇叭の合圖（ファンファール）をきかせる三番、六番の陰氣なカノン、幽靈のやうに消え去る十番、十一番のクラリネット獨奏、十二番のフリュートの變奏、十三番の低い絃樂器のラプソデー、十九番の快活なシシリアーノ、陰欝に哀れな二十番、二十二番の柔かい晩鐘の音、二十三から二十五まで絶えず激しさを加へる驀進、そして最後にあらゆる對位法の妙技を示した四部のフーゲがある。このフーゲも矢張り最初の主想（テーマ）と連絡を持つて居る。——曲の調に就ては五、六及び十三番に短音階の調を用ひたのみであるが、その代りに各曲の中では一層轉調を多く用ひて、屢々和聲上の奇拔な着想によつて聽者を驚かすことがある。前にも擧げた二十番の半音階的變奏曲は興味ある和聲の變化に富んで居る。

五　女聲合唱

ブラームス作　聖歌二編

四部の女聲で歌ふこの二曲は共にローマ教會風に作られたもので、羅典語の歌詞は基督の死を紀念する復活祭前の金曜日の聖餐式前に歌ふ曲から採つて居る。作者はこゝに從來のカノンの技巧を示して居る。（イ）『善きエスよ』は第一ソプラノと第一アルト、及び第二ソプラノと第二アルトが二つの群をなして歌詞を表はして行く間に第一ソプラノと第二アルトが理論家の所謂『反進行のカノン』（一名『鏡影カノン』）をなして行く。即ち一方が上行（又は下行）する時は他方が音程だけ反對に下行（又は上行）して少し後れて模倣して行く技巧に富んだものである。（ロ）『汝を禮拜せん』は規則正しいカノンの式に作られて居るが、其の束縛を受けずに自由に音が流れて行く。そして最後の一節になつて和音式の進行をとる。——本曲は一八六六年に出した『女聲聖歌集』（作品三七）に收めた曲中の二つである。

O bone Jesu

O bone Jesu, miserere nobis, quia tu creasti nos, tu redemisti nos sanguine tuo praetiosissimo.

Adoramus

Adoramus te, Christe, et benedicimus tibi, quia per sanctam crucem tuam redemisti mundum, qui passus est pro nobis. Domine, miserere nobis.

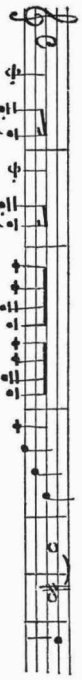
六　管絃樂

ベートーヴェン作　第一シンフォニー（ハ長調）

作者は一七九一年に既に此の作曲に着手したが初めて演奏したのは千八百年の四月、即ち三十歳の時だといふ。所謂『初期のベートーヴェン』（即ちハイドン、モツァルトの感化の著しかつた時代）の作である。然し此の曲を單にモツァルトの模寫の如く見做すことは出來ない。それは曲中の處々に作者獨創の手法が現はれて居るからである。

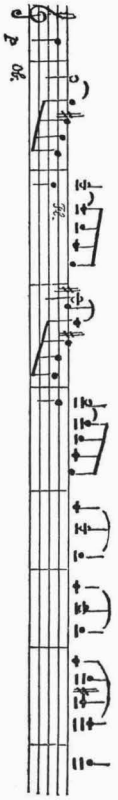
第一章の快速曲はハイドンによく見るやうに短かい緩徐（アダジョ）の序節をつけてある。此の序節はいきなりヘ調の屬七の和音で始まるといふやうな、當時

には珍らしかつたものであるが、間もなくハ長調の快速調に連る。こゝに現はれる第一主想は



モツァルトのシンフォニーにもありさうな調で、これが再度反復進行をなして引延ばされ、やがて勢のよい強奏で一段落を告げる。この邊の構造はモツァルトに見る通りである。

第二の主想も



全くモツァルト風である。

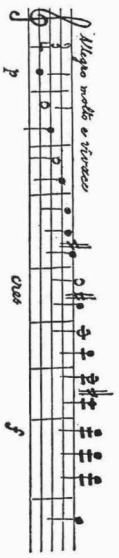
然しこの次の所で怒號するト調の段落が俄然最弱奏に轉じて低音樂器が第二主想の樂句を承けて現はし、他の樂器が暗い不安な和聲を添へて行く一節は全くベートーヴェンの獨創である。——展開部に於ては第一主想の第四小節や第二主想の第五小節の樂句を材料としてハイドン風に展開して行く。

第二章の緩歩調（アンダンテ）は七小節よりなる次の旋律を主想として

これを暫くフーゲ式に進めて行く。これが終ると更に主想の自然の繼續として優美な一節が續く、此の第一部分の最後の八小節に於て銅鼓（チンバニ）がヴァイオリンの三連音に伴はれて獨立のリズムを刻んで行く一節は作者が後年の作に好んで用ひた銅鼓の獨奏の先驅と見られる。

主想の最初の二音（「ハ」—「ヘ」）の形が脈搏のやうな銅鼓と結合して第二部分の初節を形成する。此の二音符が或は高く飛び或は低く潜み、凡て電光の閃くやうに疾過する一段は再び大なるベートーヴェンが現はれて居る。此の第二部分は最も美妙に細工せられ作者得意の強弱の對照を以て終を告げる。以下は最初の部分の反復である。歌のやうな此の緩歩調は殆ど全部心地よき夢想にふけるやうな特性のもので、昔から廣く賞美せられて居る。

第三章はメヌエットと題してある。メヌエットは原古いフランスの舞曲で四分三拍子の緩かな進行の優美な曲で、ハイドン、モツァルトが好んでソナータやシンフォニーの第三章に編入したものである。ベートーヴェンは緩徐曲と終曲の間に極めて快速な曲を入れるのが宜いと考へてハイドンの早めた速度を更に早めて所謂『スケルツォ』を作り出し、後年の作に於て見事に之を完成した。本章のメヌエットの如きも旋律のリズムが幾分古い舞曲の俤を止めては居るが、休みなく突進する激しい性質は以前の型を踏み越えて居る。主想は次の如くである。



此の章は全曲中で最も作者の箇性の強く現はれた曲と評せられて居る。殊に第二部分は奇警な轉調や突然の弱奏や *sf* の連鎖や切分音の構造や——凡て後年の大家の獨創が十分に現はれて居る。トリオ即ち中間進行は極めて單純な作法によつて大なる効果を收めて居る。旋律的の樂想といふ程のものは殆ど用ひずに緩かな管の豊麗な和音と絃樂との交代から成る。終て始に反り、メヌエットを反復して結ぶ。

終章（フィナーレ）はハイドン式のロンドである。緩徐（アダージョ）なる數小節の序節を經て次の第一主想が現はれる。

第一主想の後にモツァルトのジュピターにもあるやうな下行音階よりなる繋ぎの部分を經て、これも快活なト長調の第二主想が出る。凡て此の章は輕く戯れるやうな陽氣な氣分に充ちて居る。前の章が最もベートーヴェン

の特色を發揮して居るに反し、此の章は最も老師ハイドンの俤を傳ふるものと評せられて居る。

大正九年六月二十六日、二十七日　学友会春季演奏会

■六月廿六、廿七日兩日午後二時より學友會春季音樂大演奏會を開く。曲目は左の如し

一、女聲合唱　會員
　樂劇『さまよへる和蘭人』の絲とり娘の合唱　ワークナー
二、洋琴　第一ピアノ　濤川瀧江
　第二ピアノ　ショルツ教師
　ニ長調競奏曲中第三樂章……モーツァルト
三、深音獨唱　加藤豐
　樂劇『タンホイザー』中の華想調……ワークナー
四、ギオロンチェルロ獨奏　高勇吉
　い、匈牙利幻想曲、作品七……グルッツマッヒェル
　ろ、ガヅット、作品二十三、第二……ポッパー
五、低音獨唱　阿部英雄
　裏切、作品百〇五の第五……ブラームス
六、ヴイオリン　林龍作
　競奏曲中の靜穩併歩調、作品七十六の七　ベリオ
七、管絃樂　會員
　序曲『ウイリアム　テル』……ロッスィーニ
八、洋琴　第一ピアノ　室岡清枝
　第二ピアノ　ショルツ教師
　ハ長調競奏曲、作品十……ゼーバー
九、上高音獨唱　關鑑子
　歌劇『アルセスト』中王妃アルセストの抒情調
　『よみの神よ死の神よ』……グルック
十、ヴイオリン　高階哲應
　ハ長調競奏曲……ハイドゥン
十一、混聲合唱　會員
　い、船唄……プッチーニ
　ろ、波の窓……トスカーニ
　は、鐘の歌……レオンカヴルロ
　指揮者、合唱、萩原教授、管絃樂、大塚助教授

（『音樂』學友會、第十一巻第九号、大正九年九月、五六頁）

大正九年十月九日　邦楽演奏会

東京音樂學校邦樂演奏會

曲目

第一部

一　打球樂（舞樂）
（午後三時―同二十五分）

舞人
同笛同同篳篥同同笙
同同同同同同同樂師同同同樂師
豐上東東安安薗多奥辻多奥
儀儀倍倍
時近民四俊季季兼忠好英久好
義禮郎龍功頼明保察吉毎壽

二　納曾利（舞楽）
（午後三時三十分―同四十五分）

同　奥　好義
鞨鼓　同　辻　則承
太鼓　同　東儀　俊義
鉦鼓　同　多　久元
舞人 楽師　多　忠基
同　多　忠朝
管方　「打球楽」ニ同シ

三　船弁慶（能楽）　梅若萬三郎　野口貢五郎
間　川崎利吉　金春林太郎
大倉喜太郎　杉山立枝
藤江又喜
（午後三時五十分―四時三十五分）

――休憩二十分間――

第二部

四　吟龍虚空（尺八本曲）　荒木古童
ワキ　納富壽童
（午後四時五十五分―五時十分）

五　越後獅子（江戸長唄）
（午後五時二十五分―同四十五分）

長唄　吉住小三郎
吉住小三藏
吉住六四郎
三味線　杵屋和四郎
杵屋三郎
杵屋六次
笛　住田又兵衛
小鼓　望月太左吉
小鼓　望月左吉
太鼓　望月長十郎
太鼓　望月長四郎

CONCERT
OF
JAPANESE MUSIC & DANCES
AT THE
TOKYO ACADEMY OF MUSIC
UENO PARK
ON
SATURDAY, OCTOBER 9, 1920.

PROGRAMME

PART I.

BUGAKU (classical dances with orchestral accompaniments)
by Musicians of the Imperial Court

a) DAKYÛRAKU (polo dance) 3. 00—3. 25

DANCERS	Mr. Yoshinaga Oku Mr. Hisatsune Ôno Mr. Teruyoshi Tsuji Mr. Yoshikiyo Oku
SHÔ, Chinese mouth-organ	Mr. Tadayori Ôno Mr. Kanekiyo Sono Mr. Sueyori Abe
HICHIRIKI, small flute	Mr. Sueisa Abe Mr. Toshitatsu Tôgi Mr. Tamishirô Tôgi
FUE, flute	Mr. Chikaaya Ue Mr. Tokiyoshi Bunno Mr. Yoshiisa Oku
KAKKO, small drum	Mr. Noritsugu Tsuji
TAIKO, big drum	Mr. Toshimasa Tôgi
SHÔKO, small gong	Mr. Hisamoto Ôno

b) NASORI (dragons' dance) 3. 30—3. 45

DANCERS	Mr. Tadamoto Ôno Mr. Tadatomo Ôno

NÔ (lyrical drama)—FUNA-BENKEI (Benkei in the ship)
3. 50—4. 35

The famous general Yoshitsune falling into disgrace with his lord and brother Yoritomo sets out with the priest-warrior Benkei and other followers for the western provinces. Before embarking on the ship at Daimotsunoura he dismisses his lover Shidzuka, who expresses her deep sorrow by a song and a dance. On the sea the ghosts of the warriors of the Taira clan drowned in the seafight at Dannoura emerge from the waves, Tomomori foremost among them. Yoshitsune draws his sword to fight, but Benkei taking his rosary disperses the ghosts with his prayers.

YOSHITSUNE	Mr. Naoyoshi Umewaka
SHIDZUKA TOMOMORI'S ghost	Mr. Manzaburô Umewaka
BENKEI	Mr. Kôgorô Noguchi
BOATMAN	Mr. Mataki Fujie
ÔTSUZUMI, side drum	Mr. Rikichi Kawasaki
KOTSUZUMI, shoulder drum	Mr. Kitarô Ôkura
FUE, flute	Mr. Tatsue Sugiyama
TAIKO, big drum	Mr. Rintarô Komparu

PART II.

SHAKUHACHI music—GINRYÛ-KOKÛ 4. 55—5. 10

SHAKUHACHI, bamboo flageolet	Mr. Kodô Araki
Accompanied by	Mr. Judô Nôtomi

EDO NAGAUTA (long song)—ECHIGOJISHI

5. 25—5. 45

The Echigojishi(lion dancers)is a group of dancing acrobats from the province of Echigo. They make a tour of the country singing folksongs, dancing and practising feats of agility.

SONG	Mr. Kosaburô Yoshizumi Mr. Kosazô Yoshizumi Mr. Koshirô Yoshizumi
SAMISEN	Mr. Rokushirô Kineya Mr. Wasaburô Kineya Mr. Rokuji Kineya
FUE	Mr. Matabei Sumita
KOTSUZUMI	Mr. Tasakichi Mochizuki Mr. Sakichi Mochizuki
ÔTSUZUMI	Mr. Chôjûrô Mochizuki
TAIKO	Mr. Chôshirô Mochizuki

大正九年十月二十二日　演奏旅行

■東京音樂學校職員及び生徒は第二高等學校の需めに應じ去る十月二十二日同校に於て左記曲目に依り演奏せり。

一、絃樂　東京音樂學校職員生徒

歌劇『ゼライルよりの誘拐』……モーツァルト

二、混聲合唱　生徒

い、靜けき夕、作品一……グラーベルト曲、大須賀績歌

ろ、空しく老いぬ瑞典民謠……ユングスト編、高野辰之歌

は、心の花作品六十二……ブラームス曲、吉丸一昌歌

三、洋琴獨奏　高折宮次

維納の夜　第六番……シューベルト－リスト

四、絃樂　職員生徒

絃樂四重奏曲中の唱謠併歩曲作品十八……ベートーヴェン

五、上高音獨唱　長坂好子

歌劇『自由射手』中のアガーテの抒情調……ウェーバー

六、混聲合唱（無伴奏（アカペルラ））　生徒
い、春の知らせ（作品四八の一）鶯の歌（作品五九の四）……メンデルスゾーン
は、郊宴の歌……ゼーデルマン曲、吉丸一昌歌
七、ヴイオリン獨奏　蜂谷龍
幻想曲と舞曲……ベリオ
八、絃樂と合唱　職員生徒
歌劇『タンホイザー』中の行進曲と祝歌……ヴークナー

（『音樂』學友會、第十一巻第十二号、大正九年十二月、五二頁）

大正九年十一月六日　学友会第二十九回土曜演奏会

■十一月六日午後二時より第二十九回土曜演奏會を開催、左の曲目に從ひて演奏せり。

一、合唱　會員
甲、觀菊の宴……シューマン
乙、別離（上高音獨唱關鑑子）……民謠
二、洋琴獨奏　松野ヨシエ
光耀旋轉曲、作品六十二……エーバー
三、高音獨唱　曾我部靜子
歌劇『オルフェオ』中の『噫、吾を憐れとおぼせ』と『エウリディチェなくしてわれ何をかなさめ』……グルック
四、ヴイオリン　上田友亀
競奏曲　第二十三番、第一樂章……ギオッティ
五、上高音獨唱　葛岡露子
歌劇『自由射手』中のアガーテの小歌調……エーバー
六、風琴獨奏　小川一郎
交響樂的諧謔曲……ギルマン
七、合唱附き四重唱
上高音、關鑑子、高音、庄司ひさ、保音、伊藤祐司、低音、阿部英雄
嬉しき平和……ロムベルク
八、洋琴獨奏　小倉美江
奏鳴曲、作品十三、第三樂章……フムメル
九、高音獨唱　川手きみよ
サムソンとダリラ中の愛よ我に力をかせよ……サンーサアンス
十、ギオロンチェルロ　高勇吉
ニ長調競奏曲、第一樂章……ハイドゥン
十一、合唱　會員
甲、牧童の日曜の朝……（クロイツァー）高野辰之歌
乙、身をなし得んか…（メンデルスゾーン曲）高野辰之歌

（『音樂』學友會、第十一巻第十二号、大正九年十二月、五一頁）

大正九年十一月二十一日　邦楽会第二十一回演奏会

大正九年十一月廿一日（日曜日）午後一時　臨時會員會費
於　上野東京音樂學校奏樂堂　御一名　壹等　壹圓五拾錢　貳等　壹圓
第貳拾壹回演奏曲目

邦樂會

番外　三絃樂階梯新曲
三宅花圃女史作歌
西山吟平作曲

甲、月魄

唄　手塚美千子
同　片野貞子
三味線　西山吟平
同　石川元惠
同　佐竹桂子
小鼓　六合新三郎
大鼓　梅屋勘兵衛
太鼓　六郷新十郎

芭蕉翁俳文
西山吟平作曲

乙、夢の跡

唄　田畑千壺（篤志出演）
三味線　西山吟平

一、富本節
惠方みやげ

三味線・上調子
富本都路
富本都茂惠
富本都代初
富本都喜代
富本都多壽

二、歌澤節
甲、歳の瀬
乙、朝日

唄　歌澤寅右衛門
三味線　歌澤寅秀
同つれ彈　歌澤登美壽

三、常磐津節
薪荷雪間の市川
（新山姥）

三味線
常磐津松尾太夫
常磐津志妻太夫
常磐津歌妻太夫
常磐津文字兵衛
常磐津菊三郎

――休憩十五分間――

四、一中節
末廣

シテ　菅野吟平
ワキ　田畑千壺（篤志出演）
三味線　落合康惠
同　石川元惠
上調子　片野貞子

五、長唄
喜三の庭

長唄
芳村孝次郎
芳村孝太郎
芳村孝三郎
三味線
今藤長十郎
杵屋五三郎
杵屋勝藏
笛
西川鉦二

大正九年十二月三日、四日　第三十九回定期演奏会

ベートーヴェン誕生百五十年記念曲目

一、管　絃　樂

ゲーテ作悲劇「エグモント」の序曲（作品八四）

Ouvertüre zu Goethes Trauerspiel „Egmont“ (Op. 84)

二、上高音獨唱……………………………………長　坂　好　子

ゲーテ作悲劇「エグモント」の小歌二篇

Zwei Lieder zu Goethes Trauerspiel „Egmont“

a. „Die Trommel gerühret“(Nr. 1)

b. „Freudvoll und leidvoll, gedankenvoll“(Nr. 4)

三、管　絃　樂

變ホ長調交響曲（第三番、作品五五）

Symphonie Eroica (Es Dur, Nr. 3, Op. 55)

Allegro con brio

Marcia funebre, Adagio assai

Scherzo, Allegro

Finale, Allegro molto

休　憩　十分間

四、管絃樂附ピアノ……………………………………小　倉　末　子

ハ短調競奏曲（第三番、作品三七）

Konzert für Pianoforte (C Moll, Nr. 3, Op. 37)

Allegro con brio—Largo—Rondo

五、絃樂附混聲合唱

悲歌（作品一一八）

Elegischer Gesang für gemischten Chor und Streichorchester (Op. 118)

指揮者　グスターフ、クローン

音樂演奏曲目梗概　第二十八

世界最大の作曲家ベートーヴェン (Ludwig van Beethoven 1770-1827) は一七七〇年十二月十六日にライン河畔ボン市ボン通五百十五番の家に生れた。洗禮が十七日になつて居るから大陸の風習から推すと其の前日が誕生日であらうといふ。何れにしても今年今月は百五十年に相當するので記念の爲めに此の大家の作のみを曲目に上せたのである。創作の順に言へば第四にやるピアノ競奏曲（一八〇〇年作）が一番先で、これは今春演奏した第一ジュムフォニーと同年代の作で、作者の第一期の作品に數へられる。即ち先人モツアルト等の型を守つて居る點が多く見えるのである。次は第三番目の英雄交響曲（一八〇三乃至四年作）であるが、これは徹頭徹尾作者の獨創を發揮したものとして彼の第二期の最も重要な作品である。『エグモント』の序曲及小歌（一八一〇年作）と合唱の『悲歌』（一八一四年作）とは更に後年に屬する。

一　管絃樂

ゲーテ作悲劇『エグモント』の序曲

ゲーテの作は十六世紀に於けるネーデルランドの貴族エグモントを主人公とした心理的史劇である。史實によればエグモントは最初カール五世に仕へ次でフィリップ二世の下にサンカンタンやグラヴェリンで殊勳を立て、フランドルの知事及ネーデルランドの參議として國民間に最も聲望ある人であつたが、フィリップ王の舊教政策（新教徒に對する壓迫）に反抗した廉で一五六八年總督アルヴァ公に捕はれブリュッセルで處刑せられたといふ。ゲーテの悲劇（五幕物）は彼の性格を理想化し、快活な正直な正義公道の外何事をも知らない爲めに破滅を招いた薄命の英雄として描き、且つ歴史上子福者なりし彼を變じて獨身者となし、之に市民の娘クレールヒェンを配して居る。彼女はエグモントの入牢を聞くや市民を煽動して彼を救はんとしたが、恐怖せる市民は之れに應じなかつたので、最早彼と遇ふべき手段としてはエグモントの處刑に先つて毒を仰ぐより外なかつたのである。かくして彼女は獄に在るエグモントの幻象のうちに自由の化身として現はれ彼の臨終を美化する。こゝにエグモントはネーデルランド國民の自由の戰士として死することを自覺し、從容として死に就くのである。

ベートーヴェンの作は本日演奏する序曲及びクレールヒェンの歌二曲の外に管絃樂として幕間樂四曲、『クレールヒェンの死』、メロドラマ、『エグモントの死』及び最後の『凱旋交響曲』を含む。

〔大正二年十二月六日、七日の「音樂演奏曲目梗概」を參照。〕

二　上高音獨唱

クレールヒェンの小歌二篇

エグモントと相思の仲にあるクレールヒェンは天眞爛漫で快活で激し易いが又た考へ込むやうな性格に描かれてある。第一幕の『市民の家』の場で彼女は絲を捲きながら、自分の好きな歌 (Mein Liebstück) だと言つて軍歌をうたふ。本演奏の第一がそれである。『軍皷とどろき笛鳴り、我が情人は武裝して隊に指令し、高々と鎗を揭げて民を統御す。胸躍り血湧くことよ。あゝ我に兵衣と軍帽とあらば。——勇む歩みに都門を出でて、彼に從ひ諸州を横ぎり、いづこまでも行かましものを。早くも遁ぐる敵軍の中を目がけて吾等は射擊す、何等無上の幸福ぞ、男子たること。』——第五幕で人民を煽動する彼女の性格は第一幕の此の歌の中にも已に表はされて居るのである。

第二の歌は第三幕の『クレールヒェンの住宅』の場で、部屋の中を行きつ、もどりつ、口ずさむのである——『樂しく、悲しく、思ひあまりて、ただよふ惱みにあこがれ、悶え、こよなく喜び、死ぬべくなげきて、戀ふる心こそ幸なれ。』

Die Trommel gerühret.

Die Trommel grühret, das Pfeifchen gespielt,
Mein Liebster gewaffnet dem Haufen befiehlt,
Die Lanze hoch führet, die Leute regieret.
Wie klopft mir das Herz! Wie wallt mir das Blut!
O hätt' ich ein Wänslein und Hosen und Hut!

Ich folgt' ihm zum Thor 'naus mit muthigem Schritt,
Ging' durch die Provinzen, ging' überall mit.
Die Feinde schon weichen, wir schiessen darein,
Welch' Glück sonder Gleichen, ein Mannsbild zu sein!

Freudvoll und leidvoll

Freudvoll und leidvoll, gedankenvoll sein.
Langen und bangen in schwebender Pein,
Himmelhoch jauchzend, zum Tode betrübt;
Glücklich allein ist die Seele die liebt.

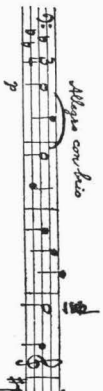
三　管　絃　樂

第三英雄(ヒロイカ)交響曲

此の曲は作者が人類自由の保護者として尊敬して居た執政官時代のナポレオンを讃美し、その偉大なる人格を描て此の英雄に捧げる積りで作つたもので、最初の原稿の表紙には上に『ナポレオン・ブオナパルテ』と記し遙か下に自分の名を記してあつたといふ。然るに一八〇四年五月ナポレオン即位の報がヴィーンに達した時彼は怒つて其の譜を握み表紙を破つて床に投げ棄てた。それ以來は此の曲と皇帝との關係を誰にも語らなかつたが、十七年の後ナポレオン逝去の報に接した時、彼は『此の結末の音樂はもう作つて置いた』といつたさうである。これは本曲の第二章の葬送進行曲を指したのだといふ。然しそれより遙か以前（一八〇六年）に作者は『一英雄の遺名を稱(たた)へんとて作れる英雄交響曲』といふ標題で本曲を出版した。

作曲の由來や現在の標題から考へると作者が何か特殊の事柄をこの曲で表はさうとしたに相違ないと思はれる。然し葬送進行曲の直ぐ次に快活な喜戲曲(スケルツオ)が現はれ最後に凱歌のやうな終曲(フィナーレ)が來るといふ順序を（標題樂として）どう解釋すればよいのかは疑問である。ベートーヴェンの研究者として有名なるマルクスに從へば第一章は英雄的生活の本質たる戰爭を描き、次の弔歌は遺屍累々たる夜の戰場、スケルツォは歸國をたのしむ兵士の態、そして終曲は平和の歡樂と祝祭とを描いたものだといふ。ワグネルは軍事上の英雄でなく一般に唯だ『英雄的人格』を寫したものと考へ、初めの兩章は悲壯なる結果に陷る絶大なる力を示すものと解して居る。この力は第二章に於て悲壯の危機に達するが、其の結果は破壞的な傲慢心を失ひ、深き悲痛に清められて平靜快活の人を生む。第三章に現はれるものはこれである。そして最終章は已に描いた惱める人と樂しむ人との調和より生ずる全人を示すのであると說いて居る。

第一章は活氣ある快速曲（Allegro con brio）（變ホ長調四分三拍子）で其の第一主想は曲頭に二度響く強き和音の後、セロの弱奏に現はれる。

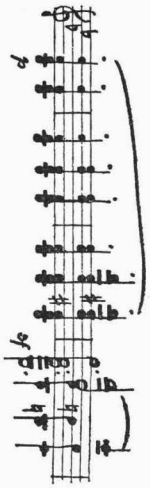


單純で威嚴のある此想は三和音の音から成る僅か四小節の樂句（前揭譜の前半）であるが、全章を通じて幾度か現はれ、其都度調を變へ樂器を改めて變化の妙を極めると共に、英雄奮闘の經路の複雜なることを思はせる。此章に於て特筆すべき一事は悲痛の氣分が絶えず附隨して居ることである。曲頭の『英雄』樂想の續きとしてヴァイオリンに出る樂句（前揭譜後半）も已に哀調を帶びて聞えるが、次の箇處で種々の木管やヴァイオリンが交代して表はす一樂句に至ては疑ふ如くためらふ如く暗い憂想を含んで英雄が心中煩悶の狀を示すやうに思はれる。

純技術上の點から見ても此の一節は極めて重要である。といふのは種々の樂器が代り合つて旋律（メロディー）を分擔するといふ新式作法を極端に發揮（ママ）して居るからである。此處に限らず此の交響曲は總てかゝる樂器使用法の極致を示すものと言はれて居る。

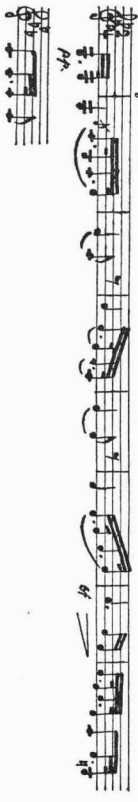
之に次ぐ一節は最も活躍して偉人奮闘の狀を思はしめる

此樂句で狂奔したヴァイオリンが漸次靜まり變ロ長調に達する時、休息を渇望するやうな第二主想が初めて木管に現はれ、前の樂想と絶好の對照を成す。



第二主想の後は間もなく管絃の最強奏に達して第一部分（所謂『提示』部）を終り、今一度今迄の部分を悉く反覆して後、第二の所謂『展開』部に進む。此の部分は内容から見れば奮闘苦戰の極點を示し、外形から言へば前に出た材料に基て變化を盡す箇所である。最も相容れない不協和音や何處までもくひちがつて行く節奏（リヅム）を用ひて激しい葛藤を描いた一節は純然たるベートーヴェン式である。此の展開部から最後の反復部に移らうとする間際に極めて有名な一節がある。ヴァイオリンが獨り殘つて微かに屬七の和音を奏して居る所へホルンが待ちかねた樣に主和音よりなる曲頭の樂句を表はす所である。和聲法に反する手段によつてかくも靈妙な、詩趣に富む効果を與へ得るのは眞に天才の妙技である。以下は『反復』を經て尾（コ）句（ダ）に入る。此の尾句は百四十小節に亘る長大な、内容に富んだもので、これも作者の新機軸の一である。

第二章、甚緩徐なる曲（Adagio assai）は葬送進行曲（Mareia funebre）で、崇高なる英雄の葬禮を送るにふさはしいやうな曲である。絃の弱奏に現はれる次のハ短調の主想は更に管の哀れな音色で繰返される。



これに次で變ホ長調に始る一節は暫く慰藉の如くに響くが直ちに本の悲調にかへり、不安にさまよふやうなセロの樂句に終る。以下暫く既出の樂句を展開して第一部分の終に達す。第二部分は明るいハ長調に達して光輝ある英雄の姿を回想するかの樣に聞える。

第三部分は重に次の主想から成り、

これが次の樂句と合してフーガ式に現はる。

この邊の表情は悲嘆するやうであるが漸々和らいで、再び生前の英雄が現はれ樂が活氣を帶びて來る。此の時突然『彼今や無し』との感が胸に浮んだやうに次の一節が起る。

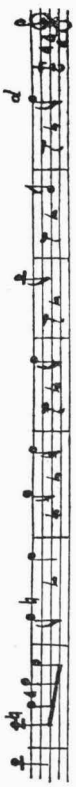
これが漸く鎭まる頃第四部分に入る。こゝは要するに第一部分の反復であるが悲嘆の情は一層激しく表はされて居る。かくて最後の告別はなされ

た。第五部（尾句）に於てヴァイオリンに起る次の旋律は此の悲嘆の後に幾分の慰藉と希望とを齎すやうに聞える。

第三章喜戯曲（Scherzo）は最弱奏の斷音を以て奏する活潑なる快速曲（Allegro vivace）である。六小節に亘る絃の前彈きの後にオーボエと第一ヴァイオリンが最も活潑な次の調を表はす

此の調が種々の樂器で繼がれて行くうちに全管絃の同音で奏する強い切分音の一節に達し、輕妙な尾句を以て第一部分を結ぶ——中部進行は主としてホルンが擔當して他の樂器は殆ど間奏をなすに過ぎない。ホルンは最初戯れて居るやうに響くが漸次に眞面目を加へて絶頂に達する時は嚴かに聞える。——中部進行の後は大體第一部分を反復して終る。——スケルツォの曲體がベートーヴェンの新機軸であることは善く知られて居る。そして此の曲は管絃樂で奏するスケルツォの初作であるから歴史的にも興味がある。

第四章終曲（Finale）は變奏曲の體に作られ其の主想は短き序節が變ホ長調の屬七和音で止まる後に指彈で表はれる。



この想は音程から見て實は基礎低音であるが、これを變奏して進むうちに第三の變奏に至てこの低音主想に適する新しい旋律が木管に現はれる。

此の極めて美しい第二の想は本章の終りの部分を支配し、暫くは第一主想に基く對位法的部分に席を譲るが再び稍緩徐なる部分（Poco andante）に現はれ、然る後全章は極急（Presto）なる短かき尾句を以て結ぶ。」

四　管絃樂附ピアノ

ハ短調第三コンツェルト

演奏家としてのベートーヴェンは種々の樂器に堪能であつた。ボン市に居た頃は宮廷の第二オルガニストを勤めたり、又た管絃團に入つてヴィオラを奏して居たといふ。然し二十五歳の時、初めてヴィンナの公會で演奏した時は第一番のピアノ競奏曲で喝采を博したのである。この様にピアノの名人で且つ管絃樂にも精通して居た彼は此の兩方で奏する競奏曲に模範的名作五篇を遺した。最初の三曲即ち本演奏の『ハ短調』までは外形や傾向に於て大體モツァルトを追つて居るが、而も絶えず進歩せる演奏の技術と樂器の音量とを利用し、且つ樂器の能力や本性を深く理解することによつて、曲の内容をば一層充實せしめた。第一章（快速曲）は最初に管絃が第一主想と第二主想（長變ホ調）とを述べ了り、更に主調（短「ハ」）にかへつて曲頭の樂句を以て段落を告げて、それから初めてピアノが現はれ、多少樂器に應じた變化を加へつゝ或は管絃に伴奏され或は管絃とかけ合ひになつて之を反復する。以下展開をなすの後再び第一部分の反復となり延長段落を經て曲を結ぶ。第二章（緩徐曲）は力強い前章との對照で眞に優しく美しく聞える。ハ短調から急に珍らしいホ長調へ移つたといふことも此の感を強める一の理由であらう。此の章ではいきなりピアノが主想を表はし、次で管絃がこれを承ける。それから以下はピアノが殆んど旋律を擔當することなく、管絃の旋律の周圍に音の唐草模様とも謂ふべき裝飾を繞らして行く。この邊は眞に美事で、已に後年の圓熟した二曲の域に達したものと評せられる。第三章（快速曲）では前章と異つてピアノが十分に言葉を述べ了つてから管絃をして語らしめる。曲の體は『ロンド』で最初に現はれる主想が對照として挿まるゝ副想を隔てゝは現はれるやうな形式である——本曲は全體を通じて清新な美しい歌調に甚だ富んでゐる。

（延長段落（カデンツァ）はライネッケ作を用ふ）

五　絃樂附混聲合唱

悲　歌

四つの聲とピアノ（本演奏にはオルガンを用ふ）と絃樂四部とに作られた本曲はパスコラティ男爵に獻本したもので、『友人パスコラティの世を去りし夫人に寄す』と題してある。歌詞の作者は詳かでない。――『ありし日の君のごとくに、靜かにも君は果てたり。あなたふと、あなたふと、嘆くもおろか。世の人よゆめな悼みそ、歸りゆくあめのみたまを』

Elegischer Gesang

Sanft wie du lebtest, hast du vollendet,
Zu heilig, zu heilig für den Schmerz!
Kein Auge wein' ob des himmlischen Geistes Heimkehr.

〔批評および関連記事〕

本校一昨年ベートウヴェン記念演奏の批評

少し古くなつたが獨逸の新音樂新聞の音樂書簡欄に、こんな事が出て居る。「今日東東（ママ）のベートウヴェン記念祭の事を報告すると云つたら、多くの讀者は恐らく疑つて、如何にしてそんな事が出來る、極東に於て我が偉大なベートウヴェンを正しくやる力は、何處から得られるかと、そう問ふだらうしかも總ての懷疑者に云ふがベートウヴェンの百十回記念日が此處で五派（ママ）に三つの大管絃演奏會十四、五及び十一日によつて祝はれたのである。初めの二日は官立音樂學校で最後は新築の德川侯の樂堂であつた。」……次に曲目を擧げてから尙云ふに「この會の演奏や出來榮えを詳しく云ふ前に、簡單に日本の近年の洋樂の發達について簡單に知らせて置かう。

比較的短日月の間に我等の音樂に對する著しい評價と又同時に絕えず增進する理解とが、目に見えて來た。殊に我等の音樂を國內に移植しやうとして熱心になつてゐるのは、日本の青年である、この進歩といふものは、第一音樂學校から出るのであつて、每年出來上つた男女の音樂生徒を澤山に出して居る。此處には幾年前から四人の獨逸の藝術家が働いて居る。每年學校では、二乃至三の大管弦及合唱音樂會をクローン氏や色々の獨唱者も加つて擧行する。

この會が東京の音樂會の中心なのである。音樂學校の管絃團の外に、二つ軍隊の管絃團があるが、これは公園で夏中だけやるのであるから、各期は大抵獨唱會を聞かれるだけである。

これ等の音樂會は今では音樂學校で修業した日本の藝術家だけで、大抵は充分立派な仕事を見せる。しかし殊に一年中でよい音樂を聞かれるのは、學校の管絃演奏會であると云ふのは、その指揮者がプログラムの選定に於て、組織的に進みそれに對する理解を促進するからである。この五年間に演ぜられた比較的大きな曲を擧げれば「」云々……

再び曲目を擧げてゐる。「」此の外最も美しい序曲や管絃伴奏のコンチエルトも多くあつて、それには日本の男女藝術家も大いに加つて居る。中略

こゝに居る歐州人の中は、多少輕侮して日本人には洋樂の眞の理解を缺いてゐると云ふ言葉を聞くが、これまでやつた事を回顧すると、今日この種の疑問は不當であると云ふ事が如何なる懷疑者にも、解る筈だ。エロイカのやうな曲を演奏出來る音樂團に、この音樂の理解を拒む事は出來ない。こんな大曲をば精神的內容に對する感を持たずに、純技術の點だけで演奏するとは考へられない。

指揮者の熱誠が管絃團に移り、これから又聽衆に偉大な反響を起させると云ふ事は、人種の差別に拘はらず少しの間隙もない。此處まで來るには、音樂學校も確に正しい道を踏むで來たに相違ない。「」

（乙　骨　三　郎）

（『音樂』學友會、第一号、大正十一年三月、二四～二五頁）

大正十年二月二十六日　学友会第三十回土曜演奏会

□第三十回土曜演奏會　二月二十六日（土曜日）午後二時東京音樂學校に開會

一、コーラス、森（メンデルゾーン）他郷の月（メンデルゾーン）夏（ハウプトマン）會員 二、アルト獨唱、歌劇「ミニオン」中、君よ知るや南の國（トーマス[ママ]）石橋君 三、オルガン獨奏、ソナタ、プレリユード、アダジオ、フーゲ（ギルマン）三島喜代造 四、ソプラノ獨唱、歌劇「ハンス、ハイリツヒ」中、アンナのアリア（マルシユネル）伊藤アツ 五、ピアノ獨奏、ロンド、カプリチオ（メンデルゾーン）須子ちか 六、バリトン獨唱、汝や如何に（ブラームス）加藤豊七、ヴイオリン獨奏（イ）アンダンテ、レリジオーソ（トーメ）（ロ）ゲベート（水口幸麿）水口幸麿 八、コーラス、美しき花（シユーマン）歸雁（ハウプトマン）會員、指揮者、大塚淳

（『音樂界』第二三四号、大正十年四月、四二頁）

大正十年三月二十五日　卒業式

大正十年三月二十五日（金曜日）午後一時三十分

卒業證書授與式順序

東京音樂學校

一　卒業證書授與
二　校長式辭
三　文部大臣祝辭
四　卒業生總代謝辭

演奏曲目

第一部

一、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　堀口貞
變ロ長調競奏曲……モツァルト作曲
二、低音獨唱……本科聲樂部卒業生　阿部英雄
歌劇「猶太人の女」中のブローニの小歌……アレヴィ作曲
三、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　濤川瀧江
イ短調競奏曲（作品八五）……フンメル作曲
四、セロ獨奏……本科器樂部卒業生　伊達三郎
ニ短調競奏曲（作品二六）……ピアッティ作曲
五、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　井內チセ
變ホ長調競奏曲……モツァルト作曲
六、ヴァイオリン獨奏……本科器樂部卒業生　林龍作
譚曲と波蘭舞踏曲（作品三八）……ヴィユータン作曲

第二部

七、ピアノ獨奏……研究科器樂部修了生　田中規矩士
維納よりの謝肉祭の遊戲（第一番作品二六）……シューマン作曲
八、上高音獨唱……本科聲樂部卒業生　關鑑子
歌劇「オーベロン」中のレーツィアの抒情調……ヴェーベル作曲
九、ヴァイオリン獨奏……本科器樂部卒業生　高階哲應
前奏と歌曲「我は小なき鼓手なり」の變奏曲（作品五）……ダビット作曲
十、セロ獨奏……本科器樂部卒業生　高勇吉
ロココ風主題の變奏曲（作品三三）……チァイコフスキ作曲
十一、ヴァイオリン獨奏……研究科器樂部修了生　奥村艷
ニ短調競奏曲（第二番作品二）……スポール作曲
十二、ピアノ獨奏……研究科器樂部修了生　川上清
一樂章より成る自由形式のト長調競奏曲（作品九二）　シューマン作曲
十三、合唱

獨逸民歌三篇 …… ブラームス作曲

はろい、夜分に
愉快なる五月
あ主エス、クリスト

Programme.

I. Presentation of Diplomas.
II. Address by the Director.
III. Address by His Excellency Nakabashi, Minister of Education.
IV. Response by the Representative of the Graduating Classes.

PART I.

1. Piano Solo ……Miss T. Horiguchi.
   Concert[o] (B Flat Major) ……Mozart.
2. Bass Solo ……Mr. H. Abe.
   Cavatina of Brogni from "The Jewess" ……Halévy.
3. Piano Solo ……Miss T. Namikawa.
   Concert[o] (A Minor, Op. 85) ……Hummel.
4. Cello Solo ……Mr. S. Date.
   Concert[o] (D Minor, Op. 26)……Piatti.
5. Piano Solo……Miss C. Iuchi.
   Concert[o] (E Flat Major) ……Mozart.
6. Violin Solo……Mr. R. Hayashi.
   Ballade and Polonaise (Op. 38) ……Vieuxtemps.

PART II.

7. Piano Solo ……Mr. K. Tanaka.
   Carnival Prank from Vienne (No. 1, Op. 26)…Schumann.
8. Soprano Solo……Miss A. Seki.
   Aria of Rezia from "Oberon" ……Weber.
9. Violin Solo……Mr. T. Takashina.
   Introduction and Variations on the Air
   "I am the little drummer" (Op. 5)……David.
10. Cello Solo……Mr. Y. Kō.
    Variations an a Theme rococo (Op. 33)
    …… Tschaikowsky.
11. Violin Solo ……Miss T. Okumura.
    Concert[o] (D Minor, No. 2, Op. 2)……Spohr.
12. Piano Solo ……Miss K. Kawakami.
    Concert[o] Piece (G Major, Op. 92)……Schumann.
13. Chorus:
    Three German Folksongs ……Brahms.
    a. Bei nächtlicher Weil.
    b. Ach lieber Herre Jesu Christ.
    c. Die Wollust in den Maien.

大正十年五月七日、八日　第四十回定期演奏会

大正十年五月八日日曜日　午後一時半開場
午後二時開會

音樂演奏曲目

東京音樂學校

一、管絃樂

悲壯なるロ短調交響曲（第六番作品七四）……チャイコフスキ作曲

Symphonie „Pathétique" (H Moll, Nr. 6, Op. 74) …Tschaikowsky.
Adagio—Allegro
Allegro con grazia
Adagio lamentoso

二、女聲三部合唱（オルガン伴奏）

羅典聖歌二篇（作品九六）……ラインベルゲル作曲

オルガン伴奏　中田章

Zwei lateinische Hymnen für Frauenstimmen mit Orgel (Op. 96) ……Rheinberger.

a. „Ave vivens hostia“

b. „Regina coeli“

三、上高音獨唱 ……ペツツォールド夫人

い、ヴァイラスの歌……ヴォルフ作曲

Gesang Weyla's……Wolf.

ろ、森の對話（第三番作品三九）……シューマン作曲

Waldesgespräch (Nr. 3, Op. 39) ……Schumann.

は、絲取るグレチヘン（作品二）……シューベルト作曲

Gretchen am Spinnrade (Op. 2) ……Schubert.

四、管絃樂及合唱

「アテンの癈址」中の進行曲及合唱（作品一一四）…ベートーヴェン作曲

Marsch und Chor aus „Die Ruinen von Athen“ (Op. 114)

……Beethoven.

五、管絃樂

歌劇「オイリアンテ」の序曲……ヴェーベル作曲

Ouverture zur Oper „Euryanthe“……Weber.

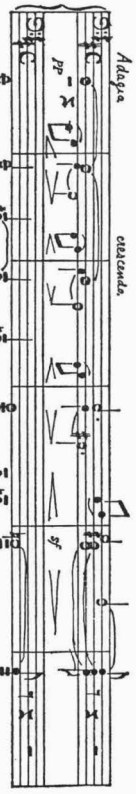
指揮者　グスターフ、クローン

音樂演奏曲目梗概　第二十九

一　管絃樂　『悲哀』交響曲　チャイコフスキ作

此の曲は露國の最大作曲家チャイコフスキ（P. Tschaikowsky 1840–1893）の六つの交響曲（シンフォニー）中最後のもので、又た彼の死ぬ前の作である爲、『臨終の歌』などゝ呼ばれて居る。初章と終章は極めて悲哀憂愁に充ちた曲で、『パテティック』といふ標題の適切なことを思はせる。

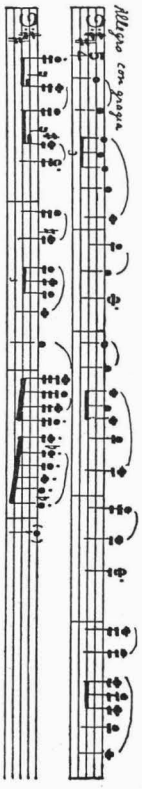
第一章は緩徐（アダージョ）の序節で始まる。此の部分は作者獨得の低音樂器の用法によつて憂愁の氣分を表はして居る。最初に長く延ばしたバスの上にファゴットの繰返す樂句は



後に快速部に現はれる第一主想と同形である。

ニ長調の第二主想（並歩調（アンダンテ））は單純な美しい旋律である。極めて劇的なる展開部の後に再び力強い第一主想が返つて來て、悲痛の情は漸次狂亂に高まる。此邊の力強さは非常なもので、作者の樂器用法の驚くべき技術を示して居る。激情の鎭まる頃美しい第二の主想が現はれて最弱奏で章を結ぶ。（此章の速度の幾度か變轉するのも從來の仕方とは異つて居る）

第二章の優婉な快速曲は前章との對照で一層引立つて聞える。近頃の露國作家の好んで用ひる五拍子（二拍と三拍よりなる）の舞曲調で、在來の交響曲に見るスケルツォなどゝは大分趣を異にして居る。主想はセロに現はれ絃の指彈（ピツチカート）と木管及ホルンの和音を伴ふ。



第二主想は哀訴するやうな性質のふしであるが間も無く第一主想が歸て穩かに章を終る。

第四章は『愁嘆緩徐曲』と題した自由な形の曲で、全部悲痛の叫や絶望の嘆聲や落膽の溜息の連續といつてもよい程に哀調に充ちて居る。幾度か速度が變つて後最も低い音域の弱奏で終る。こんな悲しい緩徐曲で交響曲

を結ぶのは極めて珍らしいことで、作者が此曲を作りながら屢々流涕したと友に書き送つたのも道理と思はれる。然し此曲が作者自身の最も得意の作であつたことも彼の書簡から窺ふことが出來る。

二　女聲合唱　羅典讃美歌二篇　ラインベルゲル作

ミュンヘンの王室音樂學校教授及び宮廷樂長をして居たラインベルゲル(J. Rheinberger 1839–1901)はオルガンの名手で、又た作曲家として多くの作品を遺した。本曲は作品九六に收めたオルガン伴奏の女聲三部合唱中のものである。

Ave vivens hostia

Ave vivens hostia, veritas et vita in qua sacrifi cia cuncta sunt finita. Per te patri gloria, datur in finita. Per te stat ecclesia jugiter munita. Ave ves clementiae, scrinium dulcoris in quo sunt deliciae, calici saporis. Veritas substantiae, tota salvatoris, sacramentum gratiae, pabulum amoris, ave vivens hostia, etc.

Regina coeli

Regina coeli laetare alleluja. Quia quem meruisti portare resurrexit alleluja.

三　獨　唱　(い)　ヴァイラの歌　ウォルフ作

塊國の天才ウォルフ(Hugo Wolf 1860–1903)は小歌(リード)の方面でシューベルト及びシューマン以後第一の人とまで言はれる作家で、アイヒェンドルフ、メーリケ、及びゲーテ等の詩に附曲した歌集を出した。本演奏の曲(Gesang Weylas)は『牧師詩人』メーリケの詩に感じて附曲した五十三篇中のもので、此等の曲は凡て一八八八年に四十二日間に作つたといふ。メーリケ歌集(Mörike Lieder)は他の作に比して詩味も樂趣も頗る多方面で、種々な曲を含んで居る。ウォルフの小歌の特性は深く詩人の意を探つて、それから自然に湧き出るやうなふしを附けた點であつて、即ち詩の聲調や意味に符合することを第一とする。然し純音樂の點から見ても彼の曲は深い趣味を備へて居る、といふのはピアノの伴奏が何れも表情と特性とを具へて重要な一部をなして居るからである。彼の作風は畢竟ワグネルがオペラに於てなしたことをリードに移したやうなものであるから、ウォルフはワグネルの精神によつてシューベルトを復活した人とも評せられて居る。

(ろ)　森の對話　シューマン作

獨逸ロマンチック派の粋ともいふべきシューマン(R. Schumann 1810–1856)は小歌の作者としてシューベルトに次ぐ大家である。此の兩大家の作風の差異に就ては種々の說があるが、然しシューマンのピアノ部が概してシューベルトよりも重要な意味をもつものであるといふことは多くの評家の說く所である。後の名家なるローベルト、フランツは曾て『森の對話』や『不思議なる君の姿繪』の如き小歌は純粹且つ單純なるピアノ曲に聲の部分を添へたものだ』と評したことがある。『森の對話』はアイヒェンドルフの小歌(森の中で魔女ローレライに遇った男と此の魔女との問答)に附曲した名作である。

(は)　糸取るグレチヒェン　シューベルト作

ロマンチック派の開祖の一人なるシューベルト(F. Schubert 1797–1828)は初めて獨逸の小歌(ゲーテ、ハイネ其他の詩人の作)に眞の藝術的作曲をなした人である。本演奏の曲はゲーテの『ファウスト』中の名詩に附曲したもので、十七歳の時の作である。其の翌年に出來た同詩人の『魔王(エルケーニヒ)』や『荒野の薔薇(ハイデンレースライン)』の作曲と共に早年の傑作に數へられて居る。シューベルトのピアノの伴奏には叙景の意味をもつものが屢々ある。『糸取るグレチヒェン』に於ても伴奏は糸車の廻轉を暗示するやうな音形をもつて終始一貫して居るが唯だ感情の絶頂に達する箇處に於て、これが一時斷絶して物思ひに沈むやうな數個の和音になる。

(a)　Gesang Weyla's

Du bist Orplid, mein Land! das ferne leuchtet; vom Meere dampfet dein besonnter Strand den Nebel, so der Götter Wange feuchtet.

Uralte Wasser steigen verjüngt um deine Hüften, Kind!
Vor deiner Gottheit beugen sich Könige, die deine Wärter sind. (Eduard Mörike)

(b) Waldesgespräch

„Es ist schon spät, es ist schon kalt, was reit'st du einsam durch den Wald? Der Wald ist lang, du bist allein, du schöne Braut, ich führ' dich heim!"

„Gross ist der Männer Trug und List, vor Schmerz mein Herz gebrochen ist, wohl irrt das Waldhorn her und hin, o flieh', o flieh', du weisst nicht, wer ich bin!"

„So reich geschmückt ist Ross und Weib, so wunderschön, so wunderschön der junge Leib ; jetzt kenn' ich dich, gott steh' mir bei, du bist die Hexe Loreley!"

„Du kennst mich wohl, du kennst mich wohl, vom hohem Stein schaut still mein Schloss tief in den Rhein ; es ist schon spät, es ist schon kalt, kommst nimmermehr aus diesem Wald. (Eichendorff)

(c) Gretchen am Spinnrade

Meine Ruh' ist hin, mein Herz ist schwer, ich finde, ich finde sie nimmer und nimmer mehr!

Wo ich ihn nicht hab', ist mir das Grab, die ganze Welt ist mir vergällt, mein armer Kopf ist mir verrückt, mein armer Sinn ist mir zerstückt. Meine Ruh' ist hin, mein Herze schwer, ich finde, ich finde sie nimmer und nimmermehr. Nach ihm nur schau' ich zum Fenster hinaus, nach ihm nur geh' ich aus dem Haus. Sein hoher Gang, sein edle Gestalt, seines Mundes Lächeln, seiner Augen Gewalt, und seiner Rede Zauberfluss, sein Händedruck, und ach sein Kuss! Meine Ruh' ist hin, mein Herz ist schwer, ich finde, ich finde sie nimmer und nimmermehr. Mein Busen drängt sich nach ihm hin, ach dürft' ich fassen und halten ihn, und küssen ihn so wie ich wollt', an seinen Küssen vergehen sollt', o könnt' ich ihn küssen so wie ich wollt', an seinen Küssen vergehen sollt', an seinen Küssen vergehen sollt'. Meine Ruh' ist hin, mein Herz ist schwer. (Goethe)

四　管絃樂及び合唱　『アテンの癈跡』中の進行曲及合唱　ベートーヴェン作

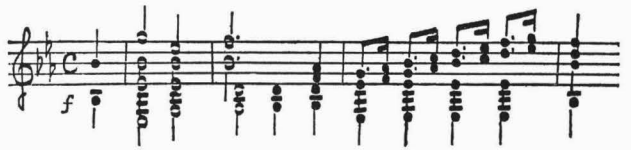
〔大正二年十二月六日、七日の「音樂演奏曲目梗概」を參照。〕

Chor aus „Ruinen von Athen"

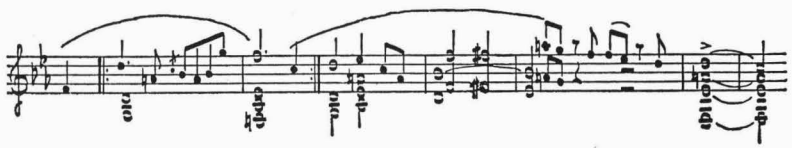
Schmück die Altäre! Sie sind geschmückt. Streuet Weihrauch! Er ist gestreut. Pflücket Rosen! Sie sind gepflückt. Harret der Kommenden. Wir harren der Kommenden. Wir sind bereit. Empfanget uns! Geschmücket sind die Altäre, Heil uns Beglückten, dreimal uns Heil! Rein im schönen holden Verein kehren die Musen bei uns ein! Edlere Freude, höhere Lust schwellt uns beseligt künftig die Brust.

五　管絃樂『オイリアンテ』の序曲　ヴェーベル作

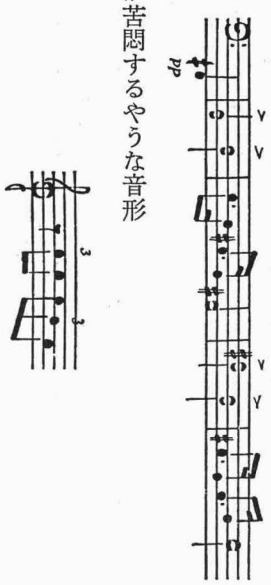
歌劇『オイリアンテ』（一八二三年ヴィーンにて初演）は獨逸ロマンチック歌劇の始祖ヴェーベル（C. M. v. Weber 1786–1826）の三大傑作の一で、筋は佛蘭西ルイ王の朝臣アドラール伯と彼の貞操なる許嫁オイリアンテが惡人リジアール伯等の奸計によつて仲を劃かれ、一時非常な苦境に陷るが終に彼等の奸計も敗れて惡人が倒れるのである。本演奏の序曲は歌劇中に現はるゝ歌調を巧に組合せたもので、しかも主人公夫妻の愛情の幸福を祈べた箇處から重に材料を採て居る。ヴァイオリンとヴィオラの歡呼に似た一節の後に歌劇の主要樂句が直ちに表はれる。



副樂句はアドラールがオイリアンテの到着を喜ぶ抒情調から採つたもので、優しい感じが前の第一樂句と好い對照をなして居る。



展開部に現はるゝ物凄い響はアドラールの妹エンマの亡靈を叙述する時の音樂であるが、この悲しい挿句の續きとして主樂句までが陰鬱な變化を受ける。



この樂句が苦悶するやうな音形

を含んだ劇的な展開部に於て漸次に以前の光輝を恢復し、最後は勢よく曲を結ぶ。

■音樂學校の大演奏會

東京音樂學校春季音樂大演奏會は七日午後二時より同校奏樂堂に於て催された集つた（ママ）、聽衆約五百堂内滿員の盛況であるチヤイコフスキー作曲の悲壯なるロ短調交響曲の管絃樂が合奏されつゞいて中田章氏オルガン伴奏にて女聲三部の合唱ありペツツオールド夫人の上高音獨唱は試に結構『森の對話』『絲取るマルガレツト』（ママ）は美しく獨唱され『アテンの廢趾』合唱ありて最後にヴエーベル作の歌劇『オイリアンテ』の序曲はグスターフ、クローン氏の指揮にて合奏され午後五時半閉會した

（『音樂と蓄音機』第八巻第五号、大正十年五月、一〇二頁）

大正十年六月一日―三日　演奏旅行

■六月一日濱松、二日に大阪、三日に京都で東京音樂學校の管絃合唱團大演奏會といふものがあつた。

（『音樂』學友會、第十二巻第七号、大正十年七月、二九頁）

東京音樂學校
管絃合唱團大演奏會
管絃團五十名・合唱團百餘名
六月二日　晝夜二回　於　大阪中央公會堂
主催　大阪市教育會　後援　大阪朝日新聞社

曲　目

一、管絃樂
悲壯なるロ短調交響曲（作品七四第六番）……チヤイコフスキー作曲
二、混聲合唱（無伴奏）
い、春のめざめ（作品一二〇）……スポール作曲／青木存義作歌
ろ、春の知らせ（作品四八第一番）／は、鶯（作品五九第四番）……メンデルスゾーン作曲
三、管絃樂附ピアノ……小倉末子氏
ハ短調競奏曲（作品三七第三番）……ベートーヴエン作曲

休　憩　十　分　間

四、混聲合唱（無伴奏）
い、靜けき夕べ（作品一）……グラーベルト作曲／大須賀績作歌
ろ、愉快なる五月……ブラームス作曲
五、上高音獨唱（管絃樂伴奏）……武岡鶴代氏
歌劇「フライシユツツ」中のアガーテの抒情調……ヴエーベル作曲
六、管絃樂及合唱
「アテンの廢址」中の進行曲及合唱（作品一一四）
……ベートーヴエン作曲

七、管絃樂

歌劇「オイリアンテ」の序曲 ……ヴエーベル作曲

（『大阪朝日新聞』大正十年五月二十八日）

大阪中央公會堂に於て（晝）午後一時（夜）午後七時 開演 主催 大阪市教育會

愈明二日 東京音樂學校管絃合唱團大演奏會

管絃團五十名 合唱團百餘名 會費 特等七圓 一等五圓 二等三圓 三等一圓 後援 大阪朝日新聞社

（『大阪朝日新聞』大正十年六月二日〔一日夕刊〕）

期待さるゝ今日の大演奏

樂界空前の華やかさ

一行百八十名今朝着阪

新音樂愛慕の人々に多大の期待を以て迎へられつゝある本社後援東京音樂學校管絃合唱大演奏會は愈（いよく）今日！午後二時と午後七時の二回に亙（わた）つて開かれる、同合唱管絃團は樂界の新進百八十名より成る最高權威の大樂團でその演奏曲目はベートーヴエン、ヴエーベル、チヤイコフスキー、メンデルスゾーン、ブラームス等樂聖不朽の名曲を集めてゐる、曲目第一の管絃樂「悲愴交響曲」は

絶望の極み　自殺をしたとまで世に傳へられた哀愁詩人チヤイコフスキーが作曲しながら樂譜の上に涙の寶玉を綴つたと云う哀愁曲——遣る方なき人生の惱を表した憂鬱な曲で大阪では未だ嘗て試みられたことのない大曲である、管絃樂では此の外に佛蘭西（フランス）王ルイ六世の寵臣とオイリアンテ姫に絡まる戀の哀歡を織り込んだ「オイリアンテ」の序曲（ウエーベル作曲）の外祝祭曲中最も華やかな曲として崇高な調子に充たベートーヴエンの「アテンの廢址」を演奏する、是は管絃團の外合唱團を加へた百八人の大演奏で斯くも多くの若い華やかな樂人が一齊にステーヂに立つ壯觀は斷じて見られない、此の外小倉末子（をくらすゑこ）女史の彈奏ベートーヴエンのハ短調競奏曲は美しい旋律　と諧調に富んだ清新なもの、ベートーヴエン彈奏の第一人者と云はるゝ小倉女史の管絃樂附ピアノの彈奏は必ずや聽衆の心を無限の陶醉に導くに違ひない、尙ほ此の外最も期待されるのを武岡鶴代（たけをかつるよ）女史の獨唱自由射手（ウエーベル作曲）である、これは古い傳說に材を採つた幻想的（ファンタスチック）な曲で愛人の勝利を祈る可憐の少女アガーテの歌ふ戀の祈りと感謝の歌は清純な武岡女史の歌ひ振りによつて遺憾なく聽衆の心を魅了するであらう、この空前の大演奏、それは愈今日午後二時から開かれるのだ

一行今朝着阪　本演奏會に出演する管絃合唱團百八十餘名は二日朝七時着阪、大阪驛前の旅館金龍館と紅葉館に休憩午後二時から打揃つて演奏會に出ることになつてゐる

（『大阪朝日新聞』大正十年六月二日）

肉聲の美と器樂の妙

名曲の妙味を遺憾なく發揮して恣（ほしいまゝ）に滿堂を魅了す

樂音に醉う聽衆六千

本社後援 東京音樂學校大演奏會【晝の部】

滿都の音樂愛好者から殆んど熱狂的な歡びを以て迎へられた大感激の日、その數實に百八十餘名より成る東京音樂學校管絃樂合唱團の市敎育會主催本社後援の大演奏會の日は來た正に關西方面に於ける殆ど空前の壯擧、正午先づ會場中央公會堂の鐵扉が開かれた、その晝の部の始まるや須臾（しゆゆ）にして會場は數千の聽衆に埋め盡され立錐の餘地なく、大指揮者クローン氏指揮棒一振忽ち現出する壯嚴なる大音樂境裡に魅し去られて唯感激の渦中に浸されて了（しま）つた。

晴れの舞臺（ステーヂ）へ一行の來阪

その日演奏に先立つて夜來の雨降りしきる早朝、大阪驛前には珍らしい光景を見た、卽ち午前七時五分梅田着の列車によつて西下團員の諸氏先づ風采堂々たる指揮者グスタフ・クローン氏を筆頭に快活な小倉末子女史、武岡鶴代女史等を始め樂團に重きをなす音樂學校敎授連のこの土地に珍ら

しい夥しい藝術家の群が驛頭を賑すのを見たのである、到着の諸氏は何れも手に手に樂器を携へつゝ何れも音樂家らしい瀟洒とした姿に今日を晴れの演奏を樂しむかの如な一味の緊張感と微笑をその面に漂はせつつ親しげに降り立つ後を受けて更に七時二十三分の列車には補助者たる男性的な規律正しい海軍軍樂隊員の一團、更に打ち續いて團員の大部分をなす男女學生の大集う皆欣びに滿ちた元氣を見せつゝ打ち續いて降り立ち、何れもその場の記念の撮影をなして或は知人等に迎へられつゝ夫々定めの大阪ホテル、金龍館、紅葉館等の宿へと向つた

唯氣早な男學生の一行は直ちに猶準備に忙しい會場公會堂へと向ひ徐次に飾られ行く晴れの舞臺にも心時めかす如に囁き交しながらその會場をさまよふのであつた

感激に胸躍らせつゝ殺到する凄じき大衆

正午前、思ふだに心昂ぶる大演奏會の歡びの扉——會場中央公會堂の嚴めしい鐵扉は心地良くも開かれた、朝來の雨快くも晴れ上り既に裝ひ成つた公會堂の內外は華美な裝飾を避けて飽く迄清楚に、この記念すべき眞摯なるべき大演奏會に適はしく寧ろ爽快な、而して嚴肅な氣分さへ感じられた、午前九時といふに早くも會場目指して集まり來つて數刻を待ちわびた十數名を始めとして樂しくも尊き感激の期待に胸躍らせつゝ大玄關へと集まり來つた群衆は凄じい許りの勢ひで開扉と共に入場し、忽ちにして聖堂の如くに靜肅だつた會場內も華かな婦人令孃、紳士、學生を始め凡ての階級の音樂愛好者等に依つて埋められ、彼處此處に起る歡ばしげなさゞめきに滿たされた、數分、數十分その勢は益凄じい位にまして團體として乘り込み來る

奈良女高師三百、神戸高女の二百五十名、樟蔭高女二百名、堺高女五十名、大阪女子師範生二百名を始め

其他各種女學校及び中等校專門學校の各團體の踵を接して來場し、瞬間にして眞に立錐の餘地なくその數實に五千、尙後を追うて來る人波の列絕えず言語に絕した盛況を呈した

時は進む、人々の興奮は益昂まつてゆく、殊に百八十餘名の大集團の立つ爲にと擴げられてステージの前に美々しくも並べられた樂夕會、樂友會を始め三木、上金、今井、岡本の諸樂器店や一愛讀者の名に隱れた某女史の花環の數々にも一際その晴れやかな氣分は誘はれて人々の面には一樣に美しい期待の瞳が輝く——

大演奏は開かれた
心躍るその華やかさよ

時は來た、午後二時、會は遂に始められた、先づ主催者代表として福士大阪市教育部長は

社會生活が繁雜になるに伴つて私達の感情は硬化し且つ荒み勝ちであります、音樂は時間と空間とを超越し凡ゆる雜念を拂拭して感情を和げます、從つて音樂趣味の普及は私達の生活に最も緊切な問題であります

と開會の挨拶を述べ次いで後援者代表として上野本社專務は

本會の開催によつて關西の地に音樂學校を創設し尙大音樂堂建設の機運を促すことが出來たのは歡びに堪へません

と挨拶を述べたやがて舞臺に現はれた卽ち百二十名の男女合唱團と六十餘名の管絃樂員とは壇上に現はれた、聽衆は一時に熱狂したかの如く嵐の如な拍手を送つた、やがて時を見て、一揖輕き大指揮者グスターフ・クローン氏の指揮棒一揮、曲目第一、偉大なるチヤイコフスキイの名曲「悲哀交響曲」は開始せられた、靜かに群がり起る數あまたの妙じき器樂の音に美しく深い合唱團の肉聲とは渾然として溶け合つて、流るゝが如く咽ぶが如く狂ふが如く莊嚴に靜艶に唯水を打つたる如き聽衆の上に響き渡つてゆく

（『大阪朝日新聞』大正十年六月三日〔二日夕刊〕）

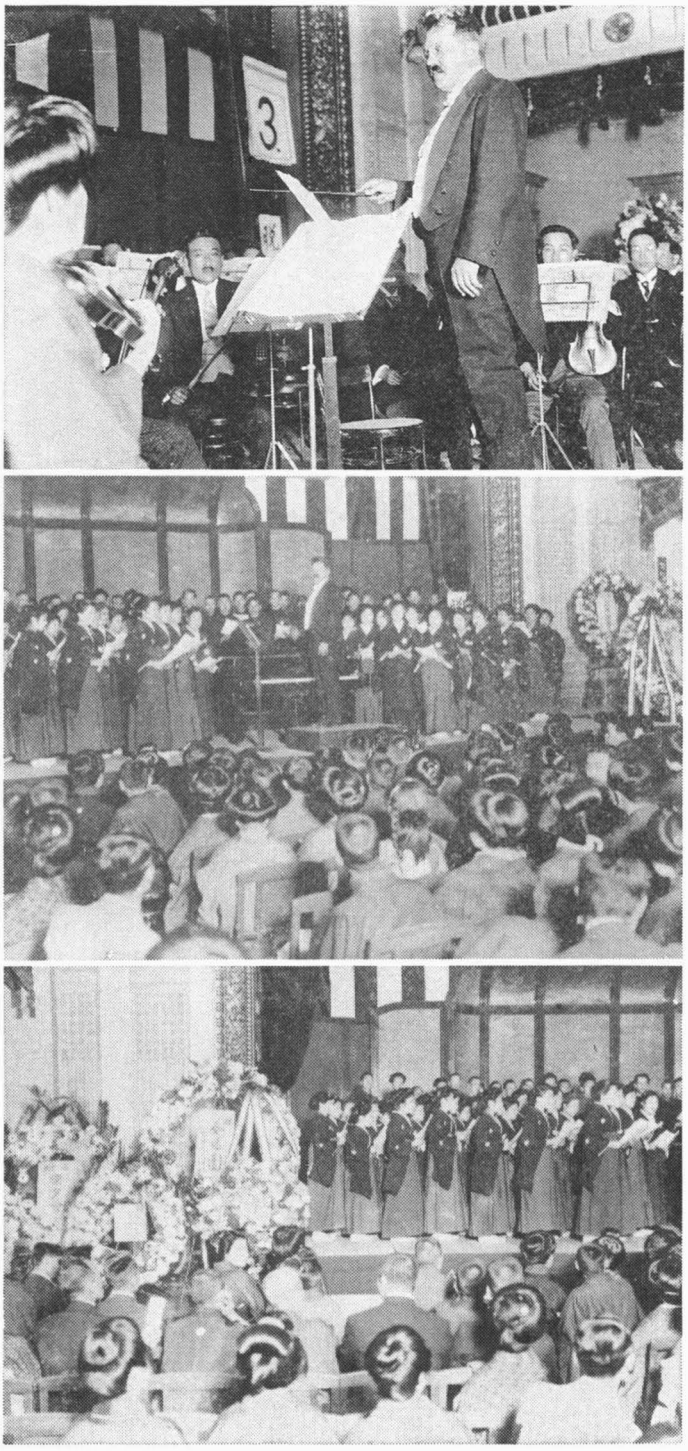
美しき魅惑の世界に時の移るを知らぬ凄じい聽衆の群
夜も空前の大盛況

本社後援　東京音樂學校大演奏會

二日午後二時先づチヤイコフスキイの名曲「悲哀」交響樂によつてその序幕を切つて落された市教育會主催本社後援管絃合唱團の大演奏會はその悉くの名曲揃ひに同團の飽くまで眞摯なその態度と練達した妙技は一曲毎に感動を深めつゝ聽衆は唯醉へるが如く曲の終る度に夢幻裡から目覺めた人の如く急霰の如き喝采を送るのみで、時の移るを知らざるがやうであつた晝の部終つて名殘惜しげに立ち去る人々と入り交つて、夜の聽衆は更に潮の如く、再び新しき感激の演奏は續けられた目にも鮮かなクローン氏の指揮振りに導かれて現じ來る魔神の如にも魅力強い至妙樂音の世界——曲はチヤイコフスキイからベートーヴエン、ブラームス、スポール、メンデスゾルーン等の

名曲を追うて　進みゆくまゝに、未だ細な趣味にのみ踞蹐し易い日本人に未だ聞かれない莊大な複雜な西歐大天才の豐富な感情と才能の妙とは滿場の人々の胸に強く深く響き入つて唯恍惚たらしめるのであつた、百二十餘名の渾然として豐かな混聲合唱の唄の數々又織巧雄勁なピアノ名手小倉女史の難曲ベートーヴエンハ短調競奏曲に管絃樂の伴奏を以て自由な理解力と目も鮮かな

技巧の冴えに　人々の亢奮は又昂まり、更に混聲合唱のグラーベルトの各品から名聲高いブラームス「五月の歡樂」の味盡きぬ小曲に次いで豐麗なる肉聲の持主武岡鶴代女史の上高音獨唱歌劇「フライシュツツ」中のアガーテの抒情調に至つて聽衆の感動は高潮に達したるかの感さへあつた、そして物凄いやうな拍手は屢湧くが如くに起つた



大正10年6月2日，大阪中央公会堂にて演奏する東京音楽学校管弦楽団および合唱団。上の写真は指揮者G．クローン氏

更に管絃合唱　のベートーヴエンの大曲「アテンの廢趾」の進行曲及合唱から是亦右に比すべき管絃樂團の奏する歌劇「オイリアンテ」の序曲へと人々の感激はその深まり行く所を知らざるが如く遂に最後の時は來つてクローン氏が靜かに壇上に輕い會釋をなし曲目全部の演奏を終つたが唯狂せるが如き拍手の渦巻は長く長く場内を振はして聽衆は猶立ち去るのを忘れた如くであつた、かくて午後四時半偉大なる記念の第一回の演奏會の幕は靜かに閉された

華やかな夜の灯影に狂せる如き拍手の渦巻

午後七時から再び第二回夜の部が開始されるので名殘り惜しげに立ち去り行く人々と入れ替りに夕暮時の場外にいつか雲集し來つた夜の聽衆の群はまた見ぬ世界の憧憬にその胸を時めかしつゝ早くも場内に入らんと焦る有様は更に夜の大演奏會の盛んさを語るものであつた、軈て午後五時半再び公會堂の扉は開かれて、新しい感激に醉ひ得る幸福な人を迎へ入れたのであつたが又復團體として醫大の二百名、寶塚少女歌劇の二百名を始め、場内は見る〳〵一瞬の中に滿され盡し燦めく華かな燈の色と夜の氣分は場内の空氣を更に濃かならした、午後七時本社村山長聖氏の挨拶があつた後クローン氏の颯爽たる姿は壇上に現はれ百八十餘名の團員亦晝に倍する潑溂たる元氣を見せてステーヂに立つや早くも滿場の好樂者等の目は輝きに燃えて、又もや新しき魅惑の世界は現出され行くのであつた、斯くして晝と同じ曲目は演奏し續けられたが歡喜の時間は夢のやうにも早く過ぎて午後九時四十分夜の部又大成功裡に晴れの演奏は終り歸り行く人々の群には口毎にその夜の幸福な記憶と印象とが繰返された

寄贈の花環花束　樂團指揮者クローン教授、小倉末子、武岡鶴代兩女史に贈られた花環と花束は左の通り樂夕會、ピアノ同好會、清樂會、樂友會を始め三木、上金、今井、岡本の諸樂器店その他一愛讀者の名に隱れた某女史

感　謝

大演奏會が非常な盛會を見ましたことは後援者たる本社の欣幸とする所であります、滿員のため所定の席に着くことの出來なかつた會員諸氏に對してお詫び申上げます

（『大阪朝日新聞』大正十年六月三日）

大正十年六月十八日、十九日　学友会春季演奏会

■六月十八、十九の兩日午後二時より學友會春季大演奏會があつた。曲目は左の通である。

一、合唱　　會員
甲、アドラマス……パレストゥリーナ
乙、花のゆめ……イエンゼン
二、高音獨唱　　石橋房子
歌劇『ミニョン』中の抒情調……トーマ
（君知り給ふや彼の國を?）
三、ヴイオリン獨奏　　桂平太
小競奏曲、第二樂章、作品三十一……ハンス ジット
四、上高音獨唱　　鈴木稻子
歌劇『自由射手』中のエーンヒェンの華想曲…エーバー
五、ギオロンチェルロ獨奏　　高勇吉
甲、夜の曲、第三……フランツ リスト
乙　匈牙利狂想曲、作品六十八……ポッパー
六、絃樂　　會員
神聖なる踊と冒瀆の踊……デビュシー
七、合唱　　會員
夜の曲……ヘルツォーゲンベルク
八、管絃樂　　會員

藝術家の生涯……シトラウス
九、保音獨唱　伊藤祐司
甲、歌の翼……ハーン
乙、歌劇『マノン』中の歌……レオンカヴルロ
十、洋琴獨奏　金子眞佐子
ト短調競奏曲、作品五十八……モシェレス
十一、保音獨唱　梁田貞
歌劇『亞非利加の女』中のおゝ天つ御國よ……マイエルベール
十二、合唱及獨唱（管絃伴奏）　會員
流浪の民の生活……シューマン

（『音樂』學友會、第十二巻第七号、大正十年七月、二九頁）

大正十年十月八日　学友会第三十一回土曜演奏会

■十月八日第卅一回土曜演奏會を擧行せり。

一、合唱　會員
イ、眠れ安らに……キルフル
ロ、懷郷……スクラカムプ
二、風琴獨奏　川井順子
小歌曲……ギルマン
三、高音獨唱　宮田八重子
歌劇『オルフェオ』中われエウリディーチェを失ひぬ……グルック
四、洋琴獨奏　服部登和
奏鳴曲　第一樂章、變奏を有する併歩調……ベートーエン
五、上高音獨唱　早川みな
歌劇『シギリアの床屋』中ロジナの歌……ロッシーニ
六、洋琴獨奏　志村房子
イ、糸とり歌……ワグナアーリスト
ロ、春に寄す……グリーク
七、高音獨唱　西川はま子
歌劇『豫言者』中の『あゝ吾が子よ』……マイエルベール
八、洋琴獨奏　松野ヨシエ
狂想旋轉曲、作品十四……メンデルスゾーン
九、低音獨唱　阿部英雄
二人の擲弾兵、作品四十九ノ一……シューマン
十、ヴイオリン獨奏　高階哲應
前奏曲と六つの變奏曲、われは少年鼓手の主題……ダギド
十一、合唱　會員
イ、アヹ　マリア……アルカデルト
ロ、琴の音……メンデルスゾーン

（『音樂』學友會、第十二巻第十一号、大正十年十一月、二一頁）

大正十年十月二十九日　邦楽演奏会

曲目

一舞樂　左舞　太平樂
右舞　崑崙八仙
二催馬樂　更衣

三　朗詠　暁梁王
四　今様　蓬萊山
五　平曲　小督
六　宴曲　秋望月
七　能樂

大正十年十一月二十日　邦楽会第二十三回演奏会

曲目

一、筑前琵琶　舟辨慶
二、一中節　傾城淺間嶽
三、箏曲　(甲)秋の調　(乙)落葉のをどり
四、常磐津節　其扇屋浮名繋風(夕ぎり)
五、歌澤節　(甲)宇治茶　(乙)鶴舞うて
六、清元節　彌生の花淺草祭(三社祭)

大正十年十一月二十六日、二十七日　第四十一回定期演奏会

一、セロ及ピアノ合奏……
{セロ　ハインリヒ・ヴェルクマイスター
{ピアノ　パウル・ショルツ
ホ短調ソナタ(作品三八、第一番)……ブラームス作曲
Cellosonate (E Moll, Op. 38, Nr. 1) ……Brahms.
Allegro non troppo.
Allegretto quasi menuetto.
Allegro.

二、上高音獨唱……長坂好子
い、ピンチョ山より(作品三九、第一番)……グリーク作曲
Vom Monte Pincio (Op. 39, Nr. 1)……Grieg.
ろ、汝は花の如し……リスト作曲
Du bist wie eine Blume……Liszt.
は、夕の歌(作品一〇六、第一番)……ブラームス作曲
Ständchen (Op. 106, Nr. 1)……Brahms.

三、ピアノ聯奏……{川上清子 {パウル・ショルツ
ベートーヴェンの主想を基とせる變奏曲及逃走曲(作品八六)
……レーガー作曲
Variationen und Fuge über ein Thema von Beethoven für 2 Klaviere (Op. 86)……Reger.

休憩十分間

四、セロ獨奏……ハインリヒ・ヴェルクマイスター
い、ロ短調競奏曲のアダージョ(作品一〇四)
……デゥヴォルシャーク作曲
Adagio aus dem Konzert (H Moll. Op. 104) ……Dvorák.
ろ、練習曲「噴水の傍に」……ダヴィドッフ作曲
Konzert Etude „Am Springbrunne“……Davidoff.

五、ピアノ、ヴァイオリン及セロ合奏……
{ピアノ　パウル・ショルツ
{ヴァイオリン　安藤幸子
{セロ　ハインリヒ・ヴェルクマイスター
悲壮なるニ短調三重奏(作品九)……ラッハマニノッフ作曲
Trio élégiaque für Klavier, Violine und Cello (D Moll, Op. 9) ……Rachmaninoff.
Moderato.

Andante (quasi variazione)
Allegro risoluto.

音樂演奏曲目梗概　第三十

一、セロ及ピアノ合奏

ホ短調ソナタ　　ブラームス作

ブラームス（Johannes Brahms 1833-1897）は十九世紀の後半に於て古いベートーヴェンの古典的作風を傳承した獨逸の大家で、彼の曲の特徴は精緻に整へられた形式の裡に沈靜な感情を含めた點である。一八六六年に出した本曲は彼の作つた今一つのセロ、ソナタ（ヘ長調）と共に此の樂器の特長を巧みに利用した點に於て比類の少い作である。此曲にはセロの朗かな稍重々しい音調で歌ひ得ないふしは一つも無い。此の曲にはセロが技巧的に最高の位置を奏することがなく、しかも單調に陷ることもない。全曲を通じて樂器は氣高い男性的の音色を維持して常にピアノに對して主位を占めて居る。初の兩章（即ち『過度ならざる快速曲及びシューベルトの調を想ひ出させる『メヌエット』曲）は共に分り易い透明な作法に據つて居るが、最後の『快速曲』は極めて込み入つた作曲の技巧を用ひて、演奏者にも最高の手腕を要求して居る。

二、上高音獨奏

（い）　ピンチヨ山より　　グリーク作

諾威の最大國民樂家なるグリーク（Edvard Grieg 1843-1907）は交響曲（シンフォニー）や歌劇のやうな大曲を作らなかつたが、器樂や聲樂の抒情的小曲に於て祖國の色彩を發輝（ママ）した極めて詩趣に富んだ名作を出した。彼は熱心な詩の愛誦者であつて、作曲する時にも詩意に忠實であつた。本演奏の曲なども彼の詩を重んずる作風を示す好例である。これは一八七〇年の作で、同國の文豪ビョルンソンの詩に基て居る。――（一）『夕べの靜けさよ、日の赤さよ、物皆な色づける光に充ち、日影を浴みて凡てかゞやき、山は死せる面輪のごとくに澄む。霞立つをちかたに丸屋根ひかり、青黑き霧は野を繞りて、忘却の近づく如くに近づき、千とせ古りたる衣を織りなす。――物皆赤く溫く燃ゆ、夕榮も人の群も物皆燃ゆ、角笛（つのぶえ）の調べ、花の香、熱き瞳。光にかこまれ響にかこまれ、物皆なあこがれつゝ融和を求む。（二）靜けさまさりて空くれ行けば、薄るゝ往時の姿より、開くる未來を沈みたる灰色のなかに天は見る。さはいへ何時（いつ）か光明は、ローマをさまし、伊太利の夜を照さん。ほづゝの轟、警鐘の音、往時は再び燃え立たん――響けほぎ歌、手琴、笛のね。時の卷物より、信ずる人に心ののぞみを告げ知らせよ。イタリアのあこがれは理想を夢みて、やさしき心は再び目さめん。』――序開きの四小節の和音が夕ぐれの氣分を見事に表はして居るのを初めとして曲全體が詩の一行一句に注意して作られて居る。例へば『山は死せる面輪の如くに』の一節に於て樂趣が急に陰鬱になるあたりや『角笛の調べ』の一語に於て美妙な調をきかせるなど凡てリスト式の精緻な作風に似て居る。

Vom Monte Pincio

I.

Abend wie milde! Sonne wie roth!
Alles erfüllt sich mit farbigem Glanze,
Schwelgend im Lichte verklärt sich das Ganze,
Klärt sich der Berg wie ein Antlitz im Tod.
Kuppeln in duftiger Ferne erglühen,
Blauschwarze Nebel die Felder umziehen,
Wallen einher wie Vergessenheit wallt,
Weben ein Kleid das Jahrtausende alt
Alles glüht roth und warm,
Abendschein, Volksschwarm;
Alles glüht: Hornmusik
Blumenduft, heisser Blick.
Alles begehrt, rings umstrahlt und umtönet,
Sehnlich nach dem, was versöhnet.
Alles glüht roth und warm,
Abendschein, Volksschwarm;
Alles glüht: Hornmusik,

Blumenduft, heisser Blick.

II.

Stiller nun wird es, es dunkelt das Blau,
Und aus der dämmernden Vorzeit Gestalten
Sieht sich der Himmel die Zukunft entfalten,
Unsicher schimmernd in brütendem Grau.
Doch, eine Leuchte, wird Roma erstarken,
Hellen die Nacht von Italiens Marken;
Glockengeläute, Kanonengedröhn!
Flammend wird wieder die Vorzeit ersteh'n.
Töne denn, Hochzeitsang,
Zitherspiel, Flötenklang!
Gib von der Zeiten Bund
Gläubigen Herzenskund'!
Sehnsucht Italiens träumet vom Ziele,
Wach werden sanft're Gefühle.
Töne denn, Hochzeitsang,
Zitherspiel, Flötenklang!
Töne denn, Hochzeitsang,
Zitherspiel, Flötenklang!

（ろ）汝は花の如し　　リスト作

匈牙利の名家リスト（Franz Liszt 1811–1886）の創作の重心は管絃樂やピアノ樂の方面に在るが、小歌にも名作が少くない彼の"小歌"の作風は詩と樂との一致に關するワグネルの理論を極點まで應用したもので、詩の一言半句をも忽にせず、一々之に應ずる旋律や和聲を附けるといふ仕方である。此の主義から生れた彼の歌曲が悉く秀逸といふわけではないが、本演奏の曲や其他の數篇の如きは實に後の作者の模範となつたのである。

――『なれは花のごとく、愛らしく美しく清し。なれを見れば悲しさの、わが胸に忍び入る。なれが頭に手をのべて、神いつまでもなれをかく、清く美しく愛らしく、あらせたまへと祈らまし』（ハイネ）

Du bist wie eine Blume

Du bist wie eine Blume,
So hold und schön und rein,
Ich schau dich an und Wehmuth
Schleicht mir ins Herz hinein.
Mir ist als ob ich die Hände
Auf's Haupt dir legen sollt',
Betend, dass dich Gott erhalte
So rein und schön und hold.

（は）夕の歌　　ブラームス作

ブラームスの晩年圓熟期の小歌中に屬する本曲は婉柔な旋律と快いギター風の伴奏によつて何人にも賞美せられて居る。『月の影丘の上にかゝりて、愛する人に好き時、園には湧きいづる泉のほか、あたり一面のしづけさ。垣のほとりの物かげに、立つは三たりの學生。笛と胡弓と手琴をもちて、歌ひながらにかなづ。その調べ、うつくしき人の、夢にしづかに忍び入れば、うるはしき愛人を見やりつゝかの人はさゝやく『我を忘るな』と。

Ständchen

Der Mond steht über dem Berge,
So recht für verliebte Leut';
Im Garten rieselt ein Brunnen,
Sonst Stille weit und breit.
Neben der Mauer im Schatten,
Da steh'n der Studenten drei,
Mit Flöt' und Geig' und Zither.
Und singen und spielen dabei,
(singen und spielen dabei),
Die Klänge schleichen der Schönsten
Sacht in den Traum hinein,
Sie schaut den blonden Geliebten
Und lispelt: „vergiss nicht mein!"

三、ピアノ聯奏

變奏曲及逃走曲　　レーゲル作

數年前世を去つたレーゲル（Max Reger 1873–1916）は現代のバッハ或は晩年のベートヴェンの完成者、或はブラームスの王冠の繼承者、或はシトラウスと桂冠を爭う人などゝ色々な讃辭を受けた人で、（勿論反對者もあるが）最近獨逸の最も天才的な作家である。演奏者としても彼は驚くほど分化した詩的なピアノの奏法によつて樂界の嘆賞を博した。彼はリーマンから理論を學んだが、獨創力に富める彼の作品は曲の構成や和聲の用法に於て先人に見られない最も自由な近代的特徴を發揮して居る。彼が最も成功した曲はバッハ、ベートーヴェンなどの原作に基礎を置いた作品で、即ち本演奏の曲の如きものである。この曲はベートーヴェンのバガテル（ピアノの小曲）の調を主想として作つた氏一流の變奏曲（ヴァリエーション）及逃走曲（フーガ）である。

四、セロ獨奏

（い）ロ短調競奏曲中の緩徐曲（アダージョ）　　デウヴォルシャック作

デウヴォルシャック（Antonin Dvořák 1841–1904）はボヘミア國民樂の最も優れた代表者で、グリークの諾威に於けると同樣に、祖國の珍らしい節奏（リズム）や旋律を世界に紹介した。五十歳を超えてから、遠くニューヨークの音樂院長として赴任したが、此處では名作『新世界交響曲』によつて黑人の音樂の美を世人に知らしめた。三年の後祖國に歸つてからは再びプラーグ音樂院に教鞭を執りながら、更に多くの新作を加へた。本演奏の曲は其頃（一八九六年）に出した彼の唯一のセロ競奏曲（コンセルト）中の緩徐曲である。樂想は莊重でボヘミア風である。

（ろ）練習曲『噴水の傍に』　　ダヴィドッフ（Karl Davidoff 1838–1889）は著明な露國のセロの演奏家で、ライプチッヒ音樂院の教師をした後、ペトログラードで帝室管絃部の獨奏者及び音樂院の教師となり。最後には同樂院の長にもなつた。本曲は彼の作つた多くのセロ獨奏の小曲中最も廣く流行したものである。樂趣は輕快で迸る泉の點滴飛沫を目に見るやうである。

五、ピアノ、ヴァイオリン及びセロ合奏

悲壯なるニ短調三重奏　　ラハマニノッフ作

ラハマニノッフ（Sergius Rachmaninoff 1873——）はチャイコフスキの流を酌んだ現代ロシアの大家である。ペトログラード及びモスコーの音樂院に學び、一八九二年に作曲によつて金牌を受けてから、直ちにピアニストとして旅行を試み、歸つてから自作を出し始めた。彼の作には管絃樂其他もあるが、自分の得意とするピアノに關する曲が多い。合奏樂の作者として名を得たのは一八九四年に出した本演奏の三重奏（トリオ）からであるが、これもピアノが主位を占めて居る。『悲壯』といふ標題はチャイコフスキの逝去（一八九三年）を紀念する爲めに書いたからで、曲の形式は嚮にチャイコフスキがニコラス、ルービンシタインを紀念する爲めに書いた曲に悉く倣つて作られて居る。即ち最初中庸の速度から始まつて次の部分は變奏曲の體に作られ、最後の快速曲に於て第一部分の主想に反るのである。

大正十年十二月三日、四日　学友会秋季演奏会

■十二月三、四兩日午後一時より東京音樂學校奏樂堂に於て學友會秋季音樂演奏大會を開きたり。曲目左の如し、

一、女聲合唱、獨唱付、獨唱、曾我部靜子　會員
舞踏歌……ワインチール

二、洋琴　第一ピアノ　倉辻明毅
第二ピアノ　高折宮次
ニ長調競奏曲、（全曲）……ハイドゥン

三、深音獨唱　中山貞一郎
甲、音樂のために作品十ノ一……フランツ
乙、アヹ　マリア……シューバート

四、ヴイオリン　吉田周

ト長調競奏曲、作品二十三、第一樂章……ギオッティ
五、上高音獨唱　多川遊龜
歌劇『ルチア』中の抒情調……ドニツェッティ
六、洋琴　第一ピアノ　中山文
第二ピアノ　ショルツ教師
ニ短調競奏曲、第一樂章……モーツァルト
七、男聲合唱　會員
甲、小鳥……ア・クレッチュマール
乙、舟乘の唄……ヴークナー
八、高音獨唱　曾我部靜子
甲、永遠の愛、作品四十三の一……ブラームス
乙、さすらひ人作品四の一……シューバート
九、洋琴　第一ピアノ　山形まり子
第二ピアノ　ショルツ教師
ニ長調競奏曲、第一樂章……モーツァルト
十、上高音獨唱　荻野綾
おさよ（島崎藤村詩）……弘田龍太郎
十一、ヂオロンチェルロ獨奏……高勇吉
イ短調競奏曲、作品十四……ダヂドフ
十二、混聲合唱、獨唱、宮田八重、會員
歌劇『ローレライ』第一幕終曲……メンデルスゾーン

（『音樂』學友會、第十二卷第九号、大正十年九月、二九頁）

大正十年の概評

■昨十年度樂界の最終の幕は、豫想よりも活氣あるものであつた。音樂學校の秋季演奏會はクローン氏不在のために、管絃樂の代りに主として室樂が演奏されることになり、ショルツ、安藤幸、ゼルクマイスター三氏に依つてされた、ラハマニノフの比類無き三重奏を聽く事が出來た。此三重奏の如きは決して管絃樂の平凡なる演奏に勝る事は幾段であつたか知れないものである。ゼルクマイスター氏のチェルロも感銘の深いものであつた。氏の徒らに低級な感傷に陷らない、高雅の演奏は當分あれで聽く事は出來ないであらう。氏は近く歸獨されるとの噂がある。次に記憶すべきは榊原、多、平井三氏の三重奏演奏會である。三氏が不斷の研究を怠らず、孜々として力めて息まない態度は推賞に値する。今新らしき歲を迎へようとするに當り、吾人の第一に念願とする處はすべて我樂界に活動される人の上に、美神の殊寵の豐ならん事であるが、殊に是等の諸氏の健康と清福とを祈らざるを得ない。

（『音樂』學友會、第十三卷第一号、大正十一年一月、三四頁）

本年樂界の回顧

〔上〕

兼常清佐

空想は常に美しく且つ自由である。一年を殆ど空想の裡に送る人が偶々現實を顧みて其の思つた程に美しくもなく自由でもない事を責めるならば、其れは責める者が寧ろ愚である。私の玆に言ふ處も亦た極めて愚なものであらう。然し私は其の愚を敢て恥とせぬ。

私は言ふまでもなく日本の樂界での最大の期待を音樂學校にかける。經濟の確實さと技術家の數とに於て現今の日本の音樂組織の中で勿論其右に出づる團体は一つもない。此處こそ正しく音樂藝術の府であるべき筈である。其の演奏こそ正に日本での最高最美のものであるべき筈である。從て其處に未だ獨立の管絃樂團さへもないことと、一クローン氏の不在が今秋の大演奏會の曲目からあらゆる管絃樂曲を除かせたと言ふ事とは私を甚だしく失望させた。そして私にはそれは主として伊佛の歌劇を上演した露國歌劇團位では決して贖はれなかつた。

音樂學校は國立である。其の當事者はたゞ一途に上官の監督の下に汲々

として働いてゐる積りであらう。然し其の老上官諸君が國民の爲めに眞に音樂其の物をまで監督して呉れてゐるか否かに就ては恐く誰も若干の疑を抱かない譯には行くまいと思ふ。先ず老上官諸君の中でレクラムの音樂書位の知識は措くとしても、單に樂譜を明確に讀み得る人が果して幾人あるであらう。現に近年まで、此の老官諸君には音樂と言へば酒宴の餘興以上には思はれてゐなかつた。それで帝國大學の構内では、其の音樂は法規を以つて禁止されてゐた。獨逸の大學ではリーマンが堂々と其の音樂論を講じてゐた時には、日本の大學では學生は蓄音器を鳴す事さへも容易には許されなかつた。事情は明に此の通りである。若し今音樂學校が例へばヨハン・シュトラウスの樣なものばかりやつてゐたとしても、現今の老上官諸君は決して其れに對しては何とも言はないであらう。其れは現今の事情では決して無理もない事である。然し其れでは音樂學校は幾百年を經ても遂に藝術の府とはならぬ。藝術には理想がいる。理想に憬れて止まぬ熱情がいる。若し音樂學校が日本の文化のうへに何等かの意味を持つつもりならば、其の理想と熱誠を老上官諸君よりもまづ私共若い國民の前に示して貰ひたい。私共は今直に音樂學校でマーレルやシュトラウスが聞かれやうとは思わぬ。然し些くともベートーヴエンの主なるものを聞かせて貰ひたい。願くば其の『第九』と『メツセ』とを聞かせて貰ひたい。今に至つてなほ音樂學校の技術が此の曲を演奏するに堪えぬと言ふならば其れは此の學校の不名譽である。徒に安を貪つて其の練習を厭うと言ふならば其れは明に此の學校の恥辱である。

私共音樂を愛する若い國民は、日本唯一の此の音樂學校の將來に甚深の注意を拂ふことを怠つてはならぬ。

（『讀賣新聞』大正十年十二月十三日）

大正十一年二月十八日　学友会第三十二回土曜演奏会

■二月十八日午後二時より學友會第三十二回土曜日演奏會を開く曲目左の如し。

一、混聲合唱　會員
（イ）夢……シューマン
（ロ）帆舟……シューマン
二、ピアノフオルテ獨奏　青野賴惠
ハ短調即興曲（作品九十）……シューベルト
三、アルト獨唱　酒井千枝
歌劇「セミラス」中の抒情調……ロッシニ
四、ピアノフオルテ獨奏　喰田比佐子
嬰ヘ短調狂想曲（作品五）……メンデルスゾーン
五、バリトン獨唱　中山貞一郎
（イ）さみしき涙……シューマン
（ロ）蓮の花……シューマン
六、ヴイオリン獨奏　高階哲應
（イ）ロマンス（作品二十六）……ズヴエンゾエン
（ロ）メヌエツト（變ホ長調）……ハイドンーブルメスター
七、ソプラノ獨唱　山田なか
ヴイオリン助奏　渡邊しづ
アヹマリア……グーノー
八、ピアノフオルテ獨奏　大江克子
ラ　ベラ　カプリチオーザ　ポロネーズ
（作品五五）……フムメル
九、アルト獨唱　石橋君
歌劇「ミニヨン」中の抒情調……トーマ
「我は彼女の部屋にあり」

十、ピアノフオルテ　　橘　はや
ハ長調コンツエルト（作品十五）……ベートーベン
十一、混聲合唱　　會員
（イ）森に風吹く……ブラームス
（ロ）古き相聞歌……ブラームス
指揮者　船橋助教授

（『音樂』學友會、第十三卷第三号、大正十一年三月、三〇頁）

大正十一年三月二十五日　卒業式

大正十一年三月二十五日（土曜日）午後一時三十分開始

卒業證書授與式順序

東京音樂學校

一、卒業證書授與
二、校長式辭
三、文部大臣祝辭
四、卒業生總代謝辭

卒業演奏曲目

第一部

一、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　小鹽かつ
サラバンド及快速調（作品四三）……メンデルソーン作曲
二、ソプラノ獨唱……本科聲樂部卒業生　鈴木稻子
歌劇ディノラ中の對影抒情調……マイヤーベーア作曲
三、アルト獨唱……本科聲樂部卒業生　曾我部靜子
歌劇豫言者中のカヴァティナ及〔抒〕情調……マイヤーベーア作曲
四、ヴァイオリン獨奏……本科器樂部卒業生　渡邊シヅ
ホ短調競奏曲（作品一三第八番第一樂章）……ロード作曲
五、バリトン獨唱……本科聲樂部卒業生　中山貞一郎
アヴェマリア（作品五二第六番）……シューベルト作曲

第二部

六、ピアノ獨奏……研究科器樂部修了生　金子眞佐
三二變奏曲……ベートーヴェン作曲
七、ソプラノ獨唱……本科聲樂部卒業生　多川ゆき
歌劇リゴレット中の朗吟調及抒情調……ヴェルディ作曲
八、ヴァイオリン獨奏……本科器樂部卒業生　栗原大治
サラバンド及タンブーラン……ルクレーア作曲
九、アルト獨唱……研究科聲樂部修了生　相澤滿壽
いオー冷しき森よ（作品七二第三番）
ろ永久の愛について（作品四三第一番）……ブラームス作曲
十、ピアノ獨奏……研究科器樂部修了生　和泉千代
嬰ハ短調競奏曲（作品五五第一樂章）……リース作曲
十一、合唱
い幼年時代（ドイツ民謠）……ラデッケ作曲
ろ聖ルチーア（イタリヤ民謠）……モーア編
は愛らしきエーンヒェン（ボヘミヤ民謠）……ユングスト編

Programme.

I. Presentation of Diplomas.
II. Address by the Director.
III. Address by His Excellency Nakabashi, Minister of Education.

IV. Response by the Representative of the Graduating Classes.

PART I.

1. Piano Solo .....Miss K. Oshio.
   Sarabande and Allegro giocoso
   (B Minor, Op. 43) .....Mendelssohn.
2. Soprano Solo .....Miss T. Suzuki.
   Shadow Aria from "Dinorah" .....Meyerbeer.
3. Alto Solo .....Miss S. Sogabe.
   Cavatina and Aria "Prophete" .....Meyerbeer.
4. Violin Solo .....Miss S. Watanabe.
   Concert[o](E Minor, Op. 13, No. 8, Ist Movement)...Rode.
5. Baryton Solo .....Mr. T. Nakayama.
   Ave Maria (Op. 52, No. 6) .....Schubert.

PART II.

6. Piano Solo .....Miss M. Kaneko.
   32 Variations (C Minor) .....Beethoven.
7. Soprano Solo .....Miss Y. Tagawa.
   Recitative and Aria from "Rigoletto" .....Verdi.
8. Violin Solo .....Mr. D. Kurihara.
   Sarabande and Tambourin .....Leclair.
9. Alto Solo .....Miss M. Aizawa.
   a. "O kühler Wald." (Op. 72, No. 3)
   b. Von ewiger Liebe (Op. 43 No. 1) } .....Brahms.
10. Piano Solo .....Miss C. Izumi.
    Concert[o](C Sharp Minor, Op. 55, Ist Movement)...Ries.
11. Choruses:
    a. "Aus der Jugendzeit" (German Folksong)
    Arranged by Mohr.....Radecke.
    b. "Santa Lucia" (Italian Folksong) Arranged by
    c. "Aennchen lieb" (Bohemian Folksong) Jüngst.

大正十一年四月二十三日　邦楽会第二十四回演奏会

曲目

一、一　中節　傾城浅間嶽
二、河東節　助六由縁江戸櫻
三、新内節　若木仇名草
四、箏曲　花の旅
五、常磐津節　薪荷雪間の市川

大正十一年五月十三日、十四日　第四十二回定期演奏会

大正十一年五月十三日土曜日午後二時半開會場

音樂演奏曲目

東京音樂學校

一、管絃樂

變ホ長調交響曲……モツアルト作曲

Symphonie (Es Dur) .....Mozart.
Adagio–Allegro.
Andante.
Menuetto.
Finale–Allegro.

二、管絃樂附ピアノ連奏……〔荻小原倉英一末〕

變ホ長調競奏曲（第一〇番）……モツアルト作曲

Konzert für zwei Klaviere
und Orchester (Es Dur, Nr. 10) .....Mozart.

Allegro.
Andante.
Rondo-Allegro.

三、混聲合唱

い、おー愛らしき五月 } (作品九三) ……ブラームス作曲
ろ、さらば }

O süsser Mai.} (Op. 93) ……Brahms (gest. 3 April 1897)
Fahr woh!}

休憩十分間

四、絃樂

絃樂曲（作品一六）……ジュオン作曲
Streichorchester (Op. 16) ……Juon.
Schlummerlied.
Terzen-Intermezzo.
Tanz.

五、混聲合唱

鷹の歌……ブラームス作曲
Der Falke. ……Brahms.

六、管絃樂

歌劇ニュルンベルグの平民詩人の前奏曲……ヴァグネル作曲
Vorspiel zu „Die Meistersinger von Nürnberg“ ……Wagner.
指揮者グスターブ、クローン

音樂演奏曲目梗概　第三十一

一、管絃樂

變ホ長調交響曲　モツアルト作

モツアルト（W. Mozart 1756-1791）の交響曲は總て四十九曲あるが最も有名なのは最後の作なる三曲で、即ち本演奏の變ホ長調とト短調とハ長調（何れも一七八八年作）である。

變ホ長調の曲は廣く「白鳥の歌」といふ異名で通つて居るが、然し全曲を通じて最も快活喜悦の感情を表して居る。短かい緩かな序節の後にヴアイオリンに現はれる快速曲（アレグロ）の主想は靜かな歌のやうな調で、これが低音樂器で繰返されてから、强奏に移つて喜悦の感が力强く表はされる。第二の主想も第一のと同樣に歌のやうな調でヴアイオリンとクラリネツトとに割り當てゝある。

一般にモツアルトの交響曲のハイドンのと異る重な點は快速曲（アレグロ）に於ける主想が流暢な歌調に富むといふ事で、此の曲の主想の如きは最も好い實例である。以上第一部分は幅廣く出來て居るが第二の「展開」の部分は簡單で間もなく總休止に達する。以下僅か三小節の管樂を繋ぎとして直ちに第三部分に入り、可成り精密に第一部分を反復して終る。

第二章並歩曲（アンダンテ）（變イ長調）は一般に極めて優美な調である。第二部分に暫く激烈な一節を挿んであるが、此の挿節の後に現はれる靜かな管樂は和聲の美と模倣式作法によつて心を醉はしめる。

第三章メヌエツトは珍らしく活氣に富む力强いものである。それだけ中部進行（トリオ）の可憐な美しさが際立つて分かる。モツアルトの特徴ともいふべき單純な優しさは此處に十分に現はれて居る。

第四章快速曲（アレグロ）は材料に於ても精神に於てもハイドン式のもので輕く樂しく戲れるやうな趣が全曲に充ちて居る。又た第二の主想が單に第一主想の變形に過ぎないといふ點もハイドン式である。されば此の曲は曲頭數小節に表はれる僅かな材料から全部編み出されたもので實にモツアルトの技術と想像力の偉大を示すものである。

二、管絃樂付ピアノ連奏

變ホ長調競奏曲　モツアルト作

本曲は一七八〇年頃（即ち作者が二十四歳の頃）の作であらうといふ。オツト・ヤーンの說によれば此の曲は同作者が以前に作つたピアノの三重競奏曲に似て居る。兩樂器は對位法的に獨立することなく、二人の奏者は

旋律や通過句を同時に奏したり或は前後して奏し、屢々速かに交代して相手の語を遮ることもある。又た時には同じことを反復し時には變奏をしたりして、絕えず互に競ふ所に興味があるので、何れが主になるといふことはない。……管絃樂の方は單純で控へ目に出來て居るが然し精巧に扱はれて居る。殊に管樂器の長く延ばした和音はピアノ通過句の基礎として有効に使はれて居る。快速曲、並歩曲（アレグロ）及び快速曲（アンダンテ）（ロンド）の三章から成り、全體として快活な自由な氣分を表はして居るが、殊に終曲は生々した有情（ユーモア）滑稽の趣味を具へて居る。第一及第三章の何れにも結尾に近く延長段落（カデンツア）がある。エドゥアルト、メルトケの作を用ふ。

三、混聲合唱

作品九三中の二曲　　ブラームス作

世を去つてから今年で丁度二十五年になるブラームス（J. Brahms 1833-1897）の此二曲は一八七四年に出した無伴奏混聲合唱曲集に屬するものである。二曲とも短曲であるが、恐らく短かい爲めに却て一層直接に訴へるのであらう。

O süsser Mai!

O süsser Mai!
Der Strom ist frei,
Ich steh' verschlossen,
Mein Aug' verdrossen;
Ich seh' nicht deine grüne Tracht,
Nicht deine buntgeblümte Pracht,
Nicht dein Himmelblau,
Zur Erd' ich schau';
O süsser Mai,
Mich lasse frei,
Wie den Gesang
An den dunklen Hecken entlang.

Fahr wohl!

Fahr' wohl, o Vöglein,
Das nun wandern soll,
Der Sommer fährt von hinnen
Du willst mit ihm entrinnen:
Fahr' wohl, fahr wohl!
Fahr' wohl, o Blättlein,
Das nun fallen soll;
Dich hat roth angestrahlet
Der Herbst im Tod gemalet:
Fahr' wohl, fahr' wohl!
Fahr' wohl, all liebes,
Das nun scheiden soll,
All liebes, das nun scheiden soll!
Und ob es so geschehe,
Dass ich nicht mehr dich sehe:
Fahr' wohl, fahr' wohl!

四、絃樂

絃樂曲（作品一六）　　ジュオン作

作者ジュオン（Paul Juon 1872——）は露國モスコウに生れ同市でタネエフ・アレンスキに作曲を學んだが、二十二歳の時ベルリンに來て更に研究を續けた。其後暫く理論の教師として他處へ趨いたが二十五歳以後はベルリンに定住して、三十四歳の時王立音樂學校の作曲の教授に任ぜられた人である。作曲家としての彼はブラームスの流れを酌んだ管絃樂や室樂などの大家として知られて居る。眠たげな小川の囁にも似た波動音のうちに柔かな歌調をきかせる『子守歌』、三度の進行を保つて樂器から樂器へと優しい旋律の移り行く『三度の間奏曲』及び最後の露西亞趣味に富んだ『舞曲』は何れも作者の近代的色彩を窺ふに足るものである。

五、混聲合唱

鷹の歌　　ブラームス作

本曲は前に述べたと同じ混聲合唱曲集の中に收められたロマンツエの一つで、セルビアの歌に基いて作つたものといふ。あこがれるやうな旋律は歌詞の意によく適ひ、又た曲全體が細かな技巧を以て仕上げられて居る。

Der Falke

Hebt ein Falke sich empor,
Wiegt die Schwingen stolz und breit,
Fliegt empor, dann rechtshinweit,
Bis er schaut der Veste Thor.

An dem Thor ein Mädchen sitzt,
Wäscht ihr weisses Angesicht,
Schnee der Berge glänzet nicht,
Wie ihr weisser Nacken glitzt.

Wie es wäscht und wie es sitzt,
Hebt es auf die schwarzen Brau'n,
Und kein Nachtstern ist zu schau'n,
Wie ihr sehwarzes Auge blitzt.

Spricht der Falke aus den Höh'n:
O du Mädchen wunderschön!
Wasche nicht die Wange dein,
Dass sie schneeig glänze nicht!
Hebe nicht die Braue fein,
Das dein Ange blitze nicht!
Hüll den weissen Nacken ein,
Dass mir nicht das Herze bricht!

六、管絃樂

歌劇『ニユルンベルグの平民歌人』の前奏曲

ヴァグネル作

〔大正六年五月二十五日の「音樂演奏曲目梗概」を參照。〕

大正十一年五月二十日、二十一日　学友会春季演奏会

大正十一年五月二十日（土曜日）・二十一日（日曜日）
東京音樂學校奏樂堂ニテ（午後二時）

春季大演奏會

東京音樂學校學友會

曲目

第一部

一、混聲合唱　會員

神よ我等を救へ……ハムマーシユミツト

二、ピアノフオルテ　第一ピアノ　福井直俊
第二ピアノ教授　萩原英一

ト短調競奏曲……デユセック

三、バス獨唱　須藤五郎

「イ」母亡き子を守る父の子守歌……グリーヒ
「ロ」菩提樹……シユーベルト

四、ヴイオリン　桂平太

競奏曲中のアンダンテ・トランクイロ……ベリオ
「作品七十六第七」

五、ソプラノ獨唱　早川美奈子

歌劇「猶太の女」中の〝ラシエルのロマンス〟…アレヴイー

六、ピアノフオルテ獨奏　濤川瀧江

幻想即興曲「作品六十六」……ショパン

第二部

七、混聲合唱　會員

「イ」春の歡び……ヅボルシヤツク
「ロ」我が友……ヅボルシヤツク

八、アルト獨唱　石橋君
　歌劇「ミニオン」中の
　〃吾は貧しき兒なるを知れり〃……トマ
九、ピアノフオルテ獨奏　和泉千代
　ファンタージー・ポロネーズ「作品百八」……ラツフ
十、ソプラノ獨唱　伊藤あつぶ
　歌劇「ラクメ」中の
　〃若い印度の人は何處へ行つて居るか〃……デリブ
十一、ヴイオリン獨奏　高階哲應
　ロマンス「ヘ長調」……ベートーベン
十二、混聲合唱　會員
　婚禮……グルツク

指揮者　船橋助教授
〔原資料横組〕

THE
GRAND CONCERT
OF
THE GAKUYUKWAI
OF
THE TOKYO ACADEMY OF MUSIC
Saturday, Sunday, May 20th 21st 1922 at 2 p. m.

PROGRAMME.

PART I.

1. CHORUS: Members
O hilf, Christe, Gottes Sohn .....*Hammerschmidt*

2. PIANOFORTE: I. Piano Mr. N. Fukui
II. Piano Prof. Hagiwara
Concert[o] in g-minor .....*Dussek*

3. BASS SOLO: Mr. G. Sudo
a. Wiegenlied .....*Grieg*
b. Der Lindenbaum.....*Schubert*

4. VIOLIN: Mr. H. Katsura
"Andante tranquillo" from Concert[o] (op. 76 No. 7) .....*Beriot*

5. SOPRANO SOLO: Miss M. Hayakawa
"Romanze der Recha" from "Jüdin" .....*Halevy*

6. PIANOFORTE SOLO: Miss T. Namikawa
Fantaisie—Impromptu (op. 66) .....*Chopin*

PART II.

7. CHORUS: Members
a. Heut ist's so recht ein Tag der Freude
b. Es zog manch Lied
from "In der Nature" .....*Dvorák*

8. ALTO SOLO: Miss K. Ishibashi
"Je connais un pauvre enfant" from "Mignon" .....*Thomas*

9. PIANOFORTE SOLO: Miss C. Izumi
Fantaisie Polonaise (op. 108) .....*Raff*

10. SOPRANO SOLO: Miss A. Ito
"Où vala Jeune Indove" from "Lakmé".....*Delibes*

11. VIOLIN SOLO: Mr. T. Takashina
Romance (F major).....*Beethoven*

12. CHORUS: Members
"Zum Hochzeitsfeste" chor aus Iphigenie in Aulis.....*Gluck*

Conductor: —A. Prof. Funabashi.

大正十一年六月一日　演奏旅行

□東京音樂學校　六月一日新潟高等學校開校紀念音樂會出演をかね長岡市に旅行長岡座にて演奏會を催し、萩原英一、高折宮次、蜂谷龍子、武岡鶴代諸氏も出演された、尙ほショルツ氏の後任につきて目下物色中との事。

（『音樂界』第二四九号、大正十一年七月、三九～四〇頁）

大正十一年六月二十四日　学友会第三十三回土曜演奏会

第三十三回土曜演奏會曲目

大正十一年六月二十四日

午後一時開場

同　二時開演

於上野公園東京音樂學校

東京音樂學校學友會

第一部

一、混聲合唱　會員

「イ」空しく老いぬ……スエーデン民謠

「ロ」夜鶯……メンデルスゾーン

「ハ」夏は來ぬ……メンデルスゾーン

二、テノール獨唱　朴恒秉

「イ」異境に在りて……シューマン

「ロ」朝の挨拶……シューベルト

三、ヴイオリン　岩田達雄

小競奏曲「作品三十一」第二樂章……ジット

四、ピアノフオルテ獨奏　月岡美津代

狂想的ロンド「作品十四」……メンデルスゾーン

五、ソプラノ獨唱　矢追婦美

聖劇「救世主」中の〝彼は彼の羊群を牧す〟……ヘンデル

六、ギオロンチエルロ獨奏　沖不可止

コル、ニドライ「作品四十七」……ブルッフ

第二部

七、ソプラノ獨唱　廣瀨八重子

歌劇「セヴイラの理髪師」中の〝ロジナの小抒情調〟……ロッシニ

八、ピアノフオルテ獨奏　原縫

變ロ長調變奏曲「作品八十三」……メンデルスゾーン

九、ヴイオリン獨奏　荻原巖

第二競奏曲中のロマンス「作品二十二」……ウイニアウスキー

十、メゾオソプラノ獨唱　吉川節子

歌劇「サムソンとダリラ」中の〝春の歌〟……サンーサアンス

十一、ピアノフオルテ獨奏　北田政江

ハ長調變奏曲「作品七」……ウエーベル

十二、ヴイオリン獨奏　奥村艶

激情的幻想曲　アレグロ　モダレート（ママ）……ビユータン

「作品三十五」

十三、混聲合唱　會員

神の羔……モツアルト

指揮者―船橋助教授

〔原資料横組〕

大正十一年十月十七日～十九日　演奏旅行

□東京音樂學校　教授其他學生の一團よりなる演奏旅行は、十月十七日飯田町發、十八日午後一時より松本市に出演、十九日歸京、二十二日東京發、廣島に向ひ、それより大阪、神戸、京都、名古屋、濱松等を經て二十三日(ママ)歸京。

（『音樂界』第二五三号、大正十一年十月、二一頁）

松本高等學校　大音樂會

東京音樂學校團

松本高等學校落成祝賀〔記〕念の爲めの大音樂會は十八日晝夜二回開催さる音樂學校職員の名家數名と同校生徒百餘名の混聲合唱團にて本縣に於て之を聽くことを得るは今回始めてなり

實に空前　の大演奏會なるを以て之れが諸般の準備は松本高等學校々友會、松本音樂研究會、松本婦人會の三者協力して努め居れるが會費は學生一圓、普通二圓、特別三圓五十錢なりと演奏の晝の部は十八日午後二時より

夜の部は　午後七時より開會す、參會者は男子は必ず洋服又は羽織若しくは袴を着用すべく小兒の同伴は入場謝絶する筈なり、會場は高校の講堂にして上草履の用意は各自に於てすべしと也

（『信濃毎日新聞』大正十一年十月十七日）

松本高等學校　音樂會

松本高等學校學制記念大音樂會は十八日午後二時より同校講堂に於て擧行し今回は日本唯一と誇る東京音樂學校男女生徒百名の合奏團の來松とて松本市空前の大賑ひで聽衆は高校職員生徒を始め音樂に趣味を持てる紳士淑女無慮一千名に達し場の内外に溢るゝ盛會であつた美しい男女の音樂學校生徒の混聲合唱長坂好子(ながさかよしこ)の高音獨唱蜂谷龍子(はちやたつこ)のバイオリン獨唱高折宮次(たかをりみやじ)氏のピヤノ獨奏教授船橋榮吉(ふなばしえいきち)氏及曾我部靜子(そがべしずこ)の低音獨唱等は泣き笑ひ吠狂ひ玉を轉がし鈴を振り妖魔の襲へる如き種々のメロデーに聽衆の情緒をそそり聽衆は殆ど醉ふるが如く何れも大喝采にて殊に飛び入り格の松本高等學校獨語講師アルナルドバウワー氏の同校へ就職二年以來始めて晴の場所に起(た)つて得意の獨唱を行つたので同校生徒は足踏みを鳴らし滿場の拍手は暫し鳴り止まず午後四時四十分散會した夜は七時から松本音樂會及び松本婦人會主催で同所に開催再び一千餘名の入場者があつて盛會を極めた（松本電話）

（『信濃毎日新聞』大正十一年十月十九日）

大正十一年十月二十六日　演奏旅行

音樂學校　大管絃團

廿六日中央公會堂

一昨年本社後援の下に關西における初めての出張公演を試みた東京音樂學校管絃隊及び合唱團は爾來毎年關西で大演奏會を開くこととなり本年も愈々廿六日夜大阪市教育會主催、雜誌「女性」發行所プラトン社後援の下に中央公會堂で大演奏會を開くこととなつた

曲目は管絃樂歌劇「ニユールンベルヒの平民詩人」の前奏曲（ヴアグナー作）ベートーウエンの「第八スイムフオニー」（第三樂章まで）および合唱「夢」（シユーマン）「雲雀の歌」（メンデルスゾーン）の外ロツスイニの「聖母哀悼の聖歌」の全曲が合唱及び管絃樂によつて演奏される。この曲は十の部分から成る大宗教

音樂で、かうした大部の曲が當地の樂壇に上せられるのは始めてであるから期待を以て迎へられつゝある

因みに獨唱者は長坂好子（ソプラノ）曾我部靜子（アルト）澤崎定之（テナー）阿部英雄（バス）の諸氏である。

（『大阪毎日新聞』大正十一年十月十日）

東京音樂學校　大演奏會
公會堂の盛況

大阪市教育會主催、プラトン社後援東京音樂學校管絃合唱團大演奏會は廿六日午後七時中央公會堂に開催久しぶりの來阪とて好樂家の期待素張らしく六時既に滿員を告げる盛況▲演奏はヴアーグナーの「平民歌人」の前奏曲に始まり續いて船橋榮吉氏指揮のシューマンやメンデルスゾーンの合唱曲が唱和され、大物のベートフエンの「第八スイムフオニー」がクローン氏の指揮で演奏されたが管樂器の弱い嫌ひはあつたが絃殊にヴアイオリンは本邦の俊秀を集めたゞけに申分なく第二樂章のアツレグレツトは最も輕妙に演奏された、第三樂章は終曲が省かれたゝめ纏まりのない感がしたが立派な出來榮えであつた▲休憩後ロツスイニの宗教音樂「聖母哀悼」は一時間を要する大曲で幾分荷が勝過ぎたやうであつたが、四人の獨唱者を始め全員の努力は著るしく認められカノン風の樂しい終曲を最後に演奏を終つたのは午後九時半であつた

（『大阪毎日新聞』大正十一年十月二十七日）

大正十一年十月二十九日　邦楽会第二十五回演奏会

富本節

一、奈須野　淨瑠璃　富本豐　同　名見崎得壽々　三味線　富本豐春　同　富本豐登貴

歌澤節

二、更けて逢ふ夜　歌澤寅奴　三味線　歌澤寅右衛門

あきの夜

義太夫節

三、近頃河原の達引　竹本綾之助　三味線　竹本土佐之助

おしゆん傳兵衛堀川の段　ツレ彈　竹本綾多津

――（休憩十分間）――

常磐津節

四、新曲釣女　常磐津松尾太夫　常磐津志妻太夫　常磐津歌妻太夫　常磐津文字兵衛　常磐津菊三郎　三味線

長唄

五、教草吉原雀　長唄　富士田音藏　同　坂田鎌次郎　同　杵屋佐一郎　三味線　杵屋佐吉　同　杵屋佐次郎　同　杵屋佐三郎　笛　望月萬藏　小鼓　福原百之助　同　柏伊三郎　大鼓　六郷新十郎

大正十一年十一月十一日、十二日　学友会秋季演奏会

一、混聲合唱　會員

イ、春の知らせ……メンデルスゾーン

ロ、サンタルチア……ナーポリ民謠

二、洋琴獨奏　大井あさ

ハ長調「ソナタ」中ノ「ロンドオ」「作品二十四」……エーバー

三、低音獨唱　須藤五郎

住家……シューバート

四、洋琴獨奏　門田やそ子
變ホ長調奏鳴曲、准幻想曲「作品二十七第一番」…ベートーヱン
五、女聲三重唱　矢追婦美、廣瀬八重、吉川節
歌劇オルフェオ中の三重唱……グルック
第二部
六、洋琴獨奏　加藤ノブ
ハ短調旋轉曲作品……ショパン
七、高音獨唱　酒井千枝
歌劇「カルメン」第二幕ジプシーの歌……ビゼー
八、洋琴獨奏　氏家滋子
ハ長調奏鳴曲の第一樂章「作品第三番」……ベートーヱン
九、女聲二重唱　早川美奈、石橋君子
歌劇「オルフェオ」中の二重唱……グルック
十、混聲合唱　會員
歌劇「タンホイザー」中の進行曲……ヴアグネル

大正十一年十二月二日、三日　第四十三回定期演奏会

大正十一年十二月二日土曜日午後一時半開場
三日日曜日二時開會

音樂演奏曲目

東京音樂學校

一、管絃樂

〈長調交響曲（作品九三、第八番）……ベートーヴェン作
Symphonie (F Dur, Op. 93, Nr. 8) ……Beethoven.
Allegro vivace e con brio.
Allegretto scherzando.
Menuetto.
Allegro vivace.

休憩十分間

二、合唱獨唱及管絃樂

聖母哀悼の聖歌……ロッシーニ作
ソプラノ　長坂好子
アルト　曾我部靜子
テノル　澤崎定之
バス　阿部英雄
Stabat Mater ……Rossini.
1. Chor und Soli.
2. Arie für Tenor.
3. Duett für Sopran und Alt.
4. Arie für Bass.
5. Chor.
6. Quartett.
7. Kavatine für Alt.
8. Arie für Sopran und Chor.
9. Quartett.
10. Schluss Chor.

演奏曲目解說及歌詞

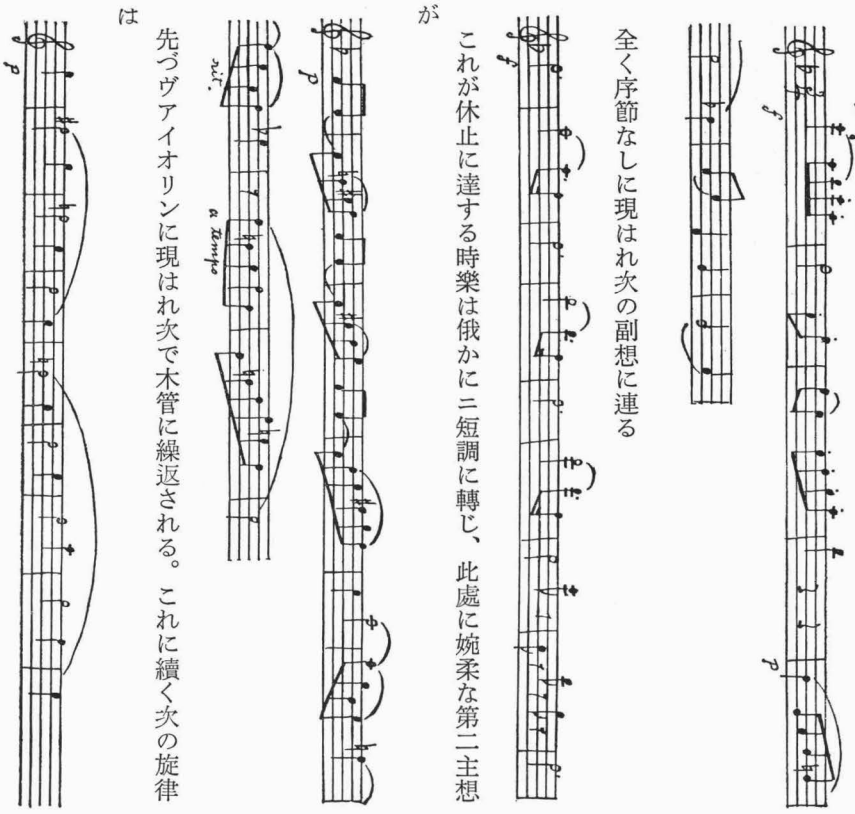
一　管絃樂

〈長調交響曲　ベートーヴエン作曲

ベートーヴエン (Beethoven 1770—1827) は眞面目な熱烈な性格の人であつたが知己の友人などに圍まれて打ち寛いだ時には小供のやうに無邪氣に戲れる人であつた。それで彼の作中にもかゝる寛いだ方面の現はれたものがある。本演奏の交響曲は其の一例で、彼の作つた九つの交響曲中最も

戯謔（おどけ）や可笑味（おかし）に富んだものである。彼が平素の威嚴を投げ棄てゝ心ゆくまで嬉戯して居る氣分が曲に善く現はれて居る。作曲の技術上から見ると、彼の好んで用ひた突然の變化や、對照や、あらゆる奇想が隨所に窺はれる。

第一章は四分三拍子の活潑な快速曲で概して愉樂の感を表はしたものと言へる。第一主想は



全く序節なしに現はれ次の副想に連る

これが休止に達する時樂は俄かにニ短調に轉じ、此處に婉柔な第二主想が

先づヴアイオリンに現はれ次で木管に繰返される。これに續く次の旋律は

更に流暢なもので、此邊までは曲が概して唯だ樂しく優しく聞えるが、此の兩樂想の進行を遮る次の小樂句は既に惡戯の始まりを思はせる。

以上最初の一節は可笑味を含んだ次の音形で結ばれ、此處で型通り再び曲頭に返つて反復せられる。

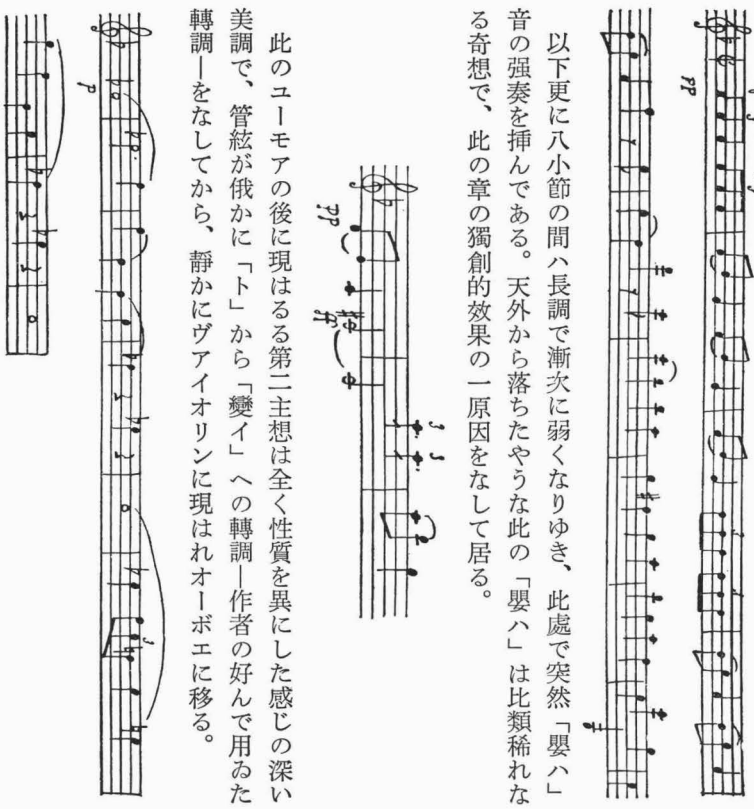
反復の後同じ音形が獨りヴイオラに殘つて第二節（所謂『展開』部）の前奏をなし、やがて此の上に第一主想の一句（最初の數音）が樂器を更へ調を轉じて展開する。變ニ調に入つてから各樂器が互に此の一句を奪ひ合ふ所は宛ら合戰の繪卷を見るやうであるが、やがて低音（ベース）が勝利を得て一般の秩序を回復し、傲然たるfffを以て第一主想の反復に入る。以下第三節は第一節の『反復（レプリーズ）』であるが、樂器の用法其他に變化を施して餘程自由に扱はれて居る。尾句（コーダ）はファゴットの表はす一樂句（第一主想の四五小節）に始り、これに基て再び對位法の技巧が用ひられ頓て再びfffに達するが、最後は靜かに曲頭の數音を反復して終る。

廣く知られた第二章は戯れるやうな稍快速の曲（變ロ調四分二拍子）で小兒が無邪氣に飛びはねて居るやうな感を與へる。木管の刻む□一なリヅムの上にヴアイオリンの婉柔な旋律の動いて行く趣は極めて輕快なもので、厭世論を主張した學者ショーペンハウエルさへも曾て此の曲を聽いた時『現世の苦勞を忘るゝに足る』といつて賞嘆したといふ。此の樂想は作者が或る晩餐會の席上で友人メルツエル（現行拍節機（メトロノーム）の發明者）に寄せた即興作（四部のカノン）の調を採用したもので、均一なリズムは拍節機の振子の音を暗示したものと言ひ傳へて居る。

第三章の『メヌエットの速さ』と題する曲（ヘ長調四分三拍子）はハイドン式のとは異つて古風な緩かなメヌエットである。前章ほどの異彩は無

いが、一種質朴な美とおかし味を具へて居る。角笛（ホルン）の連奏で始まる中部進行（トリオ）は可憐な牧歌を聴くやうである。

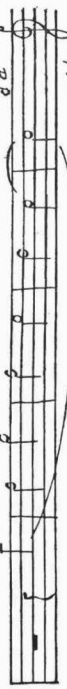
第四章終曲（フィナーレ）は全曲中最も規模の大きな、最も可笑味に富んだ章である。第一主想は



以下更に八小節の間ハ長調で漸次に弱くなりゆき、此處で突然「嬰ハ」音の強奏を挿んである。天外から落ちたやうな此の「嬰ハ」は比類稀れなる奇想で、此の章の獨創的效果の一原因をなして居る。

此のユーモアの後に現はるる第二主想は全く性質を異にした感じの深い美調で、管絃が俄かに「ト」から「變イ」への轉調—作者の好んで用ゐた轉調—をなしてから、靜かにヴアイオリンに現はれオーボエに移る。

これで本章（一種のロンド形式）の第一節を終り、第二節は曲頭樂句の變化を以て始められ、フアゴツトと銅皷（ティンパニー）との極めてユーモアに富んだ八度（オクターブ）の一節で終る。作者は此の終曲に於て初て在來の銅鼓（ティンパニー）の調律法（主音と五度とに合はせる法）を棄てゝ八度の法を試み、これにフアゴツトを加へて未曾有の新味を見せたのである。以下第三節は多少新しい變化を施した第一節の反復で、これが濟むと尾句（コーダ）ともいふべき最後の部分（殆ど二百四十小節）に入る。此處は最初曲頭と同じ三連音で始まるが、頓てこれを伴奏として新しい下行音階的樂句



に基いた最弱奏の挿句に進む。然し再び突然の強奏と共にかの「嬰ハ」が以前よりも露骨に現はれ、其他の滑稽が今一度疾過する。低音に美しい第二主想が表はれてからは間もなく最後の最強奏を經て休止に達し、以下は靜かに第一主想の樂句の餘韻を響かせて結ぶ。

二　合唱獨唱及管絃樂

聖母哀悼の聖歌

ロツシーニ作曲

Stabat Mater

No. 1. (Chor u. Soli) Stabat mater dolorosa, juxta crucem lacrymosa, dum pendebat filius.

No. 2. (Arie) Cujus animam gementem, contristantem et dolentem, pertransivit gladius. O quam tristis et afflicta fuit illa benedicta mater unigeniti! quae moerebat, et dolebat, et tremebat cum videbat nati poenas inclyti.

No. 3. (Duett) Quis est homo, qui non fleret Christi matrem si videret in tanto supplicio? Quis non posset contristari, piam matrem contemplari dolentem cum filio?

No. 4. (Arie) Pro peccatis suae gentis vidit Jesum in tormentis, et flagellis subditum. Vidit suum dulcem natum morientem desolatum dum emisit spiritum.

No. 5. (Chor und Recitativ) Eja mater, fons amoris, me sentire vim doloris fac ut tecum lugeam, fac ut ardeat cor meum in amando Christum Deum ut sibi complaceam.

No. 6. (Quartett) Sancta mater istud agas, Crucifixi fige plagas cordi meo valide. Tui nati vulnerati, jam dignati pro me pati, poenas mecum divide. Fac me vere tecum flere, Crucifixo condolere, donec ego vixero. Juxta crucem tecum stare, te libenter

sociare in planctu desidero. Virgo virginum praeclara, mihi jam non sis amara, fac me tecum plangere.

No. 7. (Kavatine) Fac ut portem Christi mortem, passionis fac consortem, et plagas recolere, fac me plagis vulnerari, cruce hac inebriari ob amorem filii.

No. 8. (Arie und Chor) Inflammatus et accensus per te virgo sim defensus in die judicii. Fac me cruce custodiri, morte Christi praemuniri, confoveri gratia.

No. 9. (Quartett) Quando corpus morietur, fac ut animae donetur Paradisi gloria.

No. 10. (Chor) Amen, in sempiterna saecula amen.

十九世紀前半に伊太利歌劇の作者として名聲を博したロッシーニ（Rossini 1792—1868）は宗教樂にも本曲（一八三二年作）〔の〕やうな名作を遺した。『スターバット、マーテル』（『聖母は立ちき』の義）は羅馬舊教の儀式（殊にマリア七難祭）の際に奏するもので、有名な羅典語の歌詞は十三世紀のフランシス派の僧ヤコポーネの作であらうといふ。古くから知名の作曲者が競つて之に附曲したが、近代ではロッシーニの作が最も知られたものゝ一である。此の作では全體が十曲に分けてある。

第一、序曲（合唱及獨唱）は劇的變化に富んだ曲で、短かい前奏の後に合唱が始まり、間に獨唱を挿んである。歌詞の大意は——『御子の懸れる十字架のほとりに泣き悲しみつゝ聖母は立ち給へり。』

第二、抒情調（中音獨唱）は全篇中最も世に知られた曲で、裝飾音こそないが歌詞の性質を考へて見ると頗る華美な調である。——『嘆き悲しむその御心を刃は終に貫きたり。獨子（ひとりご）の爲めに尊き母は如何に苦しみ給ひしぞ。榮ある御子の刑を看て如何に悶えたまひしぞ』などの意。

第三、二部唱（高音及次高音）も前曲同樣に知られた曲で、最初に高音の歌ふ可憐な旋律を次高音が承けて表はし、次で兩聲が共に此のふしに裝飾を施して進み最後は純歌劇式の段落を以て結ぶ。——『かゝる憂きめになやむ聖母を誰かは見て泣かざるべき。御子を悼むやさしき母を誰れか哀れといはざるべき。』——上述の二曲は歌詞の意味よりも寧ろ曲調の華美を主眼とする伊太利歌劇の傾向を帶びたものであるが

第四、抒情調（低音獨唱）はこれ等よりも遙かに教會式のもので、樂趣は重く沈んで居る——『おのが國民に代りて笞を受け筈に打たれ、世に棄てられて息絶ゆる御子を母は見給ひき。』

第五、合唱及び朗吟調（低音獨唱）は『愛の源なる聖母やよ我をして汝の悲を分たしめ、神、基督に對する愛に燃えしめよ、』の意

第六、四部唱は變化に富んだ可憐な曲で、充實した幅廣い和聲で終る。『聖母やよ十字架に懸り給へる主の傷を我が胸に移し、傷けられしなが御子の我が爲めに受けたまへるかの刑を我に分たしめよ。我が生のあらん限り、苦しみ給ひし主を悼みて汝と共に泣かしめよ。汝と共に十字架のほとりに立ち、心ゆくまで悲嘆を分つこそ我が願なれ。童女のなかにていと優れたる童女よ。願はくは今汝と共に哭くことを許したまへ。』

第七、小抒情調（次高音獨唱）——『我にキリストの死を負はしめ、其の苦を分たしめ、その傷を新たならしめよ。其の傷に傷きて、十字架のほとりに御子の愛に醉はしめよ。』

第八、抒情調（高音獨唱）及合唱は力強い伴奏と華々しい高音と相待て全篇の絶頂點をなして居る。——『願はくば裁判（さばき）の日に災に燒かれつゝも汝童女によりて庇護せられんことを。十字架に護られ、キリストの死に守られ、天惠に浴せんことを』の意

第九、四部唱『肉體の滅びん時我が靈に天國の光榮を賜へ』は幅廣い單純な和音から成る美しい曲でこれが濟むと、

第十、終曲『しかあれよ、とこしへに、しかあれ』にうつる。これは諸聲が同じ旋律を順次に追ひかけて行く『フーガ』式作法によつた頗る華美な曲である。

大正十一年十二月十六日　学友会第三十四回土曜演奏会

□信時潔氏の合唱曲

十二月十六日　音樂學校土曜演奏會にて

「聽いたかい」

「聽いたよ」

「どうだつたい」
「面白かつたよ。君は？」
「面喰つたね。でも痛快だつたよ」
「どうしてさ」。
「『あかがり』には皆笑つちやつただらう。こんな種類の研究的な音樂會で今迄演奏者の何かの失策とか態度とか以外、曲であれ程聽衆を笑はしたのは恐らく日本では未曾有の大事件だよ。嘲笑をした奴もあるかも知れないが、僕にはもつと善良な只の笑ひしか見えなかつたからね。其点頗る痛快です」
「同感!!　どうせ作品その者をほんとに聽いてる奴なんか餘りなささうだから、こんなのがちよい〳〵あるのもいゝ事かも知れない」。
「音樂界の元老がこの曲について『大變結構なものでございます』と云つたさうだが、考へ様によつちや仲々意味深長にして廣大だね」

（『音樂研究』第一巻第二号、大正十二年三月、五四～五五頁）

大正十二年二月十日　学友会第三十五回土曜演奏会

□東京音樂學校學友會　二月十日午後二時同校講堂に開會、曲目は。

▲第一部　一、混聲合唱（イ）さらば（ロ）日は窓にさし入りて（エドウアード、クレームザー）會員　二、ピアノフオルテ獨奏、狂想曲（グルツクーサン、サーン）上沼房子　三、ソプラノ獨唱、歌劇「ヴエニス祭」中の抒情調「やさしき胡蝶」（アンドレ、カンプラ）白濱ツタ　四、ピアノフオルテ獨奏、ニ長調ソナタ「作品二十八」（ベートーベン）水村君子　五、テノール獨唱、いとも美るはしき五月に、我が涙の流れより（シユーマン）朴恒秉　六、アルト獨唱、歌劇「サムソンとダリラ」中「曉の花と心はひらく君が御聲に」（サンサーン）　酒井千枝子　▲第二部　七、ピアノフオルテ獨奏、ホ長調ポラツカ、ブリランテ「作品七十二」（ウエーバー）中谷富士子　八、ソプラノ獨唱、歌劇「ルチアデラメルモーア」中の抒情調「靜けさ四方にみちて」（ドニゼツテイー）矢追婦美　九、ピアノフオルテ獨奏、變ロ長調コンツエルト第一樂章（モザールト）名出淑子　十、アルト獨唱（イ）乳草（ロ）父と子（濱田廣介作歌）（ハ）踊り子（白鳥省吾作歌、船橋榮吉作曲）曾我部靜子　十一、ヴイオリン獨奏、前奏曲と舞踏曲（ハツハー、クライスラー）高階哲應　十二、混聲合唱、偶感（蒲原有明作歌、船橋榮吉作曲）會員

尚ほ同校は二十三日午前十時卒業式擧行午後二時卒業演奏。

（『音樂界』第二巻八号、大正十二年四月、一三頁）

船橋榮吉氏の新作品

二月十日の音樂學校土曜演奏會にて

獨唱曲のテキストは濱田廣介氏の「乳草」と「父と子」及び白鳥省吾氏の「踊り子」、合唱曲は蒲原有明氏の「偶感」。テキストの意味を考へないことにして只旋律と伴奏とだけを聽けば——幸ひ曾我部氏の發音はその点頗る好都合だつたし、又合唱の方も稍曾我部氏に近かつた——瞬間々々には非常に氣持ちのよい音樂である。曲の統一とかテキストとの調和（恐らく詩の眞の解釋はその詩の作者以外何人にも不可能のことだと信ずるので）とかは、今氏にそれを望む可き時期ではないと思ふ。兎に角音樂者が眞に音樂を理解するには一度は作曲をする必要がある筈だから、氏が勇敢にそれに向つて突進されたことは必ず無意義には終らないだらう。若し斯かる氣運が音樂者間に醸されつつあるといふなら誠に慶賀に絶えない次第である。

以上　K、T　生

（『音樂研究』第一巻第二号、大正十二年三月、五七頁）

大正十二年二月二十四日　久野教授告別演奏会

（大正十二年二月二十四日　東京音楽学校）

久野教授告別演奏会

（主催　東京音楽学校学友会、日本女子大学桜楓会）

ルードウヰッヒ　ヴン　ベートーヴェン

一、告別奏鳴曲、作品八十一の甲、変ホ調　二、ハムマークラヰーア奏鳴曲、作品百六　三、奏鳴曲、作品百十、変イ調　四、最終奏鳴曲、作品百十一、ハ短調

（『日本の洋楽百年史』、三六六～三六七頁）

大正十二年三月二十五日　卒業式

大正十二年三月廿五日（日曜日）午後一時三十分開始

卒業證書授與式順序

東京音樂學校

一、卒業證書授與

二、校　長　式　辭

三、文部大臣祝辭

四、卒業生總代謝辭

演　奏　曲　目

一、ピアノ獨奏　……本科器樂部卒業生　名出淑子

狂想的ロンド（ト長調、作品一二九ノい）……ベートーヴェン作

二、ソプラノ獨唱　……本科聲樂部卒業生　伊藤アツ

歌劇ラクメ中の歌「月光が靜かに落つる様に」……デ　リ　ー　ブ　作

三、ピアノ獨奏　……本科器樂部卒業生　松野ヨシエ

ソナタ（ト短調、作品二二、第一章）……シューマン作

四、ヴァイオリン獨奏　……本科器樂部卒業生　桂　平太

コンツェルト（ニ短調、第一九番、第一章）……クロイツェル作

五、ピアノ獨奏　……本科器樂部卒業生　北田政江

コンツェルト（イ短調、作品八五、第一章）……フンメル作

休憩十分間

六、ピアノ獨奏　……本科器樂部卒業生　門田耶蘇子

ソナタ（嬰ヘ長調、作品七八、第一章）……ベートーヴェン作

七、三部唱……本科聲樂部卒業生（廣瀬八重子／吉川節子／酒井千枝）

歌劇カルメン中の第二〇番三部唱……ビ　ゼ　ー　作

八、ピアノ獨奏　……本科器樂部卒業生　服部登和

ソナタ（ハ長調、作品五三、第一章）……ベートーヴェン作

九、ソプラノ獨唱　……本科聲樂部卒業生　早川美奈

歌劇自由射手中のアガーテの抒情調……ヴェーバー作

十、ピアノ獨奏　……研究科器樂部修了生　濤川瀧江

狂想的ロンド（ホ短調、作品一四）……メンデルソーン作

十一、混聲合唱

い、菩提樹……シューベルト作

ろ、咲き殘る夏の薔薇……アイルランド民謠

は、五月の微風……ドイツ民謠

大正十二年四月十五日　邦楽会第二十六回演奏会

曲目

一、富本節
雪解松操繖（ゆきどけまつみさをのきぬがさ）（常盤御前）
富本豊前
富本都喜代
富本豊關
三味線 富本都路
上調子 富本豊常

二、三曲
尾上（おのへ）の松（まつ）
箏 宮城道雄
三味線 吉田恭子
尺八 吉田晴風

三、哥澤節
宇治茶（うじちや）
綱上（つなうへ）
唄 哥澤芝金
絃 哥澤芝勢以

――（休憩十分）――

四、義太夫節
野崎村（のざきむら）の段（だん）
竹本綾之助社中

五、常磐津節
若木（わかぎ）の花容彩四季（はなすがたのさいしき）（曾我對面）
三味線
常磐津 松尾太夫
常磐津 志妻太夫
常磐津 松重太夫
常磐津 文字兵衛
常磐津 菊三郎
常磐津 八百八
笛 望月太喜藏
小鼓 梅屋市左衛門
大鼓 梅屋福二郎
太鼓 田中佐十郎

大正十二年五月十九日、二十日　第四十四回定期演奏会

大正十二年五月十九日 土曜日 二十日 日曜日 午後一時半開場 二時開會

音樂演奏曲目

東京音樂學校

一、管絃樂
序曲『オシアンの餘韻』（作品一）……ガーデ作曲
Ouvertüre „Nachklänge von Ossian“ (Op. 1) ……Gade.

二、ピアノ獨奏
ヘ短調幻想曲（作品四九）……ショパン作曲
Fantasie F moll (op. 49) ……Chopin.

三、女聲合唱
即興曲（作品一九）……シベリウス作曲
Impromptu (op. 19) ……Sibelius.

四、管絃樂
樂詩『フィンランディア』（作品二六）…シベリウス作曲
Tondichtung „Finlandia“ (op. 26) ……Sibelius.

五、混聲合唱
聖靈降臨祭（作品一六）……メレンドルフ作曲
Pfingsten (op. 16) ……W. von Möllendorff

番外、セロ獨奏
交響的變奏曲……ボエルマン作曲
Variations Symphonique ……Léon Boëllmann

休憩十分間

六、絃樂
古式組曲『ホールベルヒの時代より』

（作品四〇）……グリーヒ作曲
Suite für Streichorchester im alten Style
„Aus Holbergs Zeit“ (op. 40)……Grieg.

七、ピアノ獨奏
エロイカ變奏曲（作品三五）……ベートーヴェン作曲
Eroica-Variationen (op. 35)……Beethoven.

八、管絃樂
序曲『レオノーレ』三番（作品七二ノい）…ベートーヴェン作曲
Ouvertüre „Leonore“ No. 3 (op. 27, a) ……Beethoven.
管絃樂及合唱指揮者　教師　Gustav Kron
ピアノ獨奏者　教師　Willy Bardas
セロ獨奏者　Joseph Hollman

久邇宮朝融王殿下音樂奬勵の思召を以て今回ヴイオロンセロ一挺を本校に御下賜相成候、同樂器は伊國の名工ジュセツペ・アントニオ・グワルネリが千七百四十年に製作したるものと傳へられ、セロの達人ヨゼフ・ホルマン氏がホルマン夫人の名稱を附して五十年來愛用したる世界有數の名器にして、過日殿下に献上したるものに有之候、就ては右御披露を兼ね來る二十日の演奏會には特にホルマン氏の出演を請ふことゝして左の一曲を加へ候
交響的變奏曲　レオン・ボエルマン作曲
Variations Symphonique　Léon　Boëllmann

演奏曲目解説及歌詞

一　管絃樂

序曲『オシアンの餘韻』（作品一）　ガーデ作曲

この曲は初めてスカンディナヴィアの風調（ママ）を世界に紹介したといふ丁抹の大家ガーデ（Gade 1817—90）の出世作である。彼はこの曲を出してから間もなくライプチッヒに行き、メンデルソーン、シューマン等と交はつて其の感化を受けた。殊にメンデルソーンの作風に習つた點は甚だ多かつたが、その爲めに自己の獨創を失ふことはなかつた。この序曲は彼の好んだ北歐的主題に關する曲の一つで、紀元三世紀のケルト民族の歌人オシアンを回顧したものである。彼の特徴なる北歐の情調とロマンチックの詩趣とは此處にも現はれて居る。樂想は一般に優しい色彩に富み、また柔かな憂欝を帶びて居る。

二　ピアノ獨奏

ヘ短調幻想曲（作品四九）　ショパン作曲

ショパン（Chopin 1810—1849）の比較的短かい曲の中で、最も重要な一つである。この曲は自由な形式に作られたもので、緩徐な中間節を有する點に於ては『バラーデ』と異るが、形式も樣式も此の種類に屬して居る。此處に作者の豐富な創造力は何等形式上の束縛を受けずに展開して行く。

三　女聲合唱

即興曲（作品一九）　シベリウス作曲

現時北歐樂界の第一人者なるシベリウス（Jean Sibelius 1856—）は獨墺二國にも遊學して、廣く近代諸樂派の影響を受けたが、遂に驚くべき特異の表現を以て祖國フィンランドの傳說や國風を世界に示した。この即興曲『かゞやく星の合唱の群を導く汝やよ』は元リッドベルヒの作歌に附曲した合唱曲で、歌詞は去り易き人生の春を惜み、速かに若き日の歡びを盡せよなどの意をのべて居る。

Impromptu

Du, der führt die Sterne im strahlenden Chor, Gebieter der Jubelhymnen der Nacht, schöner olympischer Knabe, komm, o komm mit Schwärmen von wilden naxischen Jungfrau'n, komm! Komm mit Nymphenscharen, die dich des Nachts im Reigen feiern als König Iacchos! Burschen und Mädchen, hell strahlt des Lebens rosiger Morgen. Luftige, holde, lächelnde Stunden schweben in leichten flüchtigen Reihen über der Flur elysischem Lenz. Hurtig, ach hurtig fliehen die schönen himmlichen Wesen, schwinden dahin zu strahlenden Weiten; aber ihr eigner fröhlicher Chor gleitet durch Schicksalswalten zurück in dunkelnde Fernen. Eilet, o eilet, Mädchen und Burschen, eilt und zerbrecht die luftigen Ketten, eilet und schliesst Genusses Umschlingung um solch olympisch lachendes, holdes, flüchtiges Kind! Hier aus der einen zitternden Wagschal' sammelt beständig Moira die Grimme Frohglükkes goldne sichre Gewichte, wirft in die andere sinkende Schale schlaffwordene Sinne, mattwordne Kräfte, Mühens und Sorgens lastendes Blei. Rasch wie die Fakkel flieht und sich fängt von Händen zur Hand auf panathenäischen nächtlichen Festen, lassen müsst ihr der Jugend allewig brennende Fakkel dem hinter euch herstürmenden jüng'ren ros'gen Geschlechte, während ihr selber sinkt in des Alters dunkelnde Schatten, sinkt in des Grabes schweigende Nacht. Eilet, o eilet, Burschen und Mädchen, eilet zu leeren Frohglükkes Nektar! Eilet, o eilet, Burschen und Mädchen, eilet zu leeren Frohglükkes Nektar! Kränzt die Pokale, drückt an die heut noch schwärmenden Herzen, drück' an dein Herze Mädchen den Burschen, Bursche die Maid!

四　管　絃　樂

樂詩『フィンランディア』（作品二六）

シベリウス作曲

『千湖の國』フィンランドは音樂上歐洲の最新國である。同じ北歐でも此の國の民謠は長く壓制を忍んだ國民の深刻な悲痛や熱烈な抵抗を反映する點に於てガーデの國風の田園的に優しく來かなのと著しく違つて居る。名作『フィンランディア』はかゝる民謠調に基いたもので、極めて國民的色彩に富んで居る。露國がフィンランドを獲てから後、此の曲の演奏を禁止したのによつて見ても如何に國民的感情を皷舞する力があつたかを知ることが出來やう。

五　混　聲　合　唱

聖靈降臨祭（作品一六）　　メンドルフ作曲

作者メンドルフ（Willi von Möllendorff）はクーロン教師の舊友で、今は專ら作曲家としてギーセン市に居る。歌詞は降臨節の樂しくのどかな春景色を叙し、次で聖靈が使徒に現はれたといふ故事を追想して今の世にも尊き平和の教を下したまくなど祈る意である。

Pfingsten

Rauschende, blaue Frühlingswellen
Überwogen Flur und Feld,
Wie aus tausend frischen Quellen
Stürzt der Lichtstrom in die Welt.
O du Fest der Nachtigallen,
Das die Schuld des Winters sühnt,
Öffne deine Tempelhallen
Deine Ehrenpforte grünt, sie grünt, sie grünt!

Pfingstenfriede! Nun bezwingen
Deine Zauber Hass und Schmerz,
Auf den unschuld weissen Schwingen
Schwebt die Taube erdenwärts, erdenwärts.
Einheit, binde Haupt und Glieder,
Mach' die alten Wunder wahr!
Höchste Botschaft, kling' uns wieder,
Wie der ersten Christenschar.

Lass' die helle Stimme schallen,
Die die Welt zur Schönheit weist

Auf und ab die Waldeshallen
Weht des Frühlings heil'ger Geist.
Lasst uns Birkenreiser schwingen,
Nun sein Hauch die Welt durchzieht,
Aller Menschheit Kampf und Ringen
Sei ein freies Lerchenlied,
Sei ein Lerchenlied
Sei ein freies Lerchenlied.

六　絃　樂

古式組曲『ホールベルヒの時代より』（作品四〇）

グリーヒ作曲

諾威の最大作曲家なるグリーヒ（Grieg 1843—1907）は丁抹のガーデよりも一層意識的に祖國の民謠に材を取りて之れに自家一流の和聲を附け、眞に比類なき新作を出した。ピアノ曲としても知られて居る此の古式組曲は一八八四年丁抹の詩人ホールベルヒ（北歐のモリエールと呼ばれる喜劇作家）の二百年祭に當つて祝意を表するために作つたもので、故らにホールベルヒの時代（十八世紀）の組曲の形式、拍子又は裝飾音（ママ）などを用ひて、而かも之に近代的の感じを籠めた作である。最初の活速な前奏曲の後に緩徐なサラバンド（四分三拍子の舞曲）があつて、次に稍快速なガヴォツト（二分二拍子の舞曲）になる。ガヴォツトの中間の進行として挿んであるミュゼットは嚢笛（バグパイプ）式の低音を用ひた趣味ある曲である。此の次に柔かい悲しみを帶びた短ト調の緩かな歌調（エール）を置き、最後はそれとうつりの好い輕快なおかしみを帶びたリゴードンで曲を結ぶ。五曲を通じて諧音の美と詩的趣味とが至る所に見られる。（十八世紀の組曲は拍子やリズムを異にした當時流行の舞曲數篇を同じ調で一組にまとめた曲である。）

七　ピアノ獨奏

エロイカ變奏曲（作品三五）　ベートーヴェン作曲

此の長曲はベートーヴェン（Beethoven 1770—1827）が自作英雄的（エロイカ）交響曲の終章を變奏した曲である。最初主想（テーマ）として現はれるものは後に出る旋律の低音のみであつて、これが二、三、四部に加工せられて中音や高音に繰返される。此の三つの低音（ベース）に基く變奏が終つてから、眞の變奏曲の主想（テーマ）（前出の低音に配した旋律的の對位聲）が現はれ、此の主想が十五たび變奏せられる。最後は三部のフーガに作られ、其の主想として前出の低音を用ひてあるが、其の結尾の自由な一節には十五曲の主想として用ひられた旋律的主想が重に現はれて居る。

八　管　絃　樂

序曲『レオノーレ』（第三番作品七二ノい）

ベートーヴェン作曲

ベートーヴェン作の唯一の歌劇『フィデリオ』一名『レオノーレ』の序曲は四度改作せられたが本演奏の第三番（一八〇六年作）が最も有名で、その構想の雄大、表出の深奥及び技巧の圓熟等の點に於て比類のない序曲である。劇の筋は西班牙の一貴族フロレスタンが惡人ピサルロの爲めに獄に投ぜられて將に殺されようとする時、以前から一青年フィデリオと僞名して典獄の助手に入り込んで居た妻のレオノーレが身を以て之を救はうとする。此の時恰も巡視の目的で到着した總督の喇叭が外に響いて惡人の計畫が凡て破れ、フロレスタンは終に救はれるのである。ベートーヴェンの序曲は漠然と劇の内容を暗示するやうに思はれる。フロレスタンの悲嘆を示す緩かな序節の後に快速なる本部に入つて此處に現はれる激動的な新しい主想はレオノーレを表はすものと解せられる。これ等の想が開展せられて頂點に達する時、總督の到着を知らせる喇叭の遠音が舞臺の後から聞える。これが反復せられて強く響く時曲は主想の反復に移り終に極急（プレスト）の尾句（コーダ）に達して勝利の歡聲裡に全序曲を結ぶ。

〔批評および関連記事〕

□東京音樂學校春季演奏會

（五月十九・二十日於東京音樂學校）

オーケストラに於ては、東京スイムフオニーのそれに比して明かに遜色を示した。第一、メムバーの熱心が足りないからだ。徒らに高くとまつてゐるばかりが能ではないだらう。

曲目の撰擇にしても、未だ〳〵考へる餘地があると思ふ。

バルダス氏のピアノ——端正な彈き方だ。惡く自分を見せつけ樣としないのはいゝ。

合唱（コーラ）は駄目だ、弘田龍太郎氏の伴奏に至つては餘りだらしがなさ過ぎる。タッチが上つすべりな上に、引きずられるから幽靈彈きになつてしまふのだ。

兎に角、プロフエツソル達が、いゝ加減に覺めなければ駄目だ。そして、つまらぬ私心を棄てゝ踏ん張る事だ。〔曲目省略〕

—益子九郎—

（『音樂研究』第一巻第五号、大正十二年六月、四六頁）

大正十二年五月二十六日　学友会第三十六回土曜演奏会

第卅六回土曜演奏會（五月廿六日）

プログラム

第一部

一、男聲合唱……會員

（イ）遠き人に……シューベルト

（ロ）夕の祭り……クロツエル

二、ソプラノ獨唱……淺野千鶴子

西風……メンデルスゾーン

三、ピアノフォルテ獨奏…石橋益惠

ニ短調ソナタ作品卅一ノ二……ベートーヴエン

四、バリトン獨唱……内田榮一

少女の歎き……シューベルト

五、女聲合唱……會員

アヴエマリヤ……ブラームス

第二部

六、ピヤノフオルテ獨奏…高安美佐保

嬰ヘ長調ソナタ作品七十八……ベートーヴエン

七、ヴイオロンチエロ獨奏…沖不可止

「春の醒め」……バツハ

八、バス獨唱……小代義雄

「ユデアの女」中のボロニの抒情調……アレヴイー

九、ヴアイオリン獨奏……渡邊しづ子

コールニードライ……ブルツフ

十、混聲合唱……會員

朝の祈り……メンデルスゾーン

巡禮……クロイツエル

聖夜……獨乙民謠

指揮者　助教授大塚淳

（『音樂』學友會、第二号、大正十三月三月、一二一～一二二頁）

大正十二年六月三十日、七月一日　学友会春季演奏会

春期大演奏會曲目（七月一日）

第一部

一、混聲合唱　會員
（イ）五月の歌　メンデルスゾーン
（ロ）おやすみなさい　シューマン
二、バリトン獨唱　金文輔
ローレライ　リスト
三、ピアノ二重奏　福井直俊　倉辻明毅
フンガリア　リスト
四、アルト獨奏　幕田しな
あこがれ　シューベルト
五、セロ獨奏　伊達三郎
ソナタ前奏
アレマンド
サラバンド
ジーグ　コレリー
六、管絃樂　會員
前奏曲
聖歌
逃走曲　バツハーアベルト

第二部

七、男聲合唱附バリトン獨唱　船橋助教授　會員
歌劇トラバドル第三幕第三場中
「彼女の眼は神々しく輝けり」　ウエルデイ
八、ピアノ獨奏　境進
幻想的即興曲　ショパン
九、ソプラノ獨唱　渡邊宣子
喜歌劇「サンマール」中の「輝く夜」　グノー
十、ピアノ獨奏　長谷川花子
ヘ短調競奏曲作品七十九　ウエーバ〔ママ〕
十一、ピアノヴアイオリン合奏　ヴアイオリン　蜂谷助教授　ピアノ　ペツオールド教授
ト長調ソナタ　グリーヒ
十二、混聲合唱及三重唱　會員
ソプラノ　早川美奈
テノール　鏑木欽作
バス　菊地博
聖歌劇「天地創造」中の
「天は神の光榮を知る」　ハイドン
指揮者　大塚教授

（『音樂』學友會、第二号、大正十三年三月、一二二頁）

大正十二年十二月十五日、十六日　第四十五回定期演奏会

大正十二年十二月十五日土曜日午後一時半開場
十六日日曜日午後二時開會

音樂演奏曲目

入場料十五日（學生ニ限ル）金壱円
十六日　金貳円

東京音樂學校

一、管絃樂

『神々の黄昏』中の葬送進行曲 ……ヴァーグネル作曲
Trauermarsch aus „Die Götterdämmerung“
Wagner

二、管絃樂

『エグモント』の序曲（作品八四）……ベートーヴェン作曲
Ouvertüre zu „Egmont“(op. 84)　Beethoven

三、ヴァイオリン獨奏　安藤幸

競奏曲第五番（作品三七）……ヴィユータン作曲
Concerto No. 5 (op. 37)　Vieuxtemps

四、管絃樂伴奏混聲合唱

畏しや神……シューベルト作曲
Die Allmacht　Schubert

五、ピアノ獨奏　ヴィリ、バルダス

謝肉祭（作品九）……シューマン作曲
Carnaval (op. 9)　Schumann

六、管絃樂

『オベロン』の序曲 ……ヴェーベル作曲
Ouvertüre zu „Oberon“　Weber

指揮者　グスターフ、クローン

〔手書き〕

演奏曲目解說及歌詞

一　管絃樂

『神々の黄昏』中の葬送進行曲　ヴァーグネル作曲

歌劇『神々の黄昏』はヴァーグネルが晩年に完成した四部劇『ニベルンゲンの指環』の最終篇で、北歐神話の英雄ジーグフリードの後半生を叙したものである。ジーグフリードは元、神々の王ヴオータンが人間の一婦によつて生んだヴエルツング族の男女の双兒（ジーグムンドとジーグリンデ）の不自然な結婚から生み出された勇士で、響に靈劍ノートゥングを振て大蛇ファフネルを刺し、彼が所有せるニベルンゲンの寶物（ラインの黄金で作つた指環と冑）を奪ひ更に炎の岩に分け登つて眠れる神女ブリユンヒルデ（ヴオータンの娘なる九人のヴアルキユーレの一人）を呼び醒してこれを娶り、これにかの指環を與へた英雄である。ヴアーグネルは以上の出來事を『ラインの黄金』『ヴアルキユーレ』及『ジーグフリード』の三歌劇中に表はし、其後の事件を此の最終劇に叙してゐるのである。ジーグフリードは妻に指環を與へて後、更に單身冒險をなすべくラインに棹し、河畔に住するギビヒユングの一族（グンテルと其妹グツトルーネ及び異父の兄弟ハーゲン等）に迎へられて此處に止まつたが、かの指環を奪はんとするハーゲンの奸計に陷つて種々の不幸に逢つた後終に殺害せられる。彼のいたましい最期の場面は森に圍まれた岩立つたラインの河岸で、此處にその日の狩を了へたグンテル、ハーゲン其他の者が集まつて來てジーグフリードと出逢ひ、一同休息をしながら、ジーグフリードはハーゲンの勸める角盃を手にして座興に身の上話をするが、それの終る頃頭上を飛ぶ不吉な

鴉（からす）を怪んで振返る途端にハーゲンはすはやく彼の背部を刺して逃れ去る。人々は唯驚き且つ悲しんで倒れた英雄を圍んで居るが、やがてグンテルの指圖で一同は遺骸を楯にのせて既に日暮れて月白き岡を越えて運んで行く。本演奏の進行曲はこの悲しい行列に伴ふ音樂であつて悲痛と壯嚴との表出に於て比類なき名曲である。曲を組立てゝゐる多くのモテイーフは何れも此の四部劇の前の部分に於てジーグフリードに最も關係の深い人物又は事件と結合して既に現はれたもので、此の進行曲は英雄の一代を回顧した告別の辭とも言ふことが出來る。最初ヴエルツング一族の悲しい運命を語るモテイーフに起つて間もなく死の打撃のモテイーフ（英雄が倒れた時響いたもの）が現はれる。此の樂句は後に幾度も他の樂句を繞つて現はれ全曲に力強い悲壯の感を與へる。これから以下年代の順を追うてジーグムンド、ジーグリンデ及び愛のモテイーフが相次で響くが、やがてハ長調の劍のモテイーフに移る。此の一節は普通の葬送進行曲に於けるトリオの部分に相當するもので、凡てが光明に充ち、死のモテイーフすらも凱旋の喇叭の如く響いて死をすら恐れぬ勇士の俤を偲ばしめる。劍に續いてジーグフリード及英雄のモテイーフに進み、曲は力強い絶頂に達するが、やがて現はれるブリユンヒルデのやさしいモテイーフは漸次に陰翳の度を加へて終に曲は落膽の溜息のやうに消える。

二　管絃樂

エグモントの序曲　　ベートーヴエン作曲

本曲は作者が四十歳の時の作でゲーテのドラマの序曲として書いたものである。ゲーテの作は西班牙王フィリップ二世の新教徒（プロテスタント）の壓迫に反抗して處刑せられた十六世紀のネーデルランドの貴族エグモント伯を主人公としたもので、劇の最後は伯がネーデルランド國民の自由の戰士たることを自覺して從容死に就くやうに描いてある。ベートヴエンの此の曲は劇の內容を細かに寫さうとしたものではなく唯だ大體の筋を暗示するやうに作られて居る。曲は暴君の壓制に惱む國民の苦悶の聲に始まり奮闘の結果遂に暴政を脫し得た國民の勝利の歡聲に終るのである。

三　ヴアイオリン獨奏

コンチエルト第五番　　ヴイユータン作曲

ベリオの弟子及び後繼者として白耳義樂界の覇者となつたヴイユータンは十九世紀の最大ヴアイオリン家の一人で、彼の作曲も重に此の樂器の爲になされて居る。彼はベリオの裝飾に富んだ技術を繼承すると同時に堅實な表現をも加へて師よりも更に優れたものを作り出し、ヴアイオリン樂の發達に貢獻した所が少くない。ヴイユータンの曲は唯だ空虛な技術の誇示によつて俗耳を驚かすやうな曲とは違ひ概ね確實な古典的形式に優れ、高尙な意味に於て華美絢爛と呼ぶべきものである。交響曲（シンフオニ）風に作つたコンチエルト六曲中で本演奏の第五番（イ短調）は第四番（ニ短調）と共に最も愛賞せられる名曲で、構造は型の如く三部分に分れ、過度ならざる快速調より表情に富める緩徐調を經て活躍せる快速調に終る。

四　管絃伴奏混聲合唱

『畏しや神』（リード）　　シユーベルト作曲

シユーベルトは獨逸語の小歌に眞の藝術的作曲をなした最初の人で、ゲーテ、シルレル、ハイネ等の名作のみならず、彼の友人なりし墺國の小詩人等の作歌にも彼の優れた音樂を惜まなかつた。本演奏の讃美歌（一八二五年作）は友人ピルケル（Pyrker）の詞に基いたもので、シユーベルトの音樂の表出力と旋律和聲に於ける自由な變化とは此處にも窺はれる。邦語の歌詞は原意に副ふやうに作られてゐる。

歌　詞

（合唱）畏しや神。天（あめ）も地（つち）も神の御稜威（みいつ）。畏しや神。
疾風（はやち）とあらはれて、雨をいざなへば、
山飛び海さかだつ。畏しや神。
疾風とあらはれて、雨をいざなへば、
山飛び海さかだつ。畏しや神、畏しや。
（獨唱）木（こ）の葉木の實（み）のゆらめきにも
見よ御稜威見えたり。

野山には花と咲き、み空には星と散る。

（合唱）響けば鳴神か、はたゝがみか、火の雷。

御稜威あな畏こや、わが胸をのゝく、

あな畏こや、わが胸をのゝく、あなかしこや。

（獨唱）神よ神よ、わが世をさきはへ。

（合唱）畏しやあまつ神、畏しや神。

五　ピアノ獨奏

謝肉祭　　シューマン作

本曲は廿二の小曲より成る（但し9は眞の無言曲なり）

1. Préambule（前奏曲）2. Pierrot（喜劇の道化役の稱）3. Arlequin（同上）4. Valse noble（上品な圓舞曲）5. Eusebius（人名）6. Florestan（人名）7. Coquette（浮氣もの）8. Réplique（繰返し）9. Sphinxes（禍）10. Papillons（胡蝶の舞）11. A. S. C. H.—S. C. H. A. Letters Dansantes（文字の舞踏）12. Chiarina（人名）13. Chopin（人名）14. Estrella（人名）15. Reconnaissance（認知）16. Pantalon et Colombine（道化役の夫婦）17. Valse allemande（獨逸の圓舞曲）13. Paganini(人名) 19. Aveu(誓約) 20. Promenade（逍遙）21. Pause(休憩) 22. Marche des Davidsbündlers contre les Philistins（俗人に對するダヴイド結社員の進行曲）

シューマンは古典派以後の作家中、純藝術的意味の外に開拓者としての歴史的意味を有する少數者の一人である。彼の藝術的特質に就ては事新しく言ふことはない。着想の豐富なことや、半ば熱情的半ば夢想的な彼の思想の特殊な魅力は既に約一世紀の間世界を狂喜せしめたが今尙ほ其の重な作は光彩を失はない。然し彼の藝術的意志を十分理解するには、彼の歴史的意味に就て數語を費す必要がある。古典派の三大家ハイドン、モツアルト、ベートーヴエンは當時に於て未曾有の豐かさと特別な感じの深さとを示したのみならず、又た大きな音樂的形式を藝術的に發達せしめた。次の時代は彼等から形式の規則を承け繼いでそれの實現を大なる慣例と信じ、此の偉大な模範から承けた形式的言語の守護者を以て自ら任じた。然し彼等は先人の豐富な思想を缺いてゐた爲に、此の形式に自己の清新な生命を充すことが出來なかつた。かくして間もなく衰頽が來り、眞の作曲術が無内容の形式主義に陷つた。此に於てこれに反抗して形式的技能の熟練よりも音樂の精神内容を重んずる若い藝術家の一團が起つた。此の傾向をロマンテイツクと呼ぶ理由は凡て感情に充ちたこと、古い藝術、文學、自然、宗教、哲學、或は神秘でも）に熱中することが創作の刺戟となつたからである。シューマンは音樂のみならず、凡ての藝術を捕へた此の運動の先頭に立つて、創作のみならず評論家としても新理想のために戰つたのである。此の傾向をもつた若い作家等は狹い仲間うちで自らダヴイド結社員と稱して居た。これは故事にある王子ダヴイデが野卑な巨人ゴリアテを倒したやうに、古びた慣例を倒さうといふ意味である。卽ち青年の精神と精神的武器の精練とによつて有力な敵を壓倒しやうといふ意味である。さうして實際彼等は首尾よく舊派を征服することが出來た。かくて舊派は今日唯だ歴史に殘るのみで吾等の感じには最早藝術として是認せられなくなつた。ロマンテイツクによつて空想と感じとが再び彼等の權利を得たのである。此の空想的熱情が今日尙ほシューマンの作品から吾等に語り、吾等を魅して宛も其の樂が最近に出來たものゝ樣に思はせるのである。

然しロマンテイツク派は自由な卽興作や空想を好む結果としてシンフォニやソナータのやうな大曲よりも寧ろ小さな樂式を扱ふことに長じてゐた。さればシューマンのピアノの曲の重心も此の種類の藝術に存するのであるが、然し彼は常にかゝる小曲の多數を内部的に連結して一の長篇に纏めやうと試みた。『胡蝶』『森の場景』『謝肉祭の道化』『クライスレリアーナ』『ダヴイド結社員』就中最も内容に富んだ『謝肉祭』は其の例である。『謝肉祭』では一連の氣分畫が我等の傍を疾過して、その全體が謝肉祭といふ民間の祭にありさうな雜多な光景を現出する。此の中の多くの曲の特性は標題によつて十分明かである。

或る一定の人物が音樂的に表はされてゐるのもある。『ショパン』はロマンテイツク派の尊敬してゐた此の作家の樣式に作られ、『パガニニ』と

名くる曲は有名なヴアイオリン奏者の技術曲をピアノで模倣したものである。更に又他の標題は狹いダヴイド結社員中の人物を指示してゐる。『キヤリナ』は後のシユーマン夫人クララの假名、『フロレスタン』、『オイセビウス』はシユーマン自身の熱烈な性質と夢想的な性質とにそれ〴〵附けた名である。シユーマンは彼自身の編輯して居た音樂雜誌の中に此の二つの名を署名して異つた氣質の立場から巧に藝術上の問題に就ての彼の判斷を下し、またそれを證明したりした。最終の曲は『ダヴイド結社員の進行曲』で活潑な、殆ど噺笑するやうな一のモテイーフが古い小歌(リード)『爺(ぢゞ)が婆(ばゞ)を貰つた頃は』と戰つて、終に前者が勝利を占め、かくして廣く俗人に對する青年の勝利といふ意味を音樂的に表はしてゐる。これが全體の根本思想であつて、それが謝肉祭の行列といふ姿を取つて現はれてゐるのである。されば謝肉祭の行列をなす人々が假面と假裝に隱れて歡樂嬉戲を縱にして居るのと同樣に此曲全體の藝術的意味そのものも幾分假面を被つてゐるのである。

然し純音樂上から見ても此の內部的連絡は表れてゐる。何となれば極少數の曲を除けば凡ての主想が同一のモテイーフの核から成立つてゐるからである。此の核はa—es—c—h、(書きかへればas—c—hの四音から出來てゐる。此の書き換へた音をよせるとAsch となるが、これはシユーマンが此作を献じた女の友エルネスト、フリツケンの生地の名なのである。『スフアンクス』といふ曲では此等の音が順序をかへて沈默の謎として表はされる。『舞踏する文字』は騷がしいワルツの拍子で互に亂れて旋回する。此の一寸した思想の遊戲も至る所に自然と藝術の一致を求めるロマンテイツクの特徵である。シユーマンは彼の自然な發明的空想を藝術的な仕方で幾度も同一音符やそれの節奏(リヅム)及結合の變化によつて燃燒せしめたのである。かくして此のロマンテイツクの傑作は小曲の連續でありながら、極めて技巧に富んだ組織となり、その中に感じと精神、靈感と結合の才能が稀有な絶好の仕方で調和的に連結せられて現はれるのである。(此項は演奏者バルダス氏自身の解說による)。

六　管絃樂

『オベロン』の序曲　　ヴエーベル作曲

『オベロン』は獨逸ロマンテイツク歌劇の始祖ヴエーベルの晚年の作で、其の筋は佛蘭西の古話に基いてゐる。仙界(フエアリランド)の王オベロンは或る時夫人テイタニアと仲たがひの末、如何なる危難に遇つても操をかへぬ夫婦を見出すまでは仲直りをしないと誓つたが、其後和解を思ひ立つて切りにかゝる夫婦を求めてゐるうちに、ユオンといふ若い武士が重罪を犯した罰としてバグダツトへ順禮をなし、其處の王女レチアを妻として連れ歸るべき旨の宣告を受けたと聞き、先づユオンを助けて兩人を引合せた後、歸りの航海中に船を覆して彼等を引離し、種々の誘惑によつて二人の操のかはらないのを確かめ、これを機として己は夫人と和解をなし、ユオンと其妻は故鄕に歸らせたといふ話である。—本演奏の序曲は凡て歌劇中に現はれる數樂句を組み合せて作つたもので、序節の後に聞えるホルンの短い樂句は第一幕(仙界の場)に響くオベロンの靈笛の音である。この響と共に仙界の光景が暫く吾等の眼前に開けて木管の最弱奏に現はれる輕いスタカートの樂句が巧みに嬉戲する仙女の姿を寫し出す。然し間も無く管に起る進行曲風の樂句と共に活氣ある快速調に轉じて第一主想がヴアイオリンの速い音形(フイギユア)(第二幕航海の樂句)で始まり、次で第二の優しい樂想がクラリネツトから絃に移る。これはユオンの愛の歌である。以上の外に尙ほ第三の樂想として有名なレチアの『大洋のアリア』の中の一節を用ひてあるが、それから以下は此等の樂想を展開又は反復して短かい華々しい尾句で結ぶ。

大正十二年十二月二十三日　学友会秋季演奏会

秋期大演奏會(十二月廿三日)

一、管絃樂　　會員

葬送行進曲　　ショパン

二、バリトン獨唱　　內田榮一

ヴアイオリン助奏　桂平太

（イ）ジョセラン子守歌　ゴルター
（ロ）悲歌　マスネー
三、ピアノ獨奏　藤田英子
　ロンドカプリチヨーソ　メンデルスゾーン
四、ソプラノ獨唱　渡邊宣子
（イ）さすらひ人　シューベルト
（ロ）「フイガロ」中の伯爵婦人の小抒情調　モツアールト
五、ピアノ獨奏　喰田比佐子
　變イ長調ソナタ第一樂章　ベートヴエン
六、ヴアイオリン獨奏　奥村艶子
　レゲンデ　ウイニオースキイ
七、混聲合唱　會員
（イ）別れ　ローエ
（ロ）森の日　ボヘミヤ民謠
（ハ）秋のみのり

第二部

八、ピアノ獨奏　次田五代
　ソナタパセテイツク終章　ベートヴエン
九、アルト獨唱　幕田しな子
　歌劇「豫言者」中のローマンス　マイヤーベーヤー
十、ピアノ獨奏　寺田ヒサミ
　ホ短調ソナタ第一樂章　グリツヒ
十一、ピアノ三重奏　ピアノ　田中規矩士
　ヴアイオリン　高階哲應
　セロ　伊達三郎
　トリオ第四番　ベートヴエン
十二、ヴアイオリン獨奏　上野ひさ子
　ニ短調第二競奏曲第一樂章　ブルツフ
十三、管絃樂附混聲合唱　會員
　タンホイゼル行進曲　ワグネル
　指揮者　大塚助教授

（『音樂』學友會、第二巻、大正十三年三月、一二三～一二四頁）

大正十三年二月二十三日、二十四日　第四十六回定期演奏会

大正十三年二月二十三日土曜日二十四日日曜日　午後一時半開場二時開會

音樂演奏曲目

東京音樂學校

一、管絃樂
　皇帝進行曲……ヴァーグネル作曲
　Kaiser-Marsch……Wagner
二、混聲合唱　指揮者　教授　信時潔
　皇太子殿下御成婚奉祝歌……教授　高野辰之作歌
　……教授　信時潔作曲
三、絃樂
　絃樂曲（作品一六）……ジュオン作曲

Streichorchester (op. 16) ……Juon
Schlummerlied
Terzen-Intermezzo
Tanz

四、女聲合唱

日本の古歌によれる女聲合唱曲（作品五）……レントファイ作曲
甲、神聖なる湖畔に（大津皇子）
乙、夢に過ごしゝ生涯（小野小町）
丙、日本（大伴家持）
Frauenchoere nach alt-japanischen
Dichtungen (op. 5)……Lendvai
a) Am heiligen See (Ohotsuno Ozi)
b) Vertraeumtes Leben (Onono Komachi)
c) Nippon (Ohotomono Sukune Yakamochi)

五、管絃樂

ニ長調交響曲……レスニシェック作曲
Symphonie D dur ……Reznicek
Andante—Allegro ma non troppo
Andante
Tempo di minuetto
Allegro con anima

指揮者　教師　グスターフ、クローン

演奏曲目解説及歌詞

一　管絃樂

皇帝進行曲　ヴァーグネル作曲

本曲はヴァーグネル（Wagner 1813—1883）が普佛戰爭凱旋記念の爲に作つたもので、一八七一年初めて伯林に演奏せられた。曲頭に現はれる管絃總奏の威嚴ある主想は暫く非常な力で展開せられるが、それが鎭まると、眞鍮管と銅皷に導かれて第二の主想が木管に響き、續いてマルチン、ルツテル作の有名な讃美歌「堅き城」（„Ein' feste Burg"）の初句が力強い絃樂の伴奏で木管の充實した和聲の中に聞える。此の樂句を展開して行く次の一節は戰爭の光景を描くものとして聞かれるが、頓て凱旋の歡呼に似た喧噪の裏に前の讃美歌が今一度眞鍮管の光輝ある音色に現はれる。以下はファンファーレを合圖として、曲は再び最初に歸つて第一主想が全管絃の强奏に現はれて曲を結ぶ。

二　混聲合唱

皇太子殿下御成婚奉祝歌　高野辰之作歌　信時　潔作曲

新玉の年こゝに立ちて、
蒼き憂うち忘れ、
物芽ぐみ人勇む此の時、
我等が仰ぐ日嗣の皇子、
月の御影承け嗣がすべき妃呼び迎へ給ふ。
八十日日はあれど、
生日の足日の今日よ、
氣は淸く日は照りそひ、
梅匂ひ鳥うたふ。
天津神は天の八重雲を
稜威の千別きに千別きて天降り給ひ、
國津神は高山の末短山の末に上りまして
天地にわたる此の歡を壽ぎまさむ。
いざ國民明き直き誠の心もて、
天地の神と共に、
聲を一つにして壽ぎまつらむ
いざいざ。

三　絃樂

絃樂曲（作品一六）　ジユオン作曲

〔大正十一年五月十三日、十四日の「音樂演奏目梗概」を參照。〕

四　女聲合唱

日本の古歌によれる女聲合唱曲（作品五）

レントファイ作曲

レントファイ(Erwin Lendvai 1882――)はブダペストに生れ、二十三歳の時伊太利ミラノに趨いてプッチーニの下に研究したが、數年の後獨逸に移住して一九一九年からはベルリンの知名な一音樂學校の作曲學教授をしてゐる。作品五の「女聲合唱組曲（スヰート）」は凡て八曲あつて、みな日本古歌の飜譯に節を附けたものであるが、本演奏には其のうちの三曲を選ぶ。（甲）は大津ノ皇子の死なれる時磐余ノ池のほとりで涙ながらに詠まれたといふ「もゝつたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隱りなむ」の御歌らしく、（乙）は小町の「花の色は」の譯と思はれる。（丙）は「大和には群山（むらやま）あれど、とりよろふ天の香具山、登り立ち國見をすれば、國原は煙立ち立つ。海原は鷗立ち立つ。美し國ぞ蜻蛉洲（あきつしま）大和の國は」（舒明天皇御製）を採つたものと思はれるが、原譜には家持作としてある。

レントファイの此作は彼の師が歌劇「お蝶夫人」に現はした日本趣味を古い無伴奏牧歌（マドリガル）の小形式に試みたものとして興味がある。彼は獨逸□來□此國の合唱曲を研究するに從ひ、段々と現代の刺激的な音樂に遠かつて古い音樂の單純な樣式を追ふやうになつた。本演奏の曲なども其の一例として聽くことが出來やう。（獨文歌詞は次の頁にあり）

a) Am heiligen See (Ohotsuno Ōzi)

Blueten schneien, ein Nebelschleier verhuellt den See!
Die Wildgaense schreien am heiligen Weiher von Iware.
Dunkler Traeume Schar tanzt ihren Reihen; mein Herz ist schwer.
Wenn uebers Jahr die Wildgaense schreien, hoer' ich's nicht mehr.

b) Vertraeumtes Leben (Onono Komachi)

Die Blumen bluehten in lokkenden Farben.
Ich sah in den wellenden Strom meines Lebens.
Die Blumen starben.
Sie bluehten und starben vergebens.

c) Nippon (Ohotomono Sukune Yakamochi)

Das Land Yamato hat Berge in seinen Reichen.
Aber der schimmernde Kaguyama hat nicht seines Gleichen.
Auf seinem Gipfel stand' ich und blickte nieder ins Land!
Aus gruener Eb'ne stieg langsam zum Himmel Rauch, und entschwand.
Ueber die Meerflut der schlohweisse Fluegel der Moewe strich.
O Yamato Libelleneiland, wie lieb' ich dich! wie lieb' ich dich!

五　管絃樂

ニ長調交響曲　　レスニシェック作曲

一九二〇年から伯林の國立音樂學校の作曲法教授をしてゐるレスニシエツク(E. N. v. Reznicek 1860――)は墺國の名門に生れて最初法律に志したが、後ライプチツヒの音樂學校に學んで、卒業後獨逸の諸市に樂長として活動しながら作曲にも從事してゐた。作曲者としての彼は今迄の處歌劇方面の作品――「ドンナ、デイアーナ」近作「靑髯の騎士」及び「ホロフエルネス」など――に於て最も有名であるが、然しリード、合唱曲、室樂、管絃樂等あらゆる形式にも優れた技倆を認められてゐる。彼は樂長としての長い經驗によつて管絃樂の凡ての技術に精通し一方に最も近代的な色彩を用ひると共に常に旋律的な基調を保ち、又た複雜なモチーフの細工を施しながらも全體の組織の透明を失はないといふのが彼の特性として賞讃せられる點である。交響曲の作品には標題樂的のものもあるが、寧ろ最近に起つた絕對樂復興の機運を助けた一人として注目せられてゐる。本演奏のニ長調の如きも其の一例で古い交響曲の形式を用ひた純音樂で、而も其作法色彩に於て全く近代的なものである。

大正十三年三月一日　学友会第三十七回土曜演奏会

猶今三學期の、土曜演奏會と御成婚記念大演奏會曲目は左の通りです。

第卅七回土曜演奏會曲目（三月一日）

一　部

一、管絃樂　　會員
　結婚行進曲　　メンデルスゾーン
二、ソプラノ獨唱　　佐藤美子
　歌劇「ミニヨン」中「君よ知るや南の國」　トーマ
三、ピアノ二重奏　　一宮みち子
　　沼澤ゆき子
　ソナタニ長調　　モツアールト
四、セロ獨奏　　沖不可止
（イ）ローマンス　　カムパニヨル
（ロ）ガボツト　　ラモー
五、ピアノ獨奏　　福島舍子
　未　定

二　部

六、合唱及獨唱　　會員
　歌劇「蝶々夫人」　　獨唱　早川美奈
七、ピアノ獨奏　　河村信義
　未　定
八、ソプラノ獨唱　　岡見幾久子
　歌劇「ロメオとジユリエツト」中ワルツの歌　グノー
九、ピアノ獨奏　　山田菊江
　未　定
十、ヴアイオリン獨奏　　桂平太
　ローマンス（ヘ長調）　　ベートーヴエン
十一、混聲合唱　　會員
　「憶ひ出」　　信時潔

（『音樂』學友會、第二号、大正十三年三月、一二四頁）

大正十三年三月二日　学友会御成婚記念演奏会

御慶事記念大演奏會（三月二日）

曲　目

一　部

一、混聲合唱　　會員
（イ）郊宴歌　　ゼダーマン
（ロ）憶ひ出　　信時潔
二、アルト獨唱　　曾我部靜子
　歌劇「豫言者」中カバテイナ　マイヤーベーヤー
三、ピアノ獨奏　　田中規矩士
　スケルツオ變ロ短調　　ショパン
四、ソプラノ獨唱　　立松房子
（イ）ニヒツ　　シユトラウス
（ロ）歌劇「リゴレツト」中カロノーメ　ヴエルデイ

二　部

五、ヴアイオリン獨奏　　蜂谷龍子
　ポロネーズブリランテニウヰニオースキー
六、バリトン獨唱　　船橋榮吉
（イ）エロデイア「消ゆる夢」　マスネー
（ロ）歌劇「フアウスト」中「此處を去る前」　グノー

七、ピアノ獨奏
八、管絃樂　婚祝祭行進曲　メンデルスゾーン
　君が代

指揮者　大塚淳
伴奏者　萩原英一

（『音樂』學友會、第二号、大正十三年三月、一二四～一二五頁）

大正十三年三月二十五日　卒業式

大正十三年三月廿五日（火曜日）午後一時三十分開始

卒業證書授與式順序

東京音樂學校

一、卒業證書授與
二、校長式辭
三、文部大臣祝辭
四、卒業生總代謝辭

演奏曲目

一、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　次田五代
　ソナタ（ホ短調作品七第一樂章）……グリーク作曲
二、アルト獨唱……本科聲樂部卒業生　幕田シナ
　歌劇「ジョコンダ」中のロマンス（女の聲）…ポンキエルリ作曲
三、ヴァイオリン獨奏……甲種師範科卒業生　伊藤純三
　い、カヴァティナ（作品八五第三番）……ラッフ作曲
　ろ、ペルペテゥーム、モビレ（作品一八七第四番）……ボーム作曲
四、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　福島舍子
　慰安曲（第二番及第三番）……リスト作曲
五、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　川村信義
　ノヴェレッテ（ホ長調作品二一第七番）……シューマン作曲
六、メッゾソプラノ獨唱……本科聲樂部卒業生　宮田八重
　歌劇「サムソンとダリラ」中の抒情調……サン、サーンス作曲
七、ピアノ獨奏……甲種師範科卒業生　高野スエ
　悲壯なるソナタ（ハ短調作品一三第一樂章）…ベートーヴェン作曲

休憩十分間

八、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　山田菊江
　六變奏曲（ヘ長調作品三四）……ベートーヴェン作曲
九、ヴァイオリン獨奏……研究科器樂部修了生　栗原大治
　激情せる幻想曲（作品三五）……ヴューターン作曲
十、ソプラノ獨唱……本科聲樂部卒業生　渡邊宣子
　魔王（作品一）……シューベルト作曲
十一、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　喰田比佐
　十七莊重なる變奏曲（作品五四）……メンデルソーン作曲
十二、ヴァイオリン獨奏……研究科器樂部修了生　渡邊シヅ
　競奏曲（イ短調作品一〇四第九番
　第二樂章及第三樂章）……ベーリオ作曲
十三、ピアノ獨奏……研究科器樂部修了生　小鹽かづ
　ラプソディ（ト短調作品七九第二番）……ブラームス作曲
十四、混聲合唱

い、マリア搖籃の歌（作品五一第二番）……ゲオルグ、シューマン作曲
ろ、音樂（作品二三第三番）……グラーベルト作曲

大正十三年五月三十一日、六月一日　第四十七回定期演奏会

大正十三年五月三十一日（土曜日）六月一日（日曜日）午後一時半開場二時開會

音樂演奏曲目

入場料　金貳圓
學生券金壹圓

東京音樂學校

一、管絃樂

歌劇「アナクレオン」の序曲……ケルビニ作曲
Ouvertuere zu „Anacreon“ ……Cherubini

二、管絃樂付ピアノ獨奏　ヴィリ、バルダス

競奏曲第四番ト長調（作品五八）……ベートーヴェン作曲
（カデンツはバルダス作）
Konzert No. 4 G dur, op. 58……Beethoven
(Kadenzen von W. Bardas)

三、混聲合唱

（イ）マリア搖籃歌（作品五一）……ゲー、シューマン作曲
ソプラノ獨唱　早川美奈
（ロ）かくばかり幸なりしことなし（作品五四第五番）……エム、ブルッフ作曲
ヴァイオリン伴奏　上野ひさ
ピアノ伴奏　弘田龍太郎
a) Maria Wiegenlied op. 51……G. Schumann
Soprano Solo: M. Hayakawa
b) „Wie mochte je mir wohler sein“ op. 54, No. 5 ……M. Bruch
Violin Solo: H. Ueno. Piano: R. Hirota

四、管絃樂

夢の子等（作品四三）……イー、エルガー作曲
Dream-Children op. 43 ……E. Elgar

五、高音獨唱　早川美奈

（イ）我が心の冠よ（作品二一、第二番）
（ロ）小夜曲（作品一七、第二番）
……エル、シトラウス作曲
a) Du meines Herzens Kroenelein, op. 21, No. 2
b) Staendchen, op. 17, No. 2
……R. Strauss

六、女聲合唱

十七世紀の民謠二曲……ヴィリ、バルダス編曲
（イ）見んと思ふものは
（ロ）いかに美しく良きぞ
Zwei Volkslieder aus dem 17. Jahrhundert……bearb. v. W. Bardas
a) „Wer sehen will“
b) „O wie so schoen und gut“

七、管絃樂

ニ長調交響曲……エー、レスニシェック作曲
Symphonie D dur……E. v. Reznicek
Andante, Allegro ma non troppo
Andante
Tempo di minuetto
Allegretto con anima

指揮者　教師　グスターフ、クローン

演奏曲目解說及歌詞

一　管　絃　樂

歌劇『アナクレオン』の序曲　　ケルビニ作曲

ケルビニ（Cherubini 1760—1842）は伊太利フイレンツエの生れであるが、二十二歳の時から巴里に定住して、長い生涯の間、此の市で多くの歌劇や宗教樂を創作し、又晩年巴里音樂學校の教授及校長として多くの弟子に感化を及ぼしたので、通例佛蘭西古典派（クラシック）の大家中に數へられてゐる。彼が佛蘭西へ來てから出した歌劇はグルツクの流を酌んだ劇的表出を重んじたもので、其の一なる『ファニスカ』はハイドン、ベートーヴエン程の大家からも讃辭を得たといふ。此の前に出した『アナクレオン』（古代希臘の享樂派詩人の事蹟を描いたもの、一八〇三年初演）は筋の不出來や其他で間も無く廢れたが、其の壯麗な序曲は今日も此の種の序曲の模範作として賞美せられてゐる。彼の純粋な高雅な古典的樣式（クラシックスタイル）、クツキリとあざやかな輪廓、細かな內部の仕上げ、旋律和聲の力と美、管絃編成の巧妙等は悉く此の曲に於ても窺ふことが出來る。歷史的に見ると本曲は規則正しい均齊の形式を守つたモツアルトの序曲からベートーヴエン型をくづした劇的なる序曲への橋渡しとして興味がある。又た曲中に現はれ來る劇的な長いクレシエンド（ゆつくりと段々に進む漸強奏）は後のロツシニが好んで用ひた手段の魁とも見られる。

二　管絃樂付ピアノ獨奏

競奏曲第四番ト長調（作品五八）　ベートーヴエン作曲

本曲はベートーヴエンのピアノ競奏曲（コンセルト）中で變ホ調（第五番）のものと共に最も重要な位置を占めるものである。構造に於ては比較的宏大でないが、着想に於ても開展（殊に第一章の）に於ても比類なく美しいものである。又たピアノと管絃樂との調和は他の競奏曲よりも數倍完全である。殊に第二章は全く管絃樂とピアノの響との對立から生じたものゝ如く、管絃とピアノとの閖吟式對話のやうに聞える。休止なしにこれに續く機智に富んだ終曲は緩徐曲の哀れな特性と好い對照をなしてゐる。此の競奏曲は一八〇七年に作られたもので、ベートーヴエンはそれの初演の時と其後一度ヴイーンのロブコヴイッツ公の宮殿で之を自ら演奏したのである（一八〇七年及一八〇八年）。今日の演奏は日本では最初のものである。（演奏者自身の解說による）

三　混　聲　合　唱

（イ）　マリア搖籃歌（作品五一）　　ゲー、シユーマン作曲

ゲオルク、シユーマン（Georg Schumann 1866—　）は一九〇〇年に伯林ジング、アカデミーの指揮者となり其後ブルツフの後繼者として王立音樂學校作曲部の一部長となつた人で、合唱樂の方面に於ける最近の名家である。本演奏の曲は基督教會の主現節（一月六日）に歌ふやうに作つたもので、此の日は基督降誕後間もなく東の邦の博士等が星に導かれて嬰兒を拜しにベテレヘムに來た事（所謂『三王來朝』）を記念する祭日である。曲は獨唱（聖母の守歌）と之れに和する牧羊者の合唱とよりなる。マリアの詞は凡て獨逸語で書かれてゐるが、其の前半——『よく寢よ小さきエス、母は汝を搖りて歌へり、やがて槽に王の群來りて、禮物と心とを汝に献げん、よく寢よ小さきエス』——を歌ふ間に、合唱は拉典語で『寢よ小さきエス』を繰返し、その時母は心して靜かに汝を呼びさまさん、やよ寢よ、母は守れり』で獨逸語になる。後半のマリアの歌はエスを呼びさます詞で、『よく開けよ愛するエス、澄みたる青き眼を、汝を慕ひて王等は來り、乳香、沒藥、黃金を献ぐ』と歌ふ時合唱は『汝を禮拜せん（拉）』を繰返して最後に『疾く眼を明かに開けよ、愛の源なる心をも開けよ。愛する小さきエス、さめよ、さめよ（獨）』で結ぶ。

Maria Wiegenlied

Sopran Solo (Maria) Nun schlummre fein, mein Jesulein!
Chor (die Hirten) Dormi Jesule dormi.
Solo Die Mutter wiegt und singt dich ein.
Chor Dormi Jesule dormi.
Solo Bald kommt zur Krippe der Koenige Schar,
Chor Dormi Jesule dormi.
Solo Die bringen die Gaben und Herzen dir dar,

Schlummre fein, mein Jesulein,
Chor Dann weckt sie sacht dich wohlbedacht.
Nun schlummre, die Mutter wacht.
Solo Nun schlummre fein, mein Jesulein!
Chor Dormi Jesule dormi.
Solo Nun oeffne fein, lieb Jesulein,
Chor Adoramus te.
Solo Da sind ja die Koen'ge so treu dir, so hold;
Chor Adoramus te.
Solo Sie opfern dir Weihrauch und Myrrhe und Gold.
Chor Adoramus te.
Solo Nun oeffne schnell die Aeuglein hell.
Chor Nun oeffne schnell die Aeuglein hell, das Herz auch, der Liebe Quell!
Solo Nun oeffne schnell die Aeuglein hell,
Chor Lieb Jesulein, wach auf, wach auf!

（ロ） かくばかり幸なりしことなし　ブルツフ作

ブルツフ（Max Bruch 1838—1920）は獨逸ケルンに生れ、フエルデイナンド、ヒラーやライネツケに教を受けた後、或は指揮者或は作曲家として其の長い生涯の間獨逸の諸市及び英國にも活動した人で、最近は伯林の王立音樂學校の作曲部長をしてゐた。彼の作曲中最も重要なのは管絃樂付の長大な合唱曲で、已に長い間樂界に持噺されてゐる。本演奏の曲は文豪パウル、ハイゼの物語に基いたピアノ伴奏の合唱曲五曲中の終りのものでジーヒエントロスト（十四世紀の樂人）の最後と題してある。歌は愛によみがへる心の幸福を抒したもので、彼が屢々人に歌ひきかせ、又た死に臨んでヴアイオリンで奏したものといふ。

Siechentrosts Ende

Wie mochte je mir wohler sein,
In Lieb ergruent das Herze mein,
Mein Mut thut sich erneuen;
Mein holdes Lieb, dess habe Dank,
Und nimmer wank von herzelicher Treuen,
Von herzelicher Treuen!

Ach ich, ich will dir alle Zeit
In Fruehlingslust und Winterleid
In ganzer Treue leben.
Mein holdes Lieb, so nimm mich hin,
Mein Herz und Sinn einig dir ergeben,
Bleibt einig dir ergeben.

四管絃樂

夢の子等　エルガー作曲

エリザベス王朝やパーセル時代の隆盛の後、約二百年の間優れた作曲家を出さなかつた英國は十九世紀の末エルガー（Sir Edward Elgar 1857—）の出現によつて自國に近代的天才を得たことを誇つてゐる。ウースターなる舊教々會のオルガニストを父として生れた彼は幼時から音樂に親しんだが、作曲の方面は大部分獨學によつて今日の位置に達したといふ。本演奏の『夢の子等』（一九〇二年初演奏）は小管絃樂で奏する二つの短曲で、文豪チヤールス、ラムの『イーリア短文集』中の有名な一文に基いて、其の心持を表したものである。ラムの文は生涯獨身を守つた彼が夢に自分の二兒に向つて、若かつた頃の思ひ出を物語ることを叙してゐる。そして最後にアリスといふ少女に結婚を求めて得なかつた七年間の苦心を物語つた時、それを聽いてゐた女兒の顔がアリスの俤その儘になつたので、我が子か昔のアリスか分らなくなつた。——これから以下の數行をエルガーは彼の曲の初に掲げてその中に表はさうとする意味を示してゐる——『かくて我が見つむる間に二人の子は漸くかすかにうすれ、退きまた退きつゝ、終には唯だはるかなる彼方に二つの悲しげなる形の見ゆるばかりにて、物言はねど、不思議や我にかく言ふごとく思はれたり。——『我等はアリスの子等にあらず、汝が子等にもあらず、我等は全く子等にあらず。無なり、無にも至らぬ夢なり。唯だありしやも知れぬ者なり。』

第一曲はト短調の沈んだ氣分のアンダンテである。次の曲は長調の稍活氣を帶びたアレグレツトであるがやがてアンダンテに移り、最後は極めて緩かに憂愁の感じを以て終る。ラムの文の全體の情調がこゝに表はされてゐることは容易に認められる。

五　高音獨唱

（イ）我が心の冠よ
（ロ）小　夜　曲

エル・シトラウス作曲

此の六月十一日に滿六十歳に達するシトラウス（Richard Strauss 1864―）は已に永く全歐洲の樂界に最高權威として認められて來た。彼の主作が標題付きの管絃樂や歌劇の大作にあることは言ふまでもないが、小歌の方面に於ても彼は特殊の位置を占めてゐる。即ちワグネルの理論を承けてリストの發達させた小歌の新樣式（詩の一言半句にも一々之れに應ずる旋律和聲を配する仕方）を一層完全に導いた作家として重要である。

（イ）『汝我が心の冠よ』は作品二一（一八八八年作）『飾りなきふし』五曲中の佳作で詩の率直な感じを善く表はしてゐる。詞は賢こげにふるまひ、僞を語りつゝ、媚を賣るおほかたの女に比べて我が婦のやさしくおとなしきを黄金の冠に譬へ或は森の薔薇に譬へなどしてほめる意。（ロ）『小夜曲』（愛する人に寄せる夜の歌）は作品一七（一八八六年作）六曲中の自眉で、早い時代の作であるが百に餘るシトラウスの小歌中で最も廣く愛せられる一つである。『獨逸の小歌』の著者ビショーフの説によると此の小夜曲だけはシトラウスの新樣式の例外で、即ち以前のシューマンやイェンゼン一派の道（詩の大體の氣分を捕へて曲を附するもの）を歩むものと爲してゐる。

a) Du meines Herzens Kroenelein.

Du meines Herzens Kroenelein, du bist von laut'rem Golde,
Wenn andere daneben sein, dann bist du noch viel holde.
Die andern thun so gern gescheut, du bist gar sanft und stille,
Dass jedes Herz sich dein erfreut, dein Glueck ists's, nicht dein Wille.
Die andern suchen Lieb' und Gunst mit tausend falschen Worten,
Du ohne Mund- und Augenkunst bist wert an allen Orten.
Du bist, als wie die Ros' im Wald, sie weiss nie von ihrer Bluethe,
Doch jedem, der vorueberwallt, erfreut sie das Gemuethe.

——F. Dahn

b) Staendchen.

Mach' auf, mach' auf, doch leise, mein Kind,
Um Keinen vom Schlummer zu wecken,
Kaum murmelt der Bach, kaum zittert im Wald
Ein Blatt an den Bueschen und Hecken.
Drum leise, mein Maedchen, dass nichts sich regt,
Nur leise die Hand auf die Klinke gelegt,
Mit Tritten wie Tritte der Elfen so sacht,
Um ueber die Blumen zu huepfen,
Flieg' leicht hinaus in die Mondscheinnacht
Zu mir in den Garten zu schluepfen.
Rings schlummern die Bluethen am rieselnden Bach
Und duften im Schlaf, nur die Liebe ist wach.
Sitz' nieder, hier daemmert's geheimnisvoll,
Unter den Lindenbaeumen,
Die Nachtigall uns zu Haeupten soll
Von uns'ren Kuessen traeumen,
Und die Rose wenn sie am Morgen erwacht,
Hoch gluehen, hoch gluehen von den Wonnenschauern der Nacht.

——A. F. v. Schak

六　女聲合唱

十七世紀の民謠二曲　　バルダス編曲

本校教師バルダスが古曲をとつて伴奏付二部合唱に作つたもの。（イ）『見んと思ふ者は』は愛に傷いて惱むこゝろを抒べたもの（ロ）『如何に美しく[ママ]好きを』は憂を捨てゝ樂しみを盡す宴樂の歌。（歌詞は次頁に在り）

a) Wer sehen will.

Wer sehen will zwei lebendige Bronnen, zwei lebendige Bronnen,
Der soll mein zwei betruebte Augen sehen,
Die mir vor Weinen schier sind ausgeronnen.
Wer sehen will viel tief und grosse Wunden, viel tief und grosse Wunden,
Der soll mein sehr verwund'tes Herz besehen,
Also hat's Lieb versehrt oben und unten
Wer wissen will, wer mir antu solch Plagen, wer mir antu solch

Plagen,
Soll nach der Schoensten auf der Erden fragen,
Sie ist allein Ursach all' meiner Klagen.

b) O wie so schoen und gut.

O wie so schoen und gut ist doch ein freier Mut,
Wenn man von Traurigkeit nichts weiss derzeit.
O wie so schoen und gut ist doch ein freier Mut,
Wenn man von Traurigkeit nichts weiss derzeit.
Lasst uns hier froehlich sein, halten ein Taenzelein,
Lustig ein und aus, lass' die Sorgen drauss, hier nicht herein!
O wie so schoen und gut ist doch ein freier Mut,
Lustig ein und aus, lass' die Sorgen drauss, hier nicht herein!
Der ist ein Narr doch ganz, der liebt nicht Sang und Tanz,
Und der bei schoenen Frau'n und Wein nicht froehlich will sein!
Wenn hell die Geige klingt, lieblich die Floete singt,
Und der Dulcian frisch auch stimmet an, s'Herz hoch aufspringt.
Lasst uns hier froehlich sein, halten ein Taenzelein,
Lustig ein und aus, lass' die Sorgen drauss, hier nicht herein!
O wie so schoen und gut ist doch ein freier Mut,
Lustig ein und aus, lass' die Sorgen drauss', hier nicht herein!

七　管絃樂

ニ長調交響曲　　レスニシェック作曲

〔大正十三年二月二十三日、二十四日の「演奏曲目解説及歌詞」を参照。〕

大正十三年六月十四日　学友会第三十八回土曜演奏会

第三十八回土曜演奏會（大正十三年六月十四日）

曲　目

第　一　部

一、混聲合唱　　會員

（イ）墓　詣……作者未詳

（ロ）良　友……ジルヘル

二、ピアノ獨奏　　澤崎秋子

ソナタニ長調作品二十八……ベートーヴエン

三、テノール獨唱　　木下保

（イ）海邊にて……シユーベルト

（ロ）春の信仰……シユーベルト

四、ピアノ獨奏　　大月投網子

ソナタ變ホ調作品十三……フムメル

休　憩

第　二　部

五、メゾソプラノ獨唱　　吉澤なを子

オルフオイス中の「我妻を失ひて」……グルツク

六、ピアノ獨奏　　木村悦子

アンダンテヘ長調……ベートーヴエン

七、ソプラノ獨唱……宮田八重子

歌劇豫言者中の「アゝ我息子よ」……マイエルベール

八、ヴアイオリン獨奏　　高階哲應

（イ）スウヴニール……ドウルドラ

（ロ）ロンデイノ……ベートーヴエン―クライツスラー

（ハ）スパニツシユダンス……サラサーテ

九、混聲合唱　　會員

（イ）最後の舞踏……獨逸民謠

（ロ）獵夫……ラインの民謠

指揮者　船橋榮吉

（『音樂』學友會、第三号、大正十四年三月、一一二頁）

大正十三年六月二十一日、二十二日　演奏旅行

◇演奏旅行

演奏旅行は本年度中三回行はれた。第一回は六月二十一日と二十二日の二日間北陸地方（金澤及富山）に、第二回は十一月七日浦和に、第三回は十一月二十二日靜岡に出張演奏した。

金澤富山は各公會堂に於て、浦和は高等學校に於て、靜岡は劇場に於て、各晝と夜二回づゝ左のプログラムによつて演奏をなし、各會とも大成功をもつて終つた。旅行參加者は各回百餘名である。

金澤、富山にて（大正十三年六月二十一日二十二日）

曲　目

一、混聲合唱……東京音樂學校諸氏

晝
- い、獵師（ライン民謠）……オックス編
- ろ、空しく老いぬ（瑞典民謠）……ユングスト編／高野辰之作歌

夜
- い、終の舞踏（獨逸民謠）……オックス編
- ろ、雲雀の歌……メンデルソーン作曲／高野辰之作歌

二、ピアノ獨奏……濤川瀧江氏
ホ短調狂想的ロンド……メンデルソーン作曲

三、アルト獨唱……幕田シナ氏
- い、四つ葉のクローヴア……ロイテル作曲／吉丸一昌作歌
- ろ、搖籃の歌……ブラームス作曲

四、ヴアイオリン獨奏……蜂谷龍氏
- い、レジアンド（譚曲）
- ろ、マズールカ（古代舞踏曲）……ウイニアフスキー作曲

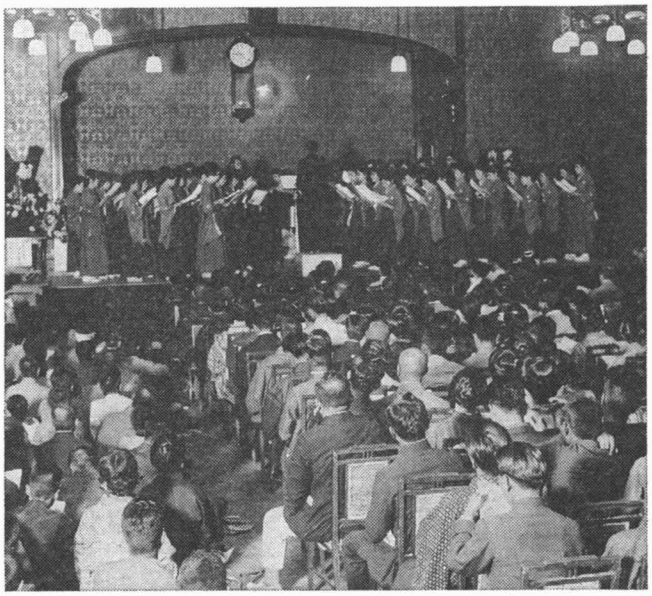
五、ソプラノ獨唱……早川美奈氏
- い、夜の歌
- ろ、荒野の薔薇……シューベルト作曲

六、バリトン獨唱……船橋榮吉氏
歌劇「道化師」の序歌……レオンカヴアルロ作曲

休憩十分間

七、混聲合唱……東京音樂學校生徒諸氏
湖上……メンデルゾーン作曲／旗野十一郎作歌

八、アルト獨唱……幕田シナ氏



大正13年6月21，22日，金沢にて，東京音楽学校生徒諸氏の混声合唱

歌劇「豫言者」中のアリオーソ……マイエルベール作曲
九、ピアノ獨奏……濤川瀧江氏
嬰ハ短調ソナタ「月光の曲」……ベートーヴエン作曲
十、ソプラノ獨唱……早川美奈氏
歌劇「道化師」中の鳥の歌……レオンカヴアルロ作曲
十一、ヴアイオリン獨奏……蜂谷龍氏
譚曲及波蘭舞踏曲……ヴユータン作曲
十二、混聲合唱……東京音樂學校生徒諸氏
歌劇「タンホイゼル」中の祝歌……〔ヴアクネル作曲〕〔乙骨三郎譯歌〕
指揮者　船橋榮吉氏
伴奏者　萩原英一氏

（『音樂』學友會、第三号、大正十四年三月、一一七～一一八頁）

大正十三年六月二十七日、二十八日　学友会春季演奏会

大正十三年六月〔二十七日（金曜日）〕〔二十八日（土曜日）〕午後二時
東京音樂學校奏樂堂ニテ
春季大演奏會
東京音樂學校學友會

曲目

第一部

1　混聲合唱　會員
湖上……メンデルゾーン
2　ヴアイオリン獨奏　高折周子
コンセルト八番第一樂章……ローデ
3　テノール獨唱　鳥居忠五郎
憧れを知る人のみぞ……チヤイコフスキー
二人の擲彈兵……シユーマン
4　ピアノ獨奏　山田菊江
ハ短調ロンド作品一……ショパン
5　ソプラノ獨唱　管絃樂伴奏　渡邊宣子
『フイガロの結婚』中のレシタテイブとアリア……モツアールト

休憩

第二部

6　管絃樂　會員
組曲『ペーアギント』……グリーク
1　曙の情調
2　オーゼの死
3　アニトラの舞曲
7　ソプラノ獨唱　淺野千鶴子
ヲ・ツインガラ（ジプシイの娘）……ドニゼツテイ
8　ピアノ獨奏　境進
未定……
9　ヴイオロンセロ獨奏　坂西久治
コンセルテイノ……ロンベルヒ
10　混聲合唱　會員
臨終の彌撒……ケルビーニ

入進誦

昇階誦
怒の日

指揮者 大船塚橋榮淳吉（合管絃樂唱）
〔原資料横組〕

THE GRAND CONCERT OF THE GAKUYÛKAI OF THE TOKYO ACADEMY OF MUSIC

FRIDAY, JUNE 27th,
&
SATURDAY, JUNE 28th, 1924.
AT 2 P.M.

PROGRAMME

PART I

1. MIXED CHORUS: Members
   Kojô .....*Mendelssohn*
2. VIOLIN SOLO: Miss K. Takaori
   Concert[o] No. 8 (1st movement)...*Rode*
3. TENOR SOLO: Mr. C. Torii
   a. Nur wer die Sehnsucht kennt
   ..... *Tschaikowsky*
   b. Die beiden Grenadiere .....*Schumann*
4. PIANO SOLO: Miss K. Yamada
   Rondo in C minor op. 1 .....*Chopin*
5. SOPRANO SOLO WITH ORCHESTRA: Miss N. Watanabe
   Recitative and Aria from "Marriage of Figaro" .....*Mozart.*

INTERVAL

PART II

6. ORCHESTRA: Members
   Suite "Peer Gynt".....*Grieg*
   1. Morgenstimmung.
   2. Ases Tod.
   3. Anitras Tanz.
7. SOPRANO SOLO: Miss C. Asano
   La Zingara .....*Donizetti*
8. PIANO SOLO: Mr. S. Sakai
   Undecided .....
9. VIOLONCELLO SOLO: Mr. K. Banzai
   Concertino .....*Romberg*
10. MIXED CHORUS: Members
    Missa Pro Defunctis .....*Cherubini*
    Introitus
    Graduale
    Dies Irae

Conductors Mr. E. Funabashi (*Chorus*)
Mr. J. Ohtsuka (*Orchestra*)

大正十三年六月二十九日　邦楽会第二十七回演奏会

大正十三年六月二十九日午後一時半

於　上野公園　東京音樂學校
第貳拾七回演奏曲目

曲　目　　邦樂會

一、三曲　青柳
二、歌澤節　〔海晏寺／春は賑ふ〕
三、常磐津節　妹背山婦女庭訓　緣苧環
四、新内節　若木仇名草
五、江戸長唄　英執着獅子

大正十三年十月二十五日、二十六日　学友会秋季演奏会

秋季大演奏會（大正十三年十月二十五日二十六日）

曲　目

第一部

一、合唱　會員
秋に……ブラームス
二、ヴアイオリン獨奏　音川仙三
小競奏曲ニ長調……オスカー、リーデイング
三、ソプラノ獨唱　佐藤美子
歌劇　豫言者中のアリオーソ
『あゝ我が子よ』……マイエルベール
四、ピアノ獨奏　小城文子
悲壯奏鳴曲作品十三番ロンド（第三樂章）ベートウベン

休憩

第二部

五、三重唱　鳥居忠五郎／内田榮一／小代義雄
歌劇　フアスト中の決闘の三重唱……グノー
六、ヴアイオリン獨奏　林良輝
小競奏曲（第一樂章）……ジット
七、ソプラノ獨唱　岡見幾久子
歌劇　リゴレツト中のアリア
『慕はしき名』……ヴエルデイ
八、ピアノ獨奏　喰田比佐子
未定
九、ソプラノ及バリトン獨唱附合唱　會員
ソプラノ獨唱　早川美奈子
バリトン獨唱　内田榮一
美はしきエレン作品二十四番…マックス、ブルツフ
指揮者　船橋榮吉

（『音樂』學友會、第三号、大正十四年三月、一一四～一一五頁）

大正十三年十一月七日　演奏旅行

浦和にて（大正十三年十一月七日）

曲　目

一、混聲合唱……東京音樂學校生徒諸氏

夜鶯の歌（作品五九、第四番）……メンデルソーン作曲
墓詣（古代獨逸民謠）……小金井君子作歌
聖ルチーア（伊太利民謠）……ユングスト編
二、ピアノ獨奏……田中規矩士氏
メヌエツト（作品六四）……パデレフスキ作曲
テウロルドハウゲンにての結婚日（作品六五、第六番）…
グリーク作曲
三、アルト獨唱……曾我部靜子氏
さすらひ人（作品四、第一番）……シユーベルト作曲
永久の愛につきて（作品四三、第一番）…ブラームス作曲
四、ヴアイオリン獨奏……蜂谷龍氏
聖譚曲（作品一七）……ヴイーニアフスキ作曲
無終曲（作品三四）……リース作曲
五、ソプラノ獨唱……長坂好子氏
夜の歌……シユーベルト作曲
アヴェ、マリア（ヴアイオリン助奏附）……
バツハ作曲　グーノー編
六、バリトン獨唱……船橋榮吉氏
歌劇「フアウスト」中のヴアレンテインの抒情調……
グーノー曲
歌劇「エロデイアード」中の抒情調……マツスネ作曲

休憩十分間

七、混聲合唱……東京音樂學校生徒諸氏
夢（作品一四六、第三番）……｛シユーマン作曲 佐藤誠實作歌
雲雀の歌（作品四八、第四番）……｛メンデルソーン作曲 高野辰之作歌
八、アルト獨唱……曾我部靜子氏
歌劇「豫言者」中のカバティーナとアリア……
マイエルベール作曲
九、ピアノ獨奏……田中規矩士氏
小歌「余は唯一の小舍を持つのみ」を基とせる八の變奏曲
ベートーヴエン作曲
十、ソプラノ獨唱……長坂好子氏
歌劇「アイーダ」中の抒情調……ヴエルデイ作曲
十一、ヴアイオリン獨奏……蜂谷龍氏
流浪民の節「作品二〇」……サラサーテ作曲
十二、混聲合唱……東京音樂學校生徒諸氏
歌劇「タンホイゼル」中の祝歌……｛ヴアグネル作曲 乙骨三郎譯歌

指揮者　船橋榮吉氏
伴奏者　萩原英一氏

（『音樂』學友會、第三号、大正十四年三月、一一八～一一九頁）

大正十三年十一月十六日　邦楽会第二十八回演奏会

大正十三年十一月十六日午後一時
於　上野公園　東京音樂學校
第貳拾八回演奏曲目

邦樂會

曲　目

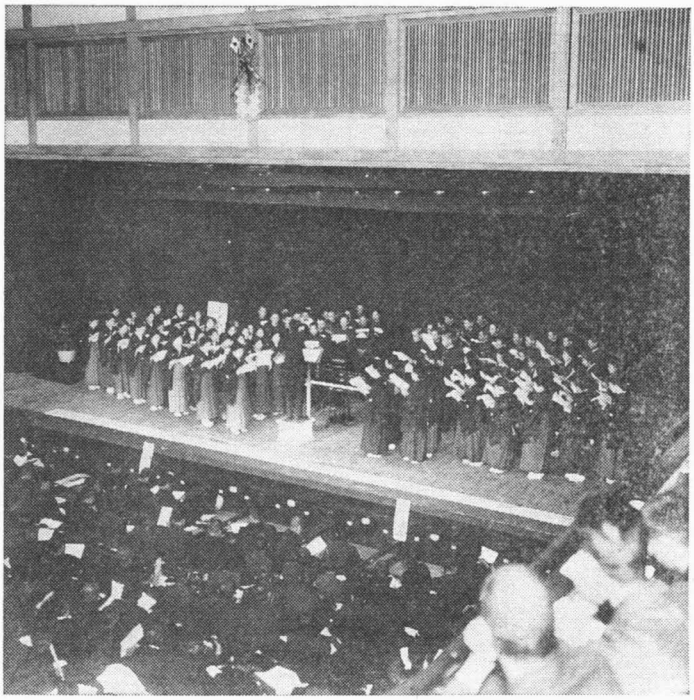
一、春夜障子梅（夕霧）
二、春日屋時次郎　山名屋浦里　明烏夢泡雪
三、喜三の庭
四、新歌舞伎十八番之内　大森彦七
五、賤機帯

大正十三年十一月二十二日　演奏旅行

靜岡にて（大正十三年十一月二十二日）

曲　目

一、混聲合唱……東京音樂學校生徒諸氏
夜鶯（作品五九、第四番）……メンデルゾーン作曲
墓詣……古代獨逸民謠／小金井君子作歌
聖ルチア……伊太利民謠／ユングスト編
二、ピアノ獨奏……山田菊江氏
六の變奏曲（作品三四）……ベートーヴエン作曲
三、アルト獨唱……幕田シナ子氏
四葉のクローヴァ……ロイテル作曲／吉丸一昌作歌
搖籃の歌（作品四九、第四番）……ブラームス作曲
四、ヴアイオリン獨奏……多　久　寅氏
激情的幻想曲（作品三五）……ヴュータン作曲
五、ソプラノ獨唱……渡邊宣子氏
歌劇「フアウスト」中の花の歌……グーノー作曲
六、セロ獨奏……平井保三氏
イ長調ソナタ（第六番）……ボッケリニ作曲
休憩（十分間）
七、混聲合唱……東京音樂學校生徒諸氏
夢（作品一四六、第三番）……シューマン作曲／佐藤誠實作歌



大正13年11月22日，静岡にて，東京音楽学校生徒諸氏の混声合唱

雲雀の歌（作品四八、第四番）……〔メンデルゾーン作曲 高野辰之作歌〕

八、アルト獨唱……幕田シナ子氏
歌劇「豫言者」中のアリオーソ……マイエルベール作曲

九、ピアノ獨奏……山田菊江氏
軍隊的波蘭舞踏曲（作品四〇、第一番）……ショパン作曲

十、ソプラノ獨唱……渡邊宣子氏
なぜ（作品六）……チアイコフスキ作曲
夜の歌（作品一〇六、第一番）……ブラームス作曲

十一、ヴアイオリン獨奏……多久寅氏
競奏曲中のロマンツエ（作品二二、第二番）
オーバータツス「マヅールカ」（波蘭舞踏曲、作品一九）
ヴイーニアフスキ作曲

十二、混聲合唱……東京音樂學校生徒諸氏
歌劇「タンホイゼル」中の祝歌……〔ヴアグネル作曲 乙骨三郎譯歌〕
指揮者 船橋榮吉氏
伴奏者 萩原英一氏

（『音樂』學友會、第三号、大正十四年三月、一一九～一二〇頁）

東京音樂學校生徒出演
靜高開校記念の大音樂會
靜岡歌舞伎座に於て開催

靜岡高等學校開校記念音樂會は昨二十二日午後一時から四時半迄、同六時から九時半迄靜岡歌舞伎座で開會

晝は 各學校生徒、團體、縣高等官其他一般生徒の父兄等入場し夜間は一般市民の入場を許したが、東京音樂學校生徒が特に靜高の招聘を受けて出演した事とて聽衆は定刻前から會場に押掛け滿員の盛況を呈し金子高等學校長の開會の挨拶に次いで

演奏 に移り、〔曲目省略〕大喝采であつたが就中多久寅氏のヴアイオリン獨奏平井保三氏のセロ獨奏は一際目立ち聽衆中には伊東知事、辛島內務部長、坂本警察部長、伴野市長其他縣高等官、上流家庭の婦人等多數であつた

（『靜岡民友新聞』大正十三年十一月二十三日）

大正十三年十一月二十九日、三十日 第四十八回定期演奏会

大正十三年十一月二十九日土曜日 午後一時半開場
三十日日曜日 二時開會

音樂演奏曲目

入場料 壹等金參圓 貳等金貳圓 學生券金壹圓（土曜日ニ限ル）

東京音樂學校

一、絃樂附ヴァイオリン
獨奏者 安藤幸
多久寅

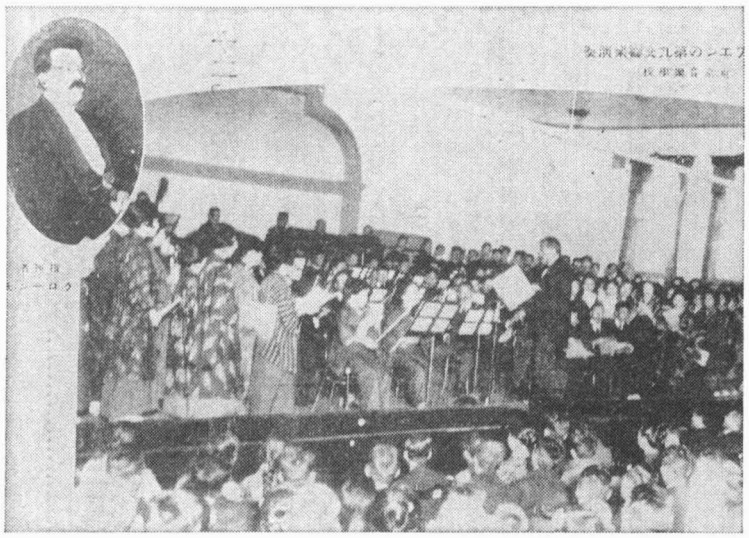
ニ短調競奏曲……バッハ作曲
Konzert für 2 Violinen in D moll mit Streichorchester……Bach
Vivace—Largo ma non tanto—Allegro

二、獨唱 マルガレテ・ネトケ・レーヴェ Margarete Netke-Loewe

休憩（十五分間）

三、管絃樂及合唱
獨唱者 長坂好子 曾我部靜子 澤崎定之 船橋榮吉

第九交響曲（作品一二五）……ベートーヴェン作曲
シルレル作頌歌『歡喜に寄す』に基ける結尾合唱曲附



大正13年11月29日，30日，ベートーヴェン作曲交響曲第９番本邦初演。指揮，G．クローン。東京音楽学校奏楽堂にて（写真は『音樂グラフ』第３巻１号，大正14年１月，より）

Neunte Symphonie mit Schlusschor
über Schillers Ode „An die Freude“ (Op. 125) .....Beethoven
Allegro ma non troppo, un poco maestoso
Molto vivace—Presto—Molto vivace
Adagio molto e cantabile—Andante—Adagio
Presto—Allegro assai—Presto—Allegro assai—
Andante maestoso—Allegro energico—
Allegro ma non tanto—Prestissimo—Maestoso—Prestissimo

指揮者　グスターフ・クローン
Gustav Kron

演奏曲目解説及歌詞

一　絃樂付ヴァイオリン　ニ短調競奏曲　バッハ作

本曲は多分バッハ（J. S. Bach 1685—1750）がケーテン公の宮廷の樂長を勤めてゐた時代（一七一七—一七二三年）の作である。此の宮廷には良い風琴が無かつた代りに優れた小管絃團があつて種々の合奏が流行してゐたので、バッハは此處へ來てから盛に合奏の新曲を作つた。バッハの競奏（コンチェルト）と呼ぶ曲は多く三章からなり、第一章は大抵フーガ的作法を用ひ、第二は小歌の形式、第三は華美な速い進行になつてゐる。本演奏の曲も其例に洩れない。この曲は二つのヴァイオリンが最も單純な絃のオルケストラに配せられてゐる。スピツタが言ふに『此曲では二つのヴァイオリンが互に對抗するといふよりも寧ろ協同して絃樂に對抗するやうに用ひられてゐる。各のヴァイオリンはバッハの樣式としては當然な獨立性を以て扱はれてゐるのである。中の章（Largo ma non troppo）は高雅な表情に充ちた旋律で、此處は絃樂が單なる伴奏として用ひられてゐる。これは當時の緩徐曲の慣例である』——本曲は二つのヴァイオリンで奏する凡ての競奏曲中特に秀でた位置を占めてゐる。それは今日單に二重競奏曲といへば直ちにこの曲を意味する事によつても知られる。

二　高音獨唱　『聖靈降臨祭唱咏曲（プヰングスト　カンタータ）』中の抒情調（アリア）　バッハ作

唱咏曲（カンタータ）は歌詞の上に連絡ある數個の聲樂曲（獨唱合唱の類）を連ねた管絃伴奏の長曲で、オラトリオと異る點は叙事的要素を能ふ限り除いて叙情的表出を主とする樣式に存する。宗教的唱咏曲（カンタータ）の空前絶後の名家はバッハで、生涯を通じて三百近くを作つた、（今傳つてゐるのだけでも約二百に及んでゐる。）大部分は彼の最終期（即ちライプチツヒのトーマス教會のカントールの職に就いてから後）に出來たもので、就中本演奏の曲の如きは晩年の作（スピツタによれば一七三五年の降臨祭の爲に作つたものである。此の中の高音獨唱の抒情調（アリア）は今日最も廣く知られてゐるもので、其の歡喜に充ちた流暢な調は善く歌詞の意にも適ひ、また樂しい五月の祭の氣

分をも表はしてゐる。伴奏（本演奏にはピアノを用ふ）の低音は一種の自由なオブリガート低音をなして進み、歌聲の止む後も後奏として續いて行く。

――歌詞の意は、『信仰深き吾が心よ、よろこべ、歌へ、戯れよ。汝のエスはそこに在り。去れよ悲、去れよ嘆。我汝等に唯告げん、我がエスはそこに在りと』

Mein glaeubiges Herze.
Arie aus „Pfingst Cantate."

Mein glaeubiges Herze frohlokke, sing', scherze, mein glaeubiges Herze frohlokke, sing', scherze, frohlokke, sing', scherze, dein Jesus ist da, mein glaeubiges Herze frohlokke, sing', scherze, frohlokke, sing', scherze, dein Jesus ist da!

Weg Jammer, weg Klagen, weg Jammer, weg Klagen, ich will euch nur sagen, mein Jusus ist da, weg Jammer, weg Klagen, ich will euch nur sagen, mein Jesus ist da, mein Jesus ist da, weg Jammer, weg Klagen, weg Jammer, weg Klagen. ich will euch nur sagen, mein Jesus ist da! Mein glaeubiges Herze frohlokke, etc.....

『夜鶯に寄す』　　ブラームス作
『永遠の愛』

ブラームス (Brahms 1833—1897) の作品中で最も多くの人に賞美せらるるものは小歌であつて、此の方面に於ける彼はシューベルト、シューマン以後の最も重要な一人である。彼の獨唱小歌は二百近くあつて、今日歌はれるやうな愛の歌の外に、自然に對する特殊な感じを表はしたものが多い。彼の作は所謂溢いもので、一寸平凡に聞えるものでも實は念入りに精練せられてゐる。曲の表情は露骨又は仰山でなく、寧ろ控へ目であるが、靜かに味へば情趣の掬すべきものがある。伴奏のピアノは精緻に加工せられて發想上重要な役をしてゐるが、聲を蔽つて埋沒させることはなく、聲の旋律は概して大きな曲線を畫いてはつきりと聞えて行く。和音的の音を飛び飛びに進行する節の多いことは蓋し彼の一特徴で、それが屢々一種の古雅な感を與へる。本演奏の曲は彼の小歌中屈指の名曲である。

AN DIE NACHTIGALL

Geuss' nicht so laut der liebentflammten Lieder tonreichen Schall.

Vom Blue thenast des Apfelbaums hernieder, o Nachtigall!

Du toenest mir mit deiner Kehle die Liebe wach;

Denn schon durchbebt die Tiefen meiner Seele dein schmelzend Ach, dein schmelzend Ach.

Dann flieht der Schlaf von neuem dieses Lager, ich starre dann,

Mit nassem Blick und todtenbleich und hager den Himmel an.

Fleuch, Nachtigall, in gruene Finsternisse, ins Haingestraeuch,

Und spend' im Nest der treuen Gattin Kuesse, entfleuch, entfleuch!

Von Ewiger Liebe

Dunkel, wie dunkel in Wald und in Feld!
Abend schon ist es, nun schweiget die Welt.
Nirgend noch Licht und nirgend noch Rauch,
Ja, und die Lerche sie schweiget nun auch.
Kommt aus dem Dorfe der Bursche heraus,
Giebt das Geleit der Geliebten nach Haus,
Fuehrt sie an Weidengebuesche vorbei,
Redet so viel und so mancherlei:

„Leidest du Schmach und betruebest du dich,
Leidest du Schmach von Andern um mich,
Werde die Liebe getrennt so geschwind,
Schnell wie wir frueher vereiniget sind.
Scheide mit Regen und scheide mit Wind,
Schnell wie wir frueher vereiniget sind."

Spricht das Maegdelein, Maegdelein spricht:
„Unsere Liebe, sie trennet sich nicht:
Fest ist der Stahl und das Eisen gar sehr,
Unsere Liebe ist fester noch mehr.
Eisen und Stahl man schmeidet sie um,
Unsere Liebe, wer wandelt sie um?

Eisen und Stahl, sie koennen zergehn,
Unsere Liebe, unsere Liebe muss ewig, ewig bestehn!"

三　管絃樂及合唱

第九交響曲　　ベートーヴェン作

シルレル作頌歌『歡喜に寄す』に基ける合唱曲附

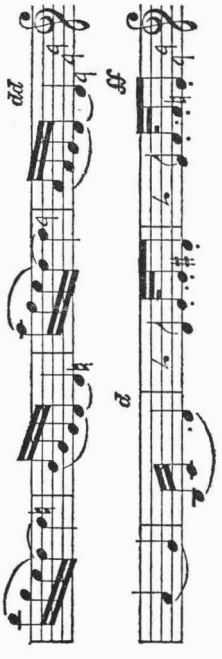
今から百年前（一八二四年五月七日）にベートーヴェン（Beethoven 1770—1827）が『第九』の初演奏をなした時は『第八』の創作以後十二年を經過してゐた。彼の生涯に於ける此の期間は俗事に煩はされて藝術的創作に最も不適當に見えるのであるが、而も本曲やニ調のミサや最終のピアノ諸曲のやうな紀念すべき大曲が此の時代に作られたのである。『第九』に出て來る樂想の中で第二章（スケルツオ）の主想は既に一八一五年の覺え帳に記されてゐるが、眞に此作に着手したのはそれから二年を經た後で、而も計畫は急に捗らなかつた。主として働いたのは一八二三年ミサを仕上げてからのことで、其頃は訪問を謝絶し親友にも會はずに專ら此の一曲に全力を集中したが、譜に書きつける迄には他の諸作よりも一層の苦心を費したのである。第九交響曲は決して一氣呵成の作でなく、各章の構造樂想の形態等に就て幾度か推敲を經たものである。殊に終曲は作者の最も思慮を費したもので、第一此處に聲樂を用ひることに就ては種々に迷つた形跡がある。そして終に此の新しい試みを斷行した後にも復た自ら誤つたと感じて純器樂の曲に改作したいと言つたといふ。此等の事情を綜合すれば、此の終曲を『器樂の破産を自白したもの』と解釋したヴアグネルの有名な説は信を措き難いものである。それは兎に角、作者が此處に『歡喜に寄する頌歌』を選んだのは一時の思ひつきではない。シルレルの名作は一七八五年に作られたものであるが、忽ち人口に膾炙して當時ボン市にゐた若いベートーヴェンの心を惹いた。彼は其頃既に之れが作曲を企て、其後も一二度之を試みて成就するに至らなかつたのである。されば彼の最後の交響曲の最後の曲は實に半生の願望を實現したものといふべきである。彼はまた此處に『頌歌』を用ひたことによつて吾々に全篇の意味を一層明かにしてくれた。何となれば悲壯な第一章、ユーモアに富んだ第二章、天の妙樂かと疑はれる第三章、これ等は凡て運命と奮闘して之に打勝ち、此世の暗黑な力から解脫せんとする意志を表はしたものと解せられるからである。そして最後の歡喜の歌は敬神と博愛とによつて此の生を樂まうとした彼の樂天的信仰を告白したものと見られるのである。

第一章、ニ短調四分二拍子の稍威嚴ある過度ならざる快速曲（Allegro ma non troppo, un poco maestoso）は不可思議な、空虛な五度の上に始まり、十六小節の後、主想は最強奏の同音（ユニソン）に表はれ、

更に變ロ長調で反復せられる。次で絃と木管の新しい樂句

に導かれて次の副想が現はれる。

本曲の構造は重に上揭の主副二樂想に基いてゐるが、然し尙ほ多くの樂句が之に加はつて非常に複雜になつてゐる。第一部の終る迄の處で重要なのは次の二樂句である。



第二部はベートーヴェンのモチーフ展開の技術の絶頂を示してゐる。此

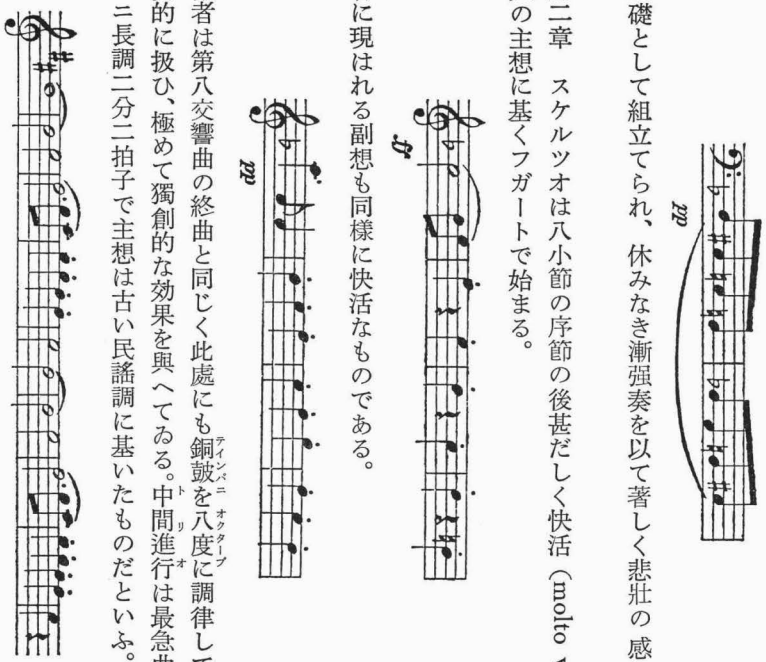
の部分の終り頃に非常に力強い風琴點が現はれ間もなく主想の反復（第三部）に入る。尾句（コーダ）は半音階的進行をなす低音

を基礎として組立てられ、休みなき漸強奏を以て著しく悲壮の感を與へる。

第二章　スケルツオは八小節の序節の後甚だしく快活（molto vivace）な次の主想に基くフガートで始まる。

木管に現はれる副想も同様に快活なものである。

作者は第八交響曲の終曲と同じく此處にも銅鼓（ティンパニ）を八度（オクターブ）に調律して諸處に獨奏的に扱ひ、極めて獨創的な効果を與へてゐる。中間進行（トリオ）は最急曲（Presto）ニ長調二分二拍子で主想は古い民謠調に基いたものだといふ。

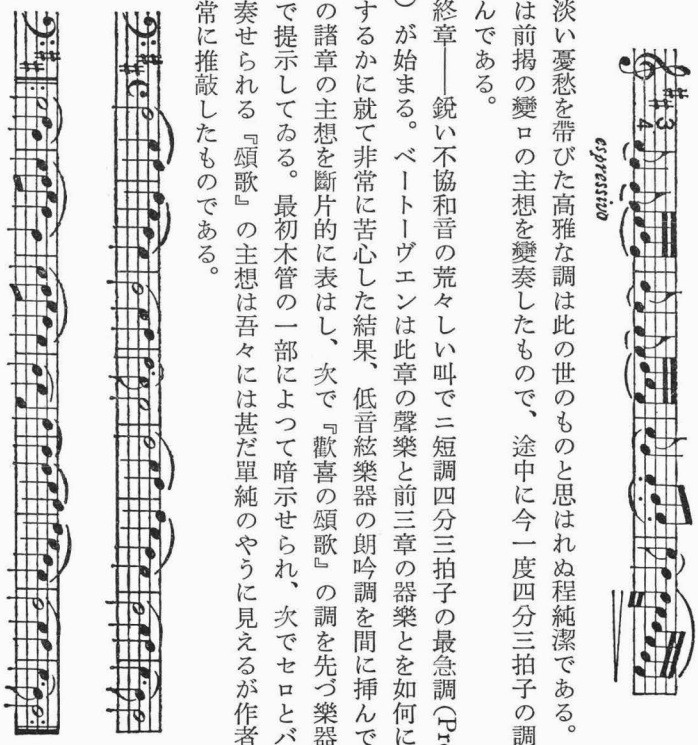


第三章、變ロ長調四分四拍子の歌のやうな甚だしい緩徐曲（Adagio molto e cantabile）は表出の深いこと、形式や音色の美しいことに於てベートーヴエンが書いた最も完全な曲の一である。木管に導かれて第一ヴァイオリンに現はれる次の主想には

眞に聽者をして恍惚たらしめるものがある。此の想の盡きる時、樂は並歩曲（Andante）に轉じ、更にニ長調四分三拍子の絶美な調が現はれる。

淡い憂愁を帶びた高雅な調は此の世のものと思はれぬ程純潔である。以下は前掲の變ロの主想を變奏したもので、途中に今一度四分三拍子の調を挿んである。

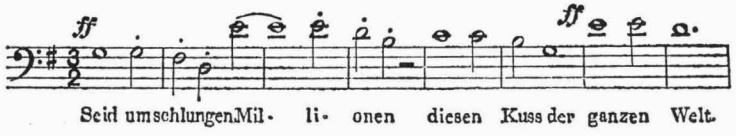
終章――鋭い不協和音の荒々しい叫でニ短調四分三拍子の最急調（Presto）が始まる。ベートーヴエンは此章の聲樂と前三章の器樂とを如何に結合するかに就て非常に苦心した結果、低音絃樂器の朗吟調を間に挿んで以前の諸章の主想を斷片的に表はし、次で『歡喜の頌歌』の調を先づ樂器だけで提示してゐる。最初木管の一部によつて暗示せられ、次でセロとバスに奏せられる『頌歌』の主想は吾々には甚だ單純のやうに見えるが作者の非常に推敲したものである。



これが漸次に他の樂器に奏せられて行くうちに、曲頭に再度現はれた全管絃の物凄い響がまたも吾等を驚かす。此時獨唱の低音（バス）は初めて語を發し誠めて言ふ『友達よ、この音ならぬ、更に快き音を奏でん。更に樂しき音を』 O Freunde, nicht diese Toene! Sondern lasst uns angenehmere anstimmen und freudenvollere と。作者自身が加へた此の一語を合圖として、以下にシルレルの詩句が合唱と獨唱とに分れて歌はれるのである。此の第二部は要するに前に樂器に現はれた主想を基にした自由な變奏（ヴアリエーション）である。

最初バス獨唱が此の歌調を表はし、次で合唱と四部唱がそれに加はる。

そして『神のみまくに』(vor Gott) の語に達する時曲はく長調三和音の延長終止をなし一轉して變ロ長調の勇壯な進行曲風 (Alla Marcia) に入る。此處は初めフアゴット、コントラフアゴット、大太鼓を組合せた珍らしい音色に始まる變奏があつて後、テノル獨唱及男聲合唱は『彼の天體の翔けるが如く樂しく』(Froh wie seine Sonnen fliegen) の詞を歌ふ。之に次で管絃樂の變奏 (主想を基にしたフガート) があつて最後は短い二長調の合唱になる。『抱かれよ億萬の人』(Seid umschlungen, Millionen) に至て曲はト長調の威嚴ある並歩調 (Andante maestoso) に轉じ、曲趣全く宗教的となる。作者は此處に新しい樂想を用ひてゐる。



之に續く過度ならざる緩徐曲 (Adagio ma non troppo) は敬虔の情溢るゝが如く洵に崇高の調である。これを終つてニ長調四分六拍子の力強い快速曲 (Allegro energico) に入り今擧げた樂想と前の主想とを組せたフーガ風の合唱になる。以下 (Allegro ma non tanto から) は曲の終局を十分にする爲めの『尾句』で此處に獨唱と合唱とがまたも『神の閃光なる歡びよ』を反復する。やがて獨唱が一種の段落に達してこれを歌ひ了ると曲は漸次に速度を早めて最急調 (Prestissimo) の合唱に移り無限の歡喜を表はして終る。

次に掲げる本曲の歌詞はシルレルの作 (十行を一章として八章を連ねたもの) の全部ではない。ベートーヴェンは其中の或る部分を採つたのみで、而も章句の位置を入れ換へた箇所もある。

An die Freude

Quartett u. Chor (Allegro assai)

Freude, schoener Goetterfunken,
Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken,
Himmlische, dein Heiligtum.
Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng getheilt;
Alle Menschen werden Brueder,
Wo dein sanfter Fluegel weilt.

Wem der grosse Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein!
Ja—wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle
Weinend sich aus diesem Bund.

Freude trinken alle Wesen
An den Bruesten der Natur;
Alle guten, alle Boesen
Folgen ihrer Rosenspur!
Kuesse gab sie uns und Reben,
Einen Freund, geprueft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott!

Freude, schoener Goetterfunken, etc.

Tenorsolo u. Chor (Allegro assai vivace, Alla marcia)

Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels praecht'gen Plan,
Laufet, Brueder, eure Bahn,
Freudig wie ein Held zum Siegen.

Freude, schoener Goetterfunken, etc.

Chor (Andante maestoso)

Seid umschlungen, Millionen!
Diesen Kuss der ganzen Welt!

Brueder—ueberm Sternenzelt
Muss ein lieber Vater wohnen.
(Adagio ma non troppo)
Ihr stuerzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schoepfer, Welt?
Such ihn ueberm Sternenzelt!
Ueber Sternen muss er wohnen.

Chor (Allegro energico, sempre ben marcato)
Freude, schoener etc.
Seid umschlungen, Millionen etc.

Quartett u. Chor (Allegro ma non tanto)
Freude, schoener Goetterfunken, etc.
Deine Zauber binden wieder, etc.

Chor (Prestissimo)
Seid umschlungen, Millionen, etc.
Tochter aus Elysium,
Freude, schoener Goetterfunken! Goetterfunken!

歌詞の意——『美しき、神の閃光なる歓よ。極楽の姫よ。吾等は情熱に酔ひ、天女よ、汝の聖堂に踏み入る。汝の靈力は慣習の隔てたるものを結び、汝の優しき翼の止まる所に凡ての人は同胞となる。』——『ひとりの友の友となる、大なる禍を得たる人、やさしき一人の婦を獲たる人は、いざ歓の聲を交へよ。さなり——一つの心なりとも、世に我がものと名づくる人は。又たその事のかなはざりし人は、泣きつゝ此の同盟より逃れよ。』——『萬物は歓びを自然の胸より吸ひ、凡ての善きもの、凡ての惡しきものは、なべて彼女の薔薇の徑を追ふ。彼女は吾等に接吻を與へき。又葡萄を與へき。死すともかはらぬ友を與へき。地を匍ふ蟲も樂みを享けたり。又たケラブは神の御前に立てり。』

『宏大なる天の原を、彼の天體の翔けるごとく樂しく、汝の路を、同胞よ、走れ。勝利に急ぐ英雄のごとくいさみて』

『抱かれよ億萬の人。全世界に此の接吻を。同胞よ——星の天幕のその上には、なつかしき父ぞ必ずいまさん。』

『汝等平伏すか億萬の人よ。造物主を想ふか汝、世界よ。彼を星の天幕の上に求めよ。星の上にぞ彼はいまさん。』

〔批評および関連記事〕

初めて演奏される交響樂
クローン教授が指揮で二百餘名

上野の東京音樂學校では來る廿九卅兩日午後二時からベートベンの第九交響樂を演奏する右のシンフオニーは、合唱付きの管絃樂で難曲中の難曲と云はれ歐米諸國でも極めて稀にしか演奏されないものゝ由で、樂士は少くも五十人以上、合唱團百餘人を要するといふ靜肅から莊嚴へ雄大へと轉じて行く傑作だと、上野音樂學校でもこの春から、クローン教授の指揮の下に同校の教授講師及び生徒等二百餘名が猛練習を重ねて來たもので、この演奏は日本では最初の試みである事とて、多大の興味と期待とを以て待たれてゐる

（『東京日日新聞』大正十三年十一月二十五日）

我國初演の第九交響樂

◇世界音樂史の一頁を飾るベートーヴエンの第九シンホニーの日本最初の演奏會は今明日及び來月六日の三日間午後二時から上野の音樂學校で開催されるが、その總練習が二十八日午後一時から同校演奏室で行はれた

◇ベートーヴエン第九シンホニーはクーロン教授の心血を注いだ指揮に依つて演奏された第一第二第三樂章と何れも管絃樂の全樂器は其特長を悉く用ひられ莊嚴華麗な音色と旋律に聽衆は音詩の世界にひきずり込まれた

◇第四樂章になるや長坂好子、曾我部靜子、澤崎定之、船橋榮吉の獨唱者と百五十餘名の合唱團がづらりとならぶ、コントラバスの獨奏から有名な「噫友よ此調に非ず」のバスの獨唱が續く合唱の部に入るや曲はクライマ

ツクスに達し聽衆の胸にひし〳〵と迫る、斯て一時間半に亘る演奏に何れもが陶醉して終つた

◇此他にバツハの絃樂附ヴヰオリン競奏曲ニ短調と今回獨逸から着任した同校聲樂教授レーヴエ女史の初演奏とがあつた、レーヴエ女史はバツハの「唱詠曲中の抒情曲」とブラームスの「夜鶯に寄す」「永遠の愛」を唄つたが落ついた寧ろ地味な然も非常に上品な唄振りに拍手は暫し止まなかつた

（『都新聞』大正十三年十一月二十九日）

第九交響樂を聽く
＝音樂學校秋季大會

◇…小泉純一

◇…永い間待ちに待たれた、ベートーフエンの第九シンフオニーの初演奏を廿九日東京音樂學校で聽く第九シンフオニーは獨りベートーフエン一代の傑作であるばかりでなく實に全世界の音樂界に未曾有の名作である。一八二四年五月、これがウインに於ける初演以來、今やその不朽の眞價は全世界の樂界から燦然たる賞讃をもつて認められてゐる

◇…グスターフ・クローン教授の努力は報いられて、教授はわが東京に於て初めて「第九」を征服した同時に聽衆全部をも征服したとも云へやう。少なくとも私は、今日のクローン氏の努力に敬意を拂はずには居られない。

◇…アルレグロに始まる第一樂章の雄大なるユニゾーンの主想より最後にシルレルの頌歌「歡喜に寄す」に基づける合唱の、歡びの頂點なるプレステイスシモに至るまで間然する所なく、樂聖の半生の願望なるこの曲の意圖を傳へた。氣高き反抗、男性的なる力の奮鬪を表す第一樂章、狂嵐の世界、放縱なる歡樂の世界なる第二樂章、愛と希望に充ちて、樂しき憧れの純情を物語る第三樂章「それ等の調にもあらず、より樂しき、歡びに充てる歌をば唱はむ」と響き渡る最終樂章の敬虔なる歡喜の叫び。——私はこゝでこの最終樂章にのみついて考へやう。

◇…ベートーフエンがこのシンフオニーに於て、器樂のみの力にて到達し得るものに滿足せず、肉聲と樂器の結合で立つたのは、當然なる推敲だ。彼が遂にこの新らしい試みを斷行した後にも尙自ら誤つたと感じて、純器樂曲に改作せんと試みたといふ説を私は信ずることは出來ない。

◇…併し、如何にして聲樂と器樂の渾然たる結合を成就するかについては非常なる苦心の拂はれたことであらう。既に與へられたる曲についてみれば、彼は、低音絃樂器のレシターテイーヴを以て、即これを器樂と聲樂を接合する混合音樂の一樣式として、兩者の間の橋渡しにしてゐる。最終樂章の初めに姿を現す前三章の三つの主題はそれ〴〵に、奮鬪、熱狂、希望のうちには、求むる歡喜を得られないことを意味し、その間に挿まれた、純器樂のレシタテイーヴは、一々これを强く否定して、同時に次に言葉で歌はれるものを決定的に暗示してゐる。

◇…この言葉は即ちバリトンのソロなる「あゝ、友よ、此調べにあらず！更に樂しき、喜びに充ちたる歌をや合はせん」である。斯くして次にシルレルの頌歌が現れてくることは、この曲の標題樂的な解釋に一道の光明を與へてゐる。

◇…こゝでクローン氏の指揮振りに就いてはたゞ無條件で受け入れよう。管絃樂も立派な出來榮だ合唱も私の豫期以上に成功してゐる。ひとり獨唱者たちがそれに對等の程度までにゆかないが殘念に思ふ。

（『東京日日新聞』大正十三年十一月三十日）

樂界消息

一記者

○十一月二十九日及び三十日の兩日は、日本の音樂史上に特筆すべき記念の日である。その日上野の音樂學校に於いて、ベートーウエンの『不朽』の第九交響樂が演奏された。指揮者はグスタフ　クローン。云ふまでもなく第九交響樂は大作であつて、日本では絕對に聞かれないものと豫想されてゐた。それが美事に奏された時、記者は涙をさへ流したのであつた。當日は、第九の外にも二三の曲目が出されたが、それは如何でもいゝ。第九に對しても多少の非難はあるであらう。然し、それにも拘はらず、とにかく、第九を、あれ程にやつてのけたのを思ふと、クローンは日本の音樂界

のレージョンドノールに價しなければならない。

（『月刊樂譜』第十四巻第一号、大正十四年一月）

第九シムフオニイを聽いて

一名、逃亡の第九シムフオニー

小泉洽

柿沼兄――

今度の第九シムフオニー演奏に就ての感想ですつて？　まア唯今の所では何にもありませんね。ですけれども、人からFの26といふ初日の切符を貰つたので、まア兎に角上野まで行く丈は行つて見ましたよ。それで怎うしたとお尋ねですか、弱りましたナ。假りにも音樂批評家なる尊い名稱を載いてゐるので何とか批評めいた事を云はなければ免職ですつて！　これは大變だ！

あのカルヴォコレッシーの「音樂批評」といふ本の開巻第一頁に、自分が好きだと思つた作曲でも專門家に云はせれば輕蔑する事があるし、又嫌やだと思つたものでも稱讃されてゐる作品もあるとのことですが、僕は今度の上野で聽いた第九シムフオニーは第一蓄音機で味ふことの出來ない感興を覺えましたネ。成程全體のリズムといふ點から見てなつて居らない許りで無く、アツタックもリリーズも目茶々々だつた上に、第二樂章スケルツオのトリオを導入するバッストロンボーンの不味さ加減からして、各のソロー樂器の下手さの程度等を數へ立てるならばあまり上出來だと專門家は云はないかも知れないが、孰れにもせよ私丈には 'is dear to me' でした。

柿沼兄――

あの日は始めつから面白くない事があつたので、そのまゝ歸つて來やうかと思つてゐたのでした。といふのは、すつぱ抜かれるのが癪だから、こちらから先に云つて了ひますがね、Fの26の椅子をやつと發見して座りますとネ、恰度その前に僕の八九年前のラヴァーが間の子の御主人と仲良さゝうに座つてゐるぢやありませんか。參りましたよ。辻潤先生ならば「野枝さんお久振りですネ」とか何んとか位は云へたかも知れますまいか、僕は閉口して横ちよの椅子を引くり返したなり後をも見ずに逃げ出した始末なんです。で、家へ歸つちまほうと思つてゐると野村光一君に摑へられたので、止むを得ず永田晴君に內證で事情を話して、やつとこさで切符を變へて貰つて隅の方から小さくなつて第九シムフォニー丈を聽いた樣な譯ですから、全く、カルヴォコレシーやヘイウード等の音樂批評の原則（？）に立つて第九シムフォニー演奏の批評的大論文なぞは書けないと云つても無理は無いと思ひますよ。ハゝゝゝ

柿沼兄――

終曲（フヰナーレ）はなか〳〵よく出來ましたネ。クローン指揮者もこの時丈は平常に無く良く棒を振つたと思ひました。澤崎君のテノルも大阪でよく聽かされた時よりも上手に聽かれました。何時でも思ふことだがこの人はステージ上に於ける樂譜の持方を知らないので、怎うもいけないと思ひますよ。

之は第九シムフォニー以後の事ですが、レーウエとかいふ人のソローを聽いてすつかり落膽しました。あれなら日本人の美しいお孃さん等の歌を聞いてゐる方が、どの位いゝか判らないと考へました。ステージに立つて上手に謳へない人でも、教室では非常に良い先生である場合が音樂史を繙けば澤山出て來ますが、レーヴエ夫人は恐らくこの種の聲樂家では無いでせうか。

兎に角、今度の第九シムフォニーは本當に良う御座いましたよ。本當に!!

（『音樂新潮』第二巻第一号、大正十四年一月、二四～二五頁）

▲東京音樂學校　廿九卅日の兩日開催される秋季演奏會は既に入場券買切れの盛況の爲め、更に十二月六日午後二時より同曲目にて第二回の演奏會を開催すると

（『都新聞』大正十三年十一月二十六日）

大正十三年十二月二十日　学友会第三十九回土曜演奏会

第三十九回土曜演奏會（大正十三年十二月二十日）

曲　目

第一部

一、混聲合唱　　會員

（イ）垣の小さき薔薇（作品六十七ノ三番）……シューマン

（ロ）マリアの子守歌（獨逸民謠）……オックス編曲

二、ピアノ獨奏　　田川千代子

ロンドブリルランテ（作品六十二番）……ウエーバー

三、ヴアイオリン獨奏　　高折周子

コールニードライ（祈りの歌）……マックス　ブルツフ

四、テノール獨唱　　鏑木欽作

（イ）蓮の花（作品二十五ノ七番）……シューマン

（ロ）小夜曲……シューベルト

五、ピアノ獨奏　　玉眞テル子

變ホ長調ソナタ（作品三十一ノ三番）……ベートウヴエン

休　憩

第二部

六、ピアノ獨奏　　千葉多可子

六ツの變奏曲（作品三十四番）……ベートウヴェン

七、ヴアイオリン獨奏　　奥村艶子

（イ）ローマンス……スヴエンヅエン

（ロ）ペルペトウムモビレ（作品三十四番）……リース

八、ピアノフオルテ獨奏　　山田滿壽美

變ロ長調変奏曲（作品八十三番）……メンデルソーン

九、アルト獨唱　　曾我部靜子

歌劇ジョコンダ中の盲目の少女の歌……ポンキエリ

合唱指揮者　船橋榮吉

（『音樂』學友會、第三号、大正十四年三月、一一五頁）

大正十四年二月二十八日　学友会第四十回土曜演奏会

大正十四年二月二十八日（土曜日）午後二時

第四拾回土曜演奏會曲目

東京音樂學校

學友會

第一部

1．混聲合唱　　會員

（イ）深山には……信時潔

（ロ）春の彌生……信時潔

2．ヴアイオリン獨奏　　李裏輔

メディテーション……バツハ、―グノー

3．バリトン獨唱　　細川碧

歌劇タンホイゼル中のヴオルフラムの歌

「我は此の貴き群衆を打眺めぬ」……ワグナー

4．ピアノ獨奏　　遠山つや子

夜の曲　ホ長調……フイールド

5．ソプラノ獨唱　　佐藤美子

歌劇フィガロの結婚中のアリア

「心の慾を知る君は」……モツアルト

6. ヴァイオリン獨唱　橋本國彦
コンチェルティノ　ホ短調（作品三十一番）……ジット

休憩

第二部

7. テノール獨唱　木下保
（イ）「アゝ妹よ私は別れねばならぬ」……シュトラウス
（ロ）「我が眠れる時」……リスト

8. ピアノ獨奏　留岡滿都子
ソナタ　ハ長調（作品第二の三番）……ベートーヴェン

9. メゾソプラノ獨唱　吉澤なを子
アデライデ……ベートーヴェン

10. ヴァイオリン　西高奥栗蜂　川折村原谷　滿周艷大龍　枝子子治子
第六ソナタ　ホ長調……バッハ
プレリュード
ガボット

11. 混聲合唱　會員
（イ）夜半に……ブラームス
（ロ）ふるさとと別るゝ歌……民謠

合唱指揮者　グスタープ・クローン
〔原資料横組〕

THE
FOURTYTH
SATURDAY CONCERT

OF
THE GAKUYÛKAI
OF
THE TOKYO ACADEMY OF MUSIC
SATURDAY,
FEBRUARY 28TH
AT 2 P.M.

PROGRAMME

PART I

1. MIXED CHORUS :— Members
   a. Miyama-niwa ..... *K. Nobutoki*
   b. Haru-no-yayoi ..... *K. Nobutoki*
2. VIOLIN SOLO :— Mr. J. Ri
   Meditation ..... *Bach.—Gounod*
3. BARITON SOLO :— Mr. M. Hosokawa
   Wolframs Erster gesang aus Tannhäuser ..... *Wagner*
4. PIANO SOLO :— Miss T. Tōyama
   Nocturne E dur (Midi) ..... *Field*
5. SOPRANO SOLO :— Miss Y. Satō
   Arie aus Figaro : Thr die Thr Triebe
6. VIOLIN SOLO : Mr. K. Hashimoto
   Konzertino e-moll op. 31..... *Hans Sitt*

INTERVAL

PART II

7. TENOR SOLO :— Mr. T. Kinoshita
   a. Ach lieb ich muss nun scheiden ..... *Strauss*
   b. Oh! quand je dors ..... *Liszt*
8. PIANO SOLO :— Miss M. Tomeoka
   Sonata C dur (Op. 2 No. 3) ... *Beethoven*
9. MEZZO SOPRANO SOLO :— Miss N. Yoshizawa
   Adelaide ..... *Beethoven*
10. VIOLIN :— Miss R. Hachiya / Mr. D. Kurihara / Miss T. Okumura / Miss K. Takaori / Miss M. Nishikawa
    The 6th Sonata ..... *Bach*
    Präludium
    Gavotte
11. MIXED CHORUS :— Members
    a. Bei nächtlicher Weil (Deutsche Volkslied) ..... *J. Brahms*
    b. Abschied von der Heimath ..... *Volkslied*

Conductor: Mr. G. KRON

◇クローン先生の指揮

クローン先生が三月をもつて辭任歸國されるので、二月二十八日の土曜演奏會には特に先生の指揮のもとに信時先生作「深山には」「春の彌生」其の他を合唱した。先生の熱誠なる御指導と會員諸氏の努力によつてまことに感激に滿ちたよきコーラスであつたとの批評をうけた。

（『音樂』學友會、第三号、大正十四年三月、一二〇頁）

大正十四年三月二十五日　卒業式

大正十四年三月二十五日（水曜日）午後一時三十分開始

卒業證書授與式順序

東京音樂學校

一、卒業證書授與
二、校長式辭
三、文部大臣祝辭
四、卒業生總代謝辭
五、賞品授與
六、卒業演奏

演奏曲目

一、ピアノ獨奏 ..... 本科器樂部卒業生 中村國子
六變奏曲 ..... ベートーヴェン作曲
二、テノール獨唱 ..... 本科聲樂部卒業生 鳥居忠五郎
好奇心（作品二五・第六番）..... シューベルト作曲
三、ヴァイオリン獨奏 ..... 甲種師範科卒業生 川上ハル
イ短調競奏曲（作品九・第七番・第一樂章）..... ロード作曲
四、ピアノ獨奏 ..... 本科器樂部卒業生 倉辻明毅
イ短調競奏曲（作品八五・第一樂章）..... フンメル作曲
五、ソプラノ獨唱 ..... 本科聲樂部卒業生 淺野千鶴子
來れ吾等は逍遙す（作品四・第二番）..... コルネリウス作曲
六、ピアノ獨奏 ..... 本科器樂部卒業生 石橋益恵
伊太利的競奏曲 ..... バッハ作曲

休憩十分間

七、ヴァイオリン及ピアノ合奏
……ヴァイオリン　本科器樂部卒業生　高仲富實子
變ホ長調二重奏……モツァルト作曲
八、ソプラノ獨唱……本科聲樂部卒業生　岡見幾久子
歌劇「ディノーラ」中の對影叙情調……マイエルベール作曲
九、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　福井直俊
變ロ短調諧謔曲（作品三一）……ショパン作曲
十、ソプラノ獨唱……研究科聲樂部修了生　吉川節子
五月の夜（作品四三・第二番）……ブラームス作曲
十一、ピアノ獨奏……研究科器樂部修了生　松野ヨシエ
ラプソディ（作品七九・第二番）……ブラームス作曲
十二、ソプラノ獨唱……研究科聲樂部修了生　早川美奈
若き尼（作品四三・第一番）……シューベルト作曲
十三、ピアノ獨奏……研究科器樂部修了生　服部登和
三二變奏曲……ベートーヴェン作曲

大正十四年五月三日　演奏旅行

五月三日、千葉縣立千葉高等女學校の創立二十五年祝賀大音樂會に招かれて出張演奏を行つた。校長、木内、岡野兩教授等の引率の許に約百名の會員が參加した。午前、午後の二回左記のプログラムによつて演奏をなし何れも大好評を拍して薄暮歸京した。

曲目

一、混聲合唱　東京音樂學校生徒諸氏
（イ）樂しき春（作品五九・第四）……メンデルソーン作曲
（ロ）さらば鄉里……大須賀績作歌
二、ピアノ獨奏（作品三四）……獨逸民謠
六の變奏曲……山田菊江氏
三、アルト獨唱……ベートーヴエン作曲
（イ）四葉のクローヴア……幕田シナ氏
（ロ）搖籃の歌……ロイテル作曲
四、ヴアイオリン獨奏……吉丸一昌作歌
譚曲と波蘭舞踏曲（作品三五）……ブラームス作曲
五、ソプラノ獨唱……奥村艷氏
歌劇「フアウスト」中の花の歌……ヴユータン作曲
六、混聲合唱……渡邊宣子氏
（イ）垣根のバラ（作品六九・第三）……グーノー作曲
（ロ）空しく老いぬ（瑞典民謠）……東京音樂學校生徒諸氏
休憩（十分間）……シユーマン作曲
七、混聲合唱……ユングスト編
（イ）春の彌生（古謠）……高野辰之作歌
（ロ）雲雀の歌（作品四八・第四）……信時潔作曲
八、ヴアイオリン獨奏……メンデルソーン作曲
サラバンドとタンブーラン……高野辰之作歌
九、アルト獨唱……奥村艷氏
……ルクレア作曲
……幕田シナ氏

大正14年５月３日，千葉県立千葉高等女学校における出張演奏。
あいさつをする岡野貞一教授（中央）

指揮者　大塚淳氏
伴奏者　萩原英一氏

その他土曜演奏會の前後數回參觀演奏を行つた。

（高橋、木下記）

（『音樂』學友會、第四号、大正十四年十一月、一三〇～一三一頁）

大正十四年五月二十三日　学友会第四十一回土曜演奏会

大正十四年五月二十三日（土曜日）午後二時

第四拾壹回土曜演奏會曲目

東京音樂學校
學友會

1. 混聲合唱　會員
（イ）覺めよと吾に呼ぶ聲す……バッハ
（ロ）キリストは死地にあり……バッハ
2. ピアノ獨奏　山越八重子
ソナタ ニ短調（作品三十一の二番）……ベートーヴェン
第一樂章
3. バリトン獨奏　細川碧
夕星の歌（歌劇タンホイザー中より）……ヴァグネル
4. 男聲合唱　會員
（イ）別れの歌……ベートーヴェン
（ロ）戰士の合唱……ベートーヴェン
休憩
5. セロ獨奏　淺野常七
歌劇「豫言者」中のアリオーソ……マイエルベール作曲
十、ピアノ獨奏　山田菊江氏
軍隊的波蘭舞踏曲（作品四〇・第一）……ショパン作曲
十一、ソプラノ獨唱　渡邊宣子氏
（イ）な　ぜ（作品六）……チヤイコフスキー作曲
（ロ）夜の歌（作品一〇六・第一）……ブラームス作曲
十二、混聲合唱　東京音樂學校生徒諸氏
歌劇「タンホイゼル」中の祝歌……ヴアグネル作曲
乙骨三郎譯歌

（イ）カンティレーナ……ゴルターマン
（ロ）コールニイドライ……ブルッフ

6. ソプラノ獨唱　佐々木爽子
（イ）日曜の歌……メンデルゾーン
（ロ）ワルツレント（歌劇ボエーム）……プッチニ

7. ピアノ獨奏　上沼房子
悲愴ソナタ（作品十三）……ベートーヴェン

8. 混聲合唱　會員
夕邊の歌……ブラームス

合唱指揮者　澤崎定之
〔原資料横組〕

THE
FOURTY-FIRST
SATURDAY CONCERT
BY
THE GAKUYÛKAI.
OF
THE TOKYO ACADEMY OF MUSIC
SATURDAY,
MAY 23RD
AT
2 P. M.

PROGRAMME

1. MIXED CHORUS :— Members
   a. Wachet auf, ruft uns die Stimme .....*Bach*
   b. Christ lag in Todesbanken...*Bach*
2. PIANO SOLO :— Miss Y. Yamakoshi
   Sonate D-moll (op. 31 No. 2) ...*Beethoven*
3. BARITON SOLO :— Mr. M. Hosokawa
   „Wie Todesahnung, Dämmerung deckt die Lande“ aus Tannhäuser.....*Wagner*
4. MALE CHORUS :— Members
   a. Abschiedgesang .....*Beethoven*
   b. Krieger Chor.....*Beethoven*

INTERVAL

5. VIOLINCELLO SOLO :— Mr. T. Asano
   a. Cantilena .....*Goltermann*
   b. Kol Nidrei.....*Max Bruch*
6. SOPRANO SOLO :— Miss S. Sasaki
   a. Sontagslied .....*Mendelssohn*
   b. „Walzer lento“ aus Bohême .....*Puccini*
7. PIANO SOLO :— Miss F. Kaminuma
   Sonate Pathétique op. 13 .....*Beethoven*
8. MIXED CHORUS :— Members
   Der Abend.....*Brahms*

Conductor : S. SAWAZAKI

大正十四年五月二十四日　邦樂会第二十九回演奏会

大正十四年五月二十四日午後一時半
於　上野　東京音樂學校奏樂堂

第廿九回演奏曲目

一、三曲		邦樂會	
吾妻獅子			
二、哥澤節		今井慶松	箏
登り下り		高橋和榮	三味線
夕ぐれ		哥澤芝金	尺八
		哥澤芝勢以	唄
三、一中節		都梅	シテ
小春天の網島		都艶	ワキ
治兵衛			三味線
		以奈花	ツレ
〔休憩十五分間〕			
四、新内節		富士松加賀太夫	三味線
彌次郎兵衛喜太八膝栗毛		吾妻路宮古太夫	
市子の段			
五、踊			
京鹿子娘道成寺			
白拍子後見	二代目西川喜代春		
	西川喜洲		

長唄	三絃	笛	小鼓	大鼓	太鼓			
六梅合新三郎	梅屋勘兵衛	望月長之助	杵屋勝三郎	杵屋五郎藏	今藤長十郎	芳村孝次郎	芳村伊太夫	芳村孝太郎

大正十四年六月十三日、十四日　第四十九回定期演奏会

大正十四年六月十三日（土曜日）午後一時半開場
十四日（日曜日）二時開會

音樂演奏曲目

入場料　金參圓
　　金貳圓
　　金壹圓（學生券）

東京音樂學校

一、ピアノ連奏……高折宮次
　　（レオニッド・コハンスキー）
ニ長調ソナタ……モツァルト作曲
Sonate für zwei Klaviere (D dur) .....Mozart.
Allegro con spirito
Andante (con moto)
Allegro molto.

二、ソプラノ獨唱……長坂好子
い、朝
ろ、親しき幻影　……シトラウス作曲
Morgen
Freundliche Vision　.....Strauss.
は、ヴァイラの歌
に、そは彼なり　……ヴォルフ作曲
Gesang Weyla's
Er ist's　.....Wolf.

三、ピアノ獨奏……レオニッド・コハンスキー
シャコンヌ……バッハ作曲
　　ブゾーニ編

Chaconne ……Bach-Busoni.

休憩十分間

四、ピアノ獨奏 ……レオニッド・コハンスキー

い、聖譚曲第二番（波の上を行く聖フランツィスクス）……リスト作曲

Legende Nr. 2 (St. Franziskus über die Wellen gehend) ……Liszt.

ろ、二の練習曲（作品二五・第一番及第十二番）……ショパン作曲

は、夜の曲（作品三二・第一番）

Zwei Etuden (Op. 25, Nr. 1 und 12)……Chopin.

Nocturne (Op. 32, Nr. 1)

に、印度の火踊 ……デ・ファルラ作曲

Indischer Feuertanz ……de Falla.

五、混聲合唱（無伴奏）

い、北も南も（作品五九・第一番）……シューマン作曲

Nord oder Süd (Op. 59, Nr. 1) ……Schumann.

ろ、森の中に晩鐘聽ゆ（作品六三・第二番）…ヅヴォルジャーク作曲

Im Haine hört das Abendläuten (Op. 63, Nr. 2)……Dvořák.

合唱指揮者　大塚淳

伴奏者　高折宮次

演奏曲目解說及歌詞

一　ピアノ連奏

ニ長調ソナタ　モツアルト作曲

モツアルト（Mozart 1756—1791）の此のソナタは多分彼が二十五歳の頃の作で、當時としては極めて新しい、又た技術の困難な曲と思はれたであらう。百五十年近く經過した今日でも二つのピアノが活潑に交錯する興味はその力を失はないのである。全部三章のうちで主要なものは第一章である。この章の力強いのに對して並歩調（アンダンテ）の第二章は四分三拍子の優美な調である。最後の章は極めて快活な主想と短調に基いた副想とが好い對照をなしてゐる。

二　ソプラノ獨唱

い　朝

ろ　親しき幻影　……シトラウス作曲

シトラウス（R. Strauss 1864—）の小歌（リード）に就て特筆すべきことは好んで同時代の詩人の詞に作曲してそれの新味を解釋し、ハイネ、レナウ等の作を主としてゐた小歌（リード）界に新傾向を作つたことである。「朝」はジョン、ヘンリ、マツケーの詩に作曲したもので彼の諸作中最も廣く知られた一つである。——「かくて朝（あした）になれば日は再び照して、我が行く途に幸（さち）深き我等を結ばん、日影を吸ふ此の地球の中にて。かくて波と青き廣き濱邊に、我等は靜かに緩かに下り立ち、互に無言に眼を見合せん。かくて幸福の無言の沈默は我等に落ちん。」作品四八中の佳作「親しき幻影」はビールバウムの詞に基いたものでその大意は——「眠れる間（ま）の夢にはあらず、白晝（ひるま）に我はそれを見たり、マーガレットの咲き充ちたる草場、その奥に林のなかに白き家一つ、玄關よりは神の像輝く。かくて我は我を愛する一人のものと、心靜かに白き家の涼しき蔭に、美しく我等を待てる平和の中に入る。」

は　ヴァイラの歌

に　そは彼なり　……ヴォルフ作曲

ヴォルフ（Hugo Wolf 1860—1903）はシトラウスのやうな多方面の人でないが、小歌の方ではシューベルト、シューマン以後の最も重要な一人である。彼の作にはアイヒエンドルフ、ゲーテ等の諸集もあるが、詩味樂趣、共に最も多方面に亘つてゐるのは一八八八年作のメーリケ集（Mörike Lieder）である。本演奏の二曲は此集に收めた五十三曲中のもので何れも

屈指の名作である。「それは彼なり」は春に寄する歌でそれの快活な情緒は曲の進むに従つて益々高潮に達する。「聞けやはるかに立琴の音」の一節に作者は立琴（レーア）を模した琶音（アルペッヂョ）を伴奏に用ひてゐる。

「ヴァイラの歌」は壮厳な殆ど宗教的な感情を表はした緩かな歌調である。ヴァイラはメーリケや其友人が青年時代の夢に畫いた理想郷オルプリツトの守護神の名で、詞は大洋の霧にとざされ、太古の水に洗はれて立つ神々しいオルプリツトの島を讃美する意である。

A) Morgen

Und morgen wird die Sonne wieder scheinen
Und auf dem Wege, den ich gehen werde
Wird uns, die Glücklichen sie wieder einen
Inmitten dieser sonnenatmenden Erde.
Und zu dem Strand, dem weiten, wogenblauen,
Werden wir still und langsam niedersteigen,
Stumm werden wir uns in die Augen schauen,
Und auf uns sinkt des Glückes stummes Schweigen.

B) Freundiche Vision

Nicht im Schlafe habe ich das geträumt,
Hell am Tage sah ich's schön vor mir:
Eine Wiese voller Margeritten;
Tief ein weisses Haus in grünen Büschen;
Götterbilder leuchten aus der Laube.
Und ich geh' mit Einer, die mich lieb hat,
Ruhigen Gemüthes in die Kühle
Dieses Hauses, in den Frieden,
Der voll Schönheit wartet, dass wir kommen.
Und ich geh, mit Einer, die mich lieb hat
In den Frieden voll Schönheit.

Er ist's

Frühling lässt sein blaues Band
Wieder flattern durch die Lüfte;
Süsse, wohlbekannte Düfte
Streifen ahnungsvoll das Land.
Veilchen träumen schon,
Wollen balde kommen.
Horch, von jern ein leiser Harfenton!
Frühling, Ja du bist's!
Frühling, ja du bist's!
Dich hab' ich vernommen!
Ja, du bist's!

GesangWeylas

Du bist Orplid, mein Land!
Das ferne leuchtet;
Vom Meer dampfet dein besonnter Strand
Den Nebel, so der Götter Wange feuchtet.
Uralte Wasser steigen
Verjüngt um deine Hüften, Kind!
Vor deiner Gottheit beugen
Sich Könige, die deine Wärter sind.

三　ピアノ獨奏

シヤコンヌ　　バッハ作ブゾーニ編

伯林の藝術院の作曲部教授をしていたブゾーニ(Ferruccio Busoni 1866—1924)は最近最も傑出した音樂家の一人で、多くの點に於てリストに似てゐる。ピアノの奏者としてはピアノの管絃樂的効果を目指す所の新しい奏法の代表者として著明であるが、又た作曲者としても一方に古いバッハの改作に於て模範的な名曲を出し、他方には最近の表現派の闘士としても知られてゐる。本演奏のシヤコンヌの原曲はバッハが多分ケーテン時代に作つたヴァイオリン獨奏組曲中の一曲で同一主想を反覆する低音の上に絶えず新たな變奏を表はして行く一種の舞曲である。

四　ピアノ獨奏

（い）聖譚曲第二番（波上を行く聖フランツイスクス）　　リスト作曲

天性宗教的素質をもつてゐたリスト（Liszt 1811—1886）はワイマールの宮廷樂長として十二年間を過した後一八六一年ローマに定住して此處に

神學を研究し又諸種の宗教樂を創作した。本演奏のレゲンデ（一八六三年作）も其の頃の作で十五世紀の聖僧パオロのフランシスの奇蹟を描いた音畫である。

（ろ）二つの練習曲　　ショパン作曲

ショパン（Chopin 1840—1849）の練習曲が普通の練習曲と異つて詩的情趣に充ちた稀有の藝術品であることは人の善く知る所である。本演奏の二曲は一八三七年に出た作品二五中でも、シューマンが殊に圓熟の作と評した名曲である。尙ほ彼は變イ長調の第一番を形容して「あらゆる音階を具へたエオリア琴が藝術家の手によつて種々の奇異な裝飾音に混ぜられ、而も至る所に低い基音と柔かに歌ふ上聲を聞かせる」やうだと言つてゐる。十二番のハ短調はショパンの書いた最も雄大な曲の一つで、琶音（アルペッジョ）の波動は颶風の後の大洋の姿にも譬へられる。

（は）夜の曲　　同上

靜かに夢想に耽るやうな感じが此の曲の特性である。こゝには他の「夜の曲」に見るやうな裝飾も少くて凡てが甚だ單純である。然し突然に起る短調の尾局（コーダ）は何か事變の起つたやうに、テインパニに似た陰欝な打音と激した朗吟調によつて靜かな夢想を破り、極めて劇的な効果を與へる。

（に）印度の火踊　　デ、ファルラ作曲

現今西班牙の國民樂家として名高いデ、ファルラ（de Falla 1876—）は祖國の民謠民舞に基いた種々のピアノ曲を作つた。この點では既に世を去つたアルベニツツに似てゐるが、然しニーマンの説によれば彼は「國民的地方色の面白味の上に、最近の佛蘭西に發達した節奏（リズム）と拍子の面白味を加へ、且つ節奏、拍子及モテイーフを優美に織り合せた多聲（ポリフオニー）や、完全に美しく細かな運聲をも加へてゐる」

五　混聲合唱

（い）「北も南も」　　シューマン作曲

ピアノ曲に獨唱リードに若々しい詩情を吐露したシューマンは一八四四年ドレスデンに移つた頃から更に多くの無伴奏合唱に筆を染めた。本演奏のものもその頃の作である。彼の合唱曲は大抵教會（アカペラ）風の技巧に富んだ多聲（ポリフオニー）を棄てゝ寧ろ單純な民謠式を用ひてゐる。詩的情緒は主として旋律によつて表はされ、精選した和聲と適切な節奏とがこれを助けて行く。「北も南も」の詞は樂天觀をのべた快活なもので大意はかうである。——「（一）心に燃ゆる詩情あらば北も南も何ぞ異らん、北は力に力を加へ、光に光を添ふるにあらずや。（二）この身を入るべき餘地だにあらば、都も鄙も何ぞ異らん、福は己の外に在らず。（三）王者といへども僕（しもべ）なり、主いひ從といふも何ぞ異らん。謙り下るはよし、阿（おもね）るなかれ。（四）意氣盛にして衰へずば、老（おい）も若きも何ぞ異らん。髪は曲者。早や霜を置けど、墓に入らねば身未だ冷えず。」作者は以上の四節に同じ旋律を反復してゐるが、終章は宗教的な歌意に應じて多少の變化を施してゐる。——「眠るも死ぬるも何ぞ異らん。よくこそ來れ、隻兒（ふたご）の同胞（はらから）、命數盡きて今眼（まなこ）とづ。夢は我が世の福（さいわい）なり要（えう）なり。あまりに短かき夢なるかな。早くも過ぐる命（いのち）かな。何とて斯くは美しく、しかもはかなく消行くぞ。眠るも死ぬるも何ぞ異らん。ほがらほがらと明くる東雲（しのゝめ）。」

Nord oder Süd

Nord oder Süd! Wenn nur im warmen Busen
Ein Heiligthum der Schönheit und der Musen,
Ein göttereicher Himmel blüht!
Nur Geistesarmuth kann der Winter morden;
Kraft fügt zu Kraft und Glanz zu Glanz der Norden!
Nord oder Süd! wenn nur die Seele glüht.

Stadt oder Land! Nur nicht zu eng die Räume,
Ein wenig Himmel, etwas Grün der Bäume
Zum Schatten vor der Sonne Brand,
Nicht an das Wo ward Seligkeit gebunden,
Wer hat das Glück schon ausser sich gefunden?
Stadt oder Land! Was draussen liegt, ist Tand!

Knecht oder Herr! Auch Könige sind Knechte;
Gebeut uns nur, bist du verständiger,
Doch soll kein Hochmuth unsre Brust verhöhnen

Nur Sklavensinn kann fremden Launen fröhnen!
Knecht oder Herr! nur keines Menschen Narr!

Jung oder alt! Was kümmern uns die Jahre,
Der Geist ist frisch, doch Schelme sind die Haare,
Auch mir ergraut das Haupt zu bald!
Doch eilt nur, Locken, glänzend euch zu färben,
Es ist nicht Schande, Silber zu erwerben,
Jung oder alt! nur erst im Grabe kalt.

Schlaf oder Tod! Willkommen Zwillingsbrüder!
Der Tag ist hin, es sinkt die Wimper nieder!
Traum ist der Erde Glück und Not!
Zu kurzer Traum, zu schnell verrauschtes Leben,
Warum so schön und doch so rasch verschweben?
Schlaf oder Tod! hell, hell strahlt das Morgenroth!

（ろ）　森の中に晩鐘聞ゆ　　ジヴオルジヤーク作曲

チェック國民樂の代表者なるジヴオルジヤーク (Dvorák 1841—1904) の主作は器樂（殊に管絃樂）の方面に在るが、聲樂に於ても俗樂、聖樂、獨唱、合唱にそれ〳〵佳作を遺した。本演奏の無伴奏合唱曲は「自然に於て」と題する五合唱曲（作品六三）中の一でト短調の靜寂な曲である。歌詞は鐘の音響いて小鳥の聲收る夕ぐれの景から筆を起して小鹿も眠り夜啼鳥も靜まり、萬籟絕えた深夜の森の寂寞を叙して終る。

Im Haine hört das Abendläuten

Im Haine hört das Abendläuten,
Der Vöglein Sang schon leis' verklingend,
Des fernen Kukuk neckend' Rufen,
Die Nachtigall von Liebe singend,
Der linde West durchlauscht die Zweige,
Bethaut von feuchten Perlenkranze.
Rings prangt der Wald vom Mondensilber
Umwebt von tausendfachem Glanze.
Bald träumen Halme, träumen Blumen,
In Baumeswipfeln hangen Träume,
Nur Rehlein wacht noch, dass im Thaue
Es Bad und Nachttrunk nicht versäume.
(Es Bad und Nachttrunk nicht versäume.)
Dann schlummert's auch, die Vöglein schlummern,
Nachtigall lässt allein sich hören
Ihr Liebeslied, das sanfte Flöten
Wird Schläfer nicht, noch Träumer wecken.
D'rauf schweigt auch sie. Nun ruhen Alle
Und Nacht bedeckt mit dunklem Schleier
Den Hain und d'rinnen jeglich' Leben,
Das ist des Waldes Abendfeier,
(Das ist des Waldes Abendfeier.
Das ist des Waldes Abendfeier.)

大正十四年六月二十七日、二十八日　学友会春季演奏会

大正十四年六月二十七日（土曜日）午後二時

春季大演奏會

東京音樂學校
學友會

曲目

1. 混聲合唱　會員
　最終の合唱（馬太傳受難樂中より）……バッハ
2. ピアノ獨奏　玉眞テルハ
　ソナタ、ニ短調（作品三十一ノ二）……ベートーヴェン
3. 男聲二重唱　バテノートル　内木田下　榮一保
　イ、日の影の照らすが如く……シューマン
　ロ、間奏曲……シューマン

ハ、挨　拶……メンデルゾーン

4. ヴァイオリン獨奏　橋本國彦
コンツェルティーノ……ハンス、ジット
アンダンティーノ
アレグレット
トランクヰロ
アニマート

5. ピアノ獨奏　石橋益惠
イ、間奏樂……ブラームス
ロ、斷片綜合曲……ブラームス

休　憩

6. ソプラノ獨唱　渡邊宣子
イ、變はらぬ愛……ブラームス
ロ、夕の曲……ブラームス

7. ヴァイオリン獨奏　高折周子
激情的幻想曲　第一樂章（作品三十五）……ヴュータン

8. ピアノ獨奏　福井直俊
ヴィーンの謝肉祭の嬉戲……シューマン

9. アルト獨唱　アルト曾我部靜子
イ、獨　居……ヴォルフ
ロ、永久の愛……ブラームス

10. ピアノトリオ　ピアノ　田中規矩士
ヴァイオリン　高階哲應
セロ　伊達三郎
イ、アンダンテ、エスプレシボ……メンデルゾーン
ロ、遺稿三重奏……ベートーヴェン

11. 混聲合唱（絃及び木管伴奏）　會員
慶たしマリアよ……メンデルゾーン
合唱指揮者　大塚淳　澤崎定之
〔原資料横組〕

THE
GRAND CONCERT
OF
THE GAKUYÛKAI
OF
THE TOKYO ACADEMY OF MUSIC
SATURDAY, JUNE 27TH,
&
SUNDAY, JUNE 28TH, 1925.
AT 2 P.M.

PROGRAMME

1. MIXED CHORUS :—　Members.
Schlusschor aus
„Matthäuspassion“ ……Bach.

2. PIANO SOLO :—　Miss T. Tamama.
Sonate D-moll (op. 31 No. 2) …Beethoven.

3. VOCAL DUET :—　Tenor. Mr. T. Kinoshita.
Baritone. Mr. E. Uchida.
a. So wahr die Sonne
scheinet. ……Schumann.
b. Intermezzo. ……Schumann.
c. Gruss. ……Mendelssohn.

4. VIOLIN SOLO :—　Mr. K. Hashimoto.
Concertino e-moll (op. 31) ……Hans Sitt.

Andantino.
Allegretto.
Tranquillo.
Animato.

5. PIANO SOLO :— Miss M. Ishibashi.
   a. Intermezzo. .....Brahms.
   b. Rhapsodie. .....Brahms.

INTERVAL

6. SOPRANO SOLO :— Miss N. Watanabe.
   a. Liebestreu (op. 3 No. 1) ...Brahms.
   b. Ständchen (op. 106 No. 1)...Brahms.
7. VIOLIN SOLO :— Miss K. Takaori.
   Fantasia Appassionata (op. 35)...Vieuxtemps.
8. PIANO SOLO :— Mr. N. Fukui.
   Fassingsschwank aus Wien,
   Allegro (op. 26) .....Schumann.
9. ALTO SOLO :— Miss S. Sogabe.
   a. Verborgenheit. .....Wolf.
   b. Ewiger Liebe. .....Brahms.
10. PIANO TRIO :— Piano. Mr. K. Tanaka. Violin. Mr. T. Takashina. Cello. Mr. S. Date.
   a. Andante espressivo.....Mendelssohn.
   b. Op. Posthum. .....Beethoven.
11. MIXED CHORUS
   (With Strings and wood-winds.)...Members.
   Ave Maria. .....Mendelssohn.

Conductor: J. Otsuka. S. Sawazaki.

大正十四年十月七日、八日　学友会秋季演奏会

◇秋季大演奏會（大正十四年十月七日、八日）

午後二時奏樂堂に開演、幸兩日共好天氣、又例に依つて、聽衆堂に溢れるの盛會。今日奏樂堂の狹隘は決して、耳新しい叫ではなからう。

曲目

一、混聲合唱　會員
（イ）マリアの寺詣うで　ブラームス作曲
（ロ）獵人　ブラームス作曲

二、ピアノ獨奏　留岡滿都
ロンド　ハ短調（作品一）　ショパン作曲

三、ソプラノ獨唱　莊節子
（イ）音樂に寄す（作品八八ノ四）　シューベルト作曲
（ロ）祕密（作品十四ノ二）　シューベルト作曲
（ハ）漁夫の歌（作品九六ノ四）　シューベルト作曲

四、ヴァイオリン獨奏　林良輝
コンツェルト第七番の　ベーリオ作曲
アンダンテ・トランクイルロ

五、ソプラノ獨唱及合唱（オルガン伴奏）　早川美奈子及會員
聖化せる者の歌　ゲツツエ作曲

休憩

六、ピアノ獨奏　中村國子
コンツェルト第三番ハ短調（作品三十七）　ベートーヴェン作曲
（カデンツ……カール、ライネッケ）

七、女聲三重唱　〔第一ソプラノ　佐藤美子／第二ソプラノ　吉澤直子／アルト　澤智子〕
エリアスの內の天使の歌　ポツパー作曲
六、セロ獨奏　伊達三郎
コンツェルト、ポロネーズ　ポツパー作曲
九、バリトン獨唱　內田榮一
（イ）春の旅（作品四五ノ二）　シューマン作曲
（ロ）アスラ（作品三二ノ六）　ルビンシュタイン作曲
（ハ）露は輝く（作品七二ノ一）　ルビンシュタイン作曲
一〇、ヴァイオリン獨奏　桂平太
ソナタ第四番ニ長調　ヘンデル作曲
アダヂオ、アレグロ、ラルゲット、アレグロ
一一、混聲合唱　會員
祈禱　シューベルト作曲

指揮者　澤崎定之氏

（『音樂』學友會、第五号、大正十四年十一月、一三五～一三六頁）

大正十四年十月十七日～二十三日　演奏旅行

◇關西中國地方演奏旅行（十月十七日より廿三日）

昨年秋以來の噂は、終に事實となつて、村上校長、島崎、木內兩教授及指揮者大塚教授等引卒の下に、十月十七日朝東京驛出發、十八日の岡山を振り出しに神戸甲南高等學校及高等女學校、鳥取の順序に旅行を續け、廿一日は京都に一泊翌日廿三日朝東京驛着、歸京して一週間の旅行を終つた。會員の之に參加するもの七十二名、演奏曲目は次に揭げた如く、何れも、同一曲目を以て演奏した。演奏旅行といへば、どの道、氣樂な旅行として期待する譯に行かないのが例だが、今度の場合も正に夫れで、殊に、岡山を打ち上げて、鳥取溫泉に骨を延ばす迄は、實際、誰の顏も土色に曇つて居たのは無理からぬことであつた。旅行と健康と能率といふ事に就いて、もつと〳〵考慮されなければならぬ事を經驗させられたのは、豈筆者一人のみならんやである。以下要項のみを記す。

演奏曲目

一、混聲合唱（無伴奏）　東京音樂學校生徒諸氏
い、雲雀の歌（作品四五、第四番）　〔メンデルゾーン曲／高野辰之作歌〕
ろ、霜の旦（ボヘミヤ民謠）　旗野十一郎作歌
は、荒野の薔薇（作品六七、第三番）　シューマン作曲
に、聖夜（ドイツ民謠）
二、ピアノ獨奏　山田菊江氏
維納の謝肉祭の諧謔（作品二六、變ロ長調）　シューマン作曲
三、ソプラノ獨唱　長坂好子氏
い、糸紡ぐグレチヘン（作品二）　シューベルト作曲
ろ、かひなき小夜曲（作品八四、第四番）　ブラームス作曲
四、絃樂　東京音樂學校職員及生徒諸氏
小夜曲　モツアルト作曲
五、混聲合唱（絃樂伴奏）　東京音樂學校職員及生徒諸氏
悲歌（作品一一八）　〔ベートーヴェン作曲／吉丸一昌作曲〕

休憩十分
六、ピアノ獨奏　山田菊江氏
　諧謔曲（作品三一、變ロ短調）　ショパン作曲
七、ソプラノ獨唱　長坂好子氏
　歌劇「ノルマ」中の抒情調　ベルリニ作曲
八、ヴァイオリン二重奏　多久寅氏　末吉雄二氏
　競奏曲（ニ短調）　バッハ作曲
九、混聲合唱（ピアノ伴奏）　東京音樂學校生徒諸氏
　神事歌「救世主」中のハレルヤ　ヘンデル作曲
　指揮者　大塚淳氏
　伴奏者　高折宮次氏

十月十八日　岡山では、第六高等學校の創立紀念式に招かれたもので、午後二時より、同校關係者及生徒のため、午後七時より一般公開の、二回演奏をした。

好評を博したことは、勿論であつたが、只ステーヂの設備が不完全であつたため、無駄の多かつたことが、强いて、言はせれば、小さな遺憾であつた。

十月十九日、神戸近郊、甲南高等學校講堂に午後二時より開演。疲勞にも拘らず、出來榮宜しく、聽衆の態度亦、流石にとうなづかれた。午後六時より、神戸市内縣立高等女學校講堂に開演切り詰めた日程に逐はれて、演奏は矢次早に進められた。そして、ヴァイオリン二重奏の如きは、止むなく、第一樂章を省いたのは、誠に是非もない。一同の疲勞の色は、明かに見えた。

十月二十日、早朝鳥取市に着いて、午後二時、午後六時の二回、戎座に開演された。主催は、同市、音樂研究會及びその他の諸團體であつた。此地に於ける演奏は、本旅行中での、いはゞ油の乘り切つた演奏ともいふ可く、好評を博して、好印象を殘したことは確かであらう。又、其の歡待振りも、一種の親さを以て、せられたことは、喜ばしいことであつた。何れにしても、旅行棹尾の華を飾つたものと云ふ可きであらう。

以上で、主要な部分を終つた。さて、明くる十月二十一日は、大部分京都に一泊（途中各別の行動をとつた者を除いて）、二十二日午後六時京都を出發する迄、僅かな時間を輕い旅行氣分に費した。二十三日朝、東京驛着、こゝに一週間の演奏旅行は、恙なく大團圓を告げた。

（『音樂』學友會、第五号、大正十五年三月、一三六～一三八頁）

大正十四年十月三十一日　天長節奉祝演奏放送

◇天長節奉祝演奏放送（大正十四年十月卅一日）

東京放送局の依頼を受けた本校では、當夜、同局に出張し、左の曲目を以て、奉祝演奏を行つた。合唱指揮者は、大塚教授、合唱人員は、七十三名、伴奏者は高折助教授である。

演奏曲目

一、混聲合唱（無伴奏）　東京音樂學校生徒諸氏
　い、天長節　メンデルゾーン作曲
　ろ、雲雀の歌（作品四五、第四番）　高野辰之作歌
　は、霜の旦
二、ピアノ獨奏　山田菊江氏
　諧謔曲　ショパン作曲
三、混聲合唱（無伴奏）　東京音樂學校生徒諸氏
　い、聖夜
　ろ、荒野の薔薇

は、空しく老いぬ　スウェーデン民謠
四、オルガン獨奏
い、オルガン・ソナタ中のアダージオ　メンデルゾーン作曲
ろ、プレリュード及フーゲ（ト短調）　バッハ作曲
五、ソプラノ獨唱　長坂好子氏
い、アヴェマリア（ヴァイオリン助奏付）　バッハ作曲　グノー編
ろ、かひなき小夜曲（作品八四第四番）　ブラームス作曲
六、ヴァイオリン連奏（ピアノ伴奏）　多久寅氏　末吉雄二氏
二重競奏曲（ニ短調）　バッハ作曲
七、混聲合唱（ピアノ伴奏）　東京音樂學校生徒諸氏
い、神事劇「救世主」中のハレルヤ　ヘンデル作曲
ろ、君ケ代（無伴奏）

（『音樂』學友會、第五号、大正十五年三月、一三九頁）

大正十四年十一月十二日　学友会第四十二回土曜演奏会

第四十二回土曜演奏會（十一月十二日）
午後一時半開演　演奏曲目左の如し

曲目

一、混聲合唱　會員
イ、秋の別れ　クレムゼル作曲
ロ、菊の盃　ベートーヴェン作曲
二、ピアノ獨奏　松尾愛子
イ、糸繰る女（作品一五七ノ二）　ラッフ作曲
ロ、ギター（作品四五ノ二）　モスコウスキー作曲
三、ヴァイオリン獨奏　佐藤吉五郎
變奏せる歌調（作品八九ノ二）　ダンクラ作曲
四、テノール獨唱　木下保
イ、私の心の小さい冠よ（作品二一ノ二）　シュトラウス作曲
ロ、徒歩の旅（メリケの小唄第一〇）　ヴォルフ作曲
ハ、園丁（メリケの小唄第十七）　ヴォルフ作曲
五、ピアノ獨奏　木村悦
ポロネイズ（作品二六ノ一）　ショパン作曲

休憩

六、ピアノ獨奏　園田清秀
ソナタ（作品二ノ三）　ベートーヴェン作曲
アレグロ
七、セロ獨奏　沖不可止
ソナタ第八　イ長調　ボツケリニ作曲
アダヂオ、アレグロ
八、ソプラノ獨唱　岡見幾久子
歌劇「ファウスト」中の寶石の歌　グノウ作曲
九、ヴァイオリン獨奏　栗原大治
コンツェルト第二番　ニ短調（作品四四）　ブルッフ作曲
第一樂章
一〇、混聲合唱　會員
イ、アヴェ、マリア　アルカデルト作曲

ロ、御機嫌よう　シューマン作曲
ハ、森　シューマン作曲

指揮者　澤崎定之氏

（『音樂』學友會、第五号、大正十五年三月、一三九～一四〇頁）

大正十五年二月二十日　学友会第四十三回土曜演奏会

◇第四拾三回土曜演奏會（大正十五年二月廿日）

本學年掉尾、且つ改年最初の演奏會として、左の曲目を以て開いた。

曲目　會員

一、混聲合唱
イ、渡り鳥
ロ、送別の歌
ハ、思ひ出　信時潔作曲

二、ピアノ獨奏　山本靜江
イ、夜曲（作品一五ノ一）
ロ、オローズ「ポロネーズ」（作品四〇ノ一）　ショパン作曲

三、メッゾ、ソプラノ獨唱　河原喜久恵
ゼツクスタスのアリア（歌劇「ティテゥス」より）　モツアルト作曲

四、ヴァイオリン獨奏　藤田經秋
ソナタ　第一樂章　モツアルト作曲

五、ピアノ獨奏　今村米
イタリア風のコンツエルト　バツハ作曲

休憩

六、混聲合唱　會員
イ、夜番（一番）　ブラームス作曲
ロ、夜番（二番）　ブラームス作曲

七、ピアノ獨奏　近藤沖
ロンドカプリチオ（作品一四）　メンデルゾーン作曲

八、ソプラノ獨唱　般若初代
イ、西風　メンデルゾーン作曲
ロ、小夜曲　フランツ作曲

九、ヴァイオリン獨奏　大岡運英
コンツェルト七番　ベリオ作曲
靜かな緩歩調

一〇、四部唱　佐藤美子　内田幸子　吉澤なを　澤智子　木下保　鏑木欽作　細川碧　徳山璉
聖歌劇
「エリアス」よりの二重四部　メンデルゾーン作曲

（『音樂』學友會、第五号、大正十五年三月、一四一頁）

大正十五年二月二十一日　邦楽会第三十回演奏会

大正十五年二月廿一日午後一時
於上野東京音樂學校奏樂堂
第參拾回演奏曲目

邦樂會

一　三曲（生田流）
貴船（きぶね）

二　富本節
道行念玉蔓（みちゆきおもひのたまかづら）
（長作）

三　歌澤節
我（わ）が物（もの）と
春雨（はるさめ）
（休憩十五分）

四　常磐津節
恩愛瞶關守（おんあいひとめのせきもり）
（宗清）

五　江戸長唄
勸進帳（くわんじんちやう）

箏	山口巖	
三絃	山口又次	
仝	宇田川壽惠	
仝	爲廣菜蕗子	
尺八	宇田川作童	
淨瑠璃	富本豐前	
仝	富本豐喜代	
仝	富本豐千代	
三味線	富本都路	
ツレ	富本豐紫明	
上調子	富本豐常	
唄	歌澤寅右衛門	
三絃	同寅秀	
淨瑠璃	常磐津和佐太夫	
仝	常磐津三喜太夫	
仝	常磐津歌男太夫	
三味線	常磐津文左衛門	
上調子	常磐津文次郎	
長唄	芳村孝次郎	
仝	芳村孝太郎	
仝	芳村孝一郎	
三絃	今藤長十郎	
仝	杵屋勝藏	
上調子	杵屋五三郎	
笛	望月長之助	
小鼓	望月太佐吉	
仝	望月孝太郎	
大鼓	望月吉三郎	

大正十五年三月二十五日　卒業式

第三十七回生徒卒業式順序（大正十五年三月二十五日）

一、卒業證書授與
二、校長式辭
三、文部大臣祝辭
四、卒業生總代謝辭
五、賞品授與
六、卒業演奏

演奏曲目

一、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　千葉多可
嬰ハ短調ソナタ（作品二七・第二番）…ベートーヴェン作曲
二、バリトン獨唱……本科聲樂部卒業生　細川碧
い、悲痛（作品二二・第二番）
ろ、音樂に寄す（作品八八・第四番）　シューベルト作曲
三、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　玉眞テル
ト短調ラプソディ（作品七九）……ブラームス作曲
四、ソプラノ獨唱……本科聲樂部卒業生　佐藤美子
歌劇「アルセスト」中のアルセストの抒情調……
……グルック作曲
五、ピアノ及ヴァイオリン合奏……
……ヴァイオリン本科器樂部卒業生　林良輝
ヘ長調ソナタ（作品二四）……ベートーヴェン作曲
六、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　木村悅
ハ短調競奏曲（作品三七・第三番・第一樂章）……
……ベートーヴェン作曲

休憩十分間

七、テノール獨唱……本科聲樂部卒業生　木　下　保
　天地創造曲中のウリールの抒情調……ハイドン作曲
八、ピアノ獨奏……本科器樂部卒業生　遠　山　つ　や
　ハ短調三二變奏曲……ベートーヴェン作曲
九、メッゾ・ソプラノ獨唱……本科聲樂部卒業生　吉　澤　な　を
　い、祈　禱
　ろ、祕　密……ヴォルフ作曲
　は、ヴァイラの歌
十、ピアノ獨奏……研究科器樂部修了生　喰　田　比　佐
　ハ長調ソナタ（作品五三・第一樂章）…ベートーヴェン作曲
十一、ソプラノ獨唱……研究科聲樂部修了生　渡　邊　宣　子
　歌劇「タンホイゼル」中のエリザベットの祈禱……
……ヴァグネル作曲
十二、ピアノ獨奏……研究科器樂部修了生　山　田　菊　江
　ヘ短調幻想曲（作品四九）……ショパン作曲

（『東京音樂學校一覽』自昭和二年至昭和三年、六八～六九頁）

大正十五年五月二十二日、二十三日　第五十回定期演奏会

第五十回音樂演奏會（大正十五年五月二十二、二十三日）

一、管　絃　樂
　ゲーテ作悲劇「エグモント」の序曲（作品八四）……
……ベートーヴェン作曲
Ouvertüre zu Goethes Trauerspial “Egmont” (Op. 84)
……Beethoven.

二、ピアノ及管絃樂
　シンフォニー的變奏曲……フランク作曲
　　ピアノ　コハンスキ
Symphonische Variationen für Klavier und Orchester
……Franck.

　休　憩　十　分　間

三、管　絃　樂
　變ホ長調シンフォニー……モツアルト作曲
Symphonie (Es dur) ……Mozart.
　Adagio-Allegro
　Andante
　Minuetto: Allegro
　Finale: Allegro molto

四、管絃樂伴奏混聲合唱
　春の使者（作品三五）……ガーデ作曲
Frühlingsbotschaft mit Orchester (op. 35) ……
……Gade.

　指揮者　シャールス・ラウトルップ
Dirigent: Prof. Charles Lautrup.

（『東京音樂學校一覽』自昭和二年至昭和三年、六九～七〇頁）

演奏曲目解說及歌詞

一　管　絃　樂

ゲーテ作悲劇『エグモント』の序曲
　　ベートーヴエン作曲

ベートーヴェン（Beethoven 1770—1827）が四十歳の時に出來たこの序

曲はゲーテの劇の幕あき前に奏する爲に作られたものである。ゲーテの作は西班牙王フィリップ二世の新教徒壓迫に反抗して處刑せられた十六世紀のネーデルランドの貴族エグモント伯を主人公としたもので、劇の最後はエグモントが國民の自由の爲めの戰士たることを自覺して從容死に就くやうに描いてある。ベートーヴェンの曲はかの「コリオラーン」序曲と同じく樂器編成上のこまかな細工を避け、いはゞ筆太にくつきりと劇の概要を暗示してゐる。曲頭に濶歩する如く響くサラバンドのリヅムで表はされた西班牙の暴君、其の壓制に惱むネーデルランドの國民、彼等の自由の爲めの奮鬪、最後に暴政を脫し得た彼等の勝利の歡呼―此等を本曲の中に聽くことが出來る。

二　ピアノ及管絃樂

シンフォニー的變奏曲　　フランク作曲

リエジュに生れ巴里に學んだフランク（César Franck 1822―1890）は此の市の音樂學校で作曲、ピアノ及びオルガンの諸科を修めた後、華やかな樂壇に立つことを避けて教師となり、忙しい仕事の傍作曲に志したが、三十六歳の時サントクロティルドの教會オルガニストになり、五十歳の時から別に母校のオルガン科をも擔任することになつた。此頃から彼は專ら教授と作曲とに意を傾け、長い生涯の間に多くの新進作家に感化を及ぼしたのである。彼は天性寡欲の人で、名利を追はず時流に投ぜず、超然として自己の途を歩んだ爲に、存生中は少數の識者以外に知られなかつたが、死後彼の獨創に富んだ諸作は益々廣く認められるやうになつた。本演奏の變奏曲なども其の一である。

曲は絃で奏する稍快速な序節で始まり、續て少し緩かなピアノの獨奏に移る。此の二つの想が暫く交代しつゝ開展する間に本曲の主想は管絃部にチラリと姿を見せるが、ピアノは再び最初の獨奏に歸つて之を敷衍する。以下ピアノと管絃との前奏が尙暫く續いて後、主想は最初ピアノに現はれ次でピアノと管絃との間に分配せられる。第一の變奏はヴィオラとセロが先づ主想の旋律を示し、ピアノはこれに綺麗な綾をつけて行くが、やがてピアノは絃の指彈に輕く伴奏させて自ら一の變奏を行ふ。管絃が曲頭の序節に歸つてピアノと共に暫くそれを開展する後、曲は長調の變奏に入り、ピアノはセロの奏する主想の上に華やかな對位をつけて行く。これが終ると絃樂はピアノの琶音に連れて最初のピアノ獨奏の樂句に歸り、續て長調の過度ならざる快速調に進み、玆にセロとベースはかの樂句を承けて、華やかなピアノに伴はれつゝ之を極めて愉快に變化して行く。稍緩かな新しい變奏が之を遮つて現はれるが、それも暫くで、曲は復た快速調に歸り、主想は他の諸樂器へ移つて行く。以下は曲の初頭に立ちもどつて華々しい絕頂に達して曲を結ぶ。

三　管　絃　樂

變ホ長調シンフォニー　　モツァルト作曲

〔大正十一年五月十三日、十四日の「音樂演奏曲目梗概」を參照。〕

四　管絃樂伴奏混聲合唱

春　の　使〔者〕　　ガーデ作曲

初めてスカンディナヴィアの風韻を世界に紹介したガーデ（Gade 1817―1890）は二十六歳の時から四年餘りの間ライプチッヒに遊學し、此處にメンデルソーン、シューマン等と交つて其の感化を受けた。殊にメンデルソーンの作風に倣つた點は甚だ多く、本演奏の曲なども、其の優美な樂想、柔かな色彩等は頗る彼の友に似てゐるが、然し又獨得の情調をも具へてゐる。曲は春風の音、泉のせゝらぎなどを想はせる快活な前奏で始まり、全部八分ノ十二拍子の浮き立つやうなリヅムで一貫してゐるが、樂想は歌詞の意に應じて變化し時には「希望」と「夢」に耽るごとく靜に、時には「若き力」に醒めたやうに强くなる。「汝の道尙ほ暗く」に至て曲は短調の陰鬱な齋唱になるが、「やよ信ぜよ」から再び長調に復して、靜かな敬虔な調になり、更に短かい管絃の漸强奏を經て、最後の熱烈な降臨節の歡びを抒べる一節に進む。歌詞の大意―『安らかならぬ長き冬の沈默の後によくこそ來たれ、やよ朗かなる春の響。今、木の枝に液（つゆ）は動き、人の心に歌は動く。花咲きにほふ木々の蔭に、綠の野を越え希望はさまよひ、くしくあやしき未來の夢は祝福のごとく世界にたゞよふ。されば心よ、汝を囚へしよろづの憂さをみな振りすてゝ、空に舞ひ飛ぶ鳥のごとかれ。彼は枯れ

たる茨の垣より、赤きさうびの花を咲かしむ。彼また汝を惱みの底より若き力によみがへらせん。かくても汝の道尚ほ暗く、己が罪にて悶ゆるならば、信ぜよ、神惠は更に大に、慈愛は測り知られざる事を。汝の胸の扉を開きて、降臨節の祝福を受けよ。よろこべ、よろこべ。かくてぞ汝は新に生れん。聖靈と燃ゆる炎のなかより。』

Frühlings-Botschaft

Willkommen, heller Frühlingsklang!
Nach langem, bangem Winterschweigen!
Nun rührt der Saft sich in den Zweigen
Und in der Seele der Gesang.

Es wandelt unter Blütenbäumen
Die Hoffnung über's grüne Feld;
Ein wundersames Zukunftsträumen
Fliesst wie ein Segen durch die Welt.

Willkommen, heller Frühlingsklang!
Nach langem, bangem Winterschweigen!

So wirf denn ab was mit Beschwerden,
O Seele, dich gefesselt hielt;
Du sollst noch werden wie der Vogel
Der mit der Schwing' im Blauen spielt.

Der aus den kahlen Dornenhecken
Die rothen Rosen blühend schafft.
Er kann und will auch dich erwecken
Aus tiefem Leid zu junger Kraft.

Und sind noch dunkel deine Pfade,
Und drückt dich schwer die eig'ne Schuld,
O glaube, grösser ist die Gnade,
Und unergründlich ist die Huld.

Lass nur zu deines Herzens Thoren
Der Pfingsten vollen Segen ein,
Getrost, und du wirst neugeboren
Aus Geist und Feuerflammen sein.

Willkommen, o heller Frühlingsklang!
Willkommen!

大正十五年五月二十九日　学友会第四十四回土曜演奏会

◇第四十四回土曜演奏會（五月二十九日）

曲　目　　會　員

1　混聲合唱　　メンデルゾーン
　新年の日に
2　ピアノ獨奏　　椎葉照子
　岩魚　　シューベルト＝ヘルラー
3　ソプラノ獨唱　　西山晴江
　イ、漁夫の娘　　ブラームス
　ロ、笑と泣　　シューベルト
　ハ、日曜日　　ブラームス
4　セロ獨奏　　小澤弘
　ソナタ、ハ長調　　ボツケリーニ
　　アレグロ、モデラート
　　ラルゴー
　　アレグロ
5　ピアノ獨奏　　遠山つや
　イ、寓話　　シューマン
　ロ、飛躍　　シューマン

休　憩

6　女聲二重唱　〔ソプラノ　黒澤貞子／メツゾ・ソプラノ　馬場晴子〕
イ、歡と歌を以て吾等は出發す
ロ、我歌ふべきか
ハ、受けよ、吾が愛する子よ

7　セロ獨奏　フランク
コンセルト、イ短調、作品十四
第一樂章

8　ソプラノ獨唱　淺野千鶴子
マリーの詠嘆調、（オペラ「兵器工」より）

9　ピアノ獨奏　石橋益恵
コンセルト、ト短調（作品二十五）

10　混聲合唱　會員
イ、旅樂人　メンデルゾーン
ロ、牧羊者の日曜日の歌　クロイツエル
ハ、慶たし、まことの肉身よ　モツアルト

指揮者　大塚淳氏
伴奏者　萩原英一氏

この日は折惡るく雨天でしたが、大層盛會でした。小澤君が、御病氣のために、演奏出來なかつたのが殘念でした。

（『音樂』學友會、第六号、大正十五年十二月、一四九頁）

大正十五年六月二十六日、二十七日　学友会春季演奏会

◇春季大演奏會（六月二十六日・二十七日）

曲　目

1　男聲四部合唱　會員
イ、今日は別れ、明日は旅へ　シユミツト
ロ、兜虫と花　ファイト
ハ、我森の小鳥なりせば　シユミツト

2　女聲四部合唱　會員
我が信仰する神　シユーベルト

3　ピアノ獨奏　永田喜與子
ソナタ、ニ短調（作品三十一ノ二）
第一樂章　ベートーベン

4　二重唱　〔ソプラノ　早川美奈子／バリトン　内田榮一〕
イ、星の夜に
ロ、我と汝　コルネリイウス
ハ、裏切られたる愛

5　ピアノ獨奏　澤崎秋
維也納の謝肉祭の道化（作品二十六）　シユーマン

休　憩

6　三重唱　〔ソプラノ　早川美奈子／テノール　木下保／バリトン　内田榮一〕
イ、あゝ主よ汝に（「天地創造」中の三重唱）　ハイドン
ロ、歌劇魔笛　モツアルト

7　ピアノ獨奏　近藤沖
ソナタ、變ホ長調（作品八十一）　ベートーベン
告　別
不　在

再會

8 セロ獨奏　淺野常七
イ、表情ある並歩調（作品五十三）
ロ、マヅルカ（作品十一ノ三）　ゴルターマン
9 アルト獨唱　ポッパー
さすらひ人　幕田シナ
10 ピアノ獨奏　シユーベルト
ポロネイズ、嬰ヘ短調（作品四十四）　福井直俊
11 混聲合唱　ショパン
「ロザムンデ」劇中の獵人の合唱　會員
（作品二十六ノ二）　シユーベルト
指揮者　大塚淳氏

（『音樂』學友會、第六号、大正十五年十二月、一五〇頁）

大正十五年十月十三日　学務部長招待音樂会

大正十五年十月十三日（水曜日）午後三時
東京音樂學校奏樂堂に於て

學務部長招待音樂會演奏曲目

一、ピアノ獨奏 ……研究生　福井直俊
波蘭舞踏曲（嬰ヘ短調）……ショパン作曲
Polonaise (Fis moll) ……Chopin.
二、ソプラノ獨唱 ……助教授　長坂好子
い、胡桃樹（作品二五・第三番）
ろ、森林の會話（作品三九・第三番）……シューマン作曲
a. Der Nussbaum (Op. 25, Nr. 3)
b. Waldesgespräch (Op. 39, Nr. 3) ……Schumann.
三、管絃樂及合唱 ……東京音樂學校管絃團
鎭魂歌の序奏及合唱「威嚴ある恐しき王よ」……同生徒
Einleitung und Rex tremendae majestatis (Requiem) ……Mozart.
休憩十五分間
四、管絃樂 ……東京音樂學校管絃團
モツァルトの主題を基とせる
變奏曲及逃走曲（作品一三二）……レーガー作曲
Variationen und Fuge für Orchester über ein Thema von Mozart (Op. 132).....Reger.
管絃樂指揮者　教師　シャールス・ラウトルップ
Dirigent: Charles Lautrup.
獨唱伴奏者　教授　高折宮次

大正十五年十月二十三日　特別演奏会

大正十五年十月二十三日（土曜日）午後一時半開場
二時開會
特別演奏會曲目
東京音樂學校

一、管絃樂
歌劇「イフィゲニア・イン・アウリス」の序曲……グルック作曲
ヴァグネル編

Ouvertüre zur Oper „Iphigenia in Aulis“ (bearbeitet von R. Wagner)...C. W. Gluck (1714—1787)

二、ソプラノ獨唱（管絃樂伴奏）……ネトケ・レーヴェ

い、歌劇「フィガロの婚禮」中のスザンネの抒情調「終に時は近づけり」

ろ、同　「魔笛」中のパミナの抒情調「我は思ふ」

……モツァルト作曲

a. Arie der Susanne „Endlich naht sich die Stunde“ aus der Oper „Die Hochzeit des Figaro“

b. Arie der Pamina „Ach, ich fühl's“ aus der Oper „Die Zauberflöte“

……W. A. Mozart (1756—1791)

三、混聲二重合唱（無伴奏）

經文歌「聖靈も亦我等の弱きを助く」……バッハ作曲

Motette für Doppelchor in B dur: „Der Geist hilft unsrer Schwachheit auf“ ……J. S. Bach (1685—1750)

休憩十分間

四、管絃樂

モツァルトの主題を基とせる變奏曲及逃走曲（作品一三一）……レーガー作曲

Variationen und Fuge für Orchester über ein Thema von Mozart (Op. 132)...M. Reger (1873—1916)

指揮者　シャールス・ラウトルップ

Dirigent: Charles Lautrup.

演奏曲目解說及歌詞

一　管絃樂

歌劇『イフィゲニア、イン、アウリス』の序曲

グルック作曲

此の歌劇は十八世紀の歌劇改良家として有名なグルック（Gluck 1714—1787）の傑作で、一七七四年に初めて演奏せられた。筋はかのトロヤ戰爭の際に希臘軍の總大將として出征したアガメムノンがアウリス島に上陸した時、曾て月の神アルテミスの鹿を射殺した祟りによつて順風を得ず、神官の託宣に從て最愛の娘イフィゲニアを犧牲に捧げたといふ古話に基いたものである。本演奏の序曲は歌劇の內容を概略暗示するもので主に四つの樂想から成つてゐる。冒頭に響く悲痛な旋律は娘の犧牲を嘆くアガメムノンの心を描いたもので、此の一節を終る後に力强い樂想が性急な士卒等の犧牲を要求する聲のやうに聞える。これに續て現はれる優美な旋律は暫くイフィゲニアの過去の幸福を想はせるが、かの犧牲を迫る叫は再度響て次の悲しい樂想は赦免を求める彼女の淚聲のやうに響く。此の序曲は原作に於ては終止なしに直ちに歌劇の第一齣に連續してゐるが、本演奏の改作では冒頭の悲調が再び現はれて終局を結んでゐる。

二　ソプラノ獨唱（管絃樂伴奏）

(イ)　歌劇『フィガロの婚禮』中のスザンネの抒情調

モツァールト作曲

此の歌劇（一七八六年初演）は喜歌劇の模範と呼ばれるモツァールト（Mozart 1756—1791）の傑作中の一で、筋はアルマヴィーヴァといふ伯爵が曾て理髮師フィガロの助力によつて令孃ロジナを夫人に迎へて置きながら、其後夫人の侍女でフィガロと婚約のあるスザンネを寵愛する樣子が見えるので、夫人は其心を飜させようと苦心の末に一策を按じ、スザンネに命じて一夕庭園に伯爵と會合の約を結ばせ、實は自らスザンネと服裝を交換して共々に庭園に赴き首尾能く伯爵に前非を後悔させる話である。此の間に種々の細かな事件も起つて滑稽が續出する。モツァールトの音樂は各齣の種々な感情を巧みに又美しく描いてゐる。本演奏の歌調（朗吟調と抒情調）は最後の庭園の場で夫人と侍女とが夕ぐれに伯爵を待ち受ける時に侍女が歌ふもので、全篇中の秀逸に數へられてゐる。詞は伯爵に疾く來

れと促す意である。

Susannens Recitativ und Arie.

Recitativ (Allegro vivace assai)
Endlich naht sich die Stunde, wo ich dich, o Geliebter, bald ganz besitzen werde! Ängstliche Sorgen! entfliehet, weicht auf immer, störet nicht mehr die Freude meines Herzens! Ha! um mich her scheint alles mir so heiter: Hesperus blickt so freundlich, so freundlich auf meine Liebe! Komm doch, mein Trauter! Stille der Nacht beschützt uns!

Arie (Andante)
O säume länger nicht, geliebte Seele! Sehnsuchtvoll harret deiner hier die Freundin! Noch leuchtet nicht des Mondes Silberfackel, Ruh und Friede herrschen auf den Fluren. Des Westwinds Säuseln und des Baches Rieseln stimme jede Nerve zur Entzückung, die Blumen duften auf den bunten Wiesen, alles lockt uns zu Liebe, Freud' und Wonne. Komm doch, mein Trauter! lass länger mich nicht harren. Komm, o Trauter! dass ich mit Rosen kränze dein Haupt, mit Rosen kränze dein Haupt, dass ich dich kränze mit Rosen.

(ロ) 歌劇『魔笛』中のパミナの抒情調

モツァールト作曲

『魔笛』はモツァールトの最後の歌劇で、筋は頗る混雑したものであるが、作曲者はその各齣の感情に應じて美しい音樂を附けてゐる。筋はエジプトのイージス神の神官ザラストロが邪神『夜の女皇』の娘パミナを正教に歸依させようとして彼の殿堂に呼び寄せたので、母の女皇は一向取りもどさうと企てゐるうちに、或日エジプトの王子タミノが道に迷つて蛇に襲はれたのを助けて、これに娘を救ひ出すことを依頼する。タミノは快諾して女皇から危難を除ける魔笛を授かつて出發するが、却てパミナと共にザラストロの教徒に加へられ、長い間の苦行に堪えて後、終に目出度結婚するのである。本演奏の抒情調は第二幕の或る場でパミナの歌ふもので、緩かな悲しい和音や暗い色彩に富んだ曲である。パミナはタミノが苦行の一として沈默を守り、彼女に一言の挨拶をもせざるを見て、王子の愛情の失せたるものと誤り、此の歌調に於て悲嘆の情を抒べるのである。」

Arie der Pamina

Ach, ich fühl's, es ist verschwunden,
ewig hin mein ganzes Glück,
ewig hin der Liebe Glück.
Nimmer kommt ihr, Wonnestunden,
meinem Herzen mehr zurück,
meinem Herzen, meinem Herzen mehr zurück.
Sieh, Tamino, diese Tränen
fliessen, Trauter, dir allein, dir allein,
fühlst du nicht der Liebe Sehnen, der Liebe Sehnen,
so wird Ruhe, so wird Ruh im Tode sein,
fühlst du nicht der Liebe Sehnen,
fühlst du nicht der Liebe Sehnen,
so wird Ruhe, so wird Ruh im Tode sein,
so wird Ruh im Tode sein, im Tode sein, im Tode sein.

三　混聲二重合唱（無伴奏）

經文歌『聖靈も亦我等の弱きを助く』　バッハ作曲

『經文歌』（Motette）は聖書中の文句に基いた一種の宗教樂で古くは十五六世紀の羅馬教會の作曲家によつて多く創作せられ、其後新教の音樂にも傳はつた曲である。新教のモテットの最も秀でた作者はバッハ（Bach 1685—1750）で、彼は此の曲を數多作つたといふが今日知られてゐるのは僅に六曲（その中四曲は八部の二重合唱）である。本演奏のものは作者がライプチッヒのトーマス教會に奉職した頃、教會附屬トーマス學校の長エルネスティの葬儀（一七二九年）の爲に作つたものである。文句は新約、羅馬書から採つたもので、『聖靈も亦我等の荏弱を助く。我等は祈るべき所を知らざれども、聖靈みづから言ひがたきの慨嘆を以て我等の爲に祈りぬ。人の心を察たまふ者は聖靈の意をも知れり。そは神の心に遵ひて聖徒の爲に祈ればなり』の意である。曲は前後二節に分れ、第一節は轉がる様な十六分符の音形を含んだ八分三拍子の活躍せる並歩調の樂想で始まり、後半（『聖靈みづから』以下）に於て快速調四分四拍子のフーガにな

り、前半よりも沈んだ氣分を現はす。第二節（『人の心を』以下）は更に轉じて二分二拍子の力強い主想に基く第二のフーガが始まる。此節は四部だけの合唱に作られてゐるが、『そは神の心に遵ひて』の語以下は二重フーガである。最後に附けたコラール（獨逸新教の短い聖歌）は『汝、聖き熱情よ、快き慰めよ。我等を助けて樂しく、心安く、絕えず汝に仕へしめ、辛苦の我等を斥けざるやうになしたまへ。あゝ主よ汝の力によつて我等に覺悟あらしめ、肉身の弱きを强め、此の世にあつて雄々しく闘ひ、死生を通じて汝に近づき得るやうになしたまへ』の意である。

Motette für Doppelchor, B-Dur:
„Der Geist hilft unsrer Schwachheit auf."

Text: Der Geist hilft unsrer Schwachheit auf, denn wir wissen nicht, was wir beten sollen, wie sich's gebühret, —sondern der Geist selbst vertritt uns auf's beste, mit unaussprechlichem Seufzen.
Der aber die Herzen forschet, der weiss, was des Geistes Sinn sei, denn er vertritt die Heiligen, nachdem es Gott gefället.
Choralverse: Du heilige Brunst, süsser Trost,
nun hilf uns fröhlich und getrost
in deinem Dienst beständig bleiben,
die Trübsal uns nicht abtreiben.

O Herr, durch dein' Kraft uns bereit'
und stärk' des Fleisches Blödigkeit,
dass wir hier ritterlich ringen,
durch Tod und Leben zu dir dringen.
Halleluja, Halleluja!

四管絃樂

モツァールトの主題を基とせる變奏曲及逃走曲

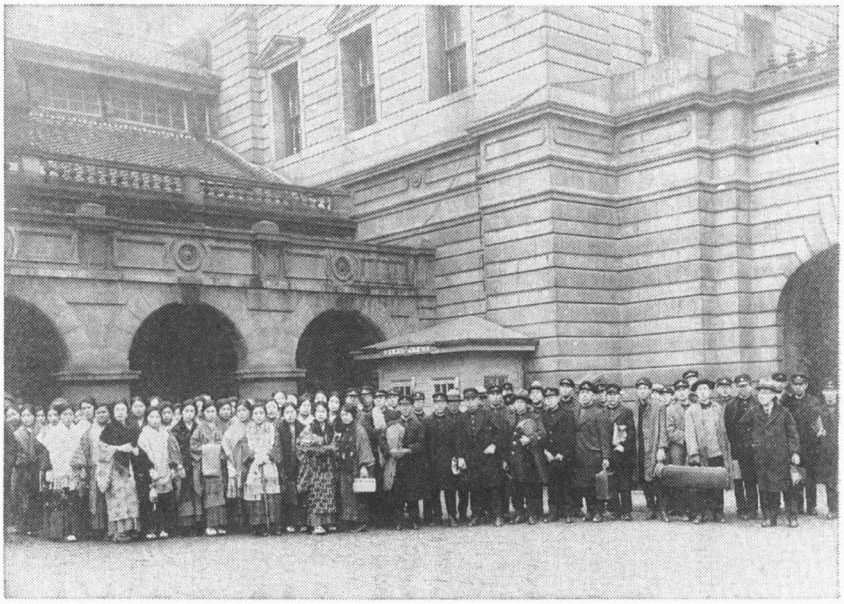
レーゲル作曲

十年程前に世を去つたレーゲル（Reger 1873—1916）はその存命中に或はブラームスの王冠の繼承者、或はシトラウスと桂冠を爭ふ人など、種々な讃辭を受けた人で、最近獨逸の生んだ最も天才的な作曲家の一人である。演奏者としても彼は驚くほど細かな詩的なピアノの奏法によつて樂界の嘆賞を博した。彼は理論家リーマンに學んだ人であるが、獨創力に富む彼の作品は曲の構成や和聲の用法に於て極めて自由な近代的特徴を發揮してゐる。彼の最も成功した曲は古典的作家の原作に基礎を置いた作品で、本演奏の曲の如きも其の一である。この曲は善く知られたモツァールトのイ長調ソナタ第一章の優美な主想に基いた變奏曲（八つ）及び逃走曲である。

大正十五年十月三十日　学友会第四十五回土曜演奏会

第四拾五回土曜演奏會
十月三十日　午后二時開演

1. 混聲合唱　會員
挽歌……メンデルゾーン
2. ピアノ獨奏　山本美代子
即興曲（作品百四十二、三）……シューベルト
3. セロ獨奏　小澤弘
ソナタ（ト短調）……エックルス
4. ソプラノ獨唱　佐々木タミ
少女ノ歌／子守唄／少女ハ語リヌ……ブラームス
5. ピアノ獨奏　見田公子
ロンド（作品一）……ショパン
6. ヴァイオリン獨奏　橋本國彦
コール ニドライ……ブルッフ
7. ピアノ獨奏



大正15年11月11日，大阪演奏旅行。大阪駅前にて

コンチェルト　一番　ハ長調……ベートーベン
第一樂章……松尾愛子
第二、三樂章……今村米子

8. アルト獨唱　澤智子
ローマンス（歌劇ミニヨンより）……トーマ

9. ヴァイオリン、ピアノ合奏　西川滿枝
ソナタ　四番　ニ長調……ヘンデル

10. ソプラノ獨唱　佐藤美子
秋薔薇ノ嘆キ
彼ハ來レリ　……フランツ

11. 混聲合唱　會員
子守唄……クルツシュマン
忠實なるジョニイ……ベートーベン

〔手書き〕

大正十五年十一月十日～十五日　演奏旅行

十一月中旬本校は左の日程により關西方面への演奏旅行を企て大成功を收めて歸校することが出來ました。

東京發　一一月一〇日夜
大阪　同　一一日朝着
晝夜二回演奏、中ノ島中央公會堂
宿泊　翌一二日朝發
姫路　同　午後着
二回演奏　晝　姫路高等學校講堂
夜　姫路劇場
宿泊　男子　舞子　翌一三日朝發
女子　明石
京都　同　一三日午後着
二回演奏　晝　京都市公會堂
夜　基督教青年館

宿泊
翌一四日午後發
名古屋　同　夕刻着
演奏　末廣座
同夜　發

右の中大阪及京都の演奏會は學友會が主催となり姫路は高等學校、名古屋は教育會が主催者となりました。
名古屋よりの歸途一部の者は東京に直行し一部は箱根へまはり一日の清遊を擅にして翌十五日歸京しました。

尙此の行、附添の木内先生、岡野先生の周到な御注意により多忙を極めたにも拘はらず愉快に終へることが出來ましたことを感謝いたします。

參加人員　男子　三七名　女子　五九名

演奏曲目

一、混聲合唱　東京音樂學校生徒
悲歌（作品一一六）　メンデルソーン
二、ピアノ獨奏　福井直俊
波蘭舞踏曲（嬰ヘ短）　シヨパン
三、セロ獨奏　伊達三郎
い、ローマンス　マテイス
ろ、メヌエツト　ヴアレンシン
は、スケルツオ　ゲーンス
四、ソプラノ獨唱　渡邊宣子
い、父と子　〔濱田廣介歌　船橋榮吉曲〕
ろ、幻滅　〔北原白秋歌　信時潔曲〕
は、かへりみ
五、絃樂　東京音樂學校職員及生徒
大競奏曲ト短調第一七番　ヘンデル
六、混聲合唱（無伴奏）　東京音樂學校生徒
い、あゝいつちゆく　〔乙骨三郎歌　ベートーヴエン曲〕
ろ、大塔宮　〔黒川眞賴歌　ジルヘル曲〕
は、菊の盃　〔武島又次郎歌　ベートーヴエン曲〕
七、ピアノ獨奏　山田菊江
舞踏への招待（作品六五）　ウエーバー
八、ソプラノ獨唱　渡邊宣子
魔王（作品一）　シユーベルト
九、ヴアイオリン獨奏　末吉雄二
い、前奏曲及急速調　〔クライスラー編　プニアーニ曲〕
ろ、スケルツオとタランテラ（作品一六）　ヴイニアウスキー
一〇、混聲合唱　東京音樂學校生徒
歌劇「ローエングリン」中の婚姻の歌　ヴアグネル
指揮者　大塚淳氏
伴奏者　萩原榮一氏

（『音樂』學友會、第七号、昭和二年三月、二一二～二一三頁）

大正十五年十一月二十二日　全国音楽教育研究大会参列員招待音楽会

大正十五年十一月二十二日（月曜日）午後三時開會

全國音樂教育研究大會　参列員招待音樂會演奏曲目

東京音樂學校

一、ピアノ獨奏 ……教師　コハンスキ
　い、練習曲（作品二五・第七番）……ショパン作曲
　Etude (Op. 25, No. 7) ……Chopin.
　ろ、歌劇「アルセスト」中のガヴォット……グルック作曲／ブラームス編
　Gavotte aus „Alceste“……Gluck-Brahms.
　は、史詩曲（作品一一九）……ブラームス作曲
　Rhapsodie (Op. 119)……Brahms.
二、ソプラノ獨唱 ……教師　ネットケ・レーヴェ
　い、夜の歌 ……シューベルト作曲
　Ständchen ……Schubert.
　ろ、ミルテと薔薇とを以て（作品二四・第九番）…シューマン作曲
　Mit Myrten und Rosen (Op. 24, No. 9)…Schumann.
　は、五月の夜（作品四三・第二番）／吾が愛は綠なり に、……ブラームス作曲
　Die Mainacht (Op. 43, No. 2)／Meine Liebe ist grün }……Brahms.
三、ヴァイオリン二重奏……教授　安藤幸／講師　多久寅
　二重競奏曲（二短調）……バッハ作曲
　Konzert für zwei Violinen (D moll)……Bach.
四、混聲合唱 ……東京音樂學校生徒
　い、あゝいづちゆく……ベートーヴェン作曲／乙骨三郎作歌
　ろ、大塔宮……ジルヘル作曲／黒川眞頼作歌
　は、菊の盃……ベートーヴェン作曲／武島又次郎作歌
　伴奏者　教師　コハンスキ
　指揮者　助教授　大塚淳

大正十五年十二月十一日、十二日　第五十一回定期演奏会

第五十一回音樂演奏會（大正十五年十二月十一、十二日）

一、管絃樂
　歌劇「魔笛」の序曲……モツァルト作曲
　Ouvertüre zur Oper „Die Zauberflöte“……W. A. Mozart (1756—1791.)
二、絃樂
　小夜樂（ト長調）……モツァルト作曲
　Serenade (Eine kleine Nachtmusik) in G dur ……W. A. Mozart.
　Allegro
　Andante (Romanze)
　Allegretto (Minuetto)
　Allegro (Rondo)
　——休憩十分間——
三、合唱及管絃樂

鎭魂歌（ニ短調）……モツァルト作曲

四重唱（ソプラノ 長坂好子／アルト 齋藤英子／テノール 阿澤定之／バス 部崎英雄）

Requiem für Chor und Orchester in D moll..... W. A. Mozart.

1. Chor. Requiem.
2. 〃 Dies irae.
3. Solo-Quartett. Tuba mirum.
4. Chor. Rex tremendae.
5. Solo-Quartett. Recordare.
6. Chor. Confutatis.
7. Chor. Lacrymosa.
8. 〃 Domine Jesu.
9. 〃 Hostias.
10. 〃 Sanctus.
11. Solo-Quartett und Chor. Benedictus.
12. Chor. Agnus Dei.

指揮者　シャールス・ラウトルップ

Dirigent: Charles Lautrup.

（『東京音樂學校一覽』自昭和二年至昭和三年、七一～七二頁）

演奏曲目解說及歌詞

一　管絃樂

歌劇『魔笛』の序曲　モツァルト作曲

『魔笛』はモツァルトの最後の歌劇で、筋は頗る混雜したものであるが、作曲者はその各齣の感情に應じて美しい音樂を附けてゐる。筋はエジプトのイージス神の神官ザラストロが邪神『夜の女皇』の娘パミナを正教に歸依させようとして彼の殿堂に呼び寄せたので、母の女皇は一向取りもどさうと企てゐるうちに、或日エジプトの王子タミノが道に迷つて蛇に襲はれたのを助けて、これに娘を救ひ出すことを依頼する。タミノは快諾して女皇から危難を除ける魔笛を授かつて出發するが、却てパミナと共にザラストロの教徒に加へられ、長い間の苦行に堪えて後、終に目出度結婚するのである。本演奏の序曲は緩徐なる序節に始まり、先づ響く壯嚴な三箇の和音の後にファゴットと絃の短い樂想が續く。十數小節の後に現はれる本曲の主想は快活に休みなく突進するやうな性質のもので、これがフーガ式に凡ての樂器に移されて行く。この想をファゴットとクラリネットが各々三度に分れて奏し、その上にオーボエとフリュートがそれ〳〵對位を附けて行く部分は特に優美の趣に富んでゐる。此の箇處を終る後、曲は最初の緩徐節の和音に返るが、フーガの主想は直ちにまた現はれて、前半と異つた變化を示しつゝ諸音部に移る。最後に曲は益々快活の趣を加へて凱歌のやうな歡聲に終る。

二　絃　樂

小夜樂（ト長調）　モツァルト作曲

セレナードは本來夕ぐれに（殊に愛する人の窓下に）奏する聲樂又は器樂の曲であるが、本演奏の器樂のセレナードは原義と關係のない一種の合奏曲の形式で、概してシンフォニなどのやうに込み入つた作法を用ひずに比較的輕く作られた高尙な娛樂曲である。原は戶外に適するやうに管樂を用ひたもので、ハイドン、モツァルト等の作にも若干の管を加へたものが多いが、此のト長調の曲のやうに絃樂のみに作られたものもある。本曲（一七八七年作）はモツァルトの晩年圓熟期の技術を示すもので、あらゆる華美とあらゆる優美とを含んでゐる。全部四章に分れ、（一）ト長調四分四拍子の快速曲（アレグロ）、（二）ハ長調二分二拍子の緩歩曲（アンダンテ）（ロマンツェ）、（三）ト長調四分三拍子の稍速曲（メヌエット舞曲）、（四）ト長調二分二拍子の快速曲（ロンド）になつてゐる。

三　合唱及管絃樂

鎭魂歌（ニ短調）　モツァルト作曲

レクィエムは天主教の教會で毎年十一月二日に行ふ死せる信者の靈魂を記念する儀式（又時には或る箇人の葬式法事等の際）に歌はれる曲で、文句は數部からなる長いものであるが、要するに死者の爲に安息を祈る意味

のものである。モツァルトの此の曲は一七九一年歌劇『魔笛』を完了した後に着手せられたもので、其の創作の事情は大略次の如くである。

同年七月の或日、作者の家に灰色の服装をした痩せぎすの恐しい顔の男が音づれて、匿名の或人の爲にレクィエムを作つてくれまいかと依頼した。當時貧に苦んでゐたモツァルトは暫く考へた後此の仕事を承諾して直ちに着手する積りであつたが其後急に歌劇『ティート』を依頼された事と、既に作りかけてゐた『魔笛』の仕上げを急いだ事との爲に、實際レクィエムに着手したのは十月に入つてから後であつた。然るに此頃からモツァルトの健康は心身の過勞其他の爲に著しく衰へて、それと同時にかの不可解な使者の事や依頼せられた曲の性質などが妙に彼の神經を刺戟し始めた。彼は最早一刻も猶豫が出來ないやうに感じて日夜レクィエムの完成に努め、その爲に益々健康を害し憂欝の度を加へたのである。彼は或日妻のコンスタンツェに向て『此のレクィエムは自分の爲に書いてゐるのだ。自分の感じでは、もう長くは續かないと思ふ。きつと誰かが毒を呑ませたに相違ない。どうもさう思へてならない』などゝ語つたこともあつた。彼の病は十一月の中頃小康を得たが間もなく舊に復した。死ぬ前日の午後に彼は寢床に譜を取りよせて自らアルトを歌ひ、友人等に他の諸聲を歌はせて試奏をしたが、『涙の日』（ラクリモーサ）の初節に達した時いたく流涕して譜を置いてしまつた。近親の遺した記錄によれば其夜彼は頻りに死期の迫つたことを語り、折柄枕頭に侍した弟子のジュースマイエル（Süssmeyer）に向てレクィエムの事を語り、指圖を與へたといふ。

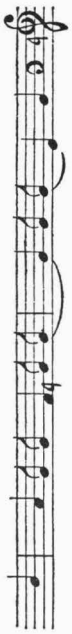
モツァルトの死後未亡人はかの匿名の依頼者から作曲料の返却を請はれるのを恐れて取扱へず此曲の完成をジュースマイエルに托し、かくして出來たものを其後音づれた例の使者に渡して責を塞いだ。此の怪しい使者は其後數年を經てからヴァルゼック伯といふ一貴族の家令であつたことが分つた。此の貴族はこれ迄密かに大家の作曲を買ひ取つてはそれを自作と稱して自邸の演奏會に發表してゐたのであるが、モツァルトの曲は其後未亡人の殘して置いた寫譜に基いて處々に演奏せられるやうになつたので、凡ての秘密が暴露したのである。

モツァルトの瞑目した時完全に書き上げてあつた部分は一番の入進誦（イントロイツス）と『主憐めよ（キリエ）』のみで、二番から九番までは單に聲音部と數字付低音が記され、樂器に就ては前奏、間奏及び其他特殊の箇處にモティーフを擧げたのみであつた。殊に七番の『涙の日（ラクリモーサ）』は最初の八小節までゞ作曲を止めてあつた。十番以下の三曲即ち『聖なる哉（サンクツス）』『祝せられたまへ（ベネディクツス）』及び『神の小羊（アグヌスデイ）』は全く缺けてゐたのである。然しモツァルトは生前ジュースマイエルに屢々此の曲に就て語つた事實があり、又後者は其頃モツァルトの寵愛の弟子として、師の流儀を善く知つてゐた人であるから、彼は二番以下の細部を大體モツァルトの考どほりに仕上げ得たものと思はれてゐる。唯最後の三曲はジュースマイエルの宣言（一八〇〇年）によれば全部彼自身の創作したものであるといふ。然し此の宣言に就ては既に其の當時から反對論があつて、それ以來種々の議論がなされたのである。そして多くの論者はこれ等の曲に含まれた美點をもモツァルトの教示に基いたものであらうと推測してゐる。

モツァルトのレクィエムは創作の當時に於て全く嶄新（ママ）の作であつたが、然しまた最善の意味に於て教會式を保存したものであつた。彼は此處に古い聖歌や先人の樂想を採用し、好んで嚴重な對位法的形式を用ひ、又表現の簡素を旨として純音樂的の遊戲を避けたのである。此れ等の教會的特性は殊に最初の入進誦に於て表はれてゐる。

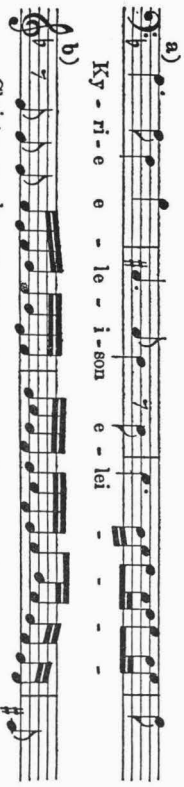
（一番）——は死者の靈に安息を祈る入進誦（イントロイツス）と之に次ぐ『主憐めよ（キリエ）』を含んでゐる。入進誦は先ずニ短調の悲しい主想

を提示する管絃の序節の後に『永久の安息を彼等に賜へ』の合唱を以て始り、やがて明るいヘ長調に轉じて『不斷の光明…』の一句に進む。之に續く獨唱ソプラノの詞は詩篇第六十五から採つたものでモツァルトは之を古い聖歌調によつて表はしてゐる。



合唱のソプラノが此の旋律を承けて『我等の祈を聽容れたまへ』を歌ひ了るや、曲は最初の主想に歸つて再び『永久の安息…』を祈る。然し此度は前に聖歌調の伴奏として現はれた十六分音符の音形が主想の對位聲として聲音部に用ひられてゐる。

『主憐めよ』は父なる神と基督とに憐憫を求める意味の曲で、次の二つの主想に基て二重フーガに作られてゐる。



レクィエムに於ては普通のミサの『榮光の讃歌』及び『使徒信經』の代りに古くから『怒の日』といふ續唱が編入せられてゐる。この詩は十三世紀の僧ケラノのトーマスの作で、かの最終裁判の恐ろしい光景を叙して、基督の救助を哀願する意味のものである。モツァルトはこの續唱を六つの曲（二番から七番迄）に分けて其の二つを獨唱四部に作つてゐる。

（二番）――『怒の日』の詞は世界の終局と判官の出現を叙するものである。絶えず激動する伴奏の上に恐怖に捕はれたやうな短い鋭い樂句が急激な轉調を以て表はされて行く。歌詞が三度目に反復せられる時低音に先づ現はれる震音的樂句は裁判の日の恐怖を殊に生々と寫してゐる。

（三番）――『奇しき喇叭は』は獨唱四部に作られてゐる。順次に現はれる各聲の獨唱は詞に應じて表出を異にし、バスは崇高の感、テノルは驚愕畏怖の念、アルトは更に烈しい興奮を表し、最後にソプラノは主に對する素朴な信頼を示してゐる。以下は四部が合してソプラノの最後の語を反復して終る。

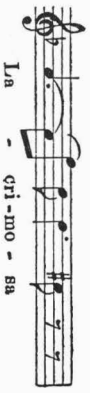
（四番）――『恐ろしき威嚴ある王』は全篇中最も簡潔な曲の一であるが、しかも甚だ含蓄に富んでゐる。主の威嚴を描く管絃の序節の後に合唱は先づ恐怖に襲はれたやうに『王よ』の語を三度叫ぶ。やがて四つの聲は分離してアルトとソプラノは畏敬に充ちた樂句によつて最初の詞をカノン式に反復し、二つの男聲は他の樂句を用ひて『報を求めざるを慈悲云々』を同じくカノン式に歌つて行く。此の二重カノンは暫くの後男聲と女聲との樂句を交換して再び行はれる。最後の『救ひたまへ』は極めて短くて然も感動力に富んでゐる。

（五番）――『記憶したまへ』。獨唱四部に作られてゐるこの曲はロンド形式を具へた長いもので、主題は次のやうな敬虔の情に充ちた美調である。

歌詞を更へて三度歌はれる此の主想の間に挿まれてゐる副想は何れも激動した性質のもので、殊に『我は認む』の一節は鋭いスフォルツァートや音位の急激な變化によつて強く訴へる。

（六番）――『狼狽して』の前半は咒を受けた者の苦悶を表す男聲と特赦を哀願する女聲とが前後して絶好の對照をなし、後半は四聲が合して全篇中稀に見る和聲の美を示す。

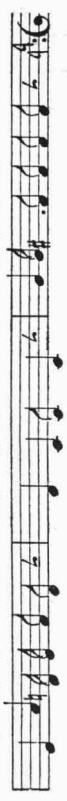
（七番）――『涙の日』は咽び泣くやうな次の樂句に始り、漸次に力を加へて、『罪ある人』の語に至て強さの絶頂に達する



が後半は美しい哀願の調に移る。

（八番）――『主、耶蘇基督よ』の最初の部分は種々の恐ろしい光景が劇的に短かく表はされてゐる。第二の部分（『神の御旗を捧げ持つ聖ミカエ

ル』云々）は獨唱四部で表はされ、樂趣に於て前の部分と對照をなしてゐる。最後の『昔アブラハムと其の後裔云々』は次の主想に基くフーガである。



（九番）――『供物（ホスティアス）を』は供物を捧げる儀式に伴ふ歌で、伴奏の管絃のリズムはこの嚴肅な儀式の進行を暗示し、合唱は畏敬の感を表してゐる。最後は前のフーガが今一度反復せられる。

（十番）――『聖（サンクッス）なる哉』はニ長調の壯麗な曲で、フーガに作られた『オザナ』を以て結ぶ。

（十一番）――『祝（ベネディクッス）せられさせ給へ』は變ロ長調に書かれた優しく美しい獨唱四部の曲で、モツァルト式の樂想に充ちてゐる。終は再びオザナのフーガ（合唱）で結ぶ。

（十二番）――『神の小羊（アグヌスデイ）』は前の曲よりも一層モツァルトの精神を表はした秀什で、最初の部分は『世界の罪を負ふ神の小羊よ、彼等に安息を與へたまへ』の語を三度反復する。此の語の前半は心の底から湧き出るやうな哀願の調であり、『與（ドナ）へたまへ』から以下は眞に安息の感に充ちた曲である。ソプラノ獨唱で始まる次の部分即ち『永久（ルックス）の光明』以下は入進誦の『汝（テ、ダケント、ヒムヌス）に讃美を捧ぐるは』以下の一節と『主（キリエ）、憐めよ』のフーガとを異つた詞に當嵌めたもので、此の部分が悉くモツァルトの筆であることは言ふまでもない。又レクィエム全體の結びとして此處に最初の樂想を置くといふことも、妻コンスタンツェの言によればモツァルト生前の指圖に基くものだといふ。

古來幾多の作曲家が遺したレクィエムの中でモツァルトの此の曲は最も卓越したもので、恰も器樂に於けるベートーヴェンのシンフォニーに相當する位置を占めてゐる。創作の年以來間もなく墺獨に普及し、更に其の國境を越えて他の諸市にも演奏せられた。そして多くの名士の靈魂記念式をも飾つたのである。

鎭魂歌譯

一番　永久の安息を彼等に與へたまへ、主よ。願くは不斷の光明の彼等を照さんことを。神よ、シオンに於て汝に讃美を捧ぐるは宜しきに適へり。又エルサレムに於て汝に誓願を奉らん。願はくは我が祈を聽容れたまへ。凡ての造物は汝に歸らん。

主憐みたまへ。基督憐みたまへ。主憐みたまへ。

二番　怒の日その日にダヴィデとシビラの言へる如くにこの世は灰となるべし。嚴かに一切を糺さんとて判官の現はれん時、人の恐れは如何ならん。

三番　あやしき喇叭の音墓の中まで鳴り渡り凡ての死者を寶座の前に召し集めん。判官に答へんとて人々の復活せん時死者も萬物も恐れをのゝかん。此の世を裁く一切の事を載せたる記錄はやがて啓かれん。判官の其の座に着かん時隱れたる事は悉く露はれ、如何なる罪も報いを免れざるべし。其時不幸なる我は何とか言はん。正しき人さへ恐れ慄くべきに、我はそも誰に向て助けを求めんや。

四番　恐るべき威嚴を具ふる王よ。報いを求めずして選民を救ひたまへる王よ。我を救ひたまへ、やよ慈悲の源よ。

五番　やさしき耶蘇よ。汝が人の世に降りしは何の爲なりしかを想ひたまへ。願くはかの日に我を滅したまはざれ。主は身を勞らして我を索め、十字架にかゝりて我を贖ひたまへり。願くは斯かる勞苦の空しく終らざらんことを。義を以て罪を罰すべき判官よ、裁判の日に先立ちて我に赦免を與へたまへ。我は己の罪を識る。我が過は我をして赤面せしむ。神よ、憐みを求むるものに赦免を與へたまへ。主は（マグダラの）マリアを赦し、又盜人の祈願を聽容れ、我に希望を許したまへり。我が祈願は容れらるゝに堪えざるべけれど、汝、やさしき主よ、慈悲を垂れたまひて、我が永久の火に燒かれざるやうになしたまへ。汝の羊の中に我を置き、山羊の中より我を引き離して、汝の右側に在らしめたまへ。

六番　咒を受けたる者は狼狽して地獄の火に投ぜられん時、我を選民の中に呼びたまへ。我は主の前にひれ伏して願ひ奉る。我が心は悔恨の爲に

灰の如くなれり。願くは我が最後の時に御心をかけたまく。

七番　涙のその日よ、罪人は裁かれんとて塵の中より出るなり。嗚呼神よ彼等を助けたまく。やさしき耶蘇よ、主よ、彼等に永久の安息を與くたまく。しかあらしめ給く。

八番　主なる耶蘇基督よ、榮光の王よ。死せる凡ての信者の靈魂を地獄の刑罰と深き淵より救ひたまく。獅子の口より脱がしたまく。願くは彼等の奈落に沒することなく、闇黑に陷ることなく、神の御旗を捧げ持つ聖ミカエルの彼等を導きて、主が昔アブラハムと其の後裔に約したまひし聖き光明の中に伴はんことを。

九番　主よ我等は讃美しつゝ汝に供物と祈願とを献ぐ。願くは我等の今日記念する靈魂の爲にこれ等の物を納めたまく。主よ汝が昔アブラハムと其の後裔とに約したまひし如くに、彼等を死より生に移らしめたまく。

十番　聖なる哉、聖なる哉、聖なる哉、萬軍の神なる主、天地は汝の榮光に滿ちたり。いと高き處にホザナよ。

十一番　主の名によりて來れる者は祝せられさせたまく。いと高き處にホザナよ。

十二番　世界の罪を負ひたまひし神の小羊よ。彼等に永久の安息を與くたまく。主よ、汝はやさしくましませば、願くは永久の光明の長くに汝の聖衆と共に彼等を照さんことを。

Requiem

No. 1. Requiem aeternam dona eis, Domine: et lux perpetua luceat eis. Te decet hymnus, Deus, in Sion, et tibi reddetur votum in Jerusalem: exaudi orationem meam; ad te omnis caro veniet. Requiem aeternam dona eis, Domine: et lux perpetua luceat eis. Kyrie eleison. Christe eleison. Kyrie eleison.

No. 2. Dies irae, dies illa, solvet saeclum in favilla: teste David cum Sybilla. Quantus tremor est futurus, quando judex est venturus, cuncta stricte discussurus.

No. 3. Tuba mirum spargens sonum per sepulcra regionum, coget omnes ante thronum. Mors stupebit, et natura, cum resurget creatura, judicanti responsura. Liber scriptus proferetur, in quo totum continetur, unde mundus judicetur. Judex ergo cum sedebit, quidquid latet, apparebit: nil inultum remanebit. Quid sum, miser, tunc dicturus? quem patronum rogaturus, cum vix justus sit securus?

No. 4. Rex tremendae maje tatis, qui salvandos salvas gratis, salve me, fons pietatis.

No. 5. Recordare, Jesu pie, quod sum causa tuae viae, ne me perdas illa die. Quaerens me, sedisti lassus; redemisti crucem passus; tantus labor non sit cassus. Juste judex ultionis, donum fac remissionis ante diem rationis. Ingemisco, tamquam reus: culpa rubet vultus meus: supplicanti parce, Deus, qui Mariam absolvisti, et latronem exaudisti, mihi quoque spem dedisti. Preces meae non sunt dignae: sed tu bonus fac benigne, ne perenni cremer igne. Inter oves locum praesta, et ab hoedis me sequestra, statuens in parte dextra.

No. 6. Confutatis maledictus, flammis acribus addictis, voca me cum benedictis. Oro supplex et acclinis, cor contritum quasi cinis: Gere curam mei finis.

No. 7. Lacrymosa dies illa, qua resurget ex favilla judicandus homo reus. Huic ergo parce, Deus: pie Jesu, Domine, dona eis requiem. Amen.

No. 8. Domine Jesu Christe, rex gloriae, libera animas omnium fidelium defunctorum de poenis inferni, et de profundo lacu: libera eas de ore leonis, ne absorbeat eas tartarus, ne cadant in obscurum: sed signifer sanctus Michael repraesentet eas in lucem sanctam: quam olim Abrahae promisisti et semini ejus.

No. 9. Hostias, et preces tibi, Domine, laudis offerimus: tu suscipe pro animabus illis, quarum hodie memoriam facimus: fac eas, Domine, de morte transire ad vitam, quam olim Abrahae promisisti et semini ejus.

No. 10. Sanctus, sanctus, sanctus Dominus Deus Sabath. Pleni sunt coeli et terra gloria tua. Osanna in excelsis.

No. 11. Benedictus qui venit in nomine Domini. Osanna in excelsis.

No. 12. Agnus Dei, qui tollis peccata mundi, dona eis requiem (sempiternam). Lux aeterna luceat eis, Domine: cum sanctis tuis in aeternum: quia pius es.

大正十五年　演奏旅行

旅行部だより

私共のものである春の學校演奏旅行が出來なくなつたため、大變皆樣から御小言を戴きました。實は本年も例年の通りにと思つて、少し遲蒔きではありましたが、本春は仙臺、水戸の一線、又前橋、桐生、宇都宮の一線と、若この線が纏まつたら甲府、長野の一線をも含ませてと、都合三つの方面に交涉を開始しました。（交涉は學校が直接行ふ場合が多いのですが、學友會に旅行部のあるため、その交涉を助けることもある狀態になつて居ります）。

その內、他はあまり問題にはなりませんでしたが、前橋のみは、先輩が非常に熱心に運動され、先方から正式の交涉がありさへすれば、決定する段取りになつて居たのが、主催團體が學校の意志に添はないといふ理由で、決勝線に達することが出來ないでしまひました。

先輩林氏が數回來られて、態々交涉されたのですが、そのため折角當にして居た樂しみが、その鼻先をへし折られて終つたやうな譯になつてしまひました。

そのお詫び旁々、學校の演奏旅行に對しての主催團體と、經費について、少しばかり書かして戴きたいと思ひます。

春の演奏旅行ならば、試驗休み、秋ならば夏休みとかに生徒の方の中には、故郷に歸つた時、熱心に各方面に運動して來られて、その團體から學校に交涉していたゞくやうにまでして來て下さる人もあります。今迄それで纏まつた例も數あつたやうであります。

然し學校では、その年は大體どの地方に行かうと云ふ意志を以つて、その地方の學校（大學專門學校、師範學校、中等學校等）縣廳、支廳、教育會及其の他の公共團體などに主催する意志の有無の問合せを始めます。

只營利團體（例へば新聞社、樂器店、其他の小團體）に対しては後援は默許されますが、主催は絕對に許されて居りません。

最初の照會に對して、曙光をみとめ得た時は、次で經費に關した交涉が開始されます。學校では只今では實費（旅費、辨當、獨奏者謝禮、雜費）を請求しますが、それよりも先方が大體如何程出し得るかが交涉を進めて行く上の大切な點になります。實費が出る場合は異議はないのですが、實費に達し得なくとも、其年其場所など種々な事情によつては、成立することがあります。私共の考へとしては經費をその土地と學校とが半々に受持つて行けるやうになることを望まずに居られません。然し何事も儘にならぬ學友會の悲しさ、當分は望んで得られないやうな狀態にあるのです。

ですから、希望やら不安やらをごつたにして、交涉を重ねて行く內に、此の經費の問題と主催團體の問題とがうまく折合がつかなかつたり、學校の小限度の豫想額をも出資出來ないといふ交涉のために齒がゆくなる位交涉して、遂々齒がゆくなつてしまふ場合もあります。

此の春の前橋市の如きも、折角經費の豫想がついて居ながら、學校長或は教育會長が幾分の不安のために主催を承諾されなかつたのに原因して居ります。先方と當方の交涉に當つた人達は、どちらも涙を呑んで一先づ時期を待たうといふことで、立別れとならねばなりませんでした。

何分、數十人を含んだ大きな團體が動くのでありますから、中々容易な事ではないのですが、今後も增々各方面に涉つて演奏旅行があると思ひますから、學校側に對しては、出來るだけ學友會の財政を豐かにして戴くことを望み、私共は今後互にその鄉里や赴任地に音樂學校演奏團を招くことが出來るやうに力を致さうではありませんか。

もつと書きたいこともありますが、紙面の都合もありますので、お詫び旁々、一寸演奏旅行の衝に當つた私としての愚知をのべさして戴きました。

一〇・八（歲　坊　記）

（『音樂』學友會、第六号、大正十五年十二月、一五三～一五五頁）